

文 學 博 士  
金 澤 庄 三 郎  
編 纂

廣  
辭  
林

新

三 省 堂 發 兌



文學博士  
金澤庄三郎編纂

# 廣 辭 林

新  
訂  
版

株式會社  
三省堂發兌

大正十四年九月二十一日 發行  
 大正十四年九月二十五日 發行  
 昭和二年三月十九日 發行  
 昭和三年三月十五日 發行  
 昭和四年九月一日 發行  
 昭和五年三月二十五日 發行  
 昭和六年九月一日 發行

昭和七年五月二十日 百版發行  
 昭和八年八月一日 百五十版發行  
 昭和九年三月一日 新訂廣六十版印刷  
 昭和九年三月五日 新訂廣六十版發行  
 昭和九年三月二十日 新訂二百版發行  
 昭和九年四月二十五日 新訂三百版發行  
 昭和九年四月二十日 新訂三百版發行



發行所

〔東京市神田區神保町一丁目一番地〕  
 振替口座東京三一五五五番  
 〔大阪市西區阿波座下通二丁目六番地〕  
 振替口座大阪八一三〇〇番

株式會社 三省堂  
 株式會社 三省堂大阪支店

印刷所

發行者

編纂者

東京市神田區神保町一丁目一番地  
 株式會社 三省堂蒲田工場  
 代表者 龜井寅雄

金澤庄三

廣辭林(新訂版)  
 定價四圓八十錢  
 特價三圓九十錢



あつめおく辭の林ちりもせでちとせかはらじ和歌のうら松

(續千載和歌集)

廣辭林出でてより已に十年、辭林のそもその始より數ふれば實に二十有八年、其間本書は終始多大なる好意を以て迎へられ、今や全國到る處に其普及を見ざるはなく、滿洲國・中華民國の如き東亞同文の諸國は勿論、遠く歐米の學界にも愛用せられ、「ソビエツト、ロシア」に於て本書を底本として日本語辭書編纂の舉ありと聞くに至つては、本著の世界的進出を喜ぶと同時に、其責任の重大化を痛感せざるを得ざるなり。されば著者は片時もたゆむところなく、日夜修訂のことにいそしみ、今次恙なく其業を了して、この新訂版を發行することを得たるは、いつもながらの好運を祝福して止まざるところなり。

本書は名は新訂版なれども、其實全篇盡く檢覈を新たにしたるものにして、收むるところの語數無慮十萬を超ゆるに至り、語釋の修整、新語の増補、語原の添加いづれも面目を一新せるものあり、一字一句これを苟もせず、最終の校合に至るまで自から手を下したる點に於て、聊か意を安んずべきものあるを信ず。

さりながら遺漏誤脱は此種の著作に於て免れ得ざるところなれば、著者は向後一意精進本書の大成に向つて努力すべきは勿論なれど、大方の諸賢も亦從來本書に寄せられたる同情と渝ることなく、鞭撻激勵著者をして其志を遂げしめられんこと、これ著者衷心よりの願なり。

昭和九年三月

東京本郷曙町にて

金澤庄三郎識

## 凡 例

一、語詞の排列は五十音順に従ひ、促音は「ツ」の部に、撥音「ン」は最後即ち「ワ」行の後に置きたり。  
一、純粹の國語は歴史的假字遣に據れること勿論なれども、尙ほ其直下に細注を施して寫音的假字をも挿入せり。

一、英・佛・獨・露・伊・西・蘭並びに羅・匈・希・臘等の古代及び近世歐洲語は總て寫音的假字遣を用ひ、且つこれを表はすに片假字を以てせり。

一、本書の語彙中に出でたる漢字音は古今を通じて總て寫音的假字遣に據れり、これ本書の一大特色にして、其理由とするところは、現代の社會に於て字音假字遣の實用は極めて稀なるのみならず、若しこれに従ふときは語辭の檢出甚しく不便にして、辭書の天職は半ばこれを没却すべき弊あればなり、されどなほこの古假字遣をも一々其下に「符」を冠してこれを注記し、一舉兩得の便法を採り、語釋中に出でたる漢字も亦總て正確なる字音假字遣に據れり。

一、國語中假字遣の誤り易きものは、特に其寫音假字を掲げてこれを語辭の列中に加へた

れば、本書には、發音索引の一綱を除き、難訓、字音の兩索引を添附せり。

一、難訓索引は漢字の全畫と部首とを以てこれを索む、柀の九畫木部に從ひ、隼の十畫隹部に從ふが如し。熟語はその頭字に就きてこれを索むべし。字音索引は漢字の全畫を以てこれを索む、丁の二畫に從ひ、金の八畫に從ふが如し。

一、本書中に使用せる寫音的假字遣は、大體に於て文部省假字遣改正案に從ふ。字音の「ジ」「ヂ」は悉く「ジ」「ズ」「ヅ」は悉く「ズ」「シャウ」「セウ」「セフ」「ショウ」は悉く「ショウ」としたる類にして、國語に於ては、「ハ」行、「ワ」行、「ア」行音の相混同したるものなど、總て其發音に準じてこれを表はせり。

一、語原に關する事項は、著者自から所見ありて、古來の所說概ね探るところなし、本書に載するものは其量に於て微々たりといへども、著者年來比較研究の結果に出づるもの多し、庶幾は學界に若干の生氣を加ふるを得んか。

一、本書の編纂に關しては、足助直次郎氏終始予を助け、拮据精勵三十年一日の如く、克く其業を完からしめたり、茲に特記して謝意を表す。



春の花のあした、秋の月のゆふべ、おもひをのべ、心を  
うごかさずといふことなし、ある時には絲竹のしら  
べをととのへ、ある時には大和もろこしの歌ことば  
をあらそふ、敷島のみちのさかりにおこりて、心の泉  
古よりも深く、辭の林昔よりもしげし

(千載和歌集序)

表 語 略

(名).....名詞  
 (代).....代名詞  
 (數).....數詞  
 (自).....自動詞  
 (他).....他動詞  
 (形).....形容詞  
 (助動).....助動詞  
 (副).....副詞  
 (助).....助詞  
 (接).....接續詞  
 (感).....感動詞  
 (接頭).....接頭語  
 (接尾).....接尾語

(枕).....枕詞  
 (四).....四段活用  
 (下二).....下二段活用  
 (上二).....上二段活用  
 (上一).....上一段活用  
 (下一).....下一段活用  
 (か變).....加行變格活用  
 (ら變).....良行變格活用  
 (さ變).....佐行變格活用  
 (な變).....奈行變格活用  
 (形一).....形容詞ク活用  
 (形二).....形容詞シク活用

【神】.....神祇  
 【哲】.....哲學  
 【佛】.....佛教  
 【宗】.....宗教  
 【心】.....心理學  
 【倫】.....倫理學  
 【論】.....論理學  
 【政】.....政治學  
 【教】.....教育學  
 【社】.....社會學  
 【法】.....法律學  
 【經】.....經濟學  
 【動】.....動物學  
 【植】.....植物學  
 【礦】.....礦物學  
 【理】.....物理學

【機】.....機械學  
 【天】.....天文學  
 【醫】.....醫學  
 【化】.....化學  
 【數】.....數學  
 【農】.....農學  
 【林】.....林業  
 【工】.....工業  
 【商】.....商業  
 【漁】.....漁業  
 【建】.....建築業  
 【藥】.....藥劑業  
 【船】.....船艦業  
 【生】.....生理及生物學  
 【地】.....地質及地文學



あ

あ 口を廣く開き舌を低くして發する母音、五十音圖にて、「あ」の第一に位し、「あ」列の「か」「き」「た」「な」「は」「ま」「や」「ら」の讀となら。

あ〔一〕名 あし「の昔せす」。

あ〔二〕名 あせくる。「をだに未だ乍らざりけり」。

あ〔三〕名 つぎ次位。「一聖」。「たぐひ。比類」「流」。

あ〔四〕名 アツアの略稱。歐「の天地」。

あ〔阿〕名 おし。おふし。

あ〔阿〕名 おを。おふ。曲調。おさし。岸帷。おむね。屋棟。おおもねると。へつらひ。「一附」。「アフリカ」の略稱。用「歌す」。

あ〔吾〕我「代」われ。あれ。「が見し子に」。

あ〔彼〕代 あれ。かれ。「はと雲井に見し月の」。

あ〔唯〕感 應答の聲。「女房」といふ。

あ〔唯〕感 感歎の情を表はす聲。ああ。

あ〔亞〕接頭「化」化合物に冠して、其成分の割合の少ないとを表はす語。「一確證」。「一確證」。

あ〔如彼〕副 あのやうに。

ああ〔嗚呼〕于嗟乎「於皇」感 感歎の情を表はす聲。

ああ〔啞〕感 「あくあく」と讀むときは、意義を異にす。

鳥の聲又小兒の聲。

ああしやこしや感 あざけり笑ふ意。

ああら感 あれ。

あい〔愛〕名 めづるとか。かゆがると。いつくしみ。あは

れみ。をむと。をしみ。このむと。すき。因縁ふと。こ

ひ。回宗。キリスト「教にて、神格の本質とせる純粹普通の

慈愛博愛。佛十二因縁の一、五欲を貪ると。一屋上

の鳥に及ぶ。句「説苑に出」人を愛するの情の、其人

の周囲の物にも及ぶにいふ。一を割く。句「をしく思ふ

心を抑へておもひきる」。

あい〔哀〕名 あはれむと。あはれみ。かなしむと。か

なしみ。哀。一を擧ぐ。句「哀の禮を行ふ」。

あい〔點〕名 「動」あゆみの稱。

あい〔間〕名 「あひ」を見よ。

あい〔藍〕名 「あむ」を見よ。

あい〔唯〕感 應答の聲。

あい〔相〕接頭「あひ」を見よ。「あはれなさま」。

あいあい〔哀哀〕名 副 かなしきさま。いとほしきさま。

あいあい〔諷諷〕名 副 去けるさま。多きさま。

あいあい〔欸乃〕名 ふうなうた。棹歌。

アイアン〔Iron〕名 鐵。鐵器。「ヘルフにて、全部鐵よ

りなる杖。ポールを打つて用ふ。——ロー〔Iron-law〕

名 鐵則。Iron-law of wagesの略。賃銀鐵則。

あいいく〔愛育〕名 大切に育てつと。

あいいん〔愛飲〕名 好みて飲用すると。

アイエフテーユー〔I. F. T. U.〕名 〔International

Federation of Trade Union of the World〕〔國際労働組合

聯盟〕第二インターナショナル。労働組合の國際的聯合體

にして、社會民主主義を標榜し、赤色労働組合「インターナ

ショナル」に對立す。一に黄色労働組合「インターナショナル

」は、アムステルダム「インターナショナル」と稱す。

あいえん〔愛縁〕名 佛「因縁」の縁である。

あいか〔哀歌〕名 悲しき心を詠じたる歌。

あいがん〔愛玩〕名 愛してもてあそぶと。

あいがん〔哀願〕名 なげきてねがふと。事情をうち

あてねがふと。哀訴。「たる子持の帖」。

あいきょう〔愛郷〕名 郷里を愛すると。——志ん

「愛郷心」名 郷里を愛する精神。

あいきょう〔愛敬〕名 かはゆらしきと。人すきのす

ると。愛禮。——あはた〔愛敬痘痕〕名 却て愛敬あ

る様に見ゆ痘痕。——あよらばい〔愛敬商賣〕名

愛敬を専一として客を呼ぶ商賣。きんぎょう。く

く〔愛敬附〕名 自、か四 愛敬ある様になる。——び

〔愛敬日〕名 商「おんけいび」。——べに〔愛敬紅

名 演劇)にて、却て愛敬ある様に見ゆる紅。——ほくら

もり〔愛敬守〕名 婚禮の際、花嫁の首にかくる守。——

もち〔愛敬餅〕名 結婚後三日目に、舅姑に贈る餅。

あいきょう〔愛玉〕名 他人の娘の敬稱。

あいきん〔愛吟〕名 好みて吟ずると。又、其聲歌。

あいくるししげい〔愛〕名 形、二 かはゆらし。あいきやう

こぼるゝばかりなり。——げ〔愛氣〕名 あいくるしき

やうす。——さ〔愛〕名 愛情深くして禮儀限まると。

あいご〔愛顧〕名 いづくしみて保護すると。大切にしま

あいつく〔愛護〕名 いづくしみて保護すると。大切にしま

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいつく〔愛好〕名 愛ひよむと。——あいつく

あいざーあいた

と。●照投、應對。●返辭。返答。●答禮、返禮。●あつかひ。仲親。——にん「挨拶人」(名) あいさつに出る人。——は時の氏神(句) 喧嘩口論の仲親は、時にとりて氏神のやうにありがたきものなれば、其言に従ふべきをいふ。あいさん「愛餐」(Arab) (名) 〔宗〕古昔、「キリスト」教徒が聖餐式後寺院に持ち寄りてなしたし會食友愛と慈善との主義を以て行ひしものなり。

あいま「哀史」(名) あはれなる物語。あいま「愛兒」(名) いとほ。あいま「愛日」(名) ●左傳註に「冬日可愛」とあり。冬の日。●時日の空しく過ぐるを惜むと。あいま「愛者」(名) 〔佛〕愛にひかざる。愛情にはまざる。あいま「哀傷」(名) 悲しみいたむ。あいま「愛妾」(名) 氣に入りのめかけ。あいま「愛情」(名) 互に和合して他の幸福安寧を希望ふ情めでつくしむこと。あいじル「怠」(名) 田園の風物事件等を叙したる一種の短詩。牧歌。田園詩。

アイジングラス「Isinglass」(名) 魚類の浮囊の内側より製アイス「Ice」(名) ●こほり(氷)。●アイスクリームの略。其意味の水菓子をもちりていふ高利貸の俗稱。——ボックス「Ice-box」(名) 冷蔵庫。冷凍庫。あい「愛」(名) ●いとほしく思ふ。かはゆと思ふ。●おもんず大切にす。●たのしく思ふ。このむ。●なす。●難く思ふ。をしむ。●こほしく思ふ。またま。——れば其醜を忘る(句) 〔呂氏春秋に出づ〕人を愛するの情は、其みにきに少しも氣づかざるをいふ。

アイスクリーム「Ice-cream」(名) 一種の食品、牛乳に砂糖を加へて煮沸し、これに難解の黃身をませ、製氷器に入れて水結せしめたもの。永菓。——サンデー「Ice-cream sundae」(名) 「アイスクリーム」の上に、果物の汁及切片をかけた一種の飲料。——ソーダ「Ice-cream soda」(名) 「アイスクリーム」を「ソーダ」水にて

あいせーあいた

割りたる一種の清涼飲料水。あいせき「愛惜」(名) をしむと。をしみ。あいせき「哀惜」(名) 人の死をかなしみをしむと。あいせん「愛染」(名) 〔佛〕明王の、一佛法護持の神、全身赤色、三目怒眼、六臂に杵、鈴、弓、箭、蓮華を執り、光顯中に住す。——ぼん「愛染法」(名) 〔佛〕密教にて、愛染明王を本尊として、眞與、利福等を祈る修法。



【んぜいあ】

あいそ「哀訴」(名) あいぐん(哀願)。あいそ「愛想」(名) あいさう。——づかし「愛想盡」(名) あいさうがし。あいさう「愛想」(名) ●愛敬あると。人すきのすと。●嫉嫌をとると。なぐさむと。●もてなし。應對。●よしみ。愛情。——づかし「愛想盡」(名) ●よしみを絶つと。●よしみを絶つてに就きて、其人を罵る言。——が盡きる(句) 興醒めて其人に對する愛想もなくなる。——を盡かす(句) とりあはぬやうになる。

あいぞう「愛憎」(名) 愛するとにくむと。あいそん「愛息」(名) かはゆる子息。あいそん「愛孫」(名) かはゆる孫。あいだ「間」(名) あひだ。●をに見よ。あいだ「間」(名) あひだ。●雲のたなびきたるさま。●とはめがね。ちうがんきやう。

あいだん「愛他主義」(Altruism) (名) 〔倫〕他人の幸福を増進するを以て、道德上の行為の標準となす主義。あいだん「間隔」(名) 間隔無(形) 二(一) あひだなし。●わけへたでなし。うちつけなし。●愛想なし。すげなし。いこーや。

あいだん「朝所」(名) あしたごころ。あいだん「朝所」(名) あしたごころ。アイデンティティ「Identity」(名) Identifical Workers of the World (名) 〔社〕アメリカ

アイデンティティ「Identity」(名) Identifical Workers of the World (名) 〔社〕アメリカ

あいたーあいな

合衆國に於ける一種の社會革命的労働團體、西紀一九〇五年頃に起りしもの労働問題の勃興に従ひて發展せり。あいたあいな「愛垂」(自ら下) あまえたる。あまゆい。なまめきあいだれ(名) あしたごころ。あいたん「朝所」(名) あしたごころ。あいつ「彼奴」(代) あやつ。あのおやつ。さつ。あいつ「哀痛」(名) かなしみいたむと。アイデア「Idea」(名) 理想。●意見。●智願念。アイデアリス「Idealize」(名) 理想的にする。理想化。アイデアリス「Idealist」(名) ●理想家。理想主義者。●「唯心論者。觀念論者。

アイデル「Ideal」(名) ●理想主義。●智願念。アイデル「Idealist」(名) ●理想。●空想的。●典型的。あいたん「哀悼」(名) 人の死をかなしみいたむと。あいたん「哀悼」(名) かなしみてなきさげと。あいたん「愛讀」(名) 好みて讀むと。——まや「愛讀者」(名) 愛讀者人。

アイドル「Idol」(名) 偶像。●誤謬。妄想。●秘藏物。アイドルシステム「Idle-system」(名) 〔社〕工場経営に於ける一種の失業救済の便法、経営者が生産を減ずるを目的とし、職工従業員等の解雇を行はずして、労働時間の一部を廢業し以て賃額の低下を計るもの。

あいな「間無」(形) あひなし。あいな「間無」(形) ●あひなし。あいなだのみ(名) あてにならぬたのみ。そらだのみ。あいなむ「點並」(名) 〔動〕あやなむの轉。

あいなむ「生憎」(副) あやなく。あいなむ(名) 北海道舊土人の稱。樺太・千島等にも散住す。皮膚褐色。目凹み。齒長く、體毛多し。特徴の風俗を有す。古昔には蝦夷と呼ばれたに「あいなむ」は、元來彼等の語にて愚考者の義なるが、轉じて其種族の名となれり。



【あいなむ】

あいの(名) あいぬ。 「りさすと。

あいぶ(愛撫) (名) かはゆがりやすんずと。又、かはゆが  
あいつり(愛別離) (名) (佛)愛する人と心ならず別る  
ると。一く(愛別離苦) (名) (佛)八苦の一、愛する人  
と心ならずも別る、苦痛。

あいほ(愛慕) (名) いつくしみまたよと。  
あいほ(哀慕) (名) かなしみまたよと。  
アイボリー [Ivory] (名) 厚くして光澤ある一種の西洋式、  
名刺等を作るに用ふ。一ブラック [Ivory-black] (名)  
黒色にして光澤ある一種の油精具。

あいま(曖昧) (名) 明白ならざる。たしかならざる  
と。一うらぐらぐと。一や(曖昧屋) (名) 怪しげな  
る女を抱へおきて、密を呼ぶ家。

あいみん(愛民) (名) 人民を愛し其福利を念となす。  
あいみん(哀愍) (名) あはれみ。なまけ。  
あいゆう(隘勇) (名) 臺灣にて、もと生蕃の來襲に備へら  
れし土民の壯丁。一せん(隘勇線) (名) 臺灣にて、隘  
勇が生蕃の來襲を警戒せし歩哨線。

あひよく(愛慾) (名) (佛)愛着と欲望と。  
あいらく(愛樂) (名) このみ樂しむと。  
あいらし(愛らし) (名) 愛(形) 二、かはゆらし。一げ(愛  
氣) (名) かはゆらしとたま。一さ(愛) (名) かはゆら  
しと、又、其度合。

アイリス [Iris] (名) 寫眞にて、映像を擴大し又は縮少せしむ  
る装置。一アウト [Iris out] (名) 映畫にて、スクリ  
ーン上の全體が或一點に向かひて徐々に暗くなること。一  
イン [Iris in] (名) 映畫にて、スクリーン上に於ける一  
點が次第に周圍に擴大して、畫面全體の明るくなること。

あひれん(愛憐) (名) なまけ。いつくしみ。  
あひれん(哀憐) (名) あはれみ。なまけ。  
あいらん(愛戀) (名) こひまたよと。  
あいら(文色) (名) すずけぢめ。あやめ。

あいら(文色) (名) すずけぢめ。あやめ。  
あいら(文色) (名) すずけぢめ。あやめ。  
あいら(文色) (名) すずけぢめ。あやめ。  
アイロニー [Irony] (名) あてこすり。反語。

アイロン [Iron] (名) (化) 鐵。 (製鉄の西洋形火のし。 (理  
理用器のこと。

インフェール (名) [Infernal] (名) (心) 或對象によ  
りて起こる感情が、自己の主觀的感情と合する作用。  
あう [合] (自) 「あふ」を見よ。

あう [合] (自) 「あふ」を見よ。 「感情移入」  
あり(遇)逢(會) (自) 「あふ」を見よ。  
アウエル (名) 一燈 [Auer's lamp] (名) 白熱燈。  
アウト [Out] (名) 一、(電) ロンテニスにて、球  
を場外に打出して敵に一點を得らるること。 (二) スポ  
ール [クリケット] にて、競技者が技術を誤りて戲件を退く  
こと。一オペレーター [Operator] (名) 時代後(電) 報。

陳腐。舊式。一オフファッション [Out-of-fashion] (名)  
仕事を行はぬ。舊式。一カーブ [Outcurve] (名)  
野球にて、風球の一種、本塁近くなりて急に右打者なれば左  
方に、左打者なれば右方に曲がる投球。一ドローセット  
 [Outdoor set] (名) 映畫にて、屋外舞臺装置、即ち野外に  
舞臺を設けたる一種の撮影場。一ドローン [Outdrop] (名)  
野球にて、風球の一種、本塁近くにて急に右打者なれば左  
方に、左打者なれば右方に曲がりながら落ち下る投球。

一フィールド [Outfield] (名) 野球にて、外野即ち左  
翼手より至る右翼手によりて占められたる地域。一フキ  
一カス [Out focus] (名) 映畫にて、焦點を故意に外した  
る一種の撮影技巧。一プレーヤー [Outplayer] (名)  
籃球にて、守備側。一ライオン [Outline] (名) 概観。  
概要。 (電) 輪船。 (電) 磁球にて、「テニスコート」の外圍線。一  
ルック [Outlook] (名) (電) 香煙。見張。 (電) 展望。眺望。

アウトサイド [Outside] (名) 外部。外面。外側。一キック  
 [Outside kick] (名) 蹴球にて、足の外側を用いて球  
を蹴ること。 [今傳はらず]

あうら [足占] (名) 足にてせし古昔の占法、其詳かならず  
アウロラ [Aurora] (名) (地) 極光。  
あうん [阿吽・阿仏] (名) (佛) (二) 悉曇音韻學にて、「あ  
を」一開閉口の始め、「うん」を諸聲合聲の終りとす。 (三)

あうん [阿吽・阿仏] (名) (佛) (二) 悉曇音韻學にて、「あ  
を」一開閉口の始め、「うん」を諸聲合聲の終りとす。 (三)

あうん [阿吽・阿仏] (名) (佛) (二) 悉曇音韻學にて、「あ  
を」一開閉口の始め、「うん」を諸聲合聲の終りとす。 (三)

あうん [阿吽・阿仏] (名) (佛) (二) 悉曇音韻學にて、「あ  
を」一開閉口の始め、「うん」を諸聲合聲の終りとす。 (三)

あうん [阿吽・阿仏] (名) (佛) (二) 悉曇音韻學にて、「あ  
を」一開閉口の始め、「うん」を諸聲合聲の終りとす。 (三)

あうん [阿吽・阿仏] (名) (佛) (二) 悉曇音韻學にて、「あ  
を」一開閉口の始め、「うん」を諸聲合聲の終りとす。 (三)

密教にて、一切諸法の初終を意味し、「あ」を萬有發生の理體  
とし、「うん」を萬有歸着の智徳となす。 (は) 寺院の三門に安  
置せる二王の像、其一は開口し他の一は合唇せるよりいふ。  
(二) 氣血の出入。一の呼吸 (句) 相撲にて、雙方の互に  
立ちあがりとする氣合。

あえか (名) 一、かよわさと。一、いたいけなさと。  
あえく(喘) (自) 「あへ」を見よ。  
あえまらう(他) 「あへ」を見よ。

あえなし(敢無) (形) 「あへなし」を見よ。  
あえもの(背者) (名) あやかりもの。  
あえもの(藥物) (名) 「あへもの」を見よ。

あえん(亜鉛) [Zn] (名) (化) 青白色の脆き金屬天  
然には方亜鉛・菱亜鉛等となりて存在す、適度に熱すれ  
ば展性得薄板となすべし、強く熱すれば再び脆くなり遂  
に燃えて白色の酸化亜鉛を生ず、濕氣に觸るとも、表面のみ  
酸化して内部に及ばざる故に、鑄線・鑄板を被ふに廣く用ひ  
られ、又真鍮・洋銀等の合金を製するに用ひらる。一、か  
つ、水に溶せし酸類に溶解し、顔料及醫藥に用ひらる。一、か  
つ、つこう(亜鉛鐵) (名) (化) 赤色の紅亜鉛鐵。一、  
一、鉛版 (名) 一種の印刷版、磨研したる亜鉛の面に描畫  
し、タンニン酸又は樟酸とアラビヤガムとの混合液を用  
ひて磨蝕せしめ、其上に、インキを按じて印刷す。一、ま  
つ、亜鉛末 (名) 亜鉛の粉末。一、めつき(亜鉛鍍金)  
(名) (化) 鍍の鍍を防ぐため、其表面に亜鉛の薄板を施すと。

あお(青) (名) 「あを」を見よ。  
あお(換) (名) 「あを」を見よ。  
あお(葵) (名) 「あふひ」を見よ。

あお(仰) (自) 「あふひ」を見よ。  
あお(屈) (他) 「あふひ」を見よ。  
あおのく(仰) (自) 他) 「あをのく」を見よ。

あおのく(仰) (自) 他) 「あをのく」を見よ。

あおのく(仰) (自) 他) 「あをのく」を見よ。

あおのく(仰) (自) 他) 「あをのく」を見よ。

あおのく(仰) (自) 他) 「あをのく」を見よ。

あおのく(仰) (自) 他) 「あをのく」を見よ。

あおむし—あかろ

あおむし〔仰(自、他)「あをむく」を見よ。  
 あおり障泥(二名)「あふり」を見よ。  
 あおる(煽(自、他)「あふる」を見よ。  
 あか(赤(名) 七色の一、血の色に似たるもの。赤化。主  
 あか銅(一名)「鑛」あかがね。  
 あか(垢(名) 「あせ」「あぶら」などの垢とまじりて肌  
 附着したる汚物。「附着したる流動體のかす。自身の不行  
 あか(益(名) 船中にたまりたる水。「狀。心のわだかまり  
 あか(團(一名) (梵語 Artha) (佛) (佛前又は幕前に  
 供ふる淨水。(る)轉じて、淨水を盛る器。  
 あか—(赤)接頭。或語に冠して、あらはなるさま又は全き  
 さまを表す語。「うはだか」「うしろ」。  
 あかあか〔明(一名、副) 頗るあかるさま。  
 あかあつき〔赤小豆(一名)「種」小豆の種子の帯赤色なる  
 もの。「るもの」。  
 あかあはり〔赤粟(一名)「種」もちあはの種子の帯赤色な  
 るもの。「るもの」。  
 あかあり〔赤蟻(一名)「動き」あり。「の唐名」。  
 あかあり〔ア(一)亞槐(一名) (三槐即ち三公に亞(下)を義)大鶴言  
 あかあり〔赤(形) あかし。——あんによ「赤信女(一名) (二)天と同穴の赤心を表すため、未亡人が亡夫の石碑に、自  
 己の法名をも共に刻みて朱字となしおく古來の風習なるよ  
 りい」をよげ。未亡人。  
 あかいとどし〔赤絲絨(一名) 織の絨毛の名、舊(舊)染の  
 絲にておとしたるもの。「て、味の佳良なるもの」。  
 あかいろも〔赤芋(一名)「種」「さつまいも」の一種、皮赤く  
 の葉赤色なるもの。たうのいも。  
 あかいろ(赤色(名) あかき色。「かざね」の目目、表  
 は赤にして、裏の二藍なるもの。あかばな。「織物の色」(二)紫  
 紫にして織「赤き」名。  
 あかいらし〔赤鯛(一名) 小腰をまぶせたる鬮を、鬮濱に  
 し又は乾したるもの、節分の日これを、ひらぎの木に貫き  
 て戸口に挿し、「おにやらし」に用ふ。「赤く鞘びたる刀」。  
 あかろ〔赤魚(一名) (動) 鱈類の魚、體は扁平、口

あかろ—あかえ

あかろ〔赤(一名) 漆の一種、色は赤褐色にして、腹面淡し、體長二尺  
 大く下頰隆起す、體色は背部紅色にして腹面淡し、體長二尺  
 餘に達す、深海の岩礁に棲む、北海に多し、肉味美ならず。  
 あかろ〔高(一名) (一種) 桑木の常緑喬木、我國にては臺灣地  
 方に産す、樹高四五丈に達す、梢上より氣根を垂下し、地に入  
 りて新しき樹幹となり、横に平かに繁茂す、葉は長柄を有し、  
 橢圓形にして全縁、「いちぢく」に似たる隱頭花を著く、果實  
 は小球状なり、材質堅く、木理美しく、諸種の用に供せらる。  
 あかろきくさ〔赤浮草(一名)「種」槐葉蘋(一名)科  
 の多年生水草、湖沼、池澤、水田等に繁く浮生し、水面を紅  
 色又は綠色ならしむ。  
 あかろそ〔赤嘘(一名) 全くのいつはりごと。  
 あかろなき〔赤鯉(一名) (動) 圓口類の魚、脊骨なく、口唇に  
 數條の皺を生ず、鼻腔は口腔と通じ、眼は甚だ不完全にして  
 皮下に隠る、體長一尺許、海に産し、口を以て他の魚體に吸着  
 し、時には其體腔内に穿入して内部寄生を營むとあり。  
 あかろみかめ〔赤珊瑚(一名) (動) 海蝸の一種、形狀、習性  
 共に、あそみがめ(一名) 鮎(一名) に似、色は褐色を帯ぶ。  
 あかろし〔赤漆(一名) 赤色の顔料を混じたる漆。  
 あかろし〔赤鱗(一名) 陶器に描ける赤色の繪。  
 あかろし〔赤鱗(一名) (動) えその一種、形、えそに似、脊  
 部赤色にして淡黒の斑點あり、腹は白色にして深紅と淡紅と  
 の横條にして。  
 あかろまづ〔赤蝦夷松(一名)「種」松柏科の常緑喬木、  
 北海道に産す、樹皮は赤褐色にして枝條細く軟かなり、針葉  
 は細く、枝に藍角をなして着生す。  
 あかろい(赤鯛(一名) (動) 横口類の魚、胸鰭頗る擴張し  
 て、體軀は扇形をなし、扁くして  
 長き尾を有す、尾の中央に劍狀  
 の鋭き棘ありて、背の中央に砂  
 粒狀の突起線生す、體色は青淡  
 黄にして腹白し、鰓孔は口と共に  
 下面に開く、體長大なるは三尺許に達す、近海の泥沙中に棲  
 息し、七八月の頃胎生す、我國西南海に多く産す、食用に供せ  
 る。  
 〔ひえかあ〕



あかえ—あかか

あかえび〔赤蝦(一名) (動) 蝦の一種、普通近海に見るもの、  
 長さ約三寸、體は赤褐色、短毛を生ず。  
 あかえり〔赤(一名) 赤地の襪、少女の用ふるもの。  
 十七八歳の少女、特に藝妓など、東京市營自動車的女車  
 掌、其服の襟の赤き故にいふ。  
 あかおどし〔赤絨(一名) 「あかいとおどし」及「あかがはお  
 どし」の總稱。  
 あかおほくち〔赤大口(一名) 紅の生絹などにて仕立て  
 あかかろち〔赤麩(一名) 色の赤きかうち。  
 あかかかち〔赤酸漿(一名)「種」はほづき。「鹿毛」。  
 あかかかち〔赤鹿毛(一名) 馬の毛色、赤みを帯びたる  
 あかかかち〔赤鹿(一名) 騾はしか。  
 あかかかち〔赤檜(一名) 血腫(一名)「種」殺斗科の常緑喬  
 木、暖地に生す、高さ三四丈周圍丈餘に及ぶものあり、樹皮は  
 粗にして翠黒、葉は橢圓形にして尖り、長き葉柄を有す、幼時  
 は細毛生じ、成長すれば平滑となる、五月頃小花を開き、堅果  
 を結ぶ、木材は帶赤色を呈し、種々の用に供せらる。  
 あかかかち〔赤柏(一名)「種」あかかがはし。「赤飯」。  
 「勝回りに物なし」。  
 あかかかち〔赤槽毛(一名) 馬の毛色、槽毛の赤みを帯びた  
 るもの。「紫色なるもの」。  
 あかかかち〔赤酸漿草(一名)「種」かたはみの葉の紅  
 あかかかち〔赤合羽(一名) 紅「がら」色の桐油紙にて製した  
 る合羽、徳川時代以下おもに着用したり。  
 あかかかち〔赤蟹(一名) (動) 蟹の一種、山谷溪間又は河堤等  
 に穴居す、小形にして、紫、赤、しやまがに。  
 あかかかち〔銅(名) 赤(一名) (赤金の義) (化) 淡赤色の  
 光澤を帯びたる金屬、天然に純銅、硫銅となりて存在  
 す、展性及延性に富み、銀に次ぎて熱及電氣の良導體なり、澁  
 氣中にて鉄色の錆を生じ、空氣中にて熱すれば、黒色の酸化  
 銅を生ず、用途甚だ廣し。  
 あかかかち〔赤革絨(一名) 織の絨毛の名、舊(舊)染  
 の革にておとしたるもの。

あかがはらわら(赤瓦)一名 磁分の酸化して赤色を呈せる瓦。一種にして、安價なる文化住宅又は文化生活。

あかがひ(赤目)一名 動物の腸管内、介殻は心臟形にして膨れ、ひだ多し外面は淡褐色、内面は白色多く東海に産し、淡水混和せる浅海の泥中に棲息す肉色赤く、食用とす。

あかがへる(赤蛙)一名 動物、かへるの一種、體色薄赤色にして暗褐色の斑點あり指趾の末端尖り、よく跳躍す、肉は小兒の疳癪として效ありといふ。

あかかみきり(赤天牛)一名 動物、天牛科の一種、頭部は三角形にして濃赤色を呈す、杉材の害蟲なり。

あかがり(輝)一名 あかざれ。

あかき(開伽藍)一名 伽藍を供する器具。

あかき(赤木)一名 植物、大戟科の常木、葉は三出複葉にして、細小なる花を簇生す、材質堅牢にして色赤く、白色の木理あり、琉球・臺灣・印度等より渡來し、唐木細工に用ひらる。

あがき(足掻)一名 あがくと。――木に「足掻死」(名)もがき苦しみて死ぬると。

あかきころ(赤心)一名 一つはりなき心。まごころ。

あかきつ(赤雉)一名 動物、きんけい。

あかきつ(赤切符)一名 汽車の三等乗車券、其赤色なるよりいふ。――轉じて、下等又は安直。

あかきぬ(赤衣)一名 緋色の袍、五位の朝服。赤色の袴衣を著し袴違儀の下司。

あかきび(赤赤、丹黍)一名 植物、もちまぎの穂の色赤きあかきり(赤桐)一名 植物、ひり。

あかざれ(輝)一名 赤切の義、さむさにあたりて、手足の皮の裂けたるも。あがり。

あかぐけ(足掻)一名、か四、駒など前足にて地をかか(蹠)も、あかぐせくす。

あかくさ(赤草)一名 植物はうきさ。

あかくすり(赤薬)一名 人參と辰砂とにて製したる赤色の丸劑、昔時、急病に用ひしもの。

あかとそく(赤具足)一名 小札、赤き漆にて塗り、赤緋にしたる具足。

あかくち(赤朽葉)一名 かさねの色目、うす紅に黄を帯びたるもの。

あかくみ(澄波)一名 あかとりま。

あかくりげ(赤栗毛、黄鬃)一名 馬の毛色、栗毛に赤みを帯びたるもの。(騷)

あかけ(赤毛)一名 赤はみたる毛髪。馬の毛色、黄赤あかざつ(赤毛布)一名 赤色の毛布。都會見物に出でたる田舎もの、其赤毛布をまよふよりいふ。

あかむし(赤毛蟲)一名 動物、蛾類の幼蟲、八月頃現はれ、桑の木に棲息し、九月の天、土中に入りて蛹となり、翌年五月頃羽化して、葉の害蟲なり。

あかげら(赤啄木鳥)一名 動物、啄木科の一種、背は黒色にして白き斑點あり、頭及腹の下部は赤色にして、腹の上部は茶褐色を帯ぶ、雌は棕色を異にす。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかこ(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。



【ごんさかあ】

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかき(赤子)一名 生まれてほどへぬ小兒。(嬰兒)。

あかしーあかそ

香木、山野に生ず、高さ四五丈、樹皮は平滑にして黒褐色を呈す。葉は互生し楕圓形にして縁齒を具ふ。花は四月頃に開き、雌雄同株にして形を異にす。材は淡黄白色にして、器具の柄と、推車を作る料とす。

あかまほしー〔赤潮〕一名〔地〕硅藻類又は微細生物の群集により、普通に赤褐色を呈したる海水、生物に害を及ぼす。

あかまみー〔垢染〕一名〔垢〕にまみたるよれ。

あかまむらびつらぬー〔垢染〕一名〔垢〕にまみたるよれ。

あかまてこー〔赤蝦蛄〕一名〔動〕蝦の一種、大さ直海老に匹敵し、全長七八寸に達す、前脚の脚一對は蟹となり、背面上には發形の軟甲あり、陸地の海に産す。

あかまらびー〔赤白髪〕一名〔赤〕赤みを帯びたる髪が。

あかすけりー〔明〕一名〔他〕さきらかにす。〔秘密〕をあらはす。〔うたがはしき〕を分明ならしむ。〔陰謀〕物を取りのぞく。〔夜の明くる〕を待つ。

あかすぐりー〔名〕〔種〕虎耳草科の落葉灌木、「ヨーロッパ」の原産、各地に栽培せらる、莖高三四尺、葉は掌狀に三裂し、裂片は不齊の鋸齒を有す、四月頃、葉腋に淡緑色の總狀花を開き、甘味ある紅色の漿果を結ぶ。

あかすきー〔赤筋〕一名〔古〕絹を水に浸して切りたる苧。

あかすぢむしー〔赤筋毛蟲〕一名〔動〕毛蟲に著く毛蟲、背上に赤褐色の線あり、體面に灰色の毛を生ず、八月頃、現れて襟の葉を食ひ、九月の末、土中にて蛹となり、翌年六七月頃羽化す、棧の害蟲なり。

あかすぢばちー〔赤蜂〕一名〔動〕蜂の一種、黒色大形にして、翅は赤褐色、第三腹節に普通二箇の赤黄斑紋を有す、胸角の上部は黄色、前頭廣く、複眼は卵形なり、農家に益あり。

あかすぢみー〔赤砂〕一名〔名〕こんがら。

あかすぢりー〔垢磨〕一名〔入浴〕のとき、身體のあかすぢりおとすに用ふる細吳綿などの巾。

あかそー〔赤苧〕一名〔植〕「からむし」の一種、山野に生ず、高さ二三尺、葉赤く莖生ず、夏日花を開く、莖皮より絲を採り

あかたーあかつ

又は綿を製す。

あかたー〔阿伽陀〕一名〔梵語 Agada〕〔佛〕一種の辟毒劑、眞言宗にて用ふ。

あかたー〔縣〕一名〔並行〕田の漑。諸國にある朝廷の御料地。

あかたー〔縣主〕一名〔古〕あかたを支配せし官職。

あかたー〔赤大根〕〔紅蘿蔔〕一名〔種〕大根の一種、根の赤みを帯びたる。

あかたてばー〔赤立羽〕一名〔動〕蝶の一種、前翅は黄色にして黒紋あり、翅端は黒色にして白紋あり、後翅は黄赤色にして二列の黒線あり、翅端は藍色を呈す。

あかたなー〔關枷樹〕一名〔關〕關物を供ふる樹。

あかたぢりー〔赤鯛〕一名〔動〕硬骨類の魚、體は楕圓形にして側扁、色は淡褐色にして體側に濃き同色の斜線あり、我國の沿岸これを産せざる處なし、食用に供し、味頗る美なり。

あかだまー〔赤玉〕一名〔赤〕赤色の玉。こはく玉。佐渡より産出する赤色の磁石。

あかためしー〔縣召〕一名〔中古〕毎年正月十一日より十三日までの間に、國司の官人を任命せられし公事。一の志も。

あかたけりー〔名〕わかし。「求め奉らせ給ふに」。

あかたつきー〔關枷坪〕一名〔關〕關物を供ふる器。

あかたつきー〔曉〕一名〔明時〕の曉夜の明くるころ。よあけ。あけがた。

あかたつきー〔曉種〕一名〔曉種〕の音。やみ。

あかたつきー〔赤月毛〕一名〔馬〕の毛色、月毛にあかみを帯び

あかたつきー〔垢附〕一名〔垢〕にまみたるよれ。

あかたつきー〔赤土〕一名〔赤〕赤黄色を帯びねばり氣ある土、酸化鐵の地表にまみ込まれたるもの。はに。植煙草の一種、氣つよし、葉色あかつしに似たれば名とす。あかま。

あかつーあかな

あかつめくさー〔名〕〔種〕豆科の多年生草本も、ヨーロッパの原産なれど、今は各地に分布し、野生の状をなす。葉は地に伏し、高さ一二尺、葉は掌狀複葉にして、小葉は卵形をなす、夏日、葉間に花軸を抽き、紫紅色の蝶形花を開き、莢を結ぶ、牧草又は肥料に供せらる。

あかつらー〔赤面〕一名〔赤〕あかがね色の顔色、おもに人を罵るに用いふ。〔演劇〕にて、敵役又は惡形の稱、其の多くは顔を赤く塗りて登場するよりいふ。

あかつらー〔赤鐵〕一名〔種〕赤鐵科の常綠喬木、南洋、琉球、臺灣等に産す、葉は長楕圓形にして質厚く、葉の裏面及枝には小毛生ず、葉腋に小花を開き、漿果を結ぶ、材は堅くして赤褐色を帯ぶ。

アカデミー〔Academy〕一名〔西洋〕諸國の高等學校又は學士會院。ーがくはー〔學派〕 Academic school 一名〔ギリシヤ〕の哲學者、プラトンの學說を祖述する學派。

あかつらー〔赤電車〕一名〔東京市〕當電車にて、各方面行の最終電車、赤色電球の燈火を點するよりいふ。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。

あかつらー〔洗取〕一名〔名〕「月」に名のり鳴くなる時鳥。



あり、西洋料理に用ふ。トマト。

あがなひワカ「贖」(名) あがなふと。あがなふる。

あがなハカ「贖」(他、は四) ①金銭又は物品を出  
だして、罪過の責めをまぬがる。②うめあはせをなす。③買  
物などをうけ出さる。

あがなハカ「贖」(他、は四) ①買ひ求む。かふ。②  
賞をかけて募る。つもの。

あか三まツ「赤鯨」(名)「動」なまづ「一種 全體赤褐色、  
體長三寸許、頭部最大にして尾部側扁、胸鰓の刺に觸るれば  
人を驚らす、環流などに棲む。

あかにし「赤螺」(名)「動」前鰓類の貝、介殼は獨樂状を  
なして螺殻は著しく隆起し、外面は暗褐色にして内面は鮮紅  
色、我國東海地方に多く産し、肉は食用に供せらる。②きは  
めて香鬱なる人。けらばう。

あかにホウ「赤荷證券」(名)「商」保険契約を附加  
せる一種の荷證券。朱字を以て印刷せらる。

あかぬけ「垢抜」(名)「垢」ぬとてき  
れいなる。②よろうとげなくなる。やぼくさくなくなる。

あかね「茜草」(名)「赤根の義」種「茜草科の蔓生草  
本、莖は方形にして葉と共に刺あり、葉は長卵形又は長心形  
にして、四齒づつ輪生し、長さ  
葉柄を有す、花は淡黄色にして  
莖葉として用ひらる。②茜草  
の根を粉にしたる暗赤色の染料。



【一】ねかあ

あかハカ「赤」(名) 赤色のねり糊。

あかね「赤練」(名) 赤色のねり糊。

あかね「赤練」(名) 赤色のねり糊。

あかね「赤練」(名) 赤色のねり糊。

あかね「赤練」(名) 赤色のねり糊。

あかね「赤練」(名) 赤色のねり糊。

あかね「赤練」(名) 赤色のねり糊。

あかね「赤練」(名) 赤色のねり糊。

あかね「赤練」(名) 赤色のねり糊。

あかのたにん「赤他人」(名) 全くゆかりのなき人。

あかのヤキ「上野焼」(名) 陶器の一種、慶長年間、豊前國  
上野村に於て、歸化朝鮮人上野尊階の燒き始めしもの。

あかは「明衣」(名) 天皇の御遊獵に奉仕する職人の著る衣。  
あかはげ「赤禿」(名) 山又は人の頭などの全く禿げて赤く  
なりたるを。又、其山又は頭。

あかはた「赤旗」(名) 赤色の旗。又、赤化の旗。——志げ  
会、主義事件(名) 明治四十一年、山口義三の出獄歡迎  
會に、赤旗等が赤旗を掲げて、「テモ、山口義三の出獄歡迎  
あかはた「赤赤」(名) 皮膚腐りて充血し、赤色を呈した  
るもの。②衣服を脱ぎ肌をあらはすを。

あかはダ「赤裸」(名)「まるはだか。すはだか。あかは  
だ。②」(他)はたかむき。

あかはたホウ「赤膚焼」(名) 陶器の一種、正保年間、大和  
國赤膚山にて野々村に開の燒き始めしもの。

あかはち「赤恥」(名) あらはなる恥辱。

あかはハ「赤蜂」(名)「動」あかすぢばち。

あかはツ「赤初茸」(名)「種」初茸の一種、早く生じ、  
頭部の紅色を帯びたるもの。

あかはな「赤花、柳葉菜」(名)「種」柳葉菜科の多年生草  
本、山地の水邊に生ず、莖高一  
尺餘、葉は長卵形にして、鋸齒を  
有し、初は緑色なれど葉赤色に  
變ず、夏日、葉梢葉腋に小形の  
紅花を開く、花後に莢を結ぶ、  
種子は一端に長毛を有す。



【なばかあ】

あかはな「赤花」(名) 紅花にて染めたる色。②あかいろ  
あかはな「赤鼻」(名) ざくろばな。

あかはハ「赤」(名) 赤くなる。あからむ。

あかはハ「赤」(名) 赤くなる。あからむ。

あかはハ「赤」(名) 赤くなる。あからむ。

あかはハ「赤」(名) 赤くなる。あからむ。

あかはハ「赤」(名) 赤くなる。あからむ。

あかはハ「赤」(名) 赤くなる。あからむ。

あかはハ「赤」(名) 赤くなる。あからむ。

あかはハ「赤」(名) 赤くなる。あからむ。

あかはら「赤」(名) うま。いつはり。(奥州の方言)。

あかひき「赤蟻」(名)「動」あかがへる。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

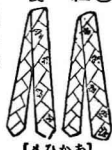
あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。

あかひき「赤引赤丸」(名)「動」春蚕の一品種、成熟すれ  
ば體縮赤色を呈す、飼費大など、飼育容易ならず。



【もひかあ】

あかね

あかね

あかね

あかまーあかむ

あかまいし【赤間石】(名)「罨」あづき色の石、最も上等なるものは紫色を帯ぶ、長門國厚狭地方に産し、赤間關より積み出たす、硯材又は庭石とす。

あかまぐさ【赤間草】(名)「植」さはあらさき。  
あかます【赤鱈】(名)【動】喉鰓類の魚、形は鱈に類す、體は藍色にして、肉は紅色を帯ぶ、淡水に産す。

あかまたら【赤斑蚊】(名)【動】蚊の一種、普通の蚊より稍小、全體淡褐色、眼脚に褐色の輪紋あり。

あかま【赤松】(名)「植」松の一種、山野に自生す、樹皮は赤褐色、二葉一所より生じ、葉質固からず、木材は種々の用に供せられ、めま樹幹より樹脂を採取す、觀賞植物としても栽培せらる。めまつ。

あかまひ【赤舞】(名)「植」烟草の名、あかつち。  
あかまへだれ【赤前垂】(名) 赤き紅毛の前垂、又、それをつけたる飲食店旅館などの下牌。

あかまる【赤丸】(名)「自、ら四」あかむ、あからむ。  
あかみ【赤味】(名) あかさと、あかま度合。――ばしる

あかみ【赤味走】(自、ら四) 赤き色あらはる。あかみさす。  
あかみ【赤身】(名) 肉の赤きところ。【材】材木の中心の赤きところ、質は比較的堅牢なり。心材。

あかみづ【赤味噌】(名) 麥麹にて作りたる味噌。  
あかみづ【一割伽水】(名) 【佛】佛に供ふる水。

あかみむし【赤うろこ】(名) 【動】蛾の一種、體長一分半、頭胸は紫褐色にして灰白色の斑紋散在し、腹部は濃灰色なり、幼蟲は九月頃、繭質の中に棲み、其種子を食し、翌年五月頃羽化す、繭の質も質なり。

あかむし【赤蛇】(赤)「自、ま四」あかむ、あからむ。  
あかむし【赤蛇】(赤)「他、ま下二」あかす。「うやまふ、あかむしめ、あかむし」崇(他、ま下二)おそれあふ。たふとび

あかむつ【赤鱈】(名) 皮膚すりむけて赤くなる。  
あかむつ【赤鱈】(名) 【動】(い) 硬骨類の魚、「むつ」に似て赤褐色を帯ぶ、體長二尺餘、深さ八十等乃至三百十等の海底の岩礁に棲む。(ろ)おひかは。

あかむらさき【赤紫】(名) あかみを帯びたる紫。

あかめーあから

あかめ【赤女】(名) 【動】(い) 硬骨類の魚、背部は紫色に赤色を帯び、腹部は暗白色なり、體長數尺に達し、多く西海に産す、卵果甚だ大にして、これを乾製したるものを「からすみ」と稱す。めたな。(ろ)たり(鱈)。

あかめ【赤目】(名) 赤みを帯びたる目。【病】眼病の一種、眼虹彩の色素の先天的に缺之せるもの。【下まぶら】を指にて引き、赤き眼を見て、眩せざるを指示す。あかへい。【だひり】赤目鯛(名) 【動】硬骨類の魚、體は橢圓形をなし、鱗は甚だ小なり、體色紅にして、體長一尺三寸許に達す、近海に産す。――【ふく】赤目河豚(名) 【動】

【小】の一種、背は紅黄色にして褐色の斑點あり、腹部白く、眼は金色を帯ぶ、肉は美味なれど、卵巢に劇毒を含む。  
あかめがし【赤芽柑】(名) 【植】大酸柑科の落葉喬木、山野に自生す、幹は高さ二丈に達す、芽の色赤し、葉は掌狀に分裂す、夏日、枝梢に黄白色の總狀花を開く、雌雄異株、果實は外面に軟刺多し、木材は種々の用に供せらる。

あかめがし【赤斑瘡】(名) 【病】はしか。  
あかもく【赤】(名) 【植】藻類の海藻、沿海の暗礁に生ず、莖は丈餘に達す、細き枝を出して一寸許の線狀葉を著く、肥料とす。

あかもす【赤百舌】(名) 【動】百舌の一種、頭部より尾部に至る迄、體に濃き赤褐色を呈す。

あかも【赤】(名) 【植】石唐松科の常綠灌木、高山の石間に生じ、高さ尺餘に過ぎず、莖に褐色の毛生じ、葉は卵形にして厚し、夏日、花梗を抽き、鐘形の小花を下垂す、質は固くして紅紫し、味甘。

あかもん【赤門】(名) 朱塗の門。あかめりもん。【東京帝國大學の俗稱、其通用門は、もと侯爵前田邸の御守殿門にして、朱塗なるよりいふ、「出」は「赤門派」(名) 東京帝國大學の出身者。



【あかもん】

あから【赤】(接頭) 赤色なる意を表はす語。――がほ

あからーあかり

あから【赤顔】(名) 赤みを帯びたる顔。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。  
あから【赤】(赤)「形」赤くあり。

あかりまよらぎ(明障子)一名 細き木を格子に組み

あかりだち(上高)一名 ありがたのたか。

あかりたる(明太刀)一名 儀式に用ふる太刀(儀刀)。

あかりだん(上段)一名 昇る階段のほりだん。

あかりち(上地)一名 官に没収したる土地。

あかりとり(明取)一名 光線をとるための窓。

あかりなまづ(上塗)一名 放蕩して家財を失ひしもの。

あかりば(上場)一名 水面より陸地上がるべき所。

あかりはな(上端)一名 室の入口。

あかりふち(上藤)一名 荳茶のそば。

あかりまど(明窓)一名 光線を入るゝ窓。

あがりもの(上物)一名 貴人の食物。

あがりや(揚屋)一名 徳川時代の年獄内にて、御目見以下

あがりゆ(上湯)一名 入浴のをはりに、身體をすすぐため

あかりんご(赤林檎)一名 種(べ)りにんご。

あかる(開)自、ら、四 おのづからひらく。

あかる(赤)自、ら、四 赤くなる。あからむ。

あかる(別)自、ら、下三 わかる。はなる。これか

あかる(上)自、ら、四 きたりう(へ)ゆく。左もよ

あかる(上)自、ら、四 きたりう(へ)ゆく。左もよ

あかる(上)自、ら、四 きたりう(へ)ゆく。左もよ

あかる(上)自、ら、四 きたりう(へ)ゆく。左もよ

あかる(上)自、ら、四 きたりう(へ)ゆく。左もよ

あかる(上)自、ら、四 きたりう(へ)ゆく。左もよ

あかる(上)自、ら、四 きたりう(へ)ゆく。左もよ

あかる(上)自、ら、四 きたりう(へ)ゆく。左もよ

あかる(上)自、ら、四 きたりう(へ)ゆく。左もよ

あかり—あかる

あかり—あかる

あかり—あかる

所又は目上の人の許に詣る。まゐる。没収せらる。とりあ

あがる(扶持)一名 供へらる。供物が。古くなる。

あがる(風采)一名 風采ふきはだちて立派に見

あがる(上)他、ら、四 くらふの敬語。

あがる(明)一名 あかる。又、其度合。

あがる(明)形、一 あまらかなり。

あかく(別)一名 わかる。とく。あかれ(別別)

あかあ(開)一名 開御水を汲む井戸。

あかあ(赤魚)一名 動かあかとんぼ。

あかを(開)一名 開御水を汲み入る、種。

アカンサス(Acanthus)一名 一種の多年生植物の有する鋸歯状

あかんべい(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

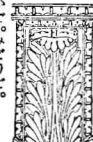
あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。

あかんぼく(赤坊)一名 あかど。みどり。



[アザンカア]

に産す。葉は、にんぞんに類し、花は小形黄色、箇々分離又は

あき(舌君)一名 わがさき。

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき(秋風)一名 秋風の吹き来るにひひ又秋

あき—あき

あき—あき

あき—あき





あくしーあくし

——せんり「悪事千里」(名)〔北婆瑠吉に「悪事行千里」とあり〕悪事のとかく世間に聞こえ易きと。

あくまき「悪食」(名) 極めて粗末なるものを食ふと。そまよく。 ②皆ある物を食ふと。いかものぐり。

あくまじ「悪疾」(名) たちの悪しき病氣。 ②人の思ふ様ふ病氣。 ③痲瘋。

あくまじ「悪質」(名) 悪しき性質。

あくまじ「悪石」(名) 〔種石類〕科の落葉灌木、山地に自生す。葉は直立し、高さ三三四尺、葉は互生し、卵形にして鋸齒あり初夏、葉脈に淡紅色の花を開く。 小形洋の漿果を結ぶ。

あくまじ「悪報」(名) 屋根及外側に壁を張り廻したる假舎。

あくまじ「悪酒」(名) 混和物多しして味悪しき酒。

あくまじ「悪越」(名) 佛あくだう。

あくまじ「握手」(名) 〔佛〕にきりこぶし。にきりたる手。 ②交りて結ぶと。好みを通すと。 ③西洋の禮式上、相會して互に手をにぎりあひて、親愛の意を表示すると。

あくまじ「悪臭」(名) あしきにおひ。 ①びろう「悪臭鼻漏」(名) 〔病〕鼻粘膜の蛋白となりて肥厚し血管擴張して悪臭ある液を分泌する病、鼻加答兒・梅毒・結核等の人に多し。

あくまじ「悪所」(名) 悪しき習慣。よからぬならはあくまじ「悪所」(名) けはしき場所。 ①よからぬ場所。 ②遊蕩をなす場所。いゝざと。 ③おち「悪所狂」(名) いゝざとに入りにたりて、はうたうする。 ④は「悪所場」(名) あくまじいざと。

あくまじ「悪女」(名) あくまじ。

あくまじ「悪婦」(名) 容貌みたくき婦人。醜婦。 ②性質よからぬ婦人毒婦。 ③「深憤」(名) 句 醜婦又は毒婦の多くは、愛情をなくして嫉妬深しといふと。

あくまじ「悪性」(名) 悪しき性質。 ②悪しき行爲。



〔やくまくあ〕

あくしーあくた

①いたづら「淫奔。 ①がね「悪性金」(名) 酒色に浪費する金銭。 ②まらぬ少年、不良少年

あくまじ「悪少年」(名) 性質よからず品行をアウカム「Action」(名) 動作。作用。

あくまじ「悪心」(名) 人に舌を加へんとすること。 ②ねぢけたるころ。よからぬころ。

あくまじ「悪神」(名) 禍をなす神。まががみ。

あくまじ「悪水」(名) 毒を含める水。飲めば舌をなす水。 ③きたなき水。よれ水。 ④「悪水路」(名) けすのたう。とぶ。

アークスマカメラ「Argus-camera」(名) 小型寫眞器の一種形は望遠鏡の如く、側面に「レンズ」あり、他人の氣付かざるうちに撮影し得るを特徴とす。探偵カメラ。

アクスチオン「Acoushon」(名) 耳の遠き人が、音を明確に聞き取るため用ふる一種の觀音聲助聽器。 「一貧血」。

あくまじ「悪性」(名) 悪しき性質。 ③病性の悪しきと。あくまじ「悪聲」(名) ④わるきはさ。 ⑤罵詈する言。あくまじ「悪伴・醜態」(名) 小事にかかづらひてつとむるまませかかしてひまなまませ。

あくまじ「悪銭」(名) 不正なる事をなして得たるきんせん。 ①身に「つかす」(句) 悪銭のおづから無益の事に消費せられて、空しく盡くるにやふ。

アクセント「Accent」(名) 發音の調子。

あくまじ「悪相」(名) 兇惡なる面相。

あくまじ「悪瘡」(名) まじうのあしきかさ。人の思ひきりふかぞ。

あくまじ「芥藻屑」(名) 何の役にもたぬ物事をあ

あくた「芥」(名) 腐りたる雜物。ごみ。 ①「び」(芥火) (名) あくたを踏す。 ②「ふ」(芥生) (名) ちりづか。糞堆。 ③「あくた」(芥藻屑) (名) あくまぞ。

アクター「Actor」(名) 俳優。役者。 ④「法」辯護士。原告。

あくた「悪態」(名) のしと。惡口。

あくた「芥藻屑」(名) あくまぞ。

あくた「悪玉」(名) 惡にみちびく疑徒。 ②惡人。

あくたーあくね

あくた「むし」(輩蟻) (名) 〔動〕あがらむし。あくた「れ」(名) あくたれると。あしきいたづら。 ①「ぐち」(名) にくまれぐち。惡口。 ②「もの」(名) あくたれる所業をなすもの。あはれ惡口。 ③「すいたづら」をなす。

あくた「れる」(名) 自ら「ら」に「わさ」と悪しき所業をなあくた「らう」(名) 悪太郎 (名) よろしからぬ所業の多き兒童。いたづらごと。 ②「まじ」(名) 悪太郎時代 (名) 少年のいたづら盛りの時代。

あくち「悪血」(名) 病毒を含有する血。

あくち「口頭瘡」(名) 口の邊に生ずるちひさまか。

あくち「かく」(名) 「悪知惡覺」(名) 佛さとの妨げとなる知識。 「に誘ふもの」。

あくち「悪知識」(名) 佛邪惡の法を説きて、人を悪

あくち「アクチフ」(Active) (名) 能動的・積極的

あくち「悪徒」(名) よこしまなる人。わるもの。

あくち「一種」(名) かがと。

あくち「Arc」(名) 行爲所乘。 ④「法令」。 ⑤「戲曲」にて、幕

あくち「Arc」(名) 燈「Arc lamp」(名) 弧燈。

あくち「どう」(名) 惡道。 ②あしきみち。 ③「佛」惡業をなしし衆生の墮つる所、即ち、地獄・餓鬼・畜生の三道の稱、修羅を加へて、四惡道又は四惡趣といふ。

あくち「悪徳」(名) 悪しき所行。よからぬあつち。 ①「徳をかまふ」(名) 徳新聞 (名) 好みて陰謀をあばき又は虚説をかまふ(名)として、名譽を傷け風波を起す種をまく新聞

あくち「悪性」(名) あくとときと。又、其度合。

あくち「しげ」(名) 形「二」ほどに過ぎてるさし、くだくだし。 ②「とく」をまじ。

あくち「Actress」(名) 女優。女優者。

あくち「Actress」(名) (自は四) 馬跳くねまはる。

あくち「悪人」(名) 道にづれたる所行をなす人。 ②このるのねぢけたる人。

あくち「阿久根焼酎」(名) 薩摩阿



あげせーあけは

あげせん [上錢] (名) 物を貸し又は賣りて得たる錢。日がけ又は月がけのかけせん。目人を券したる報酬の錢。あげだひ [揚代] (名) 藝妓をよぶ代。あげだし [揚出] (名) 料理の名、あげあぶらにて、豆腐・茄子などをかくあげたるもの。

あげだたみ [上座] (名) 床の上にまきて、貴人の座となす座、兩面に表と縁をつけたるもの。あげたて [開閉] (名) 戸・障子をあくるととつと。あげたま [揚玉] (名) かぶとの蓋座のかざり。あげつづもり [明告鳥] (名) 【動】にこそり。あげつちもり [上土門] (名) 間柱二本の上に冠木を載せ、其上に土をおきたる門、あづちん(開口)。

あげづめ [揚詰] (名) 藝妓をあげつづぐる。あげつらひ [揚論] (名) あげつらふと。論議。あげつらふ [揚論] (名) あげつらふと。論議。あげつらふ [揚論] (名) あげつらふと。論議。あげつらふ [揚論] (名) あげつらふと。論議。

あげど [揚戸] (名) 上に押しあけて開閉する戸。アーケード [Arcade] (名) 屋根覆ある商店街。仲店通。あげどうふ [揚豆腐] (名) あぶらあげ。あげに [明荷] (名) 【つづら】の一種、藁にて作り、其かどかに竹を取附けたるもの。

あげのかれ [明鐘] (名) あげがたの鐘(寢鐘)。あげのからす [明鳥] (名) 【動】あげがらす。あげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星などあげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星などあげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星などあげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星など

あげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星などあげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星などあげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星などあげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星などあげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星などあげのころ [明残] (名) 自ら四夜あなずて、なほ星など

あげは [揚揚] (名) 船より荷物を陸にあぐる處。あげはなし [開放開放] (名) あげはなしと。あげはなし [開放開放] (名) あげはなしと。あげはなし [開放開放] (名) あげはなしと。あげはなし [開放開放] (名) あげはなしと。

あげはなれ [明離] (名) 夜のあげはなれたる時(且明)。あげはなれる [明離] (自) 【あげはなれる】の訛。

あげはーあけは

あげはのちようぶ [揚羽蝶] (名) 【動】蝶の一種、普通にいふ蝶これなり、體長八分乃至一寸、體色は鮮黄又は黄色、前翅は長三角形にして後翅は半圓形、共に黒色の地色に黄色の斑紋あり、物にとまるときは翅をあげて合はす、幼蟲は蠶(ま)なり。



【蝶羽揚】

あげたま [揚漬] (名) 【鹽田】の一、海邊の砂地を利用して水田の如くに作り、細砂を散布したるもの。【鹽田】にて、敵の石を攻め取り、其地を占領したる場所。

あげたよりばち [揚羽宿蜂] (名) 【動】蜂の一種、胸及腹の上部は赤褐色にして、下部は黒藍色、脚は赤褐色に黒斑あり、翅は黄色、風媒に寄生。あげはらふ [揚張] (名) 假屋の四方上部をかこぶ幕(體)。

あげはらふ [揚張] (名) 假屋の四方上部をかこぶ幕(體)。あげはらふ [揚張] (名) 假屋の四方上部をかこぶ幕(體)。あげはらふ [揚張] (名) 假屋の四方上部をかこぶ幕(體)。

あげび [木通] (名) 【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。

あげび [木通] (名) 【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。

あげび [木通] (名) 【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。

あげび [木通] (名) 【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。

あげび [木通] (名) 【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。【木通】の一種、山野に自生す、葉は掌状複葉にして數箇の小葉より成り、夏の初葉間より長楕圓形にして食すべし、わか葉も食用に供せらる。

あげまーあける

あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。

あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。

あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。

あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。

あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。

あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。

あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。

あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。

あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。あげまき [揚卷] (名) 【小兒】の髪を結び、髪を左右兩方に分ちて結びたるもの。【髪】をあげまきに結ぶ幼時。ことも。



【びすむきまげあ】







あはし。【ちややくくし】。

あざ志え<sup>アサシ</sup>「浅智慧」(名) あさはかなるちあ。「はら

あざ志ぬはら「浅篠原」(名) 篠のまばらに生じたる野

あざ志ほ<sup>アサシ</sup>「朝潮」(名) 朝のほとにさしくる潮。

あざ志み「朝濃」(名) 朝に大地の濃など。「もと

あざ志めり「朝霜」(名) 朝に露又は霜などにてものま

あざ志も「朝霜」(名) 朝おきたる霜。——の「朝霜」の

(枕)「け」消に冠する枕詞。

あざすお<sup>アサシ</sup>「浅蘇芳」(名) すはう色の蘇きもの。

あざすぎん<sup>アサシ</sup>「朝葵」(名) 朝おきたるまの葵。

あざすぎん<sup>アサシ</sup>「麻頭巾」(名) 麻の布にてつくりたる頭

巾夏の間、老人の冠るもの。

あざすず「朝涼」(名) 夏季に朝のほどのすずしき間。

あざすずみ「朝涼」(名) 夏季に朝はやく起きてすずむ

と。あざすずみ「朝涼」(名) 夏のあざすずみ

あざせ「浅瀬」(名) 水のあざすずみ。——に「仇波」句「浅

き潮に仇波は立」といふ古歌より出づ。浅瀬なるもの

あざだ「浅田」(名) 底の浅き田。「の軽躁なるにいふ。

あざだち「朝立」(名) 朝早く出立する。

あざち「浅茅」(名) 短くして繁らざる茅。——ぎけ「浅

茅酒」(名) 肥後國より産出する一種の酒色白くして濃厚

——のなは<sup>アサシ</sup>「浅茅繩」(名) 祓除(ハ)の時に用ふる

繩、茅にて左袷に作りたるもの。——のわ「浅茅輪

(名) 祓除に用ふる浅茅繩の輪。——はら「浅茅原」(名)

まばらに茅の生じたる野原。——はら「浅茅原」(名)

野。つばらつばらに冠する枕詞。——ふ「浅茅生」(名)

浅茅の生ひたる所。

あざつき「浅葱」(名) 葱の多年生草本、

山野に自生するものと、多くは園圃に栽培せられ、地下に

鱗莖を有す、葉は細くして圓筒状をなし、食用に供せらる。初

夏、花梗を抽き淡紫色の輪形花を開く。——なます「浅

葱鱈」(名) 料理の名、浅葱を短くして、浅鱈(ア)のむきみを加

へ、酢味噌にてあへたるもの。

あざつく<sup>アサシ</sup>「朝附」(名) 朝のぼる日影。

あざし——あざし

あざづく<sup>アサシ</sup>「朝附日」(枕)「むかふに冠する枕詞。

あざづく<sup>アサシ</sup>「朝月夜」(名) 晴夜に夜未だあけはなれず、

月のなほ残りてあるほど。(名) 夜のあけ方。

あざつけ「浅漬」(名) 漬物の名、大根をなまほしにして、麴

又は鹽と鹽につけたるもの。

あざつて「明後」(名) 「あざつて」の音便。

あざつて「明後日」(名) 近江國坂田郡朝妻の入江

の船舶、又、其船中に賣淫せし女。——遊君の烏帽子、水干を

着て舟に授けさす間。

あざつゆ「朝露」(名) 朝のほとにおく露。——の「朝露

之」(枕)「置く」預(テ)に冠する枕詞。

あざつて「明後日」(名) (明日)に去りての義、あすの次の日。

あざつて「浅手」(名) 軽少な負物、すこしのてき。

あざつて「麻手」(名) あさめもの。——こぶすま「麻手小

袋」(名) あさぶすま。

あざと「朝戸」(名) 朝起きて開くる戸。——で「朝戸

出」(名) 朝はやく外に出づると。(朝外出)——やり「朝

戸造」(名) 朝早く戸をあくる。

あざと「朝床」(名) 朝起き出ぬほどのね床。

あざと「朝鳥」(枕)「かよふに冠する枕詞。

あざと「朝菜」(名) 朝よく食物。

あざな「字」(名) 支那にて、實名の外に親しく呼ぶ時に用

ふる名。——我國にて、學者、文人が支那風を學びて、實名以外

に附くる名。——あだな(匿名) 田一村のうちの小區域。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざな「朝朝」(名) 朝ごと。まひあさ。

あざにけ<sup>アサシ</sup>「朝毎」(副) 朝に日に。朝ごとに。日日。

あざにけ<sup>アサシ</sup>「朝虹」(名) 朝に現るる、虹、大雨の兆候といふ。

あざぬ<sup>アサシ</sup>「朝」(他、現在下) あざなふ。

あざぬ<sup>アサシ</sup>「麻布」(名) 麻絲にて織りたる布。

あざぬ<sup>アサシ</sup>「朝霞」(名) 朝おそくまで睡りてゐると。——が

み「朝霞」(名) 朝起きいでたまのみだれたる髪。——が

ほう<sup>アサシ</sup>「朝霞」(名) あざぬす入。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

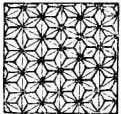
あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。

あざの<sup>アサシ</sup>「朝霧」(名) 佛に朝露の講席。



【はのさあ】



の間もなく到来するに、いふ。一を洗ふ(句) 賭業を止めて正業に就く。一を重ね目を仄(つ) (出) (漢書に出) おづおづして危みおそるに、いふ。一を出す(句) 秘密をふと漏らす。くちばし。 ④豫定の額より這ひ過す。つかひます。 ⑤自限を過ぐ。

あし「葦」蘆葭(名) 〔植〕木本科の多年生草本。水邊湿地に自生す。春日、地下茎より蘆花を生じ、高さ一丈餘に達す。枝なくして葦葉共に竹に似る。秋日、莖頭に大形の穂を抽出。き面雜花序をなして多数の花を繚る。莖は葦簾を作るに用ひらる。よし。なほいふ。たまえぐさ(雑語)。

あし「啞子」(名) おふし。一の(夢)句 おしの見し夢を人に告げ得ざるを、自己の知了せる眞況の、告げてこれを悉くし得ざるに譬へいふ。

あし「からず」(名) 悪二形(二) ①宜しからず。善からず。 ②好ましからず。快からず。 ③いやし。みにくし。 アジ(名) 「アジテーション」の略。

あし「鱧」(名) 「動」 「あぢ」を見よ。 あし「味」(名) 「あぢ」を見よ。 「れに。 あし「あし」に「足跡」(名) 各自の足のまにまに。むかれわかれ。 あし「あし」に「足跡」(名) 地に印したる足のふみあと。 あし「あふり」(足彘)(名) 中に火をいれ貯へて足をあたはむる器。あんくわ。 「あしだらひ。

あし「あらひ」(足洗)(名) ①あしにて物をあらふと。 ②あしうち「足打」(名) 器にあしをつけたるもの。 ③あしうち「足占」(名) あうら。 あし「うら」(蹠)(名) 足のその地をふむ所。足の下面。 あし「おし」(足押)(名) 一種の遊戯、兩人あしを押し、互にすねとすねを押しあひて、勝負するもの。すねおし。

あし「おと」(足音)(名) あるく足の音(発音)。 あし「か」(葦鹿、海鹽)(名) 〔動〕蟹脚類の海蟹。性状最も「あざらし」に近し。體は茶褐色にして頭稍大。體長殆ど二寸に達す。或は海中に群泳し、或は岩上に群居す。岩上に睡眠する時も、必ず一頭の警戒をなす。一の番(句) 葦鹿の睡眠中、其群中の用具に製せる。一の番(句) 葦鹿の睡眠中、其群中

あしーあしか

の一頭が警戒をなすが如く、代りあひて寝ずに番をなすと。 あし「か」(簀) (名) 〔代〕代りあひて寝ずに番をなすと。 「ざる」に似て、おもに竹又は藁につくる。 あし「かがた」(足利時代)(名) むろまち左だい。 あし「がかり」(足掛)(名) ①高處へのぼるとき、足をかくるもの。あしは、あし。 ②物事に着手する手づる。たより。 あし「も」(葦垣)(名) 葦にてつたる垣。一の「葦垣」(枕) 「ふる」 「みだる」 「まぢか」に冠する枕詞。 あし「かけ」(足掛)(名) ①あしをかくる所。あしがかり。 ②経過せし月日を概算していふ。一三年。 あし「かす」(足枷)(名) 足にはめて其動作を抑制するかし、古昔、罪人を拘留するに用ひしもの。あしかせ。

あし「かせ」(足枷)(名) あしかし。 あし「がた」(足形)(名) あしかの形。 あし「がため」(足固)(名) ①足を歩行にならすと。あしならし。 ②柱の下部を固むるに打ちつくる横木。 あし「がある」(葦散)(枕) 「難波に冠する枕詞。 あし「がな」(足鼎)(名) 足の三つある鼎。 あし「かなもの」(足金物)(名) 太刀の足をなせる金物。 あし「がに」(葦蟹)(名) 〔動〕葦のはえたる水邊に棲む蟹。 あし「かはり」(足草)(名) 側足のにつくる草。 あし「かひ」(葦芽)(名) 〔植〕あしの芽。

あし「かひ」(葦貝)(名) 「はまぐり」の變種、介殼は黄褐色にして葦の如き斑あり。 あし「がま」(足釜)(名) 足のあるかま。 あし「がも」(葦鴨)(名) 〔動〕水禽類の鳥。頸長く、嘴は軟皮を被り末端のみ硬し。脚短くして後方に位し、前三趾間に蹠(ひ)あり。頭は稍赤く、胸は赤色、腹は灰色、翼に青き羽毛混じ、嘴と脚とは黒し、再川、池沼に棲む。 あし「がら」(足搦)(名) あしがらみ。 あし「がらみ」(足搦)(名) ①相撲柔術にて、他の足に我足をからみてうち倒す技。 ②〔動〕おほちがふぐり。 あし「かり」(葦刈)(名) 葦をかりとると。又、其人。



あし「か」

あし「がる」(足輕)(名) ①合戦のとき、徒歩にて出て立つ賤卒。さぶひやうほそつ。 ②徳川時代に、士分の下位に屬せし一階級。一だいまより「足輕大將」(名) 足輕の部隊を統率するもの。 あぞ「かん」(阿字觀)(名) 〔佛〕眞言の觀法、阿を衆聲の本願となすより轉じて、一切諸法の本源を阿字に概括し、其本不生の理を觀じて、諸法の空に達し、一切の障を斷つ。 アさき「あゆきうりゅう」(式蹴球)(名) フットボールの一種。各組を十一人づつに分ち、同形の球を用ひ、球に手の觸るゝを禁じて動作するもの。 あし「きぬ」(足籠)(名) ふとぎ糸にて織りたるきぬ。 あし「くせ」(足籠)(名) あし「の」形又は歩みかたにつきたるくせ。 ①用括の手脚かはづ。 あし「くび」(足首)(名) 足の踵の上の稍細くなりたる所。 あし「くび」(葦毛)(名) 馬の毛色、白に黒みのまじりあるもの、萬葉に大分背馬を訓める。一「ひばり」(葦毛雲雀)(名) 馬の毛色あしげに雲雀毛のまじりたるもの。一「ぶち」(葦毛斑)(名) 馬の毛色、あしげにぶちあるもの。 あし「げ」(足籠)(名) 足にけると。 あし「げ」(悪氣)(名) あしきさま。 あし「げい」(足藝)(名) 手にする種々の技を、仰臥して足あしけしげ。 ①「悪」(形) 二、わるきさまなり。かかるかやの亂れてあれどあしけくもなし。 あし「げ」(悪人)(名) あしき人。 あし「げ」(彼處)(代) あるところ。かしこ。 あし「ご」(葦五位)(名) 〔動〕ぼんぼうさま。 あし「さ」(悪)(名) あしきさま。あしき度合。 あし「さ」(紫陽花)(名) 〔植〕「あぢさゐ」を見よ。 あし「さ」(名) 〔動〕水禽類の鳥。脚に似て形小、嘴細くして末端尖る。尾は燕に似て分時す。常に海上に飛びかふ、種類多し。 あし「さ」(足障)(名) ①歩むにさはりとなるもの。 ②足の裏に物のふる、心地(足觸)。

あし「がる」(足輕)(名) ①合戦のとき、徒歩にて出て立つ賤卒。さぶひやうほそつ。 ②徳川時代に、士分の下位に屬せし一階級。一だいまより「足輕大將」(名) 足輕の部隊を統率するもの。 あぞ「かん」(阿字觀)(名) 〔佛〕眞言の觀法、阿を衆聲の本願となすより轉じて、一切諸法の本源を阿字に概括し、其本不生の理を觀じて、諸法の空に達し、一切の障を斷つ。 アさき「あゆきうりゅう」(式蹴球)(名) フットボールの一種。各組を十一人づつに分ち、同形の球を用ひ、球に手の觸るゝを禁じて動作するもの。 あし「きぬ」(足籠)(名) ふとぎ糸にて織りたるきぬ。 あし「くせ」(足籠)(名) あし「の」形又は歩みかたにつきたるくせ。 ①用括の手脚かはづ。 あし「くび」(足首)(名) 足の踵の上の稍細くなりたる所。 あし「くび」(葦毛)(名) 馬の毛色、白に黒みのまじりあるもの、萬葉に大分背馬を訓める。一「ひばり」(葦毛雲雀)(名) 馬の毛色あしげに雲雀毛のまじりたるもの。一「ぶち」(葦毛斑)(名) 馬の毛色、あしげにぶちあるもの。 あし「げ」(足籠)(名) 足にけると。 あし「げ」(悪氣)(名) あしきさま。 あし「げい」(足藝)(名) 手にする種々の技を、仰臥して足あしけしげ。 ①「悪」(形) 二、わるきさまなり。かかるかやの亂れてあれどあしけくもなし。 あし「げ」(悪人)(名) あしき人。 あし「げ」(彼處)(代) あるところ。かしこ。 あし「ご」(葦五位)(名) 〔動〕ぼんぼうさま。 あし「さ」(悪)(名) あしきさま。あしき度合。 あし「さ」(紫陽花)(名) 〔植〕「あぢさゐ」を見よ。 あし「さ」(名) 〔動〕水禽類の鳥。脚に似て形小、嘴細くして末端尖る。尾は燕に似て分時す。常に海上に飛びかふ、種類多し。 あし「さ」(足障)(名) ①歩むにさはりとなるもの。 ②足の裏に物のふる、心地(足觸)。

あしかーあしき



あし「さ」



場を組むに用ふる九木。

あしはや【足早】(名) あゆみの早きさま。又、よく走ると。

あしはら【足早小舟】(名) よく走る小舟。

あしはら【葦原】(名) あしの生じたる廣き所。――がに【葦原蟹】(名) 【動】蟹の一種、形小さく、蟹いかに毛ありて足に毛なきもの。

あしはらひり【足拂】(名) 美術にて、自己の足にて敵の足をはらひて、これを引き倒す。

あしび【馬酔木 榎木】(名) 【植】あせび。

あしび【葦火】(名) 葦をなきてもゆる火。

あしび【足引】(名) 【山】葦に冠する枕詞。

あしび【足拍子】(名) 舞臺、演劇などにて、樂人俳優の足拍子とする拍子。

あし【葦生】(名) 葦を生じたるころ。

あし【足拭】(名) あしぬぐひ。

あし【斑】(名) よつたる。

あし【足船】(名) 葦をつみたたるふね。

あし【足踏】(名) 【足】にて地を踏む。あしびやうをよとる。【體操】にて、一定の場所にとどまり、左右兩足にて交互に地を踏む動作。

アジヤ【Asia】(名) 亞細亞大陸の略(名) 【註】

あし【葦邊】(名) 葦が生じたる水邊。【足】の字。

あし【へん】(名) 漢字の偏の名、陟、崎などの左方にある。

あし【ぼそ】(名) 足細、美竹(名) 【植】禾本科の多年生草木、莖傍などに多くこれを生じ、夏日大いに繁茂し、葦、葉共に柔軟平滑、莖は腫長にして莖あり葉は長き披針形にして、胸節に向ひて漸く狭し、花穂は種長くして緑色なり。【草】

あし【ほね】(名) 【骨】生脚節を構成せる骨。【足】の力

あし【ま】(名) 葦の生ひ茂りたる間。

あし【まかせ】(名) 【足】に任せてあること。

あし【ま】(名) 【動】はりがねむし。

あし【ま】(名) 【動】はりがねむし。

あし【ま】(名) 【動】はりがねむし。

あし【ま】(名) 【動】はりがねむし。

あし【ま】(名) 【動】はりがねむし。

あし【ま】(名) 【動】はりがねむし。

あし【ま】(名) 【動】はりがねむし。

あし【ま】(名) 【動】はりがねむし。

あしまり【足參】(名) 貴人の足を撫でますと。足の按摩。右近を御一に召す。

あし【もと】(名) 【足】のもと。足のあたり。(判下)。

あし【こ】(名) 【足】のこ。自己に最近なる場所。――がはら【足下瓦】(名) 鬼五の左右につけたる裝飾用の瓦。――ぬき【足下貫】(名) 多く打ちつけたる貫の中、最も下の貫。――から鳥が起つ(句) 極めて手近き所より機事の俄におこるにいふ。――の明るいうち(句) 自由に身の振舞のつくりをいふ。――へも密れぬ(句) 縁隔の甚しきにいふ。――を見る(句) 弱點につけこむ。

あま【啞者】(名) 發言の機能の缺けたるもの、多くは先天的に弱覺を缺く。おしおふし。

あま【葦屋】(名) 葦にて葺きたる家屋。――がま【葦屋釜】(名) 足利時代に、沈別園葦屋より鑄出したる釜土佐光曾等の下輪にて模様を鑄出したるもあり、漆道にて貴重す。

あし【やすめ】(名) 【足休】(名) 歩みつかれたる時に、足をやすむ。

あま【アジヤ】(名) 【感】 諷刺の辭、特に再會の機なき場合に多く用ふ。さやうなら。

あま【阿修羅】(名) 【梵語 Asura】(佛) 六道又は六趣の一、業果拙きもの生を攝する所に於て、常に闘戰起す、怖怖無徳なり、四種ありて、普通には其第三なる變化生ものを指す、天と地を争ふものといはる。――おうろ【阿修羅王】(名) (佛) 争ふよとくたまはる。梵天、帝釋と争ひて、正法をはろばんとしたりといふ惡魔。――かい【阿修羅界】(名) (佛) 阿修羅の住する所。あまらたう。――どうろ【阿修羅道】(名) (佛) 佛にあまらたう。――の唐名。

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言



黄色透りの酸液、果實様の臭気と灼熱様の味あり、醫藥として用ふ。――アンチニト【亞硝酸】(名) Ammonium nitrate (名) 【化】潮解し易く分解し易き結晶加留母母【Dobsonium nitrate】(名) 【化】水に溶解し易き淡黄色の鹽、普通には糊狀に製す、人工色素を製するに用ひら。――ソーダ【亞硝酸曹達】(名) Sodium nitrate (名) 【化】水に溶解し易き淡黄色の結晶體、其水溶液は弱アルカリ性の反應を見ず、硝煙ナトリウムを鉛と共に熱して製し、亞硝酸製法の原料とす。

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言

あま【よう】(名) 【亞相】(名) (相) 即ち大臣に亞(之)善、大納言









あだけ「阿娜」(名) なまめきたると。いろけ。「今さへかかる御一こそといひあへり。——もの「阿娜者」(名) あだけたる人なまめきたるもの。

あだける「阿娜」(名) 一「仇」(白) かつ下二) わざと暴行す。あくたれる。いたづらす。あばる。

あだける「阿娜」(名) 一「あだく」の詠。

あだごけ「愛宕若木」(名) 植養植(心) 科の羊歯類。深山の陰地に生ず。蔓細く、葉は椿木に似て冬は褐色に變ず。山城國愛宕山に多きなり此名あり。

あだごころ「徒心」(名) うはきなるこころ。

あだこと「徒言」(名) あだく。

あだまくら「徒櫻」(名) 散りやすき櫻。

あだし「私」(代) 「わたし」の詠(婦人小兒の語)。

あだししげしき「徒」(形) 二) ことなり。別なり。三) はかなしかりそめな。四) いたづらなり。無益なり。——「こころ」徒心(名) 移りやすき心。ふたごころ。——「ちざり」徒契(名) 末のとげられぬ契はかなきちざり。——「ひと」徒人(名) ほのかのひと。だにん。——「よ」徒世(名) と「徒」(名) 生きて居て益なき世。はかなき世。

あたしげなし「徒」(形) 一) けちなり。ふはし。

アダジオ「Adagio」(名) 音楽にて、樂曲の進行の緩舒なることを示す記號。——「アサイ」Adagio(名) 音楽にて、樂曲の進行最も緩舒なることを示す記號。

あだし「徒野」(名) (山城國嵯峨の近傍なる古代の埋葬地の名に出づ) なきがらを葬るところ。——「露」(句) はかあだす「す」(他) さび 讀く打つ。「なま」人の命にいふ。あだす「す」(他) 冠(自) さ懸 〇てきたふ。はむかふ。〇せぬ。〇あむ。

あだせに「徒鏡」(名) いたづらに遣ふ鏡。

あたたか「暖温」(名) 〇あつくなく寒くなき温度。〇資財豊かなると。〇自愛情深と。——「げ」暖氣(名) あたたかきやうす。——「さ」暖温(形) 一) あたたかき。又其度合。

あたたけ「しほ」(形) 〇あたたかき。〇あたたかき。

あたたまり「暖温」(名) あたたまる。あたたかなる氣。あたたまる「暖温」(自) 〇あたたかくなる。あたたむ「暖温」(他) 〇あたたかす。

あたたむら「仇屯」(名) 仇の屯所。敵營。アタクツ「Atakutsu」(名) 〇攻。〇襲撃。〇「ホケ」敵技にて、チームの最前列にゐる五人。

あだな「徒名」(名) うはきの名。むざつの名。——「ぐさ」徒名草(名) 〇越さく。

あだな「罪名」(名) 人の面貌、性質、暴動などにより、實名の外に他人の負はせ呼ぶ名。

あだなふ「徒」(名) 〇あだなふ。あだなふ「徒」(名) 〇あだなふ。あだなふ「徒」(名) 〇あだなふ。

あだなみ「徒浪」(名) 〇あだなみ。あだなみ「徒浪」(名) 〇あだなみ。

あだな「徒花」(名) 〇あだな。あだな「徒花」(名) 〇あだな。

あだはら「疝」(名) 〇あだはら。あだはら「疝」(名) 〇あだはら。

あだひつ「價値」(名) 〇あだひつ。あだひつ「價値」(名) 〇あだひつ。

あだびき「徒弾」(名) 〇あだびき。あだびき「徒弾」(名) 〇あだびき。

あだぶつ「徒」(名) 〇あだぶつ。あだぶつ「徒」(名) 〇あだぶつ。

あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。

あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。

あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。

あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。

あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。

あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。あだふつ「徒」(名) 〇あだふつ。

あたへる「與」(他) 「あたふ」の詠。

あたほら「名」(名) 〇あたほら。あたほら「名」(名) 〇あたほら。

あだぼれ「徒惚」(名) 〇あだぼれ。あだぼれ「徒惚」(名) 〇あだぼれ。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。

あたま「頭」(名) 〇あたま。あたま「頭」(名) 〇あたま。



あたまの頭











あと—あとぎ

るにいふ。—ま引く(句) 或事がながくつづく。又、かざりなくむさぼる。—ま守る(句) 留守の番をなす。死後をうけつぐ。

あと(阿堵)一名 ①あとよつ。②(音書の願望の傳に)傳神寫照正在阿堵中」とありめだま。

アト[Ait]一名 藝術、技巧、美術。

アド(名) 能狂言のむきま。

アド(名) アドレスの略。

あとあし(後脚・後足)一名 けものまゝりへの脚。うしろあし。まへしの對。—て砂をかく(句) 主人の許を去るにのぞみて、仇をなして行く。

あとあとげつ(後後月)一名 あと月の前月。せんせんげつ。あととがたり(名) ①話の懸答。②なぞなぞがたり。「知れどちこそもすなれ」。

あとうつ(自た回) 人の話に拍子を取りて懸答す。あとおさ(後押)一名 ①まんがり。②行列の最後。

あとおし(後押)一名 ①車などを後より押してたすくると。②人の後だてとなりてたすくると。

あとかた(後肩)一名 興・寫箱等にて、後方の棒を擔ふもの。あとほう。さきかたの對。

あとかた(跡形)一名 見るべき形跡。——なしくしけし跡形無(形二) ①あり跡うす。②わけわからず。

あとかたづけ(後片附)一名 事後の始末をつくと。

あとがね(後形見)一名 後の記念。

あとがね(後金)一名 契約又は豫約の金額の内、幾分を渡して向は殘餘の金のこりま。

あとがね(後姓)一名 血統をひきたる子孫。ちつづき。

あとがね(後替)一名 あとがま。

あとがね(後覆)一名 うしろむきにて、身體を空に一種して立つと。とんぼがへり。

あとがま(後釜)一名 前者のかはりとなる人。

あとく—あとの

あとくち(後口)一名 ①残りたる部分。のこりぶん。②飲食したるあと。③話のまひ。

あとげつ(後月)一名 前に過ぎたる月。先月。

あとげな(さ)一名 あとげなきと。又、其度合。

あとげな(し)一名(形一) わるざし。無邪氣なり。

あとさき(後先)一名 あととさきと。まへとうしろと。ぜんて。—になる(句) 或はあとになり或はさきになる。

—見す(句) ぜんごの思慮なく事を行ふ。むてつぱう。—見廻はす(句) 前後に目をくらりて注意す。

あとざん(後産)一名 のちざん。

あとざん(後智慧)一名 物事のすみて後に出る分別。あととま(後始末)一名 事後の處置。あとかたづけ。

あととぞ(後備)一名 あととぞへの軍兵。

アトタイプ[Atotype]一名 膠と重「クロム」酸との混合物が感光性を利用して一種の寫眞版。

アトタイプ[Atyped]一名 鉛分に富みて光澤あり、寫眞銅版等の精巧な繪畫に用ふ一種の印刷用紙。

あとたる(結)一名 垂跡(自ら下二)佛菩薩が衆生済度のため、權に神となりて我國に現す。

あとつき(跡懸)一名 ①先代のあとをつぎまへ人。よつづき。あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あととり(跡取)一名 あとつき。よつづき。—むすこ(跡取息子)一名 あととりとなる男子。

あとなし(跡無事)一名 跡定めず流浪する人。

あとのつき(後月)一名 あとげつ。

あとのまつり(後祭)一名 例祭のみし翌日。—時機を失して事に功なきと。

あとのり(後乘)一名 ①行列の後に從ふ騎馬。②後陣となりて入城すると。

あとく—あとの

あとくち(後口)一名 ①残りたる部分。のこりぶん。②飲食したるあと。③話のまひ。

あとげつ(後月)一名 前に過ぎたる月。先月。

あとげな(さ)一名 あとげなきと。又、其度合。

あとげな(し)一名(形一) わるざし。無邪氣なり。

あとさき(後先)一名 あととさきと。まへとうしろと。ぜんて。—になる(句) 或はあとになり或はさきになる。

—見す(句) ぜんごの思慮なく事を行ふ。むてつぱう。—見廻はす(句) 前後に目をくらりて注意す。

あとざん(後産)一名 のちざん。

あとざん(後智慧)一名 物事のすみて後に出る分別。あととま(後始末)一名 事後の處置。あとかたづけ。

あととぞ(後備)一名 あととぞへの軍兵。

アトタイプ[Atotype]一名 膠と重「クロム」酸との混合物が感光性を利用して一種の寫眞版。

アトタイプ[Atyped]一名 鉛分に富みて光澤あり、寫眞銅版等の精巧な繪畫に用ふ一種の印刷用紙。

あとたる(結)一名 垂跡(自ら下二)佛菩薩が衆生済度のため、權に神となりて我國に現す。

あとつき(跡懸)一名 ①先代のあとをつぎまへ人。よつづき。あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あととり(跡取)一名 あとつき。よつづき。—むすこ(跡取息子)一名 あととりとなる男子。

あとなし(跡無事)一名 跡定めず流浪する人。

あとのつき(後月)一名 あとげつ。

あとのまつり(後祭)一名 例祭のみし翌日。—時機を失して事に功なきと。

あとのり(後乘)一名 ①行列の後に從ふ騎馬。②後陣となりて入城すると。

あと—あとも

あとば(後齒)一名 ①下駄の後方の齒。②後齒のみを入れ、前齒を作り附けたる婦人用の下駄。

アドバイザー[Advertiser]一名 忠告者。助言者。

あとばこ(後箱)一名 昔時、大名の行列の後より、調度を入れて持ちこたへし箱籠。

アドバイザー[Advertiser]一名 通知者。披露主。

あとばら(後腹)一名 産後の腹痛。①事の果して後の故障。—が病める(句) 物事の果して後、其費用のつぐひに苦しむにいふ。

あとばら(後拂)一名 ①葬式の出でたる後を、破り構むると。②物品を受け取りて、金銭を支拂ふと。

アドバンス[Advance]一名 ①進行。②前金。立替金。

あとひき(後引)一名 酒を得るに從ひていよいよ食すと。—きょう(後引上戸)一名 あとひきの酒のみ。

あとひき(後退)一名 あとへ退くと。あととま(後始末)一名 事後の處置。あとかたづけ。

あととぞ(後備)一名 あととぞへの軍兵。

あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あとつき(跡懸)一名 ①先代のあとをつぎまへ人。よつづき。あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。

あととら(後嗣) ①前首前職の跡をつぎて、其事務繼續を掌る人。②學問・技藝などの系統をうけつぐもの。



【(二)ばとあ】



【るまとあ】



アトモスフィア [Atmosphere] (名) ① 鬱閉気。② 氣分。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

あととどりに [後展] (名) ① 後へ返る。② 事件の退歩。

ア	ハ	ニ	シ	ス	セ	ソ	タ	チ	リ	ル	レ	ラ
イ	ヒ	フ	ヘ	ホ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	フ
ウ	ク	カ	ケ	コ	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
エ	ケ	カ	ケ	コ	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
オ	カ	キ	ク	コ	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク

【顯地名】

の配合によりて聲音を表はす音韻文字。

あないち [穴一] (名) 地の穴に鐵を打ち込む小兒の遊戲。

あなうらめ [穴埋] (名) あなを埋むる。① 缺損を補ふ。

あなうら [足裏] (名) 足のうら。あうら。と。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

アナウンス [Announce] (名) ① 通知者。告知者。② 「ラチオ放送に於て、ラチオ番組又は「ニュース」若しくは天氣豫報等通知する人。

に習み夜間出て食餌を求む。

アナキズム [Anarchism] (名) 土地錯誤。

あなきがし [穴探] (名) 人の遺失を捜索する。

あなし (名) 西北の風。あなせ。

あなまぢ [穴痔] (名) 病。肛門のかたはらに穴のあく病、即ち血腸肛腫と皮膚外面との間に穴のあきて、内容物の其穴より漏れ出づるもの。ぢらう。

あなすぬ [足末] (名) 足のさき。子孫。

あなせ (名) あなし。

あなた [彼方] (名) ① あのかた。むかうの方。あち。かたた。② すきにし方。まへかた。③ ごへん。貴下。

あなだ [穴大工] (名) あなぐらだち。

あなつばひり [穴遺入] (名) 遊藝又は妾宅若しくは情婦の家などに入りびたる。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつり [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。

あなつら [穴釣] (名) 水中の穴を穿れて體を釣る。



【スナナフ】



**あはごけ**「粟苔」(名)「種水馬糞」の科の一年生小草。陰湿の地に生ず、葉の高さ二寸、粟粒の如き小葉對生す、葉脈に微細なる花を開く、雌雄異株なり。  
**あはご**「淡」(名) あはご、あはご度合。  
**あはし**「シツ」(名)「淡」(形)「濃」からず、まつこくなし。あざりしであり。「味」うすし。「種」すくなし。「色」あさし。「情」熱せず。

**あはま**「栗松露」(名)「種」松露の一種、色黄。  
**あはす**「アサ」(名)「合」(他)「下」(二)「一」(一)「同」じくす。「あつむ」かかぬ。「めあはす」たぐはす。「あす」結ぶ。「薬品」を配劑す。「香味」を調ふ。「あはす」むつまじむ。「比」よ。  
**あはすれ**「阿婆搦」(名) 婦人の世故に慣れ過ぎて、恐がしこくあつかましくなりたると。又、其婦人。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる衣服、普通に単衣と稱入との間時候に用ふ。「ガツパ」(合)「合羽」(名) 裏を着けたる羽織。「あはせ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

りなどを磨く砥石の表面を平かにし、且其脂をとるために磨換するに用ふる小さき帯白黄色の粘板岩。「どろ」(合)「銅」(名) 鉛を入れて吹ききたる銅。「はぎ」(合)「合襷」(名) 男の髪を結ひ方、髷の下に髪をおくり込み、太き元結にて結びたるもの。「ぶき」(合)「吹」(名) 金銀を含有せる銅より、金銀を抽出するに用ふる文へて吹く。「め」(合)「目」(名) を合はせたる節目。「もの」(合)「物」(名) 一つに合はせたる物。「一つの器」に、數品の食物をもりたるもの。「やき」(合)「焼」(名) 料理の名、魚を三枚におろし、肉目と肉目の間に鶏卵の蛋白を入れて程よく煎く、これを竹串にさし、鹽をふりかけて焼きたるもの。「物は離れ物」(句) 合はせたる物は必ず離れる、物との義、即ち夫婦の和合せずして離れとなる場合などにいふ。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。  
**あはせ**「アサ」(名) 裏を着けたる羽織。

する陶器、天保年間加集坂平の焼き始めのもの、主に黄色釉薬を用ひ、酒器・并皿等を製し、近時外國品を模造して輸出す。  
**あはつ**「シツ」(名)「淡」(形)「濃」あははしくあり。「不」遠慮なり。  
**アパッチ**「Apache」(名) 「フランス」國「パリー」にて、一種の無頼漢。「ダンス」「Anchorage」(名) 「パリー」の下層社會にて行はるゝ低級なる一種のダンス、男女二人にて踊り、男性が女性を亂暴に取扱ふ特徴とす。  
**あはつ**「アサ」(名) 栗の實のつぼ。  
**アパート**「名」(名) 「アパートメント」又「アパートメント・ハウス」。「アパートメント」(名) 部屋。賃間。「アパートメント・ハウス」(名) 棟の建物の中を、多くの部屋に仕切り、各部屋にて獨立に生活し得るやう設備せるもの。  
**あはのせん**「アサ」(名) 常陸國粟野より産出する膳、絶目ありて淡黄色に塗れるもの。  
**あはひ**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。

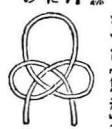
**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。  
**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。

**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。  
**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。

**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。  
**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。

**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。  
**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。

**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。  
**あはび**「アサ」(名) 物と物とのあひだ。人と人との交際のおひだ。あひだ。あひま。あひだがら。



【びすむびはあ】

あはすーあはれ

あはす(阿波) [阿波影] (名) 昔時、専ら阿波國より出しし彫刻具の金屬彫刻、野村正矢の阿波の領主野須賀侯に召されて彫刻に従事せしに始まる。

あはみどりめ [粟米] (名) あはあめ。  
あはみどりめ [粟米] (名) 干菓子の名、砂糖を黄色に染め、新引種と微塵粉とを混ぜ、棒にて押しつけて切り、砂糖粒を塗る。うとむ、冷淡にす。

あはむ [粟米] (名) 粟を炊きたる餅。  
あはめん [粟餅] (名) 粟にて製したる餅。  
あはもち [粟餅] (名) 粟を蒸して搗つきたる餅。

あはやし [栗餅] (名) 栗の皮を蒸して搗つきたる餅。  
あはやし [栗餅] (名) 栗の皮を蒸して搗つきたる餅。

あはゆき [淡雪] (名) 薄く降りたる雪、消えやすき雪。  
あはゆき [網端] (名) 網の浮子を著く部分の長さ。

あはら [荒] (名) 荒れすさびたるさま。——や荒屋 (名) 荒れはたる家、破屋。——街道の宿屋に旅人などの休み所に設けたる圍ひな家 (亭舎)。

あばら [肋] (名) あばらばね。——ばね [肋骨] (名) 生 (名) 間隔のまばらなる様。  
あばら [網針] (名) あまばり。

あはる [荒] (名) 荒れすさびたるさま。——や荒屋 (名) 荒れはたる家、破屋。——街道の宿屋に旅人などの休み所に設けたる圍ひな家 (亭舎)。

あはれ [哀] (名) いたはしきと。あはれむべきと。ふびん。  
あはれ [哀] (名) いたはしきと。あはれむべきと。ふびん。

あはれ [哀] (名) いたはしきと。あはれむべきと。ふびん。  
あはれ [哀] (名) いたはしきと。あはれむべきと。ふびん。

あはれ [哀] (名) いたはしきと。あはれむべきと。ふびん。  
あはれ [哀] (名) いたはしきと。あはれむべきと。ふびん。

あはれ [哀] (名) いたはしきと。あはれむべきと。ふびん。  
あはれ [哀] (名) いたはしきと。あはれむべきと。ふびん。

あはれーあひい

あはれもの扮する役者の著るたんげん。——演劇の離子の名、笛と太鼓にて奏す。——もの [暴者] (名) 亂暴狼藉なる者。むはふもの。——酒色に狂へる者。だうらくもの。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あはれがひ [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうーあひき

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。  
あひうち [阿比] (名) 鷹に餌を増して與ふと。

あひきりワイ[間切]一名 竹の節と節との間を切り作りたる筈ひとよりの類。

あひくぐりワイ[合釘]一名 両端の尖りたる釘、板と板とを締

あひくせまひワイ[相曲舞]一名 一人同時に舞ふ曲舞。

あひくちワイ[合口]一名 獨りなき短刀。くすん

てぶ(七音)。話のよくあふと。よく話の合ふ

友人。一人と。

あひくちワイ[厭唇]一名 唇張りて齒あらはれ

あひこワイ[相子]一名 互に勝負のなきま

あひこワイ[相基]一名 隠事の依倚の相ひとしき

と又其人。

あひこワイ[逢事]一名 男女の共寝。

あひこワイ[台詞]一名 かねて定めおきて、

合圖に用ふる語。暗號。

あひこまワイ[間駒]一名 象棋にて、間の防禦に置く駒。

あひさげワイ[相提]一名 小印箱と駒籠と又は煙管筒と煙草

入とを、同時に腰に提ぐと。

あひさん[亜硫酸]一名 [化]透明なる白色片湯に溶け

ずれば藍(藍)の如き臭氣を發す、有毒にして、飲めば烈しく胃

腸、カタルを起し、心臓麻痺して遂に死す少量を服用して習

慣となるときは、却て身體を強壯ならしむべきと、工業用

又は醫藥用に供せらる。カリ元[亞硫酸加里液]

(名) [化]透明又は稍濁れる帶赤黄色の液、芳香性の香氣あり

亜硫酸鹽類の溶液に銅の溶液を加へて得たる綠色の沈澱

物、綠色の顔料と毒性質あり。

あひまワイ[相仕]一名 てつひてがはり。

あひまごくワイ[阿鼻地獄]一名 [佛]あび(阿鼻)。

あひまやぐワイ[相借家]一名 棟つぎきの長屋に、共に

借家して住むと。又其人。

あひまやぐワイ[合伏合袂]一名 兩方の板の厚さの半

つづを缺きとりて、連続(連続)に織き合はすと。

あひまよワイ[相性]一名 男女の生年を五行に配當し



【(一)口合】

たるいはゆる(性)の相合へると、即ち男女の性が木と火、水と木火と土、土と金、金と水となるをいふ、かくなれば其縁組は吉なりといふ。

あひまらひワイ[名] あひまらふと。あへまらひ。

あひまらひワイ[母(へ)へ] (他)は四 [名] 離接す。こたふ。

待遇すもてなす。 [名] 點撥す。とりあはず。

あひまらひワイ[名] [相知・相識] [目] 四 だがひに

ありあふ。まじはる。つきあふ。

あひまらひワイ[合印] (名) まちがひの起とらざるやう

に、其物に附くる目をもし。 [名] 軍中にて敵、味方のまざれぬ

めに、味方に附くるまらし。

あひまらひワイ[間白] (名) 徳川時代に、奥女中の禮服のうち

かづの下に著し白の小袖。

あひすみワイ[合用] (名) あらかじめ定めたる仕方によりて、

あひすりワイ[相拘] (名) 拘(こ)とつれだちて、拘(こ)に力を

添へ其惡事を相助すなま。

あひせきワイ[相關] (名) 相接にて、張出大圓のなかりしと

あひせき(二)ある大圓の中の次位のもの。

あひせき[浴] (他) 「あぶす」の説。

あひだワイ[間] (名) かねたれこれの中うち。なか、あはひ。

あひだワイ[間] (接) よりて。ゆら。

あひたワイ[相對] (名) 二人差向ひて事を行ふと。 [互]

に相談して事をなすと。 [一] 二 [相對事] (名) [あ]

たいにてなす事。 [訴] 訟事件。 [一] 二 [相對場] (名) [商] 相對

買賣の相場。 [一] 二 [相對畫] (名) 相畫の上にてなし

たる。 [一] 二 [ば] ばら [相對賣買] (名) [商] 賣主と買

主とが雙方相對にて契約する賣買。

あひたがらワイ[間柄] (名) おたがひさうほう。

あひたがらワイ[相互] (名) おたがひさうほう。

あひたがらワイ[間柄] (名) 彼(か)の關係。つきあひ。 [二]

つきあひ。えんぬ。

あひたぐワイ[間食] (名) 定められる食事の外に、物を食

あひたけびとワイ[相宴人] (名) 慶應の相伴人。 [其人]。

あひたけびとワイ[相太刀] (名) 互に太刀を打ち合はすと。又

あひたけびとワイ[相店] (名) あひたけびと。あひすみ。

あひたけびとワイ[間物] (名) あひたけびと。あひすみ。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫婦のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。

あひたけびとワイ[間夜] (名) 夫のあはれ夜。





あふみ あふみ

ひ、「ふゆあふみ」、「かもあふみ」等の総稱。①かざれの  
色目、表うす青にして、裏のうす紫なるもの。目録所の名葉  
の葉をとり合はせてあがせるもの。②かつら〔葵蓋  
(名)〕山城國賀茂神社の祭籠にあがつかる人々の、かもあふ  
ひを冠にさした。③徳川時代、奥女中などが四月一の酉  
の日に、頭に葵の花をかざしした。④くさ〔葵草(名)  
〕種、かもあふみ。⑤原野に自生す、草は根長にして地上を匍  
匐し、所々に根を生じ、微毛密生す、葉は圓形全縁にして長柄  
あり、葉腋より花梗を抜き、黄花を開く。⑥さ〔葵座  
(名)〕兜の八幡座。⑦すみれ葵草(名)〔種、莖菜、  
科〕の多年生草本、全體毛を生じ、葉は心臟形、春日、淡紫色の花  
を開き、果實は莢を結ぶ。⑧つば〔葵鈔(名)〕葵の葉四  
つ寄せ合はせてたる形に作りたる太刀の鈔。⑨ぼん〔葵  
盆(名)〕錠日ありて曲物(種)の縁をつけ、淡紫色に塗れる  
盆。⑩まづり〔葵祭(名)〕山城國賀茂神社の祭、陰曆  
四月中の酉の日を當日と定められ、中古最も盛んに行はれた  
り。⑪まめ〔葵豆(名)〕〔種〕いんげん豆の一種、種  
子の長さ四五分にして、葉は葵の如し。

あふみ〔鎧(名)〕〔足踏の義〕馬具の名、鞍より馬の脇腹の  
左右にさげ乗者の足を踏み掛くるもの、種  
類多し、各形を異にする。①がしら〔鎧  
頭(名)〕後の出ばりたる頭、さびつちあ  
たま。②がはら〔鎧革(名)〕鎧を敲  
に吊りさぐる草紐。③がはら〔鎧瓦  
(名)〕軒の盡頭(種)に奪く丸瓦、其形鎧に似たればいふ。④  
くはつ〔鎧鎖(名)〕鎧の形に似たる鎖、雜草を除くに用  
ふ。⑤すり〔鎧磨(名)〕馬の脇ばらのあふみにて磨  
る、邊の稱。⑥あふり〕一種、其製簡略にして、多く掃磨  
皮の九作りたるもの。



【みぶあ】

あふみ〔いた〕足踏板(名) 建築工事等に、足代に登り又は  
仕事をなすときの通路とする板。  
あふみおもて〔近江表(名)〕近江國より産出する鹽表、  
備後表よりは下品なり。

あふみ あふみ

あふみがき〔近江笠(名)〕近江國より産出する笠笠。  
あふみかぶら〔近江蕪(名)〕〔種〕かぶらの一種、塊  
根糊田にして大形、近江國大津邊より産出す。②  
あふみがや〔近江蚊帳(名)〕近江國より産出する蚊  
あふみさらし〔近江巾(名)〕近江國より産出する上品  
なる麻のさらしぬの。③  
あふみ、赤よりしん、近江商人(名) 近江國の前  
人、諸國を行商し、勤儉の名高し。  
あふみちりめん〔近江縮緬(名)〕ながはちりめん。  
あふみはつけり〔近江八景(名)〕近江國琵琶湖の南  
西岸にある八種の勝景、即ち比良の暮雪、矢橋の歸帆、石山の  
秋月、湖田の夕照、三井の曉鐘、堅田の春橋、粟津の晴嵐、唐崎  
の秋風、をいひ、近江(名) ぞさいふし。〔夜雨。〕  
あふむく〔仰(名)〕あふむくと。  
あふむく〔仰(名)〕あふむくと。  
あふむく〔仰(名)〕あふむくと。  
あふむく〔仰(名)〕あふむくと。  
あふむける〔仰(名)〕あふむくと。  
あふむける〔仰(名)〕あふむくと。  
あふむける〔仰(名)〕あふむくと。  
あふむける〔仰(名)〕あふむくと。

あふら〔油(名)〕〔化燃強しやすき〕一種の中性物質、おも  
に炭化水素の化合物より成り、通常温度にては水に溶解せず、  
動植物質より採り又は礦物を蒸溜して製す又地下より湧出  
す、點火、醫藥、醫料、化粧品、食用等用途甚だ廣し。①動  
あふら、ちち。②盡きて火消ゆ(句) ともしびの油つ  
きて其火ある義、即ち勢つきて止むにいと、又命つきて  
身死するにいと、又、業つきて煩惱滅するにいと。③掛  
ける(句) 仕事を間に、ひそかになまけあそぶ。④ま掛  
ける(句) 人をほめおだつ。  
あふら〔脂脊(名)〕〔化ちばう(脂肪)〕が乗る(句)  
①身體に脂肪が増す。②魚類などの季節に脂肪多く味美な  
るより、轉じて仕事などに興味を覺えて勢つていふ。③  
に盡き氷に鐘む(句)〔鐘鑼音に出づ〕脂も氷も共に一  
け易く、折角盡き又は鐘めし形跡の盡きえさすより、勢  
して其かひなきにいふ。④ま絞る(句) 人を苦しむ、懲ら  
す。⑤ま取る(句) 前條に同じ。

あふら あふら

あふらあげ〔油揚(名)〕揚油にてあげたる豆腐。  
あふらあし〔脂足(名)〕脂の多き性質の足。  
あふらあせ〔脂汗(名)〕脂のまじりたる汗。  
あふらいし〔油石(名)〕①色黄黒くして光澤ある石。②米  
の中に入まじれる油色の小石。③石炭。  
あふらいたいめ〔油痛(名)〕食品を油にてりりつけてやはら  
かくするところ、あふらいり。  
あふらいひり〔油飯(名)〕麻の實の油にてあげたる飯。  
あふらひりり〔油蒸(名)〕あふらいたいめ。①ぶらの如き色。  
あふらひりり〔油色(名)〕黄に赤みを帯びたる色。②ともしあ  
あふらうを〔油魚(名)〕〔動〕櫻鱈類の魚、體黄褐色にして銀  
珠色の横線あり、春鮭は黒色、他の鮭及鱒は黄色、南海に産す。  
あふらえり〔油刷(名)〕油繪具にて描ける畫、今日では  
西洋畫の主位を占むるもの。

あふらえのぐ〔油繪具(名)〕亞麻仁油を混和したる  
あふらかす〔油粕(名)〕動植物質より油を搾りたる殘滓  
①窒素、燐酸に富み、貴畜の肥料なり、家畜の飼料にも用ふ。  
あふらガス〔油瓦斯(名)〕石油に高熱を與へて發生せし  
めたる瓦斯、燈用瓦斯に混じて、其光力を増加するに用ふ。  
あふらがみ〔油紙(名)〕油を引きたる紙とゆうがみ。①  
に火の附いた様(句) もえたち易き又ははらだち易きに  
いふ、またべらとえやといふ。  
あふらがめ〔油瓶(名)〕油を入る瓶、瓶、あがらつば。  
あふらがや〔油茅(名)〕〔種〕莎草科の多年生草本、水  
邊に自生す、莖高四尺許、葉は狭長にして黄綠色を帯び、滑か  
らして油の臭を有す、秋、葉乾しに花穂を抜き、茶褐色の總狀  
あふらからかた〔脂體(名)〕脂肪の多き身體。①花を綴る。  
あふららさく〔油第二(名)〕〔種〕菊科の多年生草本、山野に自  
生す、莖高三四尺、枝多し、葉は菊に似て淺綠色、缺刻深し、秋  
日、枝梢上に黄色の舌状花を發生す、いはやくさのきき。  
あふらきつちや〔油(名)〕〔動〕蠶類の、油の色をなしたるもの、  
蠶繭の如き聲を出して鳴く。  
あふらざり〔油桐、罌子桐(名)〕〔種〕大戟科の落葉  
喬木、暖地に栽培せらる、高さ二丈許に達す、葉は往々掌狀に



分製す、五月頃、帶黄白色の花を開く、花は単性、木材は種々の用に供し、種子より桐油を製し、樹皮は染料に供せらる。やまざり、いぬざり。

あぶらぎ(自、ら、四) 油にてきらく。

あぶらけ(油氣) 油の気が油の成分。

あぶらけ(油揚) 名 あぶらあげ。

あぶらこ(油子) 名 (動) あゆなぬ。

あぶらごき(油胡) 名 油を引きたる麻絲。「する胡麻」

あぶらごま(油胡麻) 名 種々の油多くして黄色を呈

あぶらさし(油差) 名 (動) 油を油皿に注ぐに用ふる

具 あぶらつき。●車の軸又は機械の多く摩擦するところに油をさす金屬製の器具。

あぶらさし(油皿) 名 樽中の油の量をはかる尺。

あぶらさし(油火) 名 燈油を盛てて火をとぼす小皿。

あぶらさし(油芝) 名 種 あぶらがや。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。

あぶらさし(油染) 名 油のまみ。



[ぎめちらぶあ]

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

あぶらづつじ(油郷) 名 (種) 石南の科の葉を種木

原産地に見るところのものにして、前題は褐色、後題は肩状にたまたみ淡褐色、脚は稍扁平にして歩行極めて迅速、闊るれば悪臭を放つ。(雲霧)。(ろ)ありまき。●劇場などに、無料にて立ち入りて、妨げをなすもの。●遊郭のひやかし。

あぶらめ(名) 油持(名) 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。

あぶらもち(油持) 名 昔時、貴人の外出のとき、其車輛に差す油を持ち行きし従者。



[泥障]



あま「尼」(名) (梵語 Anih) (佛)世を捨て頭髪を剃りて、佛門に入らたる女に云く。 (婦)人をのりして呼ぶ稱。

アマ「亞麻」(名) (ラテン語 Amantia) (植)亞麻科の類。培草本、莖の高さ二尺乃至四尺、細き葉と帯紫色の花とを有す、莖より麻を採り、種より亞麻に油を搾り、用途多し。——と



【麻亞】

〔亞麻絲〕(名) 亞麻の纖維を採りて紡ぎたる絲。

あま「雨」(接頭) 或語に冠して雨の意を表はす語。

あま「雨」(接頭) 或語に冠して甘き意を表はす語。

あま「あし」(雨脚) (名) 雨のふり來りふり往く狀長。 (局) 所の降雨を遠方よりながめ望みていふ。

あま「あひ」(雨間) (名) あまま。

あま「うけ」(雨打) (名) 上を叩きたる具。云々。ばな。

あま「うち」(雨打) (名) あまうちさ。——さきはり「雨打際」(名) 軒端の雨のまたり落つところ。

あま「うり」(甘瓜) (名) (植) まくはうり。

あま「えたる」(嬌) (自) 「あまめ」の訛。

あま「おさ」(雨押) (名) 建築物の雨の漏り易き接合部の上部に、勾配附きに設けたる板。

あま「おち」(雨落) (名) あまたちおち。——し「雨落石」(名) 雨落の處に置きて、雨滴のために地の凹むを防ぐ石。——びようあ「雨落拍子」(名) 一定の時間をおきてうつ變化なき拍。

あま「おほひ」(雨霽) (名) 雨のおづを防ぐために、ものあまか「益溜」(名) 和船の邊をたまりおくところ。の上を覆ふもの。

あま「かくれ」(雨隠) (名) 物の陰に立ち寄りて雨を避くること。木陰に「したるやうに」。「まがけりくにがけりて」。

あま「がけ」(雨傘) (名) 雨天に用ふるからかさ。

あま「かぜ」(雨風) (名) 雨氣ある風。降雨を伴ふ風。

あま—あまか

あま「がつ」(天兒天倪) (名) 古昔、幼兒の傍に置き、これにわざはひをうつし負はすためにとて用ひし人形。其さま「はふ」ここに似たり。

あま「ガツバ」(雨合羽) (名) 雨をふくためた衣服の上に著るもの。多くは油紙につくる。



【つがまあ】

あま「かはり」(甘皮) (名) 樹木果實などの内部にあたるすあま「がはり」(雨皮) (名) のりものなどの雨おほひ。

あま「かへに」(天紅) (名) ゆふやけの空の赤き雲。

あま「かへる」(雨蛙・樹蛤) (名) (動) 蛙の一種。小形にして色は淡緑色又は茶褐色、居所によりて體色變ず、指長、末端に圓形の吸盤を具し、巧に樹木の枝葉に繚繞す、叫聲ありて雨の降りんとする前によく鳴く。

あま「かほり」(尼顔) (名) 粉飾せざる顔容。すがほ。

あま「かへ」(阿瑪港・亞媽港・天川) (名) 支那廣東省澳門舊稱阿瑪港より舶來したりといふ上品の珊瑚。

あま「き」(甘木) (名) (植) かんざう。「えやうぞく」。

あま「き」(雨衣) (名) 雨のふる日に著て外出する衣服。あま「きみ」(尼公) (名) 高貴の女の家來せし人の尊稱。

あま「きり」(雨霧) (名) 霧の降るが如き濃き霧。又、後に雨あま「きり」(雨霧) (名) 雨のふる外に出用ふる雨を防ぐ具。

あま「きり」(甘草) (名) (植) かんざう。あま「きり」(雨霧) (名) 雨の降れるが如き濃き霧。又、後に雨あま「きり」(雨霧) (名) 雨のふる外に出用ふる雨を防ぐ具。

あま「きり」(天草石) (名) あま「きり」(雨霧) (名) 雨の降れるが如き濃き霧。又、後に雨あま「きり」(雨霧) (名) 雨のふる外に出用ふる雨を防ぐ具。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あま「きり」(天草底) (名) 肥後國天草島より出づる上品島に産す。

あまか—あまき

産する陶石質の最良なるを以て聞てゆ。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あま「き」(天草底) (名) 肥後國天草島より産する陶器。多くは茶器、花瓶等にして、頗る雅緻あり。

あまき—あまき

あまぎ—あまた

器に似て、脊に赤茶色の羽あるを異なりとす。

あまたぎけ【甘酒・醴】(名) 醴の部に麹を入れて醴したる飲料、一夜にて成熟す、味甘し。ひとよきけ。いちよきけ。

あまたざはり【雨障】(名) 雨にさまたげらして、家を出ぬとよつねする君は。

あまたさ【へ】【剥】(副) あま、さへ。

あまたざらし【雨障】(名) 覆ふものなく、雨にぬるゝがままにあると。雨にさらす。

あまたし【甘】(形) 一 砂糖・糖などの味あり。二 塩は氣すくなし。三 によし。のろし。四 まびしからず。ゆるし。五 心に逆はず。ひりりまいになる。

あまた煮し【餘肉】(名) 溜疣などの如き贅肉。

あまた煮たく【雨支度】(名) 雨天に外出するときの用意。

あまたたり【雨滴】(名) あまたれ。

あまた煮ほ【甘鹽・淡鹽】(名) 軽く鹽に漬くると。

あまた煮めり【雨濕】(名) 雨のため濕氣を帯ぶと。

あまたしもの【餘物】(名) 不用になりて餘したるもの。世の中よりもあまたれたる人。

あまた煮よう【煮】(動) あぶら煮やうぞ。

あまた煮ようぞく【雨装束】(名) あまた煮うぞく。

アマチア【亞麻女郎】(名) 【動】燈籠の一種、前翅は赤褐、後翅は赤色にして黒紋あり、幼蟲は褐色の毛蟲にして、亞麻及葎科植物の害虫なり。

あまたす【餘】(他、さ) 四 あまるやうにすのこす。アマチア【亞麻女郎】(名) 【動】燈籠の一種、前翅は赤褐、後翅は赤色にして黒紋あり、幼蟲は褐色の毛蟲にして、亞麻及葎科植物の害虫なり。

あまたせ【尼前】(名) 尼御前の略、尼を敬ひて呼ぶ稱。

あまたそ【雨装束】(名) あまたれ。

あまたそ【尼削】(名) 女衆の髪を、額程にて切りそろへたるもの、中古の尼の風俗に基けるよりいふ。みよしーほどにてゆらゆらと。

あまたそ【雨注】(名) 雨だれの落つと。

あまたそ【天聲】(自、ら) 空高くそびゆ。

あまた【許多】(名) 數多く。たんと。と。さ。り。お。び。た。だ。し。く。

あまた【許多】(名) 數多く。たんと。と。さ。り。お。び。た。だ。し。く。

あまた【許多】(名) 數多く。たんと。と。さ。り。お。び。た。だ。し。く。

あまた【許多】(名) 數多く。たんと。と。さ。り。お。び。た。だ。し。く。

あまた—あまつ

アマター【Arcturion】(名) アマチュア。

あまただ【甘鯛・方頭魚】(名) 鰻鱈類の魚、體形側扁、鰓骨隆起、頭部稍鈍角形、體色は春部紅にして、温淡の斑あり、腹部白し、肉白く味美、我國到る所の近海に産す。

アマだ【亞麻】(名) 【植】旋花科の寄生植物、亞麻の幼茎に寄生して體ひつき、遂にこれを斃す。

あまただ【天玉】(名) 【説】こはく(琥珀)。

あまただ【雨滴】(名) 雨をたたり。あまたれ。

あまただ【甘池】(形) 一 過度に甘し。

あまただ【雨滴】(名) 軒などよりたたりおつるあまた。

あまただ【おち】(動) 雨滴落つ。あまたれ。

あまただ【石を穿つ】(句) 枚乗の文に「泰山之鑿穿、石とあり」力微なりとも、度を怠めれば、終に功を成す。つぎへいふ。

あまたち【甘茶・土常山】(名) 【植】虎耳草科の落葉灌木、山地に生ず、高さ三四尺、葉は對生し、卵圓形にして鋸齒あり、六月頃、梢上に、あざさぬの花に似たる紫繖花を繖る、初は青色なり、後に紅變す、此植物の莖葉を煎じたる汁を亦「あまたち」と稱し、四月八日の遊藝會に用ふ。きあまたち。

あまたち【甘茶・土常山】(名) 【植】胡蘆科の蔓生草本、原野に生ず、卷鬚を以て他物に倚り登る、葉は複葉にして粗なる鋸齒あり、秋日、莖腋に絲狀の花枝を抽き、數多の細花を繖る。つぎへいふ。

アマチュア【Amateur】(名) ものずき。好學家。

あまたち【天津風】(名) そらの風。

あまたち【天津神】(名) 天にまします神。

あまたち【天津國】(名) 天上に在りといふ國土。

あまたち【剝】(副) あるが上に更に加へて。おまけに。

あまたち【天津】(名) 天上のものなりといふ微塵。うののそら。うらやうてん。

あまたち【天津】(名) 天上のものなりといふ微塵。うののそら。うらやうてん。

あまたち【天津】(名) 天上のものなりといふ微塵。うののそら。うらやうてん。

あまたち【天津】(名) 天上のものなりといふ微塵。うののそら。うらやうてん。

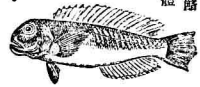
あまたち【天津】(名) 天上のものなりといふ微塵。うののそら。うらやうてん。

あまたち【天津】(名) 天上のものなりといふ微塵。うののそら。うらやうてん。

あまたち【天津】(名) 天上のものなりといふ微塵。うののそら。うらやうてん。

あまたち【天津】(名) 天上のものなりといふ微塵。うののそら。うらやうてん。

あまたち【天津】(名) 天上のものなりといふ微塵。うののそら。うらやうてん。



【ひだまあ】

あまつ—あまな

あまつ【天津罪】(名) 天上にて素戔嗚尊の犯したまひし罪故に、薄理(薄理)・薄放(薄放)・細理(細理)・自刺(自刺)・逆刺(逆刺)・床戸(床戸)等の罪。

あまつ【雨燕】(名) 【動】雀燕類の鳥、普通の燕よりも大形、腹部は白色、尾短くして分叉せず、夏日、群をなして我國の深山に棲みて懸崖に營巢し、秋に至りて兩方へ去る。

あまつ【天津】(名) 天鳥の御位。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。

あまつ【天津】(名) 天の水。あめ。



あまよーあみ

すべくして現實ならざるものに譬へいふ。「影みえぬ君は  
なれや」。一の星句。前條に同じ。

あまよけ「雨遊」(名) あまおほひ。あまやどり。

あまよそひ「雨装」(名) 雨をふせぐよそひ。

あまよるこ「雨喜」(名) ひでりつづきに、折りよく雨ふ  
りたるを喜びて祝ひをなす。

あまり「餘」(名) あまんと。あまりたるもの。こり。――  
もの「餘物」(名) 不用のもの。のこりもの。――物に福  
あり句。世事はとかく豫期に反し、人のとりのこしたる  
方に、却て遺利あるをいふ。

あまり「餘」(副) 法外に。過度に。

あまりさ「へ」(剩) (副) あま。さ。へ。――ありて行くべき年  
あまりよう「雨龍・蛟龍」(名) 龍の類、角無く尾細く、とか  
げの形したるものといふ。

あまら「あまら」(餘) (自ら) 充ちて残る。程を過ぐのこる。

アマルガム「Amalgam」(名) 【化】水銀と他の金属との合  
金。――ほうり。――法【名】 【化】「アマルガム」より水  
銀を蒸溜し去りて、金属を析出する。

あまをとめ「天少女」(名) 天人の少女。

あまをとめ「蟹少女」(名) 海人の少女。

あまをぶね「海人小舟」(名) いさりぶね、漁船。【動】  
腹足類の貝、形は「あさり」に似る、介殻は内外白色にして、  
縁は紫紅色を呈す。西海に産す。

あまをぶね「海人小舟」(枕) 「はつ」に冠する枕詞。

あまをぶね「甘」(自) さ(體) ころに足れりとす。ま  
んぞくすやらずんす。

あみ「網」(名) 魚類又は鳥類を捕ふるに用ふる具、絲を打  
連ひ網の結びて作れるもの、其形種々あり。【絲又は針金  
などを網の目の如くに編み結びて作りたるもの】。【下を捕  
ふる手段。】(因) 法令。刑罰。――が「下り」(句) 刑罰の下の  
にいひ、又、警吏に課せらるゝにいふ。――舟舟の魚を捕  
らす句(史記に出づ) 大罪人の却て法網を見る、にいふ。

あみ「蟹・糠蝦」(名) 【動】蟹類の節足動物、形状、構造

あみーあみか

共に蝦の幼虫に類似す、腹部第六環節の内枝に觸  
鬚を有するを以て著名なり、多く泥海に産す、ま  
はからなととなして食用に供せらる。あみえび。  
ぬかえび。【蟹人。

あみ「Ami」(名) 友人。朋友。【蟹人。

あみ「あみくつ」(編上靴) (名) 甲の前  
面の紐を編みあげ、足に結びつくる靴。

あみ「あをさ」(網石蓴) (名) 【植】あを  
さの一種、體の表面に細孔ありて網の如し、琉球に産す。

あみ「あんどん」(網行燈) (名) 方柱形の鐵骨に鐵網を覆ひ  
たる行燈、前方を開閉し得るやうに作る。

あみ「い」(網石) (名) 網のおもしろの石。【地】古生代の  
石炭紀等に多き苔類の類。

あみ「いた」(編板) (名) 古昔、罪人をせし乗物。(復興)。

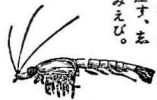
あみ「いと」(網糸) (名) 網を編むに用ふる絲。

あみ「うち」(網打) (名) 投網を以て魚を取ると。又、其人。

あみ「えび」(網蝦) (名) 【動】あみ(蟹類)。

あみ「えり」(網餌) (名) えり(餌)。

あみ「おろし」(網卸) (名) 新調の網を始め、使用するもの。  
あみ「がさ」(編笠) (名) 編みて作りたる笠、おもに皆なとを  
用ふ。――がひ「編笠貝」(名) 【動】前鰓類の貝、介殻  
異なり、形編笠に似。――そう「編笠草」(名)  
【植】天竺草科の一年生草本、田野に自生す、莖の高さ一尺  
許、葉は互生し、覆ふの葉に類似す、七八月頃、葉腋に淡褐色  
の雌雄花を開く、若し大形にして編笠の状をなす。えのきや  
さ。――たけ「編笠形」(名) 【植】菌類の一種、溼地に生  
ず、頭部は中空にして、椀圓形又は圓錐形をなし、褐色にして  
蜂窩の如く、柄は二三寸にして中空なり。――もち「編笠  
餅」(名) 菓子の名、えんこを丸く薄く延ばし、中に餡を入  
れ、二つに折りたるもの。――ゆり「編笠百合」(名) 【植】  
百合科の多年生草本、支那の原産にして、園圃に栽培せら  
る、莖の高さ一二尺、葉は狭長にして互生す、三四月頃、葉腋  
に花梗を地さき、花を開く、花は鐘状をなし、外面は淡黄色  
にして、内面は淡洋緑線に紫色細點を交へたる網状紋を呈す、



あみかーあみた

觀賞用又は藥用に供せらる。はいも。(貝母)。  
あみがひ「網貝」(名) 【動】苔蟹類の動物、群體をなし  
て生活す、群體共有の骨格は直立して、許多の孔を開通し、其  
狀網の目の如く、白色又は暗紅色、海底又は淡水に産す。

あみ「とら」(網倉) (名) 漁業用の網を蔵する倉、溼氣と鼠害  
とを防ぐため、床を高くし壁を二重にす。

あみ「こ」(網子) (名) 地引網を引く。

あみ「さいく」(編細工) (名) 絲を編みて靴下、手袋等種々  
のものを造ると。又、其細工物。

あみ「さ」(蟹蝦維魚) (名) 【動】あみ(蟹類)。

あみ「さ」(網刺) (名) あみす。

あみ「ま」(網商菜) (名) 【植】羊齒類の一種、四國・臺灣に  
産す、莖の高さ一尺許、毛茸を生ず、葉も一尺許にして、葉腋  
は多く分岐して網状をなす。

あみ「あやく」(網杓子) (名) 金網にて造れる杓子。

あみ「シャツ」(網樞子) (名) 網目に作りたる「シャツ」。

あみ「ジュパン」(網樞柱) (名) 網目に作りたる樞柱。

あみ「す」(浴) (他) (下) あぶす。

あみ「す」(網結) (名) 網を作ると。又、其人。――はり  
【網結針】(名) 網を作るに用ふる針、竹・木又は鉄の骨な  
どにてつくる。あみはり。

あみ「す」(かご) (編拾籠) (名) 中央を編みて周囲は編みか  
けのままなる竹籠、魚を煮るとき肉のくづれたために用ふ。

あみ「そ」(網陀) (名) 網を作る材料となす麻絲。

あみ「だ」(阿彌陀) (名) 【梵語】Amitābha、無量光明と譯  
す。【佛西方淨土にありといふ佛の名號、眞宗淨  
土宗の本尊にして、無量壽佛、  
無量光佛、無碍光佛、盡十方無  
碍光如來等の異稱あり。】あ  
み車。【あみだかぶり。】  
【あみだの輪の周囲の木、これに輪金を嵌む。】――  
が「かぶり」(阿彌陀被) (名) 被褥類を後頂にすらし  
てかぶると。――く「阿彌陀籠」(名) 一種の遊戯、金



[[(-)だみあ]







あやしむは法が怪(他、ま四) あやしと思ふ。ふふぎとなす。たがふ。いぶかる。

あやすす(他、ま四) 血又は汗などを出だす。ながす。

あやすす(他、ま四) 預兒を受けてあやなす。

あやすぎ(文、形、名) ①植(種)の一種、葉は杉に似て裏白し。②杉の薄板を網代に編みたるもの、垣などに用ふ。③人の字の如き形を連ねたる模様、刀剣の心(刃)又は三枚の扇の裏などにほりつくもの。

あやすげがき(綾菅笠(名) 綾に編みたる菅笠。

あやだけ(綾竹(名) ①引忍に構たへて引綱をかくる竹。②織機(の)の経糸を整ふため、綾糸の間に入る。③昔時、田舎の盆踊などに、婦人の持ちて踊りし竹、色紙を巻きて其端にふきを下げたるもの。

あやつ(彼奴(代) ああやつ。かやつ。

あやつ(文、観(名) ①植(種)木理の綺麗なる観。

あやつ(操(名) ①あやつと。②あやつりにんぎやう。

あやつ(探座(芝居(名) あやつりあはぬを興行する劇場。①志ばあ(探芝居(名) 操人形を音曲に合はせて演藝する劇場。②にんぎやう(探人形(名) 人形に絲をつけ、かげりあやつりて、所作をなさしむる演藝。

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやつ(綾取(名) ①かかげありて、物をささまはたりかきて物を動かす。②かかげありて、物をささまはたりかき

あやにしき(綾錦(名) ①綾と錦と。②紅葉などのきれいなる状の眺望にいふ。③植(種)紅藻類の海藻、諸國の沿海に産す、紅色にて美麗なり。

あやぬの(綾布(名) 綾かおりのぬの。

あやの志(綾布(名) 古昔、織部司にて機織の文(の)の事を掌りし職(職文師)。

あやはがき(文、羽笠(名) 櫓の薄板を網代に編みてつくりたる笠、あやまぶしの披りなり。

あやはた(漢織(名) 漢土より渡來したるはたあり。

あやはぶた(綾羽二重(名) 綾織にしたる羽二重。

あやひがき(文、槍垣(名) 槍の薄片を以て編みたる垣。

あやふ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやぶ(危(名) 除服の中袋の日柄、家作・種まき・婚禮・酒送等には吉、高きに登り舟に乘るには凶。

あやまり(誤(名) ①まそんじ。②わび。③志(ようも)ん(誤證文(名) わびやう。

あやまる(誤(他、ら四) ①仕損じて筋道たがす。まそんじまそこなふ。②罪を謝す。わびをなす。③心亂る。くるふ。御心もあやまりて。

あやむ(怪(他、ま下二) あやしく思ふ。不審をたす。あやむいぶかる。

あやむ(危(他、ま下二) あやふくす。

あやむ(綾席(名) 織物にてつくりたるむし。

あやめ(文、女(名) 裁縫にたくみな女。

あやめ(文、目(名) もやう。色彩。①わちち。差別。②どり(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。

あやめ(文、目鳥(名) ①動(ほ)ととき。



[形人ヤムヤア]

あやしーあやに

あやにーあやま

あやまーあやめ



屬(種、類)。●鏡。—どうふ(粗金豆腐)(名)料理の名、豆腐を酒と醤油にていりつけたるものに、山椒の葉又は黄をすりてまぜあはせたるもの。—の(粗金之)枕「つらに冠する枕詞」

あらかかはり(粗皮)(名)●樹木の表皮。木皮。●獣類の上皮。毛皮。●穀粒の外皮。のみがら。「たるままの壁」

あらかがみ(粗壁)(名)まだ中塗をせざる壁。あら土をぬりあらかがみ(荒神)(名)あきつかみ(現神)。●品料理。しき神鏡。

アラ・カルト(Alacarte)(名)洋食にて、選潔自由なる一あらかん(阿羅漢)(名)梵語阿羅漢(應供と譯す)佛

見思の惑を斷じて再び三界の生を受けず、智斷の功德已に具足して、天人の供養を受くる覺者の位地。—カ、ワ(阿羅漢果)(名)佛阿羅漢の證果。

あらかき(新墾)(名)あらたに開墾したる。—だ(新墾田)(名)あらたに開墾したる田。—はり(新墾治)(名)あらたに田を開墾する。

あらかき(荒城・殫)(名)貴人の死體を假に埋葬しておく處。—の(みや)殫宮(名)あらかき(荒城)。

あらかき(荒氣)(名)亂暴なる氣質。あらかき(新木)(名)あたらせるまき材木。

あらかき(粗木)(名)伐採したる木の材木。アラキ(阿刺吉)(名)オランダ語Arabia(古昔、粗木より舶來したる「アルコール」性の飲料、もと南方亞細亞にて波斯(ペルシア)の蜜を醱酵して製したるもの、埃及、印度地方にて常

あらかき(荒儀)(名)あらあらしきふるまひ。—用せらる。あらかき(荒木田土)(名)武藏國荒川沿岸の荒木田

原より出づる土、墾下又は屋根の瓦下にも用ふ。あらかき(荒肝)(名)きまだましひ。どうよう。

あらかき(修行)(名)佛修行者などの扱しふるまひを渡さずなす修行。あらかき(散)(自、か下二)問あく。あらかくなる。

あらかき(荒)(自、か下二)荒れ立つ。さわぐ。あらかき(荒草)(名)荒野に生ふる雜草。

あらか—あらく

あらくし(粗櫛)(名)齒のあらか櫛。あらくまし(荒)荒(形二)あらあらし。あらくけなし。あらくし(荒氣)(名)あらかしきさま。

あらくる(荒)(自、か下二)あらあらしくなる。あらくる(荒)荒(形二)あらあらしくなる。あらくる(荒)荒(形二)あらあらしくなる。あらくる(荒)荒(形二)あらあらしくなる。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。あらくる(荒)荒(形二)あらあらし。

あらく—あらし

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。あらし(粗)粗(形一)あらあらし。

あらし—あろそ



だし「洗出」(名) 燻五煙の表面を、漆喰塗などにせず、其ま  
まにしておく。——「だし」洗出(名) 質情を飽く又は灰  
深く穿鑿すること。——「だし」洗土(名) 地。白色又は灰  
色の土、多くは硫酸鐵物の分解して生じたるもの。——のり

「洗海苔」(名) 植「甘海苔」の變種、出雲國より産す。——  
はり「洗張」(名) 舊き布を洗濯して、板にはりつけ皺を延  
ばす。——「はん」洗盤(名) 物をあらふに用ふる盤。

「びん」洗壺(名) 化学の實驗にて、洗滌物又は瓦  
斯を洗ふに用ふる硝子壺。——

や「洗矢」(名) 洗滌に刷毛(毛)を  
取附けて、鍍金を試ふに用ふる銅  
製の長棒。こみや、糊杖。——よ

ね「洗米」(名) 神などに供ふるため、清く洗ひたる白米。せ  
んまい。かまよね。

アラビアうま「亞刺比亞馬」(名)「動」アラビヤ産の  
馬馬匹中最も優秀なる體格を具へたるものにして、頭小さく  
額廣く、丈一五〇乃至一五五厘米、最も乘用に適す、生長稍遅  
緩なれど、長壽を保つ。

アラビヤアム「亞刺比亞護膜」Gum Arabic(名)  
「ム」一種の樹、アラビヤ及東印度等に産する。「ア  
ム」層の植物より採取したる白色乃至赤褐色の固體、冷水  
温水中に容易に溶解して粘狀となる、種々の用に供せらる。

アラビヤアム「亞刺比亞數字」Arabic figures  
(名)「數」1・2・3・4・5・6・7・8・9・0の數字、  
「アラビヤ」に始まりし故に此名あり。

あらひいと「洗絲」(名)粗織の絲。——おどし  
「洗絲絨」(名) 粗織の絨毛の名、粗織の絲にて織したるもの。  
あらひがは「ワシ」洗革(名) 白く柔かなる皮。——お  
どし「洗革絨」(名) 粗織の絨毛の名、洗革にて織したるもの。  
あらひじり「荒聖」(名) あらあらしし僧。  
あらひしほ「粗醬」(名) 粗製のひしほ。  
あらひとがみ「現人神」(名) 現世に於て人の形を成し  
たまふ神、即ち天皇を稱し奉る諸神。靈驗のあらたかなる神。



【んびひらあ】

あらびる「荒」(自)「あらぶ」の訛。  
アラビヤ「Arabia」(名)「化」無色硝子様の化合物、「アラ  
ビヤム」の主成分なる。

あらぶ「荒」(自)「あらぶ」の訛。  
アラビヤ「Arabia」(名)「化」無色硝子様の化合物、「アラ  
ビヤム」の主成分なる。

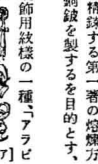
あらぶら「荒」(自)「あらぶ」の訛。  
アラビヤ「Arabia」(名)「化」無色硝子様の化合物、「アラ  
ビヤム」の主成分なる。

あらぶら「荒」(自)「あらぶ」の訛。  
アラビヤ「Arabia」(名)「化」無色硝子様の化合物、「アラ  
ビヤム」の主成分なる。

あらぶら「荒」(自)「あらぶ」の訛。  
アラビヤ「Arabia」(名)「化」無色硝子様の化合物、「アラ  
ビヤム」の主成分なる。

あらぶら「荒」(自)「あらぶ」の訛。  
アラビヤ「Arabia」(名)「化」無色硝子様の化合物、「アラ  
ビヤム」の主成分なる。

アラベス「Arabes」(名) 裝飾用紋様の一種、「アラビ  
ヤ」民族の刺意に起りて、直線、動物  
及唐草等を取りあはせたるもの。  
あらぼとけ「荒法師」(名) 佛ありまやうりやう。  
あらぼとけ「新佛」(名) 佛ありまやうりやう。  
あらぼね「骨」(名) 腫やれたる骨、枯骨。  
あらぼねをり「荒骨折」(名) あらかせき、荒仕事。  
あらぼり「粗彫」(名) 彫刻にて、あらごなしの上を、小刀又  
は鑿にて、粗末に彫りあぐる、又、其彫刻物。  
あらまき「荒巻」苞苴(名) 藁又は竹の皮などにて、魚を  
包みて贈物となすもの。つと。  
あらまき「疎柱目」(名) 疎き木理の柱目。  
あらまし「心」(名) 心あて。心だのみ。——「ごと」豫事  
(名) 心たのみとしたる事。  
あらまし「荒」(形)「あらし」。  
あらまし「副」(名) あらかた、およそ。  
あらまし「豫」(他)「あらまし」心あてにす。豫期す。  
あらみ「新身」(名) 新規にきたる刀——「だめし」新  
身試(名) 新身の切味をたためす。  
あらみかけ「荒御蔭」(名) あらみさき。  
あらみさき「荒御前」(名) 男女の仲を裂く神。



【クスベアア】

あらみたま「荒御魂」(名) 荒くしてたけたけしき神の御  
靈相魂行(名)の對。  
あらむら「荒武者」(名) あらみさき。あらかまきざ。  
あらむら「粗達」(名) 目のあらき筈。  
あらめ「粗目」(名) 目のあらきと。  
あらめ「荒布黒菜滑藻」(名)「植」海藻類の海藻、莖の  
長さ一尺乃至三尺、端末に扁平なる主葉を出だし、更にこれ  
より短多の副葉を生ず、葉面滑かにして縦に皺あり、色は黒  
褐色にして、長さ四五尺に達す、温暖なる地方の稍深き海に産  
す、食用、肥料に供せらる。——のふくめ「荒布」(名)  
料理の名、荒布をゆて水分をせり、醃漬を入れて砂糖と醬油  
とにて煮たるもの。——こんぶ「荒布昆布」(名)「植」  
昆布の一種、北海道に産す、全體のちぢみたるもの。  
あらめおどし「荒目絨」(名) 粗織の絨毛の名、目をあらく  
三色におどしたるもの。  
アラモト「編」(名) 鳩(く)ときに碎けたる米。  
アラモト「新物」(名) 新規のもの。「の類、小間物の對。  
あらもの「荒物」(名) 稍粗大なる家具、即ち、帶、腰取など  
あらもの「荒者」(名) 亂暴もの。あはれもの。  
あらや「阿頼耶」(名)「梵語」Alaya、藏と譯す。「佛」八識  
の二、一た意識したる一切諸法の種子を含蔵す、萬法緣  
起の本となるもの。

あらやすり「粗織」(名) めのあらまやすり。  
あらやま「荒山」(名) 荒れたる嶮岨なる山。  
あらゆる「所有」(名) 荒れたるのこりなく。  
あららか「荒暴」(名) あらきさま。  
あららき(名)「植」(い)まや、まんにく。(う)いちぬ。  
あららき(名)「派」(名) 萬葉集に含まれたる精神を高麗  
なる現代短歌派の一派伊藤左千夫、齋藤茂吉、島本赤彦等を  
其魁導者とす。  
あらりより「荒療治」(名)「療治」人を入殺すこと。  
あられ「骸」(名)「地」露の水分子意欲に水結して、地上に

あらひーあらひ

あらひーあらひ

あらひーあられ





ありまーありわ

ありまざ [在方] (名) (應水の頃、加茂在方) のト占に名ありしより起こるといふ。うらなひま。占者。

ありまぞう [有馬草] (名) 【種】蘭科の多年生草本、山林に自生す。莖高二尺、葉は無柄にして長橢圓形をなし、基部は莖を包む。五月頃梢上に數箇の花を開く、花は穂状をなし、黄色又は白色にして光澤あり。さんらん。

ありまづ [有馬筆] (名) 一種の筆、筆毫を筆管より出入するやうに作り、又は大小の筆管を入手に作る。攝津國有馬より産出す。

ありまきりゆう [有馬流] (名) 劍術の一派、足利時代の末葉に起り、有馬乾信を祖とす。

ありもどく [有戻] (自、か四) 世にありて人に逆らふ。一まじう思ひにたる世の中に。

ありや (感) あれ。あれは。

ありやこりや (名、副) あれなるべきものとこれなるべきものとを顛倒するさま。あへこ。はんたい。

ありゆうざん [亞流] (名) たぐい。ともがら。

ありゆうじや [有様] (名) ありさま。様子。ままと。ありて。

アリル [Alil] (名) 【化】亜、芥子(子) などの中に存在せる炭水化合物多くは劇臭を有す。

ありわたる [在渡] (自、ら四) 存在して年月を経。生きながらふ。かくかはしつ。一。

ありわづらふ [在煩] (自、は四) 世にながらふに難む。一。世を厭ふ。い。世にありわづらひ官位人よりは短し。

ありわーあるき

ありわぶ [在詫] (自、は上) 居りかぬ。すみわぶ。京にありわびて。

ある [一] (接頭) 確定せるものを表はす語。

あるがうへに [副] なは其上に。かてて加へて。

あるかきり [有限] (名、副) ありたけ。

あるかなかに [副] 数多くある中にて。

アルカリ [Alkali] (名) 【化】金属又は「アンモニウム」の水酸化物、アルカリ性反應を呈し、酸と作用して鹽類をつくり、水に溶解し易し、水酸化「ナトリウム」、水酸化「カリウム」等これなり。一。きんぞく「亞爾加里金屬」(名) 【化】軟弱。かくして軽き白色の金屬「ナトリウム」「カリウム」「ソーウム」「セシウム」「ルビジウム」等これなり、其水酸化物は最も強きアルカリ性を有し、安定なる鹽類を作る。一。せいはいんのうけい「亞爾加里性反應」(名) 【化】赤色「リトマス」溶液又はこれに類似せる植物色素を、青色に變ずる作用。一。とるいきんぞく「亞爾加里土類金屬」(名) 【化】「カリウム」又は「アルミニウム」に類似する金屬、其水酸化物は「アルカリ」性反應を呈すれど、水に溶解すると少量なし、「カルシウム」「ストロンチウム」等これなり。

アルカロイド [Alkaloid] (名) 【化】植物中に存在する鹽素化合物、鹽基的作用をなす。種類甚だ多し、多くは劇しき毒物あるき。一。有用なる鹽類なり。

あるき [歩] (名) あゆみ。ありき。こづかひ。つかひ。

あるき [歩] (副) あるまながら。あるまじつ。一。

あるき [歩] (名) ありきぞめ。一。ぶり「歩振」(名) あるくやうす。あるく風姿。

アルキル [Alkyl] (名) 【化】炭素と水素とよりなる「アルコ

あるくーあるす 一ル基の總稱、「メチル」「エチル」等これなり。

あるくーあるす

あるく [一] (自、か四) あゆむ。

あることなきこと [有事無事] (名) 眞偽とりまぜていふ

アルキル [Alkyl] (名) 【化】炭素と水素とよりなる「アルコ

あるき [歩] (名) あゆみ。ありき。こづかひ。つかひ。

あるき [歩] (副) あるまながら。あるまじつ。一。

あるき [歩] (名) ありきぞめ。一。ぶり「歩振」(名) あるくやうす。あるく風姿。

あるき [歩] (名) あゆみ。ありき。こづかひ。つかひ。

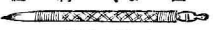
あるき [歩] (副) あるまながら。あるまじつ。一。

あるき [歩] (名) ありきぞめ。一。ぶり「歩振」(名) あるくやうす。あるく風姿。

あるき [歩] (名) あゆみ。ありき。こづかひ。つかひ。

あるき [歩] (副) あるまながら。あるまじつ。一。

あるき [歩] (名) ありきぞめ。一。ぶり「歩振」(名) あるくやうす。あるく風姿。





**アルター**〔亞爾答亞〕(名) ユナンの語 **Althaea**〔植〕綿葵(子)科の多年生草本。ヨーロッパ、シベリア、及びアメリカ等の原産、根は肥大して分枝す。毎年根根より數莖を出す。莖の高さ二三尺、毛茸密生す。葉は對生して心臟形をなし質厚く、短き葉柄あり、淡紅色の花を開く。根は藥用に供せらる。

**アルチメータム**〔Urinatum〕(名) 【法】最後通譚。

**アルチメータム** (名) 「アルコル」中毒の病稱。

**アルデハイド**〔Aldehyde〕(名) 【揮】揮發易く刺戟性の臭氣を有する一種の液體。「アルコル」の不完全な酸化によりて生ず。還元性甚だ強し。

**アルト**〔Alto〕(名) 女子及小兒の最低音。聲帯にて、次中音あるときばらひ。【有】時拂(名) 金鐘の手許にあるものに、借金を返すこと。——の催促(名) (句) あるをばらひにして、催促がましきことなす。

**アルトルイズム**〔Altruism〕(名) 【倫】愛他主義。利他主義。

**アルトルニカ**〔亞爾尼加〕(名) 【ラテン】語 **Arctic**〔植〕場科の多年生草本。「ヨーロッパ」の原産。莖は通常單一にして、高さ一尺許。葉は長卵形にして、全緣。楕圓に黃色美麗の小頭花を開く。花及根莖は藥用に供せらる。

**アルヌーボー**〔Art nouveau〕(名) 二十世紀の初「フランス」に流行したる建築装飾の様式。構成は曲線を主とし、色彩線條俱て輕快なる特徴とせるもの。

**あるはり**〔或〕(副) あること。

**アルバイト**〔Arbeit〕(名) ①勞働。②作業。③論文。

**アルパカ**〔Alpaca〕(名) ①動物 有蹄類の反芻獸。南「アメリカ」の「ペルー」等的高峯に産す。形綿羊に似て頸更に長し、やはらかき黒色の毛あり、これを採取し、紡績して絲となし、織物に用ふ。②「アルパカ」の毛を混じり織りたる布。「ヨーロッパ」産地等に用ふ。



〔一〕カパルア

**アルハンネット**〔Alphanet〕(名) 現今歐米各國に用ひらるる一種の音機文字。もと「フエキヤ」の文字を改造したるもの。「a, b, c, ……」の如く一定の順序

あるはりあるは

に配列す。

**アルBUM**〔Album〕(名) 寫眞、繪畫畫などをまじはさむ帖。

**アルピニスタ**〔Alpinist〕(名) 「アルプス」登山家。轉じて、高山登山家。

**あるひはり**〔或〕(副) ①これとかれとを取りあはせてふとくに用ゆる語。または、②尙ほ他にあらんかと疑ふとき用ゆる語。——は、

**アルファ**〔Alpha〕(名) 希臘文字の最初の字。①物

**アルヘイ**〔有平〕(名) アルヘイル。——さくく〔有平〕細工(名) 「アルヘイル」にて種々の形に拵たる菓子。——とうつう〔有平糖〕(名) 前條に同じ。

**アルハイル**〔名〕 【ラテン】語 **Alfalo** 砂糖を煎じりめ饅頭に飾るやうに固めたる物。水結糖。

**アルペンストック**〔Alpenstock〕(名) 嚢嚢狀の金具を尖端に著けたる登山用の杖。

**アルボース**〔Arbos〕(名) 【動】消毒劑の一種。帶黃白色なる固體狀の物質にして、極微細の臭氣あり、水に溶け易し、皮膚病及寄生蟲驅除藥に用ふ。

**アルマン**〔Almanac〕(名) 曆書。

**アルミ**〔Aluminium bronze〕(名) 【化】銅九分と「アルミニウム」分より成る合金。質堅く空氣中にて變色せず、金色の光澤を放つ。裝飾品に用ひらる。——とうろく〔銅〕(名) 【化】前條に同じ。

**アルミニウム**〔Aluminium, Al=27〕(名) 【化】青白色の金屬。天然には長石、雲母、銅玉等の中に存在し、又、粘土の主要成分を成す。質軟く、かくして延性、脆性に富み、又、軽くして空氣中にて光澤を失はず。器物を製するに用ひらる。——はん〔版〕(名) 一種の印刷版。「アルミニウム」の板に文字、圖畫を寫し、燐酸と「アラビア」樹膠とより成れる液を以て刷版して製版し、右版に代用するもの。

**あるはり**〔或〕(副) ありがは。我物類。

**あるひの禮**〔名〕 古昔、四月の賀茂祭に、種々の綵布を櫛に垂れて飾りしもの。——はら〔阿禮笥〕(名) 賀茂祭のありを盛る箱。——はた〔阿禮幡〕(名) 中古、觀射又は競

馬などのとき、其場に樹して旗。——ひき〔阿禮引〕(名) 古昔、賀茂祭の日に、阿禮の櫛に著けたる櫛を、參詣人の執りて引きしもの。——をとと〔阿禮男〕(名) 賀茂祭の祭主となる神官。——をとと〔阿禮少女〕(名) 賀茂の齋主。

あるはりあるは

**あれ**〔吾〕(代) われ。固わかれてははらかにせん。——にもあらず〔句〕 我を忘るるにこいす。

**あれ**〔彼〕(代) かれの。あ。

**あれ**〔感〕驚愕の意を表はす聲。ああ。

**あれ**〔響鈴〕(名) ダンベル。——たいさうが〔響鈴體操〕(名) 【教】體操を用ひて行ふ體操。

**アレクサンドリア**〔Alexandria〕(名) 【西】紀二三世紀初「エジプト」の「アレクサンドリア」に起りし哲學一派。「ユダヤ」の神祕的思想と「ギリシア」の哲學的思想との調和して發生せしもの。

**アレグレット**〔Allegretto〕(名) 音楽に、樂曲の進行速さを示す記號。——樂曲の進行速さを示す記號。

**アレグロ**〔Allegro〕(名) 音楽に「アレグレット」よりも

**アレゴリー**〔Allegory〕(名) 比喩。寓詞。

**あれこれ**〔彼是〕(代) かれとこれと。いろいろ。

**あれこれ**〔彼是〕(副) ありこり。

**あれこれ**〔彼式〕(名) ありこり。あればかり。

**あれすたる**〔彼式〕(名) 「荒廢」(自、ら下) あればたて用をなせず。みだれすな。

**あれた**〔荒田〕(名) 荒れたる田。——「らくなる。

**あれたつ**〔荒田〕(名) 荒れたる田。——「あらあらしくなる。

**あれた**〔荒地〕(名) 荒れたるまに、手を入れざる土地。

**あれつと**〔荒野〕(名) 荒れたる野。

**あれのみ**〔暴飲〕(名) 酒を亂暴に飲むこと。

**あれは**〔荒老〕(名) 演劇のあらは。

**あれは**〔荒老〕(名) 演劇のあらは。

**あれは**〔荒老〕(名) 演劇のあらは。

**あれは**〔荒老〕(名) 演劇のあらは。

**あれは**〔荒老〕(名) 演劇のあらは。

**あれは**〔荒老〕(名) 演劇のあらは。

**あれは**〔荒老〕(名) 演劇のあらは。

**あれは**〔荒老〕(名) 演劇のあらは。

あれあれは

あれは—あわひ

あれはつてはつて「荒果(自)た下(二)全く荒る。荒れをあれほど「彼程」(名)副)かばかりかほど。「はる。あれまくら「荒枕」(名)あばらやに旅寝する。あれゆく「荒行」(自、か四)荒れて年月を經ます。あわじ「沫」(名)あるじ。「す流る。あわ「泡沫」(名)。

あわ「泡沫」(名)。

あわ「泡沫」(名)。

あわ「泡沫」(名)。

あわ「泡沫」(名)。

あわも—あゐ

あわも「泡盛」(名)。

あわも「泡盛」(名)。

あわも「泡盛」(名)。

あわも「泡盛」(名)。

あわも「泡盛」(名)。



【草盛泡】

あゐ—あを

あゐ「藍瓶」(名)。

あゐ「藍瓶」(名)。

あゐ「藍瓶」(名)。

あゐ「藍瓶」(名)。

あゐ「藍瓶」(名)。

くり寄するやうに仕立てたるもの。脚服の袴。●裏つかけの袴。かあり。●恰の冬服、綿を入れたるものあり。あをま。  
 あをー「青」(接頭) 未だ成熟せざる意を表はす語。  
 あをかざ「青藜」(名)「種」あかざしの藜種、葉の長じて紅色とならざるもの。

あをあつぎ「青小豆」(名)「種」やへなり。  
 あをあら「青鯨」(名)「動」はたの一種、體長一尺許、灰色にして黄斑あり、鱗は綠色、近海の磯間に棲む。  
 あをあを「青青」(名) 青葉の頃に吹き渡る風。  
 あをあん「青鮪」(名) 白鮪に青粉を混和したるもの。  
 あをい「青」(形) あを。――はな「青花」Die Blume  
 Blume(名) 青色の花の義、十八世紀末ドイツ文學者ノ  
 ペリスが、これを最高存在の象徴となししより、理想の稱。

あをいし「青息」(名) 危ぶむ恐るゝときに發する氣息。  
 ー「とき」青息吐息(名) 前條に同じ。  
 あをし「青石」(名)「號」(一) 庭園に用ふる青色の岩石。  
 (二) 建築に用ふる青色の凝灰岩。  
 あをいたこぶ「青板昆布」(名) 食品の名、昆布を適當の長さに乾して切り、これを丹麩、絲麩、青竹等の浴液にて煮たる後、乾燥したるもの。

あをいとげのくるま「青絲毛車」(名) 青絲にて履形を葺きたる車、中古に、三后、親王、准后等の乗用せられしもの。  
 あをいろ「青色」(名) あを青。●物産。●  
 あをしき「青苳」(名)「種」苳の一種、葉は扁平、青色にして、夏月、池沼、水田等に浮生繁殖す。  
 あをしうなばら「青海原」(名) あをあをを見え渡る海面。

あをしうま「青馬」(名)「動」(一) 黒色の馬。(二) 白き馬。  
 あをしうまのせむえんじ「白馬節會」(名) 古昔、正月七日、左右の馬裝より二十一日節の白馬を殿中に引き出だし、天皇の御宴に供せし式、此日節會あり、群臣に宴を賜ふ。  
 あをしうみ「青海」(名) あをしうみ。  
 あをしうみかめ「青海龜、綠鳩龜」(名)「動」海龜の一種、一般に暗綠色にして、體は心臟形なる青甲と扁平なる腹甲と

に包まれ、四肢は鰭状をなして游泳に適す、長大なるものは甲の長さ六尺に達す、福澤を食餌とし、時々水面に出でて呼吸す、雌は夏月海濱に上りて産卵す、肉は食用とし、脂肪は工業に用ひ、甲は「たいまい」に代用す、小笠原島琉球、臺灣に産す。をうがくばう。  
 あをしうめ「青梅」(名) ●青梅梅の實。●沈香の一種。  
 あをしうめ「づけ」青梅漬(名) 漬物の名、青梅を鹽に漬けたるもの。



【あがみうを】

あをしうり「青瓜」(名)「種」瓠瓜の一種、果實は長楕圓形。  
 あをしうえい「青垣」(名) ぞすやきの陶器の輪。  
 あをしうがき「青垣」(名) あをあをきたる籠。――やま「青垣」(名) 青垣の如く四方を圍める青山。たなつく。  
 あをしうかけ「青鹿毛」(名) 馬の毛色、鹿毛の青びみたるもの。  
 あをしうがさ「青傘」(名) 紺紙にて張れる日傘。  
 あをしうかすけ「青糲毛」(名) 馬の毛色、かすげの青みを帯びたるもの。  
 あをしうかすけ「青楊」(名) 青みを帯びたる褐色。「たるもの」  
 あをしうかづら「青葛、清風藤」(名)「種」清風藤科の蔓生灌木、我國南方の暖地に自生す、新枝は綠色にして舊枝は褐色、葉は卵形全縁にして深綠色、三月頃、葉に先立ちて五瓣の黄花を開き、球形深緑色の果實を結ぶ。あをしうづら。

あをしうがはら「青革」(名) あがはる。  
 あをしうかはづつ「青蛙」(名)「動」あがはる。  
 あをしうかひ「青徴」(名)「種」下等菌類の一種、餅及其他の食物等に胞子を産し、養分を吸収す、全體白色の細き菌絲より成る、綠色の胞子を生じ、其數積しきが故に、後には全體綠色を呈するに至る。  
 あをしうがひが「青貝」(名) 鬚貝類、夜久目等の介殼の光澤美しき部分を用ひて、種々の物象を作り、漆塗の器物面にこれ等を施したる細工。

あをしうがへる「青蛙、金線蛙」(名)「動」かへるの一種、背部は綠色にして黄綠黒斑あり、腹部は白色なり、春期水中にて著しく鳴く。とのさまがへる。  
 あをしうり「あをか  
 あをかみ「青紙」(名) あがみ。  
 あをかからかみ「青唐紙」(名)「かさね」の色目、經うすあをを織りこむぎの表にて、青き紙のもの。  
 あをかからびる「あがみ」(名)「青枯」(自、は上二) 草木青き色のままにて枯る。「の淺黄なるもの」

あをかれいろ「青枯色」(名)「かさね」の色目、表は黄、裏あをかんに「青苳非」(名)「種」瑞香科の常緑灌木、葉生して高さ八九尺、葉は倒卵形にして對生し、葉脈多く葉柄短し、枝頭に頭狀花を著く、枝條の皮は製紙の原料となす。  
 あをかき「青木、桃葉珊瑚」(名)「種」山茱萸科の常緑喬木、幹は二丈餘に達するものあり、葉は對生し、卵形尖頭にして縁齒を有し、平滑にして光澤あり、花は雌雄異株にして、枝端に葉がり著き暗紫色を呈す、實は長楕圓形にして紅色、觀賞用として栽培せらる。  
 あをかきなご「青黄粉」(名) 青粉をまぜたる豆粉。  
 あをかきなご「青桐、梧桐」(名)「種」梧桐科の落葉喬木、樹幹直立し、高さ三丈許周囲三四尺に及ぶ、樹皮は白色にして縦維強し、葉は闊大にして深緑、五瓣にして楕圓にして梢頭に著生す、花は夏月梢頭に發し、玉瓣にして黄白色、木材は種々の用に供せられ、樹皮より漆を採り油を製すべし、又、觀賞用に供せらる。あやぎり。

あをかき「青金」(名) ●帶青色の粗製金。●(化) 金箔製造用の地金、金約六六に銀約三三を混じたるもの。  
 あをかき「青公卿」(名) 演劇にて演ずる惡役の公卿。  
 あをかき「青草」(名) あをかき色の草。――すり「青草摺」(名) あがすり。  
 あをかき「青臭」(形、) ●青草などの如き臭氣あり。●未熟なり。ものなれてあらす。  
 あをかき「青杓葉」(名)「かさね」の色目、表は青く裏のあをかき「青頭」(名)「動」まがも。●「朽葉色なるもの」  
 あをかき「青隈」(名) あかぐま。



【あをか】

あをか

あをり

あをか



あをどり「青干鳥」(名)「種」蘭科の多年生草木、塊根は卵形にして、葉高五寸乃至一尺、下の葉は倒卵形にして、上の葉は披針形、七八月の頃、葉上に緑色の花を簇生す。

あをぢ「青茶」(名) 青みを帯びたる茶色。

あをづつら「扇」(自、た) あり。

あをづつら「扇」(他、た) あり。

あをづつら「扇」(名)「種」あをかづら。

あをづつら「木防己」(名)「種」防己科の蔓生草木、随所の原野路傍に生ず、葉は緑色を呈し、他物に接りて上昇す、葉は有柄にして互生し心臓形をなす、夏日、葉腋に淡緑色の小花を繖房、碧黒色の實を結ぶ。「を」に茂る。

あをづつら「青電」(名) 青く貫れる電線。「を」に茂る、やつあをてん「青電」(名) 赤電車直前の電線。「貫」密。

あをぞと「青砥」(名) 砥石の一種、質は粘板岩にして色青くあをぞとまん「青道心」(名)「佛」(ハ)なまなかに佛道に入れる人。(ろ)なまわかさ僧侶。「し」。

あをぞと「青土佐」(名) 土佐國より産出する一種の紙厚くして紺色なるものこと。

あをとんぼ「青蜻蛉」(名)「動」蜻蛉の一種、色青し。

あをな「青菜」(名)「野」野菜。「種」たな。「に」種(句) 甚だ疲勞し又は痛く失望して、身心の力なげなるさまにいふ。

あをなし「青梨」(名)「種」梨の一種、果實の皮青く早熟す。

あをなみ「青波」(名) あをあをと見ゆる波。

あをなめし「青草」(名) あいなめし。

あをに「青丹」(名)「青」青き色の土。「化」いはろくまう。

あをに「青丹」(枕)「か」に冠する枕詞。

あをに「青煮」(名) 料理の名、豚、鶏、魚などを銅錢と共に燻(ニ)で、味噌と鹽を加へて煮たるもの。

あをに「青和幣」(名) 麻絲又は麻布をもて造れる幣。

あをに「青二才」(名) 年若き男を早しめていふ稱。

あをに「青鈍」(名) 青びみたるはなだ色。「か」かされの色目、表裏共に青鈍色なるもの。

あをにぶ「青鈍」(名) 前後に同じ。「女」房。

あをによらぼう「青女房」(名) 年若くもの慣れざるあをねかつら「水龍骨」(名)「種」水龍骨科の羊齒植物、古木又は岩石に著生し常緑、根、茎互に交錯して塊をなし、又は匍匐して枝を分かつ、葉は細長にして長さ莖柄を具す。

あをのき「仰」(名) あをのき。「お」およき「仰泳」(名) 水上にあをのきになりて泳ぐこと。(背泳)。

あをのく「仰」(自、か) あをむく。

あをのく「仰」(他、か) あをむかす。

あをのけ「仰」(名) あをのけると。「さ」ま「仰様」(名) 身帯のあをのけに例する。

あをのける「仰」(名) 「あをのく」の訛。

あをのり「青海苔」(名) 乾苔、海苔菜「種」藻類の強藻、形状絲の如く細管状をなし、圓盤状の根を有す、長さ二三寸より一尺に及ぶ、生感によりて色を異にすれど、通常鮮黄色なり、外洋又は内海にも産し、殊に河口に産するも上品なり、食用に供せらる。

あをば「青菜」(名)「種」樹木の青き葉。「樹」木の嫩き葉。わかば「わかばのあをあをとしたる頃。

あをばと「青葉蓮」(名)「種」石竹(ニ)科の多年生草木、山地に自生す、莖は地に臥し、高さ一尺餘、葉は長さ二分乃至六分にして卵形、夏日、梢上に緑色の花を著け、朝を結ぶ。

あをばだ「青肌」(名) 毛を剃りたるあのをさばだ。

あをばだ「青」(名)「種」冬青(ニ)科の常緑喬木、山中に自生す、幹高三四丈、外皮は平滑にして灰白色に緑色の葉を帯ぶ、葉は互生して橢圓形、鋸齒を具す、六七月頃葉腋に小白花を繖房、雌雄異株、果實は球形、木材は種々の用に供せらる。いぬやき。

あをばづく「青葉木蕨」(名)「動」「ふくろふ」の一種、扇よりも小形にして、頭大く耳羽なく、根は黄金色、全身黒褐色にして、根と尾と稍白し、夏日、我國に來りて繁葉中に様々、夜間、ほうほうと鳴く。

あをばと「青鳩」(名)「動」鳩の一種、「さ」じばとより少し大形、體の上部は濃綠色にして、頭上及下部は黄綠色、風切羽及尾は側黒く、脚赤し。

あをばな「青洩」(名) 子供などの垂る、青き鼻を垂る。

あをばな「青花」(名)「種」い「つゆくさ」(ろ)うつしばな。

あをばな「青花鸚哥」(名)「動」いんごの一種、羽毛の藍色をなせるもの。

あをばは「青葉羽衣」(名)「動」有物類の昆蟲、體は約二分許にして黄綠色を呈し、静止するときは翅を兩側に置きて鳥羽形をなす、樹木の葉よりなり。「色」青黒し。

あをばは「青蠅」(名)「動」蠅の一種、大形にして、あをばは「青商者」(名) 軍中の大夫又は雜兵白歯者。

あをばは「青斑猫」(名)「動」青斑の一種、小形にして體色濃綠、觸角黒し、鬚用以供せらる。

あをび「青火」(名) おにび、掃火。

あをび「青竹刀」(名) 古昔、小兒の生まれしとき、其臍の緒を切るまねをなす竹づくりの刀。

あをひき「青熟」(名)「動」春蠶の一品種、成熟すれば體觸青色を呈す、繭の大き種々にして、絲量は赤熟(ニ)に及ばざれど、絲質の優良なるを以て賞讃せらる。

あをひと「青人草」(名) (人)の生まれ出づるを草の生え茂るに譬へていふたみぐさ。蒼生。

あをびより「青表紙」(名) 青色の表紙をつけたる淨瑠璃又は長閑の稱古本。

あをびより「青」(名)「動」あをを離りいふ稱。せて顔のあをさめたる人を離りいふ稱。

あをびより「青」(名)「動」あををさめ。あさましうあをびれたるもの。

あをふか「青靨」(名) 色の青き靨。

あをふしがき「青柴垣」(名) 青葉の柴にて編みたる垣。「ゆる」淵。

あをふど「青淵」(名) 水深くして青く見あをへど「青浪吐」(名) なまなましきへど。「を」つきてのたまふ。

あをべら「青部長」(名)「動」硬骨類の魚、口小く、體長六七寸、體色青く稀綠、赤條亦斑



【らべをあ】



官に未だ欲み取られざる、フィルム。無欲除暈。  
あんかん〔安閑〕一名 無事にくだらんと。身心のやすらげ  
きと。〔茫然〕として居るとむだにくだらんと。  
あんき〔安気〕やすきとあやふきと。——の決(句)  
安眠何れかにきまると。

あんき〔晏起〕一名 朝おそく起ると。あざせ。  
あんき〔諸記暗記〕一名 そらんずると。そらおぼえ。  
あんき〔行脚〕一名 (名)の宋書(佛)の(佛)語を歴めぐ  
りて佛道を修行する。(心)あんきやう。うんず。  
歩にて遊歴する。——そう〔行脚僧〕一名 (佛)語を  
歴めぐりて修行する僧侶。うんず。

あんきよ〔暗渠〕一名 上部を覆ひて地上よりは見えざる  
溝渠。〔排水のために〕地に設けたる水路。  
あんきよ〔闇虚〕一名 天日光によりて太陽の空中に投ず  
る全部の影、地球の表面も此中に入れば、日蝕皆見える。  
あんく〔暗愚〕一名 事理に暗く才能によきと。おろか。  
あんくう〔行宮〕一名 (あん)は行の宋書天子の行幸して  
假にとりたまふ宮。かりみや。

あんぐり(名) 惘然自失して、覺えず口をひらくさま。  
アングリカ 基督教の一派。キリスト教會 教會 宗教は  
「カルベン」派に近く、儀式は「カトリック」派に似て、組織は  
監督政治にして、君主を主領とし、國會を最高立法部とす。  
アンクル [uncle] 一名 をち。叔父。伯父。〔計。〕  
アンクルサム [Uncle Sam] 一名 「アメリカ」合衆國政  
府代表的なる「アメリカ」合衆國民。  
アングロサクソン [Anglo-Saxon] (名) 西紀第五世紀  
の頃に「ドイツ」の西北部より「イギリス」の地に渡り、今の  
「イギリス」人の主なる祖先となし種族。  
あんくん〔暗君〕一名 おろかなるくもん。  
あんけら(名) 惘然自失せるさま。ぼんやり。あんぐり。あん  
けらかん。——かん(名) 前縁に同じ。  
あんけんきつ〔暗剣殺〕一名 九星の方位の一、其方位は

一定せずして、中官に居る星の異なるに従ひて變ず、最も凶  
なる方位にして、これを犯せば、多く生命を喪失する事に遭  
遇すといふ。  
あんご〔安居〕一名 (佛)僧侶の夏の夏に遊行を行き修むるに  
あんごう〔鞍鱈〕一名 (名)動)硬骨類の魚、體扁平に  
して裸皮、頭部頗る大きく口甚だ  
大なり、腹は上面にあり、鰓齒状  
の齒を有す、體色は背部深褐に  
りて腹部稍淡し、性鈍弱にして  
游泳拙劣、俗々に留連す、常に海底  
岩礁の間に隠れ、鰓を動かかし、物これに觸るれば直ちに「吞  
す」東北、鰓鱈の餌を待つ如く、あんげらんとして仕事を  
待つ日傭労働者。〔軒魚〕と略稱(魚)とを連結する由が  
ある。——がた〔鞍鱈形〕一名 あくびがた。——の餌待  
(句) 鰓鱈の口を開きて餌の來たるを待つ如く、あんぐりと  
口を開きて茫然たるさまに譬へいふ。——の吊切(句) 鰓  
鱈を用いて料理する。

あんごう(名) 安康(名) 異變なきと。やすらか。  
あんごう(名) 暗溝(名) あんきよ(暗渠)。  
あんごう(名) 暗愚(名) ふてふ。あひことば。あひづ。か  
くしことば。——ごんぼう(名) 暗號電報(名) 隱語  
又は符號を用いて通信する電報。  
あんごう(名) 暗合(名) 期せずして物事の相同じきと。  
あんご(名) 暗黒(名) くらがり。やみ。——きだい〔暗黒  
時代〕 世變の混亂せる時代。文物道德の墮落廢敗せる  
時代。罪惡又は戦争の多き時代。——せん〔暗黒線(名)  
理〕 あんせん。——めん〔暗黒面(名) 罪惡又は罪惡の  
存在せる方面。  
あんごつ〔鞍骨〕一名 鞍を構成する主材。くらばね。  
あんごり(名) 副) あんぐり。  
アンコール [Encore] (名) 一旦退場せる演奏者又は歌手  
に、拍手で再登場を促し望む。



〔鰓鱈〕

あんご(名) 餅(名) あんごもち。——もち〔餠轉  
餅〕一名 小片の餅に餠をまぶしたるもの。  
あんざ〔安坐〕一名 安らかに坐ると。おちつきて坐ると。  
あんざ(名) あぐらをかくと。ひざをかくむと。  
あんざい〔行在(名) 〕 (あん)は行の宋書あんぐう。——  
まよ〔行在所〕一名 前縁に同じ。  
あんざい(名) 闇齋學派(名) 山崎闇齋の學說を奉ず  
る學派、闇齋の學說に程朱を主とし佛学に及べらるもの、  
淺見綱齋・佐藤直方・三宅尚齋其門下の傑出なり。  
あんざつ〔暗殺(名) 〕 やみうち。だましうち。  
あんざつ〔按察(名) 〕 きんみとちりまらへ。——ち〔按察  
使(名) 〕 あぢち。〔支那古昔、地方の行政を監督し非違  
を檢察せし職。〕 ござん。むざん。目耳。  
あんざん〔暗算(名) 〕 心のうちにたかををつもたんと。計算。  
あんざん〔安産(名) 〕 胎兒をやすらかに産むと。——ち  
〔安産樹(含生草)〕一名 一種の十字科の一年生草本、熱帯乾  
燥の地に生ず、高さ六七寸、多枝にして球形をなす、葉は倒卵  
形にして、小白花を開き、枝上に攪蕪す、俗説に出産に臨み、此  
草の乾きたるを水に浸し、其枝を挿すれば安産といひ傳ふ。  
あんざん(名) 安山岩 [Andesite] (名) 「アンデス」  
山岳の麓) 地熱火山岩の一種、火山破裂の際に、熔岩となり  
て噴出して凝結せるもの、斜長石・角閃石・輝石等の結晶を有  
す、我國の火山を構成せる主なる岩石なり。富士岩。  
あんざん(名) 案山子(名) かかし。そぼと。  
あんざん(名) 暗示(名) 理由又は意思を明瞭に暗示せず、舉動  
又は容貌等によりて、これを暗暗に他人に傳ふと。〔  
Suggestion〕 (心) 意識の媒介を經ずして、直接に精神的又は  
身體的活動を開発する觀念作用。  
あんじ〔案〕一名 かんがへ。まんばい。〔むところ。いほり。  
あんじつ〔庵室(名) 〕 小ききりの住家、おもに僧侶の住  
あんじつ〔暗室(名) 〕 密閉して光線の透入せざる室。闇  
室。——ランプ〔暗室洋燈(名) 〕 暗室内にて寫眞の乾  
板を處理するとき用ゆるランプ。全體を「アクリキ」等にて  
製し、赤色ガラス・黄色ガラスにて光線を覆ひたるもの。

あんか―あんけ  
あんこ―あんこ  
あんご―あんご  
あんご―あんご  
あんご―あんご

あんご(名) 餅(名) あんごもち。——もち〔餠轉  
餅〕一名 小片の餅に餠をまぶしたるもの。  
あんざ〔安坐〕一名 安らかに坐ると。おちつきて坐ると。  
あんざ(名) あぐらをかくと。ひざをかくむと。  
あんざい〔行在(名) 〕 (あん)は行の宋書あんぐう。——  
まよ〔行在所〕一名 前縁に同じ。  
あんざい(名) 闇齋學派(名) 山崎闇齋の學說を奉ず  
る學派、闇齋の學說に程朱を主とし佛学に及べらるもの、  
淺見綱齋・佐藤直方・三宅尚齋其門下の傑出なり。  
あんざつ〔暗殺(名) 〕 やみうち。だましうち。  
あんざつ〔按察(名) 〕 きんみとちりまらへ。——ち〔按察  
使(名) 〕 あぢち。〔支那古昔、地方の行政を監督し非違  
を檢察せし職。〕 ござん。むざん。目耳。  
あんざん〔暗算(名) 〕 心のうちにたかををつもたんと。計算。  
あんざん〔安産(名) 〕 胎兒をやすらかに産むと。——ち  
〔安産樹(含生草)〕一名 一種の十字科の一年生草本、熱帯乾  
燥の地に生ず、高さ六七寸、多枝にして球形をなす、葉は倒卵  
形にして、小白花を開き、枝上に攪蕪す、俗説に出産に臨み、此  
草の乾きたるを水に浸し、其枝を挿すれば安産といひ傳ふ。  
あんざん(名) 安山岩 [Andesite] (名) 「アンデス」  
山岳の麓) 地熱火山岩の一種、火山破裂の際に、熔岩となり  
て噴出して凝結せるもの、斜長石・角閃石・輝石等の結晶を有  
す、我國の火山を構成せる主なる岩石なり。富士岩。  
あんざん(名) 案山子(名) かかし。そぼと。  
あんざん(名) 暗示(名) 理由又は意思を明瞭に暗示せず、舉動  
又は容貌等によりて、これを暗暗に他人に傳ふと。〔  
Suggestion〕 (心) 意識の媒介を經ずして、直接に精神的又は  
身體的活動を開発する觀念作用。  
あんじ〔案〕一名 かんがへ。まんばい。〔むところ。いほり。  
あんじつ〔庵室(名) 〕 小ききりの住家、おもに僧侶の住  
あんじつ〔暗室(名) 〕 密閉して光線の透入せざる室。闇  
室。——ランプ〔暗室洋燈(名) 〕 暗室内にて寫眞の乾  
板を處理するとき用ゆるランプ。全體を「アクリキ」等にて  
製し、赤色ガラス・黄色ガラスにて光線を覆ひたるもの。

あんか―あんけ  
あんこ―あんこ  
あんご―あんご  
あんご―あんご  
あんご―あんご

あんご(名) 餅(名) あんごもち。——もち〔餠轉  
餅〕一名 小片の餅に餠をまぶしたるもの。  
あんざ〔安坐〕一名 安らかに坐ると。おちつきて坐ると。  
あんざ(名) あぐらをかくと。ひざをかくむと。  
あんざい〔行在(名) 〕 (あん)は行の宋書あんぐう。——  
まよ〔行在所〕一名 前縁に同じ。  
あんざい(名) 闇齋學派(名) 山崎闇齋の學說を奉ず  
る學派、闇齋の學說に程朱を主とし佛学に及べらるもの、  
淺見綱齋・佐藤直方・三宅尚齋其門下の傑出なり。  
あんざつ〔暗殺(名) 〕 やみうち。だましうち。  
あんざつ〔按察(名) 〕 きんみとちりまらへ。——ち〔按察  
使(名) 〕 あぢち。〔支那古昔、地方の行政を監督し非違  
を檢察せし職。〕 ござん。むざん。目耳。  
あんざん〔暗算(名) 〕 心のうちにたかををつもたんと。計算。  
あんざん〔安産(名) 〕 胎兒をやすらかに産むと。——ち  
〔安産樹(含生草)〕一名 一種の十字科の一年生草本、熱帯乾  
燥の地に生ず、高さ六七寸、多枝にして球形をなす、葉は倒卵  
形にして、小白花を開き、枝上に攪蕪す、俗説に出産に臨み、此  
草の乾きたるを水に浸し、其枝を挿すれば安産といひ傳ふ。  
あんざん(名) 安山岩 [Andesite] (名) 「アンデス」  
山岳の麓) 地熱火山岩の一種、火山破裂の際に、熔岩となり  
て噴出して凝結せるもの、斜長石・角閃石・輝石等の結晶を有  
す、我國の火山を構成せる主なる岩石なり。富士岩。  
あんざん(名) 案山子(名) かかし。そぼと。  
あんざん(名) 暗示(名) 理由又は意思を明瞭に暗示せず、舉動  
又は容貌等によりて、これを暗暗に他人に傳ふと。〔  
Suggestion〕 (心) 意識の媒介を經ずして、直接に精神的又は  
身體的活動を開発する觀念作用。  
あんじ〔案〕一名 かんがへ。まんばい。〔むところ。いほり。  
あんじつ〔庵室(名) 〕 小ききりの住家、おもに僧侶の住  
あんじつ〔暗室(名) 〕 密閉して光線の透入せざる室。闇  
室。——ランプ〔暗室洋燈(名) 〕 暗室内にて寫眞の乾  
板を處理するとき用ゆるランプ。全體を「アクリキ」等にて  
製し、赤色ガラス・黄色ガラスにて光線を覆ひたるもの。

あんしーあんし

あんしや「暗射」(名) 見えざる敵兵の位置を推測して射撃する。②「正しくは「あんせき」推測していひあつると。いちず「暗射地圖」(名) 正しくはあんせきちつ地名を記入する。輪船のみをあらはしたる學習用地圖。白圖。あんしや「行者」(名) あんは「行の宋音」佛釋家の給仕。有髮にして其等に依止す。

あんしや「暗弱」(名) 心おろそかにして、身體の弱き。アンジヤバル(名) (語原不詳、或は「オランダ語」) はなりといふ。植石竹科の多年生草本、ヨーロッパ南部の原産、莖の高さ一尺五寸至三尺、上部に多く枝を分ち、下部に多く葉をつく。葉は長さ約五寸にして線状、白色を帯ぶ、夏に花を開く、花は重瓣にして花瓣は倒卵形、色は種々にして香氣あり、觀賞用として庭園に栽培せらる。オランダせきち。

あんしや「庵主」(名) 庵屋の主人。あんしや「案主」(名) あんしや(案主)。あんしや「暗誦」(名) あんしや(暗誦)。あんしや「安住」(名) 安らかに住まふ。安んじとあんしや「庵住」(名) 庵に住む。又其人。あんしや「按手禮」(名) Ordination (名) キリスト教にて、長老が牧師候補者の頭に手を按じ、其祝詞を祈りて祝儀を允許する儀式。

あんしや「安如」(名) 副 おちつきで居るさま。「よみ。あんしや「暗誦」(名) そらに覺えて讀むと。そらあんしや「暗礁」(名) 地海水にかくれて見えざる岩石。かくれい。あんしや「鞍上」(名) くらの上。一人なく鞍下馬なし(句) 乗者と其乗馬と相得て一體となり、縱横無盡に乗りまはし馳(け)まはすに。よ。

あんしや「鞍梅」(名) 鞍の下に敷くまね。あんしや「安心」(名) 心やすこと。まんばいなきと。心をおちつかんと。おそれまとはさると。りつめい「安心立命」(名) 心力の及が限りを盡し、それ以上はすべて天命に任せ、身命の安危に處して、疑惑畏怖とこと。あんしや「安心」(名) 佛信仰によりて心の歸趣を定め、

あんしーあんせ

これに安住して動かさずと。つづよ「安心決定」(名) 佛安心をまかと定めて動かさず感はさると。あんしや「按針手」(名) 船舶の操舵に従事するもの。かざと。あんしや「杏子杏」(名) 杏字の宋音(植蓄)科の落葉喬木。庭園に栽培せらる。幹の高さ丈餘、葉は橢圓形又は卵形にして尖る。春日、花を開く、花は五瓣にして淡紅色、果實は梅より大きくして味少しく甘し、種子は藥用に供せられ、木材も器用に供せらる。ちゆめ「杏子梅」(名) 植蓄科の櫻種。花は單瓣にして杏子に類似し、果實は酸味少なし。

あんしや「案主」(名) 中古、檢非違使廳都司乃至攝關大將家等の政所にありて、其書類を司りし役人。鎌倉幕府の政所の書類を司りし役人。あんしや「按司」(名) 總前削、琉球の地方高官。あんしや「案」(名) 他、さ斐。かんがふ。おもふ。心配す。まづかふ。より差むが易い(句) 豫て心配せしよりは、實際に臨む方が易しからず。あんしや「按」(他、さ斐) おさふ。かんがふ。あんしや「暗星」(名) 天「恒星」にして光を發せざるもの。あんしや「暗線」(名) 天「スペクトル」中に現はる、暗黒なる線、白光が或微體若しくは氣體を通過するとき、特種の光の光に吸収せらる、によりて生ず、日光の「スペクトル」には、夥多の暗線あり。

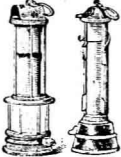
あんしや「黯然」(名) 副 くらさま。心のよささま。あんしや「魂を消す」(句) 心よさきて氣のめいる心地す。あんしや「安然」(名) 副 おちつきでゐるさま。あんしや「安全」(名) 危難なきと。恙なきと。やすこと。かみり「安全剃刀」(名) 使用する際に、切傷の危険を避け得るやうに装置せられたる一種の剃刀。き「安全器」(名) 理「電路に過度の電流通過するとき、自動的に其電路を断絶して送電を停止し、以て危険を防止する用器。可熔片を不燃性の臺上に装置して、電路に挿入せるもの。強

薬を強固する鏡の誤設を防ぐため、其引金又は打金を動かし

あんせーあんそ

得ざるやうになす装置。しゅうかん「安全週間」(名) 工場・家庭・道路其他に於て、各個人互に災害死傷等の起らざるやうに警戒注意し、以て社會の安全を圖る週間。だいいち「安全第一」(名) 處世の最良方法なりといふこと。ちやう「安全地帯」(名) 交通頻繁なる電車の停留場に設けて、乗降者の安全を保持する地域、其域内には自動車其他の車の通行を禁止す。とう「安全燈」(名) 鑛山などにて、工夫の坑中を照らすに用ふる。

燈、金網を以て被ひたる手提「ランプ」にして、金屬は熱の良導體なるを以て、これを熱すと、恐ろ其熱を放散せしめ、反對側に熱氣を及ぼさしめざる。故に、此燈を揚げて坑中に入るときは、點火し易き沼氣の如き瓦斯ありとも、内部の火氣外部の沼氣に移らず、ただ内部に潛入せる沼氣のみ點火するを以て、直ちに危険を知りて他に通知するを得。しん「安全」(名) 長橢圓形に曲げ尖端を覆ひかくしたる留針。安全「Safety Valve」(名) 理「汽鍋内に於ける蒸氣壓力が規定以上に昇るを防ぐために、汽鍋に設けたる蒸氣排出口、蒸氣が規定以上の壓力を生じたときは、此排出口より脱出するを得る装置なり。水平不閉をもちしる場所。マツチ「安全機」(名) 機子一種、普通使用せらるるものにして、藥品中に黃燐を加へず、其藥品を塗れる軸頭を、箱の横側に塗れる藥品にあてて摩擦するにあらざれば、發火せざるもの。りつ「安全率」(名) 安全を保持し得る、度合。



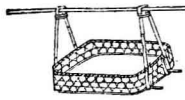
うとんぜんあ

あんそく「安息」(名) やすらかにいふこと。やすむと。こう「安息香」(名) 植蓄科の落葉喬木、「マヤ」諸島に産す、樹皮は茶褐色、葉は長形にして尖頭、花は小さく、實は圓し。化「一種の藥品、安息香樹の樹皮を切傷し、流出する液を凝縮せしめたる香油質の樹膠特異の芳



香を有す。——さん[安息酸](名)【化】安息香を徐熱するととき昇華する。白色片状の結晶。これを熱せば水蒸氣と共に揮發し、咽喉を刺激して嘔吐を起し、醫藥に用ふ。——  
 素つ[安息日](名)【宗】キリスト教徒が、聖日として俗事を廢し宗教的儀式を行ふ日。多きは日曜日を以てこれに充つれど、土曜日を以てするを正しとす。ユダヤ人の風習に基因せるものとす。——ひ[安息日](名)前條に同じ。  
 アンソロジー[Anthology](名)【名】佳句集。詞花集。名曲集。【花】を蒐集するもの。

あんだ[復興](名)【編板の善】板をもて蓋として竹にて釣りに與、あ手を。  
 あんた[安打](名)【野球】を打つて、一塁以上を取り得るやうに投球を打つこと。ヒット。  
 あんたい[暗體](名)【理】自ら光を放あんたい[安泰](名)【まんぢぢなさま】おだやか。やすうか。



[だんあ]

あんたえい[安陀會](名)【梵語】Antra-gataka, 中宿衣又は下衣と譯す。【佛】五條の袈裟。  
 あんたくせい[安宅正路](名)【やすうらかなる道】たしき路との義。孟子に出づ。仁義の道。  
 アンダーグラウンド[Underground movement](名)【社】當局の目を欺しつゝ非合法的に行ふ運動。潛行運動。  
 アンダースタタニング[Understanding](名)【理】理解力。【和解】協定。  
 アンダーセル[Undercell](名) 販賣者が競争的に、他店よりも安價に賣出す。特價大賣。  
 アンダーライン[Underline](名) 洋書の要所に要點に、赤「インキ」赤鉛筆等にて、注意線を引くこと。又、其注意線。  
 アンダーリヤン[Andalusian](名)【動】織の一種。イスペインの「アンダルス」の原産。羽毛青灰色にして、黒白の覆輪あり。併用して飼育せらる。

あんたん[黯黯](名)【くらさど】明らかならざること。  
 アンダンチノ[Andantino](名) 音楽にて、楽曲の進行や

あんそーあんた

や緩やかなるを示す記號。「かなるを示す記號」  
 アンダンテ[Andante](名) 音楽にて、楽曲の進行の緩や  
 アンタト[Antato](名)【法】協商。協約。  
 あんち[安置](名)【やすうらかに握うること】するおくと。【偶像】などをまつり納むこと。  
 アンチクライマックス[Anticlimax](名)【龍頭】蛇尾。  
 アンチ辭法にて、強き調子又は意味を次第に弱くる句法。  
 アンチテーゼ[Antithese](名)【哲】辯證法に於ける一要素。指定に反對する主張。立言をいふ。反指定。反提説。  
 アンチペリン[安知必林=Antipyrin](名)【化】白色結晶の粉末、無色無臭に用ひらる。多量に用ふれば危険。  
 アンチヘブリン[安知歇貌林=Antichlorin](名)【化】無色片状の結晶。過熱、アルコール等に溶解す。解熱。鎮痛の作用あれど、多量に用ふれば、貧血を生じて危険。「チモン」  
 アンチモニー[安質母尼=Antimony](名)【化】アンチモン[Antimon, Sb=12.3](名)【化】青白色の光澤を有する脆き金屬。天然には輝安礦として産す。鉛との合金は活字を作るに用ひらる。——【朱】=Antimono-ry red(名)【化】赤色の粉末。成分は硫化「アンチモン」。「ヒム」。「インキ」の着色料とす。

あんちゅう[暗中](名)【やみのうち】「ひやく」暗中飛躍(名) 世間に知らざるやう陰密に、はげしく運動すること。——【ちやく】暗中摸索(名) 暗中に手さぐりにてものとむること。あてず。【ちやく】。

あんちよう[味能](副)【あひのちよ】。うまく。(京阪の方言)。  
 あんちよく[安直](名)【正しくは】あんち【やすう】。  
 あんちんほう[安鎮法](名)【佛】密教にて、家宅安穩又は國家鎮靜を祈るために、不動明王を本尊として行ふ修法。  
 あんてん[安定](名)【おちつくこと】。【やすうする】。【理】重心が物體の底邊の中心にあること。【化】化合物が容易に分解せられざること。

アンテナ[Antenna](名)【動】昆虫の觸角。【理】無線電信・無線電話にて、發信又は受信のために張りたる架空線。

あんたーあんて

アンペンダン[Independant](名)【獨立不羈】無關係。  
 de Salon des Independants(の略)一八八四年パリにて新派の畫家が、「アカデミー」派展覽會に對抗して組織したる繪畫展覽會無審査員民衆的なるを特徴とす。  
 アンテレクトケエル[Intellectuelle](名)【智】者。賢者。【賢】智能。睿智。  
 あんてん[行殿](名)【あんは行の宋音】あんぐう。  
 あんどう[安堵](名)【居處に安んじ住むこと】。安心すること。【舊】知行の地をそのまま賜はると。——【ぶよう】ヤウ【安堵】(名) 鎌倉時代及室町時代に、朝廷・幕府・國司・領主等が土地の所有又は官職の職任を認めし文書。——【ぶよう】ヤウ【安堵奉行】(名) 鎌倉幕府及室町幕府の職名。安堵に関する訴訟・調願及安堵状の下付を掌りしもの。——【故】の如し【句】 以前の如くに安堵して居地を移さず。  
 あんとらう[暗闘](名)【やみよのうらあひ】。【ないない】せめぎあひ。【演劇】のだんまり。  
 あんどう[行堂](名)【あんは行の宋音】行者の居室。轉じて、行者の稱呼。  
 あんどうめ[安德布](名)【一種民布の一種】九州・四國の沿海に産す。蓋は羽状に分裂し、面には不規則なる皺あり。貧民の食料又は肥料等とす。

あんどうくわめ[安德若布](名)【種】あんどうくめ。  
 アントニム[Antonym](名) 反意語。  
 アントラン[Anthracene](名)【化】「コールタール」中より分離して得る無色板状の結晶。美麗なる藍色の螢光を有す。ベンゼンには溶解し、アルコール、エーテルには少しく溶解し、水には溶解せず。アリザリンを製するに用ふ。  
 あんどん[行燈](名)【字の宋音】燈火をさして照るおく具。——【はかま】行燈袴(名) 行燈をさまひおく部屋。——【べや】行燈部屋(名) 行燈をさまひおく部屋。——【東京】遊郭にて、遊藝を支持し得ざる遊客を一時間おく部屋。

あんな[彼様](形) ああやうな。  
 あんない[案内](名) 【案内】案内内容。【貨物】内賣。【み

あんてーあんな



動きなどする装置のもの。——**ホウロウ**(**ホウロウ**)**安樂浄**

**土**(名) (佛) 極樂浄土。——**せかい**(**安樂世界**)**(名)**

**あんりゅう**(**暗流**)**(名)** ①上層にあらはれざるながれ。

**あんり**(**安慮**)**(名)** 安心すること。あんど。

**あんるい**(**暗涙**)**(名)** 人知れずながすなみだ。

**あんろ**(**暗路**)**(名)** くらがりのみち。やみのみち。 ② 堀

窖内に於ける地下の交通路。

い 唇を扁平に開き、舌の根部を高めて發する母音、五十音圖に

て、**あ**行第二に位し、「あ」列の「**あ**」「**ま**」「**ち**」「**に**」「**ひ**」

「**み**」「**り**」「**る**」の韻となる。

い **膽**(名) (生) たん(なう)膽囊。

い **殺**(名) 殺ると。睡眼。「をしなせ」。

い **蛛網**(名) 蜘蛛の巣。蜘蛛のつかきたるに。

い **意**(名) ①ころばせ。のぞみ。ころざし。 ②おもひ。

い **お**はく。かん。か。い。わ。け。③おもむき。け

はひ。④私欲私心。⑤心) 選擇又は決行する心的作用の能

動的方面。——**となさず**(句) ころろにかけず。——**に介**

**す**(句) ころろにはさず。氣にかく。——**の如くならず**

(句) おもひとはりならず。——**を致す**(句) ころろの限

りをこむ。——**を失ふ**(句) きげんをそこなふ。⑥志を

得ず。——**を注ぐ**(句) 氣をつく。注意す。——**を盡くす**

(句) ころろの限を十分にあらはす。——**を防ぐこと城**

**の如し**(句) (宋) 官制の語、城の敵を拒ぐが如く、私欲の

生ずるを嚴重に防ぎ止むるをいふ。

い **醫**(名) ①疾病を治癒すること。れうぢ。②疾病の治癒を業

とする人。い。え。——**三世ならざれば其藥を服**

**せず**(句) (禮記) 出づ(三代)も積きたる醫者の藥にあらざ

れば服用せざる義、即ち經驗なき醫師の藥は服用せざるをい

ふ。——**は仁術**(句) 醫は人の危急を救ふよけ深き道。

い **異**(名) ①ことなる。ちがふ。②ものつけ。わざは

い **移**(名) ①うつすと。又、うつると。 ②諸官司間の傳達文

い **易**(名) ①たやすきと。容易。②おろそかゆるかせ。

い **夷**(名) ①えびす。蕃民。②たひらか。平坦。③やすら

い **安**(名) ①たぐひ。ともがら。②あぐみ。あぐら。——**して悒**

**らす**(句) あぐらを組みて客に懸接す。——**の思ふ所にあ**

い **を以て夷を制す**(句) 他國民をして互に相衝突し

相牽制せしめ、これに乗じて自國の安きを貪るにいふ、支那

の傳統の對外政策の常套手段なりと稱せらる。

い **胃**(名) (生) 消化器の主要部にして、腹部内臓器の

一、人類のは左側横隔膜の下に位置し露狀を呈す。上縁は短

くして彎入し、下縁は長く凸隆す、前面は膈壁に接し、後

面は横隔膜等に接す、上口の食道に連なるところを噴門と稱

し、下口の十二指腸と境するところを幽門と稱す、外壁を胃

壁と稱し、内部に無數の胃腺ありて胃酸を分泌す。②(天)

い **位**(名) ①西方に位す。こま。

い **偉**(名) おほいなる。すやう。とりび。

い **緯**(名) ①よこ。②よこいと。③のち。

い **帷**(名) 横に引かれぬす。ひきまく。——**を下**

**す**(句) (漢) 董仲舒の故事)徒を集めて學を講ずるにいふ

い **威**(名) 他を畏服せしむるいきほひ。くわう。——**あ**

**りて猛からず**(句) (論語) 出づ) 犯すべからざる威嚴

の内に、親しむべき恩愛のこもれる容貌にいふ。——**を盡**

い **内**(句) いかり解く。きげんをなほす。——**を振ふ**(句)

幅をさかす。勢をまぬ。

い **井**(名) 「わ」を見よ。

い **根**(名) 「わ」を見よ。

い **猪**(名) 「わ」を見よ。

い **亥**(名) 「わ」を見よ。

い **圃**(名) 「わ」を見よ。

い **居**(名) 「わ」を見よ。

い **唯**(名) 敬意を表する應答の聲はい。——**して諾**

**せず**(句) 應答の聲の敬意を失せざるにいふ。

い **五**(數) いつそ。

い **五**(數) いつそ。

い **助** 主格を表はす巧爾平波、毛野の君子——**笛吹きのぼる**。

い **挨拶** 語調を整ふるに用ふる語。——**向ふ**。

い **遺愛**(名) 死者の生前に愛したる遺物。

い **帷帳**(名) ①あびりとひきまく。②まくば

り。③作戦を計畫する陣所。④(法) 大元帥陛下の重機を計

畫したまふ所。——**ホウロウ**。——**帷帳上奏**(名)

い **射合**(名) 威力を用ひて壓迫する。おとしす

い **威歴**(名) 威力を用ひて壓迫する。おとしす

い **射合**(名) 威力を用ひて壓迫する。おとしす

い **位**(名) 位階によりて色を異にする儀。

い **醫**(名) ①療治のかんがへ。療治のまかた。

い **慰安**(名) なぐさめやすんずる。

い **安心**(名) (佛) 正統の道と異なる方法に

よりて、安心の歸着を求むると。

い **易**(名) 副) たやすきま。やすやす。

い **唯**(名) 副) 「はいはい」とのみ答へて、自己の

意見を述べざるさま。又、他人のいふが儘になるさま。——

**だくだく**。唯唯諾諾(名) 副) 是非の別なくただ他人

の意見に盲従するさま。 [意見。ことなるかんがへ。

い **遺意**(名) ①死者生前の意思。②古人のこした

い **飯**(名) 「いひ」を見よ。

い **謂**(名) 「いひ」を見よ。

い **善好**(形) 「よい」の訛。

いえい—いおう

いえい〔否〕感 いえい。いや。いや。  
 いえい〔異域〕一名 ことなる地域ぐわいこく。とつく  
 に。一の鬼(名) 外國にて死にたるもの。  
 いえい〔柵〕一名 楯の柵科の落葉喬木、樹皮に自生し、又  
 庭園に栽植せらる。幹の高き四五寸の心臓形にして、莖  
 縁を有し、裏面は白色を呈す、葉柄長し、五月頃、梢頭に複總花  
 を開く、雌雄異株、實は球形赤色にして南天竹(ト)に似て稍大、  
 鶴(ト)に喰食せらる。材は燻製其他器具を作るに用ひらる。  
 いえい〔寇馬〕一名 鶴(ト)おかまこほろぎ。  
 いえい〔意旨〕一名 意(ト)主として兒童の意志の發達録録を、  
 はかるを目的とする教育。  
 いえい〔志〕一名 異位(重行)一名 古昔、公事の時、  
 とき、内蔵の臨に親王、公卿の官位順によりてならびし配列。  
 いえい〔好仲〕一名 老たしみあふあひだがら。  
 いえい〔好人〕一名 好人物。◎こひひと。  
 いえい〔否〕感 いやいな。いやい。  
 いえい〔醫院〕一名 醫療に従事する職員。  
 いえい〔醫員〕一名 醫療に從事する職員。  
 いえい〔委員〕一名 團體中にて、或事項を擔任する特  
 定の人。一ふたく(委員附託)一名 法議會にて、議  
 案の審査を其かかりの委員にまかすとす。  
 いえい〔言〕自(他) 「いふ」を見よ。  
 いえい〔家〕自(他) 「いへ」を見よ。  
 いえい〔否〕感 いええ。まからず。  
 いえい〔胃液〕一名 生(胃)服の胃内に分泌せる殆ど無色  
 透明なる消化液、強度の酸性反應を呈す。  
 いえい〔胃炎〕一名 病(胃)加答兒。  
 いえい〔魚〕名 「いほ」を見よ。  
 いえい〔醫王〕一名 佛(い)法を説きて無明の病に藥  
 を與ふる佛菩薩。(一)藥師如來。  
 いえい〔硫黃〕一名 化(硫)ゆわう。  
 いえい〔以往〕一名 ころい。かうで。以後。

いおう—いはい

いおう〔易往〕一名 佛(佛)遊院の本願に依りて淨土に往  
 生し易しといふ。一むにん(易往無人)一名 佛(佛)  
 淨土の往生は容易なるとなれど、他力の信心難ければ、これ  
 を云々とする人のなしたふ。  
 いおう〔萎黃病〕一名 萎黃病。皮膚・粘膜・爪  
 甲等すべて蒼白色を呈し、輕易の力役にも堪へず一種の貧  
 血病。(一)植物が光線不足のため、葉緑の生成を妨げられ  
 て、白色若しくは黄白色となる。  
 いおう〔イオン〕一名 化(溶)液中に存在し、各獨立して特殊の性  
 質作用を有する成分、其液に電流を通ずるときは、各イオン  
 一は兩極に集まる、陰極に集まるは、陽電氣を荷ふものにして、陽イオンと稱し、陽極に集まるは、陰電氣を荷ふものにして、陰イオンと稱す。  
 いおう〔烏賊・墨魚・鰐魚〕一名 動(頭)足類の軟體動物、體  
 軀は圓筒狀、側邊に鰓の肉質突起あり、口は頭頂に位し、其  
 周圍に十腕手を具し、其各内側に吸盤あり、中二本は殊に長  
 く物を捉へる用をなす、體內に石灰質の甲殻を藏し、腹部  
 の水管下に指頭大の囊を有して烏賊器を貯へ、外敵の襲來に  
 其黒液を放ちて其身を保護す、海産にして、種類多し。  
 いおう〔風〕一名 いかのほり。  
 いおう〔以下〕一名 これより下。これから後。  
 いおう〔五十日〕一名 小兒生まれて五十日目に當たる日。  
 いおう〔接頭〕一名 いかしき意を表はす語。一物。  
 いおう〔毯)一名 植(梁)の實の外側を包める殼状總苞の變形せ  
 しものにして、外面に長刺密生す。  
 いおう〔衣蛾〕一名 動(鱗)翅類の蛾、體は小形にして體長二分  
 許、全體は褐色、前翅は灰黄色にして暗  
 褐色の紋あり、後翅は淡灰白色なり、幼  
 蟲は約三分寸、全體殆ど白色、頭部淡褐  
 色にして、背上に赤褐色の縱線あり、衣  
 服・毛布等を食害す。  
 いおう〔位階〕一名 くらゐの等級、現今にては一位より  
 八位まで各正・從ありて、都合十六階なり。  
 いおう〔嚴)一名 いかしの説。



〔蝶衣〕

いはい—いはい

いはい〔以外〕一名 其のほか。このほか。  
 いはい〔意外〕一名 おもひのほか。あんなやい。  
 いはい〔遺骸)一名 死人の體體。なきがら。  
 いはい〔嚴)一名 嚴(形)二 甚だいかし。  
 いはい〔胃潰瘍)一名 病(胃)壁の粘膜に潰瘍の  
 發生せる疾患。  
 いはい〔如何)一名 どのやうに。どんなに。◎どうあら  
 うか。どうか。◎なせに。いかに。一はせん(句)な  
 んとせん。◎またな。  
 いはい〔化學)一名 化(學)に應用する化學。  
 いはい〔烏賊)一名 烏賊を造るに用ふる鹽(形)の  
 類、海底に沈め置き、烏賊の産卵するために集まり入りたる  
 とき引き上げて捕獲す。  
 いはい〔如何)一名 如何(一)形(二) 覺束なし。う  
 たがはし。◎思ひへし。みぐるし。  
 いはい〔葎)一名 葎は三稜にして強生し、直立二尺餘、  
 葉は短く、かやつりぐさに類す、茶褐色なる穗狀花を密生す。  
 いはい〔網結)一名 竹を以てつくりたる籠さる。  
 いはい〔齋垣)一名 蜘蛛の巣を結ぶと。  
 いはい〔威嚇)一名 威力を示しておとすと。  
 いはい〔射掛)一名 他、か下(二) 矢を向け放つ。  
 いはい〔沃懸)一名 沃懸(他、か下(二) こそまきか。  
 いはい〔異學)一名 主義を異にしたる學問。異端の學。  
 いはい〔醫學)一名 疾病及醫療に關する事項を研究する科  
 學。一せんもんがっこう(醫學專門學校)一名  
 〔醫學)學を専門とする文部省直轄學校。  
 いはい〔葎)一名 葎(葎草)科の一年生草本、諸國  
 の山野に自生す、莖は密生して直立し、高さ二尺に及び、三稜  
 にして平滑なり、葉は線狀にして莖に比すれば短く、梢頭に  
 茶褐色の穗狀花を密生す。  
 いはい〔胃擴張)一名 病(胃)壁の筋肉の收  
 縮力乏しくなりて、ひろがりゆるむ疾患。

いがり(一) 穂栗(一名) いがに包まれたる栗の實。いがりあり。あたま(穂栗頭)(名) こはき頭髪をいがりする如く短く刈りたる頭。いがり。

いかけ(鑄掛)(名) 銅器、鐵器などのわれめに、あるめなどを鑄(か)ちこみて、接ぎあはすと。鑄。

いかけ(沃懸)(名) いかけ。一、沃(沃懸地)(名) 窪地の上に、金粉又は銀粉をまきかけたもの。

いかさ(如何様)(名) いかにも其物らしき形したる。いせ。ま。い。一、如何様師(名) さきま(詐欺師)。

いさち(如何様立)(名) 角力にて、敵の聲をかけて立ちあがる。いさち勝せんと見せ、敵の力に抜けたるに乗じて、急に立ちあがって勝負せんとす。いさちもの(如何様物)(一名) 眞偽のうたがはしきもの。

いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

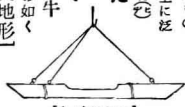
いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。



[たがだかい]

(名) 湿地に施す地形の一法。長材を二層以上ならべ、其上を「コンクリート」にて固むるもの。一、なます(筏船)(名) 料理の、結を繪とせ、飾の葉を筏の如くならべ敷きたるもの。一、のり(筏乗)(名) 筏に乗りて棹さし行く人。

いばり(筏張)(名) 縁板などの張り方、板の端手を順に送りて筏の如くに張りたるもの。

いがた(鑄型)(名) 金属の用器を鑄る模型、多くは土を用いて、中に鑄るべき器の形を空虚につくり、これに鑄かしたる金属をそそきて器を作る。い活字を鑄造する鋼鑄製の型、これに地金を注入して活字を作る。

いがた(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いがた(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いがた(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いがた(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いがた(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いがた(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いがた(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いがた(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いがた(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。いさ(如何様)(副) なるほど。まことに。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。

いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。いかに(如何)(副) どのように。いかに。



[ひがい]

いかく—いかに

いかた—いかに

いかに—いかに

七

いかむーいかり

あふ。●人互に言ひ争ふ。いさかふ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) 黙怒りはゆ。黙齒をあらはしてたり向かふ。かみつかんすとす。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。  
いかにむむめめ(唾)(目ま四) ゆがむ。

いかりーいかん

いかり(碇錨)一名(碇) 一種の船具、船給を一所にとどむるため、綱を付けて水底に沈めおく。おもひ、其形種々あり。水中にある物を釣上げてつり上ぐる用具。●紋所の名、いかりの形をとりあはせたるもの。――うを(碇錨)(名) (動) かじ。――そら(碇) 碇草。淫羊藿(名) (種) 小蘗科の多年生草本、山野路傍に生ず。數葉一



【(-)碇】

根より生ず、高さ一尺餘、葉は卵形にして全縁、三四月の頃花を莖頭に開く、四瓣にして形鐘の如し、色は淡紫、淡黄等種あり。――づな(碇綱) 名、いかりに附くる綱。――てんま(碇傳馬) 名、碇のあげざげに用ふる傳馬。――なは(碇綱) 名、いかりづな。――ばん(碇番) 名、敵に船の碇をさられざるやう、小船に乗りて番をする。又、其役の人。――ほうふう(碇防風) 名、防風の幕をさきて碇の如き形と左右の突起ありて碇に似たる物。――を打つ(碇を打つ) 碇を水底に沈む。――を下す(碇を下す) 碇を水底に沈む。――を戻す(碇を戻す) 碇を水底に沈む。――を戻す(碇を戻す) 碇を水底に沈む。

いかり(碇錨)一名(碇) 一種の船具、船給を一所にとどむるため、綱を付けて水底に沈めおく。おもひ、其形種々あり。水中にある物を釣上げてつり上ぐる用具。●紋所の名、いかりの形をとりあはせたるもの。――うを(碇錨)(名) (動) かじ。――そら(碇) 碇草。淫羊藿(名) (種) 小蘗科の多年生草本、山野路傍に生ず。數葉一

いかり(碇錨)一名(碇) 一種の船具、船給を一所にとどむるため、綱を付けて水底に沈めおく。おもひ、其形種々あり。水中にある物を釣上げてつり上ぐる用具。●紋所の名、いかりの形をとりあはせたるもの。――うを(碇錨)(名) (動) かじ。――そら(碇) 碇草。淫羊藿(名) (種) 小蘗科の多年生草本、山野路傍に生ず。數葉一

いかり(碇錨)一名(碇) 一種の船具、船給を一所にとどむるため、綱を付けて水底に沈めおく。おもひ、其形種々あり。水中にある物を釣上げてつり上ぐる用具。●紋所の名、いかりの形をとりあはせたるもの。――うを(碇錨)(名) (動) かじ。――そら(碇) 碇草。淫羊藿(名) (種) 小蘗科の多年生草本、山野路傍に生ず。數葉一

いかり(碇錨)一名(碇) 一種の船具、船給を一所にとどむるため、綱を付けて水底に沈めおく。おもひ、其形種々あり。水中にある物を釣上げてつり上ぐる用具。●紋所の名、いかりの形をとりあはせたるもの。――うを(碇錨)(名) (動) かじ。――そら(碇) 碇草。淫羊藿(名) (種) 小蘗科の多年生草本、山野路傍に生ず。數葉一

いかり(碇錨)一名(碇) 一種の船具、船給を一所にとどむるため、綱を付けて水底に沈めおく。おもひ、其形種々あり。水中にある物を釣上げてつり上ぐる用具。●紋所の名、いかりの形をとりあはせたるもの。――うを(碇錨)(名) (動) かじ。――そら(碇) 碇草。淫羊藿(名) (種) 小蘗科の多年生草本、山野路傍に生ず。數葉一

いかり(碇錨)一名(碇) 一種の船具、船給を一所にとどむるため、綱を付けて水底に沈めおく。おもひ、其形種々あり。水中にある物を釣上げてつり上ぐる用具。●紋所の名、いかりの形をとりあはせたるもの。――うを(碇錨)(名) (動) かじ。――そら(碇) 碇草。淫羊藿(名) (種) 小蘗科の多年生草本、山野路傍に生ず。數葉一

いかり(碇錨)一名(碇) 一種の船具、船給を一所にとどむるため、綱を付けて水底に沈めおく。おもひ、其形種々あり。水中にある物を釣上げてつり上ぐる用具。●紋所の名、いかりの形をとりあはせたるもの。――うを(碇錨)(名) (動) かじ。――そら(碇) 碇草。淫羊藿(名) (種) 小蘗科の多年生草本、山野路傍に生ず。數葉一

いかり(碇錨)一名(碇) 一種の船具、船給を一所にとどむるため、綱を付けて水底に沈めおく。おもひ、其形種々あり。水中にある物を釣上げてつり上ぐる用具。●紋所の名、いかりの形をとりあはせたるもの。――うを(碇錨)(名) (動) かじ。――そら(碇) 碇草。淫羊藿(名) (種) 小蘗科の多年生草本、山野路傍に生ず。數葉一

いかんーいき

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。



【(四)冠衣】

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。

いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。  
いかに(遺徳)一名(遺徳) 遺徳を著くこと。







いきわかれる(自)「いきわかの詔。

いきわたる(行渡)「名」いきわたると。ゆまくとくと。

いきわたる(行渡)「自ら四」あまねく及ぶ。残るくまなくと。ゆまわたる。

いき点(生何)「名」動物に餌として與ふるいきもの。

いきをぎめ(息收)「名」いきすみ。いきつき。

いきん(衣金)「名」衣服と夜具と。

いきん(遺金)「名」われおとしたる金銭。

いきん(生二)「名」命をたもちてあり。生存してあり。生きかへる。よみがへる。

いき(生)「自、か上」前後に同じ。

いき(生)「他、か下」いかにす。

いき(活)「名」草木を花器に挿して、生を保たしむ。動物を連ひ。つむ。

いき(行)「自、か四」ゆく。成る。出来る。得がし。

いき(接頭)「或語に冠して、敵の知れぬ意を表はす語。」

いぐい(居食)「名」いぐいを見よ。

いぐい(郁郁)「名、副」文物の盛んなるさま。

いぐえい(育英)「名」英才を教育する。

いぐか(幾日)「名」いぐいばくの日數。

いぐか(幾日)「副」いくたび。

いぐぐすり(生藥)「名」不死の藥。

いぐくむ(自、ま四)心中に憤怒す。いきどほる。

いぐさ(軍一)「名」軍門出。ぐんたい。たたかひ。せんざう。

いぐさ(軍神)「名」いくさの守護神。武神。いぐるま(軍軍)「名」戰陣に用ふる車。いづつこ(軍事)「名」いくさの圖柄をすする児童の遊戲。いぢま(軍大將)「名」主將の委任を受けて全軍の進退を掌る役。いぢま(軍立)「名」戰陣に出發する。いぢま(軍道具)「名」武器。軍器。いぢま(軍習)「名」軍

隊をねりならずと。うれん。いん(軍人)「名」い

くさをなす人。ぐんじん。い甲胃をつけた人。むま。

い(か)「名」軍門出。いくさだち。い(き)「名」

軍君。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍園。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」軍場。い(の)「名」

する。多くの人の同じ語をなす。

イダノランス(Bandaged)「名」無知。無學。愚昧。

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

い(的)「名」矢を射る目標。ま。い(的)「名」

てびり—てびり

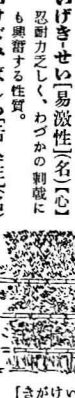
いけいさいばい【遊管器一名】法】舊刑法にて、重罪輕罪以外の拘留又は科刑に處せらるゝ、輕き罪。

いけいれんばい【胃痙攣一名】病】胃の痙攣、劇痛を發し、甚しきは卒倒す。類のこと。

いけうを【活魚一名】いけすの中にかしおく魚。

いけがき【生垣一名】樹木を植ゑられて作りたる垣根。

いげきせい【易激性一名】心】忍耐力乏しく、わずかの刺激にも興奮する性質。



【きがけい】

いけごみはしら【活込柱一名】地中に根を埋め込みて立てたる柱、枝折戸等の柱に用ふ。

いけまやあまや【生酒蛙】酒蛙一名】つりにくきまで蒸面皮なると。あつてまします。

いけす【生簀一名】魚をいけおく所。【監】。いぬね【生簀船】一名】いけがね。

いけすかない【生不好一名】若だしく嫌ふべき。

いけすみ【活炭一名】灰に埋めおきて其火を永く保たしむる炭火。うづみびく燧火。

いけだすみ【池田炭一名】播州東谷村一庫地方にて燒き、専ら他田より出だす煙煤の炭。【產出す】煙草。

いけだタバユ【池田煙草一名】阿波國三好郡池田地方にいけだくり【活作】料理の名、活きたる鯉を、腹部及大骨に圍れざるやう肉を切り取りて刺身に作り、再び原形の如く其肉を排列しおくもの、これを盤上に乗せて賓客の前に出し、箸を執りて其大骨に觸れば、其體割裂として動く。

いけどり【生捕一名】いけとんと。生捕。【生きながら捕へたる】敵人と。捕虜。

いけとる【生捕】他ら四【敵人を生きながら捕ふ。

いけにへ【生贓犧牲一名】獸を生きながら神に奉りて、へとすと。又、其獸。【或物事のために、名利・生命等をすつと。又、其人。】

いけのぼら【池坊一名】我國に於ける花道の家元、花道の祖小野妹子の嫡流を承くるもの。

てびり—てびり

いけのま【池間一名】鏡の小突起の駢列したる所の下方。

いけはき【生判一名】いきはき。

いけはな【活花生花一名】草木の花枝を切り採りて、これを花籃に挿していかしおく。又、其枝柄。

いけふくら【生袋一名】鷹の生餌をいれおく袋。

いけふ【活船一名】生魚をいけおく水櫃。

いけま【生馬牛皮消白免籠一名】植】履物、草鞋の夏生草木、山地に自生す。莖は綠色にして紫色を帯ぶ。葉は對生し卵形にして薄し、夏日、葉脈に長梗を抽え、其頂に白色の無形花を開き、細長の果實を結ぶ。根は藥用に供せらるる。

いけま【活間一名】塩摺したる魚又は釣餌とする魚を活かしくために設けたる船の一部、其底又は其側面外部の水の流通するやうに穴を穿つ。

いけみく【池見草一名】植】速の異稱。

いけむ【時時】いけむ、草、か下【ゆくを得。【なすを得。】

いける【活】他】しくの語。

いけん【異見一名】他と異なる考へ。いぜん。【自己の所存を告げて談むること。いさめ。いましめ。【ほう】意見封事一名】中古、直言を求められたる教官に對し、詔臣の意見を上りし封事。

いけん【違惑一名】違法の精神又は條文に違反すること。

いけん【威威一名】おたがひのことば。

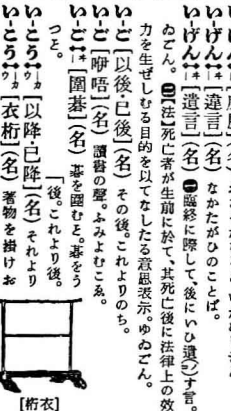
いけん【違言一名】幽終に際して後にいひ遺す言。ぬぞん。【法】死に者が生前に於て、其死亡後に法律上の效力を生ぜしむる目的を以てなしたる意思表示ゆゆぞん。

いご【已後】已後一名】その後、これより。【一】即悟一名】頭昏の聲、ふみよひこ。

いご【園基一名】事を圍むと。事をうつつと。

いご【以降】以降一名】それより後。

いご【衣桁】衣桁一名】著物を掛けおく具。衣架。



【桁衣】

てびり—てびり

いこう【異香】異香一名】普通ならぬ好き香氣。

いこう【意向】意向一名】このころのおもむく所。ころはせ。【倫】豫想したる結果、企圖せられたる結局。

いこう【移項】移項一名】【歌】等式の一邊にある項を、符號を更へて他邊に移す。

いこう【遺毒】遺毒一名】死後に遺したる草毒。

いこう【倖功】倖功一名】おほいなるいさを（倖勳）。

いこう【威光】威光一名】いかめしいまはり。おそれうやいこく【異國】一名】自國以外の國。とづくに。外國。【一】亦うちやう【異國情調】一名】自國ことなる外國の風物又は気分。一【一】異國人一名】外國のひと。一【一】せん【異國船】一名】外國のふね。一【一】はり【異國張】一名】古衣を洗ひ強りて、新しくのもの如くにする。

いご【動】動一名】自か四】うご。

いご【氣】氣一名】任意地の體】ちをはると。

いご【植】植一名】他、さ上】植物などを根こきに掘る。【ぞの春】いじりて植ゑし。

いご【遺骨】遺骨一名】死者のほね。

いご【四】四一名】他は四】のしる。ええしやしや、いご【思】思一名】息懃【自は四】魚をつぐ。やすむ。

いご【息】息一名】息懃【他は下二】いこはしむ。やいご【射】射一名】射込【他、ま四】矢を射入る。

いご【達】達一名】金屋を焼かし、型さの内流し入る。【鶏りぬる。】

いご【忘】忘一名】【一】名を實こみ清めて家に

いご【射】射一名】【數】等式、即ち。

いご【遺恨】遺恨一名】のころうらみ。ざんねん【遺恨】。

いご【遺言】遺言一名】ぬげん。

いご【今當】今當一名】佛】過去と現世と未來と。



**ふね**〔漁船〕(名) いまりするふね。れふせん。まほう。すなとりふね。——りりょう〔漁獵〕(名) 大海を徒渉し、**獲**にて魚を突きとる漁法。

**いざり**〔膝行〕(名) 「ゐつら」を見よ。

**いざり**〔竹〕(名) 竹をあみてつくれる器。

**いざる**〔他〕(他) 〔さ〕すなどる。あまる。

**いざきを**〔勳功〕(名) 名譽ある成績にてがら。いさほう。

**いざきを**〔勳功〕(名) いさほう。

**いざん**〔遺算〕(名) 勘定の相違かんぢやうちがひ。計量の相違てめかりのはかりと。

**いざん**〔遺産〕(名) 〔法〕死亡者の一身に専屬せる財産にして、未だ相続者に歸せざるもの。——**いざん**〔遺産相續〕(名) 〔法〕相続の一、死亡者の遺産を相続する人。法定の順位は、第一は直系卑屬、第二は配偶者、第三は直系尊屬、第四は戸主にして、直系卑屬又は直系尊屬の間にては親等近きものを先にし、同親等にして同順位なるものにては共に相続人となる。

**いし**〔石〕(名) ①岩石の薄片にして砂より大形なるもの。石材。②ごし。③硯。④が流れて**木葉が沈む**〔句〕物事の顛倒して常態を失ふ。⑤に**沈む**〔動〕すこも常人の感じなきに變へふ。⑥に**激ぎ流に沈む**〔句〕(常)の操縦が、石に沈し流に激ぐとよふべきを誤りてひし語、其友王将にとがられて、うまく強辯して逃げたり、吾妻と出づる漁舟の強きといふ。⑦に**沈し流に激ぐ**〔句〕山水の間に隔通して自由の生活をなすに似し。

**いし**〔矢〕(名) ①(楚)の熊渠子が夜間に石を見て虎となし射て其矢の羽までも石に入りし故事、轉訛外傳に出づ。②念をこめて石に當たれば、徹底せざるに譬へふ。③に**針**〔句〕石に突。④の上にも三年(句)石の上なりとて、三年もつづけて居れば癪まるとの義、つらくとも忍耐して勤め居れば、自然に他の同情及信用を得て成功すべきに

**いそ**〔石〕(名) 浮き上るを得ざるに

いふ。危きことの甚しきにいふ。必ず滅亡するに似し。

**いそ**〔醫師〕(名) 醫術を開業せる人。いしゃ。

**いそ**〔意思〕(名) おもひ。かんがへ。こころ。

**いそ**〔意志〕(名) こころさし。こころばせ。そのま。おもわく。

**いそ**〔意志〕(名) 心の能動の方面の汎稱。思慮し選擇し執行する心的作用の特稱。——の**自由**〔句〕自由意志の條を見よ。

**いそ**〔蕪弱〕(名) 意志の力よわくして、忍耐又は刻苦若しくは決行をなし得ざる。

**いそ**〔異志〕(名) ふたごころ。そむかんとすこころ。①なみなみなぬこころさし。②「てきまにつかふと」

**いそ**〔頤使・頤指〕(名) あごにて人をつかふと。人を見下げ

**いそ**〔椅子〕(名) 腰をかくる具、方形にして四脚、左右に欄を設け後よりよりかありり、上に茵を敷く、昔時貴人の奢座するに用ひしもの。

**いそ**〔意趣〕(名) 「いそゆ」の訛。

**いそ**〔遺子〕(名) 遺腹の子。わなれがたみの子。

**いそ**〔遺志〕(名) 死者生前の意志。いしげれし。〔美〕形二) よろし。このまじ。あぢやうし。うまし。③てきはし。④殊勝なり。文字なり。いそ〔意字〕(名) ましとして意義を表はす文字 漢字の類。

**いそ**〔異事〕(名) 普通ありやうにさがる事、非常の事。

**いそ**〔異時〕(名) ほかのとき。他時。往時。

**いそ**〔意地〕(名) ①こころね。根性。②思ひこみをつらぬかんとすこと。③ことさかに人にさからふと。——に

**いそ**〔意地〕(名) 意地を張りてせむ。

**いそ**〔遺事〕(名) ①古來のこり傳はれる事蹟。②生前になしおきたる事蹟。③もれおちたる事蹟。

**いそ**〔遺兒〕(名) わしれがたみの子。

**いそ**〔維持〕(名) もちたふと。たもちさふと。

**いそ**〔Easy going〕(名) 容易なる道のみを遊ぶと。①インク〔Easy going〕(名) 容易なる道のみを遊ぶと。②氣なると。——チェーン〔Easy chain〕(名) 安樂椅子。



[子椅]

**いしあはせ**〔石合〕(名) 一種の遊戲、「いしなご」の類にして、石を左右あはせて、勝負を決するもの。

**いしあやめ**〔石菖蒲〕(名) 「菖」せきまほう。

**いしじいし** (名) だんて。

**いしじいし** (名) だんて。

**いしうす**〔石臼〕(名) 石にてつくりたる臼。——**いし白蘘** (名) 石臼は産數にあげぬものなるよりいしはれの場所に役にしたたぬ。

**いしうち**〔石占〕(名) 小石を互に打ちつけあふと。①結婚の夜、其家の中に小石をなげ込む風習、いしうちのそや。②一のそや「石打征矢」(名) いしうちのはねにてはきたる矢。③一のはね「石打羽」(名) 鷹の尾の羽の左右の端より第二ににあたれたるもの、極めて強きが故に、矢にはぎて珍重す。④一のやなぐひ「石打胡蝶」(名) いしうちのそやをいなるやなぐひ。

**いしうら**〔石占〕(名) 石を擧げ其軽重などによりて、吉凶

**いしおム**〔石占〕(名) 縁語。成語。慣用語。

**いし**〔石匠〕(名) 石師。石工。石師。石工に關して官廳の語間に應じ又は建築をなす機關、府、縣、市に設立し、其各地方の醫師を以て組織す。

**いし**〔石垣〕(名) 石を積みあげて造りたる垣。——**いし**〔石垣〕(名) 〔動〕標榜の魚鱗は扁く、鰭形の小鱗を被る、垣は集合して上下各一枚となり、全身は灰色にして黒褐色の斑點あり、南海に産す。

**いし**〔石〕(名) 石を積み上げてつくりたる壁。——**いしがけ**〔石崖〕(名) 石を積み上げてつくりたる崖。——**いし**〔石崖小紋〕(名) 雄狹の形、大の脚を組みあはせて、石崖の形に似たるもの。①**いし**〔石崖〕(名) 雄狹の形、石崖の合はせ目にかたり、六角形をならべたるさとの紋。

**いしが**〔石壁〕(名) 〔動〕壁の一種、胸甲は幅廣く腹部は小さく且扁平、第一對の脚は必ず整齊に整じ、其色赤し、顔

**いしかは**〔石川〕(名) 底に石の多くある川。

**いしがへし**〔石〕(名) 底に石の多くある川。

**いしがへし**〔石〕(名) 底に石の多くある川。

**いしがみ**〔石神〕(名) 石を神體とせる神。

**いしがめ**〔石龜水龜〕(名) 〔動〕龜の一種、大形なるものは甲の長さ六七寸に達す、頭尾及四肢全く甲中に縮め入るゝを得、我國到る處の池沼に産す。

**いしがれひ**〔石鱗〕(名) 〔動〕軟骨類の魚體形は頗る側扁にして卵形、兩眼は其右側面にあり、口は小くして仰向す、體色は褐灰又は淡褐、體長二尺許に達す、淺き砂質の海底に棲息し、東北の海に多く産す。

**いそぎ**〔意識〕(名) 〔心〕心の作用の一切、又心の覺醒してある状態。(佛)八識の一、分別思案の心。――ようそけい〔意識要素〕(名) 〔心〕意識の内容を分析して更に分つと能はざるに至りし要素。――りゅううけい〔意識流〕(名) 〔心〕意識の流轉。

**いしき**〔石槌〕(名) 石にて壘み、槓を入るゝ處。

**いそきかん**〔違式〕(名) 中古の法制にて、式にたがへる行爲。

**いそぎ**〔石菊〕(名) 〔動〕珊瑚類の腔腸動物、洞中に産し、單獨にて生活す、履多の觸手を具へ、其数は必ず六の乘數、石灰質の骨格は其軟骨の觸脚に似る。くさびらしい。

**いそきたな**〔意地穢〕(名) ①むさぼりてのみくひする。②ものをしみなると。――げ〔意地穢氣〕(名) 意地きたなきもの。③意地穢(名) 意地きたなき。又、其度名。――ししげ〔意地穢(形)〕(名) いぢきたなにてあり、むさぼる心あつし。

**いしきり**〔石切〕(名) ①石を切る。②石を切る職人。――のみ〔石切鑿〕(名) 本まるく末尖りたる鑿、石を彫り又は切る用ふるもの。――は〔石切場〕(名) 石材を切り出すところ。いしやま。

**いそきり**〔意趣斬〕(名) ①いそぎりの詠。

**いしく**〔石工〕(名) 石を切る職人。いしきり。

**いしくばり**〔石配〕(名) 匯基にて、始めに石を要點に置き、大體の陣形を立つと。

**いしくみ**〔石組〕(名) 庭園に石を配置すると。

**いしぐら**〔石蔵〕(名) 石を疊みて送りたる倉庫。

**いじくる**〔弄〕(他) ①いぢくるを見よ。

**いじぐるま**〔石車〕(名) 大石を運轉するに用ふる車、多くは車體低くして四輪を附く。

**いしけれ**〔石塊〕(名) 小まさ石。石のかけ。いしころ。

**いしけ**〔名〕 〔植〕褐藻類の海藻、沿岸の干漕縁内に産す、全體黒褐色にして枯枝状、末梢は扁平、多く肥料に用ふ。

**いしけた**〔石下駄〕(名) 土古、墳墓の中にをさめし副葬品、石にて下駄の形を模造したるもの。

**いしけり**〔石蹠〕(名) 一種の遊戯、地上に履多の區劃を設け、箇の小石を片足にて蹴りつつ、區劃を逐ひ行くもの。

**いじける** (自) ①いぢけるを見よ。

**いしけん**〔石拳〕(名) 一種の遊戯、手を握りたるを石、手を開きたるを紙、指を二本出だしたるを鉄とし、紙は石に、石は鉄に、鉄は紙に勝つものと定め、各人同時にこれらの手勢をなして勝負をなすもの。きんけん。

**いしこ**〔石粉〕(名) 長石の粉、ガラスの材料に用ふ。

**いしごけ**〔石後家〕(名) 貞操の堅固なる後家。

**いしごつば**〔石木端〕(名) 石を切りたる屑。

**いしごひ**〔石鯉〕(名) 〔動〕せきんか。

**いしごら**〔石塊〕(名) 小まさ石。いしくれ。

**いしごら**〔石衣〕(名) 乾菓子石の名、蛤に水飴を加へて煉り固め蜜をつけて製したるもの。

**いしざい**〔石細工〕(名) 石材の細工。

**いしざか**〔石坂〕(名) 石の多き坂、又は石疊の坂。

**いしざり**〔石地〕(名) 石の多き土地。①いしぢぬり。――ぬり〔石地塗〕(名) 灰色にして光澤なき漆塗。

**いしお**〔石〕(名) 〔礦〕鑛石のまゝなる雌黄。

**いしお**〔石敷〕(名) 石を敷きつめた所。

**いしそり**〔石尻〕(名) 石垣などの石面より最も奥なる端。

**いしすみ**〔石炭〕(名) 〔礦〕せきたん。

**いしずり**〔石摺、石榑、石本〕(名) 石碑などの文字を、油ずみなどを用ひて、紙に地黒く字白く摺り取りたる摺物、又、これと同じ状に、木に刻みたる文字を、紙に地黒く字白く表はして摺り取りたる摺物。〔物事の基礎。物事の主題。〕

**いしすみ**〔礎〕(名) 〔石〕摺の義。〔建設物のどい。〕石石。〔礎〕。

**いしたたき**〔石叩〕(名) 船にて鑛石を粉砕する。又、其

**いしたたみ**〔石疊〕(名) ①板石を敷きならべたるもの。(楚) ②いした。〔摺物の隅の隅の材の木口を、交互に喰ひ違ひに敷くこと。〕③木口の交はる組み方。④方形をならべ、一つ置きに白黒を入れがへたる

**いしたて**〔石立〕(名) いしけり。

**いしたて**〔石錐〕(名) 〔動〕硬骨類の魚、體は褐色體形石錐頭に似、我國の近海に多く産す。

**いしたん**〔石段〕(名) 石にて作りたる段。

**いしたつ**〔遺失〕(名) ①とりおとすと。わすれおくと。〔法〕所持者が抛棄する意もなくして、物品の占有を失ひ、其所在の知らざること。②あやまち。あそごなひ。――そや〔遺失者〕(名) 〔法〕物品を遺失したる當人。――ぶつ〔遺失物〕(名) 〔法〕遺失したる物品。とりおとしもの。わすれおつ。〔異日〕(名) (左氏傳註に)「夏日可畏」とあり、夏いしつるをが、石築地に、夏日可畏。〔後天の日。〕

**いしつき**〔石附〕(名) 土中に朽ちたる竹の根。

**いしつき**〔石突、鐵、鑢〕(名) ①刀劍のこざり。〔鑢〕。長刀、又は杖などの地にあたる方、のさきを包みたる金具。りあひ。いしき。

**いしつくり**〔石造〕(名) ①石を細工する職人。②石を用ひ

**いしづけ**〔石漬〕(名) 湖沼の淺處に石を中柱に積み、蝦、鰍等のこれに集まるを捕ふる漁法。

**いしづたひ**〔石傳〕(名) 石を傳ひて渡ると。



[[三]](三)石

いしつづら 〔石櫃〕(名) 石にてつくられる劔、(石櫃)ともち討てしやまむ。

いしつぼ 〔石室〕(名) 伊勢神宮内に、祭儀のとき使役・神官等の着座すべき位階(いしつぼ)に、石を敷きたるもの。

いしつみ 〔石積〕(名) 小児の遊戯、積み重ねたる石の中より、他の石を動かさずに多く取りたるを勝とするもの。

いしどろうろ 〔石燈籠〕(名) 石づくりのとうろう。

いしどとき 〔石鷄冠〕(名) 石の如く堅きときか。

いしなぎ 〔石投〕(名) 〔動〕硬藍類の魚體は側面にして鱗細大體金魚形にして體長五六尺に達す、深海の磯間に産し、味美ならずして少海あり。

いしなげ 〔石投〕(名) 石をなぐると。又、

いしなご 〔石子〕(名) 小き石。

いしのおつば 〔石御堂〕(名) いしつぼ。

いしのおび 〔石帯〕(名) せきたい。

いしのおほど 〔石大床〕(名) せききく。

いしのひ 〔石火〕(名) 燧石にてきり出す火。きりび。

いしのま 〔石間〕(名) 神・権・攝造の神社の本殿と拜殿との間に石を敷きたることを。

いしのみ 〔石盤〕(名) いしきりのみ。

いしはし 〔石階〕(名) いしだん。(燈)。

いしはし 〔石橋〕(名) 石にて造りたる橋。――を叩いて渡る(句) 石橋さへも叩きて、其堅固なるをたしかめたる上にて渡る義用心の上にも用心するにいふ。

いしはじき 〔石弾〕(名) 一種の兵器。古昔、敵陣へ石を投



【ぎなしい】

ぐるに用ひしもの。(積) 一種の遊戯、雙方互に盤上に石をならせおき、指先にてこれを弾きあり、中りたる敵の石を取りて、勝負を争ふもの。だんき。

いしはしら 〔石柱〕(名) 石にて造りたる柱。

いしはち 〔石鉢〕(名) 石にて造りたる鉢。

いしはひなび 〔石花火〕(名) 〔動〕せまつ。(火)。

いしばひ 〔石灰〕(名) 〔化〕カルシウム<sup>2</sup>の粉末、白色を呈す、石灰石・介殼等炭酸カルシウムを主成分となすものを石灰窯に入れ、焼きて製す、漆喰・セメント・肥料等にも用ふ。――いし 〔石灰石〕(名) 〔礦〕せきくわいせき。――

いしばい 〔石灰窯〕(名) 石灰石・介殼等を焼きて石灰を製する窯。――のだん 〔石灰灰〕(名) いしばひを固めて造りたる壇、播磨殿の東階の南にあり、伊勢神宮遷葬のために設けらる。――のま 〔石灰間〕(名) 前條に同じ。――

いしはら 〔石原〕(名) 小石の多くある處。

いしはら 〔石張〕(名) 土木工事にて、すべて表面を保護するたけ、石を張ると。いしだま。

いしはら 〔石刺鯛〕(名) 〔動〕あかめだひ。

いしはら 〔石挽歌〕(名) きやりの一種、大なるを運ぶいしひり 〔石聖〕(名) 佛擲行の極めて堅固なる僧侶。

いしひや 〔石火矢〕(名) 古昔に使用せられし兵器、大砲の前身といふべきものにして、當時専ら攻城に用ひられ、石片を以て彈丸となしし。

いしひや 〔石刺鯛〕(名) 〔動〕あかめだひ。

いしはら 〔石原〕(名) 小石の多くある處。

いしはら 〔石張〕(名) 土木工事にて、すべて表面を保護するたけ、石を張ると。いしだま。

いしはら 〔石刺鯛〕(名) 〔動〕あかめだひ。

いしはら 〔石挽歌〕(名) きやりの一種、大なるを運ぶいしひり 〔石聖〕(名) 佛擲行の極めて堅固なる僧侶。

いしひや 〔石火矢〕(名) 古昔に使用せられし兵器、大砲の前身といふべきものにして、當時専ら攻城に用ひられ、石片を以て彈丸となしし。

いしひや 〔石火矢〕(名) 古昔に使用せられし兵器、大砲の前身といふべきものにして、當時専ら攻城に用ひられ、石片を以て彈丸となしし。

いしはら 〔石原〕(名) 小石の多くある處。

いしはら 〔石張〕(名) 土木工事にて、すべて表面を保護するたけ、石を張ると。いしだま。

いしはら 〔石刺鯛〕(名) 〔動〕あかめだひ。

いしはら 〔石挽歌〕(名) きやりの一種、大なるを運ぶいしひり 〔石聖〕(名) 佛擲行の極めて堅固なる僧侶。

いしひや 〔石火矢〕(名) 古昔に使用せられし兵器、大砲の前身といふべきものにして、當時専ら攻城に用ひられ、石片を以て彈丸となしし。

いしはら 〔石原〕(名) 小石の多くある處。

いしはら 〔石張〕(名) 土木工事にて、すべて表面を保護するたけ、石を張ると。いしだま。

いしはら 〔石刺鯛〕(名) 〔動〕あかめだひ。

いしはら 〔石挽歌〕(名) きやりの一種、大なるを運ぶいしひり 〔石聖〕(名) 佛擲行の極めて堅固なる僧侶。

いしひや 〔石火矢〕(名) 古昔に使用せられし兵器、大砲の前身といふべきものにして、當時専ら攻城に用ひられ、石片を以て彈丸となしし。

いしはら 〔石原〕(名) 小石の多くある處。

いしはら 〔石張〕(名) 土木工事にて、すべて表面を保護するたけ、石を張ると。いしだま。

いしはら 〔石刺鯛〕(名) 〔動〕あかめだひ。

いしはら 〔石挽歌〕(名) きやりの一種、大なるを運ぶいしひり 〔石聖〕(名) 佛擲行の極めて堅固なる僧侶。

いしひや 〔石火矢〕(名) 古昔に使用せられし兵器、大砲の前身といふべきものにして、當時専ら攻城に用ひられ、石片を以て彈丸となしし。

いしはら 〔石原〕(名) 小石の多くある處。

いしはら 〔石張〕(名) 土木工事にて、すべて表面を保護するたけ、石を張ると。いしだま。

いしはら 〔石刺鯛〕(名) 〔動〕あかめだひ。



【らくましい】











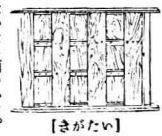
いそふぐ「磯河豚」(名)【動】志はきいへや。  
 いそふし「磯節」(名) 俗曲の一種、常陸國磯濱町より起りたる故に此名あり。  
 いそふな「磯鰯」(名)【動】硬質類の魚、鱗は長くして側扁、鰭は鰭状にして黃褐色、房相地方の近海に産す。  
 いそふり「磯鯛」(名) 磯邊によする波。  
 いそべ「磯邊」(名) 磯のほとり。はまべ。  
 いそま「磯間」(名) 磯のほとり。  
 いそまき「たまご」(磯巻玉子) (名) 料理の名、淺草雜貨にて玉子の薄焼を巻きたるもの。  
 いそまくら「磯枕」(名) 磯邊にてたびねすと。なまみくら。いそね。天の川原にーくら。  
 いそまつ「磯松」(名) 磯邊に生ふる松。【植】濃松科に屬する多年生草本、海邊の砂地石間に生ず、葉は狭長分ち、硬くして脆しあり、葉は莖頭に濃緑して、窩形全縁、秋冬の間、穂状花を開く、花は五瓣にして紅色又は黄色(石菘葱)。  
 いそめ「蚯蚓」(名)【動】環蟲類の一種、みみずりに似て長く、五六寸より一尺に及び、金屬性光澤を有す、體環の兩側に突起あり、海洋の砂中に棲む、鉤餌とす。  
 いそめく「かたけ」(急) (自、か四) いそぐまなり。  
 いそめばる「名」【動】もい。  
 いそめく「名」(植)福壽藻類の海藻、太平洋沿岸に多く産す、全體四五寸乃至一尺、枝の體部は固く、葉は薄刀形にして中肋脈を有せず、頂端は截形にして鋭角あり、倒卵形の葉脈を有す。  
 いそも「磯木」(名) 磯の波うちきは。  
 いそもな「磯最中」(名) 菓子の名、具形に焼きて、中に羊羹又は餡を入れたる最中。  
 いそもの「磯物」(名) うみくさ。海藻。  
 いそや「磯屋」(名) 磯邊にある家。  
 いそやかた「磯館」(名) 前條に同じ。  
 いそやき「磯燒」(名) 菓子の名、體圓粉に長手、鶏卵を加へて攪り、四つ醬油を和して煉りたる後、鍋の上に流し焼き、餡を包みて、砂中に疊みたるもの。  
 いそわ「磯回」(名) 磯のほとり。

いそやーいそわ

いそわし「磯鷲」(名)【動】海邊に棲む鷲。  
 いそん「異損」(名) 收獲の例年より減少すること。  
 いそん「遺存」(名) あとにのこりてあること。  
 いそん「異存」(名) 異なりたる意見。  
 いそん「異存」(名) 射貫(他、さ懸)射たる矢まとを外した板(名)【材】材木を薄く疊(う)ひき割りたるもの。  
 いそん「異存」(名) 射貫(他、さ懸)射たる矢まとを外した板(名)【材】材木を薄く疊(う)ひき割りたるもの。  
 金屬又は石などを薄く疊(う)ひきたるもの。【いた】のものを。一に著く【句】演藝におちつきを生じて巧になる。  
 又、地位にそぐひてあはしなく。  
 いた「痛」接頭 或語に冠して、いたき意を表はす語。  
 いたあふき「板屑」(名) 薄き板をあやぎにて磨りたる。  
 いたい「衣帶」(名) 【こ】もとおびと。【醫】東、東帶。「扇」。  
 いたい「異體」(名) 【か】はりたる姿。【こ】となるからだ。  
 一「どうあん」(異體同心) (名) 身體はことなれど、心のおなじと、相互の極めて親密なること。  
 いたい「遺體」(名) 【父】母の此世にのこしたる自己の身體。【な】まがらまかばね。  
 いたい「位袋」(名) 中古、朝官の朝服に著けし袋、色は服色に従ひ、位階によりて其色及び結び方を異にせり。  
 いたい「偉大」(名) すぐれてよとき。ひいでておほいなること。りばなること。  
 いたい「名副」(名) 傷氣の勢、小兒などのいたいたしくあはれむさま。  
 いたい「さかり」(一盛) (名) 小兒のきはめていたいけなす年頃。  
 いたい「板石」(名) 板の如く薄く長(ま)き石。  
 いたいたく「痛痛草」(名) 蘆(い)らぐさ。  
 いたいたく「しんじ」(名) 傷傷(形二) はなはだあはれむべきさま。一「さ」傷傷(名) いたいたく。又、其度合。  
 いたえん「板縁」(名) 板を張りたる縁。  
 いたおひ「板板」(名) 修験者の用ふる一種の笈(か)常のもの、其形を異にし、長方形の取附に太き縁を附け、其下端を長くして脚とし、連繋を附けて背に負ふもの。  
 いたかき「板缺」(名) いたえり。

いそわーいたか

いたがき「板垣」(名) 板にて造りたるかきいたえり。まきかけ。  
 いたがけ「板掛」(名) いたえり。  
 いたがこひ「板圍」(名) 普請場などの外がこひに設くるかりの板圍。  
 いたがしら「板頭」(名) 宿場女郎のおま。  
 いたがす「板槽」(名) 板のごとくにかためたる酒のかす。  
 いたがね「板金」(名) 金屬を板のごとくに厚くくばしたるもの。  
 いたがひ「板側」(名) 馬を厩の中にて飼ふと、(欄側)。  
 いたかぶ「板株」(名) 徳川時代に、版播の稱。  
 いたかぶ「板」(名) 一抱(他、は下二) だきかかふ。  
 いたかべ「板壁」(名) 板張にしたる壁。  
 いたかべ「板」(名) 板張にしたる壁。  
 いたがみ「板紙」(名) 板の如き厚くかた紙。  
 いたがらす「板硝子」(名) 表面の平かなる硝子、鏡を作り又は窓に嵌むる等、種々の用に供せらる。  
 いたからと「板唐戸」(名) 板を二枚ならべ、上下に端咬(か)を附けたる簡扉の戸。  
 いたがる「板」(痛) (自、ら四) いたしと思ふ。  
 いたき「むね」(抱籠) (他、ま下二) だきこむ。  
 いたき「く」(抱籠) (自、か四) だきこむ。  
 いたき「板切」(名) 板の断片。  
 いたく「依託」(名) たよると。たのむと。【か】こつくる。【も】たせかくと。一「がくせい」(依託學生) (名) 學費を交付して或學校に教養を依託したる學生。一「あや」(依託射擊) (名) 照準を正確ならしめたるため、鏡を槍壁に託して射擊すること。一「てんぼう」(依託電報) (名) 【法】電報の配達を受けたるとき、其配達人に依託して差出すことを得る特殊取扱の電報。  
 いたく「委託」(名) 【ゆ】だねまかすと。あづけたのむ。【法】他人に對し、自己のために法律行為又は其他の事務をたのむと。一「はんはい」(委託販賣) (名) 【商】商



【きがたい】

いたかーいたく

いたくーいたし

品を委託して販賣せざす。

いたく(一)唯諾(他)ひかかれたる言のうけこたへ。  
いたく(二)抱(他)か(四)腕の内に物をかかへもつ。だ  
く(三)なかに圍む。心中に厭す。

いたくふつ(委託物)委託したる物品。一ひきよ  
う(一)委託物費消(名)往(他)他人より委託を受けたる  
物品を委託者の承諾を經(す)して任意に費消する。

いたくら(板倉)板倉(名)板を壁として造りたる倉。  
いたくら(二)板車(名)牛車(一種)板を強りて作る。もと  
貴賤を通じて乗用せしが、後漸く下賤の輩などに用ひらる。

いたげ(痛氣)痛氣(名)いたきま。  
「増せば。」

いたげ(板子)痛(形)いたし。いたけの日にけに  
いた(一)板子(名)和船の底にあるあげた。  
「一枚」

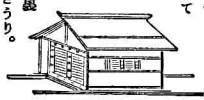
いた(一)板輿(名)屋形の三方を板にて  
張り、前に輿を拵けたる輿。「一事」

いた(一)と(一)痛事(名)甚しく困りたる  
いた(二)と(一)潮來節(名)俗曲の一  
種徳川時代の中頃に下徳國潮來(一)より  
流行し始めたもの。

いた(一)と(一)板護謨(名)板状に製したる  
いた(二)と(一)板金剛(名)板を裏  
に附けたるさうり。さうりけた。いたつけさうり。

いた(一)と(一)痛(名)いたき。又、其度。  
いた(二)と(一)痛(形)一)身體にいたみを感じず。いたみ  
あり。二)おもひやまし。いた(三)と(一)憐れむべし。いたは  
し。一)かゆし(一)痛痒(名)搔けば痛く、搔かねばかゆ  
き。何れも感置のつきかぬるにいふ。痛くもない腹  
を痛られる(句)自己に關係なき事に就きて疑はるるに  
いふ。痛くも震(一)くもなし(句)少しも影響又は刺戟  
を感じざるにいふ。「いと善し。すばらし」

いた(一)と(一)甚(形)二)はなはだし。まじし。ひとし。  
いた(二)と(一)鑄出(名)鑄型に入れて作り出したるもの。一)  
もよう(一)鑄出模様(名)鑄出によりたる模様。



[しごたい]

いたしーいたす

いたし(一)うた(一)出歌(名)五節の舞のときうたふ歌。  
いたし(二)うち(一)出桂(名)いだしぎぬ(一)。

いたし(一)ち(一)致方(名)えた。たまやう。  
いた(一)と(一)板敷(名)板を敷きたるころ。

いたし(一)ぎぬ(一)出衣(名)古昔、直衣袴衣などの下着を、上  
著の裾の下より見ゆるやうに著し。又、其下著。古昔、牛  
車の裾の下より、袖裾袴などを出し。又、其衣服。

いたし(一)ぐるま(一)出車(名)古昔儀式の時節りて立て並べ  
たる車、女房など車の下より袖口などを出して乗る。

いたし(一)づま(一)出棲(名)いだしぎぬ(一)。  
いた(一)と(一)と(一)板部(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いたし(一)ふづく(一)出文机(名)つけあゆん。  
いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。



[リザすたい]

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いたたーいたち

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

いた(一)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(二)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。  
いた(三)と(一)と(一)板(名)裏に板を張りたる輦。

及種類を交互に異ならしむると。

いたつて(射立)他、た下(二)矢をつづけて射る。

いたつがはし(ワシ)ワシ(一)「勞」形、(二)「勤勞」をい

はねをきりてあり。ワシ(一)はしなやまし。

いたつき(平座筋)名、矢鏝の一種、形小にして鋒圓(一)

、多く弓筋を學ぶときに用ふ。「なやみ。疾病。

いたつき(勞)名、「ほねをり。勤勞。」「いさをし。功勞。」「

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたつき(自か四)「ほねをる。つとむ。」「や

いたて(射立)他、「いたつての訛。

いたてん(韋駄天)名、「韋駄は梵語、(二)佛」佛法

守護の神、甲冑を著し劍を持す、一に韋天將軍といふ、俗に魔

王の佛舍利を奪ひて逃げ去りしを、追ひて取り戻したりとい

ひ傳へよ、よく走る神とす。一「ぼしり(韋駄天走)名、

いとすまやかに走るを、力を極めて疾走する。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたど(板戸)名、板にて張りたる戸。

いたび(板碑)名、武家時代に死者の追善

供養に建てし平板な

る石造又は金屬製

の卒塔婆。

いたび(木蓮子)名

「福」愛)科の常綠灌木、山野に自生す、莖は

蔓生にして分岐し、葉は全縁にして厚く、橢圓形をなして尖

端葉柄具す、夏、葉腋に「いぬび」に似たる小花を開き、

果實は熟して黒色を呈す。一「かつら(木蓮子葛)名、

「想」いたび。

いたひき(板挽)名、材木をひきわたりて板となす。又、

いたひき(板引)名、轆をつけたる綱を、襦袢の板に張り

て、光澤をいだしたるもの。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。

いたび(板)名、板葺のひまし。



【碑板】

いたつーいたて

いたてーいたは

いたひーいたま



き、第一番目の上座。②一つの寺院又は院と稱する官階。

いちせい(一院制)一名國會が國民の選舉に依る代

議士を以て組織したる一院のみなる制度。二院制の對。

いちぢう(一字)一名一つの家屋又は寺院殿舎。

いちぢう(一圓)一名さうたい。ぜんたい。③(經)

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

での間、即ち僧侶安居(じゆ)の期間。

いちげつ(一藝)一名ひとつの技藝又は才能。

いちげつ(一月)一名ひとつの月。③(佛)等

一輪の月なれど、停まれる舟よりは停まる如く見え、北

へ行く舟よりは北へ行く如く見え、南へ行く舟よりは南へ行

く如く見え、の義、即ち衆生の佛に對する見解のおの異

なるに譬へいふ。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

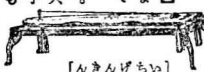
いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。

いちげん(一言)一名ひとつのことば。わづかのことば。



[んきんげちい]

には居られぬ人。——はんく(一言半句)一名すこし

のことば。ばうおん(一言芳恩)一名ただ一

言を賜りたるばかりの恩に感じて主と仰ぐ者、禮大に

對していふ。——おなじ(句)だまり居てすこし言を

發せず。②一言の申開も出せず。

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちぢう(一應)一名ひとつのごとく。みな。ひいたす

いちしーいちし

たち思ふ情の切なると。——たし「二日程」(名)一日に  
て行かぬ。みちのり。——の長(句)〔俗語に出づ〕年齢の  
少し長ずると。轉じて、知識の少し優ると。

いちよつ「二書」(名)〔佛土の〕平等の賢相(眞如)。の(二乗  
の)實教。一乘法。一えん(一)〔佛土の〕一實圓頓(名)〔佛  
天台宗の)教義。一乗の)實教たる法華經によりて、圓融頓悟の  
境に達すと云ふ。——あんどう(一)〔一實神道〕(名)  
〔神聖)は山王一貫神道といふ、天台宗の教理により、山  
王七社を三佛四菩薩に配し、本地垂迹の說を立てて、我國の  
諸神を解説したるものと云ふ。

いちちはいりよりけり「二字拜領」(名)高貴の方の禮の  
一字を拜領して、自己の禮をつくると。

いちぢふさざり「二事不再理」(名)〔法日〕に判決を経  
たる事件は、更に再理せずとふ原則。

いちぢふせつ「二字不説」(名)〔佛〕諸佛自證の眞境は、  
言語文字に絶したりと云ふ。

いちぢはうつまき「二次方程式」Simple  
equation(名)〔數〕乘算の未知數を含み且それより高  
き乗算のものを含ませる方程式、即ちx<sup>2</sup>+17x+32の如し。

いちぢゆ「二樹」(名)一本のたし木——の蔭(一)河の  
流(句)〔佛〕共に一樹の蔭に宿り、共に一河の流れを汲  
むと云ふ、世世の因果なりと云ふ。

いちぢゆく「無花果」(名)〔植〕桑科の  
蒞葉喬木、庭園に培養す、葉は互生し、大  
形にして分裂し、掌狀脈を有す、切れば乳  
汁を出す、春夏の淡紅色の花を開く、花  
は單性にして雌雄共に一花托内に生ず、  
果實は圓形にして大き一同許、初は綠色な  
れど、熟すれば紫色となり、味甘美なり。

いちぢよ「一乘」(名)〔佛〕人々の根器如何を問はず、凡  
聖平等に同一極高の佛果に到達せしむべき法門。——ほう  
つ「一乘法」(名)〔佛〕二乗の教法。又一切成佛の教法。

いちぢよ「一場」(名)わづかのあり。一時。一  
ひととせり。一回。——の春夢(句)一時の春の夜の夢の興

【くぬぞちり】



いちしーいちた

衆枯盛衰の極めではかなきに替へいよ。  
いちぢよ「一途」(名)確定して動かすべからざるど  
つに定まると。ていつい——を知らず。

いちぢよ「一條」(名)ひととせ。成事。

いちぢよ「一定」(副)かならず。たしかに。  
いちぢよ「一著」(形)あきらかに知れわた。  
かくれなし。ちあめなり。

いちぢよ「一著」(形)いらじるし。  
いちぢよ「一慶」(名)〔書經に〕出る(句)〔書經に出づ〕天  
子におめでたき事あれば、下萬民は其餘慶を受く。——の出  
て給ふ事容易ならず(句)〔白居易の詩に〕一人出分  
不容易とあり。天子の出御せらるゝは、供奉其他種々の  
準備を要し、なかなかたやすきものにあらず。

いちぢよ「一陣」(名)ひととせ。風の風。第一  
番目の陣隊。すての軍隊。

いちぢよ「人物」(名)ひとと見識ある人物。  
いちぢよ「一途」(名)ひととせ。ひたすら。

いちぢよ「一膳飯」(名)飯を柄にもり、一椀づつ價を  
定めて賣るもの。——や一膳飯屋(名)一膳飯を賣る

いちぢよ「一族」(名)同じ族。ひとつのやから。唐。  
いちぢよ「一代」(名)おのれひとりの考へ。

いちぢよ「二代」(名)おのれひとりの代。一人の戸主又  
は國主たる間。——ちの二代一度(名)一代のう  
ちたにた一回なること。——かぞく(名)二代華族(名)  
華族の族稱を一代に限る。——き二代記(名)人  
一代の事蹟をかきおしたる記録。傳。きよの教法。

いちぢよ「一臺」(名)印刷上で、十六百分の組版。  
いちぢよ「一臺」(名)印刷上で、十六百分の組版。

いちぢよ「一大事」(名)ひとつの大事件ゆるかせならぬ  
事。身の一。いねん(名)大事因縁(名)〔佛〕  
佛が衆生濟度のため、因縁を結びて此世に現出する

いちぢよ「一諾千金」(名)男子一たび承諾す  
れば、必ずこれを實行せずといふとなく、其たのもしさは千

いちたーいちに

金にも替へ難しといふと。  
いちた「一團」(名)ひとかたまり。一の相氣。べ。  
いちた「一段」(名)副。ひととせ。ひととき。ひと  
きは。いとまは。——かつよう(名)一段活用(名)  
〔文法)動詞の語尾變化の上、二段活用と下二段活用とあり。  
——ひく(名)語落(名)ひとたひ。いっぺん。  
いちた「一度」(名)副。ひとたひ。いっぺん。  
いちた「一同」(名)同じきと。金輪。

いちた「一時」(副)ひととき。いっぺん。  
いちた「一讀」(名)いっぺんよむと。ざつとよむと。——  
かい(名)一讀會(名)第一讀會。

いちた「一二」(名)副。ひとつふたつ。わづか。  
いちた「一朝」(名)朝より夜までの間。ひととせ。えうと  
ま。朝より次ぎの朝までの間。一晝夜。あるひ。あると  
ま。朝の第一の日。ついでたち。——き(名)一日祭(名)  
現時宮中にて、一月一日の朝に、賢所皇靈殿神殿にて行はせ  
らるゝ嚴旨の御祭典。——ん(名)一日程(名)一日にあ  
ゆみ得るもの。——ん(名)二日片時(名)副。ひと  
とひとかたの。えはしの間。

いちた「一如」(名)佛といひ相異なるざると、二ならざる  
こと。邪正。の(名)眞相如相の理。

いちた「一任」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一役」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。

いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。  
いちた「一黨」(名)ひととせ。官職とある間。







まざけ、醜態。——すし(二)夜脂(名) 醜の一種粘の醜を指しに入れて火に炙りおもしろしをかけて一夜の中にならしたるもの。——ぐくり(二)夜造(名) ①いぢやのうらちにつくる。②たな一時の間にあはせにつくる。——づけ(二)夜漬(名) ①一夜の間に漬けてならしたる漬物。②きは物の急でらへ。——づま(二)夜妻(名) 遊女の稱。ひとよづま。



【草薬一】

いちやく(二)そう(一) 一葉草鹿蹄草(名) 【楓鹿蹄草科の多年生草本、山林陰地に自生す、葉は根生にして厚く、橢圓形にして深緑色を呈し、冬も凋り、五六月頃、葉間に花梗を抽出す、上部に總狀花序をなせる小花を開く、花瓣は六箇にして下向き、多くは白く、稀には紫なるもあり、觀賞用に供せらる。

いちやく(二)く(一) 自、か四 男女互にふざけあふ。

いちやく(二) 意中(名) ①心のうち。②心のうちにおもふと。

いちやく(二) 一人(名) おもふ。こひしき人。

いちやく(二) 一遊(名) 一豫(名) あそびたのしむ。物見遊山をす。

いちやく(二) 異柱(名) ①動舞鸞類の一目、兩肉柱を有し、前收斂筋は小形にして後收斂筋は大形なり、外審膜は分離す、胎具、眞珠貝等これに屬す。

いちやく(二) 一葉(名) ①まゐの草木の葉。②こぶれ。小舟。——らん(二) 葉蘭(名) 【蘭科の多年生草本、高山に自生す、茎一本葉一枚にして、高さ四五寸、葉は廣楕圓形、六七月頃、葉頭に總狀花を開く、花は淡黄緑色にして唇瓣に紫斑あり、觀賞用に供せらる。——落ちて天下秋を知る(句) (淮南子に出づ) 梧桐は最も早く秋を感ずといひ其一葉の落つてよりて、天下已て秋の來れるを知る、即ち一葉の落つてよりて、一般の形勢をたずべきをいふ。

いちやく(二) 一様(名) ひとつさま。おなじさま。

いちやく(二) 威重(名) 威嚴ありておもおもしろ。

いちやく(二) 一様(名) ひとつさま。おなじさま。

いちやく(二) 一様(名)

いちやく(二) 異朝(名) 異なる國のてうてい。とづくに。

いちやく(二) 銀杏(名) 【植】いてふを見よ。

いちやく(二) 陽來復(名) (陰曆まりて陽復する) 舊曆一月又は冬至の稱。

いちやく(二) 一救(名) 救命にたふと。

いちやく(二) 一樂(名) ①いぢらく。②いぢらくあみ。

いちやく(二) 一樂編(名) 和泉の人、土屋一樂の編み出でし藤細工。——おり(二) 樂鏡(名) 【植】いぢらくあみ。

いちやく(二) 一射散(名) (他、三四) 矢を射て敵をちらす。

いちやく(二) 一覽(名) ①いちと目とほす。ひととほり見。

いちやく(二) 一覽(名) ①後定期拂(名) 【商】手形支拂人が手形所持人の呈示により、其手形を一手に確定せる期間を經過して支拂ふものなりと、其手形には爲替手形と約束手形とあり。——はらひ(二) 一覽拂(名) 【商】手形支拂人が手形所持人より手形を呈示せらるれば、直ちに支拂ふものなりと、約束手形には多く其效なく、おもに爲替手形に於てこれを見る。——ひ(二) 一覽(名) 諸種の事項を一目に見得るやうにしたる表。

いちやく(二) 一里(名) ひととほりの道理。

いちやく(二) 一里(名) 里程の單位、普通三十六町、處によりては、五十町又は七十二町をいふ、古昔は六町を一里とせり。

いちやく(二) 一里(名) 古昔、街道一里ごとくに土を高くもり、柵欄などを植ゑ、里程の目標となししもの。(里塚)

いちやく(二) 一利(名) 利と害と相伴ふ。【と。】

いちやく(二) 一力(名) ①一人のまゝ。②自分一己のちから。

いちやく(二) 一律(名) ひとつづつを。おなじかた。

いちやく(二) 一流(名) ①地に異なりたる一派の流義。②自らをきはめたる。③第一等の地位。

いちやく(二) 一萬(名) 昔時の金貨の單位、一分の四倍、即ち十六朱に當たる銀にては四匁三分をいふ。【秤目の單位一斤の十六分一、即ち二十四銖に當たる、今の兩は古昔の大一兩即ち三兩なり。③ひとつさま。——ざし【二兩刺】(名) 料理の名、竹甲に小魚二尾を刺して焼き、甲の根を紙にて巻きたるもの。——ばん【一兩刺】(名) 一箇が一兩に通用せし小判。



【刺兩一】

いちやく(二) 一輪(名) 一箇が一兩に通用せし小判。又それを用ふる小さな花瓶。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名) 一箇の花ある枝をいふと。

いちやく(二) 一輪(名)

①すころく。ばくち。②運任せに冒険なる事を行ふと。

いちろーごうめい「一路功名」(名) (一事を専攻すれば功名を成すとの意を寓し、路と聲の普通よりいふ) 一びきの蟹

いちんち「一日」(名、副) いちにも。①を指さたる蟹の時。

いつつ「何時」(名、副) ①さかち定まらぬ時。②いつつもの時。③いつつ何時何時「いつつれの時」

いつつ「なんどき」何時何時「いつつれの時。いつつ。①が何時まで」(句) 何時といふはてまなしに。

②となく「句) 何時といふ定まりなく。①ともなく「句) 前後に同じ。②とも分りかず「句) 何時となく、

の程にか「句) 何時といふも覺えざる間。

いつ「稜威」(名) 尊嚴なる威光。どくわ。①並ぶもの

なす。①第一。②上。③ただ其ものみなる。ひとり。ひとり。④あつさりあふと。ひとつになつた。⑤おなじきと。ひと

しきと。⑥まじりけなきと。純粹。⑦もはらなと。専一。

いつ「逸」(名) ①ゆるやか。②さまさま。③あやまち。④みだら。⑤はやと。はしと。⑥かくると。う

す。⑦を以て勢を待つ「句) (爲字に出づ) 我はあ

ながら安邊にして養へる勢を以て、敵の遠くより來り披勞し

て力の衰へたるを待つ、取ひて勝たずといふとなし。

いつ「自」(目、下二) こほる。いてる。

いつ「二」(數) ①を聞きて十を知る「句) (論語に出づ) 知解の極めて微細なるに。②を以て高ま

知る「句) (爲字に出づ) 一事を推して萬事を究め知る。

「げん」「一家言」(名) 自家主張の論說。①ちゆう「一家中」(名) 武家時代に、一家の臣僕をこぞりていふ稱。

「赤穂」の浪人も。②團樂「句) 一家族のあつまりま

とめて和氣樂しむま。③を機好す「句) 一派の言論

又は文體などをあみだすをいふ。

いつか「何時」(副) ①いつともなく。②いつのまにか。③お

それはやかれ。早晚。④いつれの時か。いつごろか。⑤か

つごぞや。⑥は「何時」(副) ①つか一度は。お

それはやかれ。②めぐる遙坂の。

いつか「一回」(名、副) ①ひとたび。②ひとまはり。

③一年。④「一回忌」(名) 人の死にし翌年の當月當

日に行ふ佛事。

いつか「肉」(名) ①ひととかたまりの肉。

いつか「一角」(名) ①動遊水類の海獸、鰐鰓、鰐鰓、

海豚、に似て、腹部白く脊部に黒斑あり、體長二

丈餘に達す、上顎に長き二本の牙あり、毒るべき

關器具にして、質白く堅固にして、象牙と同一の

用に供せられ、昔時は藥劑に用ひられたり、北極の海に産す。②「つく」(名) ひととかた



【(一角)】

つかく「せんきん」(名) ①一攫千金「名) 一仕事に千金をつかみとる。たやすく巨利を手に入

いつ「沃懸」(名) ①いかけ「沃懸」。②器物の縁を金屬

で被ふ。③「沃懸地」(名) ①「化」當量と原

子並に同しなる原素例へは眞素、鹽素の如し。

いつ「かた」(何方) (代) とらら。①。②。③。④。⑤。⑥。⑦。⑧。⑨。⑩。⑪。⑫。⑬。⑭。⑮。⑯。⑰。⑱。⑲。⑳。㉑。㉒。㉓。㉔。㉕。㉖。㉗。㉘。㉙。㉚。㉛。㉜。㉝。㉞。㉟。㊱。㊲。㊳。㊴。㊵。㊶。㊷。㊸。㊹。㊺。㊻。㊼。㊽。㊾。㊿。

いつかの「せち」(五日節) (名) 古昔、五月五日に天皇武德殿に出陣、宴を群臣に賜ひ、宴終はりて騎射を行はれし儀式。いつが「る」(名) ①「整」(自、ら四) つながる。

いつかん「二竿」(名) 一本のさを託し風月を樂しむ。①の風

月「句) 一本のつりぎを以て託し風月を樂しむ。②の風

月「句) 一本のつりぎを以て託し風月を樂しむ。③の風

月「句) 一本のつりぎを以て託し風月を樂しむ。④の風

いつかん「一貫」(名) ①銀一千文若しは九百六十文。

②秤目一千文。③首尾始終をつらぬくと。ぬきとほすと。

いつかん「一開張」(名) 漆塗細工の一種。机茶商などを紙にて貼(りて漆塗にしたものを、飛來)一開の創始

いつき「羊婆奶」(名) ①「屈」やまぐは。②「かかるといふ

いつき「齋」(名) ①いつつもの。②いつつもの。③いつつもの。

いつき「齋御子」(名) 古昔、天皇即位のとき、伊勢神宮又は賀茂神社につか、奉らしめられし未嫁の女王又は内親王。

いつき「むすめ」(齋娘) (名) たいせつにして、かづきさだつる娘、祓禊娘。①め「齋女」(名) 神に奉仕する少女。

いつき「一揆」(名) ①一度を同じくする。②心を同じくする。③武士の團結して進退を共にする。④土民蜂起して、所在を抄掠するもの。

いつき「一騎」(名) ひとりのうまのり。①「うち」(一騎打) (名) 騎つ列なりて行く。(單列)。②雙方一人づつ、騎を交へて勝負を爭ふ。③「とうせん」(一騎當千) (名) いちにんたうせん。

いつき「一氣」(名) ①萬物の元氣。②ひととき。③「かせ

いつき「一氣呵成」(名) ひとときに文章をかきさへ、又はひと

とときに仕事をまぐる。①「りゅうたいあん」(一氣留滞論) (名) 醫身體の元氣が鬱滞せるより、疾病は發生すといふ説、徳川時代に後藤良山の創始したもの。

いつき「一掬」(名) ①兩の手一ぱい。②とすくむ。③「涙」(句) 兩の手一ぱいの涙、即ちそらに哀情を備して、涙のあふれおつと。④「半貫」(單) ①引伸支(名)。

みこ。又、其居所。一のつかさ(齋宮寮)(名) いつきのみやの事をつつかさといつた。 [なる不詳の茶會。] いつきやくらいつつかさ [一客一亭](名) 客と主人と各一人いつきやくらいつつかさ [一邱一壑](名) をかに住みたに釣りに、世外に逍遥する。 いつきやくらいつつかさ [一級品](名) 鐵道の輸送大貨物にて、最低價率を課する原料品又は半製品。 いつきやくらいつつかさ [一舉手一投足](名) ひとつたびこころみと。一舉と一投と。一して功を奏す。 [ひとたびこころみと。] 一舉と一投と。一して功を奏す。 [ひとたびこころみと。] 一舉と一投と。一して功を奏す。 [ひとたびこころみと。]

いつきやくらいつつかさ [一興](名) 一つの興あると。 [これも一]。 いつきやくらいつつかさ [一逸興](名) おもろみ。たのしみ。 いつきやくらいつつかさ [一擧手一投足](名) ひとたびこころみと。一擧と一投と。一して功を奏す。 [ひとたびこころみと。] 一擧と一投と。一して功を奏す。 [ひとたびこころみと。]

いつきやくらいつつかさ [一射附](他、か下) 射で中つ。 いつきやくらいつつかさ [一何處](代) どこ。 [とともなく](句) こともわからず。 [とともなく]。 いつきやくらいつつかさ [一形](二) けだか。いかめし。 [殿]。 [うつくし。うるはし。美。] 一け(名) いつくしきさま。

いつきやくらいつつかさ [一愛](名) いつくしきと。又、其度合。 いつきやくらいつつかさ [一愛](他、は四) ちつくしむ。 いつきやくらいつつかさ [一愛](名) ちつくしむと。いつくしむ。 いつきやくらいつつかさ [一他、ま四] ちようあらず。 [たせつ

いつきやくらいつつかさ [一安、何](副) 多くの人、聲をそらわくくんか [一安、何](副) いづくにか。 [どうしてか。] いつきやくらいつつかさ [一副] いづくにか。 [どうしてか。] いつきやくらいつつかさ [一一家](名) おなじ家のもの。親族。 [一門]。 いつきやくらいつつかさ [一一家](名) おなじ家のもの。親族。 [一門]。

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

いつけい [一計](名) ひとつのはかりごと。 いつけい [一系](名) ひとつち。 [ななじす。] いつけい [一せんもん] [一經專門](名) 一箇の經書を専攻して一家の學問を成すと。 [支那漢代の訓詁學の類。これなり。] いつけい [一決](名) ひとたびきまると。 [ひとつにきむと。] いつけい [一溢血](名) [瘡] 身體組織間に起る出血。 [内外

り。一「志ぬちょうけつ」一切衆生(二名)【佛比世に生存せる一切のきもの】。

い「さいたふ」妻多夫(二Polyandry)【名】一人の婦人に對して正式の夫數あること。

い「さく」一「昨」(名)年月日にて、中一つ置きて過ぎ去りたること。一「昨日」(名)をとりひき。一「昨日」(名)をとりひき。一「昨日」(名)をとりひき。一「昨日」(名)をとりひき。

い「はん」一「や」一「昨夜」(名)をとりひき。一「昨日」(名)をとりひき。一「昨日」(名)をとりひき。一「昨日」(名)をとりひき。

い「さん」一「札」(名)一通の文書。一仍而如物件。

い「さん」一「祭」(名)【祭は白き齒をあらはして笑ふさま】ひとたび笑ふこととわらひ。一「を博す」(句)人のひとわらひのたねに供す。

い「さん」【逸散】(名)にげちると。一「に」【逸散】(副)ひたすらにいそいで。一「かけゆく」。

い「さん」かたんそ「酸」【酸化炭素】(名)【化】さんくたんも。「心不亂」。

い「さん」ま「三味」(名)一念をこめて事をなすこと。一「さん」(子)【名】ただひとりの子。ひとり。一「歌」ある子の中ひとり。一「そんでん」(子)相傳(二名)學術技藝などの奥秘を、我子の中ひとりに傳ふるのみにて、他にもらさざること。一「術」。

い「紙」(名)一枚の紙。一「一枚」の文書。一「はんせん」(名)紙半銭(二名)紙一枚錢半文。轉じて、わづかなるあたりもの。

い「死」(名)一命をすつこと。まぬると。一「志ちまようけつ」一「死」(名)【佛】ひとたび死にて七たび生まれかはること。即ち此世に生まれかはるるかぎり。

い「糸」(名)一本のいと。一「縫」(けす)【佛】一本のいとをも體にかける義、即ち何等の障礙もなす本來の面目を露出するにふ。一「素」(れす)【句】全部の秩序整ひて、少しも亂雜ならざるにふ。一「を報ゆ」(句)受けたる攻撃に對して、まかへしをなすにふ。

い「逸史」(名)正史にもれたる事實の歴史。一「逸事軼事」(名)世にあらはれざる事情。一「いつしか」(何時)【副】いつのまにか。一「秋も過ぎゆきて」。

い「式」(名)副ひととまな。一「そうたい」。

い「志」(名)ひととまな。一「法」【法】國家又は其統治機關に對して、其統治を受ける各個人。

い「志」(名)一私人(名)【志】國家又は其統治機關に對して、其統治を受ける各個人。一「視同仁」(名)彼此の親疎差別を置かず、おなじく仁愛を施すこと。一「官位」さかの地位。

い「志」(名)一私人(名)【志】國家又は其統治機關に對して、其統治を受ける各個人。一「資半級」(名)わづかばかのり。一「何時時分」(名)いつて。

い「紙片」(名)一枚のかみざり。一「歐洲大戦」の初期に於けるドイツの首相「ホルムベヒ」の暴言に出づ。一「國際條約を輕んじていふ稱」。

い「出石焼」(名)但馬國出石より製出する陶磁器、白色なる特徴とす。一「こさかもり。小宴」。

い「酌」(名)いささか酒を酌みて飲むこと。一「一瀉千里」(名)河水の一すぢに流れて、何のさほりもなく千里に及ぶ。轉じて、物事のすらすらととどこほりなく進び行くこと。

い「煙心」(名)一本の煙草。一「一本の縁香」。

い「一種」(名)ひとつの。一「一種」(名)ひとつの。一「一種」(名)ひとつの。一「一種」(名)ひとつの。

い「周」(名)ひととまな。一「周」(名)ひととまな。一「周」(名)ひととまな。一「周」(名)ひととまな。

い「周」(名)ひととまな。一「周」(名)ひととまな。一「周」(名)ひととまな。一「周」(名)ひととまな。

い「逸出」(名)はなれいづること。のがれいづること。一「すくれいづ」と。あまんづると。

い「逸出」(名)はなれいづること。のがれいづること。一「すくれいづ」と。あまんづると。

い「書」(名)ある書物。一「冊若しくは一部の書物」。

い「一書」(名)一冊若しくは一部の書物。一「一書」(名)一冊若しくは一部の書物。

ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

い「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。一「一」(名)ひととまな。おなじく。とまな。

いつまん(一心) ①おほくのものと一致したる心。②一方のみむけたる心。③萬有に對する自己の心。④きりよくいつまん(一心協力) ①心をひとつにし力をあはする。②「さんがん(一心三觀) ①佛」天合宗の觀法、自己に空假中の三諦を具するを觀して、眞理を悟ると。③「ふらん(一心不亂) ①佛」心を一方にこよして、地を顧みざると。

いつまんきよらう(一神教) Monothelism ①宗教の神は唯一なりとする宗教、即ち、「キリスト」教「マホメット」教「ユダヤ」教の如きなり。

いつまんどう(一親等) ①「法」親等の一、或人及其人又は其人の配偶者より一世を隔つるものととの關係、例へば、或人と其親若しくは子との關係又は或人と其人の配偶者の親若しくは子との關係の如きこれなり。「なる字面の實相」

いつまんはつかい(眞法界) ①佛「佛」唯一にして眞實なりすべしとす。②「逸」(目) ①變はなる。すぐ。②ぞる。はしる。③にぐ。のがる。④ゆる。うす。

いつすずせ(逸) ①他さ(逸) はなつ。ゆるす。②のがす。③おとす。うしなふ。名を「」。

いつすらい(水) ①水 ①名 ひとつすちの水流。「これをめぐる。②「まづく」たらし。酒が「もなす」。

いつすらい(一睡) ①名 ひとつとりのさかな。③各自に一種宛の着をもちよして、酒宴を催すと。

いつすん(一寸) ①名 ①一尺の十分一。②わがかの間。③は八分五厘内外とす。④さき「一寸先」 ①名 わがかはなれたる前途。②だめし「一寸先」 ①名 ずたずたに斬りさいなむと。③のがれ「一寸先」 ①名 當座の責任を暫時免れんとすと。④「ばらち」 ①名 一寸法師 ①名 矮小なる人を嘲りよらふ稱。矮人。⑤「先は闇」 ①名 前途のすかすか豫知よらふ詩の一句わがの時間をもむだに過すべからず。⑥「延びれば尋」 ①名 延びる(句)

當座の困難をやりくりして延(ば)せば、多少のくつろぎの生ずるにいふ。①の蟲にも五分の魂(句) 見る影もなき少なるものにも、それ相應の意思・感情のあるにいふ。②いつせ(一世) ①名 ①一期の世。いぢた。いぢやう。③當時。當代。④に傑出す。⑤父子の一代移れると。⑥ヨーロッパの同系族にて同一名なる帝王中、其第一の人を呼ぶ稱「ナポレオン」。「コロラス」。⑦「いちげん」 ①世一元(名) 天子の御一代に、ただ一つの年號のみを用ひられて、改元あせられざると。

いつせ(齊射擊) ①名 一部隊が同時にひとしく敵に對して射撃をなす。

いつせ(一聲) ①名 ①ひとこゑ。②能樂にて、役者の舞臺にて語り出たす一種の曲節又、其時の鑼子。

いつせ(二代) ①名 ①生涯。②一生。③の大出來。④藝人などが、一生涯の中にて、これを限りと最も晴れの演藝をなす。

いつせ(一夕) ①名 ひとつばん。ある夜。

いつせ(一隻眼) ①名 特殊の眼瞼。

いつせ(石二鳥) ①名 (To kill two birds with one stoneの義譯) 一舉兩得。

いつせ(一切) ①名 ひとつの說。ある說。

いつせ(殺多生) ①名 佛一人を殺して、多くの人をたすくと。

いつせ(源氏) ①名 古昔、皇子の臣下となつたる方に、源氏の姓を賜ひすと。

いつせ(一錢) ①名 ①一圓の百分一。②「いちもんせん」一文。③「きり」 ①名 錢切 ①名 中古、錢一文の竊盜をも、斬に處せと、一説に、過料として、犯人の持てる金は一文たりとも取上げと。④「あよく」 ①名 徳川時代、髪結の異稱。⑤「直(す)せ」 ①名 一文のわうちもなし。

いつせ(千度祓) ①名 ①禊ぎの詞を千たび奏して、穢盛(け)をなすと。

いつせ(一層) ①副 ひとつしても。②かへつて。

いつせ(一層) ①副 ひとつときは。ひとつまほ。さらに。

いつせ(一層) ①副 能樂の笛の流儀、續費時代に起り、中村一噌を祖とす。

いつせ(一息) ①名 ひとついき。②わがかのいき。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。

いつせ(一息) ①名 ①順序を越えて飛ぶと。

いつせ(一息) ①名 ①足のはやきと。②夜桶のすぐれたると。高村。





と能はざるに由ふ。

**つづばかり**〔何時許〕(名) いつのころ。

**つづばい**〔一髮〕(名) ①一ばんの髪の毛。②一ばんの髪の毛を横たへたす程に、かすかに見ゆること。「青山一髮中原」

一せんきん(一髮千鈞)(名) 一ばんの髪の毛に千鈞の重さあるものを引く義)殆ど絶えんとして僅につながら、極めて危険なるに由ふ。

**つづはのまつ**〔五葉松〕(名) 種でえふのまつ。

**つづはのりつ**〔偽〕(名) ①自然のままにあらざること。人為。②事實上あらざること。虚構。③誠實ならざること。④真正ならざること。かり。⑤あさまし。たぶらかし。詐。⑥ことと偽言(名) つくりごと。うそ。⑦ひとと偽人(名) つ

はる人うそつき。⑧もの(偽者)(名) 前條に同じ。

**つづはる**〔つづはる〕(偽) 自ら(四) いつはり行ふ。いつはりを言ふかへていふうそをいふ。

**つづはる**〔つづはる〕(偽) (他) 自ら(四) あざむく。だます。たぶらかす。だまくらかす。

**つづばん**〔飯〕(名) 一たびのめし。①の徳(句) (史記に出づ) 一たびめしをせられたる恩、即ちわづかのめ

**つづばん**〔半〕(名) なかば。はんぶん。

**つづばん**〔一斑〕(名) いちばん。ひとこわけ。①ま見て全豹を物す(句) (豹の皮の一部の斑文を見て、他を推知する義) 物事の一部を見て、其全體を推知するに由ふ。

**つづばん**〔飯〕(名) ①ぜんたい。そうたう。②同一。様。「他」と。

③「かいらい」〔一般會計〕(名) 〔法〕普通の場合に於ける國家の會計、即ち、會計法に準據すべきもの。特別會計の對。④「がいねん」〔一般概念〕(General concept)(名) 〔論〕箇々の事物に共通せる特徴を總括したる概念。⑤「かんかく」〔一般感覺〕(General sensation)(名) 〔心〕ようかんかく。⑥「すう」〔一般數〕(名) 〔數〕文字を以て表はされた數。⑦「とうひょう」〔一般投票〕(名) 〔政〕一般に互て行はるる投票。

⑧「ほうりつ」〔一般法〕(名) 〔法〕普通一般に適用せらるる法律即ち、主權の下にある全國內に於ける一般の人民

若しくは一切の事項に適用せらるる法律。⑨「ほうりやく」〔一般方略〕(名) 演習に於ける兩軍共通の方略大體の作戰設計。⑩「せふざい」〔一般名辭〕(General term)(名) 〔語〕一般概念をいひ表はせる名辭。

**イツホドム**〔一般概念〕(名) 世界大戰後體顯せる獨逸表現演劇曲の特有性にして、主眼を極端に尊重するもの。

**いつび**〔溢美〕(名) ほめすぎ。過賞。

**いつび**〔一臂〕(名) ①片方の臂。かたうで。②すこしの助力。③一の助力(句) すこしの助力。④を假す(句) すこしの助力を致すに由ふ。

**いつびり**〔一筆〕(名) ①一本の筆。②墨つぎせずして書くこと。③同一なる筆跡。④簡單なる文詞。⑤一通の書面。⑥「が」〔一筆畫〕(名) 筆つぎせず(一)ひとよにて描く簡單なる畫。⑦「がき」〔一筆書〕(名) ひとよにて書くこと。⑧ひとよで毎にわけて書くこと。⑨「路上」(句) (一通の書面にて申上ぐといふ義) 書頭の冒頭に用ふる辭。

**いつびん**〔一品〕(名) ①ひとつのあな。②最もすぐれたるもの。天下。③「りよりり」〔一品料理〕(名) 擇りて取る一あなの料理。「夫に對して、一人の妻あると」

**いつぶらぶ**〔一夫一婦〕(Monogamy)(名) 一人の夫と一人の妻とをいふこと。他とはかりたること。一體したる。

**いつぶく**〔一腹〕(名) ①同じ母の腹より生まるること。②「いつぶくよう」〔一腹一生〕(名) ①同じ母の腹に生まれる兄弟姉妹。

**いつぶく**〔一服〕(名) ①煙草、煎茶などを一回のむと。ひとのみ。②薬の一回のむだけけの量。又、其一包の量。③ひとや

④「らせん」〔一服一錢〕(名) 古昔、路傍にて一服の煎茶を錢にて賣りし人。⑤「盛る(句) 毒藥をのませて人を殺すに由ふ。

**いつぶく**〔かけ〕〔一幅掛〕(名) 床間に軸物を一幅かけて、其下に置物(つ飾り)おくと。「ふたたび地金とす」

**いつぶたさ**〔一夫多妻〕(Polygamy)(名) 一人の男子が、二人以上の妻を持つこと。

**いつばん**〔逸聞〕(名) 世にたはらざるはなし。

**いつへい**〔五重〕(名) いつとほりかまざること。①「がきね」〔五重襲〕(名) 衣服五枚をかまざること。②「のあまぎ」〔五重扇〕(名) 扇の一種。楡扇の兩方の端の板を紙にて五重につみ、種々の色絲にて綴て、綴結(むす)にしたるもの。③「のおんぞ」〔五重御衣〕(名) 五色の絲にて模様を織り出したる衣。

**いつべ**〔嚴鏡〕(名) 神を祀るに用ふる陶器。

**いつべ**〔何邊〕(代) とのへん。このあたり。

**いつべん**〔一遍〕(名) ひととむき。①ひととはり。②「ちと」〔一遍きり〕(名) ちとどきり。

**いつべん**〔一變〕(名) まるでかはること。又、まるでかふこと。

**いつべん**〔一歩〕(名) ひととあし。①「いちだん」〔一歩〕は昂く一歩は低く(句) 醉客又は賭者などのよろぼひつつあるく状態に由ふ。

**いつぼう**〔一鷸蚌〕(名) ちぎとぶがひと。轉じて、世間知らずのけんかどち。②の争(句) (戰國策に出づ) ちぎとぶがひとと相争ひて、共に漁夫に獲らるるを轉じて、傍觀者に乘せられて共倒となること知らず、無益の争をなすと。

**いつぼう**〔一方〕(名) ひとつの方向。かたう。①「いちづ」〔一方〕(名) 一方にのみみつけられたる出入口。②「こうちう」〔一方行爲〕(名) 〔法〕たんとくかうむ。

**いつぼう**〔一杯〕(名) 堂(びん)にてひととすり。①の土(句) (漢書に、愚民取長陵一杯土とあるに出づ) ひとつとすの土の幾層墓の土をいふ。

**いつほん**〔一品〕(名) 親王の位階の第一。②佛(佛)經文中の一章。③「ぎやう」〔一品經〕(名) 佛(佛)法華經二十

八品を各一品づつ一輪の巻物に仕立てたるもの。又、其一品づつを順次に讀誦すること。

**いつほん**〔一本〕(名) ひとつの書物。ある書物。①ひとかぶ(ひとと)。②ひととち(肩・鎗等に由ふ)。③ひととち(鞍籠に由ふ)。④一人前の藝妓。⑤「ぎ」〔一本氣〕(名) ひとつとち(ひととち)思ひこむ氣象。⑥まじりけなきと。⑦「志め



るがりたる下駄のは。――まげ(銀杏籠)(名) 婦人の髪  
 の結び方、烏山髷をいってよ形にしたもの。――も[銀杏  
 籠](名) [種]音類)一種、葉はわいてよ形をなし、水田などの  
 水面に浮生す。雌雄異體、秋に至り實を結ぶ。  
**もづまし**(名) [出座]名、みゆき。行幸。  
**もてます**(名) [出座]名、(自、三四) 出でたまふ。  
**もてゆ**(温泉)(名) [地]地中より自然にわき出づる湯、即  
 ち、地下水の地熱を受けて湧出するもの。  
**もてみる**(田居)(名) [出でて居る]。②賓客に對面する座  
 敷。きよぐでんきやま。――のき[出座座]名) 古昔、  
 朝廷にて儀式あるとき、特に定められたる座席。――のき  
 坐より[出居侍從]名) 古昔、儀式あるとき、出居の座に  
 就きし侍從。――のきよまよらう[出居少將]  
 (名) 古昔、儀式あるとき、出居の座に就きし少將。  
**もつある**名) [出居]名、(自、わ上) 出でて居る。  
**もつてん**(移轉)名) [うつりかはる]。③物事の所在をう  
 りて居ること。④自己の住所をかふること。  
**もつてん**(一位田)名) 古昔、位階によりて賜はりし田、親王  
 は一品の八十町より次第に下りて四品の四十町に至り、臣下  
 は正一位の八十町より次第に下りて従五位の八町に至る。  
**もつてん**(遺傳)名) [遺傳]名) [生]生物の所有する性  
 質の傾向が、其系統を受けて生じたるもの(このり傳はる)こ  
 なたをむくと。――ばつとく[遺傳微毒]名) [生]先  
 天的に親より享受したる微毒。――びょうし[遺傳病]  
 (名) [生]先天的に親より遺傳したる病氣。――ばつとく  
**遺傳物質**(名) [生]生殖細胞内に於ける物質に於て、親  
 の形質を其子に遺傳すべし特殊の能力を有するもの。  
**もつと**(絲)名) [編]麻、絹、毛等即ち動植物質の纖維を細くな  
 がくひきのばしてよりをかけ、織物、編物、刺繻、造花等に使用  
 するもの。③細長くしついの如き線條をなすもの。④琴  
 又は三絃などに張りて鳴らす絃。(絃)。(絃)琴又は三絃などの  
 絃器。⑤きぬいと。⑥織。(もつり)いと。を垂る。――  
**は竹に如かず竹は肉に如かず**(句) (世説に出づ)

音樂は自然に近きをまされりとし、琴、琵琶などは笛、簫など  
 に及ばず、笛簫などは肉聲に及ばずといふ也。  
**いと**(一幼)名) [みどり]と、「一宮」。「一ひめ君」。③むすめ。  
 小娘。京阪地方の方言。  
**いと**(一)名) [號斗]名) ひのし。  
**いと**(一)名) [草圖]名) 朝鮮にて製する一種の陶器。  
**いと**(一)名) [最]名) 甚しく。きはめて。も。とも。  
**いと**(一)名) [緯度]名) [緯]名) [地]地球上赤道より南北  
 に測る角距離、赤道を零度として南北各九〇度に至る、北へ  
 測るを北緯といひ、南へ測るを南緯といふ。――かんそく  
 表(一) [緯度観測所]名) [法]文部大臣の管理に属  
 し、緯度變化の觀測、計算及研究を掌る所。――へんか  
 [緯度變化]Latitude variation)名) [地]地球上  
 各點の緯度の定期的に少しく變化する現象、地球の自轉軸の  
 位置の地球に對して絶えず少しく變動するに起る。  
**いと**とあやつり[絲採]名) なんきんあやつり。  
**いと**とろり[絲入]名) 木箱絲の中に銅絲をまじへて織りた  
 るもの。――なま[絲入純]名) 鋼のみに銅絲を用ひた  
 る木箱織物。――つむぎ[絲入純]名) いとといふなまこ  
 ーふたこ[絲入二子]名) 絹絲をまじへたる二子。  
**いと**とらん[絲印]名) 印章の一種、銅製に  
 して、文字を型にて鑄出し、捺しは人物。  
**いと**とる[厭]名) いとふを。見よ。  
**いと**とらう[醫道]名) 醫者の道。  
**いと**とらう[移動]名) うつりかはらう  
 じき。――けりさつ[移動警察]名)  
 (名) [法]列車内に於ける犯罪を防止す  
 るため、刑事巡查を車内に乗込ませしむること。――さつえい  
**目的物撮影**(名) 映畫の撮影。――キメラ)を動かしたつ  
**移動の追いつて進む撮影法**。――ほんぞ[移動本部]  
 (名) [社]非合法運動又は労働争議等に於て、其本部の所在を  
 不明ならしむるため、絶えず場所を移轉せしむるもの。



[んいと]い

**いと**とらう[異同]名) 異なること。同じからざること。――べん  
**異同辨**(名) 異同の辨別。  
**いと**とらう[絲打]名) 絹絲にて組みたるもの。  
**いと**とらう[絲魚]名) [動]いとよりたひ。  
**いと**とおし[愛]名) いとほし。見よ。  
**いと**とおし[絲絨]名) 織又は襪巻を組絲にて織したるも  
 の、其組絲の色によりて種々の名稱あり。  
**いと**とおし[絲織]名) よりたる絲を用ひたる平織の絹織物、  
 手ざはり柔かくして滑かなり。  
**いと**とかけ[糸]名) [糸掛]名) [動]  
 腹足類の貝に似て小さく、介殼  
 塔状をなし、外面の縱線多くして、  
 恰も白き絲をかけたが如くに見ゆ。  
**いと**とかけばら[絲掛螺]名) [動]いと  
 とかけが。  
**いと**とかけひ[糸]名) [動]いとかけがひ。  
**いと**ときなし[糸]名) [一幼]形。いとけなし。  
**いと**ときり[糸]名) 陶器の底、即ちろくろより絲にて  
 きりとりたる所、いとぞこ。いとぞり。――だんご[絲切  
 團子]名) 絲にてくり切りたる團子。――ば[絲切  
 齒]名) [生]人類の牙齒、犬齒。  
**いと**とく[懿德]名) 善美なる徳。  
**いと**とく[威徳]名) 人を畏服せしむる威と人を心服せし  
 むる徳と、或嚴密にて徳高のこと。  
**いと**とく[遺徳]名) 後世にこのる恩徳。  
**いと**とく[絲具足]名) 絲織の具足。  
**いと**とく[絲口緒]名) ③絲の端。いとこのぐち。はじ  
 まりてがかり。いとく。  
**いと**とく[絲屑]名) 絲のくず。  
**いと**とく[絲座]名) 三味線の棹の上のいとまきを貫く處  
**いと**とく[絲水母]名) [動]水母の一種、白色透明にし  
 て、索鈎の如き長き絲状の名を曳く。  
**いと**とく[絲]名) 琴などをひきくらへすと。  
**いと**とく[絲鏡]名) いとをとくること。いとをくるわく。

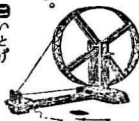


[ひがけかとい]

④絲をくる女。⑤圖をだまき。——ちを「絲綵魚」(名)を引き出して繰る車。——くるま「絲綵車」(名)より繰る車。とり又はこれをよりあはするに用ふる車。

いとけ「幼氣」(名) いとけなきさま。をさげなさま。

いとけ「絲毛」(名) ①いとけ。②いとけのくるま。——のくるま「絲毛車」(名) 牛車の一、車のやかに、よりいとをふきおろして寝の如くに垂れたるもの。青絲毛・紫絲毛などあり。院・后宮内親王・攝政・關白等の乗用たりしも。



〔まろぐとい〕

いとけし「幼」(形) (一)いとけなし。をさなし。

いとけなき「幼氣」(名) いとけなき。いとけなき度合。

いとけなき「幼」(形) (一)年未だ長せず。あどけなし。をさなし。いんげなし。いとけなし。

いとこ「従兄弟」(名) 父又は母のをひ又ははぬ。——あはせ「従兄弟」(名) いとこ同志を夫婦にす。①あはせ「従兄弟」(名) 大小父(一)組父のいとこ。②あはせ「従兄弟」(名) おほをば「従兄弟」(名) 従兄弟大小母(一)組父のいとこ。③あはせ「従兄弟」(名) 相互のいとこ。④あはせ「従兄弟」(名) 相互のいとこ。——どうち「従兄弟同志」(名) 相互のいとこ。——に「従兄弟」(名) (道々)うまに蒸(似)る義といふ。あづき「こんぱん」やま「よま」にん本ん「いも」等をまて煮たる味噌汁。——むこ「従兄弟」(名) いとこのむこ。——め「従兄弟女」(名) いとこにあたる婦人(従姉妹)。——よめ「従兄弟嫁」(名) いとこのつま(堂姉妹)。——をち「従兄弟小父」(名) 父のいとこ。——従祖父。——をば「従兄弟小母」(名) 父のいとこめ(従祖母)。

いとこ「居所」(名) 「むどころ」を見よ。

いとこ「居所」(名) 「むどころ」を見よ。

いとこ「居所」(名) 「むどころ」を見よ。

いとこ「居所」(名) 「むどころ」を見よ。

いとさくら「絲櫻軟條海棠」(名) 「植」櫻の一種枝は軟條にして下垂し、葉は長圓形又は披針形にして尖頭、花は葉の出づるに先だちて開く、花に單瓣重瓣ありて、萼は圓筒形をなし紅色を帯び、花柄は花と同長若しくは花より長し、觀賞花として栽培し、又木材は種々の用に供せらる。まだりざくら。まだれびん。



〔らくざとい〕

いとさばき「絲捌」(名) ①絲のとりあつかひかた。②枝のいとさまき「絲雨」(名) こまき雨。こさめ。

いととし「愛」(名) ①愛(二)形(三)いとほし。かはゆらし。——が「愛」(名) (他)ら(四)いとほしと思ふ。かはゆがる。——げ「愛氣」(名) いとほしさま。——ご「愛子」(名) かはゆがることも。大事にすること。——ざ「愛」(名) いとしさま。又、其度合。——ざかり「愛盛」(名) あいらしきざかり。いたいけざかり。

いととま「絲芝」(名) 「植」かうらひま。いととまり「絲尻」(名) (一)いととまり。いととま「絲心蠟燭」(名) 絲を心としたる蠟燭。

いとすげ「絲菅樓」(名) 「植」菅草の一年生草本、山嶺又は陸地に生ず、葉長く四五寸より二三尺に及ぶ、夏月、小花を開き、實を結ぶ。——穂は紫赤色。

いとすずき「絲薄」(名) 「植」すずきの變種、葉細長く、いとすずき「絲竹」(名) (一)いとすずき。②細長なるもの。

いとたけ「絲底」(名) (一)いとたけ。いとたけ「絲竹」(名) ①樂器の總稱、琴・笛の類。②音樂。③歌曲。——の遣(句) 詩句を入れた技藝。

いとたて「絲」(名) ①糸。②入れ織。③かみの袋。いとたて「絲經」(名) ①を麻の絲にして、織(を)わらに織りたるむしる、旅行などに日除・雨除として着せらる。

いとたひ「絲綱」(名) 「動」いとよりたひ。

いとど「名」(動) ①ほろろ。いとど「最」(副) ①いよいよ。はなはだしく。ますます。——し「最」(形) ①いよいよ。はなはだしく。ますます。——と「最」(形) ①いよいよ。はなはだしく。ますます。——をんな「絲取女」(名) 絲取の工女。

いととなげ「忙氣」(名) いそがしきさま。いととなし「忙」(形) (一)いそがし。いととなみ「營」(名) ①いととなむと。まごと。あわさ。まごとい。まご。

いととなむ「忙」(營) (他)ま(四) ①こしらふ。ととのふ。つく。いなす。②またくす。ようい。

いととし「絲綉」(名) ①かはご。いととし「糸」(名) ①かはご。いととし「糸」(名) ①かはご。いととし「糸」(名) ①かはご。

いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。

いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。

いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。

いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。

いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。いととほし「絲」(名) ①かはご。



ち土居を築き垣を隔へて非常に備へたり。

**いななくけり**〔稻倉〕(名)か四馬つかれてあへぐ。

**いななく**〔稲倉〕(名) いねを入れておく蔵。

**いなご**〔稻子・蠶蚕〕(名) 〔動〕直翅類の昆蟲、體長七八分、體色は綠若しくは褐、後肢は膨大にして跳躍に適し、首圍く眼大く、前翅の前縁はけつりたるが如し、雄蟲は後肢を以て前翅の兩側を摩りて聲をなす、我國にて最も有名な稻の害虫なり。いなばた。――まる〔稻子唐〕(名) 〔動〕蠶蚕の一種、長さ一寸乃至四寸、綠色又は褐色にして尾端赤し。

**いなごき**〔稻扱〕(名) いねこき。

**いなまき**〔稻敷〕(名) 〔稻を敷きたる所。〕(名) ななか。

**いなすけ**〔往〕(他) 四かきむ。かへらしむ。

**いなせ**〔否諾〕(名) いやおう。いなう。―のおとしれ。

**いなせ**〔鱈脊〕(名) 徳川時代に、江戸魚河岸のいさみはだの人々が、鱈を鱈の脊の形に結びたるよりいよ。いさみのなだき〔頂〕(名) いただき。

**いなたま**〔稻魂〕(名) いなづま。いなびかり。

**いなづま**〔稻妻電〕(名) 空中電氣の放電する際に發する火花。いなびかり。〔馬車・人力車などの機を閉閉する用に裝置せる器具。〕(名) 紋所の名。種類多し。四いなづまをれるき。――がた〔稻妻菱〕(名) いなづまの形をとらる模様の。―ひし〔稻妻菱〕(名) 菱形をなせる稻妻形の模様。〔紋所の名。―をれるき。〕(名) 二重に曲がれる折釘

**いなづま**〔稲突〕(名) いなづま。

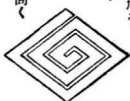
**いななくけり**〔稻倉〕(名) 馬馬高く鳴く。いなば。

**いなのみめ**〔稲姫〕(名) あげがた。まのめ。黎明。

**いななき**〔稻掃〕(名) いなはきむしる。――むしろ



【ごない】



【(二)しびまづない】

**稲蒨**〔名〕 稻の穂を取扱ふにまくるむしる。

**いなばかり**〔稻光〕(名) いなづま。いなづるび。いなたま。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いなぶ**〔稲穂〕(名) 稲。いなむ。

**いにあし**〔往足〕(名) 行きまゐるあしどり。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

**いにあ**〔往掛〕(名) 行きかゝりしあど。―の駄賃。

べきをいふ。一の川端あるき(句) 水にあらひ流され  
て餌食のなき川端を犬のさまよひあるく義即ち空しくあ  
きて、一も得る所なきに譬へいふ。一の獲て敵を打つ  
(句) 卑劣なる手段により、まかへしをなすにいふ。一の  
遠吠(句) 犬のとほくより吠きゆる義、即ち麗病なるもの  
の除て人を致敵するにいふ。一骨折つて麗に取ら  
れる(句) 麗即ち功を他に奪はれてむだ骨折となるに譬へいふ。一  
も歩けは棒に當たる(句) 犬も出るにあらぬ、縛にう  
たる、義、棒にも出る故に災難に遭ふにあらぬ、故に棒にう  
たる、義、棒に仕合にあらぬもいふ。一も食はぬ(名) 犬さ  
へも食はざる義、即ち極めて糠斥すべき物事にいふ。  
いぬ一戌(一名) 十二支の第十一位。一西北の方位。にしき  
た。一昔の時刻にて五つ、今の午後八時。  
いぬ(名) 犬の類。一(寐)一自、下二。れる。  
いぬあはせ(一犬合)(名) 犬をかみあはする遊戯。鬪犬。  
いぬあらざ(名) (植) かうざ。  
いぬいたどり(名) (植) いたどりの變種、瘦地  
に生じ、高さ尺餘に過ぎず。  
いぬうと(一犬獨活)(名) (植) ましうと。  
いぬおすもの(一犬追物)(名)  
古昔行はれし騎射の式、竹垣にて  
馬場をかこし中に犬を放ちこれを  
逐ひ射と、矢は晝目、股は素袍直  
垂、手十二騎なるを正式とす、源  
實朝の時代に始まりたりといふ。  
いぬおよび(犬泳)(名) 水泳の初  
歩はらばよとなり足にて水を蹴り  
手にて水を掻くおよび方。  
いぬかうたけ(一犬革茸)(名)  
「植」二かうたけの一種、鹿茸澤く  
して有難なり、秋生ず。  
いぬがし(犬櫻)(名) (植) 櫻。



【のもふ、おぬい】

科の常緑喬木、山地に自生し、高さ二三丈に達す、葉は長楕圓  
形にして先端尖り全縁にして三稜の葉脈を有し、表は平滑に  
して裏は帯白色の細毛密生す、春日、紅色の小花を開く。  
いぬかは(一犬川)(名) いぬの川端あるき。  
いぬかひら(一犬伺)(名) 麗即ち功を他に奪はしむる犬  
を伺ひなす人。一ぼし(一犬伺星)(名) (天) けんぎ  
う。ひこぼし(牽牛星)。  
いぬかひけい(一犬養景氣)(名) 昭和六年末に若槻  
繁徳内閣閣議、政友會總裁犬養毅の組閣大命を拜したりとの  
報傳はるや、株式界其他一般に景氣の急なうなりたること  
いぬがみ(一犬神)(名) 犬の靈ののりうつたりと稱  
一いつき(一犬神靈)(名) 犬の靈ののりうつたりと稱  
する一種の精神病、中國邊に多し。  
いぬがや(一犬粗榿)(名) 松科の常緑喬木、山地  
に自生す、幹高二丈餘、葉は淡綠色を呈し、對生して二縱列を  
なす、四月頃花を開き果實を結ぶ、花は雌雄異株、果實の仁  
より燃油を製し、材は種々の用に供せらる。  
いぬがらし(一犬辛子、薺菜)(名) (植) 十字花科の一年生  
草本、庭園や荒地に自生す、土地の肥瘠によりて高さ或は尺餘  
或は數寸、葉は長橢圓形或は羽狀に分裂し、或は分裂せずし  
て齒牙を有す、春夏の候、枝頭に黄色の總狀花を著く、果實は  
狭長(名) のらし。  
いぬき(名) 堂に上らんとする階下の石だたみ。回。  
いぬきり(一犬桐)(名) (植) あぶらぎり。「ぬぎらたる穴。  
いぬくぐり(一犬潛)(名) 垣などにある穴。犬の出入のた  
いぬくす(一犬樟)(名) (植) 櫻科の常緑喬木、暖地に自生  
す、幹高數丈に達す、葉は長卵形若しは長橢圓形にして厚  
く全縁にて光澤あり、秋日、淡紫色の花を開く、果實は球形  
にして翌年に至りて熟す、樹皮は染料とし、木材は、くすのき  
に似て更に堅密、種々の用に供せらる、やまくす。たぶのき。  
いぬくひ(一犬食)(名) いぬあはせ。  
いぬこ(一犬葵)(名) 犬を訓練して、詔を領せしむるも  
いぬこら(一犬香、石齊蒙)(名) (植) 唇形科の  
一年草本、原野に自生す、葉は方形にして高さ二尺、葉は對

生し、卵狀披針形にして縁縁に淺き鋸齒を有す、秋日、葉間に  
三四寸の梗を抽き、總狀花を著け淡紫色の小花を開く。  
いぬこま(一犬胡麻)(名) (植) 唇形科の多年生草本、山野に  
自生す、葉は方形にして高さ二尺、葉と共に毛茸あり、葉は  
對生し、披針形にして皺文あり、縁縁に淺き鋸齒を有す、夏、日  
梢頭に淡紅色の小花を著け開く。  
いぬこら(名) 犬の子。  
いぬこくら(一犬櫻)(名) (植) 薔薇科の落葉喬木、山野に  
自生す、高さ二三丈、樹皮は灰褐色にして平滑、葉は卵圓形に  
して縁縁に鋸齒あり、四月頃葉腋より花穗を地出し、總狀花  
序をなし小葉を有す、果實は小さく球形をなす。  
いぬこん(一犬山椒、崖椒)(名) (植) 芸香科の落葉小  
木、山野に自生す、山椒に類すれど、葉實共に臭  
氣あり、夏日、枝頭に小花を結ぶ。  
いぬこ(一犬死)(名) 死にて益なきこと。むだまに。  
いぬこもの(一犬白物)(副) 犬の如く、「道に伏し」。  
いぬこま(一犬豆)(名) (植) 豆科の一年生草本、原  
野に自生す、高さ一尺餘、葉は互生し長橢圓形にして小さし、  
夏、葉縁に花を開く、總狀花序にして密生せる紅色花より成  
いぬたら(一犬櫻)(名) (植) はりぎり。「る。おにたて。  
いぬつげ(一犬黃粉)(名) (植) 多葉薔薇科の常緑灌木、山地  
に自生し、高さ一丈餘に達す、葉は長橢圓形又は長卵形にして  
鋸齒を具す、夏、帯白綠色の花を開く、花は雌雄異株、實は  
紫黒色にして小、觀賞用として栽培せられ、木材は印版、繪等  
の材料に供せらる。  
いぬなし(一犬梨)(名) (植) やまなし。  
いぬの(一犬うぐり) (一犬婆娑納)(名) (植) 玄參科の一年生草本、  
原野に自生す、葉は平臥し、高さ僅かに五六寸、葉は卵狀  
心形にして葉柄を具し、縁縁に粗齒を帶ぶ、春日、淡紅色の細  
花を開く、果實は扁圓、縦に一道ありて殆ど二箇相接する。  
いぬは(一犬箱)(名) いぬはり。一觀をなす。  
いぬはしり(一犬走)(名) 城壁又は築地などの壁外と堀と  
の間に設けたる、犬の通り得べきほどの足だまり。一こぼし

**いぬはーいぬま**

りに遊ぶ事とす。

**いぬばへニ**〔犬種〕(名) 〔動〕家猫(ネコ)の一種、餘色を帯びぬばへの紋あり、犬に著きて血を吸ふ。

**いぬはりこ**〔犬張子〕(名) 玩具の一種、張子細工にて作る、古昔のは、面は小兒に似せ體は臥せる犬の姿となせるものにして、小兒誕生のとき、其傍に置き度除せとせしものなりしが、今は而身共に犬に似せ、専ら宮庭の贈物とす。



〔こりはぬい〕

**いぬびえ**〔犬種〕(名) 〔植〕禾本科の一年生草本、水田などに生ず、高さ二三尺、葉細長くして平行脈を有す、夏日穂を抜き小穂を開き、穀に芒を長くし、家畜の飼料とす。

**いぬび**は別と**天枇杷**〔天仙果〕(名) 〔植〕桑科の常綠灌木、諸國に産地に生ず、高さ丈餘に及び、葉は互生し、楕圓形にして殆ど平薄、夏秋の候、葉間の長梗に花を開く、花は單性、無花果(多)に似て小さき假果を結ぶ。 「き格子」。

**いぬふき**〔犬防〕(名) 佛堂の内障の前にかまへたるひく

**いぬぶな**〔犬撫〕(名) 〔植〕殼斗科の落葉喬木、山地に自生す、幹高六七丈に及び、樹皮黒色、葉は互生し、楕圓形にして、ぶなよりは稍長く薄く、下面に白色の毛茸密生す、四五月頃花を開く、花は單性にして同株、木材は器用又は薪炭料に供せらる。

**いぬばえ**〔犬吠〕(名) 古昔、大嘗會、又外蕃の参朝せしときなどに、単人(ヒト)が宮城の御門にゐて、犬のとほばえに類したる聲を出せしとす。

**いぬほづき**〔犬酸漿〕(名) 〔植〕五輪科の有毒草本、原野に自生す、莖高三三尺、葉は互生し、楕圓形にして有柄、夏日、花梗を擡形花序を著生す、花は白色にして楕圓花序に排列す、果實は球形にして黒色なり。

**いぬまき**〔犬楨羅漢松〕(名) 〔植〕



〔きづほぬい〕

**いぬむいぬ**

松柏科の常綠喬木、葉は互生し、細長、木材は淡黄白色を帯び、用途尠からず、又、觀賞植物として栽培せらる。

**いぬむき**〔犬麥〕(名) 植物こうばふむき。

**いぬやまき**〔犬山燒〕(名) 尾張國犬山町より産出する陶器釉に焼き散入あり、通常繪附を施す。

**いぬよもぎ**〔犬蓬〕(名) 〔植〕薔薇科の一種、原野に自生す、形状は、よもぎに類す、秋期、箱頭の花莖を抜き、復總花を著け小花楕圓す。

**いぬわらび**〔犬蕨〕(名) 〔植〕羊齒類の一、隨處に自生す、葉は羽狀複葉にして先端尖る、葉裏の側脈に沿ひて夥多の子囊群を生じ、熱すれば褐色を呈す。

**いぬめ**〔成草乾〕(名) 方角の名、成草の同、即ち西北の間、

**いぬあん**〔玄苧〕(名) 〔植〕豆科の落葉喬木、山野に自生す、幹高四五丈、樹皮淡綠褐色、葉は奇數羽狀複葉にして、柔毛密生し、小葉は卵形全縁、八月頃、葉腋に花梗を抽出き、總狀花序著け、繖形の小白花を綴る、扁平細長の莢を結ぶ。

**いぬね**〔稻〕(名) 〔植〕禾本科の一年生草本、東洋諸國の最重要植物として到る所の水田又は陸田に培養せらる、莖は高さ三四尺、圓柱形中空にして結節を有す、葉は互生し、扁平細長にして平行脈あり、下部に葉鞘ありて莖を包む、八月頃、莖頭に穂を抽出き、覆輪花を著け、花は雌雄兩全、果實は穎果にして種子はいはゆる木なり、米は二粒の殻に被包せられ、秋に至りて成熟し、製(こ)と糞とありて、食用に被包せられ、秋に至り、莖及葉は、繩、席其他種々の用に供せらる、 ◎穀所の名、稻を採取あはせたるもの、種類多し。 ―― 〔からぢ〕〔稻麩〕(名) 〔植〕寄生菌類の一、稻の穂に寄生して其花を害す、我國到る所の稻田に發生す。 ―― 〔かり〕〔稻刈〕(名) 稻に熟したる稻を刈り取る也。 ―― 〔きび〕〔稻黍〕(名) 〔植〕うるきび。 ―― 〔こき〕〔稻拔〕(名) 稻又は麥の穂より子實を抜きこき落すに用ふる農具、要部は齒を鐵にて作り形を柿の如し。 ―― 〔なごき〕〔稻つき〕こき作り(稻搗子磨) (名) 〔動〕きりぎりす。 ―― 〔むし〕〔稻蟲〕(名) 〔動〕いなごまろ。

**いねん**〔意念〕(名) おもひごころ。

**いのいちばん**〔一番〕(名) いろは番號を付したるもの第一番(まゝ)。さし。ま。

**いのこ**〔射殘〕(名) 古昔、正月の射籠のとき、參り來らざりしもの、翌日また射さし。

**いのこづち**〔牛膝〕(名) 「ゐのこづち」を見よ。

**いのめし**〔猪〕(名) 「ゐのめし」を見よ。

**いのれり**〔猪〕(名) 「ゐのれり」を見よ。

**いのち**〔命〕(名) 動物の生活する元力、いきのたまををせしめい。 ◎動物の生活する期間、ことぶき。よはひと。

**いのち**がへる。 ―― 〔がへり〕(命換) (名) 一命にかかはるべき重大なる物事。 ―― 〔がはり〕(命果報) (名) 運よくいのちのたすか。 ―― 〔がり〕(命報) (名) 一のちをかけて行ふ。 ―― 〔くらへ〕(命較) (名) ◎よはひの長短をくらぶ。 ◎精力をくらぶ。 ―― 〔ごひ〕(命乞) (名) ◎いのち水かかん、を神佛にいのち。 ◎殺す。 ◎命沙汰(名) ◎いのちにかかはる沙汰。 ―― 〔まだい〕(命大覚) (名) ◎いのちを保つか否かによると。 ◎まらず(命不知) (名) ◎いのちを蕪んせざると。生命の危険なるをもかへりみずして事をなす性質。又、其人。 ―― 〔だひ〕(命代) (名) ◎いのちを償ふ。 ―― 〔づく〕(命盡) (名) ◎いのちをまぢい。 ◎いのちがけ。 ―― 〔ながし〕(命長。 盡) (形) ながく生きてあり。長命なる。 ―― 〔ぬまびと〕(命盗) (名) ◎いのちを食ひて生き長らふる人。 ◎ひろ(命拾) (名) ◎己に命を失はんとしたる場合、幸にして免れたると。九死に一生を得たると。 ◎みよ(命冥加) (名) ◎死すべきほどの場合に、ふしきに助

**いねんーいのち**







にし。いぼに。ほうほうに。

いはね(岩根)(名) ①いはねのらもと。②いはは。

いはは(岩橋)(名) 岩と岩との間。

いはは(石走)(名) 浅瀬に石をおき並べて

飛石としたる。(石枕)。

②地水微風化等により、岩

石の天然に纏の形をなせるもの。①の岩橋之(枕)

「なみ」まぢかし「あふみ」に冠する枕詞。

いはは(射場始)(名) 古昔、官中に行はれし儀式、射

場殿にて弓を射はしむる名。

いはは(石走)(自、ら) 岩の上を水走

いはは(石走)(枕) 「たき」たるに冠する枕詞。

いはは(祝)(名) いはあとことほぎ。ことほぎ。——う

た(祝歌)(名) いはの意を述べたる歌。——ぎ(祝

木)(名) 削掛彩の一種北越地方にて正月のいははに用

ひしもの。——ぞ(祝具足)(名) 古昔、武家の子弟

の元服の祝ひをせし甲冑。——と(祝言)(名) い

はひて言ふことば。——と(祝事)(名) ①いははひ酒

こと事。よろこびごと。②いみきらふ事。——ぎ(祝酒)

(名) いはひの宴に酌む酒。——す(祝過)(自、

三四) いはひすす。——だけ(祝葎)(名) (種) れいゑ。

——つき(祝月)(名) 正月五月九月の稱、凶なる月と

て思ひていふ。——の(祝絲)(名) いはひの絲。

——の(せん(祝膳)(名) いはひの宴に敷す。昆布・鹿菜

を盛り出す膳。——の(つゝ(祝枕)(名) うづゑ。——

び(祝日)(名) よろこびはいはよき日。あゆくま。——

ほう(祝禱)(名) といひぎ。

いは(齋)(名) ①いみぢき。②かしづきまらる

とは。③いはのみや。齋宮。——と(齋兒)(名) かしづき

まらる。④いづま(齋妻)(名) 大事にあつかふ妻。

⑤いづみ(齋殿)(名) 神をまつる殿堂。——ぬし(齋

主)(名) 神につかひやまふ鏡。神鏡。③三種神器の一、八咫

鏡。④のみや(齋宮)(名) 伊勢神宮の稱。いづきのみ

や。——ひと(齋人)(名) 神につかへまつる人。かんぬ

し。——べ(齋堂)(名) 古昔、神酒

を神にたてまつるときに用ひ

し陶器(いんべ、忌堂)。

いはひと(家人)(名) い

はひと。

いは(岩檜葉卷箱)

(名) 檜葉科の羊歯類、溪間陰湿の岩

上に著生し、高さ數寸、葉は頂生し、扁拍形の葉

上に似て滑縁なり、觀賞用として栽培せらる、園藝的變種多し。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。①(岩藤)(名) 蔓草、つた。②(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。③(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。④(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑤(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑥(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑦(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑧(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑨(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑩(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑪(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑫(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑬(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑭(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑮(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑯(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑰(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑱(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑲(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。⑳(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉑(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉒(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉓(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉔(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉕(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉖(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉗(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉘(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉙(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉚(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉛(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉜(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉝(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉞(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㉟(岩藤)(名) 蔓草、つた。

いは(岩藤)(名) 蔓草、つた。㊱(岩藤)(名) 蔓草、つた。



【いわひ】

いはむろ(岩室)(名) いはや。

いはもと(岩本)(名) 岩の根もと。

いはもの(岩物)(名) 鑛石より採取したる顔料。

いはのみ(岩根)(名) 岩つがざく。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。

いは(岩屋)(名) 岩つがざくらて造りたる居所。



【いわね】

いはね

いはひ

いはむ

いはね

いはろーいひあ

は肥厚にして長楕圓形をなし、淡緑色にして白色を帯び、相重なりて蓮華の如し、夏秋の候、中心より茎を抽き、一尺許、梢に至るに從ひて葉漸く小さく、葉腋に一花を開く、花莖は互に結合し、雄蕊は通常十箇にして雌蕊は五箇なり、花後莢を結ぶ、俗説に、此草はよく火を鎮むといふ。

いはあくまよう「岩緑青」一名「化」緑色の顔料普通に通孔を石をくたき水蒸して製す。あをに。

いはあ「岩井」一名「岩」のあひだより湧き出づる井戸。又石を磨みてつくりたる井戸。

いはん「違反」一名「法にたがひ罪をおかす」と。

いはん「違反」一名「たがひむく」ともと。

いはんかたな「言方無」一名「言語に絶えたりいひやなし」。

いはんや「況」一名「言はんや」の義其上に。まして。

いはい「飯」一名「米を蒸したるもの。水を炊きたるもの。ゆし。かたかゆ。ぜん。まんま。」

いはい「飯」一名「板にて箱を作り、地中に埋めおく水のかよひ路。又、池の内より外へ水を出だす樋」とひ。

いはい「藁」一名「なえなびくと。ふをれふすと。」

いはい「藁」一名「言明」一名「自ら、さ四」語りて夜をおかす。かたかありあす。

いはあ「かす」一名「言揚」一名「自ら、さ四」いひつもの。

いはあ「かす」一名「言上」一名「他、か下二」まうしあや。ごんちやうす。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いはあ「かす」一名「言當」一名「他、か下二」いひて物事をあつ。いひし通りになる。

いひあーいひか

いひあやまつ「言過」一名「他、た四」いひそなふ。「いひあひをなす。口論す。」

いひあらが「言争」一名「他、は四」いひあらそふ。「いひあらそふ。争ひをなす。口論す。」

いひあらそ「言争」一名「他、は四」いひあらそふ。「いひあらそふ。争ひをなす。口論す。」

いひあはす「言顯」一名「他、さ四」言にあらひあり。いひあはす。「いひあはす。言にあらひあり。」

いひあり「言歩」一名「他、か四」いひくらす。「いひあり。言にあらひあり。」

いひあり「言歩」一名「他、か四」いひくらす。「いひあり。言にあらひあり。」

いひいだす「言出」一名「他、さ四」言を發す。いひいだす。「いひいだす。言を發す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひいづ「言出」一名「他、か下二」いひいづ。「いひいづ。言を出す。」

いひかーいひか

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひか「言掛」一名「いひかかす」といふ。如し。無難なる事をいひて、人を困らしむると。

いひかへる「言易(他)」「いひかふ」の訛。「しへへ」ふ。  
 いひかまふ「言易(他)」「いひかふ」の訛。「しへへ」ふ。  
 いひがみ「飯糰(名)」「飯をかみて食べに食はしむ」といひかよふ。「均(名)」「言通(自)」「は(四)」「言をかはす」  
 いひき「肝(名)」「蘇てゐるときの鼻息。——まかく(句)」「いひきを發す」といひく。

いひきかせ「言聞(名)」「いひきかすと」。  
 いひきかす「言聞(名)」「言聞(他)」「さ(下)」「さ(四)」「ひて聞かせるのみこます。」「ま(三)とす。ときまかす」。  
 いひきかせる「言聞(名)」「いひきかすと」。  
 いひきたり「言來(名)」「いひならはし(ひつたへ)」。  
 いひきなる「言切(他)」「ら(四)」「いひをはる。」「いひはつ。」「ま(三)とさ(四)いひきる。だんげんす」。

いひくくむ「肝(目)」「か(四)」「いひきを發す」。  
 いひくくめる「言含(他)」「言含(他)」「ま(下)」「さ(四)」「いひくくむ」。「言種(名)」「言ふべきたね。さ(四)とす」。  
 いひくさす「言腐(他)」「言腐(他)」「おとしていひくさす」。「いひくたす」。  
 いひくたす「言腐(他)」「言腐(他)」「さ(四)」「いひくさす」。  
 いひくたす「言腐(他)」「言腐(他)」「さ(四)」「いひくさす」。  
 いひくたす「言腐(他)」「言腐(他)」「さ(四)」「いひくさす」。

いひくらす「言暮(他)」「さ(四)」「或事のみをいひくらむ」。「言暗(他)」「言暗(他)」「ま(下)」「さ(四)」「いひくらむ」。「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。

いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。

いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。  
 いひくらむ「言包(他)」「いひくるむ」の訛。「む」。

いひけらる「言謂(名)」「いひける」の延。いひけるやうに。いへるには。さ(四)には。」「言拵(他)」「は(下)」「(二)」「りなしていふ。」「あ(三)とす」。  
 いひけらる「言拵(他)」「いひけるやう」の訛。  
 いひけらる「言拵(他)」「いひけるやう」の訛。  
 いひけらる「言拵(他)」「いひけるやう」の訛。  
 いひけらる「言拵(他)」「いひけるやう」の訛。  
 いひけらる「言拵(他)」「いひけるやう」の訛。  
 いひけらる「言拵(他)」「いひけるやう」の訛。

いひこむ「言籠(他)」「ま(下)」「(二)」「輪じて屈服」。  
 いひこめる「言籠(他)」「さ(四)」「さ(四)」「いひかかせていひこらす」。「言愈(他)」「さ(四)」「いひかかせていひこらす」。「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。

いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。

いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。

いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。

いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。  
 いひこらす「言差(他)」「さ(四)」「いひかけてやむ」。

いひすて「言捨(名)」「いひすつ」と。「即座の興に駄み出でたる俳句。——か(三)」「言捨會(名)」「點取をなまざる俳句の會」。  
 いひすべる「言捨(他)」「いひすつ」の訛。  
 いひすべる「言捨(他)」「いひすつ」の訛。  
 いひすべる「言捨(他)」「いひすつ」の訛。  
 いひすべる「言捨(他)」「いひすつ」の訛。  
 いひすべる「言捨(他)」「いひすつ」の訛。  
 いひすべる「言捨(他)」「いひすつ」の訛。

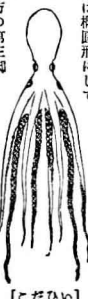
いひそこな「言損(名)」「いひそこなふ」と。「いひあやいひそこなふ」。「言損(他)」「は(四)」「いひあやいひそこなふ」。「いひあやまる。」「いひあやまる。」「いひせんす」。  
 いひそす「言過(他)」「さ(四)」「いひすです。」「我たけくいひせし待てる」。「を失ふ」。  
 いひそびれる「言過(他)」「ら(下)」「(一)」「いひあやいひそびる」。「言初(他)」「ま(下)」「(二)」「いひはじむ」。  
 いひそむ「言初(名)」「いひそむ」の訛。  
 いひそめる「言初(名)」「いひそむ」の訛。  
 いひそめり「言初(他)」「いひそむ」の訛。  
 いひそやす「言初(他)」「いひそむ」の訛。  
 いひそやす「言初(他)」「いひそむ」の訛。  
 いひそやす「言初(他)」「いひそむ」の訛。

いひたこ「飯蛸(望湖魚(名)【動】章魚)の一種、形小さく、體は楕圓形にして、體色蒼白、第一對の觸脚は薄紅の交接器に變ず、腹中にある飯粒の如きものは、即ち其生殖物なり、近海に産し、食用に供せらる。」「し(下)」。  
 いひたこ「言出(名)」「いひたすと。」「冒頭」。  
 いひたす「言足(他)」「さ(四)」「おぎなひ」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。

いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。

いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。

いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。  
 いひたす「言出(名)」「いひたすと」。



【こだひい】



いひはづす「いひはづす」言外(他、三四) いひそこなふ  
いひはなす「いひはなす」言放(他、三四) いひはなつ  
いひはなつ「いひはなつ」言放(他、三四) 心に思ふかぎ  
りをいひ切る。いひまる。  
いひはやす「いひはやす」言難(他、三四) ほめていふよ。  
いひはむ「いひはむ」言難(他、三四) ちやうす。

いひはる「いひはる」言張(他、四) いひとほす。  
いひびつ「いひびつ」飯櫃(名) めしびつ。めしはら。「分疏」  
いひひらぎ「いひひらぎ」言開(名) いひひらくと。いひわけ(辯解)  
いひひらく「いひひらく」言開(他、か四) 仔細を明かに  
せんがためにいひて仔細を明かにす。べんかひす。べん  
めいす。さむわ。

いひひろぐ「いひひろぐ」言廣(他、か下二) いひふら  
いひひろむ「いひひろむ」言廣(他) いひひろぐの詠。  
いひひろむ「いひひろむ」言廣(他) いひひろぐの詠。  
いひひろむ「いひひろむ」言合(他、ま下二) 合點の  
ゆくやうによいふ。富人のいふべき事又は行ふべき事  
をよくいひ聞かせておく。

いひくめ「いひくめ」言含(名) いひくめおく。  
いひくめ「いひくめ」言含(他) いひくむの詠。  
いひくめ「いひくめ」言伏(他、ま下二) いひて屈從  
せしむ。さぶやぶ。  
いひふせる「いひふせる」言伏(他) いひふすの詠。

いひふらす「いひふらす」言觸(他、ま四) 世間に廣く  
知らるやうにいふ。いひひろぐ。いひちらす。世間にて  
うはせす。いひらばんす。  
いひふる「いひふる」言觸(他、ら下二) いひふる。  
いひふる「いひふる」言舊(他、ま四) いひなれて、め  
づらふらざるやうになる。

いひふる「いひふる」言觸(他) いひふるの詠。  
いひぶん「いひぶん」言分(名) いひぶん。いひまかど。  
いひぶん「いひぶん」言下手(名) いひかたの拙さ。

いひばい「いひばい」飯粒(名) めしつぶ。糞心。「て勝つ」  
いひまかす「いひまかす」言負(他、ま四) いひあらそ  
いひまきらす「いひまきらす」言紛(他、ま四) まぎらか  
すやうにいふ。ごまかし。いひくるむ。いひなす。人の  
話を側よりいひみだす。

いひまきはす「いひまきはす」言紛(他、ま四) 前縁に  
同じ。「ひて負く」  
いひまぐ「いひまぐ」言負(自、か下二) いひあらそ  
いひまぐ「いひまぐ」言曲(他、か下二) 然るべきを  
然らざるやうにいひす。理を非にまげていふ。  
いひまける「いひまける」言負(自) いひまぐの詠。

いひまはし「いひまはし」言回(名) いひまはすと。「がうまい」  
いひまはす「いひまはす」言回(他、ま四) いひめぐ  
いひまへ「いひまへ」言前(名) 言ふべきたね。こうまひ。いひや  
いひまらむ「いひまらむ」言丸(他、ま下二) いひくる  
いひまらむ「いひまらむ」言丸(他) いひまらむの詠。「む」  
いひみだる「いひみだる」言亂(他、ら四) ことばを發し  
て妨げなす。いひてかき亂す。

いひもらし「いひもらし」言漏(名) いひもらすと。  
いひもらす「いひもらす」言漏(他、ま四) いひみつを人  
にもらす。いひのこす。  
いひやぶる「いひやぶる」言破(他、ら四) いひまかす。い  
ひやぶ。ときふ。脱敗。

いひやむ「いひやむ」言止(他、ま四) いひをはる。い  
ひやむ。いひやむ。言遣(他、ら四) 他につげえらす  
いひやぶる「いひやぶる」言遣(他) ことばのまはらす  
いひやぶる「いひやぶる」言表(名) おもひのほかあんのほか。一に  
出づ。「がら」意表外(名) いやう。

いひよら「いひよら」胃病(名) 病胃に関する一切の疾患。  
いひよら「いひよら」言淀(名) いひよらとむ。  
いひよら「いひよら」言淀(他、ま四) ことばのまは

りてつかふ。  
いひよる「いひよる」言寄(自、ら四) ものをいひかけて  
いひり(名) いびと。「だす」(他、ま四) 居る  
に堪へざるほどにいびりて、出で去らしむ。

いびる「いびる」言わ(他、ら四) わづらはしきほどにいひなやま  
す。あへたぐ。せびる。あがり強く。風(イ)りつ。  
いびわく「いびわく」言分(他、か四) 次條に同じ。  
いびわく「いびわく」言分(他、か下二) ときわけて  
いふときあかす。せんめいす。

いびわけ「いびわけ」言分(名) せんめい。せんか。いひひら  
き(分疏)。「あやまり。わび(辯罪)」の詠。  
いびわたし「いびわたし」言渡(名) いひわたすと。めいらい。ふ  
れ。口頭にする判決の宣告。

いひわたす「いひわたす」言渡(他、ま四) めいれい  
つたふ。おほせを宣告す。  
いひわたる「いひわたる」言渡(自、ら四) いひつとつと  
しつきを經。いひつげある。いひよる。

いひわつ「いひわつ」言煩(他、ら四) いひにく  
く思ふ。いひはばむ。  
いひわぶ「いひわぶ」言説(他、は上) いひにく  
いひわん「いひわん」飯椀(名) めしわん。あちわん。  
いひん「いひん」遺品(名) 死後のこりたる物品。かたみの  
まな。遺失したる物品。おとしもの。

いふ「いふ」異父(名) 兄弟の母を同じうして父の異なる。た  
いふ「いふ」移付(名) 一官衙より他官衙へおくりわたすと。  
いふ「いふ」位封(名) 中古、三位以上の諸王・諸臣に其階階  
階に同じし食封。

いふ「いふ」異附(名) おそれつく。おそれたがふと。  
いふ「いふ」畏付(名) おそれたがふと。法【禁止保險の  
目的たる被保險物が、海難のために全損に至らざる場合に、  
被保險者の有する一切の權利を保險者に付與して、保險金全  
部を取得す。】

いふ「いふ」言(他、は四) ことばにいたす。ことばに











【板看庵】

を中へ出だし、まはりよりまとはし、引きとほして虎の形に  
 いほり(名) 雲霧などのもやもと起ること。「結ぶと。  
 いほり(名) 庵・菴(名) いほると。いほ(名) 自軍營。  
 國紋所の名種類多し。いほりかんばん。——かんばん  
 【庵看板】(名) 。

劇場の前に掲ぐ。  
 看板の一、木札の上  
 上に壁限の形を隔る  
 に舟へ一座の主たる俳優の名をゑたるしたもの。いほりかんばんを劇場前に掲げ俵へき俳優。

いほり(名) いほると。いほり(名) いほりを建つ。  
 いほる(名) (自、ら、四) いほりを建つ。  
 いほる(名) (自、ら、四) いほりを建つ。  
 いほる(名) (自、ら、四) いほり。

いほん(異本)(名) 世にありふれざる書物。同一の書にして、文字又は文句のことなる所あるもの。  
 いま(今)(名) 目前の時。現在の時。このとき。げんざい。——  
 といふ今(句) ただいま。目前。——は昔(句) いまよりいへば昔なること。

いま(今)(副) まのあたりに。眼前に。いまはどなたたぬうらにやがて。いまでなくては。さらに。——が今(句) すぐに。ただちに。——かか(句) 物事の到来をやきもきして待つに。いま(今一度)(副) さらに一回。

いまいま(今)(副) いまいまか。いまちまに。  
 いまいま(今)(副) いまいま(形) (二) 責(み)かつしみてあり。いまいま(名) 語(ことば)だきらはし。いん立(た)した。いきとほし。——げ(忌)忌(忌)氣(き) いまいま(名) 又、其度合。

いまいり(今)(名) えんりり。えんざん。  
 いまお(今)(名) いまふの體。いまお(今)(名) いまふの體。  
 いまがた(今)(名) いまふの體。いまがた(今)(名) いまふの體。

いまがた(今)(名) 菓子(こ)の名、水にて餛飩粉を溶き、これをかねの輪に注ぎ、中に餛飩を包みて焼きたるもの。

いほり(今)(名) いまふの體。いほり(今)(名) いまふの體。

の、昔時、江戸の今川橋邊の者焼き始めしより名づくといふ。  
 いまから(自)(今)(副) いまよりのち。これから。  
 いまき(今)(名) いまふのり。えんざん。  
 いまき(今)(名) 古昔、貴人の湯あみに奉仕するもの。まことし布。今時、婦人の常に腰布とまことし布。ゆまき。ゆも

まことし布。今時、婦人の常に腰布とまことし布。ゆまき。ゆも  
 乙。こし布。(揚卷)。  
 いまごろ(今)(名) いまのとき。いまえん「きのふの  
 いまざか(今)(名) いまざか。——もち(今)(名) 餅(名) 餅を包みたる橢圓形の餅。紅白種々の色を附け、熨板の上に魚目を著く。  
 いまざ(今)(名) (自、は、四) いまざすの徒。  
 いまさ(今)(名) (自、は、四) いまざすの徒。  
 いまさ(今)(名) (自、は、四) いまざすの徒。  
 いまさ(今)(名) (自、は、四) いまざすの徒。

いまさら(今)(名) (自、は、四) いまざすの徒。  
 いまさ(今)(名) (自、は、四) いまざすの徒。  
 いまさ(今)(名) (自、は、四) いまざすの徒。  
 いまさ(今)(名) (自、は、四) いまざすの徒。

いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。

いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。

いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。

いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。

いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。

いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。  
 いまし(今)(副) 今改めて。今となりて。

います(今)(副) さらにすこし。もすこし。  
 いまそ(今)(副) さらにすこし。もすこし。  
 いまそ(今)(副) さらにすこし。もすこし。  
 いまそ(今)(副) さらにすこし。もすこし。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。



【形人どまい】

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。  
 いまだ(未)(副) まだ。いまだ。いまだ。

いほり(今)(名) いまふの體。いほり(今)(名) いまふの體。

いまか(今)(名) いまふの體。いまか(今)(名) いまふの體。

います(今)(名) いまふの體。います(今)(名) いまふの體。

いまは(今)(名) いまふの體。いまは(今)(名) いまふの體。

いまは(今)(名) いまふの體。いまは(今)(名) いまふの體。



いむをの(一審) (名) 神威を造作し又は神に奉る材木を切るに用ふる清めたる斧。

いめ(夢) (名) ゆめ。なほ一のことせられて。

いめい(異名) (名) いまやう。

いめい(遺命) (名) 死際にいひのこせるいひつけ。

いめい(運命) (名) いひつけないたがふと。

いも(妹) (名) 男子より女子を親しみ呼ぶ稱。天より妻を親しみ呼ぶ稱。稲天雨星(シジメ)の女。弟。

いも(芋) (名) 稲天雨星(シジメ)の栽培草木、塊の地下莖を有す。高さ二尺許、葉は大形にして階状、莖柄長し、肉穂花序は長き佛狀をなし、子房は一室を有す、地下莖は食用に供せらる。さといも、たうのいも、あぐいも、やつがしら等變種多し。いもいもつき。いもほり。いも洗(句) 多人数のこみあふ狀態にす。

いも(諸曹) (名) 儲、つくないも、がさういも、やまのいも、さつまいも等の總稱。薩摩人。

いも(痘痕) (名) 顔面にあるいもがさのあと。あはた。

いも(名人) 人に贈物をする上包に平假名にて書く辭。

いも(あふ) (諸胎) (名) 胎の一種、さつまいもを落して摺りつぷして砂帶とませたるもの。

いも(うら) (妹) (名) 同胞にて後に生まれたる女子。男より姉妹を通じて呼ぶ稱。年少の婦人を親しみて呼ぶ稱。

いも(ぶん) (妹分) (名) かりに妹と定めたるもの(義妹)。

いも(むこ) (妹婿) (名) 妹の夫。

いも(が) (い) (妹家) (枕) 「いく」に冠する枕詞。枕詞。いも(が) (かみ) (妹髪) (枕) 「あげたかめに冠する枕詞。

いも(が) (きる) (妹着) (枕) 「みかさ」に冠する枕詞。

いも(が) (け) (豆腐) (名) 料理の名、豆腐の汁に「やまのいも」のすり汁をかけたもの、やまかけどうふ。

いも(が) (し) (疳疔) (名) ほうさう。もが。いも(が) (さ) (芋頭) (名) ほうさう。もが。いも(が) (さ) (小蝸) (名) おやじ。蠍。いも(が) (そで) (妹袖) (枕) 「まく」に冠する枕詞。

いも(か) (う) (芋川) (名) 尾張國芋川にてはじめて製したる平うらうら。

いも(が) (ひ) (芋貝) (小蠟) (名) 動、腹足類の小蠟體形はほ側面状、芋の子に類す、種類によりて大小色彩を異にし、暖地の海に多し、芋の砂礫に棲む、肉は食用に供せらる。

いも(が) (ほ) (妹紐) (枕) 「ゆふ」に冠する枕詞。

いも(が) (ゆ) (諸粥) (名) やまのいもを煮て甘露粥(シジメ)蜜餞等と和したるを、入れて炊きたる粥。さつまいもを入れて炊きたる粥。

いも(が) (ら) (芋幹) (名) 芋の地上莖を干したるもの、食用に供す、其なまるを「ずいき」といふ。

いも(が) (み) (預籠) (名) 料理の名、米粉に「やまのいも」をすりませ昆布につつま垂味噌にて煮て、小口切にしたるもの。

いも(が) (さ) (酒漬) (名) 「やまのいも」をすり入れて、よく混ぜあはしたる酒、山芋酒。

いも(し) (軟) (名) いもがら。

いも(志) (鑄物師) (名) いもの志。

いも(志) (い) (文字) (名) 島原の異稱。

いも(志) (志) (名) ゆも志。

いも(志) (志) (名) 妻の姉妹(僕)。

いも(志) (志) (名) 芋の姉妹(僕)。

いも(志) (志) (名) 諸焼酎(名) 甘藷(シシメ)を原料として醸造したる焼酎。

いも(志) (志) (名) 動、いばむしりの稱。

いも(志) (志) (名) とろろ。いも(志) (志) (名) 薯蓣薯(名) 料理の名、薯蓣(シシメ)に豆腐をまぜてゆでたるもの。

いも(志) (志) (名) 不器用なると。又其人。いも(志) (志) (名) 女と男と。大樽。目兄弟と姉妹と。いも(志) (志) (名) 動、はととぎす。一むすび(名) 夫婦の縁をむすぶこと。

いも(志) (志) (名) 禾木科植物の生長後、莖葉に微菌寄生して白斑を現し、次第に衰弱して抽穂せざる病。

いも(志) (志) (名) 煙五又は石積等にて、目地の置なりあふと、工事に補助を作るものとして思ひ。

いも(志) (志) (名) 料理の名、「さといも」を用いて、味噌をぬりてや田楽(名)。

いも(志) (志) (名) さとう。

いも(志) (志) (名) かねは親戚の義妹又は妻の稱。

いも(志) (志) (名) まつに冠する枕詞。

いも(志) (志) (名) 金風を授ふかし、鑄型に流し注ぎみて造りし鑄物の總稱。一志(鑄物師) (名) いものを作る職人。いも(志) (志) (名) 一志(鑄物師) (名) 鑄物に精刻して九形のおくり見する彫刻。

いも(志) (志) (名) おやいに附きたる小塊。こいも。

いも(志) (志) (名) 山手を轉倒していふ。

いも(志) (志) (名) 芋又は諸を植ゑたるはた。

いも(志) (志) (名) いみ。あゝるん。一の御寄にまゐれる。

いも(志) (志) (名) 雛人形の種類、顔の少し長くして恰も里芋の皮をむきたるに似たるもの。

いも(志) (志) (名) 自、は、い、むの姪。

いも(志) (志) (名) いもを想ふと。いも(志) (志) (名) 自、は、い、むの姪。

いも(志) (志) (名) 後、に立たぬ無能の坊主。

いも(志) (志) (名) 動、蟻類の幼蟲の總稱、春夏の候、草木に棲息して其糞を食す形は蟻に似て、長さ二三寸、多くは綠色又は褐色を呈す、後に蛹となり、更に羽化して成虫となる。種類特多し。八月十五夜の月。

いも(志) (志) (名) 料理の名、糯米粉と粟米粉とに山芋のおろしたるを混ぜて捏ね合はせ、餛飩の如くに製して焼(こ)で、蕎麥醬油をかけて食するもの。

いも(志) (志) (名) 「わもり」を見よ。いも(志) (志) (名) 門戸(名) 門戸によりかかると。一の望(句) (戰國策に出づ) 門戸に倚りかかると留む義、吾子の歸るる

むむを—むむ

むむを—むむ

むむを—むむ



いしきさま。一ざ(否)(名) いやらしきと。又、其度合。  
いゆ(一)「慰諭」(名) なぐさめさまとす。  
いゆ(二)「自下」(二) 病氣なほる。全治す。ぜんくす。ほんぶく。

いゆ(三)「畏友」(名) 置んじうやまふ友人。  
いゆ(四)「行」(自)か(四) 爲しは遊語行く。  
いよ(彌)「副」 「いや」の釋。

いよ(一)「愈」(名) あるが上に。そのうへに。ますます。  
いよ(二)「愈」(名) ありたりたまさま。  
いよ(三)「異様」(名) 常にかはりたるさま。  
いよ(四)「威容」(名) いかめしき容儀。おごそかなるかた

いよ(五)「伊豫藤白」(名) 伊豫國松山附近より産出するかすりの木綿物。  
いよ(六)「伊豫葛」(名) 植屋(葛)村の多年生草本、湖邊の山野に自生す。莖は蔓生にして他物に纏繞し、葉は廣楕圓形又は卵形にして對生す。夏、莖腋より花穂を抽出き、聚繖花序をなし帶黄白色の小花を綴る。花後に實を結ぶ。

いよ(七)「伊豫白」(名) 小札の一種、形は鉢附のござねに似て、一文字に切り、其末を丸くしたるもの。  
いよ(八)「伊豫白鐵」(名) 「錐」(我國にて初めて伊豫より出だしたる故に名づく)マテモ。

いよ(九)「伊豫籬」(名) 伊豫國より産出するすだれ、莖の太さの均一なるを其特色とす。  
いよ(一〇)「伊豫染」(名) 染模様の名、伊豫藤を重ねてすかりて拾も模様を取り、絹などに染めたるもの、地に密線ありよだつたてて、「彌整」(自、た四) 寒さ又は驚愕などにて、身の毛立つる身毛。

いよ(一一)「伊豫紙」(名) 伊豫より産出する紙石、色白くしていよまさ(名) いよまさがみ。一がみ「伊豫紙」(名) 伊豫國より産出する正目紙、楮皮を原料とす、多くは錦繪などに用ふ。

いよ(一二)「伊豫籬」(名) 伊豫國より産出するすだれ、莖の太さの均一なるを其特色とす。  
いよ(一三)「伊豫染」(名) 染模様の名、伊豫藤を重ねてすかりて拾も模様を取り、絹などに染めたるもの、地に密線ありよだつたてて、「彌整」(自、た四) 寒さ又は驚愕などにて、身の毛立つる身毛。

いよ(一四)「伊豫紙」(名) 伊豫より産出する紙石、色白くしていよまさ(名) いよまさがみ。一がみ「伊豫紙」(名) 伊豫國より産出する正目紙、楮皮を原料とす、多くは錦繪などに用ふ。

いよ(一五)「(愈)」(副) いよいよ。  
いよ(一六)「(名)」 いよやか。  
いよ(一七)「伊豫蠟」(名) 伊豫國より産出する木蠟。  
いよ(一八)「以來」(名) 此のこた。此ののち。「いらくま。」  
いよ(一九)「依頼」(名) たのみ。たより。  
いよ(二〇)「刺刺」(名、副) とげなどの厨にふれたときの感覺。心のせきたつさま。

いよ(二一)「刺刺」(名、副) とげなどの厨にふれたときの感覺。心のせきたつさま。  
いよ(二二)「刺刺」(名、副) とげなどの厨にふれたときの感覺。心のせきたつさま。  
いよ(二三)「刺刺」(名) いらいらしきと。いらいらしき度合。

いよ(二四)「(名)」 屋根に芽く五。  
いよ(二五)「(名)」 屋根の一部分。目切葺屋根の下の三角形なる部分。一破れて露不斷の香を焚く(句) 屋根はこはれて鬮たちこみたれば、香の煙の常に室に滿つるかと疑はる。

いよ(二六)「刺鐵」(名) 動城の一種、刺鐵の成虫にして、體長五分、全體黄色、觸角は黒く脚は褐色、前翅は黄褐色にして二條の黒線あり、後翅は淡灰黄色にして褐色の斑點點在す。  
いよ(二七)「刺草」(名) 刺草(草) 一種、刺草の多年生草本、山野陰地に自生す。莖は高さ二三尺、四稜にして叢生す。葉は對生し、卵形にして疎鋸齒を有す。莖、葉共に刺あり、人これに觸るれば疼痛を感ず。夏秋の候、葉腋に穗状花を著け、淡緑白色の小花を綴る。雌雄異花、葎皮より纖維を採りて糸に製す。一「おり」刺草織(名) 刺草の莖の纖維を採りて製したる糸を用ひて織りたる一種の布。

いよ(二八)「(名)」 貸して利息をとる。「一の稻」。  
いよ(二九)「(名)」 貸して利息をとる。  
いよ(三〇)「(名)」 説明圖解、挿圖。

いよ(三一)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(三二)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(三三)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(三四)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(三五)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(三六)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(三七)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(三八)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。



【三】からい

いよ(三九)「刺高懸」(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(四〇)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(四一)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(四二)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(四三)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(四四)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(四五)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(四六)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(四七)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(四八)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(四九)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(五〇)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(五一)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(五二)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(五三)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(五四)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

いよ(五五)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。  
いよ(五六)「(名)」 刺高懸(名) 動「あち」の一種、大さ三四寸、皮あつくとげ多し。

さらり—さらか

さらりかす<sup>サキ</sup>村「苛」(他三四) 勢をなす。怒らす。伺ひげをいらかして。「さて、鳥肌立つ。さらりかす<sup>サキ</sup>。苛」(自か四) かつた。いかる。③蒸いららる<sup>サキ</sup>。苛」(自、か下二) いららかす。いららる<sup>サキ</sup>。苛」(形二) いらいらし。いられがまし<sup>サキ</sup>。いらいらし。「と。いららん<sup>サキ</sup>「悲亂」(名) うらみかりて前後のかがへなくなり。「日」(一名) いらいらと。④見えなすと。投すると。「日」のい。いらいらよう。つひえ。「金のーがおほい」。⑤あがり。収入。回りの仕事。

さらり「<sup>サキ</sup>」(名) 楳のくち。うめ楳。

さらり「<sup>サキ</sup>」(名) いろと。

さらり「<sup>サキ</sup>」(遺利一名) おとばれてある利益。すておかれた。さらり「<sup>サキ</sup>」(入揚「他、か下二) 成人のため。に少からぬ浪費をなす。

さらりあひ<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入相一名) 日のいるとき。にちぼつの時。くれがたひぐれ。—のかね「<sup>サキ</sup>」(入相鐘一名) 日没の頃、寺院につく鐘の會(曉鐘)。

さらりあひ<sup>サキ</sup>けん<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入會權一名) 「法」村番の住民が、一定の山林・原野・池沼等を共同して使用収益し得る権利。我國古來の地方慣習によりて發達したるもの。

さらりあひ<sup>サキ</sup>ば<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入會場一名) 「法」村民の共同して使用収益をなす場所。「へすところ」。

さらりあや<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入綾一名) 舞の手、一曲舞ひ終りて復た舞ひか。さらりう<sup>サキ</sup>と<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入夫一名) 露船の夫となりて其家に入りたる人。にふか。

さらりう<sup>サキ</sup>み<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入海一名) 「地」陸地に入りこみたる海の部分。さらりえ<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入江一名) 「地」陸地に入りこみたる湖沼の部分。さらりおう<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入王一名) 將棋にて、王將の敵地に入りこむ。「ながら退場せんとするときの奏樂。さらりおん<sup>サキ</sup>若<sup>サキ</sup>よう<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入音聲一名) 舞樂にて、舞人の舞ひ。さらりか<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入費一名) つひえ。にふか。さらりか<sup>サキ</sup>く<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入角一名) なでがくの角にひとすちの凹縁のそひたるもの。いららずみ。

さらり—さらき

さらりがた<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入方一名) 猪と入らんとする時。

さらりがね<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入金一名) 所得の金。まうけ。

さらりかは<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入側一名) ①座敷と縁側との間。いかるかは。②抽水機の左右の側板。

さらりがはら<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(炒五一名) いらなへ。

さらりがは<sup>サキ</sup>り<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入代一名) いらかはと。—たちかは。さらりか<sup>サキ</sup>は<sup>サキ</sup>り<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入代一名) 絶えずかはりあひて。出入をげく。さらりかは<sup>サキ</sup>る<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入代一名) 自ら、四いりて他にかはる。かはりあふ。(交代)。

さらりか<sup>サキ</sup>や<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入通一名) 自ら、四立ち入りて往。さらりが<sup>サキ</sup>ら<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(炒釜一名) 食品の名、豆の皮を細く切り、いらて油を取りたる粕を乾かしたるもの。①豆腐のからをいらたるもの。②寄留する。出寄留の對。

さらりき<sup>サキ</sup>り<sup>サキ</sup>ゆう<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入寄留一名) 「法」他處より入り来り。さらりく<sup>サキ</sup>ち<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入口一名) はひりぐち。門戸。①物事の端緒。さらりく<sup>サキ</sup>む<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入組一名) 自ら、まじりまじり。こみいる。さらりくり<sup>サキ</sup>り<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(海參、熬海鼠一名) 食品の名、「なまこ」の腸を去り、返(て)て日にほしたるもの。ほして。

さらりこ<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(蒸子一名) 食品の名、小さき鍋の煮たるを焙。①「<sup>サキ</sup>」(炒粉一名) 米の粉をいらたるもの、菓子原料として用ひる。かまねたね。

さらりこ<sup>サキ</sup>さく<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入小作一名) 「農」他村より入り来りての小。さらりご<sup>サキ</sup>み<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入込一名) 區別なく入りまじると。①芝居又は興行物の下の下等敷數。

さらりこ<sup>サキ</sup>む<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入込一名) 自ら、まじりまじり。おしわけてはこむ。さらりご<sup>サキ</sup>め<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(炒米一名) やきごめ。

さらりご<sup>サキ</sup>ら<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎肴一名) いらなへ。

さらりさ<sup>サキ</sup>か<sup>サキ</sup>な<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎肴一名) いらたる魚肉。

さらりさ<sup>サキ</sup>く<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入作一名) 「農」他村より入り来りて耕作すると。さらりさ<sup>サキ</sup>け<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎酒、熬酒一名) 酒に鹽油及醬師を加へて煎じ

さらり—さらり

さらりしたる、仕、勤、前身など、に用ふ。

さらりじ<sup>サキ</sup>や<sup>サキ</sup>um「<sup>サキ</sup>」(Bridium, 1930) (名) 「白」白金層の一元素。灰白色を呈し、硬度高く、熔離し難し、常に白金に伴ひて天然に産す。普通に白金と混じたるままにて使用せらる。

さらりま<sup>サキ</sup>こと<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入仕事一名) いれでまにてなすこと。

さらりま<sup>サキ</sup>ほ<sup>サキ</sup>れ<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(炒鹽一名) いらたる鹽。やきまほ。

さらりま<sup>サキ</sup>ず<sup>サキ</sup>み<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(炒炭一名) 火にあぶり遺氣を去りて、火のうつりやすすやうにしたる炭。

さらりま<sup>サキ</sup>ず<sup>サキ</sup>み<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入角一名) いらがく。

さらりた<sup>サキ</sup>け<sup>サキ</sup>る<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入猛一名) 家に歸りて怒鳴りたり。

さらりた<sup>サキ</sup>ち<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入立一名) 入りこむと。入りびたると。①古昔、許されて陣中に入り、女房と同座せし三位以上の人。昔は、女房の一なりし人の。さらりた<sup>サキ</sup>つ<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入立一名) 自ら、た四①たちいる。いらこむ。②親しく交はる。ゆきます。

さらりた<sup>サキ</sup>だ<sup>サキ</sup>ひ<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎鯛一名) 料理の名、鯛の肉をあぶり、むしろ細末にせるもの。ふくめだひ。

さらりち<sup>サキ</sup>が<sup>サキ</sup>ひ<sup>サキ</sup>け<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入達一名) いらちがふと。いらちが<sup>サキ</sup>は<sup>サキ</sup>り<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入達一名) 自ら、は四①我いで彼いらち又は彼いらちのであはず。②たがひちがひにいらこむ。いらちが<sup>サキ</sup>へ<sup>サキ</sup>る「<sup>サキ</sup>」(入達一名) 「いらちがふ」の訛。

いらちが<sup>サキ</sup>つ<sup>サキ</sup>く<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎附一名) 自ら、か四水分なくなりて、鍋にひつつく。煮つまる。

いらちが<sup>サキ</sup>つ<sup>サキ</sup>く<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎附一名) 煎附(他、か下二) 煮て水をなくす。

いらちが<sup>サキ</sup>つ<sup>サキ</sup>け<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎附一名) いらちつけたる食物。

いらちが<sup>サキ</sup>つ<sup>サキ</sup>け<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎附一名) いらちつけたる食物。

いらちが<sup>サキ</sup>つ<sup>サキ</sup>ま<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入手間一名) 手間仕事の賃金。

いらちが<sup>サキ</sup>とり<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎鳥一名) 料理の名、鳥肉に蓮根・牛蒡などを加へ、鹽汁味醂などにていらちつけたるもの。

いらちが<sup>サキ</sup>ど<sup>サキ</sup>り<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入取一名) 人の家に入りて物を盜むと。

いらちが<sup>サキ</sup>な<sup>サキ</sup>べ<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(煎鍋一名) 物をいらるときに用ふる鍋、鍋又は土にてつくり、形平たし。はうるく。

いらちが<sup>サキ</sup>に<sup>サキ</sup>「<sup>サキ</sup>」(入荷一名) 輸入貨物の到着すると。



いりはま「入瀆」(名) 鹽田の一、鹽淺にして波靜かなる海邊に、堤防を設けて海水の滲入を防ぎ、其内部を田圃の如く  
 いりひ「入樋」(名) いりひ。 「區別したるもの」  
 いりひ「入日」(名) 日暮となりて、西に入りんとする日。ゆ  
 ふひ。「かけ」入日影(名) ゆふひかけ。  
 いりびたり「入浸」(名) 水につかりてひたると。②絶えず他家に入りて取臥すこと。

いりびより「入拍子」(名) 打ち入るゝ拍子。  
 いりふす「入拍子」(名) 内に入りて臥す。  
 いりふち「入淵」(名) 入江になりたる淵。  
 いりふね「入船」(名) 港に入り来る船。  
 いりほが(名) 心の深くいりこみすぎて事實に遠ざかること。  
 「入りのり歌」。

いりまじり「入雑」(自、ら四) いりてまじる。いりこむ。さくさく。  
 いりまへ「入前」(名) つひえ。かかり。 「げせん」  
 いりまめ「炒豆」(名) いりたる大豆。②まゆいり。  
 いりみ「入身」(名) 相撲柔術などにて、對手の手許に我身を入れこむこと。

いりみだる「入亂」(自、ら下二) まじりあふ。いりみだれる「入亂」(名) いりみだるの亂。  
 いりむき「炒麥」(名) むきこいり。(麴)。  
 いりむこ「入婿」(名) 女のある家に入りて其婿となること。又其人むこやうを(娶)。

いりめ「入目」(名) ひよう。にふひ。  
 いりめ「炒肉」(名) 肉か④いらだちていそがす。  
 いりめ「炒物」(名) 肉類などをいりつけたるもの。②米豆などを入りて、砂糖を掛けたるもの。  
 いりもみち「入紅葉」(名) 色の一まほほきもみぢ。

いりもむ「煎揉」(他、ま四) はげしく揉む。もみにむむひねもすにいりもみつる風。  
 いりもや「入母屋」(名) 上部は切妻にして下



[やもりい]

部の句配附けなる屋根。  
 いりやき「熬焼」(名) いりとり。  
 いりやまがた「入山形」(名) 入といふ字のままにしたる山形。  
 いりゆ「炒湯」(名) 飯をこがして湯を注ぎ、其香を移した  
 イリユニョニム「Illusionism」(名) 哲(ク)一切の價値は唯外觀的にして、人生は眞に價値あるものにあらずといふ説。迷想論。(ろ) 現實によらず、想念より生ずるものに従ひて製作する主義。  
 イリユニョン「Illusion」(名) 妄想。幻想。錯覚。  
 いりゆう「遺留」(名) 死後にのこしとむこと。②おきわすれたるもの。①「ひん」遺留品(名) おきわすれたる、物品に處分するを禁じ必ず遺留すべきものと規定せられたる部分、即ち家督相続人又は遺産相続人の他の者に先だちて必ず受くべき權利ある財産、其額は相続人が直系卑屬なるときは遺産の半額にして、否らざるときは三分の一とす。  
 いりよう「入用」(名) いりゆ。にふよう。ひよう。  
 いりよう「醫療」(名) 醫術を以て疾病を療治すること。ちゆう。れうち。①きかい「醫療機械」(名) 醫疾病の診察及治療に使用する諸種の器械。  
 いりよう「威威」(名) 御威光。いっ。みいっ。  
 いりよう「威力」(名) 他を強制して服従せしむる力。いきほひ。ちから。①「ていさつ」威力偵察(名) 敵に攻撃を加て其兵力を屈開せしめ、以て敵狀を探知する偵察。

いりわけ「入選」(名) すぢみち。わけ。仔細。  
 いりりん「雜入」(名) 一定不易の倫理。すぢみち。のり。  
 いりりん「入」(自、ら四) うちへ行く。うち。到る。②かくくる。おつ。あひむ。日(一)。(没) ③すすむ。いたる。④技中に。⑤費用をやる。用ひる。⑥「金」が(一)。(要) ⑦中に生ずる。⑧「ひ。おひがれ」。⑨動詞の下に添へて、其意を強むるに用ふる語。⑩「おひがれ」。かんじ。⑪「を」置りて出づるを爲す(句) (體記) 出づり收入によりて費用の制限をなす。

いりる「入」(他、ら下二) うちへおく。なかへ還る。

いりる「炒煎熬」(他、ら四) 物を土鍋又は鑊皿などに入れて火にかけ、煮つめて其水分を去る。②中へ挟む。炭を煮る餘地。  
 いりる「煎」(他、や上二) そそぎかく。  
 いりる「鑊」(他、や上二) 金屬を溶解し、鑄型にいれて器物を作る。鑊砲を(一)。「る」ねらひあつ。  
 いりる「居」(自、ら上二) いゆ。なほる。  
 いりる「將」(他) 「る」を見よ。

いりる「異類」(名) 身に著るもの。きもの。いふく。  
 いりる「異類」(名) ①類の異なるもの。②人類と異なるもの。即ち禽獸。變化(名) ①「いぎよう」異類異形(名) さまざまのものがたのもの。よのつねならぬすがたのもの。妖怪。變化。

いりる「遺類」(名) のこれるやから。もれたるたぐひ。  
 いりる「彙類」(名) たぐひ。なまま。  
 いりる「海豚」(名) ①動遊水類の海獸。體形は筋織状をなし、前肢は鰭狀をなす。後肢を缺く、頭部長くして上下の顎に圓錐形の小齒あり、脊骨は背の正中にありて鎌状をなし、體長丈餘に達するものあり、何れの海洋にも産し、群集して游泳す、肉は食用に供せられ、油及革も種々の用に供せらるる。②「忽」(名) ゆるかぜ。「る」。

いりる「入方」(名) はひる方向。  
 いりる「入方」(名) 入りかた。  
 イルマン(名) ①「ボルトガル」語 Irrigador 兄弟の義。キリスト教の教職にて、伴天連の次位にあるもの。②「イルミネーション」(Illumination) (名) 多くの燈火を點じて裝飾となすこと。  
 イルリガートル「Irrigator」(名) ①醫術他他の患部を洗



[かるい]

いれーいれこ



【アトーガリイ】

漕するに用ふる醫葎器、洗滌用の聖散を盛る容器と、其下端の小孔より濾出す。聖散を導く濾頭管と、其濾頭管の先端に嵌入せる嘴子管とより成る。

いれ(名) 商相場にて、損失を見切りて賣米を買ひ戻すと。

いれあける(動) 賣米を戻すこと。「入揚(他、か下二) いろいろあける。いれあはす(サ) 戻すこと。「入合(他、ま下二) うめあはせをなす。うめあはす。

いれい(異例) (名) ためしなさと。前例のなさと。つ

いれい(威令) (名) 威力と命令と。

いれい(威令) (名) いかめしくたふとき力。

いれい(違令) (名) 命令に違反する。——ざい(違令罪) (名) 陸海軍刑法にて、軍令に違反したる罪。

いれい(遺令) (名) 例にたがふと。③やまひ。疾病。

いれい(遺令) (名) 死後にのこしおかるゝ命令。——のそ(遺令奏) (名) 古昔、女院薨御の際、其遺令を奏聞せしと。

いれかけ(入掛) (名) 相違(違) 其他の興行物などにて、其れれかたから(入懸) (名) 著物などを箱に入るゝときに、これを包む紗抄(紗) の如きもの。

いれか(入替) (名) いれかはると。③徳川時代

いれか(入替) (他) 「いれかふ」の訛。

いれか(入替) (名) 髪を垢に濡へて入るゝ毛髪。そへがみいれけ(義)。

いれか(入木) (名) 彫刻のなほしと、他の木をうめくむと。

いれけ(入毛) (名) いれがみ。

いれこ(入子) (名) 一つの器の中に、順次に小なる器を

いれこーいれは

重ねてくみ入れたるもの。(内子) ③外部にあらはれずして内部にかくれて間を差込みたる板。——いれこ(入子板) (名) 唐戸の(板) 及棧の間に差込みたる板。——ことば(入子詞) (名) 文章中に他の詞を挿み入れたるもの。——さかつき(入子盃) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれこ(入子) (名) 大小のものを順次に入子にしたる酒杯。

いれはーい

いれは(入花) (名) ③發句・狂歌などの點刺又は印刷刺。④茶器に入れて湯を注ぎたるばかりの煎茶。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。

いれは(入紐) (名) 袍直衣の、袴衣の、などの紐。紐とをとりあはせ、紐を結びたる玉を紐結の輪にさし入れて掛けおくもの。①の「入紐之(枕) おなじこころに結び、さしてに短する枕詞。



【ひゆともれい】

かざり。いろどり。④かほいろ。がんえよく。一を隠す。⑤容顔のうるはしきと。又其人。⑥なまげ。愛情。⑦男女の春情。まきまを。⑧いろめく。いろてのみ。⑨まな。たぐひ。⑩十人十色。⑪まきざしやうす。⑫候。⑬てうま。ひびき。⑭音。⑮毛髪の色のうるはしきと。⑯愛する男又は女。情人。⑰髪油の異稱。⑱死灰の如し。⑲(狂子)に出づ。かほいろに生理氣なきをいふ。一は思案の外(句)男女の情事は、道理なきを以て推知すべからざるをいふ。一厲にして内淫(句)。(論語に出づ)見づきは威嚴あるらしくして、内心の柔弱なること。一を失ふ(句)びつくりしてかほいろの青さむむにいふ。一を換へ様(句)難儀の差別なく、婦人を記すにいふ。一を漁す(句)ひととして顔色を變ず。一を以て聴く(句)詐欺人を取調ぶるに、かほいろを觀て正邪の判断をなす。

いゝ。①倚廬(一名)父母の喪に起臥するかりや。②愛(接頭)親愛の意を表はす語。「ね」「と」。③色悪(一名)演劇にて容顔の醜陋なる悪方針。④色あぐ(一名)「色上」(他、か下)いろあげをして鮮明にする。例。⑤「ぬなほして鮮かになす。」

いゝあそび。①色遊(一名)遊里にてのあそび。②あひび。③色合(一名)色のほどあり。色の工合。④あらそひ。⑤色争(一名)互に美貌を競ふと。⑥痴情のためにいさむり。⑦色摺に用ふる板木。

いゝ色板(一名)色摺に用ふる板木。⑧色板(一名)種々のいろに染めたる糸。⑨色板。⑩みせん。⑪と。⑫と。⑬と。⑭と。⑮と。⑯と。⑰と。⑱と。⑲と。⑳と。㉑と。㉒と。㉓と。㉔と。㉕と。㉖と。㉗と。㉘と。㉙と。㉚と。㉛と。㉜と。㉝と。㉞と。㉟と。㊱と。㊲と。㊳と。㊴と。㊵と。㊶と。㊷と。㊸と。㊹と。㊺と。㊻と。㊼と。㊽と。㊾と。㊿と。

いゝいろ。①遺老(一名)「色色」(形二)いろゆかし。②いろ。③いろ。④いろ。⑤いろ。⑥いろ。⑦いろ。⑧いろ。⑨いろ。⑩いろ。⑪いろ。⑫いろ。⑬いろ。⑭いろ。⑮いろ。⑯いろ。⑰いろ。⑱いろ。⑲いろ。⑳いろ。㉑いろ。㉒いろ。㉓いろ。㉔いろ。㉕いろ。㉖いろ。㉗いろ。㉘いろ。㉙いろ。㉚いろ。㉛いろ。㉜いろ。㉝いろ。㉞いろ。㉟いろ。㊱いろ。㊲いろ。㊳いろ。㊴いろ。㊵いろ。㊶いろ。㊷いろ。㊸いろ。㊹いろ。㊺いろ。㊻いろ。㊼いろ。㊽いろ。㊾いろ。㊿いろ。

いゝか。①色香(一名)いろとかをり。②容色の醜陋なるいろがはり。③色革(一名)そめがは。④種類のかはりたるもの。⑤文色のかはりたるもの。⑥婚禮の式後、白色を改めて色ある衣服と香かふもの。いろなほし。

いゝが。①色貝(一名)さまざまの貝。②形。③みだらがまし。④色紙(一名)色紙にしたる紙。⑤花紙。⑥類の細粉を硝子の原料と共に熔かして製す。⑦類の細粉を硝子の原料と共に熔かして製す。⑧色紙を硝子面に繪り、其乾きたるを剥きて細末にしたるもの。色摺に用ふ。

いゝぎ。①色狂(一名)「病色」に原因して精神錯亂せること。又、其人。②色狂の類。③色狂。④色狂。⑤色狂。⑥色狂。⑦色狂。⑧色狂。⑨色狂。⑩色狂。⑪色狂。⑫色狂。⑬色狂。⑭色狂。⑮色狂。⑯色狂。⑰色狂。⑱色狂。⑲色狂。⑳色狂。㉑色狂。㉒色狂。㉓色狂。㉔色狂。㉕色狂。㉖色狂。㉗色狂。㉘色狂。㉙色狂。㉚色狂。㉛色狂。㉜色狂。㉝色狂。㉞色狂。㉟色狂。㊱色狂。㊲色狂。㊳色狂。㊴色狂。㊵色狂。㊶色狂。㊷色狂。㊸色狂。㊹色狂。㊺色狂。㊻色狂。㊼色狂。㊽色狂。㊾色狂。㊿色狂。

古朝廷にて毎年二月吉日に、諸臣の位祿を定められし儀式。①位祿。②位祿。③位祿。④位祿。⑤位祿。⑥位祿。⑦位祿。⑧位祿。⑨位祿。⑩位祿。⑪位祿。⑫位祿。⑬位祿。⑭位祿。⑮位祿。⑯位祿。⑰位祿。⑱位祿。⑲位祿。⑳位祿。㉑位祿。㉒位祿。㉓位祿。㉔位祿。㉕位祿。㉖位祿。㉗位祿。㉘位祿。㉙位祿。㉚位祿。㉛位祿。㉜位祿。㉝位祿。㉞位祿。㉟位祿。㊱位祿。㊲位祿。㊳位祿。㊴位祿。㊵位祿。㊶位祿。㊷位祿。㊸位祿。㊹位祿。㊺位祿。㊻位祿。㊼位祿。㊽位祿。㊾位祿。㊿位祿。

いゝ色。①色。②色。③色。④色。⑤色。⑥色。⑦色。⑧色。⑨色。⑩色。⑪色。⑫色。⑬色。⑭色。⑮色。⑯色。⑰色。⑱色。⑲色。⑳色。㉑色。㉒色。㉓色。㉔色。㉕色。㉖色。㉗色。㉘色。㉙色。㉚色。㉛色。㉜色。㉝色。㉞色。㉟色。㊱色。㊲色。㊳色。㊴色。㊵色。㊶色。㊷色。㊸色。㊹色。㊺色。㊻色。㊼色。㊽色。㊾色。㊿色。

いゝ色。①色。②色。③色。④色。⑤色。⑥色。⑦色。⑧色。⑨色。⑩色。⑪色。⑫色。⑬色。⑭色。⑮色。⑯色。⑰色。⑱色。⑲色。⑳色。㉑色。㉒色。㉓色。㉔色。㉕色。㉖色。㉗色。㉘色。㉙色。㉚色。㉛色。㉜色。㉝色。㉞色。㉟色。㊱色。㊲色。㊳色。㊴色。㊵色。㊶色。㊷色。㊸色。㊹色。㊺色。㊻色。㊼色。㊽色。㊾色。㊿色。

いゝ色。①色。②色。③色。④色。⑤色。⑥色。⑦色。⑧色。⑨色。⑩色。⑪色。⑫色。⑬色。⑭色。⑮色。⑯色。⑰色。⑱色。⑲色。⑳色。㉑色。㉒色。㉓色。㉔色。㉕色。㉖色。㉗色。㉘色。㉙色。㉚色。㉛色。㉜色。㉝色。㉞色。㉟色。㊱色。㊲色。㊳色。㊴色。㊵色。㊶色。㊷色。㊸色。㊹色。㊺色。㊻色。㊼色。㊽色。㊾色。㊿色。





いんいーいんか

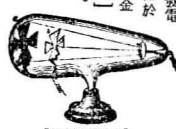
の盛んなるさま。雷<sup>一</sup>。「てもの寂しきさま。  
 いんいん(陰陰)(名、副) 〇おほひかかすさま。〇空陰り  
 いんいん(陰陰)(名) 〇うれへいたむさま。〇さかんなる  
 さま。〇しとろきびくさま。〇かすかして明かならざる  
 いんいん(陰雨)(名) そらくもりて雨降ると。「おさま。  
 いんいん(淫雨)(名) ながあめ。  
 いんいん(陰鬱)(名) 〇氣のこもりふさがると。〇心のむ  
 すばれたいからさると。  
 いんいん(陰雲)(名) 空をおほふくも。  
 いんいん(氣籠網羅)(名) 〇氣のあつまり盛んなるさま。  
 氣の蒸し交はるさま。  
 いんいん(陰翳)(名) かげくもり。  
 いんいん(印影)(名) 印を押捺したるあと。  
 いんいん(陰影)(名) かげ。  
 いんいん(因縁)(名) 〇(佛)物事の成立のもと即ち因  
 と、これを發生せしむるから即ち縁とによりて定められた  
 る生涯の關係いんいん。〇ゆらい。ゆみま。ちなみゆかり  
 いんいん(資縁)(名) 〇つらなりまよとよ。〇たよりよ  
 づと。〇たよりづと。  
 いんいん(印可)(名) 〇(佛)師が弟子に、其熟達を認めて、與縁  
 を授け證明を與ふと。ゆるし。  
 いんいん(可)(名) きよとくると。ゆるすと。  
 いんいん(姻家)(名) 姻族の關係ある家。えんぢや。  
 いんいん(陰火)(名) おにび。いうれいび。  
 いんいん(陰畫)(名) 寫眞の乾板に感光せしめて現像し  
 たるものを、透して見たる畫像。  
 いんいん(印畫)(名) 寫眞。寫眞畫。  
 いんいん(因畫)(名) 原因と結果と。〇(哲)原因と結  
 果とを連絡したる關係、即ち一が他に對して變化の基因とな  
 り、他が一に對して變化の成果となる状態。〇(佛)前業の  
 應報むき。〇(ろ)ふまあはせ。〇おろはうが、(因果  
 應報)(名) 〇(佛)吾人の作爲する因果は、善惡共に、自己に應  
 じたる果報ある。一ざらし(因果應)(名) 〇(佛)自己の  
 惡業の果報を、世間にあはし知らすと。又、其人。一

いんかーいんき

てきめん(因果觀面)(名) 惡事のむくい、ゆめまへに  
 あらはると。一りつ(因果律)(Causality)(名)  
 「哲」原因・結果の關係に於ける、必然の規定、其關係は無限の  
 連鎖により、一現象の起るには、必ず其原因あり、又、同  
 なる原因より、必ず同一なる結果を生ずると。「一の風  
 (句) 私通せる男女の間に生まるゝ子。一を含める(句)  
 (句) 物事の始終をいひ聞かせ得し得心せしむ。  
 いんがいのん(院外園)(名) 〇(政)帝國議會に議席  
 を有せざる政黨員の團體。  
 いんかた(花植物)(名) 〇(植)顯花植物と  
 相對して植物界二大部類の一、即ち半肉類、菌類、藻類、バク  
 テリア等の總稱、雌雄兩器を有する花なくして、概ね微細な  
 る子實の如きものを生じて著し、これを胞子といふ。顯花  
 植物の種子ともい、發育機關の高等なるものは、根、莖、葉  
 一に無胚子ともい、發育機關の高等なるものは、根、莖、葉  
 の區別かなれど、下等なるものは、全體一樣の形狀を有す。  
 いんかた(引火點)(Flashing point)(名) (化)  
 燃料の點火しはじむるに要する温度。  
 インカーネーション(Incarnation)(名) 〇(神)化身。  
 〇(肉)體化する。〇(醫)肉芽發生。  
 インカーブ(Incurve)(名) 野球にて、曲球の一種、投手の投  
 げた球の、本塁の近くにて急に打者の側に曲折するもの。  
 インカム(Income)(名) 〇(法)豫め官廳に届け出で提出した  
 る實印の印影、印の眞偽を判する基となるもの。いんかがみ。  
 一まうめい(印證證明)(名) 〇(法)印證の眞正なるを  
 證明する、本人の申請により町村長又は區長これをせしむ。  
 いんかん(殷鑑)(名) 〇(詩經)「殷鑑不远在夏后之世」と  
 ありかかんがみ戒し、き前例「遠からず(句) かんが  
 みるべき前例の目前にあるにいふ。  
 いんか(陰氣)(名) 〇(陰)に屬する元氣。〇(物)に覆はれては  
 んばせせざる。〇(心)の快活ならざる。〇(手)書用又は  
 インキ(Ink)(名) 西洋諸國にて専ら用ひらるゝ、手書用又は  
 印刷用の有色なる液體。(洋墨)一つぼ(一壺)(名)「イ

いんきーいんき

ンキ)をいれおく墨。  
 いんきゅう(飲泣)(名) 聲を立てずして泣く。去の  
 いんきよ(隱居)(名) 〇(法)隱又は世事にたづさはらずして、  
 閑居すること。(隱栖) 〇(法)主たる地位より退くと。一まよ  
 一定の條件に従ひて、戸主たる地位より退くと。一まよ  
 「隱居所(名) 隱居したる人の住所。一ばんどう(隱  
 居番頭)(名) 主家の番頭を勤め終はりて、尚ほ其家に奉  
 公して居る番頭。一りょうが(隱居領)(名) 隱居した  
 たる人の領地。一りょうが(隱居料)(名) 隱居した  
 る人の生活費用。一して放言(句) (論語に出づ)隱  
 居して氣まふ勝手の談論をなす。  
 いんきょう(陰莖)(名) 男子の生殖器の一部。  
 いんきょう(陰教)(名) 女子のまつけ。女子のをしへ。  
 いんきょう(印影)(名) 印(一)。  
 いんきょう(陰極)(Negative pole)(名) (理)電流が外  
 界の回線を通過して回流し、電池又は發電  
 器に戻る入口。又、放電器又は電解器に於  
 て、發電機又は電池の陰極と稱されたる金  
 屬の端。陽極の對。一せん(陰極線  
 (名) (理)いんきょうはうません。  
 一ぼりまやせん(陰極放  
 射線)(Cathode ray)(名) (理)  
 眞空の度の高き眞空管内に於て放電  
 すると、管の陰極より發出する放射線、管の螢光を放つに  
 よりてこれを認む。  
 いんきん(印金)(名) 金兩の一種、數百并前ものにして、  
 地色・模様種あり、紗・絹などに、漆と糊とを以て粘を押し  
 其上に金箔をおきたるもの。  
 いんきん(陰金)(名) いんきんたむし。一たむし(陰  
 金田蝨、陰部濕疹)(名) 〇(病)陰部に發生する濕疹、男子  
 にては陰囊に始まり、女子にては大陰脣に始まる、痒痒甚し  
 く他部に蔓延す。  
 いんきん(慇懃)(名) 〇ねんごろ。ていねい。〇よし。ま  
 はり。〇男女の情交。一こうが(慇懃講)(名) 禮



〔陰極放射線〕



いんしーいんし

インジアン [Indian] 名 ①印度人。②アメリカ土人。

——アンド [Indian red] 名 紫色を帯びたる一種の赤色顔料。

インジウム [Indium, In] 二 [名] 〔化〕純白色の稀有なる金属元素。天然には因鉛鋅・方鉛鋅に伴ひて生ず、鉛より精軟かく、通常温度にては、空氣中に於て變化せざれど、赤熱すれば氣化となる。

いんまき [印字機] 名 〔機〕①電信機に附屬し、受信電報の文字を自動的に紙面に印記する機械。②タイプライター。

インシロ [Indro] 藍靛・洋藍 [名] 〔化〕藍其他二三の植物より採取せる青色染料、専ら舶來ものを稱す。

いんまつ [隱濕] 名 日かげにてまめり氣多きと。

インジビエナリスム [Individualism] 名 個人主義者。

インジビエナリスム [Individualism] 名 個人主義。

インジビエナリチー [Individuality] 名 ①個性。特性。②人格。人品。

いんまや [隱者] 名 世を捨ててかくれ居る人。

いんまや [ほうだい] 陰射砲臺 [名] 地形を利用して、敵に見えざるやうに隠蔽して射撃し得る砲臺。

いんまぶ [印綬] 名 支那にて、官印を佩ぶるくみひも。

いんまぶ [印呪] 名 佛に手を結び口に陀羅尼を唱ふると、かくすれば護法の明王善神近づき守り、助けて其所願を成就せしむといふ。

いんまぶ [院主] 名 佛院家の主僧。又寺院の主僧。

いんまぶ [引首印] 名 書幅の首に押す印。

いんまぶ [因習] 名 舊習によりたがふと。

いんまぶ [因習主義] Conventionalism [名] ① 舊習の因襲に因ひて、空しくこれを保守する主義。

いんまぶ [因循] 名 ①よりまたがて改めざると。② 敷衍の氣象なく、物事にためらひなげむと。③ 進歩の知識なく、舊習をかたくなにまもると。

いんしーいんす

いんまよ [音書] 名 おとづれのがみ。

いんまよ [隱所] 名 かくれたところ。④ かはや。

いんまよ [印章] 名 いんぎやう。

いんまよ [隱症] 名 熱の内部にこもりて外部に發せざる病。一の偶発。

いんまよ [引聲] 名 佛曲曲ある音聲にて、佛名又は經文若しくは偈頌を唱ふこと。一念佛。

いんまよ [印象] 名 ①物の面に形象を印すると。又、其印したる形跡。② Impression [心] 一定の刺激を受けて感覺を惹起する生理的作用。③ 一もの印象主義 Impressionism [名] 事物其他より、其事物の吾人に與ふる印象を重んずる主義。④ 一は「印象派」 Impressionist [名] 画面の印象を重くべしと主張する印象主義の畫家。⑤ ひびやうな「印象批評」 [名] 作品の自己に與へたる印象につきてなす文藝批評。

いんまよ [引證] 名 證據をひくと。ひきでと。

いんまよ [引接] 名 佛彌陀の願力に由り、念佛の行者を來迎して、安樂世界に往生せしむといふと。

いんまよ [印色] 名 いんにく。

いんまよ [飲食] 名 飲むと食ふと。② 飲みものと食ひものと。③ 一「飲食店」 [名] 飲食をあきなふみせ、料理屋そば屋の類。④ 一「飲食物」 [名] のみくひするもののみものくひもの。

いんまよ [陰私漏告罪] 名 〔法〕ひみつるうせつざい〔秘密漏洩〕也。

いんまよ [音信] 名 おとづれ。たより。① 一「つづ」 [音信不通] 名 音信を往復せざると。

いんまよ [一般脈] 名 さかんなると。にぎはふと。

いんまよ [印] 名 形式のこる。つく。

いんまよ [印] 名 形迹のこる。つく。

いんまよ [印] 名 形迹のこる。つく。

いんまよ [印] 名 形迹のこる。つく。

いんまよ [員數] 名 かす。たか。

いんまよ [淫水] 名 精液。

いんすーいんそ

いんすい [引水] 名 水を引くと。又、其ひきたる水。

いんすい [因數] Factor [名] 〔數〕一數が數箇の數の相乗積なるを、其一數に對する各數の稱。① 一「ぶんかい」 [因數分解] 名 一數を其因數に分かつと。

いんすきん [印子金] 名 古昔、支那より舶來したる一種の純金。② 徳川時代に、極品の黄金の稱。

いんすち [インシュション] Institution [名] ① 制度。規定。② 學會。學院。協會。

いんすち [インシュクト] Instinct [名] 本性。天性。

いんすち [インシュク] Inspire [名] 息を込むと。② 天來の靈想を感得すると。③ 新聞紙などの政府より驅附せらるること。

いんすち [インシュリット] Inspiration [名] 元氣を引立たしむと。

いんせい [陰晴] 名 くらみとはれと。〔來感源〕。

いんせい [院政] 名 天皇讓位の後、尙ほ政を院中に於て聽斷せられたと。

いんせい [限星] 名 〔天〕地上に向かひて落下する流星。② 著述者が、其著述書の賣價の幾分を、出版者より徴收すると。

いんせい [姻戚] 名 えんぐみしたるみうち。えんつづき。

いんせい [限石] 名 〔地〕空中より時として地上に落下する石。蓋し流星の破片ならんといふ。火成岩の如くにして多少の鐵粒を含む。天陨石ともいふ。

いんせい [引赤紙] 名 醫醫證上に使用する一種の貼布。神經痛などに用ふ。

いんせい [引接] 名 ひきいれて接見すると。

いんせい [隱然] 名 はっきりとせざれど、何處となく其勢を現はすま。

いんせい [院宣] 名 上皇又は法皇の宣旨。

いんせい [姻族] 名 〔法〕婚姻によつて配偶者の一方と他の一方の親族との間に生ずる親族關係。例せば、夫が妻の父母。岳父に對する關係の如きこれなり。えんまゝ「關係」。

いんせい [引率] 名 ひきぬると。つれだつと。



いんたい「隠退」(名) 隠居して身をひくと。「もと」

いんたい「引退」(名) ひきまりぞくと。又ひきまりぞかす

いんたい「院代」(名) 院家の寺格ある寺院住持の代理

いんたくしん「隠宅」(名) 隱居の住宅。「もと」。「推理」

いんダクシヨ「Induction」(名) ①論「歸納法」②誘導

インダストリアリズム「Industrialism」(名) 産業主義、工業主義

インターナショナル「Internationalism」(名) 國際

インターナショナル「International」(名) 國際的、世界的

インタービュー「Interview」(名) ①音見、面會、②新聞記者が種取りのためになす訪問

インタローション「Interphone」(名) 自動交換式の小型

インタローション「Interrogation」(名) 疑問、一問一答

マーク「Interrogation mark」(名) 疑問符、即ち「？」

インチ「吋」[inch] (名) 「イギリス」國にて用ふる長さの單位、「フット」の十二分、「我約」八分・三八一。

いんち「引致」(名) ①法「強制的に官署にひきゆくと。つれいんち」②「韻致」(名) 風雅なおもむき、おもむき。

いんちぎ(名) ①いかさまの手段によりて、相手の所持金をかたりとする賭博。②「轉じて、てまかすと」

いんてつ「引鐵」(名) ①地「隕石の鐵分最も多く殆んど純鐵に近きもの、天隕鐵とも云ふ」

インデックス「Index」(名) 索引、凡出。

インデペンデント「Independents」(名) ①「キリスト」教の一派「政治上及宗教上の權力に對して、獨立自由を唱へ、ただ基督のみ服従し、聖書を唯一の信仰淵源とするもの」

インテリゲンチヤ「Intelligentsya」(名) ①「知識階級」

インテレクトチアル「Intellectual」(名) ①「哲」智能的

インテレスト「Interest」(名) ①「利」子、利益、②趣味、興味

いんてん「院展」(名) 東京美術院の繪畫展覽會

いんてん「印傳」(名) いんてんがは(應帝)。——がは

ワガ「印傳皮」(名) 「なめしがは」の一種、羊又は鹿のかはを以て作り、袋物などに供せらる。

いんてんき「陰電氣」Negative electricity (名) ①「理」樹膠を毛皮に摩擦したるとき、樹膠にあらはるゝ如き類の電氣、陽電氣の對

インテンシティ「Intensity」(名) 強、強度

いんてんりゅう「陰電流」Zinc current (名) ①「理」電池の陰極より出づる電流

インドあめ「印度藍」(名) インディ

いんとらう「印刀」(名) はんほりがたな

いんとらう「淫湯」(名) ①「佛」羅家にて、焦がしたる鐵飯を湯に投じて、茶に易へ用ふるたな

いんとらう「淫蕩」(名) みだらなる振舞を行ふ。酒色にふけりたるふ。

いんとらう「淫蕩文學」(名) 題材を花柳界などの情事に採り、色慾方面の描寫をなす文學

いんとらう「咽頭」(名) 「生」正しくは、えんとう「鼻腔及口腔の下部に接して、食管の上端に位置し、扁平にして漏斗状をなす部分」

いんとらう「咽頭炎」(名) 「病」咽頭に起こる炎症

いんとらう「咽頭加答兒」(名) 「病」咽頭に於ける粘膜炎

いんとらう「咽頭筋」(名) 「生」咽頭の運動即ち收縮と伸上とを司る筋

いんとらう「引導」(名) ①「みちびくと。てびき」②「佛」死人を葬ると、冥土にゆくまをなすとて、僧侶の行ふ式。——ま渡す(句) ③「死者に對して引導を行ふ」④「最後」の決意を宣告す。⑤「生命を奪ふ」

いんとらう「花」(名) 「種」肥厚せる花軸の頂端

いんとらう「印度教」Hindusm (名) ①「佛」教の興隆以後、反動として起こりたる印度の多神教、印度人の間に盛んに行はる、破爛の神たる濕婆(シヴァ)と保存の神たる毘濕紐(ヴィシュヌ)と最も信仰せられ、濕婆派と毘濕紐派との二大派に分

いんとらう「陰匿」(名) かくして秘密にすると。かくまふ

と。②「かくる」と。あらはれざると。③「あらはれざる罪惡。つつみ」の惡心(隱匿)。——けん「隠匿權」(名) 「法」ひげん。——ざい「隠匿罪」(名) 「法」他人の所有物を隱匿して其發見を不可能又は困難ならしむる罪。遺失物」

いんとらう「陰德」(名) 世に知らざるやう恩徳を施したるもの

いんとらう「陰報」(名) 陰徳あるものに、顯れたるむけありて、必ず吉慶來ると

インドラ「Indra」(名) ①「佛」印度の吠陀に「敬に」て祀かれたる天地の主神、威徳極めて盛大にして光と雷とを司り、風雨の如き神を從屬とせりとす、婆羅門教に至ると其崇拜の度漸く衰へ、佛敎に至りて其階級更に降り、いはゆる帝釋となれり。——自省

イントロスペクション「Introspection」(名) 内觀、反省

イントロダクション「Introduction」(名) ①「引」合、紹介

いんとん「隱遁」(名) 世を捨ててかくる

いんないかん「院内幹事」(名) ①「政」家議院内に於ける自議員に關する事務を取扱ふ役

いんないさむら「院内總務」(名) ①「政」家議院内に於ける自議員に關する事務を取扱ふ役

いんないさむら「院内總理」(名) ①「政」家議院内に於ける自議員を統率し組織する役

インナーライフ「Inner life」(名) 内面的生活、精神生活

いんた「印肉」(名) 印を押すに用ふる肉、又「ひまし」油を和し、煉りて色をつけたるもの、朱、黒青などあり、膏肉は凶事に用ふるを習慣とす。印色。——いれ「印肉入」(名) 印肉を穿(く)れお器(肉池)

インニング「Inning」(名) 野球にて、試合の回数

いんねん「因縁」(名) 「いんえん」の音便。——づく「因縁盡」(名) 専らいんねんに依ると

いんのうけ「陰囊」(名) 男子の生殖腺、睪丸及精系初部を包被せる囊状外皮に皺多し、伸縮性に富む。きんたま

いんのうけ「院御所」(名) 法皇又は上皇のまします御所、仙洞







しむ。(三)。(四)想ひ出す。(五)出世せしむ。(六)それよみす。

うがこみ(浮) (一)嗽(自、自、四)くちせそぞく。

うかべる(浮) (他)「うかぶ」の訛。

うかみ(窺見) (名)あび。まはしもの。(聞誤)。

うかむ(窺見) (浮) (自、自、四)うかぶ。

うかむ(窺見) (浮) (他、ま、下二)うかぶ。

うかも(鵜鴨) (名)動物水禽類の鳥、肩より大形にしてむぐりに類す。嘴は黒くして尖り、脚は灰黒色、羽毛は夏季黒褐色なれど、冬は白色の部分大いに加はる。我國にては千鳥及び北道道の鴉群に多し。

うから(族屬) (名)血脈のつぎきたる親族。あんぞく。みより。やから。一、やから親族(名)一家親類。一門同姓。

うかり(浮) (名、副)心つかずばんやる人。

ぼう(浮) (浮) (自、ら下二)浮きて漂ぶ。

うかると(浮) (自、ら下二)浮きて漂ぶ。

うかれい(づ) (浮) (自、ら下二)何心なく家を出づ。

うかれがらす(浮) (名)月夜にうかれて鳴くからす。

うかれあくる(浮) (名)夜うかれあくる人。

うかれちよう(浮) (名)浮調子(名)心のうきたつ調子。

うかれつ(浮) (名)浮妻(名)うかれめ。

うかれびと(浮) (名)うらうにん。

うかれびと(浮) (名)うきやう。

うかれぶし(浮) (名)なにはぶし。

うかれめ(浮) (名)歌舞吹奏して人をたのしましむるを業とする女の姓。歴にはんべるとを業とする女。あそびめ。うかれづま。(遊女)。

うかれる(浮) (自)「うかる」の訛。

うかれを(浮) (名)うかれて遊びあくる男子。遊治郎。

うかんむり(冠) (名)漢字の冠の名。即ち、定安などの上にあむるの字。

うき(浮子) (名)魚の腹につくを知るために釣糸につけて水に浮かす木片。

うき(浮) (名)さかづき。

うき(泥) (名)とろ。

うき(愛) (名)うれい。えんばい。かなしみ。「と、とぐと。」

うき(子) (名)「詩經に之乎歸」とあり。よめいりする。

うき(雨) (名)「地」二年の中に、特に雨多き時期、我國に於ける梅雨の季節の如し。

うき(雨) (名)古昔、宮中の儀式を、雨天のときは省略して於けるの事あり。

うき(雨) (名)「浮上彫」(名)模様又は形像を、物の面に高きあげばり。

を知らるために、割解につくる木片。

うき(浮) (名)さかづき。

うき(泥) (名)とろ。

うき(愛) (名)うれい。えんばい。かなしみ。「と、とぐと。」

うき(子) (名)「詩經に之乎歸」とあり。よめいりする。

うき(雨) (名)「地」二年の中に、特に雨多き時期、我國に於ける梅雨の季節の如し。

うき(雨) (名)古昔、宮中の儀式を、雨天のときは省略して於けるの事あり。

うき(雨) (名)「浮上彫」(名)模様又は形像を、物の面に高きあげばり。

うき(浮) (名)「一所におつき止まらざると。にげ腰」となる。

うき(浮) (名)「水」の中に、星鳩を船の上で組み立てたるもの。

うき(浮) (名)「鏡」硝子の地上に出でて冷却したる玻璃質の塊。冷却の程、五斯、水蒸気の逸出せしため、粗粒にして夥多の小孔あり、軽くして水に浮ぶ。軽石。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

皮膚は粗塊にして革の如し、脊髄は短くして高く、尾部にて腎臓と相合す、腐爛なし、遠海に産す、腸の白色なる部分を取り、鹽漬又は酒精となし薬用とす。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うき(浮) (名)「浮石」(名)うきいし。かるいし。

うきせーうきは

- うきせいの「浮勢」(名) 遊軍。
- うきぞなへ「浮備」(名) うきせ。
- うきた「浮田」(名) うき田。
- うきだから「浮袋」(名) 船舶の鼻箱。
- うきだしいんまつ「浮出印刷」(名) 紙面に模様又は文字を浮き出さしむ印刷。
- うきだす「浮出」(自、三四) うかび出づ。うかれ始む。
- うきたつ「浮立」(自、三四) うかれてころそらと
- うきど「浮戸」(名) 船渠又は閘門の入口を閉鎖する戸。
- うきとうたい「浮燈臺」(名) 燈臺の一種。船の檣上に燈明を設け、洲の附近に設置して航路を示すもの。
- うきドック「浮船渠」(Floating dock) (名) 船渠の一種。船體を載せ水上に浮ばして作業するを得る装置のもの。形状・種類甚だ多し。
- うきとり「浮鳥」(名) 水にうかびて居る鳥。一種の玩具鳥の形に作りて水に浮ばすもの。
- うきな「浮菜」(名) 蘆かぶら。
- うきな「浮浪」(名) よからぬ評判。いふ事などのうはま。
- うきなみ「浮浪」(名) うきたつなみ。
- うきに「浮形」(名) (浮打荷) のために海中に投棄せられ、又は風波のために船中より奪ひ去られなして、海上に浮かびたゞよふ貨物。
- うきに「浮人形」(名) 一種の玩具壺の上に杓子を持ちたる人形を立て、其下にさしたる笛を吹くにつれて、人形のくるくる廻る仕掛のもの。
- うきぬ「浮沼」(名) 泥の深き沼。
- うきぬま「浮沼」(名) 前條に同じ。
- うきね「浮根」(名) 水上に生ふる草の浮べる根。
- うきね「浮蕨」(名) 船中になると。寝ぬれと心安からぬ。目かきめのもそふし。どり「浮麻鳥」(名) 水上に棲む鳥。なづとり。一の「床」(名) 浮懸する所。
- うきはかり「浮秤」(名) 種比重計の一、目盛ある硝子甕



〔二〕鳥浮

うきはーうきは

- うきはは「浮橋」(名) 数多の舟を浮べて、其上に板を互し合はる。舟ばし。舟架。
- うきはち「愛恥」(名) 堪へたきはづかじめ。
- うきひと「愛人」(名) 我につれなくする人。
- うきびよう「浮拍子」(名) 浮きたるひらうま。
- うきぶくろ「浮袋」(名) 動魚の鰾。水泳に溺れざるため、身體に著くる用具。革又は防水布などにてつくり、中に空氣を満たして、水に浮くやうにしたるもの。
- うきふね「愛船」(名) かなしくやうにしたるもの。
- うきふね「愛舟」(名) うきふし多き場所。色里。
- うきほうだい「浮砲臺」(名) 海防防禦又は砲臺攻撃のために、特殊の構造をなしたる戦艦、堅牢なる覆蔽を設けて、許多の砲を備へたるもの、現時は使用せられざれども、時に殘敗の戦艦をこれに充つ。
- うきはうはてい「浮防波堤」(名) 防波のため、港内一定の場所に築留したる箱船又は筏。
- うきははり「浮枕」(名) うきね。ひとりね。
- うきまくら「愛身」(名) うきふし多き身。一をやつす(句) 或事に熱心して、うきふし多き身。
- うきみみ「愛耳」(名) つらきはな。
- うきむなみ「浮武者」(名) 遊軍に屬する武士。
- うきめ「愛目」(名) つらきと。うきふし。
- うきも「浮紋」(名) 浮きふし多き世。つらき世。
- うきよ「愛世」(名) うきふし多き世。つらき世。
- うきよ「浮世」(名) 定めなき世。無常の世。一え「浮世繪」(名) うき世の風俗を畫きたる繪。土佐繪より分かれ、岩佐又兵衛の始めし畫風。一がたり「浮世語」(名) うきよばなし。一ぐるひ「浮世狂」(名) 浮世の事に

うきよーうきよ

- 心を奪はるゝと、色色によけると。名利に熱する。一ころ「浮世小路」(名) うきよのちまた。世の中。一ころ「浮世心」(名) うきよ。一じき「浮世産」(名) 石壁の如き模様を織り出したる産。一ことば「浮世言葉」(名) 應對の變起に普通用ふることば。一志「浮世師」(名) よく世事に通じたる人。通人。一志「浮世師」(名) 前條に同じ。一すがた「浮世妻」(名) 當世風のがた。一せつ「浮世説」(名) うきよばなし。一ぞう「浮世草紙」(名) 徳川時代に行はれし一種の小説。當世の世態を書き綴りたるもの。八文字屋の。一ぞめ「浮世染」(名) 當世風の染模様。一てら「浮世寺」(名) 世間ばなれのせせき寺。俗僧の住む寺。一ど「浮世床」(名) かみゆひと。一にんぎょう「浮世人」(名) 婦女子の風俗を模したる一種の人形。襦をまくり得るやうにし、殊に除部を具したるもの。一ばなし「浮世話」(名) せえ。一ぶくろ「浮世袋」(名) 絹を三角に縫ひて中に綿を入れ、上の角に紐を附けたる袋。もと掛巻に入るものなりしが、後には玩具となれり。一ぶし「浮世節」(名) 世俗のはやりうた。一ふる「浮世風呂」(名) いろこみ。一銭湯。一ぼん「浮世本」(名) うきよさうま。一をとこ「浮世男」(名) いろをとこ。遊治郎。一の網(句) うきよの迷ひののがれたごと。一の色(句) うきよのありさま。一の海(句) うきよの迷ひの深くしてはてなきを海に繰(句) うきよを捨てかめる(句) 即ち義理人情などの關係。一の關(句) うきよを連れ出づるささへ。一の旗(句) うきよを渡り行くこと。殿世の途。一の壘(句) うきよのけがれ。世間の俗事。一の綱(句) うきよのきづな。一の弦(句) うきよに此身を



〔形人世浮〕











うしぬすびと「牛盜」(名) 牛をぬすみたるもの。人  
を罵りていふ稱。②動いしもち。

うしのあゆみ半歩「(名) 牛のあゆむと。轉じて、のろく  
あゆむと。一のよしおそくと。」

うしのこづの「牛角體」(名) 牛の角の中にあるかたき  
骨、肥料に供せらる。

うしのまた「牛舌」(名) ①動またびらぬ。(東國の方言)。  
②「植」いぬび。(豊前地方の方言)。

うしのそらめん「牛索網」(名) 「植」ねなしかづら。  
うしのたま「牛玉」(名) 牛の額に生ずる毛のかたまり  
たる如きもの、形九くして大きき一寸餘、其中にかたきん  
あり、牛玉を牛玉と誤り讀みて、寺院などの寶物とせり。

③こわ(牛蓋)。  
うしのち「牛乳」(名) 牝牛の乳房より出づる乳汁。ぎう  
うしのちち「牛乳」(名) うしあはせ。

うしのつづき「牛角突」(名) うしあはせ。  
うしのつづき「牛角突」(名) うしあはせ。

うしのつづき「牛角突」(名) うしあはせ。  
うしのつづき「牛角突」(名) うしあはせ。

うしのつづき「牛角突」(名) うしあはせ。  
うしのつづき「牛角突」(名) うしあはせ。

うしのつづき「牛角突」(名) うしあはせ。  
うしのつづき「牛角突」(名) うしあはせ。

うしのととき「まみり」(丑時參) (名) 執念深き女が、嫉まし  
く思ふ人を眼(め)で殺さんとて、  
祈願の日数を定め、其日數間は、  
毎夜丑の時即ち午前二時に、  
頭上に繩縋を懸けて、異形  
の姿をなし、志す神社に詣  
て、其人の模形を釘にて神木に打ち附けると、禱願日には其  
人死すべしといふ傳ふ。

うしのはなき「牛鼻木」(名) 牛のはなづらにたとはす木  
片。(葉)。(植)うしろし。

うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。  
うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。

うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。  
うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。

うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。  
うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。

うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。  
うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。

うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。  
うしはく「領」(他カ四) 主宰となりて土地を領有す。



【參時丑】

生す、莖は脆弱にして基部僅臥し、高さ三尺、葉は卵形にし  
て尖り、下部のものは葉柄を有すれど、上部のものは殆ど葉  
柄なし、春夏の候、五瓣の白花を開き、紫黒花序をなす、柄を  
結ば、はこべ(蠶)の原料又は小鳥の飼料とし、又ひたし物とす。  
うしはく「牛蠶」(名) ①動蠶の一種、體の大きき此に同  
じく、全體黒毛を密生し、處々黄白色の皮下に産卵す、卵は  
牛の體温によりて孵化し、其皮膚に潰瘍を生ぜしむ。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。  
うしはり「牛梁」(名) 置きものを承くる梁。

りていふ語。  
うしやうじや「(名) 副」(うじうじ) ①くだくだしくのべい  
うしややく「鳥鶴」(名) ①動かさざき。一兩に飛ぶ。一、  
きよう「鳥鶴」(名) ①動かさざき。一兩に飛ぶ。一、  
うしやう「迂儒」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。  
うしやう「鳥集」(名) 世事にからず學者のふき學者。

うしろーうしろ

うしろかへり（後影）（後返）（名） うしろへかへると。  
うしろがみ（後髮）（後頭部の髪）**を引かる**（句）心強りて思の切りがたきにいふ。  
うしろがろし（後髪）（後髪）（形、二）うしろやすし。  
うしろきす（後疵）（名） 後に行く際に背後にうけた疵。  
うしろきたなし（後襟）（形、二）卑劣にしている。  
うしろくび（後頸）（名） 頸の後方。「ぎよからず」  
うしろぐらし（後暗）（形、二）後の専心にかかりて安からずうしろめたし。不正の所業などありて心安からず。「と」  
うしろげき（後袈裟）（名） 人の背後よりけさがけに切る。  
うしろごと（後言）（名） かげにてさしとる。かげぐち。  
うしろさし（後挿）（名） うしろにさすかんざし。  
うしろすがた（後姿）（名） うしろの方。  
うしろすめ（後姿）（名） 背面の姿。  
うしろせめ（後抱）（名） 敵の背後より攻むると。  
うしろだき（後抱）（名） 背後よりいだくと。  
うしろだて（後橋）（名） うしろへこだてに取るもの。後方の防禦。うしろ（名）うしろおし（後腰）。  
うしろづき（後附）（名） うしろおし。うしろすがた。  
うしろつづ（後詰）（名） ごづめ。「すと」にいましむ。  
うしろて（後手）（名） うしろの方。両手を背中にまはらうとび（後飛）（名） 後方へさざり飛ぶと。  
うしろはちまき（後鉢巻）（名） 鉢巻を後頭部にて結ぶと。  
うしろはば（後幅）（名） 裁縫にて、背の幅より腕の幅よりまはるはば。  
うしろべたし（後目痛）（形、二）うしろめたし。  
うしろまき（後巻）（名） 城を圍み攻むる軍を、更に其後方より圍み攻むる巻。  
うしろま（後幕）（名） 演藝するもの背後の幕。  
うしろまへ（後前）（名） うしろるとまへと。うしろるとまへとの位置颠倒すると。  
うしろみ（後見）（名） うしろに居て人の身の上をたずく

うしろーうすあ

うしろろだて。未成年者又は無能力なる戸主のこうけん。こうけんをなす。  
うしろみる（後見）（自、ま上）うしろみをなす。  
うしろむき（後向）（自、ま上）うしろむきをなす。  
うしろむき（後向）（名） うしろを見てめると。まへむきの對（背面）。  
うしろめたがる（後目痛）（自、ら四）うしろめたうしろめたげ（後目痛氣）（名） うしろめたきさま。  
うしろめたさ（後目痛）（名） うしろめたきと。又其度合うしろめたなし（後目痛）（形、二）うしろめたし。  
うしろめたなし（後目痛）（形、二）うしろめたし。  
うしろやすけ（後安氣）（名） うしろやすきさま。  
うしろやすさ（後安）（名） うしろやすすと。又、其度合うしろやすし（後安）（形、二）後の専心にかからず。安心なり。うしろがろし。  
うしろゆび（後指）（名） あざけり又はうたがひて、かげにて其人の非をさしていふと。**を差さる**（句）かげにて。  
うす（白）（名） 穀物をつき碎き又はあらぐる道具、なかたてうす、「つきうす」等あり。（書）土下二箇の圓形の石を合はせ、其相擦する面に齒を刻み、其處に穀粒をいれ、上なる石を回轉して、これを粉末にするもの。ひきうす（磨石）。  
うす（白）（名） 一失（自、さ下）見えなくなる。なくなる。死に。ぬ。消滅。さきゆ。見えなくおつ。  
うす（薄）（接頭）うすき意を表はす語。「むらさき」後。うす（馨華）（名） 古昔、冠又は髪の上にかざしたるかがり、草木の枝又は造花などを用ひたり（細）。  
うす（雲霧）（名） 唐裝のうしろなる帯がいの交又せる上につくる形寶珠の如きかがり。うすくら。  
うす（鳥頭）（名） とりかぶと」の根、有毒にして、藥料にうす（濁）（名）「うづ」を見よ。供せらる。  
うすあかり（薄明）（名） ほのかにさすひかり。出日漸若しくは日没後に天空のあかるきと、地平線下の太陽

うすあーうすく

の光線が、空気のために屈折して起くる現象。  
うすあき（薄）（薄）（名） 少數の賣買。「痘痕」。  
うすあばた（薄痘痕）（名） 目に立たぬほどあばた。（淡うすあを「薄青」名） 緑色の名、經（白く緑）の背きも。  
うすあさ（薄青）（名） 緑色の名、經（白く緑）の背きも。かざねの色目、表は薄青にして裏は青、又は表は黄青にして裏は青若しくは表裏共に薄青なるもの。薄青文濃（名） 緑色の名、薄青にして模様を織り出せるもの。曆二月十九日頃。  
うすい（雨水）（名） あまみづ。二十四氣の一、陽合のひと。花瓶をおく方形の板。經木の幅ひろさ。  
うすいた（薄板）（名） 穀物の名、うすき地。  
うすいちぢ（白苺）（名） 種うすのき。  
うすいも（薄痘痕）（名） うすあばた。  
うすいろ（薄色）（名） 緑色の名、經は表は薄花田色に赤色を帯び、裏は薄むらさきなるもの。薄うすきほり（薄浮彫）（名） うすにくぼり。「むらさき」かすか。  
うすうす（薄薄）（名、副）うすうす。ほんのり。はの。かすか。  
うすうす（名、副）うすこしく動くさま。いらだつさま。  
うすうす（薄霞）（名） うすきかすみ。  
うすうす（薄霞）（自、ま四）うすくかすむ。  
うすうす（薄皮）（名） 膜。婦人などの皮膚の色白くかみかかなると。  
うすうす（薄紙）（名） うすき紙、厚紙の對。**を割ぐ様**（句）病氣の少しづつ次第になるにいふ。  
うすうす（薄著）（名） 著物をうすくさると。  
うすうす（薄）（名） 紗の如きうすきぬ。  
うすうす（薄組）（名） 薄の如きうすきぬ。  
うすうす（薄衣）（名） 薄きぬの衣服。  
うすうす（薄霧）（名） うすき霧。  
うすうす（薄霧）（自、ら四）うす霧立つ。  
うすうす（薄）（自）「うづく」を見よ。



〔二〕たいさう

うすくちびる〔薄唇〕(名) 唇のうすきと。口數のお  
 うすくまる〔薄〕(自) うづくまるを見よ。ほきと。  
 うすくも〔薄雲〕(名) うすくたなききたる雲。①(動)  
 「どぶがひの一種、介殼は長楕圓形にして長さ二寸許、白色  
 にして黒き斑點あり。」  
 うすくもり〔薄雲〕(名) うすくもると。すこしくもる。  
 うすくもる〔薄雲〕(名) 薄雲(自) 薄雲たなびきて、空  
 うすくら〔雲珠鞍〕(名) 雲珠のかぜりを附けたる鞍。から  
 ぐら。三歳駒におかせ。  
 うすくらげけしき〔薄暗〕(形) 一光うすくして物色ほの  
 かなり。ほのぐらし。微明なり。  
 うすくれない〔薄紅〕(名) うすき紅色。  
 うすげまよう〔薄化粧〕(名) あつさりとしたる化粧。  
 うすこうばい〔薄紅梅〕(名) ①植紅梅の一種花の紅色  
 のうすまもの。②染色の名、うすこうばいの花の如き色。  
 うすこはく〔薄琥珀〕(名) 薄地の琥珀。  
 うすごほり〔薄氷〕(名) うすき氷。  
 うすこぼる〔薄氷〕(名) 薄氷(自) 氷うすくはる。  
 うすさ〔薄〕(名) うすき度合。  
 うすさいまき〔薄彩色〕(名) 淡く施したる彩色。「單瓣。  
 うすざくら〔雲球櫻〕(名) 植櫻の一種蕊は長く、花は  
 うすさま〔烏羽沙塵〕(名) 梵語 Uchusmar、不淨の  
 義。「佛」廟を守る明王、眞言宗にて祀る。  
 うすくしりき〔薄〕(形) ①厚さすくなし。厚からず。②  
 すくなし。あさき。「情」一傳。「色」一色。③ゆたかならず。  
 とほし「手當」。「形」一薄くあらず。「味増汁」。「愛情少  
 し」。減款少なし。「うすき心」。  
 うすまき〔薄地〕(名) 織地又は金屬などの薄きもの。  
 うすまき〔薄敷〕(名) 商取引所規定の證據金より少額の  
 金員を敷金として、取引す。  
 うすまほし〔薄鹽〕(名) うすき鹽加減。  
 うすまじり〔薄知〕(名) うすうす知ると。「あてはしる。  
 うすまじり〔薄知〕(名) 自ら(四) そぞりに走るいそがしくはしる。  
 うすまじり〔薄知〕(名) 自ら(四) われよる。群集す。

うすく—うすす

うすすみ〔薄墨〕(名) ①墨色の淡きと。②うすすみ(名)。  
 ③そばかき。(女房詞)。「がみ」薄墨紙(名) あくく  
 (箱紙)。「のりん」薄墨縮旨(名) うすすみ紙に  
 書き認めて給はる縮旨。  
 うすぞめ〔薄染〕(名) ①色を薄く染むる。②うすぞめで  
 ろも。③「ごら」薄染衣(名) 淡き色に染たる著  
 うすたかし〔薄〕(形) うすたかしを見よ。「物」。  
 うすたけ〔白茸〕(名) ①菌類の一種、夏秋の交、諸山の山林  
 に生ず、茶褐色にして高さ二、三寸、柄短くして傘廣く、傘の上  
 面固みて白の状をなす、有毒なり。  
 うすだたみ〔薄疊〕(名) 春又は夏の候に用ふる薄きたり  
 うすぢや〔薄茶〕(名) ①種茶(名) の一種、又其點前(名) ②  
 うすぢやい。③「いろ」薄茶色(名) うすぢ茶色。  
 うすぢり〔薄塵〕(名) うすき梨地ぬり。むらなしぢ。  
 うすぢり〔薄塵〕(名) ①「自」(四) 物を白に入れてつく。  
 うすぢり〔薄塵〕(名) ②「日」の影面に投せんとす。  
 うすつべら〔名〕 ①極めて薄きと。②極めてあさはかなると。  
 ③極めて薄情なると。  
 うすて〔薄手〕(名) ①かるき手疵。けいあやう。(微傷) ②  
 物のこしらへ方のうすきと。③「の」茶湯。  
 うすとりひき〔薄取引〕(名) ①商相場にて、買賣成立の機  
 會少なく、取引のうすきと。  
 うすなう〔薄〕(他) 「うづなふ」を見よ。  
 うすなくぼり〔薄肉彫〕(名) 浮彫の一種、模様、彫像等を  
 僅かに板面に浮きあがせたる彫り方。  
 うすにごり〔薄濁〕(名) うすき濁濁。  
 うすにび〔薄鈍〕(名) うすき鈍(名) 色。  
 うすぬり〔薄塗〕(名) うすくぬると。又、其の。  
 うすねすき〔薄鼠〕(名) うすき鼠色。  
 うすのき〔白木〕(名) ①植石南(名) 科の落葉灌木、山地に  
 自生す。高さ三四尺、葉は卵形にして互生す、萼は半圓形の裂  
 片を有す、果實は黒色の漿果にして食すべし。  
 うすのろ〔薄鈍〕(名) 才能の普通より劣りてにぶきと。又、  
 其人。うすばか。

うすす—うすの

うすば〔白商〕(名) 白の如く中の凹みたる齒。  
 うすば〔薄刃〕(名) 刃をうすく鍛ひたる刃。  
 うすばか〔薄馬鹿〕(名) うすのろ。  
 うすばかけるふり〔蚊〕(名) 蚊蜻蛉(名) ①(動) 蚊翅類の昆蟲、  
 體は蜻蛉に似て弱く、翅は大形にして白粉あり、一般に淡綠  
 色にして、體の一部は黒色を帯ぶ、幼蟲は「ありちごく」なり  
 うすはた〔薄機〕(名) うすの。  
 うすはた〔薄端〕(名) 金屬製花器の一種、形種々あれど、口  
 廣くして底淺きの最も多く使用せらる。  
 うすはなざくら〔薄花〕(名) ①植花の色色の薄き櫻。  
 ②「かさね」の色目、表は白くして裏の紅なるもの。  
 うすはなぞめ〔薄花染〕(名) うすき藍(名) 色に染めたる  
 うすはり〔薄張〕(名) 商うすまき。  
 うすひきうた〔白挽歌〕(名) 農家にて、白を挽くにつれて  
 うたふ俗曲。  
 うすひたひび〔薄頰〕(名) 「かんむり」の一種、襷の低  
 うすふたあみ〔薄二藍〕(名) うすきふたあみ色。  
 うすべ〔護田鳥〕(名) ①(動) おすめどり。②「う」護田鳥  
 尾(名) 鷺の羽の一種、黒き所の少なきもの、二十四さい  
 たる「の」矢羽ひ。  
 うすべどり〔白邊鳥〕(名) ①(動) にはとり。  
 うすべに〔薄紅〕(名) ①うすくつけたるべに。②うすきべ  
 うすべり〔薄縁〕(名) へりを附けたるごぎ。「にいろ」。  
 うすまる〔理〕(自) 「うづまる」を見よ。  
 うすみ〔薄〕(名) うすき度合。  
 うすみどり〔薄綠〕(名) うすきみどり色。  
 うすみの〔薄美濃〕(名) 透きとほるほどに薄く抄(名) きた  
 うすむ埋(他) 「うづむ」を見よ。「るみのがみ」。  
 うすむらさき〔薄紫〕(名) うすきむらさき色。  
 うすもとて〔薄元手〕(名) 手うすき資本。  
 うすもの〔薄物〕(名) 薄く織りたる織物、即ち紗絹の類。  
 うすはた。うすまき。うすぢ。うすぢり。うすぢり。うすぢり。  
 うすもる〔理〕(自) 「うづもる」を見よ。

うすす—うすも

うすやくそく「薄約束」(名) かりのけいやく。  
うすゆき「薄雪」(名) 少しばかり降りたる雪。(微雪)。  
菓子名、鶏卵と細粉炒りにて製し、砂糖のころもかけたもの。口に入るとはげらけら消ゆる心地するよりいふ。

うすよう「薄雲」(名) うすやう。  
うすよう「薄雲昆布」(名) 薄くけつりたる昆布、大阪の名産。  
うすよう「薄藤」(名) うすくすきたる烏子紙。  
うすやう「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。  
うすら「薄」(名) うすらか。

うそ「鶯」(名) (動) 燕雀類の鳥、嘴短くして黒く、頭は深黒にして頸のあたり深紅、尾黒し、胸腹等などは灰青色にして赤色を帯び、喉黒なれど、人家に飼養して鳴聲を愛す。うそどり。うそむ。



鶯

うそ「鶯」(名) 元祖太宰府及東京鷺戸の天壽宮にて、鶯語人が互に木につくりたる籠をかへあふ事、太宰府のは、正月七日の夜の酉の刻頃に行ふ、其籠は神社より出すものにて、中に黄金製のもの一箇ありといふ、鷺戸のものは、正月二十五の兩日これをを行ひ、鶯語人の持参せるもの、神主受け取りて、別ものを替へ渡す、開運の效ある神事なりとて、鶯語人群集す。——どり「鶯鳥」(名) (動) うそ。

うそ「嘘」(名) 口をつばめて氣を吹くと。口をつばめて聲を出だすと。うそぶき。くちぶき。或は「嘘」を吹き。

うそ「嘘」(名) 事實ならざる言。虚構したる言。いづはりごと。うそごと。虚言。(正當ならざること。すぢがひなること。まがひたる字。——ホ「嘘吐」(名) 正しからざる字。まがひたる字。——ホ「嘘吐」(名) よくうそをつく人。(虚語人)——つばち「嘘言」(名) せうごと。うそ。——の「かは」(嘘皮) (名) すこしも事實なきくはりごと。あかそう。——はなし「嘘話」(名) いづはりごと。あかそう。——はなし「嘘話」(名) 眞實なりしが、遂に事實となりて現はるる。——世の中(句) いづはり多く眞實なきがならひなる世のありさま。——まつく(句) うそをいふ。

うそ「世」(名) 世事にうとよおやぢ。  
うそ「うそむ」(名) 有象無象(名) 宇宙間に存在する有形無形の一切。ほんらまんざう。——たくさんによりあつまりたること。

うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。

うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。  
うそむ「うそむ」(名) うそぶくと。うそぶく形。假面。



うたへたたすつつかさ(刑部省)古昔八省の一、刑律一切の事を掌りし官廳。  
うたまひ(歌舞)うたまふと(樂)。一と「歌舞人」(名)がくにん。れいん。

うたまりのつかさ(雅樂寮)うたのつかさ。うたまりのつかさ(雅樂寮)古昔治部省の被官にして、舞樂の事をつかさとりつかさ。  
うたまる(自、自)ゆだる。

うち(内)名。うらな。裏面。くみ。な。か。ま。あひ。あひだ。内裏。内裏。主上の敬稱。いへ。や。家裏。我家。我宅。我妻。我夫。内閣。内政。一が治らぬところ。心意。敬以て直くす。以下。うらみ。内。一聞より一品。わわれ。おのれ。内閣。内閣のなか。

に省みて疚しからず(句)内にありては威張れど、心にかへり思へども、すこしも心はづかしきところなし。  
廣がりの外すほり(句)内にありては威張れど、外に出てはいくぢなきて。一を外(句)遊逸にふけりて、常に外出して内に居らざると。

うち(打)接吻。或動詞に冠して、其意を強ひる語。一案うち(氏)名。古昔家々の血縁に従ひて、朝廷よりたまはりたる御親、御平、麻植の類(姓)。各箇の家系を表章する苗字、楠木徳川の類。いへ。が。家系。一なくして玉の奥(句)婦人は家柄いよしと、貴人の目にとまりて其稱を得れば、怒らざり地位となるをいふ。一より育ち(句)人格の養成は、家柄よりも威訓を重しとするをいふ。

うち(氏)接尾。人の苗字の下に添へて用ふる敬稱。某一には、如何おはしめす。  
うちあかす(打)明(他、さ四)隠すに語る。うちあかす(打)明(他、か下二)「あく」の意を強めていふ。隠すに語り、ありのままを語る。

うちあぐ(打)上(他、か下三)「あぐ」の意を強めていふ。打ちたてて、波荒れて醜を疑(下)す。波物を「あぐ」にして陸へ上ぐ。うちたげをなす。酒宴。興行を終ふ。

うちあけ(内揚)名。衣服のあげを外部にあらはさず、内部にすると、そとあけの對。  
うちあけ(打)上(名)火花の一種、筒よりうちあぐるもの。うちたげ。酒宴。興行を終ふと、相撲の後。  
うちあけばなし(打)明話(名)つまかくしなき話。  
うちあはせ(打)明(他、うちあはす)の訛。  
うちあはせ(打)合(他、さ下二)「あはす」を強めていふ。雙方互に打ちあふ。かねて相談す。  
うちあはせ(打)合(名)うちあはすと相談す。  
うちあはせ(打)合(名)ふともも(題)。うちあはせ(打)合(他)うちあはすと相談す。  
うちあはせ(打)合(名)ふともも(題)。

うちあひ(打)合(名)雙方打ちあふ。たたかひ。ぶちあひ。双方を互に放ちあふと。  
うちあひ(打)合(他、は四)雙方互に相打ち。互に銃砲などを放つ。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。  
うちあみ(打)板(名)地上に坐する時にまく板。

うちかけ(打)掛(名)古昔、節食などの儀式のときに武官の用ひし服、前と後とにて着る袖なしの如きもの。(掛甲、褌褌)婦女の腰服の一、帯を  
あめたる上に打ちかけて著し小袖。か  
いどり。肩衣の褌袴の中に入れ  
ず上より打ちかけて著し腰儀の着方。  
すおう(打)掛(名)素袍の褌袴の中に入れ、上より打ちかけて著し腰儀の着方。一よろひ(打)掛甲(名)うちかけ(一)一素ぼ(打)掛烏帽子(名)烏帽子を頭におし入れ、ただ後の針のみにて留めおく腰儀のかぶり方。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。

うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。  
うちかけ(打)掛(名)相撲の手、一方の足を敵の足の内側より掛けて、これを併せと。



【(二)けかちう】



【けがらう】



ためて打つ。●更にあらためてきたふ。

うちかぶと〔内曹〕(名) かぶとのうら(毳兜)。●うちわのやうす。内情。―を見過かす(句) 相手の内情弱

うちかへし(カ) 打返(二名) うちかふと。

うちかへす(カ) 打返(二名) うちかふと。●返すの意を強めていふ。●人に打たれたる報いとして、其人を打つ。●くりかへす。反復す。●ふなきき綿を更に綿写にてはじきうちて、あたらしくす。●置きし波綿び寄せ来る。

うちかみ〔打更〕(二名) 「うちかよ」の訛。

うちがみ〔氏神〕(名) 木づちにてうちて、楕かしたる紙。●氏先の先祖として祀る神、又氏に由緒ある神、藤原氏の春日、源氏の八幡の類。●人々の住む所の鎮守の神。うぶすな(産土神)。

うちがかり〔内借〕(名) 報酬又は貸銭などの要部分を、前拂にて借り受くること。ないまじ。

うちきみ〔内氣〕(名) 物事に遠慮がきと。ひかへめがち。

うちき〔桂〕(名) 古昔、貴婦人の衣服(寛袴)の上衣をいふ(掛)。●男子の直衣狩衣などの下に著し平常の衣服。

うちきき〔打聞〕(名) 聞くと。●聞きまて書きたるもの。

うちきす〔打傷〕(名) 物にうちつけ又は他にうたれて生じたるきす。打撲傷。

うちきぬ〔打衣〕(名) 古昔貴婦人の正装の時、五衣(ズシ)の最も上に著し衣服、紅の綾の打物(ズシ)にて製する。

うちきね〔打杵〕(名) きね。

うちきみ〔内君〕(名) 他人の妻の敬稱、おくさま。おくがた。

うちきり〔打切〕(名) うちきると。●切るといふ。

うちきん〔内金〕(名) 契約したる金高の幾部分の金。

うちきん〔打金〕(名) 廉價なる品を高價なる品と易ふるとき、不足だけの金額をつづぶよと。

うちくだく(カ) 打碎(二名) 砕くの意を強めてうちくだく(カ) 打碎(二名) 砕くの意を強めてうちくだく(カ) 打碎(二名) 砕くの意を強めて

うちかーうちく

を(嬰)かす。●心に憂苦をとめず。〔首〕。

うちくび〔打首〕(名) 古昔の重刑、罪人の首を斬ること。(刎)

うちくもり〔内曇〕(名) 烏子紙の一種、上下に青紫の雲形をすき出だしたるもの。●山城國鳴瀧より出づる一種の砥石、玉子色に紫色の模様あるもの。●土妻(土)の一種、内に黒きあや色のもの。

うちくり〔内蔵〕(二名) 官中に假けて、官物を納めし職。

うちくるふし〔内輪〕(名) 器械の内側に設置したる車輪。●らせんすまんき。

うちくるま〔内車〕(名) 自家用の人力車。

うちくわ〔内郭〕(名) 城の内郭のくるわ。

うちけいき〔内景氣〕(名) 諸國引所に、大引役又は日曜日などに、次の立會を豫想して賭けを試むこと。

うちけい〔内裁〕(名) 料理屋などにて、其家の内にかかへおく藝者。

うちけいす〔氏系圖〕(名) いへすぢ。いへがら。

うちけいす〔打消〕(名) うち消すと。●〔文法〕はたらき自然らざる意を表はすと、「すぢ」、「まじ」等の助動詞によりてこれを表はす。(否定)。

うちけす〔打消〕(他、三四) 消すの意を強めていふ。●皆無にするやす。●否除す。

うちけんかん〔内衣關〕(名) ないげんかん。

うちこ〔打粉〕(名) 刀劍を研ぶとき又は手入をするときに、刀身にふりかゝる合砥の粉末。とのこ。

うちこ〔氏子〕(名) 氏神に末裔、うちびと。●うぶすなの守護の地に住む人。―そぞだれ(氏子總代)(名) 氏子中の總代に選ばれたるもの。―ちゅう(氏子中)(名) 同一の氏神を祀るもの。

うちこさく〔内小作〕(名) 小作人を自己の家に住はせて小作をなさしむること。〔上〕に渡せる種。

うちこしだるき〔打越種〕(名) 母屋(より)向拜(柱)の

うちくーうちく

うちこすすぢ〔打越〕(自、三四) 越すを強めていふ。

うちこほし〔打毀〕(名) うちこほすと。●暴民の徒黨をなして、所々の人家を破却すると、天明の一。

うちこほす(カ) 打毀(他、三四) こほすと。●強

うちこみ〔打込〕(二名) うちこむと。〔めていふ。〕

うちこむひめめ〔打込〕(他、三四) たたくまむ。●なげ込む。●言ひこむ。●體勢にて攻む。●深く心を寄す。

うちこすすぢ〔打殺〕(他、三四) 殺すの意を強めていふ。●たたくこす。●弾丸にて射殺す。

うちさき〔打敷〕(名) 古昔、多く用ひし布帛の敷物。●寺院の高座又は佛壇などにかくる布帛。

うちさき〔討死〕(一) 敵と戦ひて死ぬること。せんま。

うちさす(カ) 打拵(他、わ下三) 拵うの意を強めていふ。●うちたよす。

うちさす(カ) 打過(自、上二) 過ぐの意を強

うちさす(カ) 打拵(他、わ下三) 拵うの意を強めていふ。

うちさす(カ) 打拵(他、わ下三) 拵うの意を強めていふ。

うちさす(カ) 打拵(他、わ下三) 拵うの意を強めていふ。

うちさす(カ) 打拵(他、わ下三) 拵うの意を強めていふ。

うちさす(カ) 打拵(他、わ下三) 拵うの意を強めていふ。

うちさす(カ) 打拵(他、わ下三) 拵うの意を強めていふ。

うちさす(カ) 打拵(他、わ下三) 拵うの意を強めていふ。

うちさす(カ) 打拵(他、わ下三) 拵うの意を強めていふ。

うちこーうちた

うちた—うちつ

ど興行物のはね。——だいに「打出太鼓」(名) 興行物のはねの合間に鳴らす太鼓。——ぼり「打出影」(名) 金屋の裏面より打出したる模様を、浮彫にて仕上げる彫り方。  
うちたす「打出」(他、三四) うちて出す。うちち始む。興行物のはねに、打出太鼓をうちて見物人を去らす。裏より打ちて、表へ模様を出す。土地を測量して、餘地を出す。

うちたたく「打ち」(他、三四) 「たたく」の意を強めうちたす「打ち」(名) 實用の太刀。うちうちうちたひら「打ち」(他、三四) 「討つ」(他、三四) 攻めて退治す討ちて平定す。

うちたひらける「討平」(他) 「うちたひらぐ」の訛。  
うちたふす「打ち」(他、三四) 「たふす」の意を強めていふ。うちたたきたす。

うちたれがみ「打垂髪」(名) 婦人小兒の髪を結ばずして垂れたるもの。うなぬこが五月雨の空。  
うちちがひ「打違」(名) すちかひ。ゆきちがひ。すちかひになる。ゆきちがひ。

うちちがふ「打違」(自、三四) 互に交叉す。すちかひになる。ゆきちがひ。

うちちがふ「打違」(自、三四) 互に交叉す。すちかひになる。ゆきちがひ。

うちちがふ「打違」(自、三四) 互に交叉す。すちかひになる。ゆきちがひ。

うちちがふ「打違」(自、三四) 互に交叉す。すちかひになる。ゆきちがひ。

うちちがふ「打違」(自、三四) 互に交叉す。すちかひになる。ゆきちがひ。

うちちがふ「打違」(自、三四) 互に交叉す。すちかひになる。ゆきちがひ。

うちちがふ「打違」(自、三四) 互に交叉す。すちかひになる。ゆきちがひ。

うちちがふ「打違」(自、三四) 互に交叉す。すちかひになる。ゆきちがひ。

うちつ—うちと

—げそ「打附懸想」(名) だしぬけに懸想の意をいひよると。—ごころ「打附心」(名) 俄に思ひつちぬけにいふことば。—ぶち「打附縁」(名) 釘にてうちつけたる縁。

うちつづける「打附」(他) 「うちつづく」の訛。「ていふ」。

うちつづく「打附」(自、三四) 「つづく」の意を強めうちつみかど「内御門」(名) 禁裏内の御門。

うちつみやけ「内官家」(名) 皇后のぬます御殿。後宮。三韓に置き、人民を馴らし政務を掌らしめられし官職。

うちつる「打連」(自、三四) つれだつ。つれあうちて「打手」(名) うちて。鐵砲を放つ人。「ふ」。

うちつら「打出」(名) うちだすと。うちだして(三)。「—のこづち」打出小槌(名) 飲食衣服何にても心任せに打ち出すといふ寶の槌。「—のたち」打出太刀(名) 金銀をちりばめたる太刀。「生」。

うちつら「打出」(名) うちだすと。うちだして(三)。「—のこづち」打出小槌(名) 飲食衣服何にても心任せに打ち出すといふ寶の槌。「—のたち」打出太刀(名) 金銀をちりばめたる太刀。「生」。

うちつら「打出」(名) うちだすと。うちだして(三)。「—のこづち」打出小槌(名) 飲食衣服何にても心任せに打ち出すといふ寶の槌。「—のたち」打出太刀(名) 金銀をちりばめたる太刀。「生」。

うちつら「打出」(名) うちだすと。うちだして(三)。「—のこづち」打出小槌(名) 飲食衣服何にても心任せに打ち出すといふ寶の槌。「—のたち」打出太刀(名) 金銀をちりばめたる太刀。「生」。

うちつら「打出」(名) うちだすと。うちだして(三)。「—のこづち」打出小槌(名) 飲食衣服何にても心任せに打ち出すといふ寶の槌。「—のたち」打出太刀(名) 金銀をちりばめたる太刀。「生」。

うちつら「打出」(名) うちだすと。うちだして(三)。「—のこづち」打出小槌(名) 飲食衣服何にても心任せに打ち出すといふ寶の槌。「—のたち」打出太刀(名) 金銀をちりばめたる太刀。「生」。

うちつら「打出」(名) うちだすと。うちだして(三)。「—のこづち」打出小槌(名) 飲食衣服何にても心任せに打ち出すといふ寶の槌。「—のたち」打出太刀(名) 金銀をちりばめたる太刀。「生」。

うちと—うちの

うちとける「打解」(自) 「うちとく」の訛。  
うちとす「打ち」(自、三四) 出いりす。  
うちとねり「内舍人」(名) 古昔、中務省に屬せし官、公家の子弟を登庸して、禁裏殿上の事をならはしたるもの。うちとねり。「東宮職及主殿寮の役下級の屬官」。

うちとどめ「打留」(名) 古昔、装束の帛を打ちてつやをいだしむるために設けられし所。  
うちとむ「打ち」(他、三四) 物をうちちてとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。  
うちとどめ「打留」(名) をはり。つきよ。

うちのかしはてのつかき(内膳司一名)古貫、宮内省の被官にして、供膳の事を司りしつかさ。  
うちのかにもりのかみ(内掃部頭一名)うちのかにもりのつかさの長官。

うちのかにもりのつかさ(内掃部司一名)古貫、宮内省の被官にして、宮中の洒掃、鋪設等を司りしつかさ。  
うちのかみ(氏上一名)古貫、同一氏族中の宗家の長、一族の事をつかさとりたり。うちのちゆうぶ。(か)の長官。

うちのくすりのつかさ(内薬正一名)うちのくすりのつかさのくすりのつかさ(内薬司一名)古貫、中務省の被官にして、宮中の醫藥に關する事をつかさとりしつかさ。

うちのくらのかみ(内藏頭一名)うちのくらのつかさの長官。

うちのくらのつかさ(内藏寮一名)古貫、中務省の被官にして、宮中の金銀、珠玉、寶器、絲錦其他一切の財寶に關する事を司りしつかさ。くらのつかさ。

うちのまるすつかさ(内記一名)古貫、中務省の被官にして、詔敕をつくり、記録の事をつかさとりしつかさ。ないき。

うちのたくみのかみ(内匠頭一名)うちのたくみのつかさの長官。たくみのかみ。

うちのたくみのつかさ(内匠寮一名)古貫、中務省の被官にして、宮中の製作、裝飾等の事をつかさとりしつかさ。たくみ。

うちのちようぶ(氏長者一名)氏上の別稱、復には源・藤・橘の諸氏に關する號となれり。

うちのひと(内舍人一名)妻の其夫を指ていふ稱。

うちのぼる(打上枕一名)「まほ」に冠する枕詞。  
うちののみこ(内御子一名)ひめみと内親王。  
うちのもの(内者一名)いへうちのもの。みうち。  
うちのり(内法一名)機織物の一内邊より内邊までの内法は縦横各四寸九分、深さ二寸七分なり。

うちのみやのかみ(内禮正一名)うちのみやのつかさの長官。  
うちのみやのつかさ(内禮司一名)古貫、中務省の被官にして、宮中の禮儀をつかさとりしつかさ。ないらい。

うちのをき(氏長一名)うちのかみ。  
うちのり(團扇一名)「撲扇の義」あふぎて風を起す具、細き竹條を骨とし、紙又は帛を貼(りて柄を附けたるもの、種類多く、普通圓形なり。軍配うち。一たいこ

團扇太鼓一名)一枚革をまく張り柄をつけて團扇形に拵(り)たる太鼓。蜻蛉

とんぱ(團扇蜻蛉一名)「動」とんぱの一種、服部は黄色にして黒き環紋あり、尾端に近く扁廣な部分ありて形恰も團扇の如し。一ふ

團扇河豚一名)「動」よぐの變種、全體に滑質鱗狀の小刺を被り、腹部の皮膚延長して團扇の如し。一を揚

げる(句)角力にて、行司が勝ちしものの方へ軍配を掲ぐ轉じて、勝ちたるものと認むるにいふ。

うちは(内端一名)うちまき。ひかへぬ。

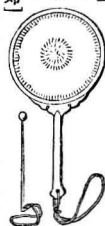
うちはし(打橋一名)假にかけたす橋。

うちはたす(打果一名)武器を用ひてうちこらす。きりこす。

うちはちもん(内八文字一名)遊女の胸内をねり行く足つき、兩足の先を内方へむけてあると。

うちはふ(打延一名)「自は下二」ひきつづく。ながび(他)「打延(副)ながびきて、いつ終るともなく。ながびがなぐ。

うちはやす(打雑一名)「他、さ四」「はやす」の意を強め  
うちはやむ(打早一名)「他、ま下二」「はやむ」の意を強め  
うちはらひ(打拂一名)うちをはらふと。  
うちはらひ(打拂一名)うちをはらふと。  
うちはらふ(打拂一名)うちをはらふと。  
うちはらふ(打拂一名)うちをはらふと。



【太鼓團扇】

むはらふ。返ひまりぞく。おひはらふ。鐵砲などを打ちて、敵を迫むららす。

うちばり(梁一名)うちばり。はり。  
うちばり(内張一名)内側に張りたるもの。一いた

うちばん(打盤一名)物を打つに用ふる盤。  
うちび(打槌一名)銀け互したるといふ。

うちび(打火一名)鑓石にて鑽り出す火。きりび。  
うちび(打日差一名)枕「みや」「みや」に冠する枕詞。  
うちび(打日差一名)「みや」「みや」に冠する枕詞。

うちびと(内人一名)伊勢神宮に奉仕する神官、神祇の事を掌れり。うちびと。  
うちびと(打紐一名)二筋以上の絲にて組み合はせたる

うちびと(打歩一名)「商」の兩幣にて、呼買の等しき通貨の差。(一)株券又は為替等の實際價格と其額面價格との差。一そらば(打歩相場一名)「商」外國為替手形の需要多くして、額面以上に賣買せらるると。

うちぶた(打札一名)たてふた。たふた。  
うちぶと(内襖一名)胸部と衣服との間。相模などにて、胸部に近接したる所。人のないま。内密。

うちぶみ(氏文一名)先祖よりの由緒をえたためせたる文書。けいづ。

うちぶる(打振一名)「他、さ四」よるひうごかす。ふりすつ。

うちべり(内耗一名)穀物を煮(き)きて元高の幾分を損す

うちべん(内辨度一名)家の外にては卑屈なれど、家の内にてはけい暴慢なるもの。かべないけい。  
うちぼり(内堀内壕一名)城郭の内部にあるほり。  
うちぼる(計滅一名)「他、さ四」せめほるばす。







うつぶす <sup>せせ</sup>【俯】(他、下二) うつむかす。  
うつぶるいのり <sup>せせ</sup>【十六島海苔】(名) 【種】出雲國うつぶるい島に産する甘露菜、色紫黒にして味美なり。

うつぶん <sup>せせ</sup>【鬱憤】(名) うつぶりしうらみ。おさへおさへしいきどほり。稍煩鬱。を晴らす。

うつぶわつ <sup>せせ</sup>【空一名】(名) 中の空虚なる所うつる。【重ねの衣服名】。【目】(他)ねぎ。(女房詞)——かもん(空勤文)(名) 女官叙位の名目、叙位すべく、ただ名目のみを存しおく。——き(空木一名) 中の朽ちてうつるなりたる木。——ぐさ(空草一名) 【種】ねぎ。——はしら(空柱)(名) 古昔、雨たれを受くるためにたし柱中をくりぬきたるもの。——ぶね(空舟)(名) 大木をくりぬき、うつらして作りたる舟。まるきぶね。

うつぶ(鰱魚) <sup>せせ</sup>【名】(動)鰱魚類の魚、體形「うなぎ」の如く、鱗を被らず、全體黃褐色にして横紋あり、齒極めて鋭利、身長五尺に達す、近海の岩礁間に棲息し、肉は美味ならずれど、皮は髒製して美肉なる革を得べし。

うつぶ <sup>せせ</sup>【観】(空穂)(名) 箆を盛りに腰に帯がる用具、下方は筒の如くにして上方は空洞、筒の両邊に損するを防ぐため、上方



【ぼつう】

に毛皮を懸く、これを懸皮と稱す。——いちぢ【刺苺】(名) 【種】じくりこち。——から【朝蔓猪籠草】(名)

【種】猪籠草科の多年生草本、熱帯地方に産す、珍奇なる植物にして、瓶子形の葉を有し、瓶口に蓋ありて、瓶内に被汁を涵み、種々的小虫を誘ひては、温室植物として盛んに培養せらる。

——かひ <sup>せせ</sup>【朝貝】(名) (動) 前鰓類の貝、介殼は「かたつぶり」に似て帶黄褐色を呈し、細き螺旋の刻線を有す、長さ二寸許に達するものあり、我國東海及西南海に産す。——【朝草】(名) 瀬州夏枯草(名) 【種】唇形科の多年生草本、原野に自生す、莖高五六寸、葉は橢圓形にして對生、莖と共に毛茸を有す、夏秋の候花穂を抽き、其形初に似る、花は深紫色にして密集す。——つげ【朝附空穂】(名)

相撲の手、敵の體をいきほひつよく振りあげて投ぐこと。  
うつぼ <sup>せせ</sup>【鬱勃】(名) 【雲】の盛んにおこるさま。【勢力】の起これたまらるさま。【おもひ】の胸にみちふさがるさま。【意氣】の起こりがあるさま。

うづまき <sup>せせ</sup>【渦卷】(名) 【うづまき】。うづまき水流。【水流】のうづまき如き狀をなす形象。【菓子】の名、うどん粉に卵を和したるものを延べて渦巻、餅をつつみまきて輪切にしたるもの。——こもん【渦卷紋】(名) 渦卷の形を模倣したる小紋。——うづけ【渦卷漬】(名) 漬物の名、胡瓜(夕)の鹽漬に、縦に厚丁目を入れ、中子を去りて乾したるものをぐるぐる巻きて鹽と醗とに漬けたるもの。

うづま <sup>せせ</sup>【うづま】(自、か) 四、うづまをまく。うづま <sup>せせ</sup>【うづま】(自、か) 四、うづまをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。

うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。

うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。

うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。

うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。

うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。うづみ <sup>せせ</sup>【うづみ】(自、か) 四、うづみをまく。

うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。

うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。

うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。

うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。

うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。

うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。

うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。

うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。

うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。うづも <sup>せせ</sup>【うづも】(自、か) 二、物の中にかくれ掩はる。うづまる。



【うづ】

うつらうつら

の小葉より成る。花は白色にして、種子に溝紋あり、種子及嫩  
葉は食用に供せらる。――もく「**鶉木**(名) ②「**鶉**やく  
すぎ。鶉の羽毛の如き木目。――やく「**鶉焼**(名) 料  
理の名、食物をあぶらにていりつけ、褐色にしたもの。

うつらうつら(名) 副 ①よく念を入るさま。うつら  
②睡りを催すさま。うつらと。

うつり映(名) ①光又は影のうつるさま。②色と色との配  
うつり映(名) ①うつる影。②他よりのおくり物の器に、  
返贈のためいれてかへす品。③か「**移香**(名) 物にう  
つりて残る香。――かはり「**移紙**(名) うつりかは  
る紙。かふたい。へんせん。へんせん。へんせん。へんせん。  
かふたい。――かみ「**移紙**(名) 他よりのおくり物の  
器に、返贈のため入れてかへす紙。――き「**移病**(名) う  
つりやすき性質。うはき。――やまひ「**移病**(名) は  
やりやみ。でんせんびやう。――ゆく「**移行**(名) 自  
か(四) まだりうつる。かはりゆく。④か(は)る。か  
(は)りゆく。⑤及ぶ。延じく。⑥色づく。そまる。⑦過ぎゆく。

うつろ(名) ①色と色とよく出合ふ。②よく適照す。

うつろ(空)(名) うつほ。うろ。から。虚。――ふね「**空  
舟**(名) うつほ。うろ。から。虚。――す。變ぜしむ。かはらす。

うつろはす(ワタシ「移」(他、三四) うつろふやうに

うつろひつ(ワタシ「移」(名) うつろふと。――きく「**移病**(名) ①

うつろひ(ワタシ「移」(名) うつろふと。――きく「**移病**(名) ①

うつろ(自、三四) ①この光又は影かしたに現

はる。②色と色とよく出合ふ。③よく適照す。

うつろ(空)(名) うつほ。うろ。から。虚。――ふね「**空**

舟(名) うつほ。うろ。から。虚。――す。變ぜしむ。かはらす。

うつろはす(ワタシ「移」(他、三四) うつろふやうに

うつろひつ(ワタシ「移」(名) うつろふと。――きく「**移病**(名) ①

うつろひ(ワタシ「移」(名) うつろふと。――きく「**移病**(名) ①

うつろ(自、三四) ①この光又は影かしたに現

はる。②色と色とよく出合ふ。③よく適照す。

うつろ(空)(名) うつほ。うろ。から。虚。――ふね「**空**

舟(名) うつほ。うろ。から。虚。――す。變ぜしむ。かはらす。

うつろはす(ワタシ「移」(他、三四) うつろふやうに

うつろひつ(ワタシ「移」(名) うつろふと。――きく「**移病**(名) ①

うつろひ(ワタシ「移」(名) うつろふと。――きく「**移病**(名) ①

うつろ(自、三四) ①この光又は影かしたに現

うづみ

うづみ(踏居)(名) うづまりて居ると。登脚。  
うづみ(卵杖)(名) 古昔、正月上の卯の日に、六衛府より禁  
中に奉りしつゝ、おもに桃の木にて作り、五色の絲にて巻きし  
もの、邪氣を攘ふためといふ。

うづをばしら(空柱)(名) うつほばしらの轉。

うて(計手)(名) うて。――の「つかひカツ計手使

(名) (計手)にさしむる使者。

うて(腕)(名) ①肘と手頭との間。ただむき。②轉じ

て肩と手頭との間。③うてまへ。夜履。④ちから。腕力。

「立て」。⑤「理」偶力にて、二つの力の各作用線間の距離。

又天秤にて、支點より力の作用點までの距離。⑥うてまへ。ひ

びを地につけて腕をたて、掌を握りあひて互に押しあふ

ま。――かきり「**腕限**(名) うての力のかきり。うてま

へのかきり。――がね「**腕金**(名) 金屬製のうてぎ。――

ぎ「**腕木**(名) 一端を取付けて横に突出せしむ。其上の

物をささへしむる材。――きき「**腕利**(名) うてまへの

すぐれたるもの。――くび「**腕首**(名) てくび。たがき。

(手頭)。――ぐみ「**腕組**(名) 兩うてを腕のあたりに

て組みあはせると。――くらべ「**腕腕**(名) うてまへ又

はちからをくらべあふ。――こぎ「**腕扱**(名) 伎倆の特に

にかかへあぐると。――さき「**腕先**(名) 伎倆の特に

でたはらる。――すまふ「**腕相撲**(名) うておし。

――さらひ「**腕揃**(名) うてまへのすぐれたるもの

のそろひ居ると。――だて「**腕立**(名) ①

②ちからわざなどに腕をつかふと。③腕

力によりて人と争ふと。――だめし「**腕**

うてき

時計(名) 腕首に捲く革製又は金屬製の輪に、小形の時計  
を取附けたるもの。――ぬき「**腕貫**(名) うてを装ひ  
包む巾、工夫などの用ふるもの。②かひな(一)傾(む)る守袋  
の類。③うて。――ひき「**腕引**(名) 一種の遊戯、互  
にうてのひかがみに、一本の手錠などの端を挟みて、これを  
引きあふと。――ぶし「**腕節**(名) うての骨の関節。  
④うてぢから。――ぼね「**腕骨**(名) うての骨。⑤う  
てのちから。――まくり「**腕捲**(名) 腕を覆ふ著物の袖  
口をまき上ぐる。――まもり「**腕守**(名) うてにき  
なみ。わざまへ。――わ「**腕輪**(名) うての装  
飾にはむる金屬製の輪。うてぬき。――一本腰一本  
佛の守札を入れたるもの。――わ「**腕輪**(名) うての装  
飾にはむる金屬製の輪。うてぬき。――一本腰一本

に懸え(句) 自分に自信ある伎倆。――に懸(り)をか

ける(句) 十分に準備をなして勇み待つにいふ。――を鳴

らす(句) うてまへをあらはして名聲を博す。――まの

うてき「**雨滴**(名) あめのあづく。

うてな「**臺**(名) 四方を觀望するために建つる屋根なき高

うてなる。――他「(自、た下) ①氣をのまる。けおさる。②

うてる「**蒸**(他) ①ゆると。②

うてん「**雨天**(名) 雨の降るそら。あめふり。あまぞら。

――志ゆんえん「**雨天順延**(名) 集會などの當日の雨

天なる時、順期りに日をはずす。

うと「**烏兔**(名) (金屬と玉兔との義としつき。日月。

うと「**土當歸**(名) (種五加皮) 科の多年生草本。山中に自

生し、又、園圃に栽培せらる。莖の高き四五尺、莖は通常二回

羽狀複葉をなし、小葉は長卵形尖頭にして細鋸齒を有す、夏

日莖頭又は葉腋に花莖を抽き、複繖花を著け、白色花を

綴る。莖葉を採り食用に供す。

うと「**獨活**(名) (種) 五加皮科。――の「**大木**(句) 身體長

大なれど、役に立たざるにいふ。



【いけとてう】





うなみ—うぬほ

うなみ(卯浜)(名) 卯月の頃に海上にたつ浪。

うなめ(畦目)(名) 鍬の袖(草摺)など、多く啄木の絲を用

うなり(唸)(名) ろうなとやひとや。こくや。一ひて施せる師。

うなり(唸)(名) うなるとやうめくと。①(音) 理高低

浮沈の音響、即ち、音波が濃厚なる部と稀薄なる部と粗齟交

錯して、耳に高低浮沈ある音の感覺を起すもの。疎の。

②(風)につけて風にうなるする具、多くは鯉の鱗又は鱗の皮

を薄くして、小さき弓に掛けける。(風箏)等。——ごま(皮

獨樂)(名) 回轉するとき唸聲を發する旋盤の獨樂。——

ごま(唸聲)(名) うなる聲。うめきごま。

うなむく(呻吟)(名) 高低浮沈ある音響を發す。

うなむく(呻吟)(名) ①(音) 理高低

うなむく(呻吟)(名) うなむくとやひとや。こくや。一ひて施せる師。

うなむく(呻吟)(名) うなむくとやうめくと。①(音) 理高低

うなむく(呻吟)(名) 浮沈の音響、即ち、音波が濃厚なる部と稀薄なる部と粗齟交

錯して、耳に高低浮沈ある音の感覺を起すもの。疎の。

②(風)につけて風にうなるする具、多くは鯉の鱗又は鱗の皮

を薄くして、小さき弓に掛けける。(風箏)等。——ごま(皮

獨樂)(名) 回轉するとき唸聲を發する旋盤の獨樂。——

ごま(唸聲)(名) うなる聲。うめきごま。

うなむく(呻吟)(名) 高低浮沈ある音響を發す。

うなむく(呻吟)(名) ①(音) 理高低

うなむく(呻吟)(名) うなむくとやひとや。こくや。一ひて施せる師。

うなむく(呻吟)(名) うなむくとやうめくと。①(音) 理高低

うなむく(呻吟)(名) 浮沈の音響、即ち、音波が濃厚なる部と稀薄なる部と粗齟交

錯して、耳に高低浮沈ある音の感覺を起すもの。疎の。

②(風)につけて風にうなるする具、多くは鯉の鱗又は鱗の皮

を薄くして、小さき弓に掛けける。(風箏)等。——ごま(皮

獨樂)(名) 回轉するとき唸聲を發する旋盤の獨樂。——

ごま(唸聲)(名) うなる聲。うめきごま。

うぬほ—うのは

うぬほれる(自惚)(自) うぬぼるの訛。

うぬほれる(自惚)(自) 田畑の中に、土を長くつづけて幾筋

ももりた、作物を植ふ所。②(波)のうねり。——う

ね(歌)(名、副) 高低屈曲のさま。③(波)のよせくるさま

ま。——おり(歌)(名) 雜物の名、畑のうねの如く凸に

絲をあらはして織りたるもの。羽後國秋田の名産なり。

うねくね(名) うねくねのさま。②(交錯)して凸凹をなすさま。

うねくね(名) ①(自) うねくねの訛。

うねくね(名) ②(歌)(名) 綿を薄く入れたる布を、腰筋も粗く

糸を浮かべて、畑のうねの如く縫ひ刺す。——たび(歌

刺足袋)(名) うねくねにしたる足袋。

うねだて(歌)(名) 田畑にうねを作ると。

うねべ(采女)(名) 古昔、後宮にて御膳の事に預かりし女

官、郡の少領以上の女の容貌端正なる者より采(下)られたり

うねめ(采女)(名) 古昔、宮内省に屬し采女官の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

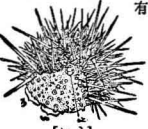
のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢

のつかさ(采女司)(名) 古昔、宮内省に屬し采女の檢



【うに】

うのは—うはい

煮たもの。——おどし(卵花絨)(名) 鍬の鍬毛の名、

上は白絲、下は朋黄又は藍色の絲にて織られたるもの。——

がき(卵花垣)(名) 卵の花のさきと織られたるいけがき。

うたし(卵花垣)(名) 春雨と梅雨との間にふりつ

づく雨。——ぐもり(卵花曇)(名) 卵の花のさく頃の

空ぐもり。——づき(卵花月)(名) 陰曆四月の異稱。

うづき(卵花月)(名) 卵の花の白くさきみち

るさまを、月の影になぞらへていふ。——づくよ(卵花月

夜)(名) 前條に同じ。——なます(卵花朧)(名) 料理

の名、上に湯びきの魚肉又はおろし大根をふりかけたるぬた

なます。——ひらめ(卵花比目魚)(名) 料理の名、燻

でたる比目魚の肉を細かくはれたる屋根。——めし(卵

花飯)(名) 豆腐のからに鶏卵などを加へ、味附して飯の上

に載せたもの。——やき(卵花焼)(名) 料理の名、餅

を焼き餅をかけて、豆腐のからをふりかけたもの。

うのはら(海原)(名) うなばら。

うのふえ(竿笛)(名) う(字)。

うのみ(鶺鴒)(名) 鶺鴒の魚を呑む如く、たやすく呑み込

むと、まるの。②意味をよく解せず、早合點に呑み込むと。

うのめがへし(目返)(名) 輪の魚をあまり、鷹の鳥

をさがす如く、人の熱心に物をさがし出すとする目つき。

うのめ(めお)う(鶺鴒目返)(名) 輪の魚をあまり、鷹の鳥

をさがす如く、人の熱心に物をさがし出すとする目つき。

うのめ(めお)う(鶺鴒目返)(名) 輪の魚をあまり、鷹の鳥

をさがす如く、人の熱心に物をさがし出すとする目つき。

うのめ(めお)う(鶺鴒目返)(名) 輪の魚をあまり、鷹の鳥

をさがす如く、人の熱心に物をさがし出すとする目つき。

うのめ(めお)う(鶺鴒目返)(名) 輪の魚をあまり、鷹の鳥

をさがす如く、人の熱心に物をさがし出すとする目つき。

うのめ(めお)う(鶺鴒目返)(名) 輪の魚をあまり、鷹の鳥

備べたるもの、染料又は藥料に供せらる。

うばい(優婆塞)(名)〔梵語〕(優婆塞)〔佛〕佛道に入りたる在家の人。優婆塞の對(僧)比丘女。

うはようす(女)〔上白〕僧の上部の石。「うかうか。

うはうは(女)〔上白〕名。僧の上部の石。「うかうか。

うはえ(女)〔上繪〕名。布帛などの染色の繪模様の上を、更に繪具にて書き添へたるもの。半襟の「」。——かき(上繪書)(名) 上繪を業とする家又は人。

うはえつ(女)〔上繪附〕名。陶磁器に繪(絵)をかけて燻きたる上に、更に繪附して燻くと。

うはおそ(女)〔上覆〕名。衣服の上に即(つ)へて著る小うは。おび(女)〔上帯〕名。衣服の外表にあむる帯。〔鐵の上にあむる帶。〕〔眞珠の上よりむすぶ帶。〕

うはおほ(女)〔上覆〕名。物の上にかけて、其物をおほふ。うはつ(女)〔外被。〕

うはがき(女)〔上書〕名。書状はこ、書物などの外面に書うは。がけ(女)〔上掛〕名。うはおほひ。うは。ばり。

うはがさ(女)〔上襲〕名。かさねの上に着るもの。うはぎ。〔うはま(一)。〕

うはがすみ(女)〔上霞〕名。薄くたなびきおほひたるかすうは。がね(女)〔上蓋〕名。〔植〕うはがね。

うはがね(女)〔杜荊山〕名。〔植〕紫金牛(紫)科の常緑灌木。暖地の山麓樹下に生ず。高さ三四尺、葉は互生して、葉柄を具し、長橢圓形にして先端尖り、深緑色を呈す。秋、葉腋に花枝を抽出し、細花を總狀に綴る。花冠は筒状にして白色なり、球状果を結ぶ。つせんりや。

うはか(女)〔上皮〕名。上部にある皮。あらかは。〔うはか(一)。〕

うはか(女)〔上側〕名。へうめん。うはつら。

うはがひ(女)〔上交〕名。うはま(一)。

うはがひ(女)〔動舞藝類の具〕介殼は彫れて厚く橢圓形、外面暗褐色にして内面白し、東北の海に産し、淡水の注入する泥沙に棲息す、肉は生のまま又は乾して食す。

うはが(女)〔上交〕名。うはま(一)。

うはい—うはか

うはがみ(女)〔上紙〕名。書冊などのへうま。

うはき(女)〔浮氣〕名。心のうつりやすき。うかれやすき。うはき(女)〔浮氣酒〕名。うかれて飲む酒。——あう(女)〔浮氣性〕名。うはきなる性質。——つばい(女)〔浮氣多〕形。物事にあきやすし。——もの〔浮氣者〕(名) 心のうつりやすき人。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはき(女)〔上著〕名。表面に著る服(表衣)。

うはか—うはき

過ぎたれど、色香尚ほ残れる女。

うはさし(女)〔上差〕名。古昔「えびら」の左方にさしし二筋の矢、鑄鏡(鑄)又は履服(履)なるを規定とせり。——や

〔上差矢〕(名) うはさし。

うはさし(女)〔上刺〕名。太き縁にて布帛の地を縦横に刺縫する。さしこ。〔直垂(直)・狩衣(狩)の袖などに九指、組紐にてあらく刺し縫へるもの。——ぶくろ

〔上刺袋〕(名) 古昔、人の上で行くとき、衣服其他の器具を入れて從者にかつせし袋、其四隅及周邊などに平紐にて上刺をなししよりいふ。

うはさ(女)〔姥鮫〕名。〔動〕板鰓類の魚。鰓孔甚だ長く、齒は小さく圓錐形にして數多し、體色稍赤く、身長三十尺に及ぶものあり。海洋に横行し、四五月頃淺海に來る、他の魚群を驅ひ、時には人類を犯す。

うはさ(女)〔姥鮫〕名。〔動〕鵲の一種、鵲としては大形にして、普通に見るものは上部蒼灰色にして下面白く、胸邊に暗黒點あり、嘴黒し、春秋二季我國に渡來す。

うはさ(女)〔上液〕(名) うはさ。うはさして物事に注意のたらしめ。

うはさ(女)〔上敷〕(名) うはさ。うはさして物事に注意のたらしめ。

うはさ(女)〔上澄〕(名) 流動物の上方のすみたる部分。うはさする(女)〔上擦〕(自、ら)心ががるなり。くやうなり。調子が「」。〔書〕のみ眞實らしく心浮澤なくうはさ(女)〔優婆塞〕(名) 〔梵語〕(優婆塞)〔佛〕俗家において僧門に入りたる男子、優婆塞の對(僧)比丘女。

うはたま(鳥羽玉)(名) 菓子の名。さつひに餌をつつみて砂糖をかけたもの。——の(鳥羽玉之)(枕)ぬばたま

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

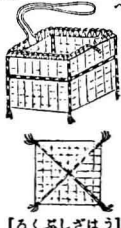
うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはち(女)〔上千鳥〕(名) 〔動〕みやこたつてう(る)。「の」

うはさ—うはち



【ろくぶしざは】

うはあーうはに

質薄なると。言巧にして賢なと。

うはちよみ<sup>ウチヨミ</sup>「上調子」(名) うはてうま。

うはつち<sup>ウハツチ</sup>「右幕下」(名) 右近衛大将の敬称。

うはつと<sup>ウハツト</sup>「上附」(目) 四。うはうはす。

うはつそ<sup>ウハツソ</sup>「有髮僧」(名) 髻剃髪せざる僧侶。

うはつつみ<sup>ウハツツミ</sup>「上包」(名) 物の上を包むおほひ。

うはつり<sup>ウハツリ</sup>「上服」(名) 衣服の汚るゝを防ぐために、其上に被ひ着る表衣。

うはづみ<sup>ウハヅミ</sup>「上漬」(名) 上部に漬む荷物。

うはつち<sup>ウハツチ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはつら<sup>ウハツラ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはて<sup>ウハテ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。

うはてり<sup>ウハテリ</sup>「上面」(名) うはつら。



【ちうりなはう】

うはぬーうはみ

うはぬり<sup>ウハヌリ</sup>「上塗」(名) 中ぬりしたる壁などの上に土をぬると。

うはね<sup>ウハネ</sup>「上直」(名) 直段のあがりたること。

うはのそら<sup>ウハノソラ</sup>「上空」(名) 天の上方。

うば<sup>ウバ</sup>のたまも「烏羽玉藻」(名) つやうるはしき黒髪。

うはのり<sup>ウハノリ</sup>「上乗」(名) 船積したる荷につき添ひてこれを守り、且船取引の委任を受くこと。又、其人。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはは<sup>ウハハ</sup>「上端」(名) 物の上部。

うはみーうひ

葉寄木、山野に自生す、幹は高さ三四丈に達す、樹皮は暗褐色にして厚し、葉は橢圓形にして先端尖り、櫛の葉に類す、五月頃、枝頭に花枝を抽く、總状花を著け、小白花積簇す、花後に豆粒大の核果を結ぶ、材は器用に供せらる。

うはみそ<sup>ウハミソ</sup>「名」(種) うはみそぐら。

うはみづ<sup>ウハミヅ</sup>「上水」(名) うはみづの水。

うはむき<sup>ウハムキ</sup>「上向」(名) 上に向かひたること。あをむき。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

うはむし<sup>ウハムシ</sup>「上層」(名) 敷きて寝るむし。

と。「若武者の上」。一「だち」初立(名) うひだつと。

一「だつち」初立(自た四) 始めて立つ。一「た

び」初旅(名) 始めての旅行。はつた。一「まご」初

孫(名) はじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

問を修めはじむるのまご。一「まなび」初學(名) 學

神に参詣すると。宮登。

うぶぞり「産刺」(名) 生後七日目に産髪を刺ると。

うぶち「産血」(名) 婦人の胎兒を生むときに吐づる血。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

うぶね「鵜舟」(名) うかひぶね。

べし「けしき」宜宣(形二) こともらし。一「憲貫

めきてあり。

うへ「さす」上越(自、三四) こゆ。まさる。

うへ「さま」上様(名) 主上を申し奉る語。一「將軍を

尊びていひし尊稱。

うへ「た」上下一(名) うへとあたと。一「うへとあた

との例訓すると。一「貴賤。一「朝野。官民。

うへ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う

へ「た」上田(名) 馬き田。住吉の準の二に。一「う



【まかはのへう】

うひうひうふす

うせぞうへ

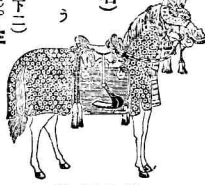
うへこーうま



うまぜみ〔馬婢〕一名「駒くまぜみ。  
 うまぜり〔馬芥〕一名「蘆やませり(い)。  
 うまぜひり〔馬添〕一名「馬に乗りたる人のともと。馬のくちとり。うまづき。馬丁。  
 うまたし〔馬出〕一名「城門外に人馬をそろふる場所として、更に「馬をなす所(即城)。  
 うまたて〔馬立〕一名「うまつなぎ(閑)。  
 うまたらひり〔馬盥〕一名「ばだらひ。  
 うまつぎ〔馬附〕一名「うまぞひ。  
 うまつぎ〔馬繼〕一名「道中に馬をつぎかふる所。うまや。  
 うまつなぎ〔馬繫〕一名「馬をつなぐもの。うまたて。――  
 うまつら〔馬面〕一名「馬を繋ぐところ。  
 うまつら〔馬留〕一名「うまたは。  
 うまつら〔馬取〕一名「馬の口取。  
 うまに〔甘煮〕一名「料理の名。肉と野菜類とを味噌味噌で煮油麩節などにて風味よく煮つけたるもの。  
 うまのあし〔馬脚〕一名「下等の役者を嘲りていふ稱。  
 うまのあしがた〔毛草〕一名「粗きんぼううげ。  
 うまのかみ〔石馬頭〕一名「古昔、右馬寮の長官。  
 うまのきばね〔馬牙骨〕一名「馬の下あて(食槽)。  
 うまのくぼがひり〔馬陰尻〕一名「動こやすがひ。  
 うまのすずき〔馬尾〕一名「馬の尾毛。  
 うまのすずき〔馬鈴草、馬兜鈴〕一名「種」馬兜鈴科の多年生草本、山野に自生し、他物に纏繞して上昇す。葉は鈍頭長心形にして全縁、黒色を呈す。莖葉共に、種の悪臭あり。夏日、莖葉に不整齊なる紫條色の筒状花を單生し、萼を結ぶ。馬の風色又は茶色にして、これを腹中に食せれば温状の模様あり。(ヘイサラベハラ。せきふん。酢答)。  
 うまのつかさ〔馬寮〕一名「古昔、馬の飼養其他馬に關係したる事を掌りしつかさ。左右兩寮あり。ぬれう。  
 うまのつなみ〔馬爪〕一名「ばづ。  
 うまのつなみ〔餞別〕一名「古昔、旅に行く人を送ると

て、道祖神を祀りて、道中の無事を祈りしと、其人の乗れる馬の尻の彼方に付けておくりしよりいふ。はなむけ。  
 うまのほね〔馬骨〕一名「素姓不分明なる人を嘲りていふ稱。とぬね。――に風句。馬が耳に風を受けて感ぜざるを、人の意見に少しも感ぜざるに譬へん。――に念佛(句)馬が念佛を聞きて更に感ぜざるを、人の意見に少しも感ぜざるに譬へん。  
 うまのり〔馬乗〕一名「馬に乗ると。又、其人。――馬に乗る。――にたくみなる者。――馬に乗る如きさまに、物にまたがること。ひめはじめ。――ばかり。馬乗羽織(一名)馬に乗るとき着る羽織多くはうしろをぶさにしたるもの。――  
 うまのむすび〔馬尾結〕一名「婦人の髪のかつひ方。背後に垂りて馬の尾の如く結びたるもの。  
 うまは〔馬場〕一名「馬に乗る場所。ばば。――良馬の出づる土地。奥州は日本の「。――  
 うまはすのけ〔馬刺〕一名「他、さ四)ふやす。  
 うまはたけ〔馬刺〕一名「うまぐし。  
 うまはへみ〔馬蠅〕一名「動」蠅の一種。七八月頃、牧場を往來して馬匹に近づき、其頸部、前肢等馬の舐むるに遠する箇所を産卵して孵化す。其産卵に際し、馬の皮膚を刺すを以て、馬は去きこれを舐むむ、かくて幼蟲はいつか馬の舌によりて口に入り胃に達し、胃内に於て發育し、並と共に排泄せられ後羽化す。  
 うまひき〔馬引〕一名「種(自、ら四)ふえてひろがる。はん  
 うまひき〔馬引〕一名「うまた。まど。  
 うまひと〔貴人〕一名「徳高き人。位ある人。身分いやしから  
 うまびと〔馬人〕一名「うまひき。「ざる人(君子、婦紳)。  
 うまびる〔馬蛙〕一名「動」蛙の一種。池沼・溪流等に産す。體龐大にして、見惡感を起こさしむれと、動物の血液を吸ふものにあらず。植物質を食として生活す。

うまふか〔馬防〕一名「種(他、は四)ふやす。多くす。  
 うまふか〔馬防〕一名「かき。さく。やらい。  
 うまふね〔馬槽〕一名「種(他)を入る桶。かひをけ。――巨大なる桶。おほをけ。  
 うまふき〔馬踏〕一名「種(こ)ばう。  
 うまふん〔馬偏〕一名「漢字の偏の名。駒馳などの左方にあるまはなり。――馬廻(一名)昔時、武家にて、主君の馬のまはりにつき添ひし武士。――くみ。馬廻組(一名)馬廻となる資格ある武士の階級。  
 うまや〔厩馬屋〕一名「馬を飼ひ置く小屋。――どえ。厩肥(一名)農肥料の一種。家畜を飼ひ置く小屋にたまりたる糞尿と草葉との相混じたるもの。多くは堆積し腐熟せしめて肥料に使用す。――のべつとう。厩別當(一名)厩馬の飼養を掌りし主任。――ぶきよう。厩奉行(一名)鎌倉・室町幕府の職名。厩馬の飼養を掌り兼て將軍の他行に屬從せしもの。  
 うまや〔驛〕一名「旅客の便利をはかり、馬又は人足などを備へ置く。その求めに應じ、つぎたてをなしし所。まぐさ。まぐさ。――のせき。驛長(一名)宿驛の長。  
 うまゆみ〔馬弓〕一名「馬に乗りて弓を射るときまき。  
 うまよるひ〔馬弓〕一名「金鎖の」。――  
 うまよりやう〔右馬寮〕一名「うまのつかさ」の條を見よ。  
 うまる〔馬埋〕一名「自、ら四)うまる。うづもる。――生(自、ら下二)胎兒其母の腹より出生す。(誕)生  
 うまれもつかぬ〔句〕天性にあらざるにいふ。生まれられた後のはやめ薬(句)時機におくれて用をなさざる物事にいふ。生まれぬさきの機糧(米)さため(句)物事の活だ早計なるにいふ。



【ひろまう】

うまぜーうまほ

うまのーうまひ

うまふーうまる

一七





らみぢ〔海路〕一名 海上の船の往來道よなせ。

らみぢようちようらう〔海蝶〕一名「動」とびのうを。

らみつかれる執事一名「倦疲〔自ら下二〕くたじればはつ。

らみつき〔産月〕一名 妊娠してより約十箇月目の月即ち胎兒一定の發達を遂げやがて産出すべき當月。りんげつらみつき（待産月）一名「生附」(他、か下二)生みて物に附著せしむ。生附(他)「うみつく」の訛。

らみつける〔生附〕一名「うみつく」の訛。

らみつち〔海路〕一名「うみつく」の訛。

らみつばめ〔海燕〕一名「動」水禽類の海鳥形鳥大にして翼は長く、尾は短かれと二分叉するを常とし、嘴は末端鈎状をなす。軟ね暗黒色の羽毛にして、趾間に蹼を具し、海面を游泳し、數種あり。

らみづら〔海面〕一名 うみのおも、かいめん。

らみで〔海手〕一名 海の方。

らみどまようがめ〔名〕「動」かぶとがに。

らみどまようがめ〔名〕「動」かぶとがに。

らみながし〔産流〕一名「動」りうざん。生みたるのみにて、爾後其兒の世話をなさせんと。

らみなり〔海鳴〕一名 海上に起るる一種の音響、暴風雨來の兆兆といふ。

らみのおきな〔海翁〕一名「動」えび。「世の人は」といふ

らみのおや〔生親〕一名「動」えび。「世の人は」といふ

り育ての親〔句〕おのれを生みたる親の恩よりも、育てられたる親の恩は重しといふ。

らみのち〔生父〕一名 おのれが生みたる子。

らみのち〔生父〕一名 おのれが生みたる子。

らみののはは〔生母〕一名 おのれを生みたる父。

らみのふすま〔海瓮〕一名 海のくもりたるさまを、瓮に

らみのみやこ〔海都〕一名 詭語。

らみはた〔海端〕一名 うみへ。海畔。

らみはと〔海嶋〕一名「動」水禽類の海鳥形状、羽色共に鶺鴒に類して稍小形、我國にては千島沿岸に見る。

らみひば〔海榆葉〕一名「動」ヒドヲ類の動物、海草の生せる岩石などに附着して生活す。體態を成し、骨格枝條を分ち、恰も樹葉の狀し、紅紫に密生す。體は普通にして紅紫色にして、石灰質より成り、羽狀又は覆羽狀に分ち。

らみひろく〔生廣〕一名「動」ヒドヲ類の動物、海草の生せる岩石などに附着して生活す。體態を成し、骨格枝條を分ち、恰も樹葉の狀し、紅紫に密生す。體は普通にして紅紫色にして、石灰質より成り、羽狀又は覆羽狀に分ち。

らみひるく〔生廣〕一名「動」ヒドヲ類の動物、海草の生せる岩石などに附着して生活す。體態を成し、骨格枝條を分ち、恰も樹葉の狀し、紅紫に密生す。體は普通にして紅紫色にして、石灰質より成り、羽狀又は覆羽狀に分ち。

らみふね〔海船〕一名 海上の航行に使用する船。

らみへちま〔海邊〕一名 海のほとり。うみはた。

らみへちま〔海邊〕一名 海のほとり。うみはた。

らみへび〔海蛇〕一名「動」蛇類の一、頭部短く尾部側面に

らみへび〔海蛇〕一名「動」蛇類の一、頭部短く尾部側面に

らみぼりず〔海坊主〕一名「動」さうがくばう。宗

らみぼりず〔海坊主〕一名「動」さうがくばう。宗

らみはたる〔海蟹〕一名「動」切甲類の具、海中に棲息す

らみはたる〔海蟹〕一名「動」切甲類の具、海中に棲息す

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

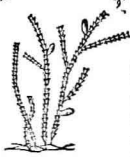
らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除

らみほつす〔海拂子〕一名「動」はらひ。掃除



【(-)ばひみう】



【ちへみう】



【(二)つまみう】

海邊にある松。〔動〕珊瑚類の一、其角質骨格は黒色にして樹枝状をなす。裝飾具に製せらる。くろざんぞ。

らみやなぎ〔海柳〕一名「植」あまほ。

らみゆり〔海百合〕一名「動」棘皮動物の一、長き有面の柄

らみわた〔海綿〕一名「動」かきりん。一に鳥足（ウミツツ）と稱す。

らみを〔績麻〕一名 うみたる麻。

らみぞ〔海類〕一名「動」あしか。

らみ〔有無〕一名「動」あしか。

〔佛〕來世を有と無と無と無と。——の見〔句〕佛來世の有又は無に執著する邪見、常見と斷見と。——まいはせず〔句〕他を押つけてむりやりに。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

らむびがめ〔倦〕一名「動」たいくつす。いやになる。あく。

うめーうめあ

目表は白、裏は緑芳なるもの。●紋所の名、「うめ」の花の形をうつしたるもの種類多し。――うづき「梅楊枝」名「梅」名。うめの花のかり。「がさね」「梅蟹」名「かざ」の色目表は過ぎ紅、裏は紅梅なるもの。「がし」梅返(名)元禄頃に行はれし染。紅梅色に染む。主に羽織の裏に用ひしもの。――うづき「梅酢」「梅葉」(名)梅の實を鹽漬したる汁、多くは蜜蝋の葉を加ふ、編研其他金屬細工に使用す。――ぞめ「梅染」(名)「かまね」の色目、表は白く、裏は過ぎ緑芳なるもの。●染色の色、紅梅の樹皮の汁にて染めたる色、茶色に似る。――うづき「梅漬」(名)梅の實を鹽漬し、アルコール其他種種の材料に漬けたるもの。梅干を主とす。●蜜蝋にて色附したるうづきに漬けたる野菜も。――うづき「梅壺」(名)古昔、藥中の五合の一、即ち祇善舎の稱。「梅漬のつぼ」のあめ「梅雨」(名)さみだれ。つゆ。――のらうづき「梅色月」(名)陰曆五月の異稱。――のせうく「梅節句」(名)昭和七年に始まる。紀元節即ち建國祭の當日。――はたけ「梅圃」(名)梅をうゑたる圃。うめぞの。――はつづき「梅初月」(名)陰曆十二月の異稱。――びんぼろ「梅醬梅酥」(名)一種の食品、梅の實にて製したるひんぼろ、梅干の肉をよくすり、砂糖を溶けて味をつけたるもの。――みづき「梅見月」(名)梅を見るべき月の體。陰曆二月の異稱。――もどき「梅嶽」「落箱紅」(名)「留」(名)「留」の料の紫葉灌木、山林に自生し、又庭園に栽培せる、高さ三三尺許、嫩枝及葉柄に細毛を生ず、葉は卵形又は卵狀披針形にて尖頭邊緣に細鋸齒を有し、下面に網脈突起す、五六月頃、葉腋に淡紫色の小花旗生ず、花後に球形の果實を結ぶ、果實は冬に近づくと從つて赤色に變じ、美觀を呈す。――ようかん「梅羊羹」(名)梅干の肉を加へて製したる羊羹。――うめあはせ「埋合」(他、さ下二)「これとかれとを平均す。●つづきのふ。――うめあはせ「埋合」(名)うめあはすと。

うめあーうめほ

うめあはせる「埋合」(他)「うめあはすと」の説。うめあはせ「梅枝」(名)梅の咲きたる枝。――てんぷ「梅枝田麩」(名)田麩の一種、刺鶴を酒と醤油にて煮て、これに山椒の粉をふりかけたもの。うめき「埋木」(名)物の間隙に木をうめこむこと。――ざい「埋木細工」(名)埋木にて人物花鳥等いろいろの形をこしらへ出す細工。うめよきせき。うめき「呻吟」(名)うめよと。――ぞめ「呻吟聲」(名)うめよと。――うめよと「呻吟」(自、か四)「うなる。わめく。●さげうめよと」埋木(名)登り又は箱などの内に貯藏する個室。●埋たる部分又はあきたる所を充(ぎ)さんためたもの。うめたつ「埋立」(他、た下二)うめたてをなす。うめたつ「埋立」(名)埋地のよふと。●河海を埋めて陸地となす。――こうち「埋立工事」(名)河海を埋めて陸地となす工事。――あんち「埋立新地」(名)うめたてによりて出来たる場所。――ち「埋立地」(名)うめたてて出来たる土地。うめたて「埋立」(他)「うめたつ」と説。「下等遊女」うめたて「埋立」(名)吉原にありしうめたて。――埋合(名)ふせとひ。うづみび(水置)うめなふ「埋合」(他、は四)うめなふ。うめは「梅鉢」(名)紋所の名、單瓣の梅花を、正面より見たる形のもの。――そうけ「梅鉢草」(名)「留」虎耳草(名)科の多年生草本、山野の陽地に生ず、葉は卵形にして脚部は心臓形をなし、長き葉柄を具す、夏、葉間に莖を抽きて五至六寸、中間に莖を擁する一葉を生じ、莖頭に一花を開く、花は白色五瓣にして梅花に似る。――も「梅鉢藻」(名)「留」はひく。うめはい「梅干」(名)漬物の名、梅の實を鹽に数日つけおき、取り出して數日間日にさらし、後更に蜜蝋の葉を加へたる梅酢に漬けたるもの(梅梅)。――うめぼしあめ。――あめ「梅干餡」(名)菓子名、梅酢を混ぜて製したる有

うめみーうゆ

平糖。――おやち「梅干爺」(名)皮膚にまわりたる老父。――ばほ「梅干婆」(名)皮膚にあわりたる老婦。うめみぞ「埋溝」(名)うめとひ。うめる「埋」(他)「うめ」の説。うも(名)「埋」も。うも「埋」(名)鼻のはねと鬚の毛と。●鳥のはなも埋(名)うもと。――うづき「埋草」(名)物の下に生じたる草。●世に見捨てられたるもの。――み「埋身」(名)世に見捨てられたる身上。おちぶれたる境界。――みづ「埋水」(名)草木のかけにかかれたる水。――る「埋井」(名)あはれてうづみも埋せられたる水と。うもれき「埋木」(名)樹木の水底又は土中などに永くうづもれて、硝化石の如くなるもの、黒褐色を呈して水理明かなり。●世に捨てられて顧るものなき境。――ざい「埋木細工」(名)埋木を細工して各種の器具をつくりたるもの、頗る雅致あり、仙臺地方の名産。――の「埋木之枕」(枕)あらはるまじ。ゑたに短する枕詞。――に「花咲く(句)不運の身の意外なる出世開運に際合するに譬へいふ。うもん「有紋」(名)紋ある衣服。●儀式正しき能樂。うも「有文」(名)俳諧にて、言外に意味ある句。うや「禮」(名)や。禮儀(敬)。うや「雨夜」(名)あめふよる。うやうや「うやうやしく」(恭)形(二)うやまふ狀にてあり。つしまま(名)うやうやし(名)うやうやし。うやく「烏藥」(名)一種の藥、色は黒く、特異の臭氣あり。うやなし「禮」(名)禮儀(無)形(二)無作法なり。れいきなし。うやまひ「禮」(名)うやまふ。うやまふ「埋合」(名)他、は四とひてややを置く。つしまみてつかふ。そんけいす。うやむや「有耶無耶」(名)あはれるの分明ならざるさま。うゆ「飢」(自)「うづ」の説。

うゆ(植)他「うう」の語。

うゆら(馬有)一名(鳥の)んか有らんの(獲) 羽羽の存在せざる。火災にて皆無となる。——に歸す(句) あとかたくななるほろぼ。

うよ(雨餘)一名 雨のはれたる後、あまがかり。

うよ(紆餘)一名 ながりくねると。まはりどほきと。露骨にものせざる。——きよくせつ(紆餘曲折) ながりて、直接ならざる。

うよ(有餘)一名(佛)尚ほありありて、究竟に至らざる。——ねん(有餘涅槃)一名(佛)阿羅漢となりて既に煩惱を断じたと、尚ほ有餘の肉身を放棄し得ず、未だ灰身滅智に至らざる。

うよく(羽翼)一名 羽とつばさ。たすけ。輔佐。

うよく(石翼)一名 中軍の右にある軍隊。社協調縦。

うら(裏)一名 おもての對うち。なか。ないが。りめん。うらしる。はいご。山のうらうら。うらはら。衣の内面につくる布帛。一の定理の假説及終結を否定して得たる定理、即ち、元の定理の逆なる對偶なり、甲が乙なれば、丙は丁なりといふに對して、甲が乙ならざれば、丙は丁ならずといふが如きこれなり、元の定理は眞なれど、裏は一般に眞理ならず。一の裏行(句) 敵の意思外に出づ。——をか(句) 物のうらまで貪きとほす。敵の意思外に出でて機先を制す。——をか(句) 同一なる事をかさねてなす。同じ遊女は二度招く。

うら(末)一名 遊女は二度招く。

うら(浦)一名 海又は湖などの彎曲して陸地に入りこみたる部分。うみへ。海邊。

うら(占)一名 ところの中。ないまん。

うら(心)一名 物の形又はまろしなどに依りて、未來の吉凶を判断する。うらなひ。

ウラー(感)「ロシア」語「[ロシヤ]」にて、物語を説するに呼ぶ語我國の萬歳といふに同じ。

うゆーうら

うらぬ(浦遊)一名 浦にて魚貝など採りてたのしむ。はまへのあそび。

うらぬ(裏合せ)一名 浦と浦とあふと。井。つとになる。心の合ふと。

うらいた(裏板)一名 やねうらに張り附けたる板。天。うらうち(裏打)一名 裏をつけたる直垂。物の裏面に、他の薄きものをはりつくる。うらつけ。

うらう(が)ひ(裏湯貝)一名 前脚類の貝、大さ一寸許、底にうづの形状をなす細紋あり。

うらう(裏表)一名 浦らとおもてと。表裏を異にする。うらなひ。はんたい。

うらう(裏梅)一名 紋所の名、梅花を裏面より見たる形。うらうら(裏剛)のとか。はがらが。うららか。

うらうら(浦浦)のとか。到る所の浦。

うらえり(裏襟)一名 著物の襟の裏に縫ひつくるきれ。

うらおく(裏衽)一名 著物の衽の裏にするきれ。

うらおも(裏表)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらおも(裏)一名 浦らうらへ。

うらぬーうらか

うらか(裏袂)一名(目、か)四。矢中りて、甲冑の裏につきとほす。裏の裏の反對に出づ。

うらが(裏屋)一名 うらだな。

うらが(心)他(目、か)四。心をきたたしむ。慰む。

うらか(浦風)一名 浦に吹く風、海濱にたつかぜ。

うらか(裏方)一名 貴人の内方。御簾中。

うらか(占象)一名 占にあらはれたる形象、吉凶を判断するもとなる。

うらが(浦賤)一名 海邊に住むいやしき貧者。

うらが(裏曲)一名 心中にてかなし。

うらが(裏鐵)一名 物の裏面に打ち附くる鐵板。

うらが(裏返)一名 うらがへすと。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらが(裏返)一名 裏をおもてにする。うらなす。ひぐりかへす。

うらくーうらし

うらくく(うらくく)楽(自、か下)愉快きはまる。興(自)に入り我を忘る。うきたつ。

うらくく(うらくく)裏口(名) うしろの出入口。背戸。

うらくく(うらくく)裏崩(名) 戰場にて、後陣のさわぎ亂るゝと。

うらくく(うらくく)心美(形、二) うるはし。

うらくく(うらくく)有樂流(名) 茶道の一流。織田有樂齋長益を祖とし、千利休より分派せしもの。

うらくく(うらくく)裏甲(名) 軒附下の化粧板。

うらくく(うらくく)心戀(形、二) 心のうちにて戀らうと云ふ。心戀(他、は上) 心のうちにて戀らふ。

うらくく(うらくく)浦越(名) 浦を越すと。浦より陸へふきあ

うらくく(うらくく)裏漉(名) 船などの如き物を、水漉器より漉

うらくく(うらくく)裏腰(名) 袴の腰紙の裏に附く布。

うらくく(うらくく)裏聲(名) こゝろに低くうたふ聲。

うらくく(うらくく)裏彩色(名) 極彩色の繪にて、其繪地の裏面より彩色を施すと。

うらくく(うらくく)裏差(名) 佩刀の鞘に差す小刀。こづか。

うらくく(うらくく)占定(名) うらなひの吉凶によりて、決定す

うらくく(うらくく)浦里(名) 浦近くある里漁村。

うらくく(うらくく)心寂(形、二) 心さびし。

うらくく(うらくく)心寂(名) うらさびしさま。一さ(心寂)(名) うらさびしさま。又、其度合。

うらくく(うらくく)心寂(自、は上) 心さびしく感ず。

うらくく(うらくく)裏棧(名) 天井板の裏などに取附けたる棧。

うらくく(うらくく)裏地(名) 裏に覆ひつくる衣服のきれち。

うらくく(うらくく)浦島草(名) 浦にみちくるもの。

うらくく(うらくく)浦島草(虎掌)(名) 天南星(天南星科)の多年生草本。山林陰地に自生す。地下莖は圓塊、一莖一葉を生ず。葉は鳥趾狀に分裂し、各裂片は長橢圓形尖頭全縁、四月頃、高さ尺餘の佛焰狀を開き、内面に紫紅色の條紋あり、花莖の上部は延長して絲狀をなして下垂す。有毒植物なり。

うらくく(うらくく)浦島躑躅(名) 植(石虎躑躅)科の落葉

喬木。高山に自生す。矮小にして匍匐叢生す。葉は倒卵形にし

うらしーうらた

うらし(うらし)細鋸齒を有し、深緑色を呈す。六月頃、葉間に黄白色の小花を開き、小球果を結ぶ。

うらし(うらし)裏尺(名) 曲尺(角尺)の裏に自盛したる尺度。曲尺の一寸を一邊としたる正方形の對角線を、其一寸となす。

うらし(うらし)裏白(名) 植(裏白科)の羊歯類。陰地に自生す。根生土中を匍匐し、隨所に堅固なる葉柄を抽き、分枝して二又となる。葉は大形にして羽狀に分裂し、上面深緑色にして裏面白色、春夏の候、顆粒狀の胞子囊を排出す。葉柄を種種の用に供し、葉は正月のかさりに用ふ。また、ほながもろむき。紙を横にして正方に折りて、表のうらみに文字を書きたる手紙。うららなる。うららなるれんが。

うらし(うらし)裏白菫(名) 植(繡薇科)の落葉灌木。深山に自生す。莖生にして長さ六七尺に達す。葉は三箇の小葉より成る複葉にして、下面は白し、莖に長き帶褐色の腺毛を有す。夏、莖頭梢端に數多の淡紅花攢生し、深褐色の果實を結ぶ。果實は食用に供せらる。えびかづらいちぢさるいちぢ。

うらし(うらし)裏白樺(名) 植(樺木科)の落葉喬木。山地に自生す。高さ五六丈に達す。葉は橢圓形若しくは卵形にして、邊緣に粗なる重鋸齒を有し、上面平滑にして裏面に白毛を生ず。四五頃梢頭葉腋に淡黄褐色を呈する單性の穗狀花を生じ、花後、圓筒形の果實を結ぶ。

うらし(うらし)裏白金梅(名) 植(繡薇科)の多年生草本。高山に自生す。莖の高さ四五寸。葉は深く三裂し、裏面白色を呈す。夏秋の候、花莖を抽出し、黄色五瓣の小花を開く。

うらし(うらし)裏白木(名) 植(繡薇科)の落葉喬木。山地に自生す。幹は高さ四丈周圍六尺に達す。樹皮光澤あり、葉は卵狀に橢圓形にして先端尖り、縁邊に大小不齊の鋸齒を具し、裏面に白毛密生す。五月頃、枝邊に繖房状の花を著け、小白花を、果實は、さくらんぼうらに似て赤し、熟すと甘いあり、食用に供すべし。木材も亦用途多し。

うらし(うらし)裏白連歌(名) 連歌を撰紙の表にのみ書きて、裏には書かざる方式。

うらし(うらし)裏店(名) 人家のうらてに住むる貸家。(下戸)。

うらし(うらし)裏店借(名) 裏店に住むと。又、其人。

うらちーうらの

うらち(うらち)浦路(名) 浦邊のみちすぢ。

うらち(うらち)裏附(名) うらのつきたるもの。

うらち(うらち)裏附(名) うららをつけたるもの。うららち。

うらち(うらち)うらり(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらち(うらち)うらち(名) 裏(うら)つけ置け、厚くしたる草履。

うらは「末葉」(名) 草木の末の葉。くすのり。

うらはす「末管」(名) 弓の上部の管。木管の對。

うらはづかし「しげしげ」(名) 心中にて恥かし。

うらはひ「下占」(名) うらかた。一占に類するすぢ。

うらはみ「下占」(名) 龜の甲を灼きて占ふとき、縱又は

うらはら「裏腹」(名) うらうへ。ほんたい。あふこべ。

うらはん「裏判」(名) 文書の裏に、其保證として、著する書

判又は捺する印形。

うらびと「浦人」(名) うらなひする人。

うらびと「浦人」(名) 浦へに住む人。

うらびる「うらむ」(名) 心愴(自ら下二) つらく感ず。わび

しく思ふ。うれへわぶ(快快)。「うらへる君を」。

うらふ「うらふ」(名) 占(自は四) うらなふ。「あふべしと

うらふね「浦舟」(名) 浦にうかべる舟。

うらぶみ「古文」(名) 占ひの判断をかきたる文書。

うらぶる「うらむ」(名) 心愴(自ら下二) うらびる。

うらへ「下部」(名) 古昔の官名。神祇官に屬し、占ひの事を

つかせりしもの。卜官)。

うらへん「浦邊」(名) うらみえ。

うらぼん「孟蘭盆」(名) 梵語 Ullambana、倒懸と意譯

す(佛)陰曆七月十五日に行ふ佛事、食器にいろいろの食物

を盛りて、祖先及父母の亡靈に供し、以て其倒懸の音を教は

んとり。うらりやうまつり。たままつり。ばん。——えい

孟蘭盆會(名) 佛前祭に同じ。

うらまき「浦曲」(名) 海ばたの曲がり入りたる所。

うらまさ「占正」(副) うらなひ正し。

うらまさり「うらまき」(名) 裏優紅梅(名) 「かさね」の色

目。表は紅梅にして裏は紅なるもの。

うらまじ「裏町」(名) うらとほりの町。(後街)。

うらまじつ「うらまじ」(名) 心中に待つ。

うらみ「怨・恨」(名) うらむると。うらむるおもひ。——う

た「怨歌」(名) うらみどころをふくめてよみたる歌。——

きはやくよみかけよ。——がほが「怨顔」(名) うらみ

を涙くかほつき。——ぐき「怨種」(名) うらみのたれ

(名) うらち「怨口」(名) うらみと。——ぶに「怨言」

(名) うらめしき心の中を語ることば。——ぶに「怨死」

恨死(名) うらみ心を懷きて死ぬると。——つに「怨人」

相互のうらみ。——なみだ「怨涙」(名) 人を怨みて泣くと。

ね「怨殺」(名) 怨みながらに殺むること。——ぶみ「怨

文」(名) うらみのたけを述べたる文。——骨髄に入る

(句) うらむるとの極めて痛切なるにいふ。——なく徳な

ゆ(句) うらみも恩義もなく、何等の關係もなし。——に報

に對しては、博愛無我の心より、恩義を以てこれにむくゆ。

うらみどろ「裏身頃」(名) 衣服のみごとこれにむくゆ。

うらみち「裏道」(名) 裏口より通行する路。ぬけみち。

うらみち「つたひひ」(名) 裏道より裏道へと

つたはりて行くこと。

うらむ「むかひ」(名) 怨・恨(他、ま上二) 不満足又は不平の

心を持つ。恨(他) 他をむかひを不快に思ふ、他の行爲をにく

うらむらさき「裏袷」(名) むらさき。

うらめぐり「浦巡」(名) 浦をめぐりあつること。

うらめし「うらめし」(名) 怨(形二) うらみに思はる。残念なり

らめしきこと。——は「怨・恨」(副) 残念なるとは。う

らめづら「うらめし」(名) 心珍(形二) 心中にめづらしく

思ふ。——げ「心珍氣」(名) うらめづらしきさま。——

さ「心珍」(名) うらめづらしき。又、其度合。

うらもとなき「心許無氣」(名) ころもとなきさま。

うらもとなき「心許無」(名) ころもとなき。又、其度合。

うらもとなし「心許無」(形一) ころもとなし。

うらもよう「うら」(名) 裏模様(名) 物のうらにあるもやう。

うらもん「裏門」(名) うらての門。裏木戸の門。(後門)。

うらもん「裏紋」(名) 代用の紋所。かへもん。

うらも「裏屋」(名) 人家のうらに建てたる家。ろぢの中に

たてたる家。うらだな。うらうら。——ずまひ「裏屋

住」(名) うらやに住居する。又、其人。

うらやくせん「浦役錢」(名) 室町時代に、海港に居住せる

ものに賦課せし賦税。

うらやく「浦役場」(名) 法蓮離船の歌謡を取扱は

しむるため、船舶碇泊の地に設けられたる役場。

うらやすし「うらやすし」(心安(形一)) ころもやすし。

うらやなき「裏柳」(名) 「かさね」の色目。表白裏は萌黄。

うらやま「裏山」(名) うらての山。

うらやまし「うらやまし」(羨(形二)) うらやむべし。ねたま

し。——が「うらやまし」(羨(他、ら四)) うらやましく思ふ。

うらやま「うらやま」(名) うらやましがさま。——さ「羨

うらやまなき「裏山吹」(名) 「かさね」の色目。表は黄色。

うらやみ「羨」(名) うらやむ。

うらやむ「うらやむ」(羨(他、ら四)) 心(心)の病むの義。人のす

ぐれたる状を見て、其如くならんと思ふ。人のすぐれたる

状を見て、其人をにくく思ふ。

うらら「朗麗」(名) 空のくもりなくはれたりたる

さま。ほがら。——の「うらら」(名) うららかなるさま。あ

ざやか。——の「うらら」(名) うららかなるさま。さわか

うららけ「朗麗」(形二) うららかにてあり。

うららに「朗麗」(副) うららかなるさまに。——どめず。

うらわ「浦曲」(名) 浦の屈曲したる所。「一の干島あともと

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらわか「うらわか」(名) うらわかきさま。又、其度合。

うらはーうらみ

うらみーうらも

うらもーうらわ

121

うらんーうりあ

かし。●心むかし。氣むかし。

ウラン [Uranium, U=239.5] (名) [化] クロム族の金属元素、甚だ稀有なるものにして、主なる鑛石はウラン燐なり、黄色の酸化物は、美麗なる黄色の燐光を放ち、黒色の酸化物は、磁器の着色料に用ひらる。 [註] 磁器の着色料に用ひらる。

ウーラン [Uran] (名) ヨーロッパ諸國にて、槍を待てる輕うらんかなと云ふ。 [註] 活哉主義 (名) 自己廣告を盛んにして、他の需用を求むる主義。

うらんぼん 孟蘭盆 (佛) うらばん。

うり (瓜) (名) (植) 瓜 (科) 植物の總稱。古昔は「ふり」と稱して、即ち「きりうり」「きりうり」「まくはうり」「すまわく」「とうぐわい」「かまじ」「かばらち」「ゆふはうり」等々あり。 [註] 「きりうり」の特稱。――の裏に茄子はならぬ (句) 子供の賢愚は其親の賢愚に從ふものにて、系統の爭ひ難きにいふ。――二つ (句) 瓜を二つに割りたる如き義、即ち兩者の容貌極めて相似たるにいふ。――を投じて環 (名) を得 (句) (詩經) に出づ、瓜をおくりて、其邊箱に環を得たる藝人に些少のおくりものを、多大の返給を交

うり (賣) (名) うると。うりひさぐと。

うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。

うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。

うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。

うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。

うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。

うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。

うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。うりあけ (賣) (名) 手許に現物を有せずして賣ると。

うりあーうりこ

うりあける (賣上) (他) 「うりあぐ」の訛。

うりあます (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりあむ (賣上) (他) 許にともせず。 [註] 許にともせず。

うりさーうりぬ

うりさき (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

うりささ (賣先) (名) 品物を賣りつくべきあひて。賣りこむべきあひて。うりうち。さばけ (他) 民間に賣りわたす。

相手方に對して財産權を移轉する義務を負ふもの。

うりね(賣物) (名) 賣物の價。元値の對。

うりのき(瓜木) (名) 〔種〕瓜木科の落葉喬木。深山に自生す。幹の高さ五六尺。中心空處。葉は互生し、掌狀に分裂す。夏日、葉腋に花梗を地えき、三叉をなして各一花を著く。花は白色にして花瓣外反す。果實は熟すれば堅し。

うりのき(花買退) (名) 〔商相場にて、買人が手仕舞して、一時買戻の關係より脱退する。〕

うりは(賣場) (名) ①物品を賣る場所。②物品を賣るべき好處。③劇場にて、技師・土間等の見物料を掌る事務所。

うりはだか(て) (瓜) (瓜) (名) 〔種〕瓜樹科の落葉喬木。山中に自生す。幹の高さ五丈。周圍四尺に及ぶ。瘤皮緑色にして甜瓜(瓜)の皮に似る。葉は對生し、心臟形にして通常三裂す。五月頃、淺黄色の總狀花を開く。木材は器用に供せられ、瘤皮は繩を作る料とす。

うりはたけ(瓜) (瓜) (名) 瓜を仕立てたる畑。(瓜田)。

うりはへ(瓜) (瓜) (名) 〔動〕鞘翅類の昆蟲。體長二三分許。全體濃黄褐色にして前脚に深き柄杓あり、成虫のまま越冬し、翌春出でて瓜の葉を食害す。

うりはら(瓜) (瓜) (名) 〔他〕は四) 賣りててばなす。うりはなす。うりなき。

うりひろ(瓜) (瓜) (名) 〔他〕か下二) うりひろむ。

うりひろ(瓜) (瓜) (名) 〔他〕うりひろむの訛。〔出〕す。

うりひろ(瓜) (瓜) (名) 〔他〕ま下二) あまわくうり。

うりひろ(瓜) (瓜) (名) 〔他〕うりひろむの訛。

うりひろ(瓜) (瓜) (名) 〔他〕うりひろむの訛。

うりへ(瓜) (瓜) (名) 瓜のへてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

うりべ(瓜) (瓜) (名) 瓜のうりてあるはた。

日の賣物を附込する帳簿。料理の名、きうり)又は「あるうり)を薄くきまみこれに鹽を少しかけてのみやはらげ、三杯酢にてうりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

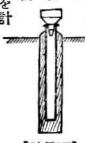
うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕

うりや(賣家) (名) うりいへ。〔味をつけたるもの。〕



〔計量用〕

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるき(名) 〔種〕(い)ふふにひとへ。(う)きんきん。

うるきうるし

うるしーうるふ

採りて漆を製し、果實を乾して蠟を搾り、又木材は種々の用  
に供せらる。――ばけ「漆刷毛」(名) 漆を塗るに用ふる  
はけ(漆筆)。――ふる「漆風呂」(名) うるしをむろ。――  
まげ「漆負」(名) 「うるしをかぶれ」にかかり易き。――  
むろ「漆至」(名) 「うるし」を塗る器物を入れて、かげ  
ほにする所(漆室)。

うるしきび「梗穂」(名) うるしきび。

うるまね「梗稻」(名) 米粒の裕力、少なく、飯に炊きぎて  
常食となすもの。うるまね。抗。

うるせし「梗米」(名) うるまね。

うるち「梗米」(名) うるまね。

ウルトラ「Ultra」(接頭) 或語に冠して、極端又は超越を  
意味する語。――モダン「Ultra-modern」(名) 極  
端に現代的なるもの。――リンクン「Ultra-linken」(名)  
「社」社會主義にて、最も左翼的なるもの。極左翼。

うるは「しむつ」(名) 「うるは」(名) うるはしきさま。

うるは「すつ」(名) 「うるは」(名) うるはしきさま。

うるひ「丸」(名) 「丸」(名) 自、三四。またしむ。

うるひ「丸」(名) 「丸」(名) 自、三四。またしむ。

うるひ「丸」(名) 「丸」(名) 自、三四。またしむ。

うるふ「丸」(名) うるふ。うるほひ。

うるふ「丸」(名) 平年より暦日の多きと、太陽曆にては、平  
年を三百六十五日とすれど、地球の回轉年は三百六十五日五  
時四十八分四十六秒なるが故に、其端数を積み、毎四年に一  
日を二月の末に加ふ、かくせば百年の後は、殆ど一日の超  
過となるを以て、百年目には「うるふ」を置かす。太陽曆にて  
は、平年を三百六十日と定め、これを十二箇月に分けて、太  
陽の運行と少差ありて端数を出すが故に、其端数積りて一  
箇月に滿ちたるを、一年に加ふ、大抵、五年に二度の「うるふ」  
を生じ、十九年即ち「うるふ」七つを重ねて餘分全く盡く、名

うるふーうれし

づけて一葉といふ。――づき「閏月」(名) 閏のある月。

――どし「閏年」(名) 閏のある年。

うるふ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほふ。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

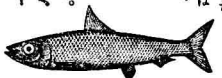
うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。

うるほ「丸」(名) 「丸」(名) 自、四。うるほす。



[しわいめう]

うれしーうれゆ

氣」(名) うれしきさま。――き「嬉」(名) うれしきと。

うれしき度合。――なき「嬉泣」(名) うれしきあまり

に泣くこと。――なみた「嬉涙」(名) うれしきよ出る涙。

うれしのちや「嬉野茶」(名) 肥前國嬉野附近より産出す

る茶、支那の綠茶に類す。

うれしのやき「嬉野焼」(名) 肥前國より産出すの器、も

とは雅致に富みたるものなりしが、今は専ら常用の下等もの

うれしむ「嬉」(名) 自、三四。うれしくおもふ」となれり。

うれしだか「嬉高」(名) 商品の賣れたる高。

うれしたげ「嬉氣」(名) うれたきさま。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。

うれたさ「嬉」(名) うれたきと。又、其度合。



うるれるいれる (賈) 自、(下) あきなひ繁昌す。  
うる (一) 鹿 (名) ① うつろ。 (空) ② あな。 (同)。「み」。  
うる 雨露 (名) ① あめとつゆと。 ② うるほひ。「のめぐや  
うる 迂路 (名) まはりみち。とほみち。  
うる 烏鴛 (名) ① かからすと。 ② 黒と白と。③ の  
争 (句) 基を囲み勝負を争ふと。

うる 有漏 (名) (佛) ① 貝鼠の煩惱のために業を履生して、色界无色界を出離し得ざるを。 (二) 轉じて、人間界又は凡夫界。「ち」  
うる 有漏道 (名) (佛) ① あず。 ② 比世。「ど」  
うる 漏身 (名) (佛) 凡夫の身。  
うる 有漏 (名) ① 徧復 (名) 副) まことて方向の定まらぬさま。② がほだ (名) 徧復誤 (名) 迷ひてうろちする顔つき。  
うる 有漏 (名) ① 名みだ (名) 徧復誤 (名) うろちする顔つき。  
うる 有漏 (名) ① 名みだ (名) 徧復誤 (名) うろちする顔つき。  
うる 有漏 (名) ① 名みだ (名) 徧復誤 (名) うろちする顔つき。

うる 鱗 (名) (魚) ① 魚の鱗片。 ② 魚の鱗片をいふ。 (三) 魚の鱗片をいふ。 (四) 魚の鱗片をいふ。  
うる 鱗 (名) (魚) ① 魚の鱗片。 ② 魚の鱗片をいふ。 (三) 魚の鱗片をいふ。 (四) 魚の鱗片をいふ。  
うる 鱗 (名) (魚) ① 魚の鱗片。 ② 魚の鱗片をいふ。 (三) 魚の鱗片をいふ。 (四) 魚の鱗片をいふ。  
うる 鱗 (名) (魚) ① 魚の鱗片。 ② 魚の鱗片をいふ。 (三) 魚の鱗片をいふ。 (四) 魚の鱗片をいふ。

うる 狼 (名) (獸) ① 犬科の哺乳動物。 ② 犬科の哺乳動物。 ③ 犬科の哺乳動物。 ④ 犬科の哺乳動物。  
うる 狼 (名) (獸) ① 犬科の哺乳動物。 ② 犬科の哺乳動物。 ③ 犬科の哺乳動物。 ④ 犬科の哺乳動物。  
うる 狼 (名) (獸) ① 犬科の哺乳動物。 ② 犬科の哺乳動物。 ③ 犬科の哺乳動物。 ④ 犬科の哺乳動物。  
うる 狼 (名) (獸) ① 犬科の哺乳動物。 ② 犬科の哺乳動物。 ③ 犬科の哺乳動物。 ④ 犬科の哺乳動物。

うる 魚 (名) (魚) ① 魚。 ② 魚。 ③ 魚。 ④ 魚。  
うる 魚 (名) (魚) ① 魚。 ② 魚。 ③ 魚。 ④ 魚。  
うる 魚 (名) (魚) ① 魚。 ② 魚。 ③ 魚。 ④ 魚。  
うる 魚 (名) (魚) ① 魚。 ② 魚。 ③ 魚。 ④ 魚。

うるる—うらぬ

うる 胡亂 (名) (字) の廣東音といふ。 ① かりそめなるさま。 ② あはせざる。 ③ あやしく疑はしき。 ④ 合點のゆかぬと。  
うる 胡亂 (名) (佛) 佛家の儀式にて、位次決定せずして假に着席するもの。 ① もの「胡亂者」(名) あやしやつ。いふかしまの。

うる 接頭 (名) (接頭) 「うは」を見よ。  
うる 接頭 (名) (接頭) 「うは」を見よ。  
うる 接頭 (名) (接頭) 「うは」を見よ。  
うる 接頭 (名) (接頭) 「うは」を見よ。

うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」

うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」

うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」

うるん—うらぬ

うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」

うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」

うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」

うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」

うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」  
うる 植 (名) (植) 植はるをいふ。「木」

うるつ—うを

うをたーらん

れ来るを見分くる人。又其目見する所。——みそ「魚味  
噲」(名) 魚の肉を加へて製造したる味噌。——や「魚  
屋」(名) 魚を賣る家又は人。さかなや。——心あれは水  
心(句) 他の己に對して好意を致せば、己も亦他に對して好  
意を致すに依ふ。——と水(句) 互の間の極めて親密な  
るとに依ふ。——の懸けるは甘許に由る(句) (昔書に  
出づ) 魚は甘き餌のために釣鉤にかかる義、人の利益のため  
に、其性命を委つるに譬へいふ。——の釜中に遊ぶが如  
し(句) (資治通鑑に出づ) 死滅の近きにあるを知らずして、  
徒に生を愉むとに譬へいふ。——は江湖に相忘る(句)  
(莊子に出づ) 安心満足して境遇の如何に心づくに譬へ  
いふ。——を争ふ者は濁る(句) (列子に出づ) 利を争ふ  
ものには苦痛のこれに伴ふに譬へいふ。——を得て釜ま  
忘る(句) (莊子に出づ) 道の道徳を會得して、其言文の形  
迹に拘泥せざるに譬へいふ。——を煮るに煩しければ  
則ち碎く(句) (韓詩外傳に出づ) 魚を煮るにまばまばか  
きまはせば碎くといふ義、即ち民を治むるに致命煩難なれば、  
人心の離れちるに譬へいふ。 「るより此有あり」  
うをたか「魚鷹」(名)「動」みさご「の一名、好みて魚を取  
るをすみや「魚住」(名) 播磨國明石郡中尾より西出  
する陶器、主として茶器なり。  
らん「運」(名) めぐり來るの命數。まはりあはせ。②うつり  
變はる時勢。③。④。⑤幸福なる命數。よきまはせ。  
らん「暈」(名)「光」太陽又は太陽の周圍に、時と  
して現れ見ゆる輪状の光氣、大氣の上層に於ける細密なる  
水晶体が、太陽の光線を反射屈折するによりて起る現象な  
るといふ。ひがさ。つきがさ。かさ。くもり。かすみ。く  
まどり。ぼかし。めまひ。めんけん。  
らん「組」(名) たくは。蓄積。②おくそ。極異。③遠  
路學殖。④佛「有爲の諸法が類に従ひて集積すると、これ  
を色・受・想・行・識に分かつ。五」。  
らん(感) 承諾の意を表する發聲。②。③氣絶などし又は  
はげしく驚くときなどに發する聲。「とばかりに」。——と  
もすんとも(句) ただ一言の返辭も。

らんいーらんけ

らんいけ「云爲」(名) いふとなすと。ことばとあわざと。い  
ふ所となす所。言行。  
らんらん「云云」(名) 連續したる言文を中途に断ち、後  
の意をかくかくといひごとむる場合に用ふる語をかまかこ  
れんらんぬん。  
らんらん「感」くるしみにたへずなる聲。  
らんえい「うせい」(名)「雲影濤聲」(名) 松の枝葉の雲の  
影かと思はるるままと松風のおとの波の聲にまがふままと。  
らんえん「雲煙」(名) くくもとけむりと。②山水の名畫な  
るといふ。煙間に「を掛く」。——かがん「雲煙過  
眼」(名) ただ目をとむるばかりにて、これに心のすこしも  
執着せざるに依ふ。  
らん「おろ」(名)「蘊奥」(名) 學問技藝などのおくそ。おく。  
らんか「雲霞」(名) 雲とかすみと。②もののおびただし  
く群がるにたとへいふ。③の如く集まり寄る。  
らんか「浮塵子」(名) (雲霞の義) 動) 有物類の小蟲、種類  
多し、形蟬に似て體長二分許、頭は突出す、口吻は甚脆太く尖  
端細くして液汁を吸ふに適す、多數群をなして稻田に來り軟  
葉又は花の汁液を吸取して稻を枯らし農家に巨害をなす、其  
幼蟲は泡を稱し、泡を吐き身體を包みて自ら保護す。  
らんが「運河」(名)「地水運」權儀・排水・給水・動力等の便  
に資するため、陸地を掘りて設けたる河。ほりわり。  
らんが「雲外」(名) 天空のはるか上。くももそと。  
らんが「雲外」(名) 雲のうへびと。てんをえきつびと。  
らんか「雲漢」(名) 天のあまのがは。天河。  
らんかん「雲間」(名) くもま。②吉凶を判断するもの。  
らんき「運氣」(名) 自然の現象を人生の運命に結び附けて、  
らんき「溫氣」(名) あたたか。②むしあつきた。  
らんき「雲鏡」(名)「atoposcope」(名)「地雲の進  
行方向及速度を測測する器械、鏡面を其主要部とす。  
らんけい「雲霓」(名) くもとじと、即ち雨のふる前兆。  
らんけん「縹緞・韋緞」(名) 染色の名、同じ色を次第に  
濃くぼかす染めにしたもの。②錦織物の名、赤藍などの縹  
緞のさかひをくまどりで織りたるもの。——べり「縹緞

らんこーらんし

縁」(名)「らんけん」の織物を縁に付けたる處。  
らんこ(名) くそ。ふん(小兒の語)。  
らんこ「うた」(名)「芸香」(名)「植」ハルウダ。  
らんこ「うた」(名)「運行」(名) 運び廻りて進行すると。②  
[Revolution] (天) 遊星・彗星・衛星等の其軌道の上を運動す  
ると、公轉ともいふ。「方よりよりあつたつとと」。  
らんこ「うた」(名)「雲谷派」(名) 繪畫の一派、雪舟の衣鉢を傳ふ  
るもの、雪舟の周防國山口の雲谷寺に住し、雲谷軒と號した  
るよりいふ。「石の雅稱」。  
らんこ「雲根」(名) (雲は石より生ずとなすよりいふ) 岩  
らんざ「運座」(名) 多數の人の相集まりて、各自を出題に就  
きて俳句を作り、取り廻りて判者の許に送りて批點を請ふ、  
文政年間が始まりといふ。  
らんさい「雲齋」(名) うんさいあり。——おり「雲齋  
織」(名) 一種の織物、地粗く斜文に織りたる厚き木綿布、雲  
齋といふ人の種り出だしものといふ。  
らんざり(名) 副) 物事に厭き果つるさま。  
らんざん「運算」(名)「數」の示す規則に従ひ、加・減・乗  
除又は移項等を行ひて、所要の數値を算出するを。  
らんざん「雲山」(名) くものかかれ山。  
らんざん「運次第」(名) 運のよしあしによると。  
らんざん「運者」(名) 運のよき人。  
らんざん「醜稱」(名) 性質のいとおだやかにして、  
他を包容する度量あると。  
ウンジャン「uncertain」(名) 容疑なからざる女。  
らんざん「雲集」(名) くもの如く多くよりあつまる  
と。——むさ「雲集霧散」(名) おほくのものが、より  
あつまり又はちりぢりになること。  
らんざん「うまかん」(名)「温州蜜柑」(名) (温州は交那の  
地名)「植」蜜柑の一種、果實は大形にして、果皮薄く種子なく  
多汁にして味最も美なり。まゆきつ。  
らんざん「運上」(名) 徳川時代に、工場の營業又は  
輸出入の物品に課せし租稅。——まよ「運上」(名) 徳



うんとーうんへ

事の奔走盡力に要する費用。——**よく**【運動服】(名)運動に便なるやうにした特製の服。——**ぼうろ**【運動帽子】(名)運動に便なる特製の帽子。——**まひ**【運動麻痺】(名)筋身體に於ける運動の機能の消失すること。——**りりうけつり**【連動量】(名)運動の量の量なりとす。——**のエネルギー**【Kinetic energy】(理)物體が運動するを以てする「エネルギー」、質量と速度との相乗積の平方の半をよこすを測る。——**の定律**【Laws of motion】(理)物體の運動に関する定律。「イギリス」人「ニュートン」の創設にして三則あり、第一、物體は外力の作用を受けざれば常に静止するか或は一直線上に等速の運動をなすものなり、第二、運動量の變化は、其作用したる力に比例し、其力の方向に起るも、第三、作用あればこれに等しき反作用あり。

**うんと**と**うん**【雲屯】(名)雲の如く多くあつまること。  
**うんと**と**ん**【饅飽】(名)一種の食品、小麦粉に鹽を加へ水にてかため、薄くのはして細く切りたるもの。  
**うんぬん**【云云】(名)「うんうん」の音便。  
**うんばん**【雲版】(名)唐製又は類製の樂器、まはりには響がたの模様を附けたるもの、寺院にて合圖に打ち鳴らす。  
**うんばん**【運搬】(名)物品又は旅客の輸送、もちはこび。  
**うんくとり**と**く**【うんそく】(名)「地」河水又は流水若しくは風が、土砂又は砂礫等を流轉せしむる現象。  
**うんせつ**【運搬業】(名)うんそく、げふ。——**せい**【運搬税】(名)【經】消費税の一、消費物が取引買賣のため運搬せらるるときに賦課せらるるもの、よ、開稅の切きは其一なり。  
**うんびつ**と**うけつ**【雲表】(名)雲のうへ、うんくわい。  
**うんふてん**と**ふ**【運否天賦】(名)運の吉凶は、自然の天命なりといふこと。【うんまかせ】。

**うんべい**【雲平】(名)うんべいたう。——**さいく**【雲平細工】(名)雲平帯にて種々の形に作りたる乾菓子。——**とうり**【雲平糖】(名)菓子の名、白砂糖に微塵粉を加

うんほーうんち

へ(少量の水とすりたる薯蕷)とを混ぜて、捏(ね)こめたるもの。  
**うんほ**【雲母】(名)【鏡】うんも。  
**うんぼう**と**うけ**【襦袍】(名)わたためぬのこ。  
**うんまかせ**【運任】(名)運命に任せて事を行ふこと。  
**うんむ**【雲霧】(名)くもときり。——**を披**【きて青天を觀る】(句)【習書に出づ】心地のすがすがしく如何にもこころよき状態にちよ。  
**うんむん**【諺文】(名)おんむん。  
**うんめい**【運命】(名)人の身にめぐり来る善惡、吉凶の事情、めぐりあはせ。まほしあはせ。——**らん**【運命論】(Falsism)【名】哲)人生の賢愚又は浮沈等すべて先天的に定まり、人力の如何ともすべからずといふ説。  
**うんも**【雲母】(名)【鏡】板状又は片状の硅酸鹽物、白雲母、黑雲母等あり、花崗岩中に存在す、薄く剝離すれば片々弾力性を有し光澤あり、白雲母は就中用途多く、廣く電氣工業等に應用せられ、又貝子などの地紙に粉色するに用ひらる。——**へんがん**【雲母片岩】(名)【鏡】雲母を主なる成分とせる片岩。  
**うんもん**と**ちく**【雲紋竹】(名)【植】斑竹の一種、竹皮に雲形の斑紋を生ずるもの。  
**うんゆ**【運輸】(名)正しくは「うんちゆ」。貨物を選びおくること。  
**うんよう**【運用】(名)はたらかし用ふこと。活用。——**ちゆ**【運用術】(名)海上に於て、船又は帆を用ひて船舶を操縦する術。——**の妙は一心に存す**【句】(宋)の岳飛の語)法は死物なり、言葉を借用するの妙は、心によりて説明せらるるものにあらず。

**うんら**【雲籠】(名)明樂又は高梁に用ふる一種の樂器、小形の銅鑼を縱横三箇づつ木架に掛け、更に一箇を上に掛け、小鐘に



【らんう】

うんちーえ

て鼓(こ)きて鳴らすもの。  
**うんちん**【柳穿魚】(名)【植】支那)科の多年生草本、海岸の砂地に生ず、莖は直立、高さ五六寸葉は輪生し、莖状長橢圓形にして鈍頂、十月頃、槍頭に總狀花を著け、黄白色の數花らんりよう【雲龍】(名)雲と龍とのある模様。「密生す」。

**え**  
**え**【あ】といとの中間母音、いの場合より、口を稍廣く舌を稍低くして發す、五十音圖にて、「あ」行第四に位し、「え」列の「け」「せ」「ね」「へ」「ぬ」「れ」「あ」の頭(と)となる。  
**え**【根】(名)「根」えごま。  
**え**【柄】(名)器物に取附け、手に把るため長く出だしたる所。把手。斧のふる。「把」の「ない所に柄をすける」【句】強ひて理窟をこじつけていふ。  
**え**【江】(名)【地】陸地に深く入りこみたる湖海の一部分、いりえ、なには「江」すみの「江」。  
**え**【兄】(名)あに「大」。「君」。  
**え**【枝】(名)えだ、うめが「に、きぬる盛春かけて」。  
**え**【腕】(名)手足、「四の」。  
**え**【胞】(名)えな。  
**え**【役】(名)ぶやく、えだち。  
**え**【疫】(名)はやりやみ、えやみ。  
**え**【宴】(名)「えんの略」さもり、うたげ。  
**え**【繪】(名)物事の形象又は情景を平面上にえがき表はしたるもの、くわいぐ。  
**え**【會】(名)【佛】多數の人のより集まりて行ふ佛事又は祭事。「上」【五】「放生」。  
**え**【慧】(名)【佛】事理を識別する精神作用。  
**え**【餌】(名)「え」を見よ。  
**え**【能】(副)よく、あへて。「聞かず」。

え(感) 疑問の意の發聲。「どうだね」。

え(感) 然諾の意の發聲。「さうです」。

え[方]助「へ」を見よ。

え[笑]名「え」を見よ。

え[一]接尾「へ」を見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。

えア[方]名「えア」見よ。



〔一〕冠

えい[類]名 ①ほさき。のぎ。②種「木本科植物の外

部にある二葉片。③錐の頭。④するどきや勢。⑤秀出せる

人物。「一を擧ぐ」。⑥脱す(句) 錐のほさきを鏡中よ

りあらはす義、即ち才氣を世間にははすをいふ。

えい[榮]名 ①草木の花。はな。②さかえ、はまれ。③ひか

り。つや。④血脈。「歯」。

えい[營]名 ①ぢんや。たむ。②支那兵制上の一部隊。

えい[英]名 ①はなぶさ。はな。②すくれと。俊才。③イ

ギリスの略稱「日」同盟。④をきみ華を阻(さふ) (句)

書中の要點妙所を省略してよく會得するをいふ。「十文」

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[類]名 ①ほさき。のぎ。②種「木本科植物の外

部にある二葉片。③錐の頭。④するどきや勢。⑤秀出せる

人物。「一を擧ぐ」。⑥脱す(句) 錐のほさきを鏡中よ

りあらはす義、即ち才氣を世間にははすをいふ。

えい[榮]名 ①草木の花。はな。②さかえ、はまれ。③ひか

り。つや。④血脈。「歯」。

えい[營]名 ①ぢんや。たむ。②支那兵制上の一部隊。

えい[英]名 ①はなぶさ。はな。②すくれと。俊才。③イ

ギリスの略稱「日」同盟。④をきみ華を阻(さふ) (句)

書中の要點妙所を省略してよく會得するをいふ。「十文」

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

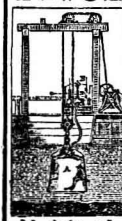
えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五

えい[詠]名 ①ながさ。とく。②永樂殿の略。「六百五



〔花類〕



〔うまきいえ〕

えい

えい

えい

171

えいぎ—えいぎ

状の器具。

えいぎゅうりつ【永久】(名) ながく久しきと。久しく變ぜ

ざる。とこし。——永久齒【永久齒】(名) 生乳齒の脱

落後に發生する齒牙。——永久齒石【永久齒石】(名) 運轉を容易に失はざる齒石

又は永く強性を保持する物體。——永く永久【永久】(永

久築城【名】國防上重要な地點に永久防禦の目的を以て

えいぎょう【盈虚】(影響) えいぎ(盈虚)。——さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎょう【影響】(名) 關係を及ぼすこと。さしたる空城。

えいぎ—えいぎ

主又は主務官廳に報告するために作成したる書類。

えいぎよく【郢曲】(名) (宋玉の賦に出づ、郢の人の歌ふ俗

曲の義、郢とは楚の都、いまやうぶりのうたひもの、卑俗

なる音曲(巴曲)。——神樂歌、催馬樂、風俗歌、今様歌、朗読等

のうたひもの總稱。

えいぎ【影供】(名) 神佛又は古人などの肖像に、供物をさま

げて祀ること。——うたあはせつ【影供歌合】(名) 影

供のために行ふ歌合。——かかひ【影供歌會】(名)

影供のために行ふ歌會。——すくればと。(英雄)

えいけつ【英傑】(名) 多くの人にすくられたる器量ある人。

えいけつ【永訣】(名) ながきわかれ。まにわかれ。

えいけつ【盈月】(名) 【天】新月より満月に至る間の稱、此

間に於て月の形は漸次圓くなるよりい。

えいこ【榮枯】(名) さかゆると衰ふると。

えいこ【英語】(名) さとこと。かしことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいこ【穎悟】(名) イギリス國のことば。

えいぎ—えいし

えいざん【假算】(名) 主上の御鈴。

えいざんかたばみ【觀山酢漿】(名) 【植】「かたばみ」の

一種、葉は大形にして尖頭、花は白色又は淡赤色。

えいざんすみれ【觀山莖菜・胡莖菜】(名) 【植】莖葉(葉)

科の多年生草木、山地に自生す、葉は通常三裂、裂片は缺刻齒

牙を有す、春日、花開く、花は淡紫色にして大形。えぞすみれ。

えいざんゆり【觀山百合】(名) 【植】やまゆり。

えいざん【假旨】(名) 主上のおほせ。主上の御旨。

えいざん【英資】(名) すくられたるうまれつき。

えいざん【英姿】(名) すくられたる雄々しき姿。【鶴鷹(句)

英姿のいかにもりりしくこちよと。

えいざん【假史】(名) 歴史上の事實を諷みたる詩歌。

えいざん【嬰兒】(名) みどりも。ちのみで。

えいざん【英字】(名) イギリス國の文字。

えいざん【永字銀】(名) 寶永七年徳川幕府の鑄造せし

丁銀、中に永字の鑄印あり。

えいざん【水日】(名) ながの日の春日。

えいざん【傍字】(名) 【永字八法】(名) 書法傳授の一法

永の一字にて側、勅、等、東、東、探、探、探、探の運

筆八法あることを示したるもの、其

八法は一切の文字に通用すべし。

えいざん【映寫】(名) うつしと。 映

えいざん【映寫】(名) うつしと。 映

えいざん【映寫】(名) うつしと。 映

えいざん【映寫】(名) うつしと。 映

えいざん【映寫】(名) うつしと。 映

えいざん【映寫】(名) うつしと。 映

えいざん【映寫】(名) うつしと。 映



【法八字永】

(名) 構成する一定の地域。——びょういん(病院) 衛成地に設置せられたる陸軍所屬の病院。其所在地陸軍部隊の患者其他定規の患者を收容治療し、衛生材料を保管供給し、衛生部下以下の教育を掌る所。

えいせいゆう(英佐) (名) 多くの人よりすぐれたる人。

えいせい(英書) (名) ちんや。兵書。

えいせい(英書) (名) イキリ又英語の書物。

えいせい(英書) (名) ほまれとはづかしめ。言たえとおふれと。はえあるとゆんばりなきこと。

えいせい(英書) (名) 歌を詠みてたてまつること。

えいせい(英書) (名) はえある官位にのぼること。

えいせい(英書) (名) 切腹よきすることまじやいば。

えいせい(英書) (名) 他、さび。詩歌を聲高く誦す。うたえいせい(英書) (名) 詩歌をよむ。

えいせい(英書) (名) 影を現す。うつる。「花の影、水に」。はんみさす。さす。「日にえいじて光陰陸」。

えいせい(英書) (名) 主上のすぐれて賢明にましまし、文武の徳を兼ね備へたまふこと。

えいせい(英書) (名) 長く年月の経過すること。ながねん。えいせい(英書) (名) 永世無窮(一) 永世のあらん限りつづきてためるとこと。——ろく「永世無窮」(二) 明治維新の際、無期限に下賜せられたる栄祿及典賞典。

えいせい(英書) (名) 天の運星の周囲を回轉しなら、其運星と共に太陽を周(一) 月は地球の衛星なるが如きこれなり(陸星)。

えいせい(英書) (名) 衛生の健康をはかり、疾病の治療を怠らざること。——がく「衛生學」(名) 衛生に関する事項を研究する學。——きょうせい「衛生行政」

(名) 「政國民一般の健康を保つため、危害の豫防を請じ、已に發したる疾病は力めて其蔓延を防止する行政分かつ保隨行政、警察行政の二となす。——くみあひ「衛生組合」(名) 「法」衛生に関する事務を取扱ふため、町村内又は

区内にて、各區域をかぎりて設立したる公共組合。——まけんせい「衛生試験所」(名) 「法」内務大臣の管轄に門し、衛生上の試験に関する事項を取扱ふ所。——びん

「衛生美人」(名) 肥滿して體格よき婦人。

えいせい(英書) (名) 「永世中立」(名) 「法」國際上にて國家が永世に、他國間の戰爭に關するを得ず、他國の保護を受くるを得ず、他國と同盟するを得ず、又、國際間に爭議を生ずる恐れある行爲をなすを得ざる等の義務を負担すること。此地位は條約によりて生じ、又は數國が其獨立を擔保する條約に伴ひて生ず。——こく「永世中立國」(名) 「法」永世中立の義務を負担せる國家、即ち瑞西等の如き類。

えいせい(英書) (名) 永鏡(名) えいらくせん。

えいせい(英書) (名) 建築物のちりふく(修理)。

えいせい(英書) (名) ちりふくの費用。

えいせい(英書) (名) ながきさいはひ。又、ながきよはひ。

えいせい(英書) (名) のかせ「永祚風」(名) 後世にまで聞こえのこる大風。

えいせい(英書) (名) 容藻(名) 天子の御製作にかかると詩歌。

えいせい(英書) (名) 詠草(名) 歌のさうかう、歌のてびかへ。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 陸軍總司令部に規定せられたる器具、又、其犯則者を懲罰する場所、軍管倉と輕管倉とあり。

えいせい(英書) (名) 映像(名) 「理」光線の屈折又は反射によりて、物の現出する。又、其現出したる物像。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

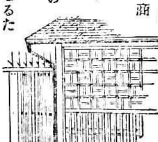
えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。

えいせい(英書) (名) 管倉(名) 家ぎたにたがた。



【江村屋格子】

えいひーえいよ

えいびん [鋭敏] (名) 才智のするどきとき。感じの甚だすとき。感覺の過度にするとき。  
えいふつ [詠物] (名) 事物に託して情緒を詠する詩の一體。  
えいぶん [英文] (名) 英語を以て記載せる文章。  
えいぶん [歌聞] (名) 主上の聞こしめし給ふ。  
えいへい [衛兵] (名) 警戒のために配置又は巡檢せしむる兵士。まゐる衛。

えいまい [英邁] (名) すぐれまざりたる。  
えいまん [盈満] (名) 物事の十分にあつたとき。  
えいめん [永眠] (名) としへねむると。即ち死ぬると。  
えいめい [英名] (名) すぐれてよまほれ。  
えいめい [英明] (名) すぐれて賢明なる。  
えいや [永夜] (名) よなが。  
えいゆ [飄輪] (名) (正しくは、えいよ) かちまけ。  
えいゆう [英雄] (名) 才能・性格の抜群なる人物。公卿の家格の一、即ち唐葉の異稱。——け「英雄家」(名) 清華家。——あゆらは「英雄崇拜」(名) 英雄の偉大なる精神氣魄を讃嘆して、これを崇拜する。——だん「英雄譚」(名) 英雄を中心とした物語。——人を敬く(句) 英雄は術策巧にして表裏多く、又物事に拘らずに牙厲少ならず、其行爲の往々人の意表に出づるにいよ。

えいよ [榮譽] (名) ほまれあること。はえあること。——けん「榮譽權」(名) (法) (い) 榮譽の表章を享有し得る權利。  
えいよ [榮譽] (名) 授與せらるる大禮。——あはらひ「榮譽支拂」(名) 應じんかえはらひ。——ひきうけ「榮譽引受」(名) 問さんかきうけ。  
えいよう [榮耀] (名) さかゆること。はゆること。はなやかなること。おどろこ、ええう。

えいよう [營養・榮養] Nutrition (名) (生) 動物が養料を攝取して體質の消耗を補ひ、以て生活力を維持すること。——えき「營養液」(名) (生) 體軀に於ける諸種の器官に營養を賦與する無色の液體、鮮紅なる血液より生出し、毛細管の管壁より滲透して分賦す。——せ「營養素」(名) (生) 飲食物中に含まれ、人體を構成する主要成分。——ぶ

えいよう [營養・榮養] Nutrition (名) (生) 動物が養料を攝取して體質の消耗を補ひ、以て生活力を維持すること。——えき「營養液」(名) (生) 體軀に於ける諸種の器官に營養を賦與する無色の液體、鮮紅なる血液より生出し、毛細管の管壁より滲透して分賦す。——せ「營養素」(名) (生) 飲食物中に含まれ、人體を構成する主要成分。——ぶ

えいらーえいれ

つ [營養物] (名) (生) 消化吸収せられて生活體を構成し、又は其動作實現に必要な物質を含有する飲食體。——りよう「りよう」(營養不良) (名) 生營養の良好ならざる。攝取せる食物の養分不足なること。——りつ「營養率」(名) (生) 飲食物中に含有する營養素の割合。  
えいらくせん [永樂通寶] (名) 支那明朝の永樂年中に鑄造したる銅錢、而に永樂通寶の文字あり、足利時代に、多く我國に輸入せられ、盛んに通用せられたり。  
えいらくつうほう [永樂通寶] (名) 前條に同じ。  
えいらくやき [永樂燒] (名) 京焼の一種、支那明朝の永樂年中の製作に係る磁器を稱して觸きはじめたもの、主として茗器の雅玩に供せらる。



えいらん [英覽] (名) 主上の御覽あそばすと。  
えいり [英里] (名) マイル。  
えいり [銳利] (名) するどき。才幹。  
えいり [營利] (名) 財上の利益をはかること。かねまうけ。まうばい「の業」。——こう「營利行爲」(名) (法) 營利を目的とする行爲。——あやだん「營利社團」(名) (法) 自己の利益を收むるために事業を營む二人以上の團體。——ほうもん「營利法人」(名) (法) 自己の利益を收むるために事業を營む社團法人。

えいりん [營林] (名) 森林を經營すること。——きよく「營林局」(名) (法) 農林大臣の管理に屬し、國有及公有林野の施業計畫又は存廢區別若しくは賣却及境界査定等に関する事務を掌り且營林野の事務を監督する官廳。——あやだん「營林署」(名) (法) 農林大臣の管理に屬し、營林局の管内須要の地を分置せられ、營林の實行に関する事務を掌る所。  
えいれい [英靈] (名) すぐれいであるもの。——すぐれびと「たましひ」。——かん「英靈漢」(名) 拔群の才能あ

えいりん [營林] (名) 森林を經營すること。——きよく「營林局」(名) (法) 農林大臣の管理に屬し、國有及公有林野の施業計畫又は存廢區別若しくは賣却及境界査定等に関する事務を掌り且營林野の事務を監督する官廳。——あやだん「營林署」(名) (法) 農林大臣の管理に屬し、營林局の管内須要の地を分置せられ、營林の實行に関する事務を掌る所。  
えいれい [英靈] (名) すぐれいであるもの。——すぐれびと「たましひ」。——かん「英靈漢」(名) 拔群の才能あ

えいりん [營林] (名) 森林を經營すること。——きよく「營林局」(名) (法) 農林大臣の管理に屬し、國有及公有林野の施業計畫又は存廢區別若しくは賣却及境界査定等に関する事務を掌り且營林野の事務を監督する官廳。——あやだん「營林署」(名) (法) 農林大臣の管理に屬し、營林局の管内須要の地を分置せられ、營林の實行に関する事務を掌る所。  
えいれい [英靈] (名) すぐれいであるもの。——すぐれびと「たましひ」。——かん「英靈漢」(名) 拔群の才能あ

えいろーえかく

えいろ [永牢] (名) 徳川時代に、一生のあひだ牢に監えいん [會陰] (名) (生) 人身の陰部と肛門との間即ち、左右の股の上部の相接する所。ありのとわりたる。——はれつ「會陰破裂」(名) (病) 産婦分娩の際、大小種々の裂傷の會陰に生ずる。  
エウエリスム [Euterism] (名) (哲) 神とは是克するに死者の靈魂にして、宗教は精靈崇拜又は祖先崇拜なりとする説、古代ギリシヤの哲學者、エウエロモスの説に基づく。  
えうちは [繪馬] (名) 繪をかきたる團扇。  
えうろし [畫漆] (名) 漆繪用の漆液。  
えん [應] おどろき又はなげくとときの覺醒。  
えん [會厭] (名) (生) 喉頭にありて會厭軟骨より成り、開閉自在なる調節機器官。——なんこつ「會厭軟骨」(名) (生) 會厭の基質たる軟骨、匙狀扁平にして弾力性を有し、初聲によりて甲状軟骨に附着す、飲食物嚥下の際に、喉頭を閉鎖して食物の氣道に侵入するを防止する作用をなす。  
エオソイン [Eosin] 洋眞 (名) (化) 酸性染料の名、粗毛等を染色に染むるに用ふ。

えん [應] おどろき又はなげくとときの覺醒。  
えん [會厭] (名) (生) 喉頭にありて會厭軟骨より成り、開閉自在なる調節機器官。——なんこつ「會厭軟骨」(名) (生) 會厭の基質たる軟骨、匙狀扁平にして弾力性を有し、初聲によりて甲状軟骨に附着す、飲食物嚥下の際に、喉頭を閉鎖して食物の氣道に侵入するを防止する作用をなす。  
エオソイン [Eosin] 洋眞 (名) (化) 酸性染料の名、粗毛等を染色に染むるに用ふ。

えん [應] おどろき又はなげくとときの覺醒。  
えん [會厭] (名) (生) 喉頭にありて會厭軟骨より成り、開閉自在なる調節機器官。——なんこつ「會厭軟骨」(名) (生) 會厭の基質たる軟骨、匙狀扁平にして弾力性を有し、初聲によりて甲状軟骨に附着す、飲食物嚥下の際に、喉頭を閉鎖して食物の氣道に侵入するを防止する作用をなす。  
エオソイン [Eosin] 洋眞 (名) (化) 酸性染料の名、粗毛等を染色に染むるに用ふ。

えん [應] おどろき又はなげくとときの覺醒。  
えん [會厭] (名) (生) 喉頭にありて會厭軟骨より成り、開閉自在なる調節機器官。——なんこつ「會厭軟骨」(名) (生) 會厭の基質たる軟骨、匙狀扁平にして弾力性を有し、初聲によりて甲状軟骨に附着す、飲食物嚥下の際に、喉頭を閉鎖して食物の氣道に侵入するを防止する作用をなす。  
エオソイン [Eosin] 洋眞 (名) (化) 酸性染料の名、粗毛等を染色に染むるに用ふ。

えん [應] おどろき又はなげくとときの覺醒。  
えん [會厭] (名) (生) 喉頭にありて會厭軟骨より成り、開閉自在なる調節機器官。——なんこつ「會厭軟骨」(名) (生) 會厭の基質たる軟骨、匙狀扁平にして弾力性を有し、初聲によりて甲状軟骨に附着す、飲食物嚥下の際に、喉頭を閉鎖して食物の氣道に侵入するを防止する作用をなす。  
エオソイン [Eosin] 洋眞 (名) (化) 酸性染料の名、粗毛等を染色に染むるに用ふ。



えがち【得勝】(名) ヒコロえ頭。承知したる體。

えがは【繪紙】(名) 模様の模様の染紙。

えがみ【繪紙】(名) 模様の模様の紙、女兒の弄ぶもの。

えがらし【教辛】(形)「えがらし」を見よ。

えかんばん【繪看板】(名) 或狀態若しくは物品をあげがきはして掲ぐる看板。

えき【易】(名) 〔蛻蝸〕の體色變化するに採りて名づくこといふ。夏田に起り我國に傳はれる一種の學。陰陽變化の原理に基き、神人交感の神祕に類り、善(吉)をかぞへ(卦を施)き、以て物事の吉凶禍福を説くもの。宇宙社會に於ける幽明臨臨のあらゆるものを網羅するに非せらる。支那上古、伏羲氏

の創始にかり、後世の演繹と稱せらる。支那上古、伏羲氏の創始と稱し殷の易を臨臨と稱すれど共に傳はらず今傳はるは周の易にして、其經典を易經といひ、五經の一たり。

えき【益】(名) けりえき。りやくとく。まうけ。

えき【液】(名) 流動する物質。えき。

えき【役】(名) はやりやみ。流行病。

えき【驛】(名) うまや。まよ。停車場。

えき【役】(名) 人民を徴發して公用に使ふこと。えだち。ぶやく。官府の工事又は國家の戦争、其人民を徴發使用するよりいふ。明治二十八年の「一」。

えき【えき】(名) 力を勞するさま。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【か】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。



【がきえ】

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えき【えき】(名) ちまのた。わき。て人馬の獨立を取扱ふ家。

えきひ [液肥] (名) 液體の肥料。

えきひょう [疫病] (名) はやりまひ。

えきふ [驛夫] (名) 驛に届つたけのんぶ。

えきより [會行事] (名) 佛延曆寺大倉の奉行。

えきゆり [益友] (名) 我に利益を興ふる友人。

えきり [疫病] (名) 傳染病の一、赤痢の急性且悪性なるもの、主として小兒を襲ひ、往々死に至る。

えきれい [驛鈴] (名) 古昔、官人の諸國へ赴くとき、朝廷より賜はりし鈴、驛路の人馬を徴發するの公の表章として報り鳴らししもの、えきろのすず。



〔鈴〕

えきろ [驛路] (名) うまやぢ。まよくば。

えきのすず [驛路鈴] (名) えきれい。

えぐし [慾] (形) 「まぐし」を見よ。

エクスタシス [Ecstasy] (名) 精神を一觀念に集中し、我を忘れたる状態。

エクセントリック [Eccentric] (名) 風変わり。奇矯。偏見。

えくぼ [罈口] (名) 「まぐし」を見よ。

えげ [慧解] (名) 佛智慧によりて事理を理解すること。

えげん [會下] (名) 佛僧の下に會集して參學する學徒。門下。

えげん [會下寺] (名) 佛會下僧の居る寺。

えげん [慧劍] (名) 佛智慧のよく煩惱を斷ずるを、利劍のよき物を斷ずるに譬へいふ。

えげん [慧眼] (名) 佛差別妄執を離れて、實在の眞理を見よ。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えご [依怙] (名) かたじけなく。へんば。

えこ [回向] (名) 己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えこ [回向] (名) 佛の己の修したる善行の功德を他に回し向く。

えきか [繪探] (名) 繪の中に分らぬやう他のもの形をかき込み、これを採し求むること。又、其語。

えきんきい [會三歸] (名) 佛聲聞緣覺菩薩の三乘は各別なりとの謬見を破して、三乘は即ち一乘なりとの悟道に歸せしむること。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

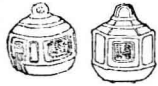
えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。

えきら [不得遊] (副) よんどころなく。えきたなく。



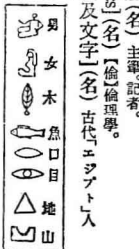
〔罈〕



〔香罈〕



〔草花〕



〔男女、鳥口、地山〕



えせろーえた

あるくもの。一や「繪雙紙屋」(名) 錦繪を販賣する店。えせろーふもく「依草附木」(名) (草) により木につく。文(佛)道理の眞源に向かひ突進して研究し得ず徒に言語・文字の末に拘泥するに似る。

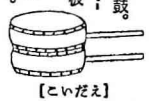
ける斜なる束。一「つき」枝附(名) えだぶり。一「つたひり」枝傳(名) 枝より枝へ傳はり行く。一「なぐれ」枝流(名) えだは「は」枝葉(名) えたに葉。【事物の末。すなわち】の議論。一「ぶり」枝振(名) 枝のやうす。一「まめ」枝豆(名) 大豆の莢置の枝にきたるままのもの。一「みち」枝道岐路(名) (本道よりわかれ出でたる支路。よこみち。【本筋より分かれたる】。議論に入る)。

えだ「大」(名) ①「徳」室の支出部、即ち股芽の中軸部の生長したるもの。【手又は足、即ち、體軀の支出部】。【枝】本より分出たるもの。一「河」(支)。一「あふき」枝扇(名) 古昔の體式に、草木の枝を扇に代用せしもの。一「うち」枝打(名) 樹木の下部に於ける枝を伐つもの。一「うり」枝移(名) 枝より枝へ移るもの。一「えだ」枝劣(名) ①えだの幹よりおとりたる。②子孫の父祖よりおとりたる。一「がき」枝柿(名) ①枝につきたる柿の實。②くしがき。一「がは」枝川(名) (地) 本流より分れ出でたる水流。又、本流に流れ込む水流。(支流。一「がみ」枝神(名) 本社に附隨してまつる末社。一「ぐり」枝栗(名) 枝にきたる栗の實。一「ざし」枝差(名) ①「枝珊瑚」(名) 樹枝の状をなしたる珊瑚樹。一「ざん」枝下(名) 最下位の枝より根元までの枝。一「さやくととり」枝尺蠖(名) 【動】翅類の昆蟲、幼蟲は桑の葉の如き擬態をなし、皮膚も亦灰褐色にして楕圓に類す。二回脱皮して蛹を作り蛹となり、尋で蛾となる。蛾は中形にして、翅は灰黒色を呈し、前翅に二條、後翅に一條の黒色なる縁紋あり、枝葉背に産卵す。一「まろ」枝城(名) 本城の外に設けたる出城。で左所。一「ずみ」枝炭(名) 炭家にて置に用ふる炭。【つじ】の小枝を焼きて造り、上に胡粉を塗る。まろずみ。よこやまずみ。一「づか」枝束(名) 小屋組に於

えだ「い」えちこ ①「柄太鼓」(名) 柄の附けてある太鼓。えだく「み」「畫工」(名) あかき。あま。一「のつか」畫工司(名) 古昔、中務省の彼官にして、繪畫・彩色等の事を掌りしつかさ。えだち「役立」(名) 國體を徵發して公務に使用する。とぶやく。へんえき。役。に徵發す。えだつ「つたひり」役立(自) 夫役にあたる。エターナル[Eternal] (名) 永遠なる。永劫なる。一「ライフ」[Eternal life] (名) 永遠不滅の生命。エターニチー[Eternity] (名) 永遠。無窮。不滅。えたりかし「し」得賢(名) 賢む所にかなふと思ふつはにはまる。えたりが「ほ」得願(名) 得意なるかほつき。えたりや「感」うまく行きた。あめり。一「おう」感うまく受け又は仕達けたるときなどに發する聲。えたる「柄樽」(名) 大きく高き柄を附けて朱塗とせる樽。酒を人に贈るときなどに用ふ。の。だる。エター[Ethel] (名) 【化】度化。水素の一、無色無臭の五素にして石油を産する地方より石油と共に發出し、淡き煙を擧げて燃ゆ。えち「かたひり」越後帷子(名) 越後上布又は越後縮にて仕立てたる帷子。えち「ま」越後獅子(名) 越



【蠶尺杖】



【こいだえ】

【二】子獅子越

後國津原郡の神社にて行ふ里神樂の獅子舞。越後國津原郡月海村附近より出づる獅子舞、初夏より節園を廻歴し、秋末に歸郷、小童獅子頭を被りて種々の藝をなす。かくべま。【江戸長門の曲名。】えち「ま」越後縮(名) 越後國魚沼・刈羽・頸城の三郡よりおもに産出する縮、からむしにて織りたるもの。質甚だ強し。えち「ご」越後布(名) あちごちぢみ。えち「り」越後流(名) 軍樂の一、越後の入澤崎主水を祖とし、承應頃に起る。宇佐美定行の奥旨を傳ふと稱せる。【練信流の異稱。】一「曲」練音曲。エチニード[Ethel] (名) 音楽にて、樂器の練習に資する樂えち「う」提燈(名) 薄紙にて貼(はり)て繪をかきたる提燈。夏夜、軒先などに吊して點火し、其涼味を弄ぶ。枝葉掲燈最も有名。エチルアルコール[Ethyl alcohol] (名) 【化】通俗に「アルコール」又は酒精と稱するもの、普通に澱粉若しくは蔗糖より製造す。エチルエーテル[Ethyl ether] (名) 【化】エーテル(二)。エチレン[Ethylene] (名) 【化】アルコールと硫酸とを熱して生ずる無色の氣體、燃ゆるときは光輝著し、「ハロゲン」と化合して油の如き物質を作る。に生油氣といふ。えつ「調」一「あめみえ」えつけん「一」を賜ふ。【なふだ。めい「一」を通過す。】えつ「挽」(名) よろごぶと。うれしがると。【一】に入る。えつ「関」(名) けみする。まらぶると。【てがら。年勞。【一】へがら。繁枯。】えつ「き」役調(名) えだちとみつぎと。えつ「き」囀吐(名) 「まづき」を見よ。エックス[X] (名) 【アルファベット】の一、數學にて未知數



【二】子獅子越

えちこーえつき



えとこーえとひ

がてんする。(ト)承知得。

えとごころ(一)輪所(二名) 禁中にて、重事を掌りし官司、も  
と監工司といふ。またくみのつかさ。 神社佛閣にて、重事  
を掌りし所。春日。

えとぎ(江戶座)(二名) 俳諧の一派、芭蕉の歿後に賢弁其角  
の起こしもの、正風に基かれたる談林風をも加味し、華か  
なる江戶趣味を發揮したるを特色とす。

えとぎくら(江戶櫻)(一名) 櫻よしのぎくら。  
えとぎまたら(江戶櫻)(一名) とくがはまたら。  
えとぎゆんれい(江戶順禮)(一名) 昔時、江戶の富家又は  
茶屋の騎女などが、衣服を著飾りて順禮の姿をなし、市中の  
寺院を巡拜せしこと。

えとぎまよりり(江戶浄瑠璃)(一名) まよまより。  
えとご(江戶兒)(一名) 父親の來江戶に生ひ立ちたる  
人。 江戶時代の慣用語。江戶人の慣用する俗語。

えとづま(江戶棧)(一名) 衣服の前身と  
椀との裏表に斜に模様を染め出したる  
もの、徳川幕府の大興より始まれり  
といふ。 一もよう(江戶棧模  
様)(一名) 前後同様。

えとづつめ(江戶詰)(一名) 徳川時  
代に諸國の大名が江戶の藩  
邸に駐在して勤務に服したること。

えとながうた(江戶長唄)(一名) 江戶の劇場にて、行屋一  
派のうたははじめたる長唄。

えとばくふ(江戶幕拂)(一名) とくがはばくふ。  
えとばらひ(江戶拂)(一名) 徳川時代の刑罰、追放の一に  
して、江戶市より放逐せしむ。

えとびりか(名) (あいな語) Eritriska  
美しき彫(鳥)短翼種の海鳥、體幅は小鵜  
大嘴は大幅にて側彫、鵜方赤く根方黄に  
して、上嘴は翼より數段に區分せらる、羽色  
は上部煤色にして下部灰黒、眼上より後方に  
向かり淡黄色の羽毛を生ず。我國にては千島及北海道に産す。



[かりびとえ]

えとふーえなめ

えとふし(江戶筋)(一名) はんだいふよし。  
えとふんがく(江戶文學)(一名) 徳川時代に、江戶に勃興  
せし文學、日本文學史中、明治以前最も盛感を呈したるもの。

えとふらさき(江戶紫)(一名) 紫色の名、藍がちの紫色にし  
て、江戶に行はれしより此名あり。

えとら(江戶桃)(一名) 桃げんべいも。  
エトランジエ(江戶前)(一名) 異國人。旅人。  
えとどり(輪取)(一名) ちとと。

えとどる(江戶どる) (輪取) (他ら) さいまぐ。いろど  
る。 書きたる字の上を更に墨を以て塗る。  
えな(胞衣) 胎児を包める膜及其胎  
盤。一書(胞衣著)(名) 子供の宮  
腔に産衣の上に著する一種の服。

えな(胞衣襦)(一名) えなを入れて、土  
中にうづむるまげもの。おしをけ。 一をさめ(胞衣納)  
(一名) 産後五日目又は七日目に、胞衣を密に納めて土中に埋  
入する儀式。



[ぎなえ]

えなが(柄長)(一名) (動) から類の小禽、頭上白色、背部は  
黒色と淡赤色とを雜へ、下面は一體に白し、尾は體長に倍し  
て杓子の柄の状をなす。夏季、山中にて普通し、秋季、群をな  
して平原に下り渉せり。

えなく(一)自(一)本(一)なく(一)を見よ。  
エナジー(Energy)(一名) (理)仕事をなし得る能力、其  
量は其なし得る仕事を以て測る。エナジーに二種あり、  
運動的「エナジー」及び位置的「エナジー」とこれなり、「エナ  
ジー」には熱・音・光・電氣・磁氣等の諸態あり、要するに  
此二種の外に出ず。 (事)事をなし得る元氣・精力。 (一)の保  
存(Conservation of energy) (理)宇宙間にある諸物  
質の有する「エナジー」は、種々其態を變じ、或は一體より  
他體に移行すといへど、其總量は常に一定すとす。

エナジズム(Energism)(一名) (倫)精力主義。 (的)  
エナジチック(Energetic)(一名) 元氣旺盛なること。精力  
エナメル(Enamel)(一名) 珐瑯。釉藥。 一がは(一)革

えならーえのく

えならす(副) いよいよはれず。得もいはれず。  
えに(縁)(名) えんゆかり。通ふばかりの。 一し(縁)  
えにき(いは) (會)二歸一(一名) (佛)雙關縁覺の二乗を、  
あはせて吾儕來に歸せしむること。

えにぐま(白呂兒)(一名) 肥語。 肥  
えにまだ(並直立)(一名) 三寸乃至一丈餘、細枝は叢生して  
叢せたる。莖は直立し、高さ五尺乃至一丈餘、細枝は叢生して  
深緑色、葉は三箇の小葉より成る複葉なれど、退化して形極  
めて小く且甚だ味、初夏、葉腋に黄金色の蝶形花を開き、葉を  
結ぶ樹皮の纖維は強韌にして種々の用に供せらる。

エネルギー(Energy)(一名) エナジー。  
エネルギッシュ(Energetic)(一名) エナジチック。  
えのあふら(荏油)(一名) えごまの種子より採取したる  
油。桐油紙などに用ふ。

えのき(稔) 朴加條木(一名) 植(檢) 唇の寄葉香木山  
野に自生す。幹の高さ六丈周圍一丈  
五尺に達す。樹皮厚滑にして、帶黒褐  
色に灰色の斑點あり、葉は楕圓形に  
して先端尖り、上部に鋭齒を具す。夏  
の初、淡緑色の花を開く。果實は小豆  
大にして、球形の木材は種々の用に供せ  
らる。徳川時代に、諸傳道の一里塚に此樹を植ゑたり。 一  
ぎ(稔草)(一名) 植(あ)みがま。 一だけ(稔草)  
(一名) (植)高等植物の一、えのき又はやなぎ等の樹幹に  
寄生す。莖葉は黄褐色を帯び、食用に供すべし。

えのき(繪具)(一名) 繪具の彩色に用ふる物料。(顔料)。  
一さら(繪具皿)(一名) 繪具を漬し又は研るに用  
ふる皿。 一は(繪具箱)(一名) 繪具を入れて保存又は



[きのえ]



上、分配の出来ざる餘錢。——まつり「惠比須祭」(名)  
えびすね(名)「植」れもか。(地巻)。「えびすか。」  
エピソード [Episod] (名) 文章又は説話の中にて、筋に開  
保なく挿む小話。挿話。

えびちゃん(葡萄茶)(名) 黒みを帯びたる赤茶色。——赤  
きぶ(葡萄茶式部)(名) (もと女學生の多くえびちゃん  
の袴を穿しよりいふ) 女學生の異稱。

えびつば(繪楮)(名) 彩色繪ある  
飯楮形の曲物。昔時、雛節句に  
草餅・赤飯などを入れしもの。

エビック [Epic] (名) 叙事詩。  
英雄詩。

えびづる「斐蕨」(名)「植」葡萄の科の蔓生草本、山野に自  
生す。春根より發芽す。莖・葉共に小さく、葉は互生して掌状  
に分裂し、下面に淡赤色の毛を密生す。夏日、葉腋より花枝を  
抽出き、複總狀花序をなして多數の小花を實す。花は淡黄色。

えび(ね)(名)「植」蘭科の多年生草本。山林に自生し、又、庭園  
に栽培せらる。根は節多く海老の背に似る。葉は長くして闊  
し、葉の末々全開かざるに、葉間に花茎を抽出き、總狀花序  
をなし小花を覆す。花筒は帯薄紫色を呈す。

えびひめ(花姫)(名) 一のむすめ。「弟姫」。

えびひら(箆)(名) 矢を盛り  
て背に負ふ器。一がた  
な「箆刀」(名) 箆に箆

えびら「箆」(名) 矢を盛り  
て背に負ふ器。一がた  
な「箆刀」(名) 箆に箆

えびら「繪片」(名) 繪畫を描きたる片。



〔櫻繪〕



〔扇〕

エビログ [Ebi-log] (名) ①結論。跋文。②演劇又は映  
畫にて、最後に述ぶる納めの臺詞。

えふ「衛府」(名) ①官門の警備を司るつかさ、即ち近衛  
府・兵衛府・衛門府の總稱。②衛府に出仕する官人。——の  
かみ(衛府督)(名) 衛府の長官。——のすけ(衛府  
佐)(名) 衛府の次官。——のたち(衛府太刀)(名)  
古昔、武官の帶せし太刀、柄に毛抜形の目貫ありて帶取に革  
緒をつく、一に毛抜形太刀又は革緒太刀といふ。

えふ「繪持」(名) 品物につくるまるしふだ。

えふ「厭舞」(名) 「えんぶ」の略。

エフィシエンシー [Efficiency] (名) 能率。

エフェクトチフ [Efective] (名) 效果。有有效的。

エフエクト [Effect] (名) 結果。效果。

えおな「江鈔」(名) ①動「すばしり」。(京阪の方言)。  
えおみ「二繪踏」(名) 徳川時代の宗門改に、切支丹宗にあ  
らざるを証するため、踏繪をふませしと、(踏繪参照)

えおり「柄振」(名) ①土塊を砕きて地を均せらすに用ふ  
る大製の鋤。(柄) ②「えお」柄振板(名) 鋸又は出桁  
等の端を隠すために取附く化粧板。

エープリル [April] (名) 四月。—— fools (April fool)  
(名) 毎年四月一日に、知人の互に虚言もてかつきあふ歐米  
エープリル (April) (名) 西洋風の刑罰。「の習慣。四月馬鹿。

えへん(怒) せきばりの聲。

えほり「惠方」(名) ①吉方に作り、えはうと訓す  
あまのた(明方)。——まあり「惠方語」(名) 正月元日  
に、惠方にあたりたる神社又は佛前に参詣すること。

えぼろ「あま」繪奉書(名) 錦繪の色刷用に供する奉書  
えぼろ「鳥帽子」(名) 「えぼろ」を見よ。

エポック [Epoch] (名) 時代。時期。——メーカー (Epo  
ch-making) (名) 新紀元を開くこと。新時代を創すること。  
創期的。——メーカー [Epoch-maker] (名) 新時代を  
創する人。創期的人物。

エボナイト [Ebonite] 硬化護膜(名)「化」(性)「ゴム」  
に、高き温度に於て多量の硫黄を吸收せしめたるもの。弾性  
を失ひて黒色の角の如し、電氣の絶縁體として、電氣器械に  
用ひられ又、種々の製作に用ひらる。

エボバ [Ehoban] (名) (意) 上帝。天帝。

エボリューションニスム [Evolutionism] (名) 進化論。

エボリューション [Evolution] (名) 進化。

エポレット [Epolette] ①げんえん(肩章) ②婦人用洋  
服の肩の上に著くる裝飾。

えほん「繪本」(名) ①まぎま(一) ②までほん。——  
ばんづけ(繪本番附)(名) 芝居番附の、幕々の狀を描  
き、傍に役名と役者の名とを記し、表紙に脚本標題をある  
せる小冊子。

えま「繪馬」(名) 馬の繪をかきたる額、馬匹  
の代りに神社佛前に奉納するもの。轉じて神  
社佛前に奉納する繪の額。——ぞん(繪馬  
殿)(名) あまだら。——どろ(繪馬  
堂) ①や(繪馬屋)(名) 繪馬を賣る家又は人。

えまう「笑」(自) 「えまふ」を見よ。

えまきものは「繪巻物」(名) 繪畫の贖物に對し、繪畫を  
巻物にして詞書を添へたるもの稱。

えまし「笑」(形) 「えまし」を見よ。

エマナチオン [Emanation] (名)「化」(ラジウム)より分  
解放射する一種の氣體、まげば腎臓上に使用せらる。

エマネーション [Emanation] (名)「崇」キリスト教に  
て、天地萬物は神の創造にあらすて、神より出願したるもの  
なりとなす説。

えまはし「し」(形)「得欲」(形)「二) のぞまし。ねがはし。

えみ「笑」(名) 「えみ」を見よ。

エミグレーション [Emigration] (名) 出稼。移民。

エミシ「蝦夷」(名) 蝦夷類の古稱。

エミュー [Emu] (名) ①走禽類の鳥、形鵝鳥に類し、身長  
五尺以上に達す、嘴短くして扁平、頸長く脚強し、兩翼短小に



〔馬繪〕



して飛翔の用をなす。オーストラリアに産す。

**エム M** (名) Moneyの頭字金  
錢の略語。

元む「笑」(自)「まむ」を見よ。

元むしろ「綸席」(名) 花

エメラルド Emerald (名) 緑 緑柱玉の一種にて深緑色にして光輝美艷なる寶石。一りよく「緑」 Emerald Green (名) 化 醋酸銅と亜硫酸銅とより成る緑色の顔料。

エメキ Emecky (名) 錫 錫玉石の一種、硬度の金剛石に次ぐを以て、粉末となして研砕用に使はれる。一「ペーパー」 Emery paper (名) やすがみ。

エモーション Emotion (名) 感動。感情。情緒。

元も蒸「繪文字」 Pictograph (名) 北米、インディアンの土人間などに行はれたりし一種の文字、簡素なる図畫を以て觀念を表象せるもの。

元もとゆひ「繪元結」(名) いれもとゆひ。

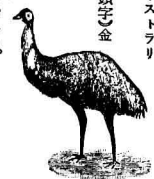
元もの「獲物得物」(名) 狩獵又は漁撈にて得たる鳥獸魚貝。①自分の持手なる武器。「をひさげて」。②得意なもの。えても。

元ものがたり「繪物語」(名) 繪入の物語本。

元もり「柄漏」(名) 傘の柄の上より雨の漏るる。

元もん「衣紋」(名) 衣服縫束の著方。①着物の襟を合はすところ。②かがみ「衣紋鏡」(名) 衣紋をつくらぬに用ふる鏡。③かか「衣紋掛」(名) 小さま種の中身に紐を取附け、衣服を掛けて物に用す用具。④け「衣紋家」(名) 衣服の制度及着用等の事を掌り、特に主上の御衣を掌りし家。⑤ぎを「衣紋竿」(名) 衣服をかくるために用したる竿。⑥だけ「衣紋竹」(名) 竹製の衣紋掛。

元もん「衛門」(名) まん「衛門」(名) のかみ「衛門督」(名) 衛門府の長官。①のすけ「衛門佐」(名) 衛門府の次官。②ふ「衛門府」(名) 古昔、桑中諸門の禁衛



[一エミエ]

非違の巡檢、及門衛門勝等を掌りしつかさ。

元やみ「疫」(名) 病(疾)流行性の悪病。はやりやみ。ときのけやくびやう。(ウ)おこり(總)「一々」疫草(名)「種」なりんどう。「の」かみ「疫神」(名) 祭神疫をつかさどるといふ神ややくびやう。

元よりけ「榮耀」(名) さかえ。えいぐわ。(ウ)おごり。せいたく。「えいがわ」(名) 榮耀榮華(名) 生活にはせいたくをせむ。世間には福をかかす。「ぐひ」(名) 榮耀

食(名) せいたくなる食事をなすこと。美食。「どろく」(名) 榮耀道具(名) 必要な虚飾の道具。「の隠喰」(句) 榮耀をなすもの飽き足ることを知らずして、人の知らざる所に於て快樂を貪るにいふ。「の餅の皮」(句) 榮耀をなすものの飽き足ることを知らざる結果、餅の皮を剥きて食らひ、無用のせいたくをなすにいふ。

元よぼる「役丁」(名) 役(ウ)に出づる丁男。

元ら「鰓」(名) 魚鰓類其他水棲動物の呼吸器、動物によりて其形状位置等を異にし、いづれも血液中の炭酸瓦斯を放出し水中の酸素を吸入する作用を営む、普通の魚類にては、頭の兩側に數對ありて、赤色鰓室をなし、鰓・鰓等にては、胸の兩側に十數對ありて羽状をなし、貝類にては、體の兩側に垂れて幕状をなせり。「あな」鰓孔(名) 鰓(動)魚類の鰓室の後面に開口せる裂孔、魚の呼吸によりて水を吸收、排出する所。「こ」鰓蓋(名) 鰓(動)環蟲類の一種、體長三四寸、細長き管内にあり、海岸に群を成して附著す、釣魚の餌として食用せらる。「ぶた」鰓蓋(名) 鰓(動)魚類の鰓を蓋ひて保護せる骨質の薄片、前端は頭骨に繋ぎ、外縁に瓣膜を有す。「ぼね」鰓骨(名) 鰓(動)魚の鰓の構造に瓣膜を支持する弓形の骨。

元ら「ロ」(名) 失語。誤謬。「野球」にて、過失。

元ら「歡喜」(自)「まら」を見よ。

元ら「名」 えらき。又、其度合。

元らし「形」(一) 勝れてあり、非凡なり。「ぎょうざん」なり。湖山なり。「はなはだ」し、ひとし。

えらび「選擇」(名) えらばど。せんたく。一「て」(選者)(名) えらびをなす人。せんざ。

えらぶ「選擇」(他) (四) 多き中より拔きとる。見分けて採る。えら。①擧げて其職に任ず。

えらぶ「永良部」(名) 動 海蛇の一種、大隅國永良郡附近の海に多く産す。體は白色と黒色と交代に輪状を呈す。

えらみ「選擇」(名) えらむ。えらび。

えらむ「選擇」(他、まひ) えらぶ。

えらん「榮耀」(名) 盛(た)こぎ。

えり「標」(名) 衣服の頸をめぐりて前に交はるべき部分。袷。「頸のえりに當たる部分」。

えり「鮎」(名) 河川湖沼等にて魚を捕る一種の裝置、水中に竹筥を建て、細長く屈曲したる袋状に作り、魚の入り易く出づるに難きやうに構へたるもの。

えりあか「標垢」(名) えりにつきたる垢。

えりあし「標脚」(名) えりにつきたる足。

えりあて「標當」(名) 衣服の襟の裏にあてて、其汚れを防ぐ。

えりうち「選討」(名) 戰場にて、然るべき敵をえらびて討ち取ること。一「なとも」可仕。

えりうら「標裏」(名) 襟の裏につくるきれ。うらら。

えりおしろい「領白粉」(名) えりくびにつくる白粉。

えりかさ「標飾」(名) 洋服の襟につくるかさり、襟珍殿子。細なにて作る、其形種々あり。ネツグタイ。

えりかた「標肩」(名) 衣服の前後の身頃(ウ)の肩にあたる

えりがみ「領髮」(名) うしらがみ。一「境目」。

えりくら「領」(名) えらびとりたる襟りくづ。「物。股物。正。すきらひ」。

えりくづ「領屑」(名) えらびとりたる襟りくづ。「不用」。

えりうら「領先」(名) 衣服の袷の下のはし。

えりあ「標章」(名) 陸海軍の兵種・所屬等を表示



[きなうぶらえ]

えりしーえろく

すため、軍服の襟に施せる色又は徽章。

えりあん(襟元)(名) 衣服の襟に入れたるあん。又、其あんとする意思なる木綿。 [て抜き採る]

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えりすく(る) (他) 「えりすく」の語。

えろみーえろと

エルミン [Ermine] (名) [動] 食肉類の小獣「アジアカン」ヨーロッパ「アメリカ」の北部寒道約地方に産す。形状頭鼠(す)に類し、身長約一尺、尾端黒く腹部白し、背部は冬に白色となり夏に赤褐色に變ず。陸上に常棲し、時には水中に入る。毛皮高價なり。



[シミルエ]

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

エレガント [Elegant] (名) 優美。優雅。

えろふーえん

エロブレン [Aeroplanc] (名) 飛行機。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。

えろぶ(父) (名) 父の兄。



元んかー元んき

元んきー元んき

元んくー元んけ

元んかつ〔元カ〕〔圓滑〕(名) ①かどたすなめらかなる。②故障なく行はるゝ。

元んかづら〔縁葛・椽梁〕(名) ①切目縁の束の間に取附け

元んがのさび〔垣下座〕(名) ①墾業に相伴する人の座。

元んがのまひ〔下舞〕(名) ①垣下の座にて行ふ舞。

元んがはら〔縁側・椽側〕(名) ①座敷外にある板敷の通路。

元んかまち〔縁框・椽框〕(名) ①椽縁の束に取附けて、

元んがとる〔艶〕(自・四) あだあだしさをなす。

元んかん〔捐箱〕(名) ①居館を損へて去る費。貴人の

元んかん〔煙管〕(名) ①煙煙の通過する管。②キセル。

元んかん〔鉛管〕(名) ①なまり製の管。

元んかん〔沿岸〕(名) ①水流通又は海洋にそひたる岸。

元んかん〔沿岸海〕(名) ①海洋に接する部分沿岸地の總稱と見做され、其

元んかん〔沿岸流〕〔littoral current〕(名) ①海岸に沿ひて

元んかん〔遠岸〕(名) ①遠岸の岸。②流るゝ潮水。

元んかん〔遠眼鏡〕(名) ①遠視眼用の眼鏡。

元んかん〔遠頭〕(名) ①後漢書に出づ。遠隔の

元んかん〔圓函數〕〔Circular function〕(名) ①三角函數の値が與へられたるとき、これに對する角度を

元んかん〔鹽基〕〔Base〕(名) ①化酸を中和して鹽を生じ得

元んかん〔鹽基酸〕(名) ①化酸の稱、其分子式の水蒸が、金屬に置換せらるゝ故に名づく。水蒸原子の數に從

元んかん〔延期〕(名) ①期限を延ばすこと。

元んかん〔遠忌〕(名) ①遠くへだたりたる年忌。

元んき〔縁起〕(名) ①佛・因と縁と相應じて萬法の起る

元んき〔縁起棚〕(名) ①社寺の縁起

元んき〔縁起直〕(名) ①縁起の悪しきをはらひよむと。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。

元んき〔縁起を祝ふ〕(名) ①縁起を祝ふ。



〔碓形圓〕

元んく〔厭苦〕(名) ①いとひくるしむと。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

元んく〔縁組〕(名) ①えんをむすびて姻族となる。

えんげん(延言) (名) うらみのことば。  
えんげんどう(延彦道) (名) (支那晋代の人の名、其博奕に長じたるより、ふ博奕の異稱。

えんご(縁故) (名) ゆかり。たりより。よしみ。ちなみ。つづらひ。えんづき。えんづかい。

えんご(掩護) (名) おほひまると。かひまると。たい(掩護隊) (名) 或目の物を掩護する任務にあたる部

えんご(懇語) (名) うらみのことば。  
えんご(援護) (名) たすけまると。

えんご(圓光) (名) (佛) ごとく。  
えんご(猿猴) (名) (動) 猿猴類の總稱、又手長猿の特稱。さる。すぎ(猿猴杉) (名) (植) 杉の變種、盆栽

又庭樹として栽培せらる。葉は杉に似て開かず、枝梢著しく伸長して猿猴の手の如し。そう(猿猴草) (名) (植) 毛茛(毛茛) 科の宿根草。水邊に生ず。葉は地に就き延び、葉は圓形心臓状にして、長き花莖を有す。花は小形黄色、盆栽として高く釣る時は、花莖は垂れて手長猿の手の如きより此名あり。るい(猿猴類) (名)

(動) 人類に最も近い動物、體は直立し四肢皆手の作用をなす、指端に扁平な爪あり、全體毛多けれど面部に毛少く、口吻短くして唇唇舌大に類す。性活潑喧嘩にして狡猾あり、よく他を模倣す、果實・昆蟲等を食ふ。さる。ちやうやう等これに屬す。月を取る(句) (僧祇律に出でたる寓言、得らるべきものを望みて、ために命を失ふに譬へい。

えんご(掩護) (名) 敵軍に對して人馬・材料を掩護するたに設くる壁。  
えんご(遠交近攻) (名) 支那戰國時代

に、秦の范雎のたして策、遠き國と交りて近き國を攻め取るを、今も猶ほ支那の外交には、其遺策を承繼す。  
えんご(圓類) (名) (動) 魚類の一、體形は鱧(鱧) に似皮層滑かにして鱗なし、漏斗状の口を頭端に有し他物に吸着す、八目鱧等これに屬す。



[草猿猴]

えんご(遠國) (名) 遠くへだたりたる地方、とはきくに(遠地遠境)。い(遠國奉行) (名) 徳川時代、遠隔にある幕府の直轄地に於ける政務を取扱ふために派遣せらるる奉行。

えんご(延胡索) (名) (植) 罂粟科の多年生草木、支那の原産、地下に塊莖あり、莖高七八寸、葉は二回分裂して端尾のもの

は稍卵形をなし、全株にして時に缺刻を有す、四月頃、花莖を頂上に抽き、總狀花序をなし、碧紫色の花を綴る、扁小なる果實を結ぶ、塊莖は藥用に供せらる。

えんご(怨恨) (名) うらみ。  
えんご(宴座) (名) うらみなげと。

えんご(宴坐) (名) (佛) 足を組みてやすらかに坐する。えんご(縁坐) (名) まきぞへ。かかりあり。

えんご(圓座) (名) くるまざ。まど。

えんご(圓座柿) (名) (植) 柿の一種、實大くして圓し、蒂部に近く圓座を凸出す。い(圓座) (名) 冤罪(名) 無實の罪。

えんご(冤罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。

えんご(宛罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。

えんご(宛罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。

えんご(宛罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。

えんご(宛罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。

えんご(宛罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。

えんご(宛罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。

えんご(宛罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。

えんご(宛罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。

えんご(宛罪) (名) 無實の罪。  
えんご(宛罪) (名) 無實の罪。



[くさごんえ]

用に供し又は藥劑として用ひらる。い(カリ) (鹽酸加里) (名) (化) えんそさん、カリウム。

えんさん(演算) (名) うんさん。  
えんさん(鉛算) (名) (支那古昔、鉛を以て筆) に文字を書せしに出づ。

えんさん(紙と筆) (名) (詩) 文を草すると、い(従事) せしに出づ。  
えんさん(遠山) (名) 遠く見ゆる山、とはやま。

えんさん(眉) (名) 遠山の色にも譬ふべきおだやかにして品なき眉の眉(句) 遠山の色にも譬ふべきおだやかにして品なき眉  
えんさん(雁脚) (名) くづつまは。い(雁脚) うづつかり。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。い(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。



[うちぞんえ]

用に供し又は藥劑として用ひらる。い(カリ) (鹽酸加里) (名) (化) えんそさん、カリウム。

えんさん(演算) (名) うんさん。  
えんさん(鉛算) (名) (支那古昔、鉛を以て筆) に文字を書せしに出づ。

えんさん(紙と筆) (名) (詩) 文を草すると、い(従事) せしに出づ。  
えんさん(遠山) (名) 遠く見ゆる山、とはやま。

えんさん(眉) (名) 遠山の色にも譬ふべきおだやかにして品なき眉の眉(句) 遠山の色にも譬ふべきおだやかにして品なき眉  
えんさん(雁脚) (名) くづつまは。い(雁脚) うづつかり。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。

えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。  
えんさん(遠視) (名) 遠きを見と。い(遠方) の見ゆると。



—すほうい—圓錐圖法(名)「地」あんすとうえ  
sはふ。—さうえいほう—「圓錐投影法」(Conic  
projection) (名)「地」地球の表面を圓錐面に投影し、これ  
を展開して平面とした地圖。主として地球表面の一部を描  
くに用ひらる。—はく—圓錐木(名)「種」幹長大にて、  
て、枝は下部最も長く、上方に圓錐く短くして圓錐  
形をなす樹木、即ち「すき」「もみ」等。—めん—圓錐面  
—Conical surface(名)「數」直線が定點を過ぎ且定點  
と同平面上にあらずる曲線に常に交はる様に動き且その  
表面の上を定點を界とする。半、地半はこれに對して對頂圓錐  
面といふ、定點を頂點といひ、動く直線を母線といふ、圓へら  
れたる曲線が圓にして、頂點若し圓の中心より立てる垂線上  
にあるときは、これを直圓錐面といひ、其垂線を軸といふ。

えんすい—「潤」燕醉(名)古昔、禁中にて五節帳宴  
試(試)の翌日の殿上人に賜ひし宴。

えんすい—「延」延髓(Medulla oblongata) (名)「生」  
後頭蓋高底部の斜線下であつて下部は脊髄に連なる部分、錐  
體、橄欖體、網狀體の三部分より成り、其中央萎狀窩底は語  
種の神經を發出し、腦の命令の傳達路となり反動路となり、  
又、獨立中樞即ち呼吸中樞、心中樞等となり、生命に最も必  
須なるものなり、殊に呼吸中樞は最も貴重にて、細針の一  
刺刺よく生命を絶つに至る。故にこの部を名づけて生活點と  
えん—「延」延性(Ductility) (名)「理」物質の具有する性  
質の一、引き伸ばし得る。

えんせい—「鹽」鹽井(名)「地」食鹽を含みたる水を汲み取る井。  
えんせい—「厭」厭世(名)「世」うきものとなす。世の中をい  
ふとよ。樂天の對。—か—厭世家(名)「厭」世觀を懷ける  
人。又、よく厭厭する人。—かん—厭世觀(名)「厭」  
「世」世界に對する惡觀。厭世主義。—こ—自家の希望破れ進  
取の意氣退衰し、萬事に對して興味を有せざること。—ち—  
「世」厭世主義(Desertism) (名)「世」此世界は苦惱を  
以て充たせしめて、決して開闢、幸福に到達し得べきものにあら  
ず、現世を脱離して始めて満足を得べしとなす主義。惡觀主

えんす—えんせ

えんせい—「遠」遠征(名)「遠」遠方を征伐する事。—遠方—  
えんせい—「鹽」鹽析(Salting out) (名)「化」或溶液中に鹽  
類を溶かして、油に溶解したものを沈澱し、油に似て而  
かも價値なき石を轉じて、價値なきまがひもの。  
えんせい—「安」安席(名) えんくわいの席。  
えんせい—「演」演說(名) 公衆の前にて、意見を陳述する事。  
—かい—演說會(名) 演說會の會。  
えんせい—「沿」沿線(名) 線路にぞつたる所。  
えんせい—「鹽」鹽泉(名)「地」えんをふせぬ。  
えんせい—「圓」圓舞(名)「舞」圓形の小班を呈する白舞性  
の淫舞。ぜにたむし。

えんせい—「遠」遠祖(名) 遠祖より火兵を以て行ふ戰闘。  
えんせい—「宛」宛然(副) さながら。あたかも。  
えんせい—「鹽」鹽素(Sodium Chloride) (名)「化」氣體元  
素の一、二酸化「マンガ」を鹽酸と共に熱すれば生ず、綠黃  
色にして惡臭あり、空氣より約二倍重し。  
えんせい—「遠」遠祖(名) とはき祖先。まるとつおや。  
えんせい—「覽」覽書(名) けさうぶみ。えんまよ。—あはせ—  
えんせい—「合」合數(名) えんま。あはせ。  
えんせい—「圓」圓名(名) 「ふら」とやが」との義、或物事のあ  
つまつとふ所。人文の一。

えんせい—「圓」圓相(名)「佛」家生の箇々具有せる佛性の、  
圓滿にして缺陥なき意を、表章するために描くまるとる形象。  
えんせい—「圓」圓窓(名) 圓形の窓。まると。  
えんせい—「堰」堰塞(名) せきとむらむら。—こ—堰塞湖  
Dammed lake (名)「地」山崩の土砂又は火山の熔岩等  
の水をせきとめて生じたる湖。  
えんせい—「遠」遠足(名) 遠方へ赴くと。「差止」。  
えんせい—「鹽」鹽素酸(Chloric acid) (名)「化」強き酸

えんせ—えんせ

えんせい—「縁」縁臺(名) としかけだい。  
えんせい—「演」演題(名) えんせつこの題目。  
えんせい—「遠」遠大(名) あさはかならずして規模の大い  
えんせい—「圓」圓卓(名) 市内一圓均一の「タケ」。  
えんせい—「圓」圓卓(名) 圓形なる卓子。—かい—  
「圓」圓卓會議(名) 「政」彼此相交りて著席し、相互に  
腹藏なく意見を交換する國際會議。  
えんせい—「覽」覽立(自、た) あたあだしさまをな  
えんせい—「圓」圓太郎(名) 「圓」太郎といふ諸語家  
が、舞臺にてよく圓者の吹く喇叭をまねて吹きよりのい  
がたくりばあま。—轉じて、市會の乘合自動車。  
えんせい—「鉛」鉛丹(PbO) (名)「化」酸化鉛を空氣中に  
て徐かに熱すると生ずる赤色の粉末、顔料に用ひ又工業用  
に供せらる。たん。—とする相観。  
えんせい—「縁」縁談(名) 夫婦又は親妻子の縁をむすばし相観。  
えんせい—「演」演壇(名) 演説のために設けた一段高き所。  
—せり—演壇占領(名) 「政」議會の議事  
進行を妨害する目的にて、故意に長時間の演説を履行する事。  
えんせい—「遠」遠地(名) とはき土地。—大地にとはさざ  
ること。—「遠」遠地點(Apogee) (名) 「天」白道上

えんせ—えんせ

性を有する化合物、純粹なるものは難燃し、其水溶液は無色  
にして、酸化劑として使用せらる。—えん—鹽素酸鹽  
—Chlorate(名)「化」鹽素酸の鹽類、多くは水に可溶性に  
して、熱すれば分解して多量の酸素を發生する。—カリウ  
ム—鹽素酸加價鹽(Kalium chlorate) (名)「化」水  
酸化「カリウ」の溶液を濃縮して鹽素を通ずるとき生ずる  
無色板狀の結晶體熱すれば分解して酸素を遊離するを以て、  
可燃物に混ずればこれを點火し易からしむ、醫藥、毒物、  
花火又は爆發物等に用ひ。  
えんせい—「鹽」鹽素族原素(名)「化」「ロ」ロゲン」  
えんせい—「延」延滯(名) のびとこほりてはかどらざること。  
「事務」せし時日に應じて微する。利子。  
えんせい—「縁」縁臺(名) としかけだい。  
えんせい—「演」演題(名) えんせつこの題目。  
えんせい—「遠」遠大(名) あさはかならずして規模の大い  
えんせい—「圓」圓卓(名) 市内一圓均一の「タケ」。  
えんせい—「圓」圓卓(名) 圓形なる卓子。—かい—  
「圓」圓卓會議(名) 「政」彼此相交りて著席し、相互に  
腹藏なく意見を交換する國際會議。  
えんせい—「覽」覽立(自、た) あたあだしさまをな  
えんせい—「圓」圓太郎(名) 「圓」太郎といふ諸語家  
が、舞臺にてよく圓者の吹く喇叭をまねて吹きよりのい  
がたくりばあま。—轉じて、市會の乘合自動車。  
えんせい—「鉛」鉛丹(PbO) (名)「化」酸化鉛を空氣中に  
て徐かに熱すると生ずる赤色の粉末、顔料に用ひ又工業用  
に供せらる。たん。—とする相観。  
えんせい—「縁」縁談(名) 夫婦又は親妻子の縁をむすばし相観。  
えんせい—「演」演壇(名) 演説のために設けた一段高き所。  
—せり—演壇占領(名) 「政」議會の議事  
進行を妨害する目的にて、故意に長時間の演説を履行する事。  
えんせい—「遠」遠地(名) とはき土地。—大地にとはさざ  
ること。—「遠」遠地點(Apogee) (名) 「天」白道上

えんせい—「遠」遠征(名)「遠」遠方を征伐する事。—遠方—  
えんせい—「鹽」鹽析(Salting out) (名)「化」或溶液中に鹽  
類を溶かして、油に溶解したものを沈澱し、油に似て而  
かも價値なき石を轉じて、價値なきまがひもの。  
えんせい—「安」安席(名) えんくわいの席。  
えんせい—「演」演說(名) 公衆の前にて、意見を陳述する事。  
—かい—演說會(名) 演說會の會。  
えんせい—「沿」沿線(名) 線路にぞつたる所。  
えんせい—「鹽」鹽泉(名)「地」えんをふせぬ。  
えんせい—「圓」圓舞(名)「舞」圓形の小班を呈する白舞性  
の淫舞。ぜにたむし。

えんせい—「遠」遠祖(名) 遠祖より火兵を以て行ふ戰闘。  
えんせい—「宛」宛然(副) さながら。あたかも。  
えんせい—「鹽」鹽素(Sodium Chloride) (名)「化」氣體元  
素の一、二酸化「マンガ」を鹽酸と共に熱すれば生ず、綠黃  
色にして惡臭あり、空氣より約二倍重し。  
えんせい—「遠」遠祖(名) とはき祖先。まるとつおや。  
えんせい—「覽」覽書(名) けさうぶみ。えんまよ。—あはせ—  
えんせい—「合」合數(名) えんま。あはせ。  
えんせい—「圓」圓名(名) 「ふら」とやが」との義、或物事のあ  
つまつとふ所。人文の一。

えんせい—「圓」圓相(名)「佛」家生の箇々具有せる佛性の、  
圓滿にして缺陥なき意を、表章するために描くまるとる形象。  
えんせい—「圓」圓窓(名) 圓形の窓。まると。  
えんせい—「堰」堰塞(名) せきとむらむら。—こ—堰塞湖  
Dammed lake (名)「地」山崩の土砂又は火山の熔岩等  
の水をせきとめて生じたる湖。  
えんせい—「遠」遠足(名) 遠方へ赴くと。「差止」。  
えんせい—「鹽」鹽素酸(Chloric acid) (名)「化」強き酸

えんせ—えんせ

えんせい—「縁」縁臺(名) としかけだい。  
えんせい—「演」演題(名) えんせつこの題目。  
えんせい—「遠」遠大(名) あさはかならずして規模の大い  
えんせい—「圓」圓卓(名) 市内一圓均一の「タケ」。  
えんせい—「圓」圓卓(名) 圓形なる卓子。—かい—  
「圓」圓卓會議(名) 「政」彼此相交りて著席し、相互に  
腹藏なく意見を交換する國際會議。  
えんせい—「覽」覽立(自、た) あたあだしさまをな  
えんせい—「圓」圓太郎(名) 「圓」太郎といふ諸語家  
が、舞臺にてよく圓者の吹く喇叭をまねて吹きよりのい  
がたくりばあま。—轉じて、市會の乘合自動車。  
えんせい—「鉛」鉛丹(PbO) (名)「化」酸化鉛を空氣中に  
て徐かに熱すると生ずる赤色の粉末、顔料に用ひ又工業用  
に供せらる。たん。—とする相観。  
えんせい—「縁」縁談(名) 夫婦又は親妻子の縁をむすばし相観。  
えんせい—「演」演壇(名) 演説のために設けた一段高き所。  
—せり—演壇占領(名) 「政」議會の議事  
進行を妨害する目的にて、故意に長時間の演説を履行する事。  
えんせい—「遠」遠地(名) とはき土地。—大地にとはさざ  
ること。—「遠」遠地點(Apogee) (名) 「天」白道上

えんせ—えんせ

えんせい—「縁」縁臺(名) としかけだい。  
えんせい—「演」演題(名) えんせつこの題目。  
えんせい—「遠」遠大(名) あさはかならずして規模の大い  
えんせい—「圓」圓卓(名) 市内一圓均一の「タケ」。  
えんせい—「圓」圓卓(名) 圓形なる卓子。—かい—  
「圓」圓卓會議(名) 「政」彼此相交りて著席し、相互に  
腹藏なく意見を交換する國際會議。  
えんせい—「覽」覽立(自、た) あたあだしさまをな  
えんせい—「圓」圓太郎(名) 「圓」太郎といふ諸語家  
が、舞臺にてよく圓者の吹く喇叭をまねて吹きよりのい  
がたくりばあま。—轉じて、市會の乘合自動車。  
えんせい—「鉛」鉛丹(PbO) (名)「化」酸化鉛を空氣中に  
て徐かに熱すると生ずる赤色の粉末、顔料に用ひ又工業用  
に供せらる。たん。—とする相観。  
えんせい—「縁」縁談(名) 夫婦又は親妻子の縁をむすばし相観。  
えんせい—「演」演壇(名) 演説のために設けた一段高き所。  
—せり—演壇占領(名) 「政」議會の議事  
進行を妨害する目的にて、故意に長時間の演説を履行する事。  
えんせい—「遠」遠地(名) とはき土地。—大地にとはさざ  
ること。—「遠」遠地點(Apogee) (名) 「天」白道上

えんせ—えんせ

えんせい—「縁」縁臺(名) としかけだい。  
えんせい—「演」演題(名) えんせつこの題目。  
えんせい—「遠」遠大(名) あさはかならずして規模の大い  
えんせい—「圓」圓卓(名) 市内一圓均一の「タケ」。  
えんせい—「圓」圓卓(名) 圓形なる卓子。—かい—  
「圓」圓卓會議(名) 「政」彼此相交りて著席し、相互に  
腹藏なく意見を交換する國際會議。  
えんせい—「覽」覽立(自、た) あたあだしさまをな  
えんせい—「圓」圓太郎(名) 「圓」太郎といふ諸語家  
が、舞臺にてよく圓者の吹く喇叭をまねて吹きよりのい  
がたくりばあま。—轉じて、市會の乘合自動車。  
えんせい—「鉛」鉛丹(PbO) (名)「化」酸化鉛を空氣中に  
て徐かに熱すると生ずる赤色の粉末、顔料に用ひ又工業用  
に供せらる。たん。—とする相観。  
えんせい—「縁」縁談(名) 夫婦又は親妻子の縁をむすばし相観。  
えんせい—「演」演壇(名) 演説のために設けた一段高き所。  
—せり—演壇占領(名) 「政」議會の議事  
進行を妨害する目的にて、故意に長時間の演説を履行する事。  
えんせい—「遠」遠地(名) とはき土地。—大地にとはさざ  
ること。—「遠」遠地點(Apogee) (名) 「天」白道上

えんせ—えんせ

えんせ—えんせ





きて、和地積極の義を示す天台宗の戒律。——かいだん  
〔圓頓戒壇〕(名) 〔佛圓頓戒を授受する戒壇。——あま  
うに〕(圓頓宗) (名) 〔佛天台宗の異稱。  
えんに〕(艶) (副) 〔あだだしく。あだめきて。——もの差  
ちして。〕(優美) 上品に。

えんにち〔縁日〕(名) 〔有縁日の略〕神佛に何等かの縁故あ  
るにより、祭典・供養を執行する日。〔北野の——〕。——あき  
んど〔縁日商人〕(名) 縁日に露店を出して物を商ふ人。  
えんにちちんん〔遠日點〕(Aphelion) (名) 〔天〕地球  
の軌道にて太陽に最も遠き點。

えんにん〔延任〕(名) 地方官の任期已に満ちたるに、尙ほ  
任期をばして在任せしむること。

えんにん〔延引〕(名) 〔えんいん〕の轉。  
えんねつ〔炎熱〕(名) 夏のあつさ。  
えんねん〔延年〕(名) 〔まほひを延ばすと。長壽。〕(えん  
ねんまひ) 〔延年舞〕(名) 〔植〕えんれいさ  
う——まひ。〔延年草〕(名) 〔植〕えんれいさ  
う。意といふ古昔、寺院にて行はれし僧侶の歌舞。

えんのさ〔宴座〕(名) えんざ(宴座)。  
えんのまた〔縁下〕(名) えんがはのまた。ゆかまた。——  
の箱(句) 世になり他人のためを得ざるものに譬へいふ。

えん力持(句) 徒に他人のために勞して、世に知られざる  
に譬へいふ。——の舞(句) 前後に同じ。——の綴づ  
かひ(句) 窮屈にして自由に働かざるに譬へいふ。

えんのつな〔縁綱〕(名) 〔佛寺院にて開帳のとき、内障り  
り堂前の供養塔へ張りたる白木綱の綱、手にこれに觸るれば、  
開帳の本尊佛に觸れたると同一の功德ありといふ。〕

えんは〔簪馬〕(名) 馬のとほり。  
えんは〔煙燭〕(名) 煙の立ちこめたる水波。  
えんはい〔煙煤〕(名) 書経に「若作和羹、爾惟鹽梅」とあり、  
食物に鹹味を付する鹽と酸味を付する梅との總稱、食味を  
調理すること。轉じて、政務を料理すること。えんはい。

えんにん〔延任〕(名) 地方官の任期已に満ちたるに、尙ほ  
任期をばして在任せしむること。  
えんにん〔延引〕(名) 〔えんいん〕の轉。  
えんねつ〔炎熱〕(名) 夏のあつさ。  
えんねん〔延年〕(名) 〔まほひを延ばすと。長壽。〕(えん  
ねんまひ) 〔延年舞〕(名) 〔植〕えんれいさ  
う——まひ。〔延年草〕(名) 〔植〕えんれいさ  
う。意といふ古昔、寺院にて行はれし僧侶の歌舞。

えんばく〔鉛白〕(White lead) (名) 〔化〕白き粉末の顏  
料、鉛板を酸に浸して、後空気が炭酸に作用せしむるが若  
しくは酸化鉛を酸に溶解して、無水炭酸と通ずればこれを  
得、白色の顏料として實用せらるるれど、人身に害あり。

えんばしな〔縁柱、椽柱〕(名) 〔建〕縁側の外方にある柱。  
えんばん〔鉛板〕(名) 組みあげたる活字版を紙型にとり、  
これに鉛を薄く塗り作る印刷版。ステロ。

えんばん〔鹽盤〕(名) 鹽罐に供する海水を濃厚ならしむる  
ため、たき又はセメントを以て池の形に造りたる鹽盤。  
えんばん〔圓盤〕(名) 圓形の盤。——なげ〔圓盤  
投〕(名) 四四ガンドの圓盤を投げとげす競技。

えんひ〔燕尾〕(名) 〔變〕の美稱、古昔の製作は、燕尾に似た  
りより此名あり。——がた〔燕尾形〕(名) 〔つばめ〕の  
尾の如く、細長くして末端の二つにわかれたるもの。——  
ふく〔燕尾服〕(Evening  
coat) (名) 西洋服の禮服、黒  
羅紗にて製す、二重胸にして、  
上著の下腹のあたりより前をかきおとし、後は割れて燕の尾  
の如し。

えんひげ〔猿臂〕(名) 〔猿の如く手の長きと。〕(手)をの  
えんひげ〔圓匙〕(名) 〔正しくは、えんち〕銅製鑄形の頭  
部に整柄を取附けたる掘土用の工具。  
えんひぎ〔縁引〕(名) 縁放あると、ゆかり。えんち。  
えんひせん〔鉛被線〕(名) 〔理〕数多の細線線を集め、鉛管  
にてこれを被覆したる電線。

えんびつ〔鉛筆〕(Pencil) (名) (もと鉛を用ひしより此  
名あり) 石器にて製したる一種の筆、石器の粉末に水を加へ  
て微細なる粘土を混じり、壓搾して水分を去り、線香の如くに  
製して乾かしたるものを心として、木軸又は金属製象牙製  
の軸に入れたるもの。——がが〔鉛筆〕(名) 鉛筆。  
エンピリシズム〔Empiricism〕(名) 一般に「實」  
えんぶ〔厭舞〕(名) 舞樂の始めに舞ふ曲、左右合舞にして、



〔服尾燕〕

邪鬼を降伏し災殃を消する意のもの  
えんぶ〔圓浮〕(名) 〔梵語〕(ambu) 〔種〕桃金娘の科の常緑灌木、淡紅  
色の花を開き深紫色の果を結ぶ。——  
佛典に傳ふる大藏圓浮洲の大森林中  
にありて、高さ百由旬といふ。えんぶだいい。

——かほろ〔圓浮果報〕(名) 〔佛〕此世に於て受  
くる果報。——あめりか〔圓浮洲〕(名) えんぶだいい。  
——だいい〔圓浮提〕(名) 〔梵語〕(ambudvīpa) 〔佛須  
彌洲の一、圓浮洲・瞻部洲ともいひ、須彌山の四方に位すと  
いふを以て南圓浮地ともいふ、もと印度を指す稱なりしが、  
後に印度以外の諸國をも包含せしめ、終に吾人の住する世  
界の稱となり、更に轉じて、此世の稱となり。——だごん  
〔圓浮檀金〕(名) 〔佛〕圓浮の大林中にあり、果汁流れて  
河底の石を染めて金となしたるもの、色は赤黄にして紫焰を  
帯ふといふ。——の塵(句) 〔佛〕此世の汚れたるものと。

えんぶ〔演武〕(名) 武藝を演習すること。  
えんぶ〔假武〕(名) 武器を用ひざると。戰爭をやむること。  
えんぶ〔忍府〕(名) うらみのあつまる所。「するど。  
エンファサイズ〔Emphasis〕(名) 語勢を強むること。強調。  
えんぶく〔艶福〕(名) 異性の人に愛せらるること。  
えんぶん〔艶女〕(名) えんぶ。けさうぶみ。  
えんぶん〔艶聞〕(名) 色めきたる風聞。  
えんぶん〔艶分〕(名) あままりて挿入せられたる文句。  
えんぶん〔行文〕(名) おほひかくすと。えん(掩)。(二)。  
えんべい〔掩蔽〕(名) おほひかくすと。えん(掩)。(二)。  
——ち〔掩蔽地〕(名) 展望を制限し又は防止する地物  
多き地。——ぶ〔掩蔽部〕(名) 敵の曳火彈又は曲射砲彈  
に對して、人馬材料を掩護する設備。  
えんべい〔援兵〕(名) すくひの軍勢。加勢。  
エンベローブ〔Envelope〕(名) 封筒、封袋。



〔舞隊〕

えんは〔厭舞〕(名) 舞樂の始めに舞ふ曲、左右合舞にして、

えんべい〔援兵〕(名) すくひの軍勢。加勢。  
エンベローブ〔Envelope〕(名) 封筒、封袋。

えんにん

えんは

えんぶ

元んへー元んま

元んへん(縁邊)一名 縁故ある家又は人。元んまは元んぼん(圓圃)一名 そのほだけり。

元んぼん(遠望)一名 ひろきをのぞむ。元んぼん(遠望)一名 遠くをのぞむ。

元んぼん(遠謀)一名 遠きはかりごと。元んぼん(遠謀)一名 遠きはかりごと。

元んぼん(圓本)一名 (改造社が現代全集を刊行せしに始まる)一時期流行せし一冊一冊の刊行書。

元んま(閻魔・焰摩)一名 (梵語 Yama、即ち Yama) (閻魔羅閻の略)冥界の王の死後、其生前の善惡を判じて賞罰を加ふ。



[まんえ]

或は餓鬼界の主といひ、或は地獄菩薩の化身といひ、經說區々なれど、要するに冥界の王といふに歸し、世俗の所信も亦これと一致す、其像も普通の佛像に似て、左に人頭をつけたる盤(て)を持ちて水中に乗れるものを描きしが近頃のものは、支那風の衣服にて、忿怒の相をなす。

元んま(閻魔王)一名 (佛)元んまの尊稱。元んま(閻魔王)一名 元んまの尊稱。

元んま(閻魔蟻・油胡蘆)一名 (動)蟻の一種、一般に黒褐色にして、觸角は絲狀をなして體より長し、前翅短小にして、後翅を扇狀に疊み、其尖端は尾狀をなす、雄は晩秋に美聲を發す、幼蟲は成蟲に似て小さく、無翅なり。豆栗・煙草・銅等を食害す。



[まご]

元んま(閻魔卒)一名 (佛)閻魔に驅使せられ罪人を責責すとす。元んま(閻魔卒)一名 (佛)閻魔に驅使せられ罪人を責責すとす。

元んま(閻魔帳)一名 (佛)閻魔帳にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔帳)一名 (佛)閻魔帳にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んまー元んめ

元んま(閻魔堂)一名 (佛)閻魔を祀してある堂。元んま(閻魔堂)一名 (佛)閻魔を祀してある堂。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。元んま(閻魔)一名 (佛)閻魔にて亡者生前の罪惡を書き留めおくといふ帳簿。

元んもー元んよ

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。

元んも(元んよ)一名 元んよの花。元んも(元んよ)一名 元んよの花。



[菊命延]



[船洋遠]

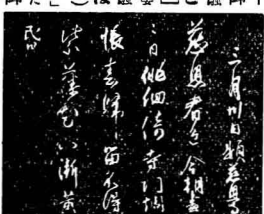


おいおいし

—ばむひんめい(老)(自、三四)老人めく。としりめ  
がむ。—ひがむひんめい(老)(自、三四)年よりて心  
ほく(弱)む。—老者(自、か下)老いて心おろかにな  
る。らうまうす。—ほる(弱)む。老者(自、ら下)  
年老いて心よくなる。おいはく。らうまうす。—ほれ  
【老老】(名) おいはれたる。又、其人。—ほれ【老  
老】(名) 【おいはれ】の謙。—ほれる【老老】(自) 【お  
いはる】の謙。—まづ【老松】(名) 年を積みたる松。  
—むふや【老武者】(名) 老年の武者。【老巧】の武  
者。—やみ【老病】(名) 年よりておろへたるため生  
じたる病。らうひやう。—ゆく(弱)む。【老行】(自、か下)  
次第に年より。—れ【老人】(名) 年老いたる。老後。  
—の二微(句) 年よりてかたくなになり、思ひのたけを  
押しとはさんとする。—の繰言(句) 年よりて心にぶ  
くなり、ひて益なき事をくりかへしふと。—の寝屋  
(句) 年よりたる身の寝場がちなと。—の餅(句) 年よ  
りて心のひがむと。—の病(句) 年よりて體のおろふ  
りより生ずる病。らうひやう。—を送る(句) 老年をおく  
りくらす。—を養ふ(句) 老體の養生をなす。又、老人に  
【笈】(名) 【おひ】を見よ。【よくてあてをなす】。  
【追】(名) 【おひ】を見よ。  
【負】(名) 【おひ】を見よ。  
【甥】(名) 【おひ】を見よ。  
【おい】(名) 同輩又は下位のものに對して用ふ。【呼びかけら  
れて答ふ聲】。【他人をよびかくるに發する聲】。—とこへ  
【おおい】(名) 泣き發する聲。—と泣く。【ゆく】。  
【おおいき】(老木)(名) 年を積み、幹枝などの垂れ屈れま  
りたる木。【轉じて、おおいおろへたる身體】。—に花(句)  
一旦おとろへたるもの再びさかゆるに譬へよ。  
【おいきた】(感) 待ち構へて應ずるときに聲。  
【おいし】(形) 甘味なり。うまし。—【け  
【甘氣】(名) おいしきさま。—【さ】(甘)(名) おいしき  
と。又、おいしき度合。

おいしーおいし

【おいしよ】(感) 注意するときの掛聲。  
【オイスター】(Oyster)(名) 【動】牡蠣。  
【おいとそれと】(副) よく考へず(へ)に。ただちに。  
【おいた】(名) いたづら。わるま(小兒)の語。  
【おいて】(於)接(おきての音便)ありて。にて。  
【おいて】(御出)(名) 【出づ】の敬語。御門を—にて。  
【居】の敬語。與に—あはず。—【おぎよう】(御  
出奉行)(名) 讓合幕府及室町幕府の職名、將軍出行の際、  
扈從の文名を定め路次の行列を整へ、其他一切の雜事を掌  
【おいきばり】(名) おきざり。東京の方言。【りしもの】。  
【おいつる】(來) 出づ(御出)(自、た下) 【行く】、去る。  
【居】に。來る。【出づ】の敬語。  
【おいと】(名) 【おんど】を見よ。  
【おいのり】(おぎよう) 【御祈奉行】(名) 讓合幕府及室町  
幕府の職名、水旱・疾疫其他に關し、陰陽家・佛家等に命じて  
祈禱をなさしむる仕事を掌りしもの。  
【おいはひ】(かた) 【御祝方】(名) 室町幕府の職名、怪例。  
臨時の儀式に際し扈衛を掌りしもの。  
【おいはひぶき】(おぎよう) 【御祝奉行】(名) 室町幕府の  
職名、將軍宣下・任大臣・大參等の儀式に、祭賜を掌りしもの。  
【おいへい】(御家)(名) 貴人の一家の敬稱。【人の妻の  
稱】(京阪の方言)。—  
【おきようげん】(おぎよう) 【御  
家狂言】(名) 寺家騒  
動の狂言。【御家騒動】  
(名) 貴人の一家が、壁  
臣・妾をたのために騒  
動を起すこと。—は  
【御家類】(名) 名  
の數なく滑かに作りた  
るもの。—【御



[流家調]

おいらいおい

【御家類】(名) 御家騒動を脚色したる狂言。—【りゅう】  
【御家流】(名) 書體の一、尊圓法親王の筆法を傳へたるも  
の。徳川時代の公文書は此書體に限られ。  
【おいらい】(名) おとなしきと。ぞんぞう。  
【おいらいん】(老老)(名) 老い行く。  
【いらん】(花魁)(名) 殊分の女郎又召使の小女などが、お  
いらんの姉とていふを約めて呼びなせしに出づとい  
ふ。(東京の遊郭にて、姉女郎の稱。)(轉じて、女郎の稱。  
【おいらい】(御入)(名) 入り來るとの敬稱。【上使】。  
【オイ】(御入)(名) 入り來るとの敬稱。【上使】。  
【オイル】(動機) 【石油】—【エンジン】(Oil engine)  
【名】石油發動機。【ヒーター】(Oil heater)(名) 石  
油燈。  
【ペインティング】(Oil-painting)(名) 油繪。  
【おいろ】(御色)(名) 【べい】の異稱。  
【おう】(央)(名) 【まん】な。【はん】ぶん。  
【おう】(秋)(名) 【わさ】はひ。さいなん。【つみ】とが。  
【おう】(鶯)(名) いのなへ。  
【おう】(櫻)(名) 植ざら。  
【おう】(奥)(名) すま。【おく】。  
【おう】(媪)(名) 【ばば】は。老女。【はは】は。老母。  
【おう】(應)(名) 【こたへ】いら。【あま】るし。ききめ。  
【おう】(誦)(名) 聲をそるへてうたふと。又、其うた。  
【おう】(鴨)(名) 【動】かめ。【同】中に裝樂したる一種の水  
中煙火。點火するや忽ち水中に沈没し忽ち水上に浮出し、其  
狀國旗に似たりいふ。  
【おう】(王)(名) 【君主】の稱號。王者。【皇族】の男子にして  
親王の宣下なき御方。【朝鮮】李王家の長。【か】しら。をさ。  
【おう】(往)(名) 通にし方。むかし。既往。—【を影】かに  
して來を察す(句) (易經に出づ) 既往の事をあきらか  
にして、將來の事をかんがへる。—【を觀て來を知る】  
(句) (列子に出づ) 既往の事を觀察して、將來の事をおしは  
かる。  
【おう】(翁)(名) 【正】くしは【ヲウ】。【おき】な。老人。【ちち】。老

おう「追」逐(他)「おふ」を見よ。

おう「負」(他)「おふ」を見よ。

おう「生」(自)「おふ」を見よ。

おう「終」(他)「おふ」を見よ。

おう「あ」(歐)「王位」(名)王者のくらゐ。

おう「い」(王)「王威」(名)王者の御威光。

おう「い」(自)「奥行」(自)奥へ行く。奥内

おう「え」(OS)「名」(O)「奥行」の略時代おくれ。野暮

おう「お」(快)「快快」(名)不平なるさま。満足せ

おう「お」(往)「往」(名)副「を」をり。時々。どこ

おう「か」(櫻)「花」(名)さくらのはな。

おう「か」(謳)「歌」(名)衆人聲をそろへてうたふと。

おう「か」(應)「化」(Adaptation)「名」(志)生物が環

境の狀態に應じて、其體制又は傾向を變化する。

おう「か」(歐)「化」(名)「ヨーロッパ」諸國の風俗思想に化

する。——「あゆみ」(歐)「化」(主義)「名」(ヨーロッパ)文明

心に酔し萬事これにあらはんとする主義。

おう「か」(王)「化」(名)王者の徳化。

おう「か」(横)「禍」(名)不慮のわざはひ。むごたらしきわ

おう「か」(任)「駕」(名)籠を柱(ぐる)る。鸚來訪の敬語。

おう「か」(横)「横」(名)よこに臥すこと。ゆる。

おう「か」(横)「横」(名)「横海岸」(名)「地」山脈の主軸と直角

をなす海岸。

おう「か」(花)「花」(名)「花花海」(名)花の鳴き花のひらさき。

おう「か」(王)「王」(名)陽明學。

おう「か」(横)「横」(名)「横隔膜」(名)「生」胸腔と腹腔との境

界をなせる筋肉、主要なる呼吸筋にして、呼吸運動は實にこ

れが收縮及弛緩に因る。

おう「か」(往)「選」(名)「ゆきまき」ゆきまかへり。

おう「かん」(横)「貫」(名)よこさまにつらぬく。東西に

つらぬく。——「てつどう」(横)「貫」(名)東西

おう「き」(應)「器」(名)「符節」Patraの意譯。

おう「き」(佛)「佛」(名)佛僧侶托鉢の器、即ち鉢の異稱。

おう「き」(奥)「義」(名)おくのて。おく

おう「き」(弱)「名」あふぎを見よ。

おう「き」(黄)「者」(名)「樞」(名)「樞」の多年生草木。山地に

自生す。地下に多肉の根を有し、莖は莖生、葉は有脈羽狀複葉

にして、小葉は長橢圓形、夏日、莖腋に淡黄色若しくは淡紫色

の鱗形花を開き、葉を結ぶ。根は藥用に供せらる。

おう「き」(横)「横」(名)ほしにまに意見を立てて論議す

おう「き」(應)「急」(名)急場のまにあはせ。——「あゆ

だん」(應)「急」(名)急場のまにあはせに施す手段。

おう「き」(應)「急」(名)急場のまにあはせに施す

おう「き」(凹)「鏡」(名)「凹」(名)「凹」(名)「凹」(名)「凹」(名)

反射面のなかくぼなる鏡。物體が若

し其中央點より其球の半径の半より

遠き距離にあるときは、倒立の實像を

結べど、其以内にあるときは、直立の

虚像を作る。凹面鏡。

おう「き」(王)「業」(名)帝王の領

土。人民を治めたまふわざ。王者治國の

事業。

おう「き」(曲)「曲」(名)「まが」(名)「まが」(名)「まが」(名)

又、まぐる。——「よこ」(名)「よこ」(名)「よこ」(名)

おう「き」(黄)「玉」(名)「黄玉」(名)「黄玉」(名)「黄玉」(名)

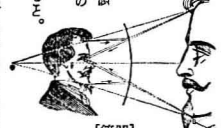
全なる一種の矽物、矽と礬土との矽酸化合物にして、火成岩

の地方に産す。黄色を呈するものは、寶石として用ひらる。

おう「く」(應)「供」(名)「人天の供養をうくる義」(佛)如来十號



【さうお】



【鏡四】

の、即ち佛の尊稱。

おう「げ」(應)「化」(名)「佛」佛が時機に應じ、本體を改更して

假體を現すと。

おう「け」(應)「穴」(名)「地」急湍の激するために、溪間に生

おう「け」(黄)「血」(名)「黄血鹽」(名)「黄血鹽」(名)「黄血鹽」(名)

「化」鐵屑鉄酸、カリウム、及動物質を熱して得る黄色の結晶

體。廣く染料として用ひらる。黄色血鹽。

おう「げ」(王)「氣」(名)「王氣附」(自)「か」(名)「か」(名)「か」(名)

に見ゆけだか見ゆ。

おう「く」(往)「顧」(名)「尊長」(名)其地位を以て卑少をか

おう「く」(往)「古」(名)「おほ」(名)おほむか。とほき過去。

おう「く」(押)「後」(名)「あとお」(名)あとおぞなへ。

おう「く」(押)「伍」(名)「押伍列」(名)「押伍列」(名)「押伍列」(名)

の監視に任ずる兵士。——「れつ」(押伍列)「名」軍隊に

て、後列兵の後方一歩を隔てたる線。

おう「く」(初)「名」「あふ」(名)「あふ」(名)「あふ」(名)「あふ」(名)

おう「く」(會)「期」(名)「あふ」(名)「あふ」(名)「あふ」(名)「あふ」(名)

おう「く」(往)「航」(名)「船舶」(名)船舶が目的地に向かひて行く航

おう「く」(横)「行」(名)「自由」(名)自由に押しあること。——「よこ

さ」(名)「よこ」(名)「よこ」(名)「よこ」(名)「よこ」(名)「よこ」(名)

の「か」(横)「行」(名)「介子」(名)「動」(名)「動」(名)「動」(名)

おう「く」(王)「侯」(名)「王」と公と。貴顯。

おう「く」(王)「侯」(名)「王」と公と。貴顯。

おう「く」(王)「侯」(名)「王」と公と。貴顯。

おう「く」(王)「侯」(名)「王」と公と。貴顯。

おう「く」(王)「侯」(名)「王」と公と。貴顯。

おう「く」(王)「侯」(名)「王」と公と。貴顯。

おう「く」(横)「谷」(名)「地」山脈の主軸と直角をなす谷。

おう「く」(横)「谷」(名)「地」山脈の主軸と直角をなす谷。

おうこーおうし

おうこくわう 王國(名) 君主が王と稱する國。  
 おうじんわう 黄金(名) ①金がねきん。②貨幣。金銭。  
 ③大判。④金。⑤百枚の黄金時りととのひて缺陥なし  
 の進歩が最高度に達し、百姓の事象足りとのひて缺陥なし  
 と想像せらるる時代。⑥個人の一生涯の中最もはえある時  
 期。⑦せいりやく「黄金政略」(名) ⑧「政」反対者に金  
 錢を與へて其敵心を買ひ、以て事を行ふ政略。⑨せかい  
 「黄金世界」(名) 黄金時代の世。⑩たぐ「黄金宅」  
 「黄金世」(名) 黄金時代に歸依して祇園精舎を出したり  
 き、敷地を買ふに其地面に黄金を敷きつめたる價を出したり  
 といふ故事に出づ「佛」伽藍の稱。⑪のまゆつ「黄金  
 術」(名) 丹砂を煉りて黄金となすといふ神仙の術。⑫若  
 へい「黄金梅」(名) 紅梅の一種、花細かにして疎らに著  
 き、葉末に黄色を多く露出する。⑬ふつ「黄金佛」(名)  
 ⑭「佛」黄金にて鑄造したる佛像。⑮黄色の汚物にまぶれた  
 る人。⑯りつ「黄金律」Golden rule(名) 意味の  
 甚だ深遠にして、受用の極めて博大なる語句。  
 おうさつわう 王佐(名) 王者の輔佐。⑰のさい王  
 佐才(名) 帝王の輔佐となるべき器量。  
 おうさいわう 殊災(名) わざはひ。さいなん。  
 おうさいわう 横災(名) 不慮のわざはひ。  
 おうさいわう 往災(名) 過ぎにし年。  
 おうさいわ 感(名) 三番更を舞ふときの掛聲。  
 おうさきさき(名) 「あふさきさき」を見よ。  
 おうさつわう 塵殺(名) みなごろう。  
 おうさつわう 塵殺(名) なごりこうす。  
 おうまわう 輿官(名) あうぎ。おくのて。  
 おうし 醜(名) 「おふし」を見よ。  
 おうまわう 王帥(名) ①帝王の軍勢。②帝王の師範。  
 おうまわう 横死(名) 非命の死。變死。  
 おうまわう 横恣(名) ほしひま。さま。  
 おうまわう 皇子(名) 天子の御子。みこのみや。  
 おうまわう 王子(名) 親王の宣下なき皇族の男子。わう。  
 おうまわう 王事(名) 帝王の事業。③「監」きことな

おうしーおうし

し(句) (詩經に出づ) 王事はなほざりにすべからず、これ  
 に服するに甚しく忙しきにいふ。  
 おうまわう 往事(名) 過去の事。過ぎにしこと。①游  
 茫(句) 過ぎにし事跡の記憶に止まらざるにいふ。  
 おうまわう 往時(名) 過去の時。むかし。「られたる御方。  
 おうまわう 王侍従(名) 諸王にして侍從に任ぜ  
 らるる者。②帝王の御家。王家。朝家。  
 おうまわう 王室(名) 帝王の御家。王家。朝家。  
 おうまわう 王者(名) 帝王たる人。③の師。  
 おうまわう 狂車(名) 帝王たる人。③の師。  
 おうまわう 横斜(名) よこななめ。疎影」。  
 おうまわう 往者(名) 過ぎにしとき。むかし。以前。④  
 諫む可からず(句) (論語に出づ) 既往の事は、今更に諫  
 めて教誨せんすれど詮なし。  
 おうまわう 冠弱(名) よわきと。かよわきと。  
 おうまわう 横盛(名) よこことたと。⑤空間と時間  
 と。⑥「佛」他力と自力。  
 おうまわう 押收(名) 法人民所有物件を選擇す。  
 おうまわう たいせいせん 歐洲大戰(名) 西紀一九一四  
 年より同一九一八年まで、イギリス、フランス、ベルギー、  
 「イタリア」ロシア、セルビア」とドイツ、「オーストリ  
 ア」トルコ間の戦争を、オーストリア」とセルビア」との國  
 交斷絶に原因して發生せり。  
 おうまわう 鶯宿梅(名) ①「植」梅の變種、紅白  
 の花交り咲きて、香殊に高く、單瓣と重瓣とあり。②村上天  
 皇の天曆中に、博覧殿前の梅の木枯れしかば、これに代はる  
 梅を求めさせたまひ、西の京の成家に色濃く咲きて美しき梅  
 あるを、掘り取らせせむれるが、其家の主は紀貫之の娘にて  
 「勸なれば、いとまかし、鶯の宿はと問はばはいかが答へ  
 ん」との歌を其木に結びて懸せたりといふ故事。  
 おうまわう 押書(名) 約束の履行又は命令の服従を  
 誓ふために差出す書。③あふさき。  
 おうまわう 皇女(名) わうじよ。  
 おうまわう 王女(名) わうじよ。

おうしーおうす

おうまわう 執掌(名) (になりもつ勢) 積谷を失  
 ふこと。①そがしはたらくと。  
 おうまわう 應鑓(名) 十二律の一。②陰曆十月の異稱。  
 おうまわう 王將(名) 將級の詩の名犬將の資格あ  
 りて、四方四隅に、格つて自由に勤く、敵の駒に攻めたり  
 れて動き得ざるを負すと。  
 おうまわう 黄鑓(名) 十二律の一。③陰曆十一月  
 おうまわう 應鑓(名) おとしつて我心のままに認  
 めざる書狀。④無理におしつけて承諾せしむること。⑤  
 ずくめ「應鑓疎」(名) おとしつて我恩よままにならしむる  
 おうまわう 王城(名) 宮城。官居。⑥  
 おうまわう 往生(名) 佛「彌陀の願力により、極  
 樂淨土に往きて生まるとなし難くなること。⑦此世を去ると、死ぬる  
 こと。⑧物事の如何となし難くなること。⑨いちぢやう  
 往生一定(名) 佛「極樂往生にまぢがひなむこと。  
 ⑩かんねんぶつ 往生觀念佛(名) わうぢや  
 う(二) ぎはり 往生際(名) まじきは。⑪こ  
 うけい 往生講(名) 佛「極樂往生を願ふために修する  
 法事。⑫どろ(往生所) 死すべき場所。まじは  
 る。⑬にん(往生人) 佛「極樂往生をなす人。  
 おうまわう 黄色血満(名) 「化」わ  
 うけい(黄血満)。  
 おうまわう 横炭(名) 「地」地盤上の斷層が山脈の主軸  
 と直角に走るとに生ずる地盤。  
 おうまわう 王臣(名) 帝王の臣下。⑭蹇蹇弱の故  
 にあらず(句) (易經に出づ) 出でて官に仕へたる以上は、  
 野に於て氣まきまをいふる時とはちがひ、忠節を盡くして  
 難難に處するべきまにや。  
 おうまわう 往診(名) 醫師が患者の許に赴きて、其病  
 おうまわう 往信(名) 通信を發する事。  
 おうまわう 應身(名) 佛「如来の三身の一、如来が機に應  
 じ物に接し、色身を現じて法を説き衆生を濟度する如來。⑮  
 ぶつ(應身佛) 佛「色身を此世に現じたる如來。  
 おうす(生) 他) 「おふす」又「おはす」を見よ。

おうすい(王手) 一人の言に答ふこと。またが、指揮に。①適當。かなふ。分に。②相して起ること。天下擧の如く。

おうせい(仰) ①「おほせ」を見よ。②「王政」(名) 王者のまつりごと。③「王政維新」(名) 王政に復して諸改革新せるの義。我國の明治初年に於ける大改革。④「ふつこ」(名) 政復古(名) 萬機親裁の王政に復する義。前條に同じ。

おうせい(旺盛) ①「黄精」(名) さかんなること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうせい(往昔) ①「黄精」(名) なること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうせい(應接) ①「黄精」(名) なること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうせい(應接所) ①「黄精」(名) なること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうせい(横説) ①「黄精」(名) なること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうせい(横説) ①「黄精」(名) なること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうせい(横説) ①「黄精」(名) なること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうせい(横説) ①「黄精」(名) なること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうせい(横説) ①「黄精」(名) なること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうせい(横説) ①「黄精」(名) なること。②「黄精」(名) なること。③「黄精」(名) なること。④「黄精」(名) なること。

おうたい(應對) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたい(往代) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(應諾) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(御歌所) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(横断) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(横断) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(横断) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(横断) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(横断) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(横断) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(横断) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうたたく(横断) ①「王代」(名) 面會してのうけこたへ。②「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。③「王代」(名) 王朝時代の事跡を圖色したる狂言。

おうち(應張力) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(押丁) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(横管) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(黄土) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(櫻桃) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(王統) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(王道) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(王道) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(王道) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(王道) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(王道) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうち(王道) ①「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。②「王手」(名) 將基にて、直ちに王を襲ふ手。

おうに—おうは

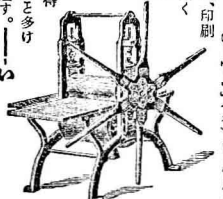
おうによ<sup>ら</sup>わ<sup>く</sup>王女(名) 王の御女。内親王にあらざる皇族の御女。
おうねん<sup>り</sup>往年(名) 過ぎにし年。むかし。
おうのう<sup>ら</sup>候惱(名) 心のなやみ。もだえ。
おうのう<sup>は</sup>鼻(名) 鼻の高く突き出でたる假面、鼻の相なりとよ。

おうは<sup>ら</sup>王霸(名) 王者と謂ふ者。又、王道と謂ふ者。
おうは<sup>ら</sup>横波(Transverse Wave)(名) 理物質各部順次振動する方向が、振動の傳はる方向に直交する波。

おうは<sup>ら</sup>黄梅迎春花(名) 高さ數尺、葉は對生し、覆葉にして三箇の小葉より成る。早春、葉に先だちて六瓣。

おうは<sup>ら</sup>黄蘗(名) 蘗きはだ。黄色の花を聞く。
おうは<sup>ら</sup>黄蘗宗(名) 佛禪宗の一派、臨濟宗の分支にして、明の黃蘗山萬福寺の隆元が承應三年に清の亂を避けて來朝し、山崎國宇治に一寺を創立して黃蘗山萬福寺と稱せしより、其流派の稱とす。一ぜん黄蘗禪(名) 黄蘗宗に傳ふる禪。

おうばん<sup>り</sup>凹版(Alcography)(名) 印刷版の一種、銅板又は銅板の表面に、印刷せんとする文字、圖畫を凹く彫刻したるものにして、これに「インキ」を塗して布にて摩擦すれば、「インキ」は凹部にのみ残るを以て、紙を當てて印刷すれば所要の文字、圖畫を得べし、「インキ」の紙につくと多ければ精緻なる印刷物に適す。
らび<sup>り</sup>機刷印版凹



【機刷印版凹】

らび<sup>り</sup>機刷印版凹(名) 凹版の印刷に用ふる印刷機械、二本の堅牢なる轉子の間に一枚の鐵滾ありて、これに版面を取附け其上に紙を置く、轉子を回轉するに従ひて鐵滾も亦移動し、紙と版面と兩轉子の間に壓搾せられて印刷

おうは—おうほ

せらるる、裝璜。「ひて門を建て土を採るを混むといふ。
おうはん<sup>り</sup>垢飯(名) 八將神の一、此神の角に向か朝時代に、公卿達の殿上に集會せんとす。一人又は數人に課して衆人を變應せしめんと。自鎌倉時代及室町時代に、宿將老臣が年頭に、將軍を自己の管中に留して盛衰を戒りしと。
おうはん<sup>り</sup>垢飯振舞(名) 圓わらひぶるまひ。一厨を覆ふに用ふる巾。

おうは<sup>ら</sup>横波(名) 佛僧侶が袈裟を着るとき、右やとり。
おうは<sup>ら</sup>王妃(名) 王のたまき。
おうは<sup>ら</sup>往復(名) 死にたる祖父。

おうは<sup>ら</sup>往復切符(名) ゆきとかへりとの乗車切符を接合して一枚となしたるもの。
おうは<sup>ら</sup>往復葉書(名) 發信用と受信用とを接合して一枚となしたる郵便葉書。發信者は發信用のものに通信文を認めて郵送し、返信者はこれを半封して返信用のもののみとし、これに通信文を認めて郵送す。

おうふん<sup>り</sup>應分(名) 身のほかにかなふと。
おうふん<sup>り</sup>歐文(名) ヨロッパ 諸國に行はるる寫音文字。
おうふん<sup>り</sup>歐文工(名) 歐文の活版を組み立つる職工。

おうほう<sup>り</sup>横柄(名) おごりたかぶると。尊大なると。
おうへい<sup>り</sup>歐米(名) 「ヨーロッパ」と「アメリカ」と。西洋。
おうへん<sup>り</sup>應變(名) 不慮の場合に應じて事を處すると。
おうへん<sup>り</sup>往返(名) ゆきとかへりとかゆき。往復。

おうほ<sup>ら</sup>應募(名) つのりに應ずると。
募價格(名) 商公債又は株式等の募集に應じ、其額面に對して實際に拂ひ込む金額、例へば公債證書の額面百圓に對して、九十五圓を拂ひ込むときは、其九十五圓をいふ。
一志や<sup>ら</sup>應募者(名) つのりに應ずる者。

おうほ<sup>ら</sup>王母(名) 死にたる祖母。「果報。むくい。
おうほ<sup>ら</sup>應報(名) 佛善惡の作法に對する吉凶の報。
おうほ<sup>ら</sup>往法(名) 佛の施すとよふと。
おうほ<sup>ら</sup>横暴(名) わがまま勝手なること。きまま粗暴なる。

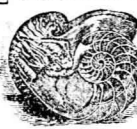
おうほ—おうも

おうほ<sup>ら</sup>近江(名) 「あふせ間」を見よ。
おうむ<sup>り</sup>鸚鵡(名) 勸業木類の鳥、熱帯地方の原産、種類多し、體態は鵝乃至鶴大、頭は圓く短大にして、上嘴は鉤曲し、嘴は短小、舌は肥厚肉質にして、巧に人語をまね、羽色美麗。
一が<sup>ら</sup>鸚鵡(名) 動頭足類の具、形は鸚鵡の嘴に似る、外蓋腔中に二對の腕を具へ、口の周圍に絲狀の腕手數多あり、介殼は螺旋狀をなし、外表に赤褐色の斑文ありて、内面は美麗なる貝珠質を以て覆はる、介殼の内腔は許多の隔壁によりて數房に區分せられ、最終の大房に體軀を容る、印度洋に多く産す。

(名) 一人より言ひかけられたる歌を、僅に語を換へて直ちに返歌となす。
一人より言ひかけられたる杯を、僅に飲みて直ちに返歌となす。
一せき<sup>ら</sup>鸚鵡石(名) 鸚鵡石の一種、うすき黄綠色を帯ぶ、物の音の反響する石。
一せき<sup>ら</sup>鸚鵡杯(名) 鸚鵡貝の介殼にて造る。

おうめい<sup>り</sup>王命(名) 帝王の命令。
おうめん<sup>り</sup>面鏡(名) 凹鏡。
おうも<sup>ら</sup>横目繰糸(名) 目は横にきれ糸は縦につくと、即ち人間の面相。

おうもん<sup>り</sup>横紋筋(名) 生索狀の束をなして



【貝鸚鵡】





おかせーおかめ

おかせ(麻袴)名。「をがせ」を見よ。  
おかた(御方)名。「人の敬稱。目。人の妻女の敬稱。目。おかせ」を見よ。」「おま」  
又は大臣家などの部屋住の子息の稱。」「すまひ」(御方住)名。前後に同じ。」「ぼうちょう」(御方)

おがたまのき「真心樹」名。「種」をがたまのきを見よ。  
おかし(餅)名。餅の異稱。おかし。  
おかつ(隠風)名。「動」をかつきを見よ。  
おかつ(隠風)名。「動」をかつきを見よ。  
おかつ(隠風)名。「動」をかつきを見よ。

おかつ(隠風)名。「動」をかつきを見よ。  
おかつ(隠風)名。「動」をかつきを見よ。  
おかつ(隠風)名。「動」をかつきを見よ。  
おかつ(隠風)名。「動」をかつきを見よ。  
おかつ(隠風)名。「動」をかつきを見よ。

おかま(御籬御釜)名。「かま」の敬稱。目。おまりの御籬。目。おまの御籬。目。おまの御籬。  
おかま(御籬御釜)名。「かま」の敬稱。目。おまりの御籬。目。おまの御籬。目。おまの御籬。  
おかま(御籬御釜)名。「かま」の敬稱。目。おまりの御籬。目。おまの御籬。目。おまの御籬。

おかむ(拜)名。「をがむ」を見よ。  
おかめ(阿龜)名。「頻高」見よ。真低き婦人の顔にかたどりたる假面。目。阿龜の假面に肖(した)たる顔の女。目。女をあざけりていよぶ。目。おかめそば。「さき」(阿龜蕎麥)名。「種」  
種。かまぼこ又は松茸などを具としていたるもの。

おかめーおきあ

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。



[ナリカオ]

おきあーおきく

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。

おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。  
おきあ(臍)名。「をがせ」を見よ。



[しむきあ]

の、或時期の後、羽化して蝶となる。揚羽蝶の蛹最也多し。  
**おきこ** 〔置菜〕(名) 團圓にて、伎倆の勝れたる人に對し、二子以上を置いて打ち始むる。  
**おきこたつ** 〔置火燵〕(名) 行火の如く、匣の内に盤を設け其内に炭火を燃らし、座の上におくことつ。  
**オキサミン** 〔せんりょう〕 ―染料料〔Oxamine dyes〕(名) 〔化〕直接染料の一種、種類多し。

**おきさより** 〔沖鑑〕(名) 〔動〕だ。  
**おきさより** 〔置去〕(名) 捨ておいて立ち去ると、書に―  
**オキサリス** 〔Oxalis〕(名) 〔植〕酢漿草(三葉)科の多年生草本、莖葉を養生し、淡紅色又は白色の小花を多く結ぶ。花期は極めて長く冬期より春期に亘り、觀賞用として栽培せらる。

**おき茶** 〔置き茶〕(名) 〔置〕茶の置茶。〔書〕置茶にて、即詞、控  
**おきな** 〔置名〕(名) 〔置〕置名の置。〔置〕置名の置。  
**オキシヘラー** 〔Oxyheler〕(名) 〔電〕電磁器による。〔置〕置名の置。  
**おきす** 〔沖洲〕(名) 沖にある洲。

**おきすて** 〔置捨〕(名) 捨ておくと。〔置〕置名の置。又、其置。  
**おきすみ** 〔置墨〕(名) 墨を用いて頭髮の生際にくり又は眉  
**おきする** 〔置据〕(名) おきすうると。すふおき。  
**おきそ** 〔沖風〕(名) 一「おきすう」の訛。  
**おきそち** 〔起縮〕(名) 雲の眼起の際に縮小する病。  
**おきつて** 〔捉〕(他) 〔下〕さだむ、きむ。

**おきつかせ** 〔沖津風〕(名) 沖をよく風。  
**おきつけ** 〔置附〕(名) すふおきて、他へ移さぬと。  
**おきつけ** 〔置漬〕(名) 漬物のおきて、小魚を背開にしてよく洗ひ、醤油に酢と鹽とを混ぜて煮沸せしめたるを冷したる飯の中に漬けたるもの。

**おきつて** 〔置津島根〕(名) 沖にある島。  
**おきつて** 〔置津島守〕(名) あまもり。  
**おきつて** 〔置津島〕(名) 海中にある島の山。  
**おきつて** 〔置津白波〕(名) 沖に立つ白波。

おきこーおきこ

**おきつたへ** 〔奥津葉戸〕(名) 〔指〕指を地にすふおき、石をつみかさねて、其上に土を盛りたる塚。〔田家の奥の臥房。  
**おきつたひ** 〔興津調〕(名) 〔動〕あまたひ。  
**おきつち** 〔置土〕(名) 更におき捨へたる土。又、平地の上に高きおたる土。〔客土〕。

**おきつと** 〔沖津鳥〕(名) 〔動〕沖に居る水鳥。  
**おきつと** 〔沖津浪〕(名) 沖にたつ波浪。  
**おきつと** 〔興津海苔〕(名) 〔植〕紅藻類の海藻。諸國の沿海に産す。矮小にして扁平、群生して岩石に附着す。生時は深紫色をなし平指柔軟なれど、乾燥すれば黄褐色に變じ堅粉となる。糖料・食料に供せらる。

**おきつと** 〔沖津舟〕(名) 沖をこぎぬく舟。  
**おきつと** 〔捉〕(名) さだめ。〔法〕規定。〔田〕田屋の小作。―〔置〕置名の置。小作。―〔ま〕捉ま。  
**おきつと** 〔置土〕(名) 所在を移し得べき床の間、即ち床の間のさまにつくりたる窓。

**おきつと** 〔置土〕(名) 〇ものを置くべき所。又、物を置きたる所。―〔置〕置名の置。知らず。〔指〕指。  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきつと** 〔置土〕(名) 〇ものを置くべき所。又、物を置きたる所。―〔置〕置名の置。知らず。〔指〕指。  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきつと** 〔置土〕(名) 〇ものを置くべき所。又、物を置きたる所。―〔置〕置名の置。知らず。〔指〕指。  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきつと** 〔置土〕(名) 〇ものを置くべき所。又、物を置きたる所。―〔置〕置名の置。知らず。〔指〕指。  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきつと** 〔置土〕(名) 〇ものを置くべき所。又、物を置きたる所。―〔置〕置名の置。知らず。〔指〕指。  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきつと** 〔置土〕(名) 〇ものを置くべき所。又、物を置きたる所。―〔置〕置名の置。知らず。〔指〕指。  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

おきつーおきな

けし方形の行燈。―がひひ〔翁貝〕(名) 〔動〕海産類の貝、介殼長方形にして兩端開き、長さ一寸餘、薄く脆くして色白し。―がひひ  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

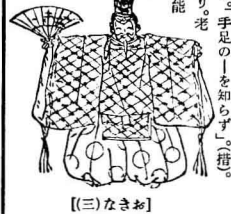
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老  
**おきな** 〔置翁〕(名) 〇としより。老

おきなーおきな

〔さぐなきお〕



おきぬーおきや

おきぬけ(起抜)一名 殿所より起き出でたるままと。  
起き出でて間もなき。

おきぬふ(起ぬふ)一名(二)補(他)は(西) おきなふ。  
おきの(た)ゆ(り)分(沖大夫)一名(動)あはうどり。

おきの(る)ゆ(り)除(他ら四) 價をかりて物品を購買す。  
おきはん(起番)一名(名)ねずの當番。「かけてに買ふ。」

おきふ(熨伏)一名(名)紅熱せる炭火(燈燭)。  
おきふし(起伏)一名(動)起くるとふす。〓日常。

おきふみ(置文)一名(名)かきおき。遺書。  
おきふるし(置舊)一名(名)おきふるしたる。又、其もの。

おきふるす(置新)一名(置舊)(他)さ(四) すておきて久しく時  
日を過ぐす。使用せずして置く。

おきへ(沖方)一名(名)沖なる方。  
おきまつり(釋奠)一名(名)せきてん。

おきまど(おきまど)一名(釋新)一名(置惑)(他)さ(四) 見わけがた  
きさまにおく。

おきまよふ(置迷)一名(置迷)(自)は(四) おきまよふところ  
におきまり(御決)一名(名)つねに定まりてあると。――もん

おきみやげ(置土産)一名(名)立ち去るときに、居遣れる人に  
置きて與ふるもの。おきみやげ。

おきめ(置目)一名(名)おきて。〓おき。〓處刑。〓圖案の  
模様を、器物の面に寫し取りて下書となす方法。

おきめば(置目張)一名(名)一動かあかぬ。

おきもの(置物)一名(名)床の間に据え置きて、かきり  
とする器物、飾子の一。〓或地位に立てらるれど、自己に  
權能なく、諸事すべて配下のもの手に成る人。――だい

置物臺(名) 置物をすまはく臺。  
おきや(置屋)一名 藝妓又は娼妓などを抱へ置き、娼屋、茶  
屋などの迎へに應じてこれを遣はすのみにして、客を上げて  
遊興せしめざる家。

おきやがりこぼし(起上小法師)一名 おきあがりこぼ  
おきやん(名) 妙齡の女子の擧動かろろしくして顔面なき  
と。又、其人。おてんば。東京の方言。

おきよーおく

おきよ(起)一名(御清所)一名(名)禁中のみよと。ころ。  
おきよ(起)一名(自)おく。の詠。

おきろ(名) 廣大なる。計り難きと。〓(詠)――なしはれ。  
(形一) 廣大無邊にして、はかり難し。

おきろく(隠岐線)一名(名)〓おきろくま。う。――まよ  
う(隠岐線)一名(名)〓緑青の一種、繪具に用ふ、昔  
時、おもに隠岐より出し故に比名あり。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おきわす(置忘)一名(置忘)(他)ら(下) 〓物を置きし  
場所をわする。〓時、歸るべき物を忘れて置。

おくーおくし

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。  
おく(おく)一名(名)〓か。せりうり。勝負。

おくまゆまや【奥儒者】(名) 徳川幕府の職名、將軍侍講の  
とを掌りしもの。

おくまよいん【奥書院】(名) おくまよの書院。

おくまよろ【奥屋上】(名) やねの上。――ていえん

【屋上庭園】(名) 西洋建築の屋上に設けたる庭園

おくまよりのり【奥浄瑠璃】(名) 昔時、奥羽地方に

流行せし浄瑠璃扇子拍子にたかりしもの。

おくすず【奥目】(名) 臆(目) 變。氣おくれして恐怖す。おそ

る。おど。などおくれせしに。

おくせい【奥勢】(名) 奥羽の軍勢。

おくせい【奥勢】(名) 勢(力) さき。奥州の方言。

おくせつ【臆説】(名) 臆(説) 事物の原因を説明せんがため、假に

設けたる想像説、假説。

おくそく【臆測】(名) よき程の推測。 「たる心事。

おくそく【臆底】(名) 深く入りこみたる處。 深く認め

おくだかし【臆高】(形、) おくびきなり。

おくたり【御下】(名) 京より地方へ赴くと。 「だむると。

おくだん【臆斷】(名) 臆測して斷定する。 おしかりき

オクタント【Octant】(名) 物の角度を測るに用ふる器。三

百六十度の圓を八分したるもの。(八回儀)。

おくちよろ【奥帳】(名) 限りなき大數。 人民。衆

即ち軍役、支那人の居る所。 おくや。

おくつき【奥津城】(名) はか(城)。 一、ところ。 奥津

城(名) はか。 「日などを記載したる紙。

おくづけ【奥附】(名) 書冊の末尾に著者の姓名及發行年月

おくづとめ【奥勤】(名) 貴人の奥向にとめする。

おくつま【奥妻】(名) 鍾愛する妻。

おくて【晩稻】(名) 稲。 おく成熟する稻。

オクターブ【Octave】(名) 現)或振動數を有する音に對

おくだこ【奥床】(名) 奥の方にある臥床。

おくだない【奥屋】(名) いへのうち。

おくなく【奥無】(副) おくまで賤めての。こる所なく。

おくに【御國】(名) 徳川時代に、諸侯の領地の敬稱。 在

京せる地方人の故稱の敬稱。 〇あな。地方。 一、はら

【御國版】(名) 徳川時代に、諸侯の在國のときに設けし

當時、諸侯の正妻は常に江戸の藩邸に住せしを以て、在國の

きの子は、妾屬なるを常とす。 一、なまり【御國名】(名)

地方人の其故郷のなまり。 〇〇【御國者】(名) 〇

あななかも。

おくに【奥】(副) 〇〇【副】

中心に深く。 〇〇【副】

おくにかがき【阿國歌舞伎

(名) 慶長年中、 出雲大社の神子

阿國なるもの、 神樂を舞じて演

じ始めし舞曲の 神樂を舞じて演

名、現今のいはゆる 芝居の盛隆と

いよ。

おくねん【憶念

(名) 堅く心中に 把持して忘れざると。

おくのいん【奥院】(名) 佛本堂より奥の方に本堂

などを安置したる所。

おくのて【奥手】(名) 〇〇。ひけつ。 〇〇【容易に示さ

おくのま【奥間】(名) 家の奥にある室。

おくのや【奥屋】(名) 武家にて、たのやの稱。

おくは【奥齒】(名) 口腔の左右の奥にありて臼狀をなす齒。

白齒。 一、に剣(句) ことばの中に害意のこもると。 一

に物の扱まる(句) 何となく未だ打ち解けずして尚ほ隔

意あるやうに感ぜらる。いひ、又、何となく未だ呑みこみ

おくな【おくは

おくな【おくは



【きぶかにくお】

の行かずして尚ほ心に懸念するにいふ。

おくび【枉】(名) おほくび。おくみ。

おくび【愛嬌】(名) 胃にたまりたる瓦斯が、頭門より食道を

通過して口腔に逆ひ出づるもの。 一、にも出さず(句) 或

物事を深く隠し又は全く隠れて、少しも口にせざるにいふ。

おくびより【かくれ隠病】(名) 隠力なき物

にもおひおほる。 〇〇【隠病】(名) 〇〇【隠病】(名) 〇〇

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)

おくびやうの心。おくびやうのやうす。 一、かくて【隠病】(名)





おさすーおさま

おさすり〔御摩〕(名) 女でさするとの敬稱。②下女兼帯のめかけ。――い茶や〔御摩醫者〕(名) 愚部をなでさする外に能なきへい茶。

おさだまり〔御定〕(名) いつも同じさまなること。  
おさだめがき〔御定書〕(名) 徳川幕府の法典。  
おさつ〔御札〕(名) 紙幣(婦人の語)。  
おさつ〔御薩〕(名) 薩(婦人の語)。

おさつき〔御座附〕(名) 藝者の宴席に招かれて、最初に三味線を弾きて歌ふこと。又、其歌ふたう。  
おさど〔御里〕(名) 嫁したる婦人の貢家の敬稱。②すやう。経度又は経度の知らぬにいふ。

おさなし〔幼〕(形) 「をさなし」を見よ。  
おさなり〔御坐形〕(名) 當座かざりにものするところ。  
おさふり〔御坐形〕(名) 押(他、は下二) おおしこむ。「耳を」。④ふせぐ。ささふ。⑤捕ふ。盗人を。⑥自由

おさへす〔押・抑〕(名) おさふること。②おさふるに用ふへ。まんがり。③ふせぎまもり。④たしかむこと。⑤の詞。⑥をはりととなす。⑦の蓋。――き〔押木〕(名) おさへとなす木。――まろ〔押城〕(名) 國境に設けて防衛とする城。――せい〔押勢〕(名) おさへとする軍勢。①だち

〔押立〕(名) 物をつかまへて立つこと。――つける〔押附〕(他、か下二) まかりとおさふ。――つける〔押附〕(他) おさへつこと。――ば〔押商〕(名) 八重

附(他) おさへつこと。――ばしら〔押柱〕(名) 假面などの本柱の反対に取附けたる柱。――もの〔押物〕(名) 花鳥などの作物の要に骨をのせて出すもの。

おさへる〔押〕(他) 「おさふ」の訛。  
おさまる〔治〕(自) 「をさまる」を見よ。  
おさまる〔修〕(自) 「をさまる」を見よ。

おさまる〔收・納〕(自) 「をさまる」を見よ。  
おさむ〔治〕(他) 「をさむ」を見よ。  
おさむ〔修〕(他) 「をさむ」を見よ。  
おさむ〔收・納〕(他) 「をさむ」を見よ。  
おさゆめ〔御然者〕(押)(他、や下二) おさふ。  
おさらば〔御然者〕(感) 別るるとききの挨拶。さやうなら。  
おさるまち〔御申侍〕(名) かうまんなち。  
おし〔啞〕(名) 言語を發し得ざる不具。又、其人。あゑ。あゑ。あふし。――の問答句(句) 兩人互にはなしあへど、意思の疏通を缺きて、要領を得ざるに譬へいふ。――の夢(句) 啞子の夢。――の旅行(句) 外國語を知らず、外國に旅行する句。  
おし〔押〕(名) おさへつこと。②おしだすと。③あまくまで我意を押し通さんとするにいふ。  
おし〔歴〕(名) おおすこと。おしつくと。②おすに用ふる物。おし。③人を取すべき勢あること。④がさく。⑤狐・鼠などを捕る一種の装置。おとし。  
お木〔御師〕(名) ①いのりの木。②伊勢神宮などにて、格おし。駕籠(名) 「をし」を見よ。  
おし〔駕籠〕(名) 「をし」を見よ。  
おし〔愛〕(形) 「をし」を見よ。  
おし〔感〕 古昔の聲調(び)の聲。――おし(感) おしを重ねおし。〔押〕(接頭) 或動詞に冠して、「むけに」にちて、「あてて」などの義を表はし、且意を強くする語。「入る」。  
お木(祖父)(名) 「おぢ」を見よ。  
お木(小父)(名) 「おぢ」を見よ。  
おしあぐ〔御開〕(押)(他、か下二) おしてひらく。  
おしあぐ〔御開〕(押)(他、か下二) おして上へあおし。②ひきたてのぼす。  
おしあけ〔押明〕(名) おしあけがた。――がた〔押明方〕(名) よあけがた。あけがた。  
おしあけポンプ〔押揚唧筒〕(Force pump)(名) 理水を押し揚げて低所より高所へ送るポンプ。圓筒の側壁より出でたる管あり、其管に内方に開く鑄あり、圓筒の底に上

おさまーおしあ

おしあへる〔押〕(他) 「おさふ」の訛。  
おしあまる〔治〕(自) 「をさまる」を見よ。  
おしあまる〔修〕(自) 「をさまる」を見よ。  
おしあむ〔收・納〕(他) 「をさむ」を見よ。  
おしあむ〔收・納〕(他) 「をさむ」を見よ。  
おしあゆめ〔御然者〕(押)(他、や下二) おさふ。  
おしあさらば〔御然者〕(感) 別るるとききの挨拶。さやうなら。  
おしあさるまち〔御申侍〕(名) かうまんなち。  
おしあし〔啞〕(名) 言語を發し得ざる不具。又、其人。あゑ。あゑ。あふし。――の問答句(句) 兩人互にはなしあへど、意思の疏通を缺きて、要領を得ざるに譬へいふ。――の夢(句) 啞子の夢。――の旅行(句) 外國語を知らず、外國に旅行する句。  
おしあし〔押〕(名) おさへつこと。②おしだすと。③あまくまで我意を押し通さんとするにいふ。  
おしあし〔歴〕(名) おおすこと。おしつくと。②おすに用ふる物。おしあし。③人を取すべき勢あること。④がさく。⑤狐・鼠などを捕る一種の装置。おとしあし。  
おしあ木〔御師〕(名) ①いのりの木。②伊勢神宮などにて、格おしあ。駕籠(名) 「をしあ」を見よ。  
おしあし〔駕籠〕(名) 「をしあ」を見よ。  
おしあし〔愛〕(形) 「をしあ」を見よ。  
おしあし〔感〕 古昔の聲調(び)の聲。――おしあ(感) おしあを重ねおしあし。〔押あ〕(接頭) 或動詞に冠して、「むけに」にちて、「あてて」などの義を表はし、且意を強くする語。「入る」。  
おしあ木(祖父)(名) 「おぢあ」を見よ。  
おしあ木(小父)(名) 「おぢあ」を見よ。  
おしあしあぐ〔御開〕(押あ)(他、か下二) おしあしてひらく。  
おしあしあぐ〔御開〕(押あ)(他、か下二) おしあして上へあおしあし。②ひきたてのぼす。  
おしあしあけ〔押あ明〕(名) おしあしあけがた。――がたあ〔押あ明方〕(名) よあしあけがた。あしあけがた。  
おしあしあけポンプ〔押あ揚唧筒〕(Force pump)(名) 理水を押し揚げて低所より高所へ送るポンプ。圓筒の側壁より出でたる管あり、其管に内方に開く鑄あり、圓筒の底に上

方(名) よあけがた。あけがた。  
おしあしあけポンプ〔押揚唧筒〕(Force pump)(名) 理水を押し揚げて低所より高所へ送るポンプ。圓筒の側壁より出でたる管あり、其管に内方に開く鑄あり、圓筒の底に上

おしあーおしえ

おしあへる〔押〕(他) 「おさふ」の訛。  
おしあまる〔治〕(自) 「をさまる」を見よ。  
おしあまる〔修〕(自) 「をさまる」を見よ。  
おしあむ〔收・納〕(他) 「をさむ」を見よ。  
おしあむ〔收・納〕(他) 「をさむ」を見よ。  
おしあゆめ〔御然者〕(押)(他、や下二) おさふ。  
おしあさらば〔御然者〕(感) 別るるとききの挨拶。さやうなら。  
おしあさるまち〔御申侍〕(名) かうまんなち。  
おしあし〔啞〕(名) 言語を發し得ざる不具。又、其人。あゑ。あゑ。あふし。――の問答句(句) 兩人互にはなしあへど、意思の疏通を缺きて、要領を得ざるに譬へいふ。――の夢(句) 啞子の夢。――の旅行(句) 外國語を知らず、外國に旅行する句。  
おしあし〔押〕(名) おさへつこと。②おしだすと。③あまくまで我意を押し通さんとするにいふ。  
おしあし〔歴〕(名) おおすこと。おしつくと。②おすに用ふる物。おしあし。③人を取すべき勢あること。④がさく。⑤狐・鼠などを捕る一種の装置。おとしあし。  
おしあ木〔御師〕(名) ①いのりの木。②伊勢神宮などにて、格おしあ。駕籠(名) 「をしあ」を見よ。  
おしあし〔駕籠〕(名) 「をしあ」を見よ。  
おしあし〔愛〕(形) 「をしあ」を見よ。  
おしあし〔感〕 古昔の聲調(び)の聲。――おしあ(感) おしあを重ねおしあし。〔押あ〕(接頭) 或動詞に冠して、「むけに」にちて、「あてて」などの義を表はし、且意を強くする語。「入る」。  
おしあ木(祖父)(名) 「おぢあ」を見よ。  
おしあ木(小父)(名) 「おぢあ」を見よ。  
おしあしあぐ〔御開〕(押あ)(他、か下二) おしあしてひらく。  
おしあしあぐ〔御開〕(押あ)(他、か下二) おしあして上へあおしあし。②ひきたてのぼす。  
おしあしあけ〔押あ明〕(名) おしあしあけがた。――がたあ〔押あ明方〕(名) よあしあけがた。あしあけがた。  
おしあしあけポンプ〔押あ揚唧筒〕(Force pump)(名) 理水を押し揚げて低所より高所へ送るポンプ。圓筒の側壁より出でたる管あり、其管に内方に開く鑄あり、圓筒の底に上

方(名) よあしあけがた。あしあけがた。  
おしあしあけポンプ〔押あ揚唧筒〕(Force pump)(名) 理水を押し揚げて低所より高所へ送るポンプ。圓筒の側壁より出でたる管あり、其管に内方に開く鑄あり、圓筒の底に上



作り、これを帛にて包み中に綿を入れ、物に貼(り)り附けたる繪。——ぎよく「押繪細工」(名) おしゑの細工。

おしゑ(教)(名)「をしへ」を見よ。

おしくり「押送」(名) 風向に關せずして、ひとすらすら(り)おして船をこぎやると。◎おしくりぶね。——

ぶね「押送船」(名) おしくりぶねにて行る船。

おじおじ「怖怖」(名、副)「おぢおぢ」を見よ。

おしかがむ(り)「押屈」(他) 下(二)おさへかかれます。おさへかかむ。おさへつく。

おしかがめる「押屈」(他)「おしかがむ」の説。

おしかかがる(り)「押掛」(自、ら四)よりかかる。

おしかか「押角」(名) まるみを持ちたる角材。

おしかか(り)「押掛」(自、か下二)◎推撃す。進取す。◎強ひて行く。おしてゆく。

おしかけ「押掛」(名)◎おしかかると。◎馬の頭、胸尾よりかけて、響鞍(り)につなぐ組綿。さんがい。響)。(三)おもがいに。——きやく「押掛客」(名) 招待せざるにおしかけて來たれ客。——「よぼう(り)」が「押掛女房」(名) 強ひて夫の家に入りこみたる妻。

おしかける「押掛」(自)「おしかく」の説。

おしかかす「壓滓」(名) 壓搾して殘留したる滓。

おしかた「押形」(名) 射術にて、おして。おしかた「押形」(名) 彫刻物に紙をあて、其上を蠟盤にて刷り、下の彫刻したる繪模様を寫すと。又其繪模様。

おしかたづけ「押型附」(名) 雜物に版木をおしつけて、種の模様を其面に寫しあらはすと。

おしかがひ(り)「押買」(名) 無理に買ひ取る。

おしかへし(り)「押返」(名) おしかへすと。



【ねぶりくおしお】



【角押】

おしかへし(り)「押返」(副)くりかへし。◎あべこべに。おしかへす(り)「押返」(他、さ四)◎おしてもとす。◎ひきかへす。◎こみあひて押しあふ。

おしがみ「押紙」(名)◎意見を認めて、文書に張り附けたる別紙。つけがみ。◎すむとりがら。

おしがり「押借」(名) 無理に財物又は金銭などを借ると。

おしかわ「借」(他)「をしがる」を見よ。

おさき「折敷」(名)「をしかは」を見よ。

おしきり「押切」(名)◎おしきると。◎さへきると。◎相撲にて、押して勝つと。◎又は杖を割(り)む兵器。◎おしきりばん。——はん「押切判」(名) 刺印。契印。おしきり「押切」(他、ら四)押し切り斷つ。おさへてきる。◎専心に目的をはたす。おしとほす。◎絶えず強(り)を押して船をおしくくみ(り)「押色」(名) つつみたるもの。◎「行やる」。

おしくくる(り)「押寛」(他、か下二)おしくつろぐる(り)「押寛」(他)「おしくつろぐ」の説。

おしくくら(り)「押下」(他、さ四)おして下す。おしておろす。おしとほす。◎「ろげひらく」。

おしくくる(り)「押寛」(他、か下二)おしくつろぐる(り)「押寛」(他)「おしくつろぐ」の説。

おしくくら(り)「押下」(他、さ四)おして下す。おしておろす。おしとほす。◎「ろげひらく」。

おしくら(り)「押下」(他、さ四)おして下す。おしておろす。おしとほす。◎「ろげひらく」。

おしとほす「押言」(名) 推測の言。臆斷の言。

おしこみ「押込」(名)◎おしこむと。◎たな。おしいれ。◎強盗。

おしこむ「押込」(自、ま四)◎故意に進入する。◎強盗。

おしこむ「押込」(自、ま四)◎故意に進入する。◎強盗。

おしこむ「押込」(自、ま四)◎故意に進入する。◎強盗。

おしこむ「押込」(自、ま四)◎故意に進入する。◎強盗。



【(四)りさしお】

おしこめる「押込」(他)「おしこむ」の説。「みあふ」。

おしこる(り)「押凝」(自、ら四)あつまる。よりあふ。◎おしこる(り)「押下」(他、か下二)おして下ぐ。

おしさげる「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。

おしさぐ「押下」(他)「おしさぐ」の説。



たるもの、もと下流社會に行はれたり。  
**おまやぶり**(名) 生後半年位の嬰兒に持たせて、其まぶら  
 になかする玩具、軸を細くして嬰兒の手にし得るやうにし、  
 其兩端に球状物を取附けたもの。

**おまやま**(名) 饒舌(名) よくまよべると。又、其人。

**おまやます**す(被仰)(他、さ四) おほせらる。

**おまやらく**(名) 身なりを飾るを好む性質、又其人。

**おまやり**(御舍利)(名) 「佛」「ぶ、あやり」の尊稱。病死して白舍利たる意。

**おしやる**らる(押遣)(他、ら四) おおして遣む。おし

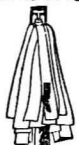
**おまやる**らる(御座)(自ら四) ござる。

**おまやれ**(名) おまやれを見よ。

**おまゆれ**(名) 「おぢやれ」をきたなくしてきまあると。

**おまゆら**け(汚臭)(名) 臭語「Urdhya」の轉、敬僧の義「佛」(一)道をしへ傳ふるもの。(二)僧位。(三)僧侶。坊主。(四)興福寺寶藏院の僧侶が、捨衛を教へし故事に出づ武所などの間住。

**おまよう**け(御嬢様)(名) 身柄よき家の處女の敬稱。  
**おまよう**け(御鏡口)(名) 移戸をあらためて鏡をおろすより心貴族の邸内に、表と裏との界とせる出入口。  
**おまよく**(御職)(名) 徳川時代、同輩の中にて頭立つ身分の人。(二)一店の同輩の中にて、最も頭立つ遊女。  
**おまよく**け(汚辱)(名) はづかしめ。はぢ。しておしやく。  
**おしよ**す(押寄)(他、おし、さ下二) 多人數群れをなおしよす。  
**おあらがみ**(一)神(名) 奥州地方にて尊信せらるる男女の神、四枝を出せる鬘鬘を尺餘の長さし切り、上部を剥みて面となくし、體部は其ままして木綿の布を結びつけたもの。



[みがらあお]

おしや—おしろ

化粧に用ふる白色の粉末、水に混じたるを水白粉といひ、煉り製したるを煉白粉といひ、煉白粉を紙に塗布したるを紙白粉といふ。原料には植物性植物性のものとあれど、炭酸鉛は世界を通じて用ひらるる、白粉の原料なり。鉛白。——くさい(白粉臭)(形) おあろひのくさいと云ふ。おまんなの美を發揮するため、おあろひを粧ふ前に、まづ肌にぬりおく料。——ばな(白粉花紫茉莉)(名) 「德」薬科料の多年生草本、山野に自生するものあれど、多くは庭園に栽培せらる、高さ二三尺、莖と枝とは節節をなして分枝す。葉は對生し、有柄にして、卵形全縁なり、夏秋は漏斗状をなし、黄紅白等其色種々あり、果實は圓形にして中に白粉を含む。——やけ(白粉燒)(名) 常に厚化粧する婦人の白粉の鉛毒のため、其顔面に薄黒きまみの出づると。おしわく(付替ひ)。「押分」(他、か下二) 前後左右へおしして分く。わけてひらく。



[なばいろあお]

**おしわける**「押分」(他) 「おしわく」の訛。  
**おしわり**(押割)(名) おさへてわたると。(二)おしわりむして消化しよしたる麥。磯割麥の對。  
**おしを**け「押桶」(名) えなをけ。(三)つけものをけ。  
**おしを**るらる(押折)(他、ら四) おさへて折る。  
**おまん**け(悪念)(名) 胸の氣持あしく、そぞろに嘔吐を催さんとする惑あると。むかふく。  
**おまん**け「汚疹」(名) 「舊」膿疱又は潰瘍の痂皮厚く重積して、恰も牡蠣の殻の狀をなすもの。  
**おす**す(押)「押」(他、さ四) おさへく。つきつく。(二)せまらる。すすむ。(三)強ひてなす。(四)忍びてなす。「病」を。(五)船をあやつりて、舟を行ふ。(六)印章の面に墨・朱などの色をつけて、其形を紙などにおさへてうつす。

おしわ—おす

(推)。おたかむ。駄目を。  
**おす**す(推)「推」(他、さ四) 進めやる。つきやる。(二)いただく。あぶく。(三)するまき。すあぐ。(四)うつす。およぼす。己が心をおして人に及ぼす。(五)思考す。きはめんかぶ。  
**おす**す(壓)「他、さ四」 上よりおのみを以ておさへつく。(二)おへた。おせす。渡ぐ。おしもおされもせぬ。  
**おす**「牡」(名) 「す」を見よ。  
**おす**「食」(他) 「す」を見よ。  
**おす**「施」(自) 「おづ」を見よ。  
**おす**す(汚水)(名) よこれたる水。きたなき水。  
**おす**す(阿杉阿玉)(名) 昔時、伊勢神宮への參詣道なる山田の山田(杉)に居りし一群の乞食、路の兩側に小屋を建てて床飯を張り、内に年若き婦人女はでやかなる服裝して、或は三味線或は胡弓を鳴らし、參詣人に錢を乞ひしもの。  
**おす**す(悍)(形、一) おぞし。強し。  
**おす**す(オストラシズム)「Ostracism」(名) 古代「ギリシア」にて、危険人物異端者等を、牡蠣の殻にたるしたる公衆の投票によりて國外に逐放せしむ。(二)轉じて、絶交又は放逐。  
**おす**す(澀須比)(名) 太古の衣服の名、頭より被りて面頬を覆つたものなり。

**おす**す(御滑)(名) おふんとん。(二)おさざり。  
**おす**す(オスミウム)「Osmium」(名) 「化」白金屬の元素。通例白金鏡中存在し、青白色の金屬光澤ある結晶をなす、硝子よりも強く、殆ど熔融し難し。——でんとん「電燈」«Osmium lamp»(名)  
**おす**す(オスミン)「Osmium」の縮称。用ひたる白熱電燈、使用電力を僅少なぐ大いに有利なと、價高くして壽命も亦亦からす。  
**おす**す(護田鳥)(名) 「動」みぞごめ。うすべ。  
**おす**す(御醉文字)(名) ナシ。船の人の語。  
**おす**す(オスラムランプ)«Ostracium Lamp»(名) 「オスミウム」と、タングステンとの合金「オスラム」を發光線としたる電球。



[うすお]

おす—おすら



おたて(榻)一名 おたつと。そそのかし、すすめ。「一にの  
おたてる(榻)他」おたつ」の訛。  
おたパコほん(御煙草盆)一名 煙  
草盆の敬稱。●七八歳許の少女の髪  
の結ひ方、左右に分けたる髪を雙方  
より併せて結ぶもの。●目で髪をばり  
もの、すすめもの。



【(二)盆草煙御】

おたひ(御旅)一名 おたひま。一 志「御旅所」一名  
神社の祭禮に、神輿の渡御して暫くとまるところ。  
おたひ(穩)一名 おたひか。志づか。一 しほれしき  
一穩(形)二 おたひかなり。志づかなり。

おたふく(阿多福)一名 顔圓く鼻低く頬肉豊かなる婦  
人の假名。おたふくめん。●おたふくめんに似たる顔の婦  
人。おかめ。●婦人をのしりていふ稱。一 あめ(阿多  
福治)一名 細長き餘の中に、阿多福面の形を作りこみ、い  
づこを切るも、阿多福面の出るやうにしたるもの。一  
かぜ(阿多福風)一名 (音)耳下腺炎。一 づら(阿  
多福面)一名 一 おたふくの面相。●婦人をのしりてい  
本舞。あの一が。一 まめ(阿多福豆)一名「そらまめ」  
の實の異稱。一 めん(阿多福面)一名 おたふく(一)。  
おたま(御玉)一名 おたままよと。●謎卵の異稱。(婦  
人の語)一 志やくと(御玉杓子)一名 小形の志やく  
もど。●魚(蛙)類の幼虫、水中に棲息す、體軀は楕圓形に  
して、側扁なる尾を有し、よく水中を游泳す。蛙の子(蝌蚪)。  
おだまき(芋環)一名 「をだまき」を見よ。  
おだまき(禿木)一名 「をだまき」を見よ。  
おだまや(御靈屋)一名 身分重き人の神輿を祀りおく所  
みやまや。たまや。(廟靈廟)。

おため(御爲)一名 「ため」の敬語。●思義だて。●廟物  
のおうつり。(京阪の方言)。一 がほ(御爲額)一名  
主人の御寫を思ふらし顔つき思義だてする顔つき。一  
ごかし(御爲轉)一名 人のためをはかるが如く見せて、  
却て者をなし若しくは自己の利益のみ計置する。志。やう  
ぞごかし。一 もの(御爲者)一名 忠義だてするもの。

オードーメード(Oddermeed)一名 註文の製品。  
おだやか(穩)一名 事なきと。志づけきと。やすらか。●お  
ちつくと。輕卒ならざると。●心のおほまかなと。むねの  
ひろきと。一 (へ)に巻きたるもの。  
おたらしひ(御盥)一名 女の髪を結び方。洋に髪を打ち交  
おだらひ(小田原)一名 「をだはら」を見よ。  
おち(落)一名 落つると。くだると。●ゆけもれ。●下にぐ  
ると。のがる。と。七騎。●落語などの結局。  
おち(御乳)一名 乳のひとと。うば。  
おち(藁蓋)一名 桶のひとと。うば。  
おち(復)一名 「をち」を見よ。  
おち(遠)一名 「をち」を見よ。  
おち(祖父)一名 「おち」の略。  
おち(父)一名 「おち」にけり足どり。●にけりくを  
おち。●水のひくとき。水のひききは。  
おち(穴)一名 おとしあな。  
おち(合)一名 合ふ所。一 やき(落合機)一名 柏着國幣合より  
産出する陶製、寛政五年の創始にして、専ら日用品を作る。  
おち(あ)一名 落合(自)は四)同じ所にいで會  
ふ。であふ。  
おち(あゆ)落鮎(一名) 秋の頃に産卵して後、流れに従ひて  
おち(いたまき)落板敷(一名) 一段低くなりたる板敷。  
おち(いり)落入(一名) 漬物にして、手負病者の絶患するさま。  
おち(いり)落入(自)は四) 深く凹む。くぼ  
まる。●落ち中に入る。はまる。おちこむ。●謀計にかか  
る。●城壁など陥落す。  
おち(いり)落居(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。

おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。

おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。

おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。

おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。

おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。

おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。

おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。  
おち(いり)落失(自) 「おちあゐる」を見よ。

おちつーおちむ

瀧まゝ人の静まると。一どころ「落著所」(名) おちつて場所。一はらふらり(増々)「落著拂」(自は四)極めて平氣にかまふ。あつてずす。

おちつーくけり「落著」(自、か四)「居所」さだまる。勸務さだまる。安心す。やすまる。勸定す。まづまる。調和す。かなふ。著色す。勸物事に勤せし言行かがるし。

おちつーくけり「落著」(他、か下二)おちつてやうにす。さだむ。まづむ。心をおちつけて聞け。

おちつける「落著」(名)「法を犯して間違を行き、さだめのおちつて」(越度)「他」おちつくの誤。

おちなし「落著」(名)「法を犯して間違を行き、さだめのおちつて」(越度)「他」おちつくの誤。

おちのひと「御乳人」(名) 貴人の子をばくむ乳母。おちのぶ「落延」(自)「おちのぶ」の誤。

おちのぶ「落延」(自)「おちのぶ」の誤。おちのぶ「落葉」(名)「地に落ち散りたる木葉。ちくえふ。おとしだね。らくいん。おちばいり。いろ「落葉色」(名) 枯れたるおちばの色。稍黄色にして赤みばしりたる色。一どころ「落葉衣」(名) おちばの散りかかりおちむ。一どころ「落人」(名) おちうと。

おちふだ「落札」(名) 入札にあたりたるど。らくさつ。おちふる「落魂」(名)「落魂零落」(自、ら下二) 富貴なりしもの貧賤となる。身分ひくくなる。れいらくす。なりさがる。おちふれ「落魂零落」(名) おちふるど。れいらく。らくはく。一は「落魂零落」(自、た下二) 甚しくおちぶる。またくおちぶる。一はて「落魂果」(自)「おちぶれ」の誤。

おちま「落座」(名)「地に落ちたる五段に稻の穂。おちま」(名)「家中に、床を一段低く設けたる所。おちま」(名)「古昔、京阪の劇場にありし土圍」の誤。

おちまど「落座」(名)「家中に、床を一段低く設けたる所。おちまど」(名)「古昔、京阪の劇場にありし土圍」の誤。

おちめーおつ

武者にげ行く軍兵。敗兵。一は「薙の鬘に栞つ」(句) おち氣つきたるもの、あらぬ形にもおそれを懐くにいふ。おちめ「落目」(名) おちぶれかかり。かたむく運命。

おちや「御茶」(名) 茶の敬稱。一「おちや」(名)「御茶所」(名) 神社・佛閣などに附屬し、其神佛へ茶を奉じ、又、藝妓の客をやすむ所。一ひきき「御茶儀」(名) 藝妓の客をなしくしてひまると。又、其藝妓。一を濁す(句) 當座をまかす。直面の事件を隠よくつくる。一を曬く(句) 藝妓の客になくしてひまるといふ。

おちや「御茶所」(名) 神社・佛閣などに附屬し、其神佛へ茶を奉じ、又、藝妓の客をやすむ所。一ひきき「御茶儀」(名) 藝妓の客をなしくしてひまると。又、其藝妓。一を濁す(句) 當座をまかす。直面の事件を隠よくつくる。一を曬く(句) 藝妓の客になくしてひまるといふ。

おちや「御茶所」(名) 神社・佛閣などに附屬し、其神佛へ茶を奉じ、又、藝妓の客をやすむ所。一ひきき「御茶儀」(名) 藝妓の客をなしくしてひまると。又、其藝妓。一を濁す(句) 當座をまかす。直面の事件を隠よくつくる。一を曬く(句) 藝妓の客になくしてひまるといふ。

おちや「御茶所」(名) 神社・佛閣などに附屬し、其神佛へ茶を奉じ、又、藝妓の客をやすむ所。一ひきき「御茶儀」(名) 藝妓の客をなしくしてひまると。又、其藝妓。一を濁す(句) 當座をまかす。直面の事件を隠よくつくる。一を曬く(句) 藝妓の客になくしてひまるといふ。

おちや「御茶所」(名) 神社・佛閣などに附屬し、其神佛へ茶を奉じ、又、藝妓の客をやすむ所。一ひきき「御茶儀」(名) 藝妓の客をなしくしてひまると。又、其藝妓。一を濁す(句) 當座をまかす。直面の事件を隠よくつくる。一を曬く(句) 藝妓の客になくしてひまるといふ。

おちや「御茶所」(名) 神社・佛閣などに附屬し、其神佛へ茶を奉じ、又、藝妓の客をやすむ所。一ひきき「御茶儀」(名) 藝妓の客をなしくしてひまると。又、其藝妓。一を濁す(句) 當座をまかす。直面の事件を隠よくつくる。一を曬く(句) 藝妓の客になくしてひまるといふ。

おちや「御茶所」(名) 神社・佛閣などに附屬し、其神佛へ茶を奉じ、又、藝妓の客をやすむ所。一ひきき「御茶儀」(名) 藝妓の客をなしくしてひまると。又、其藝妓。一を濁す(句) 當座をまかす。直面の事件を隠よくつくる。一を曬く(句) 藝妓の客になくしてひまるといふ。

おちや「御茶所」(名) 神社・佛閣などに附屬し、其神佛へ茶を奉じ、又、藝妓の客をやすむ所。一ひきき「御茶儀」(名) 藝妓の客をなしくしてひまると。又、其藝妓。一を濁す(句) 當座をまかす。直面の事件を隠よくつくる。一を曬く(句) 藝妓の客になくしてひまるといふ。

おちや「御茶所」(名) 神社・佛閣などに附屬し、其神佛へ茶を奉じ、又、藝妓の客をやすむ所。一ひきき「御茶儀」(名) 藝妓の客をなしくしてひまると。又、其藝妓。一を濁す(句) 當座をまかす。直面の事件を隠よくつくる。一を曬く(句) 藝妓の客になくしてひまるといふ。

おつーおつけ

行くづる。墮落す。一「おつ」(名)「罪に服す。はくちやう。手に入る。中原の鹿難の鼻にーるを知らず。一れば同じ谷川の水の目」最後に歸著する所の同一なるをいふ。

おつ「復」(自)「を」を見よ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。

おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。

おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。

おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。

おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。

おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。

おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。

おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。

おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。おつ「復」(名)「復」(自、た上三) おそる。ひるむ。

**おつけ(御告)**一名 告ぐるとの敬稱。佛佛の託宣。

**おつけはれて(副)**「を」をつけはれてを見よ。

**おつけん**一名「臆見」一名 例證によらず推論を用いず、ただ自家の想像にのみ基ける意見。自己獨断の意見。

**おつけん**一名「越権」一名 越へけん。

**おつこ**一名「種」おんこ。

**おつこ**一名「越期」一名 時期を過ぎます。久しきに亘ると。

**おつこ**一名「億劫」一名 億一切の億々倍。かぞへ盡しがたき數。

**おつこ**一名「越獄」一名 越獄。

**おつこ**一名「情夫又は情婦」(東京の方言)。

**おつこ**一名「自」おちるの語(東京の方言)。

**おつこ**一名「他」おちるの語(東京の方言)。

**おつこ**一名「他」おちるの語(東京の方言)。

**おつこ**一名「他」おちるの語(東京の方言)。

**おつこ**一名「他」おちるの語(東京の方言)。

**おつこ**一名「他」おちるの語(東京の方言)。

**おつこ**一名「他」おちるの語(東京の方言)。

**おつこ**一名「他」おちるの語(東京の方言)。

**おつこ**一名「他」おちるの語(東京の方言)。

おつけーおつこ

をつく。やつとかたをつく。

**おつけ(追附)**一名 追いつく。おもたず。

**おつめる**一名「追詰」一名 追いつめる。

**おつめる**一名「追詰」一名 追いつめる。

**おつて(追手)**一名 追いつける人。

**おつて(追而)**一名 追いつける。

**おつて(夫)**一名 追いつける。

**おつて(感)**追いつける。

**おつて(動)**追いつける。

**おつて(長)**追いつける。

**おつて(厚)**追いつける。

**おつて(海)**追いつける。

**おつて(足)**追いつける。

**おつて(逆)**追いつける。

**おつて(押)**追いつける。

**おつて(追)**追いつける。

**おつて(取)**追いつける。

**おつて(巻)**追いつける。

おつこーおつこ



〔一〕アザラシ

**おつに**一名「乙」(副) きたいにへんに。ふまぎに。

**おつね**一名「越年」一名 次年に移り越すと。としをこす。

**おつばい**一名 乳の稱。東京の小児の語。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

**おつばい**一名「押走」一名 押さへ走らす。

おつこーおつこ

おてまへ—おとぎ

おてまへ(御手前)代)室町時代以後に行はれし對稱の代名詞。あなた。足下。

おてら(御寺許)名)「てもと」の敬稱。

おてん(汚點)名)けがれたる箇所。よれたる點。

おてん(御田)名)でんがく(一)「萬福」字などを申

酒(一)「萬福」字などを申(二)「萬福」字などを申

おてん(御田屋)名)御田を養育する人又は家。

おてん(御轉變)名)女のかるはずみなる性質又はとりめなく、陰気性質又は其性質の女。

おと(音)名)ひびき。おん。おとづれいんま

おと(弟)名)おとむき。おん。おとづれいんま

おと(乙)名)おと。

おとうと(弟二名)おとひとの音轉)同じ親に生まれたる年またの男子、もとは女子にもいへり。一)弟御

師匠の許に、後に來りたる弟子。兄弟子の對。一)ぶん

分)名)假におとうとと定めたるもの。ぎてい。義弟。

おとよめ(弟嫁)名)副)「おとよめ」の訛。

オートカー(Auto-car)名)自動車。「おやじ」の意。

おどかし(威)名)威勢を示して恐れさせること。おどろかし

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おどかす(音金)名)司のうらはすの方にあたる弓(弦)の

おとぎ—おとこ

おとぎ(御伽小姓)名)幼主又は幼君の遊相手となる小姓。一)はなし(御伽小)名)人のつづげ

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽

おとぎ(御伽小)名)人のつづげを思ふためのはなし。一)兒童に聞かする昔話。一)はふこ(御伽



[草切弟]



[こふはぎとお]

おとこ—おとし

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。

おとこ(御前)名)おたふ。





おともーおとろ

呼ぶ敬稱。●皇町幕府の職名、常に將軍に近侍置從せしもの。
オートモビル [Automobile] (名) 自動車。
おとよめ [乙女] (名) 一手二本の矢の第二自動目に射る矢。「は

おとよめ弟嫁 (名) 弟の妻 (姉婦)。
おとり [劣] (名) おとるとも、品のさがら。
おとり [劣] (名) おとるとも、品のさがら。
おとり [劣] (名) おとるとも、品のさがら。

おとり [四] (名) 「をとり」を見よ。
おとり [踊] (名) 「をとり」を見よ。
おとろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。



【おどろき】

おどろーおなり

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。
おどろ [自] (名) 「をとり」を見よ。

おなんーおに

おなん [御成切] (名) 碁石ほどの大きに丸くひらめたる麦子餅。古昔、將軍よりこれを包みて臣下に賜ひたり。
おなん [御成切] (名) 御成切奉行 (名) 皇時代に、將軍の諸大名の邸に赴くと、諸家に至り臨時に職名、當日の諸事萬端をすまかりしもの。
おなん [御成切] (名) おなんのときの通稱。
おなん [御成切] (名) おなんを奉迎するために建てたる門。

おなん [御成切] (名) 貴人の衣服調度などを入れお納戸色 (名) 染色の名、ねずみ色をおびたる藍色。
おなん [御成切] (名) 徳川時代の職名、幕府又は諸侯の居城にて、衣服調度の出納がかりしもの。

おなん [御成切] (名) 死人の靈魂、うらいたい。幽魂。
おなん [御成切] (名) 思像上の生物、人身にして牛角あり、種體にして虎皮の禊ぎを着、相貌瘠弱にして怪力ありといふ。
おなん [御成切] (名) 借金とて。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。

おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。

おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。

おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。

おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。

おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。

おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。

おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。

おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。

おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。
おなん [御成切] (名) 借金の毒鬼。





おはらめ(大原女)(名) 柴・新花などを頭上に戴き、京都の市街に出てて兩よ京  
都近郷の婦女。



【めらほ】

おはり(針針)(名) 履はれて針とよとする女。

オパール(名) (Opal)の訛。蛋白石。

おひひ(追)(名) せおよ。おひきうけ。おやくきん。

おひひ(負)(名) せおよ。おひきうけ。おやくきん。

おひひ(笈)(名) 葛籠の類。四脚に脚ありて、開閉すべき戸を設く。修験者又は行脚(僧侶)などが旅中背に負ふもの。



【笈】

おひ(帯)(名) 衣類を多に著るるため、其上より腰のあたりにままと結び、男子の用ふるを男帯と稱し、女子の用ふるを女帯と稱す、其地合仕立等種類多し、殊に女帯の結び方には、種々の形式あり。おひの如き状態をなすもの。

「封」。①(歌)二つの球を二つの平行せる平面にて切りたるとき、其間にある球面部分。—あげ(帯揚)(名) 女の帯のさがらぬためにむすぶ。—はひ(帯扱)(名) 女かし標に長し(紐) 中途はんばにして何れにも用をなさざるに。—紐解く(句) 安心して警戒をなさざるに。②男女の打ちとて共解するに。—を緩くす(句) 安心して起居するに。—

おひい(だす)(御姫様)(名) おひめさま。

おひい(だす)(行状)(名) 出出(自、さ四) おひだす。

おひい(だす)(生出)(自、た下二) うまれいづ。うま。②はえいづ。は。

おひ(う)ち(追撃)(名) おひうつ。つらげき(尾懸)。

おひ(う)ち(追撃)(他、た四) あとより追ひかけて撃つ。おひかけてうつ。つらげき。

おひ(怯)(自、か四) おひえてうらたへさわぐ。—まど。

おはら(おひえ)

おび(怯)(自、か四) おびえて舉措を失ふ。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。

おび(怯)(自、か四) おびえて。うらたへまど。



【母水帯】

おひさーおひそ

おひさもと「御膝下」(名) 貴人の近側。おそば。①留城のある部下。②敷地の名。戸の中程にある構機。

おびさ「帯地」(名) 帯に仕立つべき布帛。

おびまき「追敷」(名) 龍「おびまき」ようきん。――せめ「追敷政」(名) 龍取引所にて、相場を買占又は賣筋を防止するために、追証據金を徴収する。

おびまき「生敷」(名) 生敷「自、か四」生ひつづく。よくまげる。――よぶ。

おびまき「追及」(自、か四) 追ひつく。追ひお

おびまき「生茂」(自、ら四) はえてよくまげる。

おびまき「帯下」(名) 帯をまげる下。①帯より足もとま

おびまき「帯純」(名) 腰のすこし上にて帯を結ぶ所。腰腹の左右肉の少なきところ。よわじし。

おびまき「帯縮」(名) 帯の解けるやう、帯を結びたる上に締め結ぶ巾、専ら婦人の用ふるもの。

おひまき「追証」(名) 龍「おひまき」ようきん。

おひまき「追証據金」(名) 龍取引所にて、相場の變動に際し、損方の責任當事者より本証據金以外に追加して徴収する證據金。おひまき。

おひまき「帯代探」(名) 婦人の細帯のみをまめたる。あだなき姿ほそおひまき。

おひまき「追次」(自、は四) おひまき。――とをおひまき。

おひまき「追迫」(自、ら四) 追ひおよぶ。

おひまき「追迫」(自、ら四) 追ひおよぶ。

おひまき「追迫」(自、ら四) 追ひおよぶ。

おひまき「追迫」(自、ら四) 追ひおよぶ。

おひまき「追迫」(自、ら四) 追ひおよぶ。

おひまき「追迫」(自、ら四) 追ひおよぶ。

おひそーおひり

おひそはる「生添」(自、ら四) 成長してたけ高くなる。たけ高くそだつ。

おひだし「追出」(名) おひだすと。①Eiminda. ②二箇以上の方程式より、未知数の一部を含まざる新しき方程式を作る。例へば、x<sup>2</sup>+y<sup>2</sup>=10、x<sup>2</sup>+y<sup>2</sup>=2より、加法によりて、2x<sup>2</sup>+2y<sup>2</sup>=12となす如し。

おひだす「追出」(名) 病氣の内攻をふせぐ。――外へ追ひやる。

おひだす「影」(形、二) きはめて敷多し。おほ

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひだす「影」(名) おびださし。又、おびださし度合。

おひりーおひの

おひり「追手」(名) 亡ぐる者をおひり行く人。おひり「天」(名) 「を」と見よ。

おびり「帯戸」(名) 帯機ある戸。

おびり「帯解」(名) 男児は五歳より九歳までの間に、女児は七歳のとき、十一月の吉日を探び、附紐を解し始めて、帯を用ふるまきに自ら脱ぎの儀。おびり。――すがた「帯解姿」(名) おびりて去らなき姿。

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり

おびり「帯留」(他、ま下二) おひり









おほかーおほき

ちやくく野心人。——れん「狼連」(名) 女藝人に對して、たはは殊勝氣に見えて男子の恐るべき人を譬へいふ。②衣服の身體に合はずして大きなを譬へいふ。

おほかめ「狼」(名)「動」。「おほかみ」の訛。「おほかめ」(名)「種」。「忍冬」科の落葉灌木、山中に自生す、高さ五六尺、多く枝を分ち、葉は對生し、大形にして廣橢圓形、尖端にして鋭角あり、六七月頃、枝頭に繁盛花序を著け、白色の花を散放す。黒紫する果實を結ぶ。嫩葉及果實は食用に供せらる。むしかり。

おほから「大柄」(名)「身體の通常より大きなこと。魁梧」。②「縮柄」の普通より大きなこと。

おほかり「大幸」(名)「七色唐辛子の最も辛きもの。おほかり」(名)「多」。「自ら」變。おほかりあり。

おほき「大木」(名)「動」ひしくひ。

おほき「大木」(名) おほきなる立木。

おほき「大木」(名) おほいなる立木。

おほき「大木」(名) おほいなる立木。

おほき「大木」(名) おほいなる立木。

おほき「大木」(名) おほいなる立木。

おほき「大木」(名) おほいなる立木。

おほき「大木」(名) おほいなる立木。

おほき「大木」(名) おほいなる立木。

おほき「大木」(名) おほいなる立木。

おほきーおほく

「おほきみづかさ」といふに出づ、正親町を「おほきまち」といふも亦これに同じ「諸王」の稱。

おほき「大君」(名)「君」に對して、主君を呼ぶ稱。

おほき「正親司」(名) おほきんだちのつか

おほき「大肝煎」(名) おほきやうやう。

おほき「大形」(名) 實際よりもおほげきなること。必要よりも大仕掛なること。おほげき。やうさん。(説大)。「ま

おほき「大切」(名) 大きく切り分けたる切身。②演劇の狂言にて、其日の終末の戲。おほげめ。(大團圓)。

おほき「多」(副) すくならず。たくさん。

おほき「大括」(名) 全體を一つに括べくくると。おほき「大括」(名) 全體を一つに括べくくると。

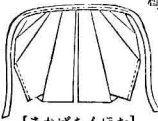
おほき「大具足」(名) 長大なる具足。②大形なる

「大口」(名) 古言「行」はれし袴の一種、東帯のとき表袴(袴)の下に穿しもの、裾の口廣くしておほきし、すずしひらぎぬを用いて仕立てたる太き縁にて織りて張り出すやうに仕立てたるもあり、これ等はすすやうに公家の用とす、其後の張り出すやうな大縁にて製したるは専ら武家用とす。

おほき「大口」(名) 大きく口をひらくこと。②おほき「大口」(名) 大きく口をひらくこと。②おほき

おほき「大食」(名) たいまよくばうまよく。

おほき「大蜘蛛」(名)「動」くも「一種、大形にして



おほくーおほこ

白壁あり、脚長くして毛多し。

おほくら「大藏卿」(名) 大藏省の長官。

おほくら「大藏省」(名) 古昔の八省の一、大藏官に屬し、出納・貢納・權衡・賣買・估價其他金銀・珠玉等に關する事務をつかさとりし官廳。おほくらつかさ。

「各省の一、大藏大臣の統轄の下に屬し、其意思を受け、財務行政に關する事務を取扱ふ補助機關。一、會計年度内一時の歳入不足を填補するため、大藏省が發行する短期の公債證書、我國現行法にては、十二月を以て償還の最長期とし、毎年の豫算にて、其發行最高額を定む。

おほくら「大藏大臣」(名)「法」各省大臣の一、財務行政の單獨官廳。

おほくら「大藏卿」(名) おほくらきやう。

おほくら「大藏省」(名) おほくらきやう。

おほくら「大藏流」(名) 能樂大鼓の一派、大藏源右衛門を祖とす。

おほくら「大架鼓」(名) さほどにもなき事をさもおほくらきやう。おほくらきやうさん。②より斜に切りおほくらきやうに切り拂ふ。

おほくら「大形」(名) おほきし。

おほくら「大形」(名) 一年生草木、田野に自生す、莖は直立し、高さ五六尺、葉は長柄を有し、大形にして長卵形をなし先端尖る、莖と共に紅色を帯びて毛茸を生ず、秋、花輪を抽き紅花を散る。

おほくら「負氣無氣」(名) おほけなきさま。

おほくら「負氣無氣」(名) おほけなきこと、又、其度合にあまねり。おほけなきこと、又、其度合にあまねり。おほけなきこと、又、其度合にあまねり。

おほくら「大下馬」(名) 下馬の標木又は標石。

おほくら「親の未だ世に慣れざること。女の未だ男に接せざること。又、其女。處女。②いまだ世馴れぬ初心の童男。③「動」顔の子。





おほててオホテテ「天父」(名) 祖父の古稱。  
おほどオホド「大戸」(名) 表口などにある大いなる戸。  
おほどオホド「大洞」(名) 能樂に用ふる大穴(きり)。  
おほどオホド「大道具」(名) 劇場の舞臺の飾附。  
おほどオホド「かた」(名) 劇場の大道具のかけりつけを擔任するもの。

おほどオホド「名」ゆるやか。おほのか。おほまか。  
おほどオホド「名」(自か)のどやかにてあり。おほまかにてあり。  
「き床の間。」

おほどオホド「天床」(名) 栞のそとがこひ。(稱)。  
おほどオホド「天所」(名) おほいなるかまへの家。寶座おほき家。たいけ。——の(大句)たいけに側はるゝ犬。轉じて、たいけのやとにん。

おほどオホド「天所」(名) 前條に同じ。  
おほどオホド「天年」(名) おほみさか。——こし「大年」(名) おほみさか。おほつごり。

おほどオホド「大年寄」(名) たいらう(大老)。  
おほどオホド「天殿油」(名) 「おほととのあぶら」の略。「近くまゐりて」。

おほとオホト「大令人」(名) 古昔、宮中の分番又は宿直若しくは供奉などの事をつかさどりし職名。  
おほとオホト「大舍人寮」(名) 古昔、中務省の被官にして、大舍人に關する事項を掌りしつかさ。——の(かみ)大舍人寮頭(名) 大舍人寮の長官。

おほとオホト「天殿」(名) 正殿。寢殿。  
おほとオホト「大殿油」(名) 貴人の當主の父。  
おほとオホト「貴人の世に對して當主」——あぶら「大殿油」(名) 古昔、正殿につけたるとしむ。——ごもる「大殿籠」(名) 御殿なること。——ごもる「大殿籠」(自ら四)御殿あらせらる。——ほがひ「大殿祭」(名) 古昔、宮中にははれし祭事。屋船久入舞(命)屋船聖宇氣(命)命。大宮實(命)命を祭りて、宮殿の火災其他の災難からんとを禱らしむもの。怪例祭と臨時祭とあり。怪例祭は神今食、新嘗祭、大嘗祭の時にはれ、臨時祭は皇居の遷移、齋宮・齋院卜定の後等にははれたり。

おほどオホド「大通」(名) 市中を買きたる幅のひろき道路。だい。おほち。  
おほどオホド「枕詞」(名) わかもの。おとな。  
おほどオホド「大伴」(名) 「みつ」たかしに冠するおほとオホト「大伴部」(名) 上古、武事を以て朝廷に事へし部族。天忍日(命)の後裔といふ。

おほとオホト「大鳥」(名) 鶴(い)鶴(い)鶴(い)などの如き大形なる鳥。(う)「莊子に出づ」(名) といふ鳥。鶴(い)といふ大魚の化してなりたるものといふ。——の「大鳥之」(枕)はかへに冠する枕詞。

おほとオホト「自」(自ら下)「おどろ」になる。ひろがりみだる。おほどオホド「大名兒」(名) 女子の美稱。  
おほとオホト「大名題」(名) 或對行の狂言體に通じたる標題。又、其標題を表示したる看板。

おほとオホト「大直目」(名) 物忌より平常になるる義神事。はて後の宴。なほらひ。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。  
おほとオホト「大滑」(名) 高く大きな浪。(巨瀾)。

おほねオホネ「むし」(名) 蝗(名) 「動いむし」。「さ。おほざやう。おほのか」(名) 寛かに靜かなること。おほやう。おほねオホネ「大野貝」(名) 「動」海貝類の貝。貝殻は楕圓状をなし左右殆ど同形、外面濃灰色、内面白色、水管を殻外に伸長し吸水して生活す、我國には多く東海に産す。

おほねオホネ「祖母」(名) ばば。  
おほねオホネ「大吞込」(名) す。かり呑み込むこと。  
おほねオホネ「大葉白辛樹」(名) 「種」白辛樹(名) の一種、山中に自生す。葉は大形にして楕圓状をなし、先端尖り鋸齒を有す、春日、白色の複繖花を開く、果實は堅果にして帯白色の毛を冠す。

おほねオホネ「大葉芥子」(名) 「種」十字花科の草本、岡園に栽培せらる。莖は高さ三四尺、葉は大形長楕圓形にして鈍頂、鋸齒を有し深紫色を呈す、「からし」に似たる小花を繖房す、花後長角を結ぶ、葉を乾かして粉末とせるものを青粉と稱し、餅を染むるに用ふ。

おほねオホネ「車前」(名) 「種」車前科の多年生草本、隨所に自生す、葉は宿根より發生し、楕圓形又は卵形をなして葉柄長く、通常五本の肋を有す、夏、葉の中央より花茎を抽き、花を開く、花は強壯な序に排列し、花冠は漏斗狀、果實を結ぶ、葉は食用に種子は薬用に供せらる。かへせばいろうだな。

おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。

おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。

おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。

おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。

おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。

おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。

おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。

おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。

おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。  
おほねオホネ「大橋」(名) おほせらうだな。



【おほねの貝】

おほて—おほと

おほと—おほね

おほね—おほは









おほんべ(大嘗會)名 だいなうゑ。  
おまし(御座)名 主上又は貴人のまします所。——ど  
ころ(御座所)名 前條に同じ。——ますませ(御  
座)自、三四 おはします。

おますませ(御座)自、三四 「在り」居りの敬語。  
おますませ(自、三四)ごさいませ。(京阪の方言)。  
おまつ(雄松)名 「をまつ」を見よ。

おまつり(御祭)名 登壇の敬稱。——さわざ(御祭  
騷)名 祭禮をひたす。賑はしくせんため、町内のさわ  
ぎたつて。御祭のときの如く、ただわけもなく無間にかま  
はさむこと。

おまははじめ(御學始)名 主上皇族其他貴き方々の學  
おまはり(御廻)名 飯の案。おめぐり。おかず。(京  
阪の方言)。「まはる」の敬稱。  
おまはり(御巡)名 遊資の敬稱。

おまへ(御前)名 人のまへの敬語。  
おまへ(御前)代 對稱の代名詞。もとは敬稱なりしが、  
今は同輩又は目下にも用ふ。——さま(御前様)代 敬意  
の對稱代名詞。

おまもり(御守)名 守札の敬稱。  
おまる(名) おかは。(雷聲、虎子)。  
おまん(御饅)名 まんぢゅう。小兒の語。

おまんが(御萬)名 幕天に江  
戸市中に流行せし一種の節儉な  
まめかき女裝をなす。聲色・身  
照ともに女に擬したりしもの。

おまんま(御飯)名 めし。  
おみ(臣)名 (天皇の時)君につかふる人。あんか。(姓  
の)名、上代には貴族の土流に位する一階級にして、大臣  
(は)其族より選ばれたりしが、大化改新の後は、姓の第六位

おみ(使主)名 上代の姓の一名。「に遊せられたり。  
おみ(御身)名 人の身軀の敬稱。おからだ。「大初に」。  
おみ(小忌)名 「をみ」を見よ。



【めあがんまお】

おみ(御身)代) そなた。おもと。——さま(御身様  
(代) 敬意の對稱代名詞。あなたさま。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。

おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。  
おみ(大御)接頭「おはみ」の略。「おつけ」。「おび」。



【形人産土御】

にて電流「アンペア」の通ずるときの抵抗横断面一平方  
「ミリメートル」長さ一〇六三「センチメ  
ートル」の水銀柱の抵抗に同じ。——  
けい「計 Ohmmeter」(名)  
【理】導線に於ける抵抗の「オーム」  
の法則 [Ohm's law] (理)  
電流の強さに關する法則「オ  
ーム」。「オーム」の發見せし  
の、導線を通ずる電流の強さは、  
其導線の兩端の電位差に比例し、抵抗に逆比例すると。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

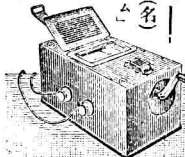
おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。

おむかし(むかし)形(一) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(二) よるこばし。  
おむかし(むかし)形(三) よるこばし。



【計ムーオ】

おほんおみ

おみおむ

おむかしおむお









おもひーおもひ

おもひながすおもひながす「思流」(他、さ四) ①おもひつづく。②心にとどめず。

おもひなほすおもひなほす「思做」(名) 思ひはかりてそれと定むるとおもひなす。

おもひなすおもひなす「思准」(他、は下二) 比較して考ふ。くらべあはせておもふ。

おもひなだむおもひなだむ「思宥」(他、ま下二) 心の和ぐやうに思ひかへす。

おもひなだらむおもひなだらむ「思宥」(他、ま下二) おもひなほす。

おもひなほしおもひなほし「思直」(名) おもひなほす。

おもひなほすおもひなほす「思直」(他、さ四) 考へなほらたまはる。

おもひなほるおもひなほる「思直」(自、ら四) おもひあらまはる。

おもひなやむおもひなやむ「思惱」(自、ま四) 心をくらしへさとする。

おもひなるおもひなる「思慣」(自、ら下二) 常に。

おもひねおもひね「思寐」(名) 政事を思ひながら寝るといふ。

おもひねんおもひねん「思念」(他、さ四) 心に念ず。

おもひのいおもひのい「思家」(名) 佛、三界の火宅、煩悩をいふ。

おもひのいろおもひのいろ「思色」(名) くれなゐの色。

おもひのかずおもひのかず「思度」(名) おもひの晴れやらざるを空をおほふ量に譬へていふ。

おもひのきづおもひのきづ「思絆」(名) こころのほだし。

おもひのこおもひのこ「思殘」(名) みれん、ざんねん。おもひのたけおもひのたけ「思丈」(名) おもひのかぎり。おもひのたねおもひのたね「思種」(名) 心配するものとあ。おもひのたまおもひのたま「思珠」(名) 「佛」ねんす。おもひのつなおもひのつな「思綱」(名) 情にひかされて心のまな

おもひーおもひ

おもひのつゆおもひのつゆ「思露」(名) なみだ。

おもひのどむおもひのどむ「思和」(他、ま下二) おもひのひおもひのひ「思火」(名) もえたとくきおもひ。胸をこがすおもひ。

おもひのふちおもひのふち「思淵」(名) おもひの積りたるを淵の

おもひのほかおもひのほか「思外」(名) 意外、意外。

おもひのほるおもひのほる「思上」(自、ら四) 心たかくなるたかくとまる。自負す、増長す。

おもひのまおもひのま「思盛」(名) 副。心に思ふまま。おもひ

おもひのやおもひのや「思恩」(名) おもひに心のくらむと。

おもひばおもひば「思羽」(名) いてふば、つぎは。

おもひはおもひは「思量」(他、ら四) かんがへはかる。かんがへるをめぐらす。

おもひはくおもひはく「思育」(他、ま四) 心をかかへ

おもひはむおもひはむ「思勸」(自、ま四) 心にかけてはげみつとむ。

おもひはしおもひはし「思始」(他、ま下二) おも

おもひはしめおもひはしめ「思始」(他、ま下二) おも

おもひはつおもひはつ「思果」(他、た下二) おもひ

おもひはなおもひはな「思放」(他、た四) おもひ

おもひはなおもひはな「思離」(自、ら下二) おも

おもひはばおもひはば「思憚」(他、ら四) はばかりおもひはらおもひはら「思同胞」(名) なかむつまじき同胞。おもひはるおもひはる「思晴」(他、か下二) おも

おもひはとおもひはと「思人」(名) 思ひを掛けたる相手の人。意中おもひふりおもひふり「思振」(名) 其人を思ふが如きそぶり。おもひふるおもひふる「思舊」(自、ら四) おもひつづ年月を經て久しくなる。おもひへおもひへ「思隔」(他、た下二) 心に

おもひーおもひ

おもひほおもひほ「思誇」(自、ら四) 心中にほこ

おもひほおもひほ「思德」(自、ら下二) おもひよ

おもひまおもひま「思説」(他、か下二) あり

おもひまおもひま「思紛」(他、は下二) おも

おもひまおもひま「思雜」(自、ら四) 種々の思入

おもひまおもひま「思増」(自、さ四) おもひやま

おもひまおもひま「思惑」(自、は四) 心まよひて

おもひまおもひま「思退」(他、さ四) いろいろ

おもひまおもひま「思迷」(自、は四) 心まよひて

おもひみおもひみ「思亂」(自、ら下二) 思ひく

おもひみおもひみ「思亂」(自、ら下二) 思ひく

おもひみおもひみ「思試」(他、ま上二) 思ひめぐらす。かんがへみる。おもひみ

おもひみおもひみ「思結」(自、ら下二) お

おもひみおもひみ「思咽」(自、は四) おもひ胸に

おもひみおもひみ「思陸」(自、は上二) 互に

おもひみおもひみ「思運」(他、さ四) 思ひまは

おもひみおもひみ「思休」(自、は四) 心に決

おもひみおもひみ「思止」(他、ま四) おもひとまる。おもひやおもひや「思退」(名) おもひやると。おもひやおもひや「思迷」(他、ら四) 推量しておも

おもひやり(おもひやり)「思遣」(自、ら四)心をやる。思ひをはらす。【ゆるす。】

おもひゆるす(おもひゆるす)「思許」(他、さ四)心の中に「おもひよす」(おもひよす)「思寄」(他、さ下二)さまざまの事をひきよせて思ふ。なぞらへて思ふ。

おもひよせる「思寄」(他、「おもひよす」の訛。ひなずらふ。【くわいに。】

おもひよそふ(おもひよそふ)「思準」(他、は下二)おもひなずらふ。【くわいに。】

おもひよらず(おもひよらず)「不思寄」(副)不意に。思ひがけりす。あんおもひより「思寄」(名)おもひつき。ぞんじよ。

おもひよる(おもひよる)「思寄」(他、ら四)かんがへつく。おもひつく。おもひあたる。

おもひよわる(おもひよわる)「思弱」(自、ら四)心よわくなる。おもひよる。【つく。かんがへらる。わかる。】

おもひわかく(おもひわかく)「思分」(他、か四)分別す。かんがへわく。【えみず。わする。】

おもひわたる(おもひわたる)「思渡」(自、ら四)思ひつつ月日をおくる。おもひつつ世を渡る。

おもひわづら(おもひわづら)「思煩」(自、は四)おもひなやむ。おもひわづら。【思ふ。思ひわづらふ。】

おもひわ(おもひわ)「思」(他、は四)「思」(自、は上二)わびしく推量す。おしはかる。【思像す。おもひかたどる。(想)。(回)願望す。ねがふ。(欲)。(思)れず。記す。おぼしむ。愁ふ。(憐)む。愛す。(願)。(憂)ふ。こしひが(禮)。(回)答する。おもひめぐらす。】

おもひま(おもひま)「思様」(名、副)思ふとほり。おもひま。おもひま。おもひま(任意)。(一)つぼ「思盡」(名)豫期したる計畫。附中。——どち(名)互に相思ふ同志。——に「思惟」(副)思惟するに。かんがふる。にはかるに。(願、意)。(一)ひ「思日」(名)(な)き人を思ふ日の義。曜日。命日。——ひと「思人」(名)親しき友。【こ

ひびと。——まま「思儘」(名、副)心のゆくばかり。おもふとは。——よう「思様」(名、副)おもふとほり。おもふま。思ひ思はる(句)我は彼を思ひ彼は我を思ふ。互に相思ふ。——中の垣(句)親しき間柄にも、まかるべき體があるべき。——念力岩をも通す(句)(石)に立つ矢の故事に出づ)心力をこめて行へば成らざる事なきを

おもふき「趣」(名)おもひむく。【ふ。】

おもふく(おもふく)「趣」(他、か下二)おもひむく。おもふく。【ふ。】

おもふく(おもふく)「趣」(他、か下二)おもひむく。おもふく。【ふ。】

おもふく(おもふく)「趣」(他、か下二)おもひむく。おもふく。【ふ。】

おもふく(おもふく)「趣」(他、か下二)おもひむく。おもふく。【ふ。】

おもふく(おもふく)「趣」(他、か下二)おもひむく。おもふく。【ふ。】

おもへらく(おもへらく)「思謂」(以爲)「副」思へるには。おもへり「思」(名)かほつき。顔色。【ふ。】

おもほし(おもほし)「思」(形二)おもはし。おもほす「思」(他、さ四)おぼす。おぼしめす。【ふ。】

おもほてる(おもほてる)「面熱」(自、ら四)顔赤くなる。いかれおもほゆる(おもほゆる)「思」(自、や下二)おもはる。おぼゆ。【ふ。】

おもむき「趣」(名)おもむく。おもむき。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもむく(おもむく)「赴」(趣)「自、か下二」おもむかしむ。おもむく。【ふ。】

おもら(おもら)「重」(名)重きまに見ゆる。おもら(重、鏢)(名)輕きもの重きを増さんために附け加ふるもの。釣絲の一。【鏢、の附屬品。はかるべき物品の重きと平均を保たしむるために用ふるもの。ふんどう。(鏢)。(一)一方の力に對抗せしむるため、反対の側に用ふる物質。——みち「鏢道」(名)揚御意又は揚御戸などに取附けたるおもりの昇降する道。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】

おもら(おもら)「重」(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。おもら(重、鏢)(名)おもら。【重となる。】





おやゆび【親指】(名) ●おほゆび(指)。●亭主。

おやわん【親戚】(名) 大いなる飯碗。

おゆひ【一】(老) 自、や、二) ●よはひ重なる。としよ

る。●としよりて衰弱す。おとろふ。●時節の末となる。春

已に。●老いせぬ門(句) (和漢朗詠集に、末門前日月

運とあるに出) ●皇居の門を祝ひていふ稱。●壽命の長

きを祝ひていふ辭。老いせぬ藥(句) 服用すれば長壽を

保ちて老せずといふ藥。老いたる馬は路を忘れず

(句) 謂代恩顧のもの故主の恩義を忘れざるに譬へいふ。

老いては子に従へ(句) (大智度論に「老則従子」とあ

り) 年とり後は、何事も子に任せおきて、これに従ひ行くべ

し。老いてますます(句) (馬援の語に「老當益壯」

とあり、後漢書に出) 老ゆれと意氣少しも衰はず、却てま

す。●御湯殿(名) ●湯殿の敬稱。

おゆみのまゝ(御弓神事) (名) 正月に諸方の神社に

て、櫛を立て往還を引き五色の的を懸け、木を削りて作り

たる弓にてこれを射る儀式。

おゆらく(老) (名) おゆると。

およぎ【泳・遊】(泳) 自か四) ●水中にて、肢體を動か

して浮かび行く。●世に處(名) 職に就く。

およすく(幼弱) (自、か下) 二) 年齢に比して早く智慧づ

く。早熟す。おとなだつ。まゝ。

およそ(凡) (名) 物事の概要。がいりやく。えうち。たいりや

く。おほむね。

およそ(凡) (副) ●たいがいはおほむねは。●一般に。おし

およづ(幼弱) (自、か下) 二) およすく。

およづれ(妖) (名) あやしき言。およづれで。——こと

【妖言】(名) 人をまどはす言。いっはりこと。たはこと。●

びと(妖人) (名) 妖言をなし妖術をおこなひなどし

て人を惑はす人。およばすながら(乍不及) (副) ゆきととかぬながら。い

おやゆーおよは

たらぬと思ひながら。不十分ながら。

および【指】(名) ゆび。

および【御呼】(名) おめし。●おまねき。

および【及】(接) また。ならびにと。花一月。「する姿勢

(名) 中腰に體を屈め手のみさきへ延ばして、事を行はんと

およぶ【及】(及) 自は四) ●到達す。いたるとく。●雲

に。●普通す。ゆきなると。●四方に。●成就す。なる

に。●及ばぬ。●入用なり、必要なり。「其儀に及ばず。●お

ひつく。おひやく。「往言不可」。●比す。まゝ。くらぶ。

「其趣やべからず。●遂に其物事となる。「取ひに」。

およほす【及】(及) 自は四) およぶやうにする。とく。

およなる【及】(及) 自は四) ●御夜になるの音使

「寝るの敬語。およる。

おら【己】(代) 下俗の自稱代名詞。おれ。おいら。

おらい【AI】(代) (感) よよし。よろし。

オライクル【Oracle】(名) 神のお告げ。神託。

おら【おら】(叫) 自は四) さげぶ。よぶ。よ。

オライニン【Aurantiac】(名) 【化】鹽基性の黄色染料。温

湯及酒精に溶解し、黄色を呈す。

オランダいちご【和蘭莓】(名) (種) 薔薇科の多年生草

本、圓面に栽培せらる。莖は地に接して匍匐し、葉は三小葉よ

り成る掌狀複葉、小葉は倒卵形をなし鋸齒あり、春日、葉間に

花壇を抽く。白花を開く、果實は肥大にして紅紫し、味甘美。

オランダきく【和蘭雄雞】(名) (種) 百

金(科)の多年生草。舶來の莖葉にして、各地に栽培せらる。

莖は圓長にして直立し、高さ四五尺、分枝多し、葉は小形にて

鱗片状、俗に葉と呼ぶもの實は枝なり、夏日、枝の腰部に黄

紫色の細花を開き、球狀紅色の漿果を結ぶ。アスパラガス。

オランダきよ【和蘭鏡賣法】(名) 商賣手より最高價を呼び上げ買

手の出づるまで、漸次に其價格を減低して行く商賣法。

オランダげんげ【和蘭蓮華】(名) (種) 草科の多年生

草本、もと舶來種、今は廣く各

地に自生す。莖は圓長にして

匍匐し、葉は三小葉より成る

掌狀複葉、夏日、白色の蝶形花

を開く、牧草及醬料に供せらる。

オランダせきちく【和蘭石竹】(名) (種) アンジヤベル

草本、全體平弱にして香氣あり、莖は

直立し、葉は羽狀複葉をなす、夏は

秋の頃、莖頭に花枝を抽き、復數

形花序の細花を著く、嫩葉と根

とは食用に供せらる。セレリ。

オランダやき【和蘭焼】(名) 料理の名、魚類の白

肉に鹽を撒きて乾し、これに鶏

卵の蛋白を塗り、卵子の薄膜を張り付けて炙りたるもの。

おり【織】(名) 織ると。織りたるもの。

おり【澱】(名) 流動體中に沈澱したる滓。をどみ。

おり【汚吏】(名) よこしまなる役人、非道なる役人。

おり【折】(名) 「をり」を見よ。

おり【摺】(名) 「をり」を見よ。

おり【摺】(自) 「をり」を見よ。

おりあがり【織上】(名) 織りて仕上るもの。

おりあがり【下上】(名) おろむとあがると。

おりあがり【織上】(自、か下) 布帛を織りて仕上

おりいだす【織り】(他、か下) 織りて作り出だ

す。●織りて見せし織出す。

おりいづ【織出】(他、か下) 織りて出だす。

おりいと【織糸】(名) 布帛を織る材料の絲。

おりいろ【織色】(名) ●絲を染めて織りたるおりもの

色。●めいりもの對。●織と織と●絲の色を習へて織りた

るもの、紅梅(葡萄)の如きこれら。

オリエンタル【Oriental】(名) 東洋的。東洋風。



【和蘭蓮華】



【オランダヤキ】

おりおーおりふ

オリオン(Orión)(名)〔天〕赤道の兩側に跨れる美しき星座、冬季最も明かに見ゆ、俗にいはゆる三星(シリウス、ベネジス、プロキオン)は其中にあり。——せうらん(星雲)Orion nebula(天)

オリオン(星座)に圓形に置かれる星雲、月なき清夜には肉眼にて見るとを得。

おりこ(織子)(名) はたおりに従事する工女。

おりこむひらひら(織込)(他、ま四) 織りて中に入る。

おりこん(織紺)(名) あを左ま、めくら左ま。

おりき(織地)(名) 織物の地合。

オリジナルリチー(Originality)(名) 獨創。創意。新機軸。

オリジン(Original)(名) 獨創。新機軸。

おりきりがい(織鞞)(名) 絲にて織りたるまわりがい。〔たるもの。オリジン(Original)(名) 起原。本原。〕

おりすち(織筋)(名) 練貫(練貫)の絹布の筋を太く織り出し

おりぞこ(織底)(名) 細き經(細き經)と太き緯(太き緯)とをを用ひ

おりだす(織出)(他、さ四) おりだす。〔織。〕

おりたつ(織下)(自、た四) 下り行きて立つ。〔織。〕

おりつ(織詰)(名) おりあがりたる布帛の長さが、經

おりて(織手)(名) 布帛を織る人。おりこ。

おりな(下名)(名) 古昔、四位以下に叙位せらるゝ人名を

書きて、式部、兵部二省の丞に下されし。〔織。〕



おりへーおりぬ

し、往々大木となる、葉は對生し、長楕圓形にして全縁、先端

微しく尖る、表面は深緑にして下面は灰白色、短き葉柄、先

ふ、夏秋の間、枝梢の間より花梗を抽出し、根柢花序の小

花を善く、果實は長楕圓形にして、其肉より、オリアア油を

採るべし、此種の枝は、歐洲にて古來平和と光賞との表彰とし

て用ひらる。——いろ(阿列布色)(名)「オリアア」の

葉の如き黄味を帯びたる緑。——ゆ(阿列布油)(名)

「オリアア」の果肉より採取したる脂肪性植物油(食用・製用

に供し、又石鹼の材料に用ひらる。)

おりべ(織部)(名) 織部(名)「さかづき」。

——さかづき(織部歪)(名)「さかづき」の一種、其大

なるを武藏野といふ、天正の頃、古田織部正重能の作り出た

しりや名とす。——のかみ(織部正)(名) おりべの

つかさの長官。——のつかさ(織部司)(名) 古昔、大

藏等の被官にして、織物・染物の事をつかさとりしつかさ。

——ぼん(織部本)(名) 天保年間に觀世織部の章句を

附して印行したる謄本。——やく(織部焼)(名) 尾張國瀨

志野焼に似て厚く、模様は草堂にして雅緻あり。——りや

ち(織部流)(名) 茶道の一派、古田織部正重能を祖と

す、重能始め千利休に學び、後、大野道可に従ひて、遂に一家

を成す。〔織。〕

おりめ(織目)(名) 織地の絲と緯との間。

おりも(織物)(名) 織物の絲と緯との間。

おりもん(織物消費税)(名) 經(織物)の價格に對して賦課する消

費税。

おりや(織屋)(名) 布帛に織り出したる紋。

おりり(下居)(名) おりあると。——のみかど(下居

帝)(名) 欄位あせられし天皇。上皇。——のみや(下

居宮)(名) 仙洞御所。〔おりあるのみかど。〕

おりある(おりあるのみかど)〔下居(自、わ上)〕 下へおりてゐ

おりんーおりこ

る。○天位をゆづり給ふ。

オリンピックきょうぎ(オリンピック競技) Olympic Games(名) 古代ギリシア人が、オリンポス神殿の前

庭にて催し、四年一回の全、ギリシヤ國の競技。○轉じて、

一八九六年以後、四年毎に地を選びて催さるゝ國際的競技。

おる(織)(他、ら四) 絲を織(織)にかけ、經(織)

をくみあはせて布帛につくる。○細長きすぢのものきみ

あはせて、席・筵などをつくる。○細長きへ作る。くみたつ

おる(織)のり(織)のり。○下降(自、ら上) 高きより低きへくだ

る。上(自、下)にありもの下にさがる。くだる。さがる。○位をさる。

おる折(自、他) 〽をる〽を見よ。○踏踏など置く。

おる(居)(自、他) 〽をる〽を見よ。○踏踏など置く。

オル(Orn) (名) かい(他)。

オルガナイザー(Organizer)(名) 〔社〕社會運動にて、未

だ何等の組織をも有せざる無産者の集團に加はりて、これに

一定の組織を與ふる助働分子又は指導者。

オルガニゼーション(Organisation)(名) 組織。機關。

オルガン(Organ)(名) 有機體の具有する器官。○管樂器を集合し、排列せし組じたる樂器、手指若しくは足踏を以て鍵盤を下に裝置したる樂器の類。○この動かし、これに氣流を吹き入るときは、氣流は槓形の唇に衝突し、管内の氣圧に振動の起し、鼓音を發す。トリスト教會にて、讚美歌を唱るときなどにこれを奏す、近時、我國に於て用ひらるゝは、「アメリカ、オルガン」と稱するものにして、管舌を管に代ふふうなるオルガン。



オルケストラ(Orchestra)(名) 數多の樂器を用ひて重音の器樂を合奏する洋樂、其中心となるものは絃樂器にして、これに管樂器及擊樂器を添ふ。○劇場又は公會堂などに設けたる音樂演奏の席。

オルゴール(名) 「オルランド」語(Orpel) 〽オルガン。○西洋



おん おんえ

捨てざれど、情のためには身を捨つるをいふ。――を仇(句)  
恩に報ゆるに仇をためする。

おん(音)(名) ①(理)物体の振動によりて起る聴官の感覺、物体の振動が、其周囲の媒體(通常は空氣)に傳はりて音波を生じ、以て聴官の鼓膜に達し、鼓膜のために振動するによりて、此感覺を生ず。②單純なる音聲、即ち一氣に出づる音聲。「聲」。③調子の調子。おんえ。④こゝろ。音聲。大

おん(薩)(名) ①(漢字)の字音。調子の對。  
おん(吽)(名) ①(梵語)印度の宗教上にて、本體現象、神を包括する甚深廣大の意義を有する秘密語とも一の感嘆詞たるに過ぎざりしが後遂に變化發達したるものなり佛敎の眞言陀羅尼には、多くこれを冠す。――阿毘羅呼吽火燄婆(阿毘羅呼吽) ①(梵語)Om avihuhim kham svaha(佛)密敎にて胎藏界大日如來の眞言陀羅尼、略して阿毘羅呼

おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに

おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに  
おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに

おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに  
おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに

おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに  
おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに

おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに  
おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに

おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに  
おん(温)(名) ①(梵)あたたか。あたたまり。②おだやか。まどか。③(音)なほやはらかな。――として玉の如し(句) ①(詩經)温其如玉とあり)人徳の細美又は性質の純粹なるに

おん おんき

おんおん(温)(名、副) おだやかなるさま。かどたかざるさま。あたたかたかたか。〔おんおん〕

おんが(音)(名) ものやはらかなに於て度量ひろきこと。  
おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」

おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」  
おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」

おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」  
おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」

おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」  
おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」

おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」  
おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」

おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」  
おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」

おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」  
おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」

おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」  
おんが(音)(名) (理)原音と其「オクターブ」の間に、順次異なる樂音を併列したるもの、其順次は「 octave」

おん おんこ

おんぎよう(音)(隱形)(名) 術を用いて自己の身體を、かきつけたやうにかくしくりますこと。〔おんぎよう〕

おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ

おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ  
おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ

おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ  
おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ

おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ  
おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ

おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ  
おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ

おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ  
おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ

おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ  
おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ

おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ  
おんぎん(音)(名) 鳴りよるもの即ち樂器に合はせて、謡によりて質し興へられたる金。②(名)なまけ

種館などの奉行これなり。

おんこと(御事)(名) こと、政柄。①貴人の死去、官  
またあり。②人のなせし事、又、其人を指していふ稱、「  
をのみあたらし思ひ聞ゆるに。」

おんざ(音又) Tuning fork (名) [理]  
發音機の振動数を計る用具。銅製のU  
字形をなせるものにして柄を有し、多く  
は木製の箱上に装置。打ち又は摩擦すれば、  
一定の振動数の音を發し得。



【さんそ】

おんざ(音又) Tuning fork (名) [理]  
發音機の振動数を計る用具。銅製のU  
字形をなせるものにして柄を有し、多く  
は木製の箱上に装置。打ち又は摩擦すれば、  
一定の振動数の音を發し得。

オンザマック On the mark (感) 擬接にて、位置に  
おん志(恩師)(名) 恩義よかき師匠。「つけの號令。  
おん志(恩賜)(名) めぐみてたまふ。君主などよりたま  
ふ。又、其たまひたる物ありがたまふも。

おん志(音字) Phonogram (名) 言語を記載するに、  
ただ其音の記號としてのみ用ふる文字、音標文字と單音文字  
とに分かつ。音標文字。

おん志(遠志)(名) 「植ひめはば。」  
「百味の。」  
おん志(飲食)(名) あなたかき器置ある室。③寒  
地又は寒期に、暖地又は暖期の植物を培養、生育する目的に  
て、内部の温度を溫暖せらるやう、種々の設備を施した  
る建物。ひる。(名) ④なまけによりて、罪をゆるさるゝ  
こと。①にあふ。②膠質・珪酸・炭酸・炭素等の際、特別の恩恵  
によりて輕き罪因を赦免せらるし。

おん志(温箱)(名) 度氣ひろくして包容おほ  
き。おとりしてなまけかなるもの。  
おん志(恩借)(名) なまけによりて金錢又は物品を借  
りたること。又、其借りたる金錢物品。

おん志(温石)(名) ①軽石を焼き、綿又は布など  
に包みて、冬日又は病氣などのとき、懷中して身體に暖を取  
るもの。鹽を用ひて焼き若しくは瓦などを鹽に包みて焼きた  
るものをも用ふる。②をんな。③くし。④(温石)は蓋捲に包む  
故にいふ。蓋捲を著たる人。⑤いし(温石)は(名) [醫]  
信濃國高遠より産出する石。色黒し。温石に用ふるに適す。

おん志(隱首)(名) 戸籍帳に名の記されざる人民の、自  
から官府に其由を申し出づること。

おん志(飲酒)(名) (佛)酒をのむこと。いんち。①かひ  
②飲酒戒(名) (佛)五戒の一、飲酒を禁ずること。「た。  
おん志(恩雙)(名) なまけとらうらみと。めぐみとあ  
おん志(怨恨)(名) うらみ。かたき。あた。  
おん志(温習)(名) くりかへして習ふこと。たづね  
ならふこと。さらふ。復習。

おん志(溫柔)(名) ものやはらかなること。やさし  
く。なほなること。②あたたかにしてやはらかなること。――  
きよう(温柔郷)(名) 遊樂。色里。③なや。閑房。  
④とんころ(温柔敦厚)(名) ⑤おだやかにしてすな  
はなること。やさしくしてなごらなること。⑥奇矯又は露骨な  
らずして、眞實なる情趣あること、交朋にて詩の本領とせり。

おん志(温順)(名) おとなしくして人に性ぢらば  
おん志(恩賞)(名) ほめて物を賜ふこと。はらば  
おん志(恩賞地)(名) 世襲せる所領の外に、功勞により  
加増せられたる領地。――おぎょう(恩賞奉行)  
(名) 室町幕府の職名。將士の勳功を考へ恩賞を議せるに  
あつて、  
おん志(温土)(名) 「農」人工を用ひて温暖を加  
へて促成栽培をなす意味。  
おん志(恩詔)(名) なまけあるみことり。

おん志(音聲)(名) 人類の發するこゑ。おんせ  
おん志(音聲) 雅樂にて、音聲の音。――がく(音聲樂)  
(名) 雅樂にて、音聲を奏する音樂。  
おん志(恩情)(名) なまけあつきこと。いづく  
おん志(温情)(名) なまけこと。やさしきこ  
ろ。――まゆぎ(温情主義)(名) 「經」資本家と労働者

おんし(温情) 温情主義(名) 「經」資本家と労働者  
おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんこーおんし

おんしーおんし

おんし(温順) 温順(名) おとなしくして人に性ぢらば  
おんし(恩賞) 恩賞(名) ほめて物を賜ふこと。はらば  
おんし(恩賞地) 恩賞地(名) 世襲せる所領の外に、功勞により  
加増せられたる領地。――おぎょう(恩賞奉行)  
(名) 室町幕府の職名。將士の勳功を考へ恩賞を議せるに  
あつて、  
おんし(温土) 温土(名) 「農」人工を用ひて温暖を加  
へて促成栽培をなす意味。  
おんし(恩詔) 恩詔(名) なまけあるみことり。  
おんし(音聲) 音聲(名) 人類の發するこゑ。おんせ  
おんし(音聲) 雅樂にて、音聲の音。――がく(音聲樂)  
(名) 雅樂にて、音聲を奏する音樂。  
おんし(恩情) 恩情(名) なまけあつきこと。いづく  
おんし(温情) 温情(名) なまけこと。やさしきこ  
ろ。――まゆぎ(温情主義)(名) 「經」資本家と労働者

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんしーおんた

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱

おんし(温帯) 温帯(Temperate zone)(名) 地熱



おんもの (佩物) (名) おびもの。

おんもん (諺名) おんもん。

おんやく (音譯) (名) 漢字の音又は訓を假りて他國語の音をあらはすと、佛陀・菩薩などは梵語の音譯(對注)にして、更紗(びん)有平糖などは蘭語の音譯なり。

おんよう (陰陽) (名) おんやうだう。

いけ (陰陽師) (名) いんやうか。おんやうだう。

いし (陰陽師) (名) 古昔の官名陰陽寮の所屬にして、ト宰相地の事を掌りしもの。(大ト師)。——はかせ(陰陽博士) (名) 古昔陰陽寮の所屬にして、天文・曆數などを教授せしもの。——どう(陰陽道) (名) ト宰相地又は天文・曆數などに関する學問。——のくみ(陰陽頭) (名) おんやうのつかさの長官。——のつかさ(陰陽寮) (名) 古昔中務省の被官にして、天文・曆數に関する事を掌りしつかさ。——りょう(陰陽寮) (名) 加縣に同じ。

おんよく (音容) (名) こゑとかんばせと。やうす。

おんよう (温浴) (名) 温湯又は温泉に浴すると。——りょうほう(温浴療法) (名) 温湯によりて疾病をオンリー(On-line) (副) むづかに。單獨に。[治療する法。

おんりつ (音律) (名) おんのでうま。こゑのまらべ。轉じて、音楽の稱。「を好む」。

おんりやう (音量) (名) 樂器又は人聲に於ける音の分

おんりやう (怨靈) (名) うらみを抱ける死靈。

おんりやう (温良) (名) おだやかにして和らぎすなほにして侵さざること。おだやかにしてすなほなること。きょううけん(温良恭儉讓) (名) (論語) 出づ。温良なる上に、うやうやしくして逆はす。つづまやかにして修らず、人を推して己を後にすると、即ち人格圓滿なる聖賢の人に接する状態をいふ。

おんりやう (遠流) (名) 遠き邊土への流罪。ままがし。

おんりやう (遠和) (名) おだやかにちかみたること。すなほにおとなしきこと。殿(を)にしてのどかなると、寒熱其中を得たると。——は (溫和派) (名) 溫和なる主義を執る一派。

おんもーおんわ

# かが

か (香) (名) にほひ。かぎり。梅がー。[との結香。

か (蚊) (名) (動) 雙翅類の昆蟲。夏日群來するを以て煩く知らる。體は黒褐色、脚部に白斑あるもあり、頭部に複眼を具し、胸部に三對の長き脚を有し、一對の透明なる膜質の翅あり、口吻は吸引に適し、雄のは小なれど雌のは著しく長く、共に果實・草木の液汁を吸ひ、殊に雌は好みて人畜を刺し、其血を吸ふ。百餘の卵子を水中に滴下す、其卵子の孵化せるものはゆる子(ぎ)にして、三回の脱皮を経て蛹に化し、尙ほ二日を經て成蟲に化す。——の聲(句) 蚊の羽音にも比すべきかなる聲。

か (涙) (名) (動) 涙。[のよせさんしたる數値。

か (架) (名) いかう。いか。[たな。だい。青。]

か (不可もなし) (句) 言行中庸を得たり。是非する所なし。

か (河) (名) (名) 明一在た。

か (佳) (名) (正しくは「かひ」) よろしきと。よきと。[うつくしきと。] すくられたる。

か (假) (名) (名) かり。[まぼし。] 一線。[いつはり。] 一。

か (夏) (名) いへ。すまひ。

か (歌) (名) うた。舞。[中華。中國。] 一。

か (窟) (名) (名) 穴。[す。] 鬼。[もかう。] 一。

か (火) (名) もゆるひ。[すみび。] ともしび。[くわ。] 志。[激奮する心氣。心。] 一。[軍隊の一部。五人を伍とし、伍二を火とす。] なかま。つれ。一件。[五行の第二。] 時にては夏に、方位にては南に、十干にては丙丁に配す。[佛] 四大の一、濕熱を性とし、調劑を用とし、色は赤。

か (科) (名) (名) 科。[條目又は典稱。] きまり。さだめ。[金] 玉粒。[刑律又は刑限。] はし。罪。[品等又は區分。] 一區分。[植物の分類の名目、屬を概括したるもの。] 薔薇。[毛茸。] 一。[動物の分類の名目、目を細別したるもの。] すずめ。[あざらし。] 一。

か (支) (名) (名) 三。[空に入りてを撮る。] [臺灣にて、長さの單位、一丈三尺に當たる。]

か (化) (名) (名) 生死又は見解進歩又は變遷。うつかり。[英類のものに形質を變ずると。] 羽。[懲教又は訓諭。] をしへ。と。[教。] 一。[風俗又は習慣。] ならばし。ならひ。[化學の略言。] 理學。

か (貨) (名) (名) たら。財。[よなもの。] 一物。[か]

か (靴) (名) (名) なまり。[あやまり。]

か (靴) (名) (名) かはぐつ。くつ。[のくつ。]

か (寡) (名) (名) の少なきと。[孤立者。] 少數者。一を以て衆に寡す。[やも。] ——は柴に敵せず(句) 少數者の多數者と持論して途に負くこといふ。

か (果) (名) (名) くだものこのみ。[くだものなるき果樹。] むむい。藤梨。[さとり。] 留果。[崩散なること。] 決斷よきと。

か (課) (名) (名) 考科又は試験。こころみ。ためし。[程度又は次序。] ほど。ついで。日。[負擔又は租稅。] かかり。わりあて。一役。[事務の小區分。] 記録。]

か (禍) (名) (名) あやまち。まじり。[とがめ。] つみ。[程]

か (華) (名) (名) はな。はなびら。[つや。] いろ。[いろどりり。] ちやう。文。[かさざり。] さいく。[やうす。] たち。[さかえ。] はなやか。はでやか。[す] 一。はまはれ。き

かーか

かーか

かーか

か(一)文化。文物。文。を去りて實に就く(句)うへの虚飾を去りて内容を光質す。

か(敵乎哉耶邪(助))疑ひまどふ意の語。專らうつつ

か(一)あななき。問ひかくる意の語。いづれ。どれ。

か(一)過(接頭)化。或は化合物に就て其成分の割合の多き意を表はす語。一酸化水素。一酸化鉛。

か(一)接頭)語調を整ふるに冠する語。一くろ髪。一よわ

か(一)目(接尾)日數の意を表はす語。十日。一し。

か(一)處(接尾)場所の意を表はす語。すみ。かくれ。

か(一)家(接尾)世道の人の意を表はす語。歴史。文章。一怒華。一格語。

か(一)箇個(一)接尾)物事を數ふるに用ひる語。三月。一。

か(一)荷(接尾)一人の荷(む)ぶき分量の材物を數ふる語。

か(一)一(接尾)果實又は玉石などの箇數をかぞふる語。一。

か(一)か(の)萬音凡て。かと同じく、ただ發聲音に發聲の振動の

か(一)賀(一)はひ。ことばき。改曆の。一新年の。一。

か(一)駕(名)馬のひく乗車。のりもの。一を迎ふ。一を柱

か(一)一(名)貴人のわざわざ來訪するをいふ。轉じて、來訪の敬

か(一)一(名)自分が思ふ所をいひはりて、人の言に従はぬと

か(一)一(名)己の私利をはかると。私慾。佛。自己一身は假

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

か(一)一(名)自分が思ふ所をたて通す。一を張る(句)わ

かーかい

か(一)牙(名)一。歯。牙。生長點。めざし。め。

か(一)一(名)一種植物の萌芽、即ち嫩葉を以て被せられたる

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に

か(一)一(名)支那にて詩の六義の一、正しき音樂の歌の義に



樽

かいーかい

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。

かい(一)一(名)一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。



かい一〔極〕接頭語をそふるために成動詞に冠する語。

がい一〔蓋〕名。おほふもの。おほひ。①笠。傘又は帳。②おほくは天蓋などかき。③器物のふた。ふた。④佛。⑤首飾。⑥毒などの如く、善心をおほふもの。

がい一〔害〕名。①そこなひ。まだたげ。さはり。わざはひ。「一利一害」。

がい一〔崖〕名。①崖。人生の障礙地帯分ちからて二とす。一は物理的にして即ち自然的勢力なり。他は道德的にして即ち悪を

がい一〔罪〕名。①みせしがけ。②かざり。はて。「いふ

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

がい一〔罪〕名。①おほむね。あらまし。「一」。

かい一 かい

がいのり外圍一名。それがこひ。そとまり。

がいのり拐引一名。法。評儀の手段を用ひて、人を他處へつれゆくこと。かかし。

がいのり改印一名。印形を改めかふる。一。風。

がいのり海印一名。佛。覺者の習の稱。其語法を照觀する。海の高象をうつすが如くなる。いふ。一。さんまひ

がいのり海印三名。佛。覺者の稱。一。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

がいのり海員一名。海員。海客を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。船長を有するもの。

かい一 かい

川時代にて、士分以上に科せし刑罰、其族稱を殺し其家聲を没収して平民となしと、松原より重く切腹より輕し。

がい一〔外役〕一名。國外への出兵。獄舎外にての使役。囚徒の一。

がい一〔開演〕一名。演説講義又は遊藝。演劇などをほはじ

がい一〔海淵〕一名。海底の特に深き所。

がい一〔外延〕一名。名辭の外延は、動物といふ名辭の外延よりも廣きが如し。

がい一〔外援〕一名。ほかよりのたすけ。他よりの

がい一〔海王星〕一名。太陽より最も遠き太陽系の遊星、フランス人ルヴェリエの推算に基き、ドイツ人ガレの發見にかかるとして、一箇の衛星を有し、太陽よりの平均距離十一億一千七百萬里、百六十八年九箇月を以て太陽を一周す。

がい一〔外王父〕一名。母方の祖父。

がい一〔回德〕一名。おもひます。おもひだす。

がい一〔戒和尙〕一名。佛。戒を授くる和尚。

がい一〔開化〕一名。人智のひらけ進む。世の思想風俗などの善良に向かひ進む。文明。開明。

がい一〔灰華〕一名。化。設陰石灰の溶液より、水の蒸發して沈澱したる粗粒なる石灰質の凝り。

がい一〔怪評〕一名。やいみひかる。と。

がい一〔界畫〕一名。尺度を定め規として入りくみたる欄閣などを畫きたるもの。やたいびき。

がい一〔繪畫〕一名。物の形象を平面上に描き出す。又、其描き出したる物の形象。を。

がい一〔凱歌〕一名。凱陣を祝ふた。ちとどき「を奏す」句。敵に勝つにいふ。

かい一 かい



【果蓋】



の影に全く蔽はれ、又は太陽が地球によりて全く太陽の光を遮られたる現象。  
**かいき**〔開基〕(名) ①もともをひらくこと。②寺院の創立。又、其僧侶。かいさん。一は「一週上人」。

**かいき**〔海氣〕(名) ①甲斐斐の略との説あれど定かならず。生辯にて纏れる褐色の絹。無地又は綿等あり。編織地の地又は羽織の扱などにも用ふ。甲斐國内地方より出づるもの最も良品なり。②海の氣。うみへの空氣。——よく「海氣浴」(名) 海邊の清新なる空氣に全身をさらす氣候療法。  
**かいき**〔回忌〕(名) 人の死後、年毎にまはりくる當月當日、其一年目を「回忌」とし一周年といひ、二年目を三回忌又は三周年といふ。年回、年忌。

**かいき**〔會規〕(名) 會の規則。會の規約。  
**かいき**〔會期〕(名) 會合する時期。①開會より閉會までの期間。②病氣のころよきこと。

**かいき**〔快氣〕(名) ①ころもちさわやかなこと。②「快氣」(名) 海員として必要な技術。——めん  
**かいき**〔海技免狀〕(名) 海員の試験に合格したるものか、若しくは適當の修業又は履歴を有し、選任大臣が合格者同等と認めたるものにして、海技免狀原簿に登録済みとなりたるものに對し、授與する船舶職員免許の證書。  
**かいき**〔會議〕(名) ①會合して評議すること。①の席。②法或事項を評議する機關。——あく〔會議録〕(名) 會議の録末をかきあるしたる記録。議事の記事。

**かいき**〔懷疑〕(名) ①うたがふこと。あやむむ。②認識を否定し眞理を疑ふこと。——らん〔懷疑論〕Scepticism (名) 哲人の認識を不確實なるものとし、萬物の實在を否認し眞理を疑ふ哲學論、常に獨斷論の後を起こる。

**がいき**〔吸氣〕(名) 吸(ふ)を徹す氣。(吸吸)。  
**がいき**〔外氣〕(名) 室外の空氣。外部の空氣。  
**がいき**〔外議〕(名) 世間の空氣。された。  
**かいき**〔回議案〕(名) 官術にて、關係ある掛員へ順次へ繰送して、其意見を問ふ議案。

**かいき**〔回線〕〔Topics〕(名) ①天。②地球上

かいきーかいき

赤道より南北各約二十三度半を通過する小國、北なるを北回歸線といひ、南なるを南回歸線といふ。太陽最北に來るときは即ち北回歸線に達するときは、故に北回歸線を一に夏至線といふ。太陽最南に來るときは即ち南回歸線に達するときは、故に南回歸線を一に冬至線といふ。②地球赤道上より南北約二十三度半の緯線。  
**かいき**〔チフス〕〔回歸室扶斯〕(名) 音くわいきねつ。  
**かいき**〔ねつ〕〔回歸熱〕(名) 病傳染病の一種。多く下等社會に流行す。一種の螺旋狀菌の體内に侵入するに原因す。前驅症なきにあらざれど、多くは五日乃至七日間の潛伏期を有し、かくて戰慄を催して體温上昇し、五日乃至七日を経て平常に復し、更に五日乃至七日を経て復た前症狀を發し、復た五日乃至七日を経て平常に復する等。症狀は平常相反復す。

**かいき**〔ねん〕〔回歸年〕(名) たいやうねん。  
**かいき**〔むふうたい〕〔回歸無風帶〕(名) ①地貿易風及反對貿易風の相會して無風となる地方、緯度凡そ三十度の所に在り、北半球にあるを北回歸無風帶といひ、南半球にあるを南回歸無風帶といふ。

**かいき**〔やく〕〔諧謔〕(名) 好笑の滑稽を呼び起こす滑稽の官。面白味多き戯言。おどけ。名。やれ。  
**かいき**〔きゅう〕〔階級〕(名) ①きだ。だん。②まな。くら。③を四等に分つ。④世間的の身分及生活的の職業によりて區別したる社會的地位。——いさき〔階級意識〕(名) 〔社〕基本的二階級を就つ社會にて、自己の屬する階級の地位・役柄又は使命等に就つての自覺。——せいど〔階級制度〕(名) 〔社〕社會的地位に關する國家的地位。——せんそうけつ〔階級戰爭〕(名) 〔社〕社會的地位の相異なるもの間に於ける紛争、富者と貧者又は上流社會と下層社會と若しくは資本家と労働者との間に於ける對立的の葛藤。——だは〔階級打破〕(名) 〔社〕社會の階級中の段階。——だは〔階級打破〕(名) 〔社〕社會的地位の區別を否認し、これを撤廢して平等となす。——とうそろけつ〔階級闘争〕(名) 〔社〕階級戰爭。

**かいき**〔きゅう〕〔懷舊〕(名) 昔時の事情を思ひ出だすと。

**かいき**〔かいき〕

かいきーかいき

「の涙にむせぶ。——だん〔懷舊談〕(名) 昔時追憶したりし事情のものたり。  
**かいき**〔う〕〔海牛〕(名) 〔動〕水生類の海獸、體形鰐に似く長き一丈に達す。皮膚に粗毛を生じ、尾節剛し。  
**がいき**〔う〕〔外男〕(名) 妻の父。まうと。  
**かいき**〔開〕(名) ①上部を横はなしたる。②溝橋の、鐵道又は軌道を通すため小橋梁、暗渠の對。③溝橋等を通すための小橋梁、暗渠の對。  
**かいき**〔快舉〕(名) ころよきふるまひ。いさましき行動。元祿の一。  
**かいき**〔海魚〕(名) 〔動〕海に産する魚。うみをろ。  
**がいき**〔外虛〕〔Penumbra〕(名) 〔天〕日半影の稱。(る)太陽の聖堂の中央を圍める稍明き部分の稱。  
**かいき**〔海峽〕(名) 〔地〕陸と陸とはさまれて狭くなりたる海にして、大海に通じたるもの。  
**かいき**〔回教〕(名) 〔宗〕フキケう。  
**かいき**〔開業〕(名) ①營業を始めること。②みせびらき。かいてん。——い〔開業醫〕(名) 免許を受けて開業する醫師。③営業式。④會社銀行などが、其開業に際し、關係者などを招待して舉行する儀式。——めんまうけつ〔開業免狀〕(名) 特定の條件により特定の人に、官廳が一般に許可せざる營業に就きて開業を許可する證書。醫術」。

**がいき**〔外教〕(名) 外國の傳來にして其國の固有にあらざる宗教、我國にて「キリスト」教の類。  
**かいき**〔柳〕(名) 〔動〕古昔、朝廷に三槐を植ゑて三公の座位を表し、九棘を植ゑて九卿の座位を表したるよりいふ。三公九卿。公卿。  
**かいき**〔戒禁〕(名) いましめ。制止。①佛一切の不准。②佛一切の不准。③禁止をとくと。  
**かいき**〔皆勤〕(名) 一年又は一箇月若しくは或期間内、休日以外、一日も缺かさず出勤せしこと。

**かいき**〔かいき〕

**かいき**〔かいき〕

かいきーかいき



かいきーからく

がいきん (外勤) (名) 外部の勤務。そまはり。
かいきん (海金砂) (名) [海] 海金砂の羊歯類。山野
に自生す。葉は他物に纏繞して上昇し、質硬して光澤あり、葉は再び乾かして製し、切片は鈍鋸歯を有す。夏、上方の葉に子葉群を著け、裏面の縁邊に點々排列す。觀賞用として栽培せられ、これを煎じた汁にて洗へば、赤兒の瘡を治すといふ。

かいく (戒懼) (名) いましめおそる。と。よ。かにかぐさ。

かいく (化官) (名) 萬物の生死見識しつ、おひそだちて其性を遠くす。天地の一を營す。

かい (戒具) (名) 道具のこらず備はりたる。

かい (街衢) (名) まち。ちまた。

かいく (外懼) (名) 外國に對するおそれ。外思。

かいく (會遇) (名) であふと、てくはすこ。

かいく (播濶) (名) たそがれ。くれがた。ゆふ。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいく (播濶) (名) かつ。黄昏。

かいくーからく

う (海軍機關學校) (名) [法] 専ら機關に關する軍務に従事する海軍武官を養成する學校。
う (海軍旗章) (名) 海軍艦船の橋頭・旗竿其他に掲揚して表章となす旗幟。第一種及第二種に分ち。
う (海軍軍令部) (名) 明治十八年官制改革前に於ける海軍省の長官。
う (海軍教育本部) (名) [法] 海軍全般の軍事教育を司し、其統一進歩を計り且教育・圖書に關する事務を掌る。其長官を本部長と稱し、海軍大臣の政理に聽屬す。
う (海軍區) (名) [法] 海軍の必要上より、我國の海岸及海面に設定したる區別、現制にては三海軍區に分ち、各區に一軍港を置き、其軍港内にある領守府をしてこれを管せしむ。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

い (海軍軍令部) (名) [法] 海軍上の國防及用兵に關する事務を掌る所、部長ありてこれを統理す。部長は天皇に直親裁を受けてこれを海軍大臣に移す。

かいくーからく

干を徵發して、補助軍艦たらしむる條件の下に、特定構造の船舶所有者に對して下付する保證金。
海軍葬喪 (名) 海軍現役軍人及召集中の海軍豫備役後備役の軍人の死に際して行ふ儀式、陸軍の所属長官これを管理し、陸軍の死に際して行ふ儀式、陸軍し得ざる場合にと水葬を行ふ、半旗・分時鐘・分時鐘・慰問品・慰問品・弔喪表裏等の儀あり。
海軍大學校 (名) 海軍の將校・處長及將校相當官に高等なる學術を教授する所、校長は海軍教育本部長に譲す。
海軍大臣 (名) [法] 各軍大臣の一にして、海軍に關する軍行政の總辦官。
海軍病院 (名) 領守府に所属して、治療并に治療品の準備供給其他衛生看護に關する事務を掌る所、各軍港にこれを置く。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。

かいはけい(會計) ①金銭物品の出納の計算。②金銭物品の出納に關する事務。③代金の支拂はらひを人に持たす。——**かりり**  
**會計官吏**(名) 〔法〕會計事務にあづかる官吏。——**点**  
**會計士**(名) 〔法〕公衆の依頼に應じ會計調査をなす専門業者。——**ねんど** 〔會計年度〕(名) 〔法〕會計上の便宜によりて設定したる年度、我國現制度にては、四月一日より翌年三月三十一日迄。

かいはけい(會稽) (名) 會稽の恥に出づ敵より受けたる恥辱。——**の軌** (句) 〔史記〕遠征し吳王(會稽之恥)とあり。支那春秋時代に越王句踐が吳王夫差と戰ひ取れ、會稽山に逃げこもりて遂に降服し、さまざまの恥辱を蒙りし故事。轉じて、敵のために蒙りたる恥辱。  
**かいはけい(外形)** (名) 外より見たる形。そのかたち。  
**かいはけい(會計検査)** (名) 〔法〕會計に關する事務執行の當否をとり査する事。  
**いん(會計)** (名) 會計検査院(名) 〔法〕官廳の收支、官有物及國債に關する計算を檢査確定して、國家の會計を監督する官廳、天皇に直隸し、國務大臣に對し特立の地位を有す。——**かん** (會計検査官) (名) 會計検査院を組織する高等官。

かいはけい(蓋肇子) (名) 青蓋(名)の碗を載せる蓋、肇(名)の碗を載せる蓋をなす。  
**かいはけい(外頸靜脈)** (名) 〔生〕後頭及耳後の外頸動脈(名) 〔生〕顔面、頭、顔及前頭一部に分布せる動脈、但し靜脈、前額には分布せず。  
**かいはけい(解決)** (名) ①もつれ事の處理。②問題の解釋。  
**かいはけい(償價)** (名) 堤防等のつひえきと。  
**かいはけい(怪傑)** (名) 特殊の力量あるすぐれびと。  
**かいはけい(壞血病)** (名) 〔病〕身體衰弱して出血し易き病、營養の不足に由來す、齒齦)は腫れたれ、皮膚は土色となり、遂に皮膚出血、内臟出血を發して死に至ると多し。  
**かいけん(海權)** (名) 海上の權力。——**こく** 〔海權國〕(名) 海權を掌握せる國。



かいはけい(懷劍) (名) 懷に携ふる小刀。——**逆手** に持ち、**かいけん(會見)** (名) 互に一處にあつまりて面會する。——**番艦** 艦の一。  
**かいけん(改元)** (名) ①年號をあらたむ事。②帝王又は**かいけん(開眼)** (名) 〔まなこをひらく〕**佛** (佛) 佛(一) 寶皇如の理を體得する事。〔ろ〕新に出來たる佛像を神壇にせんがため、僧侶の行ふ儀式。——**供養** )  
**かいけん(戒嚴)** (名) ①いましめを厳しくすると。きびしく用心すると。②〔法〕戰時若しくは事態に際し、兵備を以て全國若しくは一地方を警戒せらる事、其範圍内に參隊及司法權の一部若しくは全部を、其地の司令官の管掌に委ねるもの。  
**ちぎ** 〔ちぎ〕**戒嚴地境** (名) 〔法〕戒嚴の宣告によりて警戒せらるる地域、分ちて臨戰地境及合圍地境の二とす。——**れい** 〔戒嚴令〕(名) 〔法〕天皇の大權により戒嚴を宣告したまふ勅令。  
**かいけん(概見)** (名) 大凡を見たること。ざつと目をとほす。  
**かいはけい(外見)** (名) みえ。うは。べ。  
**かいはけい(解雇)** (名) やとひ人を思ふこと。かひよう。  
**かいはけい(懷古)** (名) ひかしを思ふこと。——の情)。  
**かいはけい(回顧)** (名) ①あとにふりむくと。②むかしを思ふこと。曾遊をいす。  
**かいはけい(見)** (名) かひこを見よ。——ひらくと。  
**かいはけい(解悟)** (名) いまさと。氣がつくと。まよひをいよ。  
**かいはけい(戒護)** (名) いまさと。氣がつくと。まよひをいよ。  
**かいはけい(海權)** (名) 前非をくいざと。  
**かいはけい(回護)** (名) となりなまると。かばと。  
**かいはけい(偕行)** (名) つれだちてゆくこと。ともによと。  
**かいはけい(兼職)** (名) ①兼つておこなはる事。②兼つておこなはる事。③兼つておこなはる事。④兼つておこなはる事。⑤兼つておこなはる事。⑥兼つておこなはる事。⑦兼つておこなはる事。⑧兼つておこなはる事。⑨兼つておこなはる事。⑩兼つておこなはる事。⑪兼つておこなはる事。⑫兼つておこなはる事。⑬兼つておこなはる事。⑭兼つておこなはる事。⑮兼つておこなはる事。⑯兼つておこなはる事。⑰兼つておこなはる事。⑱兼つておこなはる事。⑲兼つておこなはる事。⑳兼つておこなはる事。㉑兼つておこなはる事。㉒兼つておこなはる事。㉓兼つておこなはる事。㉔兼つておこなはる事。㉕兼つておこなはる事。㉖兼つておこなはる事。㉗兼つておこなはる事。㉘兼つておこなはる事。㉙兼つておこなはる事。㉚兼つておこなはる事。㉛兼つておこなはる事。㉜兼つておこなはる事。㉝兼つておこなはる事。㉞兼つておこなはる事。㉟兼つておこなはる事。㊱兼つておこなはる事。㊲兼つておこなはる事。㊳兼つておこなはる事。㊴兼つておこなはる事。㊵兼つておこなはる事。㊶兼つておこなはる事。㊷兼つておこなはる事。㊸兼つておこなはる事。㊹兼つておこなはる事。㊺兼つておこなはる事。㊻兼つておこなはる事。㊼兼つておこなはる事。㊽兼つておこなはる事。㊾兼つておこなはる事。㊿兼つておこなはる事。

かいこう(海港) (名) 海岸にある船舶の停泊場。うみべのみなど。——**けんえき** 海港檢校(名) 傳染病豫防のため、海外諸港より來る船舶に對し、指定の海港に於て

かいこう(開港) (名) ①通商を開放して外國船の自由出入を許す事。又、其通商。②湖河の干満に拘はらず常に船舶の出入、發着共に自由なる港。——**ちぎ** 〔ちぎ〕**開港場** (名) 通商を開放たる港。  
**かいこう(開校式)** (名) 學校にて授業始めに行ふ式。  
**かいはけい(開講)** (名) 講義を始めること。  
**かいはけい(戒香)** (名) 〔佛〕持戒の徳を積み自ら人を戒め、敬服の念を起さしむるおもむき、其徳の四方に開こゆるを、名香の徳を擧る事に譬へらる。  
**かいはけい(還航)** (名) 海上より侵入せる寇艦。  
**かいこう(選寇)** (名) おもはず出會する事。たまさかに遇ふこと。まきあひ。であひ。めぐりあひ。  
**かいこう(開口)** (名) 口をひらくこと。聲を發すると。③徳川時代に、幕府にて能樂の翁の舞の終りに新作の祝語をうたふと、隨隨これを詠んずるに聲を立つるとを許されず、當日初めて開聲するに由りていよ。  
**かいこう(廻航)** (名) 方々をめぐぐる航海。——**いん** (廻航委員) (名) 外國に駐在して發成したる軍艦を、我國に廻航するために、任命派遣せられたる委員。  
**かいこう(會合)** (名) よりあひ。あつまつり。集會。  
**かいこう(外項)** (名) 數) 一つの比例式に於て、其兩端に立つ二つの數。

かいこう(外交) (名) ①國外に對する交際。②個人と他國との交際。③世間の人の交際。④[Diplomacy] 〔法〕國と國との交際は交渉す國家相互關係の處理。——**一問** ⑤専ら外間の運動周旋。——**か** 〔外交家〕(名) 一問外交の局にあたる人。又、外交に巧なる人。——**かん** 〔外交官〕(名) 〔法〕外務大臣の監督の下に屬し、外國に駐在して外交の事務に従事する官廳、全權大使、全權公使、辦理公使

かいこう(海權) (名) 海上の權力。——**こく** 〔海權國〕(名) 海權を掌握せる國。

かいこう(開港) (名) ①通商を開放して外國船の自由出入を許す事。又、其通商。②湖河の干満に拘はらず常に船舶の出入、發着共に自由なる港。——**ちぎ** 〔ちぎ〕**開港場** (名) 通商を開放たる港。  
**かいこう(開校式)** (名) 學校にて授業始めに行ふ式。  
**かいはけい(開講)** (名) 講義を始めること。  
**かいはけい(戒香)** (名) 〔佛〕持戒の徳を積み自ら人を戒め、敬服の念を起さしむるおもむき、其徳の四方に開こゆるを、名香の徳を擧る事に譬へらる。  
**かいはけい(還航)** (名) 海上より侵入せる寇艦。  
**かいこう(選寇)** (名) おもはず出會する事。たまさかに遇ふこと。まきあひ。であひ。めぐりあひ。  
**かいこう(開口)** (名) 口をひらくこと。聲を發すると。③徳川時代に、幕府にて能樂の翁の舞の終りに新作の祝語をうたふと、隨隨これを詠んずるに聲を立つるとを許されず、當日初めて開聲するに由りていよ。  
**かいこう(廻航)** (名) 方々をめぐぐる航海。——**いん** (廻航委員) (名) 外國に駐在して發成したる軍艦を、我國に廻航するために、任命派遣せられたる委員。  
**かいこう(會合)** (名) よりあひ。あつまつり。集會。  
**かいこう(外項)** (名) 數) 一つの比例式に於て、其兩端に立つ二つの數。  
**かいこう(外交)** (名) ①國外に對する交際。②個人と他國との交際。③世間の人の交際。④[Diplomacy] 〔法〕國と國との交際は交渉す國家相互關係の處理。——**一問** ⑤専ら外間の運動周旋。——**か** 〔外交家〕(名) 一問外交の局にあたる人。又、外交に巧なる人。——**かん** 〔外交官〕(名) 〔法〕外務大臣の監督の下に屬し、外國に駐在して外交の事務に従事する官廳、全權大使、全權公使、辦理公使



かいたくしたる土地。  
**かいこん**〔**根根**〕(名) 【種】滋養物の貯蔵所となりたる肥大な塊状の塊甘藷の類くなり。  
**かいこんけん**〔**海根**〕(名) くやみうらむと。  
**かいごんけんまつ** 開權顯實(名) 【佛】三乘權假の門を激して、乘眞實の相を顯はすと。  
**かいさい**〔**改濟**〕(名) 借金をごとく返却する。年貢をごとく納む。【目】ごとくとくとのひすむと。  
**かいさい**〔**快哉**〕(名) こころよさと。「一を叫ぶ」。  
**かいさい**〔**介在**〕(名) 間にはさまりとあると。  
**かいさい**〔**匪背**〕(名) 間にかりて人を視ると。にらむと。  
**—の想** 句 わづかにのうらみ。  
**がいさい**〔**外債**〕(名) 外國債。【開墾地】  
**がいさく** 開作(名) 開墾して作物をうまつくと。又、其  
**がいさく** 開墾(名) 山をきりひろきて、道を通ると。  
**がいさつ** 開札(名) 入札をひらきて調ぶと。  
**かいさつ** 改札(名) ふだをあらたむと。きつ、ぶをあらぶと。  
**—くち** 改札口(名) 改札をなす出入口。  
**かいさん** 解散(名) 集會せる者の散じ去ると。又、集會せる者を散じ去らむと。  
**—(法)** (い) 契約を解除して團體を廢止して、其會社。(ロ) 議員の任期未滿なるに、其資格を解除して、其會社を一時閉鎖する。【議會】。  
**かいさん** 海産(名) 海に産するもの。【ひりょう】  
**海産肥料(名)** 【應】海産物を肥料とするもの。魚肥、海藻等これなり。【ぶつ】海産物(名) 海に産する魚介、海藻の類。  
**かいさん** 開山(名) 寺院の創立者。寺院の祖。開基。  
**かいさん** 潰散(名) くづれらばと。「せる低所」。  
**かいさん** 海軍(名) 【地】海底の長く狭く急斜。  
**かいさん** 改算(名) 文字のかきかへ。文書のつくりかへ。  
**がいさん** 概算(名) あらましの勘定、算の對。「わ  
**たし** 概算渡(名) 【法】支拂額の確定せざるとき、後日の精算を豫期し、見積りに支拂ひ渡すと。

**がいさん** 碍窩(Impenetrability)(名) 【理】物質の性質の「—」に不可入性を有せしむる。【理】物質の性質を同時にこれを占むせしむる。【佛】三乘の權教たるを明かにして眞實の一乘を顯はすと。  
**かいさんけんいち** 開三顯二(名) 【佛】三乘の權教たるを明かにして眞實の一乘を顯はすと。  
**かい志** 海市(名) 【地】まきらう。  
**かい志** 開土(名) 【法】以て開き導く人の義。【佛】菩薩の  
**かい志** 開始(名) はじむと。又、はじまる。  
**かい志** 界紙(名) すちを引きとある紙。けい。【界紙】。  
**かい志** 芥子(名) 種からしな種子。【—せい】芥子精(名) 芥子油一分に酒精九分を混和したる皮膚の刺殺藥。【—てい】芥子泥(名) 藥芥子の粉末に水を加へて泥状となしたる皮膚の貼用藥。【ゆ】芥子油(名) 芥子より採取せる揮發油。  
**かい志** 摺紙(名) 和歌又は連歌を正式に詠進する時に用ふる紙、多くは摺紙又は杉原紙を使用し、一定の書式あり、官位姓名など併せ記するものとす。  
**かい志** 界磁(Field magnet)(名) 【理】發電機又は電動機の磁界又は磁束を生ぜしむる磁石。  
**かい志** 海事(名) 海に關する事。  
**かい志** 繪事(名) くにわ。【—は素より後】にす(句) 【論語に出づ】素は粉本にして、これに衆色を施して繪成る義、即ち美質を先にして文飾を後にするにいふ。製の色具、種類多し。  
**がい志** 碍子(名) 架空電線を支持し、且支柱などに其電流の器具、種類多し。  
**がい志** 外史(名) 【外事】の記録を掌る官。【民間にて撰述せる史傳】。【新開紙】。  
**がい志** 外紙(名) 外國の  
**【外資輸入】(名)** 【商】外國に於ける事業經營のため外國の資本を内國に移入すると、即ち證券を外國にて發行し、又

は外國人と共同合資をなし、若しくは外國の個人又は會社より借入をなす等によりて行はる。  
**がい志** 孩兒(名) みどり。【—をさだて】(嬰兒)。  
**がい志** 外耳(名) 【生】聽器の一部、音響を感受して中耳内耳に傳ふる所、耳鼓、外聽道、鼓膜より成る。  
**がい志** 概數(名) 古昔、食物を器に盛るとき下に敷きたりし木の葉、南天、柏などを用ひたり。  
**がい志** 概數(名) 【數】演算の順序を、一定の記號方法によりて記號するもの。  
**がい志** 皆式(副) みな。のこらず。  
**がい志** 概(副) おしなべて。ひきくるめて。  
**がい志** 會社(名) 【法】商行爲を目的として二人以上上のものが協同して設立したる社団法人。合名會社合資會社株式會社株式合資會社等の種類あり。【—いん】會社員(名) 會社の事務員。  
**がい志** 膾炙(名) なますやあぶり肉が萬人の口に上る如く、廣く人々に賞讃せらるる。【—人口に—】  
**がい志** 外車(名) 車輪推進器を用ふる汽船にして、これを船舶の中央部の舷外に裝置し、車輪の過速時は水上に露出す、故に外車と稱す、汽船の創造當時は、すべて外車汽船なりしが、今は僅に湖川用汽船に其跡を留む。【—い】。  
**がい志** 解釋(名) とときあかし。せつめ  
**がい志** 介錯(名) かいはいは。つきそひ。【古昔】切腹する人につき添ひて、其人の首をはねしと。又、其人。【—にん】介錯人(名) 介錯する人。  
**がい志** 海若(名) 海の神。わたつみ。  
**がい志** 皆朱(名) 朱辰砂などを用ひて全部赤色に塗  
**かい志** 會主(名) 會を開く主人。【—りたる漆塗】。  
**かい志** 改修(名) あらためなほすと。  
**かい志** 信仰歸依(名) せる宗旨を、あらためかよと。まうまがへ。【—りもとし。資金の】。  
**かい志** 回收(名) もとへかへしをさむと。と



【外車汽船】

かいこーかいさ

かいざーかいし

かいしーかいし

**かいしゅう** (會衆) 名 あつまりあふ衆人。  
**かいしゅうりょう** (海獸) 名 【動】海中に棲息する哺乳動物。形状は種類によりて一様ならずと、陸棲のものと同なりて、肢は趾状を體に紡錘形をなして游泳に適す。即ち「くちら」「あざらし」の類。  
**かいしゅうりょう** (懷柔) 名 なつてきたがはずと。還  
**かいしゅうりょう** (銀袖) 名 よろひのそで。——**いっしゅう**  
**くよく** (鎧袖一觸) 名 取るに足らぬ弱敵に、自己の威勢を示して近づき迫り、一擊を試みんとするをいふ。  
**かいしゅうけんめう** (改主建從) 名 【政】既設鐵道の改良を主とし、財政の餘裕あるときは、新に建設を行はんとする政策。  
**がいしゅつ** (外出) 名 戸外に出づると。他所に赴く  
**がいしゅひひ** (外種皮) 名 【植】種子の外皮。  
**がいしゅん** (改春) 名 年頃となりていろけづくと。  
**がいしゅん** (改春) 名 【植】胚珠の外皮。  
**がいしゅん** (改換) 名 あらたまりたる春(新春)。  
**がいしゅん** (改換) 名 前非をあらたむと。心をいれかふる。かいしん。  
**がいしゅん** (悔改) 名 前非をくいやあらたむと。  
**かいしゅん** (悔改) 名 【宗】天主教にて、洗禮を受けて其以前の犯罪を赦さるると。  
**かいしゅん** (懷春) 名 年頃となりていろけづくと。  
**かいしゅん** (回春) 名 年立ちかへりて春になること。  
**かいしゅん** (積書) 名 漢字の書體の一、誦書より轉化せしもの。字形最も正し、支那漢末より行はる。まんと、(眞書)。  
**かいしゅん** (會所) 名 人々のよりあひする所。基。  
**かいしゅん** (會所) 名 【時】商業の取引又は町内の取締等に就きて、關係ある人のよりあひをなしたる所。米。町。  
**かいしゅん** (刈除) 名 かりのぞくと。  
**かいしゅん** (刈除) 名 【法】或關係若しくは責任を消滅せしめて、其關係若しくは責任なき以前の狀態に復せしむると。——**けん** 解除權 (名) 【法】當事者一方の意思表示によりて契約を解除し得る權利。或は法律の規定によりて生じ或は契約によりて生ず。

——**きょうけん** (解除條件) 名 【法】法律行為の效力の消滅を、不確實なる將來の事實に繋むらしむると。  
**かいしゅん** (海相) 名 海軍大臣。  
**かいしゅん** (海床) (海床) (名) 【地】海淵。  
**かいしゅん** (海商) 名 【法】海上に於ける商行爲、即ち航海業及海上保險業など。——**ほうかい** (海商法) 名 【法】海商に関する權利關係を定むる法規、但し船殼(船)其他(艘)の權を用ひて運轉するものにはこれを適用せず。  
**かいしゅん** (開敵) 名 ひらけてさへぎるものなき  
**かいしゅん** (海相) 名 【法】海上に於ける商行爲、即ち航海業及海上保險業など。——**ほうかい** (海商法) 名 【法】海商に関する權利關係を定むる法規、但し船殼(船)其他(艘)の權を用ひて運轉するものにはこれを適用せず。  
**かいしゅん** (海嘯) 名 【地】進潮の河水と衝突して激浪を生じ、其聲のすさまじく聞こゆると、濁沸状をなす河口に多し。うみなり。(ろ)巨大なる波浪の不時に起こりて陸地を没す。海底火山の破襲又は地震等に伴ふもの多し。つなみ。  
**かいしゅん** (改醜) 名 あらためてよめいりするところ。  
**かいしゅん** (解消) 名 とききすと。又、とききると。  
**かいしゅん** (解酒運動) 名 【社】昭和五年我國の勞農黨内に入りし運動、勞農黨の主義政策は無産階級の階級的勢力の結成を助勢すとし、徹底的合法政策を維持するよりは、單ろ農民組合労働組合に混入して其擴大強化に努むべしとせしもの。  
**かいしゅん** (題章) (題章) 名 【名】名宛を述せしめ、よりそれへとはまして事を通する書状。まはしむくわいばん。(題文、移文) 返事。返書。——ひさうだん。  
**かいしゅん** (快捷) 名 合せして語強すと。よりあ  
**かいしゅん** (快捷) 名 ちやうやく。  
**かいしゅん** (海上勤務) 名 海軍軍人が艦船に乗り組みて、海上の職務に服するところ。——**けいさつ** (海上警務) (名) 【法】航海の危険を防止し其安全を圖る目的の警察。——**けん** (海上權) (Sea power) (名) 【法】海上を制

制する權力。軍事・通商・航海等に関して海上に於ける勢力。  
**かいしゅん** (海上衝突) 名 【法】海上に於ける船舶の衝突、其豫防に關し、船殼又は信號等に就き詳細なる規定あり。——**せんとうりやく** (海上戰闘力) 名 【政】海上に於ける國家の戰闘力、艦船及人員より成る。——**ほうかい** (海上法) 名 【法】航海に関する法規の總稱にほふと稱す。海上法に屬するものを公海法といひ、私法に屬するものを私海法といひ、國際關係に屬するものを國際海法といふ。——**ほうえき** (海上貿易) 名 【法】海上を經由して行ふ貿易。海上法要義の大部分はこれに依る。  
**ほうりょうぎ** (海上法要義) 名 【法】西紀一八五六年、フランクフルトの公會に於て、會合せし諸國の代表者が、局外中立國と交戰國との海上に於ける國際關係を協定して、同年四月十三日調印したる宣言書。に「パリー」宣言といふ世界の文明國すべてこれに加盟せり。——**ぼくわく** (海上捕獲) (Maritime capture) 名 【法】交戰國の艦船及其載貨若しくは中立國の艦船及其載貨の中立違犯の罪證又は嫌疑あるものを捕獲すること。——**ぼけん** (海上保險) (Marine insurance) 名 【法】航海に関する事故によりて生ずべき損害の填補を以て目的とする保險。此保險に関する商法の規定は、一種の特別法にして、若し特別の規定なき場合には、一般の保險に関する規定を適用するものとす。其保險によりて被保險者に交付する契約書を海上保險證券とす。——**れいめい** (海上禮式) 名 一國の海軍が他國の海岸禮堂のある處に到り、又は海上に於て他國の海軍に遭遇したるとき、禮節又は旗章を以て行ふ禮式。  
**かいしゅん** (開城) 名 【城】城をひらきて敵に降るべし。  
**かいしゅん** (階乘) (Factorial) 名 【數】1より初めて1つづつ多數をみな掛け合せたる積、1×2×3×4×5×……×nは、即ちその階乘にして、n又はn!を以てこれを表はす。



かいまよう(開場)一名 一定の場所に於ける制限を去りて、公衆の入場を許すことば、まよひらく。

かいまよう(戒杖)一名 佛山伏などの携ふる錫杖。

かいまよう(會狀)一名 集會する場所。

かいまよう(外相)一名 外務大臣。

かいまよう(外傷)一名 外來の暴力によりて、身體に損傷を受くることば、まよひらく。

がいまよう(外商)一名 外國の商人。

がいまよう(外委)一名 外へかこひおけるめかけかこひもの。

がいまよう(街上)一名 ちまよひらばた。

がいまよう(火山)一名 地層岩の積塊より成りて成層構造のなき火山。

かいまよう(照器)一名 照速兩のHeliotrope) 地に日光を反射して信號の用に供し、三角測量をなすとき、の目標となす器具。

かいまよう(醜弊品)一名 魚貝類の肉、腸卵等を醜濁として、一種の味を醸成せしめたる食品、まよひらばた等これなり。

がいまよう(概稱命題)一名 論議略を擧稱したる命題例へば、日本人は概ね勇敢なり。

かいまよう(海鞘類)一名 動物被囊類の一、體は囊狀又は塊狀をなし、附着は植物纖維素を含む、多くは下端を以て海中の物體に附着す、まよひらばた等これなり。

かいまよう(戒飭)一名 戒より其人を去らしむること。見

かいまよう(會食)一名 集まりて食事すること。

かいまよう(亘代)一名 ばり(俄)。列立せる樂人、四十人の一ひまらす吹き立てたる物の音。

かいまよう(改心)一名 惡心をあらためて、善心にかへること。かいまよひ。



【器照回】

かいまん(改新)一名 あたらしくすると、又、あたらしくなること。三年のはじめ。

かいまん(改進)一名 事物のあらたまりすすむこと。

かいまん(開進)一名 文物ひらけ人智すすむこと。

かいまん(戒心)一名 不慮にそなふる心、ようまんと。

かいまん(海神)一名 うみの神、わたつみ。

かいまん(會心)一名 心にかなふこと、氣にむくと。

かいまん(快心)一名 よきこころ、さばりしたるき。

かいまん(回診)一名 醫師の病家先を巡回して、患者を診察すること。

かいまん(灰燼)一名 ひひとえまんと。

がいまん(苦心)一名 わるだくみ、あくまんと。

がいまん(外心)一名 ふたごころ、まよひらばた。

がいまん(外陣)一名 たたかひに勝たていくさをかへ

がいまん(外人)一名 外國の人。

がいまん(外陣)一名 神社の内陣の外にある社殿。

かいまん(解)一名 他、さ變、解釋する。ときわく。

かいまん(會)一名 他、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

かいまん(會)一名 自、さ變、集會する。よりあふ。

置、潮流の方向等海洋の狀態に關して明記し、併せて航路標識等をも記入せるもの、主として航海者の使用に供す。

がいまん(愷)一名 他、さ變、なげく、うれふ。

がいまん(害)一名 他、さ變、さす、くそ、こなふ。

がいまん(海)一名 地、海洋に湛ふ水、多量の鹽分を含みて淡水より重し、固有の色は青なれど、鹽分の多量によりて、其濃淡を異にす、まよひらばた。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

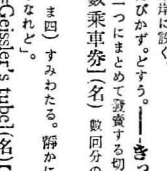
かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。

かいまん(海水浴)一名 衛生のため、海水に入りて浴すること。



【管ルレイガ】

かいまん(改姓)一名 苗字をあらたむること。

かいし—かいし

かいす—かいせ

かいせーかいせ

かいせい【諧聲】(名) けいせい(形聲)。  
かいせい【解性】(名) 心のこころよく晴れたる。  
かいせい【快晴】(名) 空のこころよく晴れたる。  
かいせい【慨世】(名) 世の成行をなげきうれふと。世事をかうがうと。「の氣あり」。

がいせい【蓋世】(名) 世をおほひつゝすほどの器量又は功名ある。「の英雄」。

がいせい【外征】(名) 外國へ出征する。  
かいせい【海成層】 Marine sediment (名) 海底の沈澱物によりて成りたる地層。

かいせい【海成段階】 Sea terrace (名) 海岸のため海岸の削られ、又は土砂の堆積してなれる海岸の平地にして、海面より高き所。  
かいせい【改正電報】(名) 法電報發信人が、差出したる電文を改正するために發する電報。

かいせい【海生物】(名) 生海中に生ずる動植物、淺海に生ずるものは、普通人の知る所なれど、深海は水温低く且開眼なる故に、植物は下等植物にして、動物は眼孔非常に大なるもあり、或は全く盲目なるもあり、又、燐光を發する等もありて、特殊の観察を備ふ。

かいせい【介石】(名) 易經に「介石」とあり、石よりも堅き義)守るところの極めて堅固なる。

かいせい【解析】(名) 物事を細かく解きひらき、理論によりて研究する。【Analysis】(數) 幾何數に關係せる數學諸分科の總稱。——きかがく【解析幾何學】 Analytical geometry (名) 【數】解析法を應用し、點の位置を示すに或量を用ひ、其函數の性質を明かにして幾何圖形を研究する科學、フランス人「デカール」の創めしもの。

かいせい【懷石】(名) 温石にて腹を温たむと同じ程に腹の中を温め、一時の空腹をしのぎとするものなればいふ茶湯にて、茶を供する前に先づ出す手軽き樂勝。

かいせい【會席】(名) よりあひの座數。よりあひの場所。【會席料理】又は【會席茶屋】。——ちやや【會席茶

かいせーかいせ

屋】(名) 茶湯の懷石風の樂勝を出す料理屋。——りょうり【會席料理】(名) 會席茶屋にて、茶湯の懷石風に出す樂勝。【釋】て、料理屋にて、集會せる人に出す上等の樂勝。  
がいせい【外戚】(名) 母方のまゐなる。「の樂勝」。

かいせい【解説】(名) ときあかし。せつめい。【物事を分解し、其要素又は條路を指示する。】

かいせい【開窓】(名) あらたまうごとく。はじむと。  
かいせい【廻折】(名) れまがらと。【Diffraction】(理) 光が再び狭き空隙を通過するとき、其進む方向以外に達すること、此現象の起こるは、光線の通過する空隙甚だ狭き故に、映像部以外に達する光波は相干渉すとへど、全く消滅するに至らざるのみならず、却て部分に於ては光波の山と山と相重なり、ために輝部を生ずるが故なり、故に単色光を用ふるときは、映像部以外に明暗ともも生じ、白光を用ふるときは「スペクトル」數箇順次に現はる。——

【理】硝子板又はよく磨きたる金屬板に、無數の平行線を密接して刻したるもの、硝子板にては通過の光の廻折現象を、金屬板にては反射の光の廻折現象を検するに用ふ、刻線部分に光を通過せしめ、又は正しく反射せず、故に硝子板なれば格子の後方の一點、金屬板なれば格子の前方の一點にて距離の少しづつ異なる點より光の達するが故に、相干渉して特別の色を呈す、ここに獨立の光をおくか又は望遠鏡にて望むかすれば、「スペクトル」現はる、其「スペクトル」は各平行線の間隔狭きほど明瞭なる。「引證」。

がいせい【割切】(名) 最も適切なと。引證。  
がいせい【概説】(名) あらましの説明。おほくくりの説明。

がいせい【外接圓】(名) 【數】二つの直線形を圍み且其各頂點が圓周上にある圓。  
がいせい【外切球】(名) 【數】二つの圓の外にありて且これとただ一點に於て會する圓。

がいせい【外切球】(名) 【數】二つの球の外にありて且これとただ一點に於て切する球。  
がいせい【外接直線形】(名) 【數】

かいせーかいせ

かいせい【開戦】(名) 戦争を始めること。「上りたるもの」。

かいせい【改選】(名) 法議員又は役員は任期満ちたるにより、あらためてこれを選擧する。

かいせい【疥癬】(名) 【病】疥癬蟲の寄生によりて生ずる傳染性皮膚病、人體の指間、指側等皮膚の薄弱なる部分を犯し、掻痒甚だしき疹を生ず、其痒痒は疥癬蟲の運動によりて起こり、湿かるときは殊に甚し。ひぜん。——ちゅう【疥癬蟲】(名) 【動】蟻類の一種、形狀壁蝨に類似し、人、猿、馬、獅子、猫、兎等の皮膚に寄生して害蝨す、數種あり、人類に寄生するもの成熟したるは、肉眼にて認むとを得べく、ほぼ細砂粒大にして灰白紅色の小粒状をなし、體に鋭刺及長毛を有す。ひぜん。の儀。



【疥癬蟲】

かいせい【會戰】(名) であひてたかふと。かつせん。  
かいせい【廻船】(名) 廻漕に用ふる船。——どひや

かいせい【介間屋】(名) 副。かたたくしてま。かりしたるさま。【間にもものほさま。】

かいせい【階前】(名) きざはしのみまへ。——ばんり【階前萬里】(名) 萬里の遠きも近く階前にとの義) 君主の儀めて下情に通ずる。

かいせい【改善】(名) 改めて善に向かふと。——かん【改善】(名) 【哲】世界は最善なるものにあらず、又最善なるものにあらず、故に全然樂しきものにあらず、又全然厭ふべきものにあらず、人力によりて漸次改善せらるべきものなりといふ見解。

かいせい【凱旋】(名) いくさに勝てかへると。——もん【凱旋門】(名) 凱旋の軍隊を歓迎し、其戰勝を記念するた

めに、都倉の主要街路に建つる門。

がいせん 慨然(名) 副 いきどほりなげくさま。

がいせん 駭然(名) 副 びっくりするさま。おどろくさま。

がいせん 蓋然(名) 副 蓋然といふこと必然の對。

せい蓋然性(Probability)

がいせんきよ 開船渠(Tidal dock) (名) 工場口を全く開放し潮の出入り自由なる船渠。海港にありては常に其内港となりて、船舶の出入り頻繁なるもの。

かいそ 開祖(名) (傳) (い) 祖師。 (開) 創始者。

かいそ 給素(名) (傳) (い) 祖師。 (開) 創始者。

かいそ 外祖(名) 母方の祖父。

かいそ 海深(名) (植) 海産の綠藻。海藻。紅藻の總稱。一ばひひ。海藻灰(名) (化) 褐藻を乾して蒸焼にしたる灰。沃度製造の原料に供せらる。

かいそ 海草(名) うみくさ。

かいそ 改葬(名) 一旦葬りたる死骸を、あらためて他處に葬りかよふこと。

かいそ 海葱(名) (植) 百合(名) 科の多年生草本。地中海沿岸の原産にして、秋に莖頭に總狀花序をなす小白花を開く。花開き後葉生ず。葉は根生にして披針形をなし、長さ尺餘に達す。花後に莖を結ぶ。鱗莖は薬用に供せらる。

かいそ 回想(名) わかししの事を思ひまはすこと。

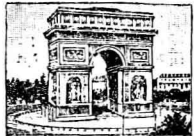
かいそ 迴漕(名) 船送りに旅客をなすこと。

かいそ 迴漕店(名) 船送りに旅客をなすこと。

かいそ 迴漕店(名) (商) 海運業者と荷送人との間に立ち、自己の名を以て貨物運送の取次をなすことを營業とする店。一どや。一迴漕問屋(名) (商) 廻漕店。

かいそ 快走(名) すばやくはしること。

かいせー かいせ



【門旋凱】

かいそ 潰走(名) つひえはしること。

かいそ 海象(名) (動) せいいうち。

かいそ 改造(名) 従來のものゝあらためて造りなほすこと。つくりかへ。社會(一) 世界(一)。

がいそ 鎧装(名) (理) 漏電を防ぐために被覆したる電線の損傷せざるやう、適當物を以てこれを包被する。

がいそ 勦奏(名) 官吏の罪過をあげて君主に上奏すること。強劾。

がいそ 咳嗽(名) 氣道粘膜の刺激によりて發する急促かいそ 外層(名) 外部のかさなり。

かいそ 會則(名) 會の規則。

かいそ 快走(名) すみやかなること。はやきこと。

かいそ 擄削(他) けづり去る。

かいそ 海賊(名) 我國の近古、水軍の異稱。ふないくさ。飛野(一) 海上に横行し、財貨を強奪する盜賊。 (法) 一國の主權の承認なく又は何れの主權にも屬せず、公海領海に横行し若しくは島嶼領地等に上陸して、財貨を奪ひ暴行を恣にするもの、現今の國際法にて、これを人類の公敵と看做し何れの國の船艦又は國民にてもこれを拿捕して、自國法廷の裁斷に附するを得るを通則とす。一せいめう

海賊衆(名) 室町時代に、水軍の將士。一せいめう海賊(名) (法) 海賊の使用せる船舶。現今の國際法にて、海賊と同じ何れの國の船艦又は國民にてもこれを拿捕し、自國法廷の裁斷に附するを得、又、海洋を航行する船舶の海賊たるを疑ふに足るべき十分の理由あらば、何れの國の軍艦も其船舶の捕逐を行ひ得べきものとする。一たいそ

海賊大將(名) 室町時代に、水軍の傑出者。一りゅう

海賊流(名) 水軍の海賊上に於ける兵法。

かいそ 概則(名) あらましのきそく。ざつとした規則。

かいそ 擄奪(他) は下(二) よりそふやうにす。すはす。つきせき。

かいそ 介添(名) (か) しづき。たすけ。つたひ。

かいそ 海損(名) (法) 航海上の事故に關して生じたる船舶及荷物の損害及費用、分ちて共同海損、單獨海損、損害の三とす。共同海損とは、船長が船舶及積荷を以て、共同の損害を免れしむるための處分より生じたる損害をいふ、例へば沈没を見るため、積荷を投棄したる場合などの如きこれなり。單獨海損とは、任意にあらずして、船舶又は積荷にのみ生じたる損害をいふ。小損害とは、航海及臨時の必要より生じたる費用をいふ。一きよう

海損供託金(名) (法) 共同海損に關する分擔額の支拂を擔保するため、其關係者より供託する金額、通常船主及其他の關係者の共同名義にて銀行に預り入れ、海損の場合には、清算完了後其過不足を返却若しくは返還するもの。一けい

海損契約書(名) (法) 共同海損の起る場合には、荷主が其分擔額を支拂ふべきことを承諾したる契約書。一せいさん

海損精算人(名) (法) 海損の際、委託を受けて其調査をなし、損害額を算定し、精算書を作成し、關係者の分擔額を精算する人、其事務極めて複雑にして、其道の経験と知識とを具備するを要す。

がいそ 外孫(名) 自己の娘の他家へ嫁して生みたる孫。むすめ。の生みたる子。

がいそ 珠を成す(句) 不用意に口を衝きて出づるものも、金玉の名知らざるなきの義即ち同才の最も富麗なるにいふ。

かいそ 解體(名) 身體をときわくこと。かいぼう。わけ。 (寄) りて相乘りたる物事の、個々別々になること。

かいそ 懈怠(名) (名) おごり。なまけ。たい。

かいそ 珠を成す(句) 不用意に口を衝きて出づるものも、金玉の名知らざるなきの義即ち同才の最も富麗なるにいふ。

かいそ 解體(名) 身體をときわくこと。かいぼう。わけ。 (寄) りて相乘りたる物事の、個々別々になること。

かいそ 懷胎(名) 子をはらむこと。みもち。わいに

かいそ 改題(名) 題號をあらたむること。

かいそ 解題(名) 書冊の著者、内容の概略、出版年月等

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいそ かいそ

かいたーかいち

の説明「漢書」一「國書」。

かいたい「海内」(名) 四海のうち。國內。天下。「版」がいたい「外帯」(名) 地盤曲せる地殻の凸面。一山かいたく「開拓」(名) 山野をひろき新に田畠をつくる。荒地をあらたにひろく。かいこん。一「志開拓使」(名) 明治二年設置せられ同十五年に廢止せられたる官職。始め北海道と樺太の兩地を管せしが後に北海道のみとなり、其行政及開拓をつかさどる。

かいたく「快諾」(名) きまよく承諾すること。かいたく「播出」(名) かいたす。かいたす「播出」(他、三四) かき出す。くみ出す。かいたつ「廻達」(名) 次第を追ひておくりとどくること。かいたん「戒壇」(佛) 戒法授受の道場。一「めぐり戒壇」(名) 佛信濃國善光寺の内陣の線下の暗所をめぐること。一「せき戒壇石」(名) 佛釋宗などの寺院の門前に建てたる石柱、多くは面に「不許葷酒入山門」と刻す。

かいたん「階段」(名) 次第を追ひて進む等級。階段を成す昇降の通路。一「そう階段層」Step-fault(名) 地層層の多數相並びて階段状をなせる所。一「ほり階段掘」(名) 鑛鑛床内に階段を作りて採鑛すること。かいたん「怪談」(名) あやしきはさ。一「ばけものかいたん」(會談) (名) 面會してはなしあふと。一「話かいたん」(會談) (名) 化) 石炭を大氣に觸れしめずして熱し、其揮發分を除去して殘留する海綿狀多孔質の黒塊、木炭に比すれば質緻密にして堅く且炭素に富み、點火し難けれど點火すれば無煙に燃焼す、冶金術又は鑄物等高温を要するときの必需燃料。コークス。一「炭炭爐」(Coke-oven) (名) 石炭を入れて熱し、炭灰を製造する窯。

かいたん「概数」(名) ちがひをいれよ。かいたん「街談」(名) 道路の世評。うはさ。ふうせつ。一「こうせつ」(街談巷説) (名) 前條に同じ。かいたん「快男子」(名) 氣豪のいとさわやかなるをのこ。氣だてのおもむき男子。

かいたく「改築」(名) あらためきづくこと。きづきかふること。

かいちーかいち

かいちばい「ほう」(加一倍法) (名) 支那宋の邵雍が、天地萬物の變化消長に於ける數理の推測に用ひし算法、易经に「易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦」とあるに本づき、一(原數)を二に倍加し行くものといふ。

かいちゅう「海中火山」(名) 海のなか。うみのまなか。一「かさん」(海中火山) Submarine volcano (名) 地海底に噴出し、其山頂の水面に見はれたる火山。かいてい「げん」一「だげん」海中臺原「Continental shelf」(名) 地海底が海岸より緩き傾斜を以て漸次に低下し、急に傾斜の度を加へて一階段をなす處。

かいちゅう「懷中」(名) ふところのうち。ふところのうちに入ること。かみいれ、かねいれ。一「かがみ懷中鏡」(名) 懷中に持ち歩く小形のかがみ、婦人などの携ぶるもの。一「がき懷中傘」(名) 提燈の如くたたく懷中得るやうに作りたる傘。一「かたぎめ懷中肩衣」(名) 絹にて仕立て、たたみて懷中するやうにしたる單の肩衣、昔時、眞宗の信者が佛參に用ひしもの。一「がたな懷中刀」(名) ふところのやうに仕立てたる合羽。一「あるこ懷中汁粉」(名) 菓子の名、側は煎餅の類にて、これに乾糖を包みたるもの、湯を注ぎてかきまぜれば汁粉。一「すすり懷中硯」(名) 懷中すべき小形の硯、筆墨などを併せ入れおくやうにつくりたるもの。一「どけい懷中時計」(名) 懷中する小さき時計。たもとけい。一「もの懷中物」(名) 懷中に入れてあるかみいれ。御用心。

かいちゅう「蛔蟲」(名) 動物界の線形動物、人體の小腸に寄生、形狀のみず(似て長圓柱狀、黄白色又は褐色若しくは淡赤色を呈す、口は三箇の筋層より成り小き口を有す、其卵を滲する不潔なる蔬菜、果物等の攝取によりて人體に入り来る。はらものむし(蠅蟲)。一「あよう」(蛔蟲症) (名) 病體の寄生によりて發する疾風、殊に



【衣肩中懷】

かいちーかいち

小兒に多く、腹痛、頭痛、下痢、眩暈等を起す。

がいちゅう「青蟲」(名) (動) (一) 人類に害をなす蟲類の總稱。(二) 作物又は樹木を傷害し、且其繁殖の甚だ迅速なる昆蟲(即ち「うんか」)ありまの類の特稱。一「あきよ」(青蟲驅除) (名) 農作物の栽培上又は樹木の繁殖上、害虫をかりのぞく、毒殺、捕殺、點火誘殺等の方法あり。

かいちゅう「開帳」(名) とばり(をひらく義) 厨子(の) とばりを開きて、其中の佛像を拜せしむること。(啓帳) かいちゅう「海鳥」(名) (動) 海岸又は島嶼に棲息し、海上に飛翔遊欲する習性の鳥。一「ふん海鳥糞」(名) 熱帯地の海岸又は島嶼等に産出する有效な肥料、海鳥及海豹、海象などの糞より成り、羽毛又は骨などを混す、往々數十尺の厚層をなすことあり。

かいちゅう「海潮」(名) うねは。かいたす。かいちゅう「戒牒」(名) 佛戒をうけたるあるしに愛くるかきつけ。もの。會のをさ。會題。

かいちゅう「會長」(名) 會員を統率し會を代表するがいちゅう「あやみやく」(外腸骨靜脈) (名) 一生) 下肢全部に分布せる靜脈。

がいちゅう「あやみやく」(外腸骨動脈) (名) 一生) 下肢全部に分布せる動脈。

がいちゅう「あやみやく」(外腸骨動脈) (名) 一生) 下肢全部に分布せる動脈。

がいちゅう「あやみやく」(外腸骨動脈) (名) 一生) 下肢全部に分布せる動脈。

がいちゅう「あやみやく」(外腸骨動脈) (名) 一生) 下肢全部に分布せる動脈。

がいちゅう「あやみやく」(外腸骨動脈) (名) 一生) 下肢全部に分布せる動脈。

かいちゅう「あやみやく」(外腸骨動脈) (名) 一生) 下肢全部に分布せる動脈。

ざりつかむ。④ひきくるめる。かいつまむ。

かいつくろふ。①ウツク。②母なる。③播種。④他。は四。みだれたるをつくりぬはす。⑤衣紋。

かいつぶり〔鷺鷥〕一名〔動〕水禽類の鳥、小鴨よりも小形、體色は一般に赤みを帯びたる



【鷺鷥】

黒褐色、腹部は白く、嘴堅硬にして尖鋭、兩翼短小、脚は殆ど尾端に位置し、各趾屈闊、巧みに水上に游泳し、又、よく水中に潜没して小魚を捕らふ、普通に諸國の池沼湖川にこれを見る。

むぐり。にはいよめ。

かいつまむひめめ〔振振〕他、ま四。つまむの意を稍強めていふ。かいつまて話す。

かいつらぬぬぬぬ。〔振列〕他、な二。つらぬの意

かいつらぬぬぬぬ。〔書列〕他、な二。書きつらぬ。

かいつらぬぬぬぬ。〔階梯〕一名。あがりおりの階段。まだはし。だんばして。⑤進みゆくべき初步。はじまり。てびき。⑥器樹體

操用具の一、斜にたてかけたる梯子。

かいてら改定一名。あらためさだむこと。

かいてら改訂一名。あらためて訂正すること。

かいてら解廷一名。〔法〕新聞雑誌などの停止をとくと。

かいてら解廷一名。〔法〕新聞雑誌などの停止をとくと。

かいてら海程一名。海上の里程。

かいてら海底一名。海水のそこ。うみのそこ。かざん

かいてら海底火山一名。地。かいかちゅうくわん。さんみやく

かいてら海底山脈一名。地。海底の比較的狭くして急斜せる高所。すうらいらつて

かいてら海底水雷一名。深からざる海底に接して沈設する防禦水雷。

かいてら海底線一名。かていでんせん。だいち

かいてら海底臺地一名。Plateau。海底の面積廣くして平坦若しくは緩斜して邊縁の急斜せる高所。

かいてら海底沈積物一名。海底に沈積せる土砂。

かいてら海底電信一名。海底電線により海洋を隔つたる兩地點間に送受する電信。

かいてら海底電線一名。Submarine cable。海底に架設したる電

信線、數箇に包むる鋼線に各鋼線の裝置をなし、これを集束して防水絶緣物に包み、數條の大いなる鐵線を含して作りたる數箇の繩索を以て、其上を極めて緩き勾配の螺旋狀に捲き、更に其上に防磨鞘を纏繞するもの、其世界に於ける架設の系統は、各國の商業、軍事及外交に至大の關係を有す。

かいてら孩提一名。をさなご。かんとり。のするど

かいてら外敵一名。外國に於ては、身心にかたひてきもちよき感じがいてつき

かいてら街鐵一名。市街鐵道。みせびらき。開業。

かいてら開店一名。商店をひらきて商賣をはじむること。のひらきよぶること。

かいてら開展法一名。地圖作成の一法、紙を圓筒狀となして地球を被り、地表の諸點をこれに投影して開展せしめたる理

かいてら回天一名。そらをめぐらすこと。天子の心をひるがへすこと。時勢を一變する。の事業。

かいてら回天倒日一名。時勢を一變すること。至大なる力量ある。の力。

かいてら回轉廻轉一名。ぐるぐるくること。常にて距離を保ちつゝ運動すること。角運動。

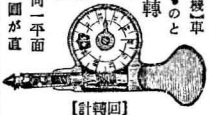
かいてら回轉運動一名。ぐるぐるくること。運動。回轉槓。

かいてら回轉數計器一名。機。車の一分間の回轉數を計る器。据附用のものと押附用のものとあり。

かいてら回轉軸一名。回轉の中心たる一定直線。

かいてら回轉盤一名。數。平面上にて一端を一定點上に置き其周圍に回轉する直線。

かいてら回轉體一名。Solid of revolution。數。平面圖形が同一平面中にある直線を軸とし回轉して生ずる體。圓が直



【計轉回】

徑を軸として回轉するときは球體を生ず。とう回轉燈 Revolving light 點明の一種、照光器の回轉により漸次光力を増し、其頂點に達すれば、漸次光力を減じて暗黒となり、明暗互に回轉する裝置のもの。

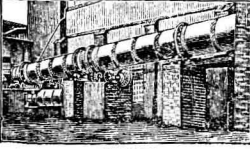
とう回轉鏡一名。運動器具の一種、高き木柱の上部に堅牢なる車輪の裝置を施し、其周圍より數條の索を下懸し、索の下端に金屬製の鏡形把手を設けたるもの、人其把手を握り、走りつゝを蹴りて身體を飛躍せしめ、柱の周圍を回轉す。

とう回轉砲塔一名。降子の極の中程に履輪を設けて、閉閉を便したる窓。もくは回轉木馬一名。運動器具の一種、直立輪の周圍に大馬を併置し、其輪の回轉するに従ひて木馬も亦回轉し、これに乗れるものをして輪乘するが如き感らしむる裝置。

回轉爐 Revolving furnace 物體の燒成・熱灼・蒸發等に使用する一種の爐。長さ數十尺直徑數尺の圓筒狀をなし、水平又は少しく傾斜して置かれ、齒車の作用により、徐々

に開放し、上端より加熱せんとする物體を投入し、下端より火焰を通じ、其火焰は煙突に逃る、裝置なり、一時に多量を加熱し得ると、物體を平均に加熱し得ると、物體をよく浸漬せしめ得る等の利益あり。

回轉傳音傳一名。師匠より、奥義を秘しなく傳へらるる。



【盤轉回】

かたひにせり

かたひにせり

かたひにせり

二三

かいつーからん

がいてん(外電) 外国よりの電報。  
がいてん(外傳) 本傳以外の傳記。  
かいつー(灰土) 名。はひとつと。昔時の形跡を  
存せざる敗殘物。金殿玉樓遂に歸す。

ガイド(Guide-book) 名。案内書。——ポスト(Guide-  
post) 名。道標。

かいつー(戒刀) 名。一切の他物の研削に用ふるを  
戒むる刀の義。[戒刀三衣を裁つ]に用ふる。

かいつー(海鳥) 名。海のものなかにある鳥。  
かいつー(解答) 名。ときあかして答ふると。ときあ  
かしのこたへ。謎の一。

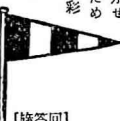
かいつー(快刀) 名。切味のこころよきするとき刀。  
——亂麻を断つ(句) 快刀にてもつれ麻をきる義、即ち  
繁務を處理するの極めて敏活にして流暢なきにいふ。

かいつー(回答) 名。船舶が他より表示せ  
られたる信號を了解したることを表すために  
掲ぐる旗、縦に一條おきに紅と白との彩  
色を施したるもの。

かいつー(會頭) 名。會のをさ。  
かいつー(海棠) 名。種(種) 薔薇の高(高) 料の落葉喬木、支那  
の原産、觀賞用として庭園に栽培せらる。高さ丈餘、葉は長卵  
形又は長橢圓形にして尖り、鋸齒を有す。春日、新葉と共に長  
梗を出して開花す、花は紅色を呈して頗る美麗。

かいつー(海道) 名。海上の航路。うみち。沿海  
の地方を通ずる街道。山道の對。東海道の略稱。東とほ  
りみち。街道。——くだり(海道下) 名。古昔、京都より  
東海道を東國に向かひてくだりし。——すぢ(海道筋)  
名。街道の道すぢ。東海道に通ずるおはやけのみち。  
おほとり。みちすぢ。また。おほりみち。(官道)。

かいつー(會堂) 名。宗(キリスト) 教徒の教會堂。



【解答回】

かいつーからん

かいつー(會回) 名。よりあつまること。又、よせあつ  
がいつー(該當) 名。あてはまること。——むると。  
がいつー(街頭分子) 名。市街のほとり分子。——とうそ  
がいつー(街頭鬭争) 名。市街頭分子の「ま」。——ぶん  
がいつー(街頭分子) 名。市街に點火する燈。

がいつー(街燈) 名。市街に點火する燈。  
がいつー(外套) 名。洋服にて、まく(外套膜) 名。  
[動物] 軟體動物の體壁の一部の擴張して膜状をなすもの。  
がいつー(海薔花) 名。食品の名、鹽漬又は蒸乾にせる  
薔(薔) の卵、小粒多く集合して、薔の花に似る。明石の名産。  
かいつー(會讀) 名。數人集まり、書を讀みて互に  
なふもの。——善長をそこなふもの。

かいつー(燈籠) 名。古昔、藥中にて、夜の御殿などに點  
ぜし燈油の燈火、夜のおとの一。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。  
かいつー(搔撫) 名。搔(搔) 他、さ四) 燈の心をかきあげて  
よくとるやうに。かきまつ。かかぐ。

かいつーからん

かいつー(介入權) 名。支配人取締役代  
理商無限責任社員等、自己のためにする商行為を法律上禁ぜ  
られたるものが、其禁を犯して商行為をした場合、これを  
主人本人乃至會社のためにしたものと見做し、主人・本  
人乃至會社が其商行為の成果を自己に轉移せしむる權利。

かいつー(解任) 名。任務を解きて退け又は轉せしむること。  
かいつー(解任狀) 名。[法國] 國際平和の際、本  
國政府が其使節を駐劄國より召還する時、其旨をあた  
め、其使節を経て駐劄國の君主又は大統領に奉呈する書狀。  
——とうかん(解任狀答翰) 名。[法] 外國政府より  
り受けたる解任狀に對する答翰。——胎。

かいつー(懷妊) 名。はらわた。みもち。にんまん。(懷  
かいつー(改練) 名。あらためたる年々んねん。  
かいつー(概念) 名。Concept 名。[哲] 抽象作用によりて  
生ずる一般の觀念、心理的には、特殊の具象に共通せる屬性  
を概括して得たるものにして、例へば、蹄々の馬の表象を概  
括し、漠然と其共通せる點を指して、ここに馬といふ概念を  
得、論理的には、若干物象に關する觀念の屬性を明確にし、こ  
れに論理的形式を具せしめたるもの、例へば種々の花に關す  
る觀念を得て、これが通有性を定め、ここに一般に通ずる花  
といふ概念を得。——ろん(概念論) Conceptualist  
名。[哲] 色光音といふが如き一般的性質に關する概念  
も、吾人の心中に存在するといふ認識上の一説。

かいつー(皆納) 名。年貢などを残りなく上納すること。  
かいつー(戒師) 名。佛古昔、出家する人に戒をさづけ  
かいつー(海波) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。[動] 鰐類の小魚、體長五六寸、體  
は馬首の如く、直立して  
游泳し、柔脆なる尾節を  
以て海藻に纏繞す、雄は腹  
部に一種の皮囊を存し、其中に雌  
の産したる卵を入れて孵化せしむ、我國の近海に産す。たつ

かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信

かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信

かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信

かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信

かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信

かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信

かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信

かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信  
かいつー(海馬) 名。海上にたつ波浪。うみのなみ。「し信

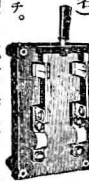


【(イ)ばいか】



かいふーかいほ

より順に読み下すも、末より逆に読み返すも、同じ語になるやうに作りたる歌。――未「**廻文詩**」名 漢詩の一體、初めより讀み下すも、末より逆に讀み返すも、平仄も順も相かなふやうに作りたる詩。――れんが**「廻文連歌**」(名) 連歌の毎句が、順に讀むも逆に讀むも同じ文句なるもの。  
かいへい**「開閉**」(名) ひらくととづると。あけたて。  
かいへい**「開閉器**」(名) (名) 開閉器を開閉する器。  
「電流の強弱又は用處によりて種々構造を異にするスイッチ」



開閉器

かいへい**「開平」**(名) 敵の一方の一、平方根を求むること。  
かいへい**「海軍」**(名) 海軍の下士兵。――たん「**海兵團**」(名) 各軍港に設置せられて其鎮守府に屬し、海軍下士兵の教育訓練及軍港の守衛を司り、補給員を統轄する所。

かいへき**「海壁」**の seawall (名) 海岸を擁護するため、水際に設くる御壁。  
がいへき**「外壁」**(名) 外部の障壁。  
かいへん**「海邊」**(名) うみのほとり。うみべ。はまば。

かいへん**「快舞」**(名) よどみなく巧に舞へる。――ふど。辯舌の巧にさわやかなこと。  
かいほう**「介抱」**(名) たすけいだこと。病者又は負傷者の世話をする。かんびやう。みどり。

かいほう**「解放」**(名) 捕縛又は監禁せられてあるものを、ゆるしてよきになすこと。――一切の束縛を解きて、各自をして自由の身とならしむること。  
かいほう**「開放」**(名) あけはなすこと。――防禦又警戒を解きて、城塞の。――まゆる。――開放市邑」(名) 交通を許すこと。藩路。――まゆる。――開放市邑」(名) 交通を許すこと。藩路。

かいほう**「海堡」**(名) 海上に築造したる堡壘。  
かいほう**「開方」**(名) 海上に築造したる堡壘。  
かいほう**「開方」**(名) 海上に築造したる堡壘。  
かいほう**「開方」**(名) 海上に築造したる堡壘。

かいほう**「海堡」**(名) 海上に築造したる堡壘。  
かいほう**「開方」**(名) 海上に築造したる堡壘。  
かいほう**「開方」**(名) 海上に築造したる堡壘。

かいほう**「海堡」**(名) 海上に築造したる堡壘。  
かいほう**「開方」**(名) 海上に築造したる堡壘。

かいほーかいほ

海に至るまでの間に於て、二百「メートル」以内の深さを有する浅海の傾斜極めて緩慢なる海底。――おとづれ。  
かいほう**「快報」**(名) おもしろき知らせ。こちよきかいほう**「快報」**(名) 會に關する事件の報告。

かいほう**「快方」**(名) 疾病又は創傷のころよきかたになすこと。快氣、病氣一に赴く。――このにおもふこと。  
かいほう**「懷抱」**(名) ぶところにいだくこと。――このにおもふこと。  
かいほう**「潰崩」**(名) つひえくづること。――このにおもふこと。

かいほう**「海防」**(名) 一國の海岸の防禦。うみのよせざ。――かん「**海防艦**」(名) 軍艦の一種、おもに海岸の防禦にあたり、時としては敵地の沿岸攻撃に使用せらるものにして、速力及石炭の積載量は多からず、又、淡水に利用するため、喫水浅く建造せらる。――ひ「**海防費**」(名) 海防の設備に要する費用。

かいほう**「解剖」**(名) 動物の體軀を解きわけて、其骨格、筋肉、臟腑などの委細をえらぶこと、其全身に涉るものと局部に限られたものとあり。ふわけ。――物事の條理を細かに分ちて研究すること。――がく「**解剖學**」(Anatomy) (名) 人體又は生物體を分解して、其各部の構造、位置等を研究する科學。――ざい「**解剖祭**」(名) 醫、施療のため病院に收容せし患者にして、其死後に於て屍體を解剖に附したるもの靈魂を慰むるために行ふ祭祀。――まつ「**解剖室**」(名) 人體の解剖を行ふため、特殊の設備する室。

――まつ「**解剖室**」(名) 人體の解剖を行ふため、特殊の設備する室。  
――ひょうひん「**解剖標品**」(名) 醫、人體の筋肉、臟腑、骨格等の位置、形狀、關係を易易からしむるため、人工によりて製作したる標本。

がいほう**「外貌」**(名) うはべのなり。またほどのかほかち。――うはべのありさま。やうす。

かいほう**「海泡石」**(名) 「磁」(マグネシウム) を含める含水硅酸鹽物、多孔質不透明にして軽く、色種々あり、発塵草の「パイア」などに製す。メシオン。――くす。

かいほう**「振乾」**(他、さび) 濕沼などの水をくみつけ、乾燥すること。かいこん。――くす。

かいほう**「開發」**(名) 新たに地を開き發すること。かいこん。――くす。

かいほーかいめ

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほん**「海盆」**の basin (名) 「地海底のほぼ圓形なるがけ」(名) 外米管理」(名) 法米價調節のため、外國米の輸入、輸入、賣渡等を、主務大臣の管理の下におくこと。  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」

かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」  
かいほり**「掘堀」**(名) 堀などの水をかいはすこと。「低所」



せらる。——まつ【海綿質】(名) 生骨の内部に於ける海綿状をなす組織。——まよりきん【海綿狀金】(名) 【化】齒科醫の齒牙充填に用ふる小塊、帯赤黄色の海綿状のものにして、金を化学的に沈澱せしめて製す。——どろぶつ【海綿動物】(名) 【動】単體又は群體をなして海に産する下等動物、種々の形狀あり、多くは簡単な鬚状にして、其一端は他物に固着し、他端に大孔あり、大孔の直下は内腔にして、これより射出する無數の小板



【動物縮綿海】

枝状細管ありて體管を貫き無數の小孔により外へ開く此細管は纖毛室あり其作用によりて水は小孔より内へ入り大孔より外へ出で、ために有機物を伴ひ來りて營養分となす體管は厚くして角質石灰質若しくは石炭質の骨格を有す、縞而出芽又は分裂によりて増大す  
がいめん【外面】(名) そとがらうは。そともぐわいへう。——びよま【外面描寫】(名) 外面狀態がいもく【皆目】(副) のこらず。全く。【の描寫。】

かいらん【解離】(名) 船舶のともづなを解きて出帆すること。  
かいらん【海門】(名) 門をひらくこと。  
かいらん【開門】(名) 門をひらくこと。  
かいらん【権門】(名) 大臣の宅。轉じて、大臣の位。——きよくる【権門棘路】(名) 三公九卿のすまひ。轉じて、三公九卿の地位。  
かいやく【解約】(名) 【法】契約を解除すること。【動】取引所にて、取組むたる賣買に就き、其受渡期日前に於て、當事者雙方合意の上、届出でて、これを解除すること。【おしやる。】

かいやく【快癒】(名) 病氣のゆるむ。たほると。ほんぶかいやく【快癒】(名) をしへたとすこと。【く。】  
かいらん【回遊】(名) 方々をめぐりあそぶこと。——  
かいらん【回遊列車】(名) 方々を見物する客をのせて往復するため、特に仕立つる鐵道列車。  
かいらん【外遊】(名) 外國に遊ぶこと。  
かいらん【外遊星】(名) Exoplanet (名) 【天】地球の軌道より大なる軌道の遊星、即ち木星・土星・天王星・海王星をいふ。内遊星の對。  
かいりゆう【海洋】(名) おほうみ。うなばら。なだ。——きんぎょう【海洋氣候】(名) Marine climate (名) 【地】氣候の變差極めて小なる海洋又は島嶼の氣候、海洋は陸地の如く、太陽の熱を受くるを感激ならず、これを放散することも亦遅緩なるを以て、氣溫の變差は自ら小なるものとす。——きんぎょう【海洋氣象】(名) 【法】氣象學の一、海洋の氣象及地球の磁氣乃至海流・潮汐等の觀測及調査を掌る所。——きんぎょう【海洋自由】(名) 【法】領海以外の海洋は、其性質上何れの國にも屬せざるが故に、平時と戰時とを問はず、世界萬國の船舶が自由に航行し得べしとす。——へいさ【海洋閉鎖】(名) 【法】海洋を陸地と均しく國家主權の下に置き、必要に應じてこれを閉鎖し得べしとす。

かいらん【海容】(名) 海の物を容るゝが如き、寛大の心を以て罪を宥恕すること。【御】下されたく候。  
かいらん【解體】(名) 【病】ただれくづるゝ腫物。  
かいらん【概要】(名) あらまし。おおよそ。  
かいらん【外洋】(名) 遠方に展開せる大洋。そとうみ。がいようやく【外洋藥】(名) 營業又は藥學等の如く、皮膚に貼(り)又はぬるに用ふる藥劑。  
かいらん【傀儡】(名) くくつ。でく。——志【傀儡師】(名) 【人】んぎやうつかひ。くくつまはし。【人】をあやつりて種々の行動をなさせしむる人。さくま。

かいらん【外來】(名) 【外】外より來る。【外】外より來る。【外】外來患者(名) 病院にて、入院患者以外より來りて診察を乞ふ患者。——かいらん【外來觀念】(名) Acquired idea (名) 【哲】經驗の結果として得たる觀念。——【外來語】(名) 外國語より傳來して國語化したる語。——志【外來思想】(名) 外國より傳來せる思想。  
かいらん【海華皮】(名) 麂鹿の皮、刀のつか又はさやを包むに用ふ。又、其皮を用ひてつくりたる刀。  
かいらん【開落】(名) 花のひらくとおつること。  
かいらん【筒樂】(名) 多くの人と共に樂しむこと。  
かいらん【快樂】(名) 【心】こちよたのしきと。心はれはれておもしろきこと。【心】精力の増進又は要求の満足によりて生ずる感情。——【快樂說】(名) Hedonism (名) 【倫】人生の目的は幸福の感情即ち快樂にありとす、快樂を増進し苦痛を減退する傾向の多少によりて、道德上の價値を定むる一派の學說、分ちて個人的快樂說と公衆的快樂說と進化的快樂說との三とす、個人的快樂說は自己の快樂を増進することを主とし、公衆的快樂說は公衆の快樂を増進することを主とし、進化的快樂說は進化的理法を以て道德を説明せんとするものにして、吾人の進化する行爲は快樂を生ずるものにして善、これに反する行爲は苦痛を生ずるものにして惡なりとす。【ふまで。】

かいらん【遐覽】(名) 船船のともづなを解きて出帆すること。  
かいらん【遐傳】(名) 【方】方々をめぐり見物すること。  
かいらん【履傳】(名) 履多の人の履し傳へ見ること。  
かいらん【海里】(名) 海の上の距離を測る單位、アメリカ合衆國にては六〇八六・フイット、イギリス國にては六〇八〇・フイットをいふ我國の約十七町、連。——【距離】(名) 解けはなること。又、解きはなすこと。  
かいらん【分離】(名) 【化】物體が狀況の變化によりて分解し、其狀況の復舊するとき、再び化合して舊物質を生成する現象。  
かいらん【海狸】(名) 【動】動物の一種、ヨーロッパ、北アメリカ等の河湖の邊に棲息す、體長二尺餘、尾は扁平にして錢を帶ぶ、後趾に蹠袋あり、足と尾とを以てよく泳ぐ、又よく大木を

【狸海】



かいらん—かいらん

かいらん—かいらん

かいらん—かいらん





カウリーまつ「松」Kaali, pine」(名)「植」松柏科の喬木、「オーランド」地方の特産、幹は偉大にして表面滑澤、頂上に密生の葉を冠す、材は白色にして木理堅密、船材として最も有用なり。

カウンスル「Council」(名)「會議」評議會。カウント「County」(名)「計算」(2)領地、勘定(3)計算係。④學園にして、敵の突き来たるを、身をかはして避くると同時に、敵に衝撃を加ふると。

カウント「County」(名)「計算」勘定。②伯爵。かえ「代換」(名)「か」を見よ。

かえ「代換」(名)「か」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。

かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。かえり「返反」(名)「かへり」を見よ。



【鼓太燭火】

かえん「賀宴」(名) いはひのさかもり。「」に用ふるもの。かえん「臥烟」(名)「火消人足」とひのもの。③昔時、江戸城の目付の警備に附屬せし賤役者。④無頼にして品性卑しき人。なげむの無頼漢。——はた「臥烟肌」(名)無頼漢らしき氣風。

かえん「背」(名)「がへんず」を見よ。かお「額」(名)「かほ」を見よ。

かお「歌謡」(名)「聲」をよへてうたふと。かお「花押」(名)「かきはん」。かお「花王」(名)「植」牡丹の異稱。かお「假屋」(名)「かりや」をいふ。

かお「家屋」(名)「住居」を目的として建設したる構造物。いへ。——せい「家屋税」(名)「経家屋」に生ずる税金に就き、家屋の所有者に対して賦課する租税、現制にて「は地方税に屬す。

かお「高梁」(名)「かうらいと」(高嶺土)。かお「訛音」(名)「なまり」たる音聲。「はは。わはは。かか「阿阿」(名)「副」大聲立ててわらふさま。からから。かか「箇箇」(名)「副」ひとつひとつ。おのおの。こ。かか「家家」(名)「副」おのおの。へいへい。へいと。かか「母の俗稱」(副)「母」。③妻の賤稱。(家稱)。

かか「假果」(名)「植」花托若しくは花萼等の部分が、子房と共に肥大して形成したる果實、梨林檎、無花果等の類。かか「華夏」(名)「文華」の開けたる中國の戰支那人の自國の諱稱。④轉じて、文華の開けたる地方。

かか「畫架」(名)「まきき」畫架。かか「峽」(名)「副」山のかどとしてそびえたるさま。

かか「左衛門」(名)「氣あはして男まさり」にかか。てんか「曉天下」(名)「妻が夫よりも多く權力を持ち、一家を自由に支配する」と。

かか「河海」(名)「河とうみ」と。——は細流を擇ばず(句)「乘」の字斯の語、史記に出づ。大事業を成すもの度量廣くして、よく人を容るるに譬へいふ。

かか「歌會」(名)「うたの會」うたわい。かか「加害」(名)「他人に傷害又は損害をくはふ」と。——こう「加害行為」(名)「法」他人に傷害又は損害をなしたる行為。——まや「加害者」(名)「法」加害行為をなしたるもの。

かか「花蓋」(名)「植」花の萼及總苞の總稱。かか「花街」(名)「いろまち」いろざと。かか「禍害」(名)「わざはひ」さいなん。かか「瓦解」(名)「屋根を葺きたる瓦の一枚づつ解け分る」如く、物事の離れ散ること。②「徳川」幕府頽壞して、旗本、家人の離散した。——後。かか「こうぎ」(課外講義)「名」規定の課程以外かか「みころ」(花外蜜槽)「名」「植」花の外部にある蜜槽、蜜の蜜槽にある蜜槽の類これなり。

かか「羅薩」(名)「植」羅薩科の多年生草本、山野に自生す。春末に宿根より芽を出す。莖は莖生にして他物に纏繞す。葉は厚くして深緑色を呈し、楕圓狀にして尖頭、長き葉柄を有し對生す。根、莖、葉共に切れは一種の白汁を出す。夏の頃、花を抽き、二、三寸、其頂に紫色色五葉の小花を開く。莖葉を結ぶ、成熟せる種子は長白毛を有し、恰も綿の如し、莖は纖維強くして物を束ぬる用に供せられ、葉は煙で食ふべからず。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「めぞめ」(加賀梅染)「名」友禪染の一種、花鳥山水、寶畫などの類を染め出し、京都、友禪と是其理を異にする。「よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。

かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。かか「抱」(名)「かかふ」を見よ。



【オカカ】



かかくーかかし

頸骨にて形成せる關節、咀嚼運動を司る。

かかぐこつ(下顎骨)(名)「生」顔面の下部を形成せる馬蹄鐵の骨。またそのほ。

かかてつき(可覺的のひびき)(名)「哲」吾人の感官にあらすて、箇々の事實に就き、概括し系統を立てて論述を明する。一かんりほう(科學的管理法)(名)「社」米人キンスロレーナによりて明瞭せられたる工場管理法、産業合理化策の一手段として利用せられたるの

にして、經營法に自然科學・心理學・生理學等を應用し、人力よりも機械によりて労働者を支配し、以て能率の増進を計らんとするもの。社「マルクス」及「エンゲルス」によりて體系づけられたる社會主義、空想的社會主義に對し「ヘーゲル」の辯證法を以て階級闘争を歴史的に證明し理論づけたるもの。一に歴史社會主義又はマルクス社會主義とも稱す。

かかひよらうき(價格表記)(名)内容物の價格を表にあらはし記す。一ゆうびんぶつ(郵便物)(名)「法」郵便物特殊取扱の一、通貨・金銀寶石・珠玉其他有價の物件を、其通常郵便たると小包郵便たるとを問はず、規定の特取取扱を納めて其價格を表記したるもの、若し其郵便物の失火又は毀損したると、當該官廳に對し、其價格に應じて損害賠償を求むることを待。一と。

かかぐる(目ら四)たどり近づく。すが。たよる。たかかげのはち(柳筒)(名)古昔、髪道具を容るる筒。

かかか(掲)(他)「かか」の訛。かかこて(加賀籠手)(名)籠手の一、加賀國より製出し、金銀糸眼を施して、鏡の間に花紋などを繋ぎなどし、巧に製作せられたるもの。

かかさま(母様)(名)「は」の敬稱。かかさん(母様)(名)「は」の敬稱。

かかし(案山子)(名)「竹」鳥などにて人の形をつくり、弓矢など



【一しかか】

かかしーかかふ

を持たせて田畠の間に立て、鳥獸の寄るを威し防ぐるもの。そほど。やまたのそまづ。草人。見かかげばりもともらしくして無能なる人物。

かかしら(蚊頭)(名)かばり。

かかすり(蚊飛白)(名)蚊の飛ぶが如きさまの細かき飛かち(酸漿)(名)「植」ほろ。一適す。

かかち(加賀茶)(名)加賀國より産出する茶、貿易品にかかつ(瓜葛)(名)「うり、くすの如くまとはひづく(幾)血縁のつづき。えんる。の親。」

かかづらひ(保關)(名)かかづらぶよ。かかづら(保)(名)かかづらぶよ。かかはら(保)(名)かかづらぶよ。かかづら(保)(名)かかづらぶよ。かかづら(保)(名)かかづらぶよ。

かかと(踵)(名)「生」足の裏の後部。くびす。きびす。かかと(踵)(名)「生」足の裏の後部。くびす。きびす。かかと(踵)(名)「生」足の裏の後部。くびす。きびす。

かかと(踵)(名)「生」足の裏の後部。くびす。きびす。かかと(踵)(名)「生」足の裏の後部。くびす。きびす。かかと(踵)(名)「生」足の裏の後部。くびす。きびす。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かか(な)く(自)か(四)聲をいからしてはげしく鳴く。つづくば(聲)。

かかかかかか

し一種の俗句。かかかかかか。かかかか(金銀蓮花)(名)「植」縹圓(科)の多年生水草、池澤に生ず、葉は細長くして水面に浮ひ、節部に根を生ず、葉も水上に浮ひ細かく心臓形をなし、直径三四寸、夏日多数の花を醸生す、花は白色にして長梗を具す。

かかかか(他、四)かうぶる。かか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。

かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。かかか(他)「かか」の訛。



かかりかかる

たよりとする根性。依頼心。——だいこ(掛太鼓)(名)
進聲の合間に打ち鳴らす太鼓。——ちやうび(掛長)
(名) 主任の二人以上ある中にて、其うちたるもの。
——どき(掛間)(名) 進聲の勢を添ふるために揚ぐる
間の聲。——どころ(掛所)(名) ●かかりぐち。●たよ
りどころ。——のつぼ(掛坪)(名) 蹴鞠の場所。——
ば(掛端)(名) 女の髪を垂れかかたるさま。——びと
(掛人)(名) かかりうと。——ぶね(掛船)(名) ぶな
がかかりしてある船。——まけ(掛負)(名) 利益より費用
の多きと。——むぢや(掛武者)(名) かけひきなく敵に
突敵する武者。——むすび(掛結・係結)(名) 「文法か
かりとむすびと。——もの(掛物)(名) ●服のなかに出
づるくむすび。(器) ●かもの。賦物。——ゆ(掛湯)(名)
入浴し出づるとき、身體をそそぎ清むる湯をいふ。
かかり(句)(名) つりばりの曲りたる末の部分、即ち魚の口
中につきとほるべきところ。(釣鉤)
かかり(名) (斯有)(自、ら變)「かくありの約。
かかり(名) (藤)(名) かがりびに用ふる松の材。
かかり(名) (箒)(名) ●かがりびを焚く鐵箱。●かがりび。●か
がり火をたきて水に浮よるいかだ。——いかに(箒筏)(名)
箒(名) 庭の中程に設けたる燈籠。——とうろう(箒燈
籠)(名) 庭の中程に設けたる燈籠。——び(箒火)(名)
かがりに焚く火、夜のけいご又はすなりなどにも用ふ。
——ぶね(箒船)(名) かがりを焚きてすなりとする船。
——まつ(箒松)(名) かがりびに用ふる松の材。
かがり(大鑑)(名) 最も大形なるのこぎり。
かがり(大鑑)(名) 鎌倉時代に、京都市中の警固の武士
の屯(せ)し所、夜間にかがりをたきしよりいふ。——あゆ
ごに(箒屋守護人)(名) 鎌倉時代の職名、京都の箒屋
一箇所を預り、家人を率いて受持區域を警固せしもの。か
がりやぶち。——ぶち(箒屋武士)(名) 箒屋守護人。
かか(名) (掛懸)(自、ら四) ●物に附著して垂下す。
たる。さがる。ぶらさがる。●売(る)もたる。「椅子に」。
●たよる。たむ。●過ぐ。至る。●通り。●仕向けらる。

かかん

なざる、人にかかりて死ぬ。●世話になる。厄介になる。
●かか(る) あづかる。(係) ●心にとまら。忘れられず。
●かか(る) かくる。かぶさる。●顔は雲がかかり見え
ず。●顔る。及ぶ。●とばしが(一) ●あふ。●あふ。●病に
―(一) (罷) ●進む。●攻む。●敵に―。●假借す。いかりを
おろす。●着手す。はじむ。●讀み―。●費ゆ。いる。金が
―。●手(一) ●鳥(句) 寄りてふながかりする鳥。●縛じ
て、とりつきばあ―も引くも(句) 進むも退くも。
かか(る) (藤)(他、ら四) うちちがへに縁をかけて編み
又は絡む。「種を―」。●生ず。
かか(る) (汗)(自、ら四) 手足の皮膚が乾燥。あかぎ
かか(る) (接) かやうにはあれど、かくあれど。
かか(る) (下、賦)(名) 下を見おろす。
かかん(假感) (Ed. feeling)(名) (哲) 美の所立の感
情、實在體より遊離したる假相に關して生ずるもの、實感の
如く好悪愛憎を伴はずして、且把持力薄し、假感を感じる能
力なきものには、美は存在せず。
かかん(可汗)(名) 土耳其族の君主の尊號。
かかん(河漢)(名) ●あまのがは。●測り知るべからざる
也。●の言(句) (註子)に「善善其言、望河漢而無極
也」とあり、意義の副詞に類かすこと。
かかん(加冠)(名) ●元服する。●元服のとき、元
服する人に冠を著する人。
かかん(下、游、下洗)(名) 月の二十日以後。
かかん(華翰)(名) 他人の手紙の敬稱。
かかん(花冠)(名) 植花の保護器官なる花被の内
輪、萼に比すれば柔かして薄く、花の最も美麗なる部分。
かかん(河岸) かののし。●吾人の感性によりて直接
に認識することを稱する物質世界。
かかん(花顔)(名) 花の如くうつくしきかんばせ。

かかんかき

がかん(せき) (一) 鴨管石(名) 圓形にして中に方孔ある錢、陶
管状をなせるもの。
がかん(せん) (驚眼鏡)(名) 圓形にして中に方孔ある錢、陶
鳥の目の丸くして、圓四角なる(魚目)。
かかん(火流布)(名) ●衣類の南荒外の火山に棲
める鼠の毛を取りて織りたりといふ布、穴に入れて焼けず却
て白くなるといふ。●いわたを縁につむぎて織りたる布。
がかん(動) (か) のうはを説く。「うにたに布。
かかん(柘柿)(名) ●植樹科の落葉木、幹は高さ二三丈
に達す、葉は大形にして互生し、橢圓形又は卵形、上面滑澤に
して全縁、通常毛を帯びたる長さ三分許の葉柄を有す、五月
頃、淡黄色の小花開く、雄花と雌花と異株又は同株、果實は大
形の漿果にして、生食し又は乾燥しと、滋味多し、果實は「
てんぷ」を採取す、材は器用に供せらる、古來廣く栽培せられ、
「てんぷがき」、「ふらうがき」、「ぎをんがき」、「たりがき」、
「ぶがき」等品種多し。「かきいろ」の直産。
かき(垣、牆)(名) ひとかまへの土地の圍ひ又は是きりに設
けたもの、多くは竹又は木などにつくる、建仁寺垣、綱代
垣など種類多し。―堅くして犬いらず(句) 家庭と
とのひて正しければ、これを亂る人の外より入り來らざるに
いふ。(耳)(句) (管子)に「聽有耳伏在側」とあり、
内密にする話のともむけ他に漏れぬ具、介致は不整にして長
卵圓形をなし葉状を呈す、多くは左
殼を以て殼中の岩石に附著す、中
には許多の塊堆して山の如き形をな
し、其大形は高さ一二丈に至る
ものあり、我國沿海淡水の注流す
る所には多少産せざるはなく、殊
に砂泥土の海底に多し、産期は六
七月頃にして、其生長は二年間最も強盛なり、此時期に適
當なる方法を施せば、發育頗る宜し、肉美味にして食膳に供
せらる、廣島地方の産特に有名なり。
かき(椋期)(名) 女の下めに行く年頃、ふらうりとき。



【鱧社】



かき〔夏季〕夏期(名) 夏の時期。一「休業」。一「がっこう」。

かき〔夏期〕夏期学校〔Summer school〕(名) 夏期の休暇を利用して設立したる学校。一「こうろく」。

かき〔夏期〕夏期講習會(名) 夏期休暇を利用して開設する講習會。一「たいがく」。

かき〔夏期〕夏期大學(名) 夏期の休暇を利用して、勝景の地をトして臨時に開設する特殊の専門學術。

かき〔夏期〕花名(名) 花のさくく時期はなどなき。「一」の學校。

かき〔夏期〕花卉(名) 花をさくくする器。はないけ。

かき〔夏期〕花器(名) 花をさくくする器。はないけ。

かき〔夏期〕火器(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かき〔夏期〕火氣(名) 火の氣、火の勢。

かきあげ〔書上〕(名) 書きき奉ると。又、其書きき奉る文書。書きき奉る。

かきあげ〔振揚〕(名) 書きき奉ると。又、其書きき奉る文書。書きき奉る。

かきあげ〔天賦〕(名) 生玉子と飽飯の粉とを糞さし合はせ、これをころもとしてあぶりに揚げるもの。一「まろ」。

かきあげ〔振揚城〕(名) 手軽く築き上げたる城壁。一「のき」。

かきあげ〔振揚匣〕(名) 規模の小かかげの箱。一「やまき」。

かきあげ〔振揚屋敷〕(名) 規模の小かかげの箱。一「やまき」。

かきあげ〔振揚〕(名) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあげ〔書上〕(他) 「かきあげ」の語。

かきあらはす〔アラ〕(書見)(他、さ四) 書きき奉るをあらはし出す。かきあらはす。

かきあらはす〔アラ〕(書者)(他、さ四) 書きき奉るにあらはす。かきあらはす。

かきいた〔振板〕(名) 昔時、元服の儀式に用ひし柳の木。其上に髪の前をのせて切りしもの。

かきいだ〔振抱〕(他、か四) 身にすりよせていだす。

かきいだ〔書出〕(他、た下二) 書きき奉る。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきいだ〔書入〕(他、ら下二) 書きき加ふ。記入す。

かきーかきあ

かきあーかきあ

かきあーかきお





かきとーかきな

れば不淨處に居り飲食を得ず、常に鞭打を受けて苦惱無量。

かきとど「牡蠣床」(名) 牡蠣を養殖する場所。

かきとどむ「書留」(他、ま下二) かきとむ。

かきとどめる「書留」(他) 「かきとむ」の訛。

かきとほし「垣通・連鏡草」(名) 「種」厚形科の多年生草本、原野に自生す、莖は莖生にして方形、葉に匍匐す、葉は對生にして心臓形をなし、鈍鋸齒を有し、葉柄を具す、春季、葉腋に淡紫色の唇形花を開く。

かきとむ「書留」(他、ま下二) 記し置く。

かきとめ「書留」(名) 「あるして後にのこしおく書きもの」。

かきとめい「ゆうびん」(書留郵便) (名) 「法」郵便物特殊取扱の一、郵便物の送達を確かにするたため手續にして、一定の手續料を拂へば、其取扱をなしたる郵便局は、備附の帳簿に其郵便物の種類番號及發送人と受取人との住所、姓名をかきとめおき、紛失若しくは誤送ありたるとき、其とりあらべをなす責任あるもの。一「りよろ」(書留料) (名) 「法」書留郵便の手續料。

かきともし「搔燈」(名) 「かきとむ」の訛。

かきとり「書取」(名) 「書きうつすと。又、其書きもの。」

かきとる「書取」(他、ら四) 言語又は文字を書きてかきながし「書流」(名) 書きながすと。さらさらながしたるもの。「し」書く。又、思ふままにさらさらとゆるめず。

かきながす「書流」(他、さ四) 書きあます。

かきながす「搔流」(他、さ四) ながす。

かきなす「書成」(他、さ四) 書きあます。「ね」かきなす「搔鳴」(他、さ四) かきなます。「琴の」かきなす「搔撫」(他、た下二) なづ。さする。

かきなす「搔撫」(名) 「かきなづと。かいなで」。

かきなは「鈎繩」(名) 天端に鈎を附けたる繩、其鈎を物にかけかけてこれを引き寄せ、又は高きにのぼるたよりとするもの。「したるもの」。

かきなほし「書直」(名) かきなほすと。又、其かきなほ

かきなーかきの

かきなほす「書直」(他、さ四) 改めて書く。「さきかふ」。

かきならす「搔均」(他、さ四) かきてたひらかに

かきならす「搔鳴」(他、さ四) 琴などを琴爪にて彈

かきなり「鈎形」(名) 鈎の如くまがりたる。

かきなれる「書馴」(他) 「かきなる」の訛。

かきにくげ「書難氣」(名) かきにくきさま。

かきにくく「書難」(名) かきにくき。又、其度合。

かきぬき「書抜」(名) 「書きぬくと。又、書きぬきたる記録ぬきがき。ばつる。(抄書、拔莖) 演劇にて、役もの

かきぬく「書抜」(他、か四) 文章の一部又は全體の要領を寫しとる。ばつる。ぬきがき。

かきね「垣根」(名) 垣のものと。「かき垣、牆。」

かきね「垣根隠」(名) かきねにかくると。又、かきねのかげ。「根々」垣根草」(名) 垣根に生ずる草。一「が

かきね「垣根越」(名) かきこし。一「つづき」垣根越」(名) かきねのつづきたと。かきねならび。一「ならび

かきのき「柿樹」(名) 一種かき。「のく」。

かきのく「柿樹」(名) 一種かき。「のく」。

かきのける「搔退」(他) 「かきのく」の訛。

かきのこす「書殘」(他、さ四) 「書きて後にこのこす。書くべき事をぬかす。

かきのころも「柿衣」(名) 柿色の衣、山伏などの着用するもの。「にあや名笠いものきて」。

かきのし「書炭斗」(名) 贈物の上包に、炭斗のかはりに、「の」と記すもの。「書載」(他、さ下二) かきあます。記載かきのす「搔載」(他、さ下二) のす。「す」。

かきのせる「書載」(他) 「かきのす」の訛。

かきのーかきひ

かきのぞき「垣覗」(名) 垣の間よりのぞき見ると。かきのして「鈎手」(名) 「かきの形にまがりたるもの。すみすみの生線あるもの」。

かきのほくき「栲葉草 巴戟天」(名) 「種」遠志科の多年生草本、山中陰地に自生す、莖の高さ一尺餘、葉は有柄にして卵状披針形、平滑全縁にして楕圓の葉に懸す、故に栲葉草の名あり、六月頃、莖頂より花穂を抽出し、總狀花序をなし、深黄色の花を噴き、蒴果を結ぶ、地下莖は藥用に供せら

かきのぼる「搔登」(自、ら四) よちのぼる。「る」。

かきのめし「名」かきのめすと。なぐりかきに書く。

かきのめす「搔」(他、さ四) なぐりかきに書く。

かきのもの「栲木 栲」(名) 後鳥羽院の時代に、遊歌に巧なりしもの稱。栗木衆の對。

かきは「堅整」(名) 堅固なる發、永久にと説ふ意にいふ。「ときはに」。

かきは「搔櫛」(他、か四) はく。

かきは「鍵箱」(名) 多くのかぎをさめおく箱。

かきは「搔挾」(他、ま四) 小脇に挟む。

かきは「書初」(他、ま下二) かくととりかかるとかきかき。

かきは「書始」(名) 「かきはじむ」と。文書の冒頭。

かきは「書始」(他) 「かきはじむ」の訛。「たる鼻」。

かきは「鈎鼻」(名) 端の曲がりて鈎の嘴の如き状をなし

かきは「搔」(他、た下二) はなちやる。はなつ

かきは「搔」(他、ま下二) はやむ。

かきは「搔」(名) 表だちた (猿類朝) (源義經)

かきは「搔」(名) 酒にひたしたる干柿。

かきは「搔」(名) 酒にひたしたる干柿。







を「腕」。(腕)。「手にておしやる。」「水をかきて拭く。」「渾ず。ひく。」「琴をかきながら。」「ぬぐひ去る。はらひ去る。」「涙をかき拂ふ。」「かきまき。」「劈掛す。」「田を」。②かかうむる。受く。「かぢを」。③食物を口中にかきこむ。④かかひく。「書」(他、か四)。「文字をえるす。」「圖畫をえながく。」「文に作る。」「文書に送ぶ」。

かく(か)け(け)。「昇」(他、か四)。「二人以上の肩によりて物を支へる。」「二人にかへてかへもつ。」「両手をかけてかかへん。」「(江)かく(か)け(け)。「樵」(他、か四)。「かみつくる。かまふ。」「果を」。②かく(か)け(け)。「整」(他、か四)。「かみつとむ。かかつなむ。」「かく(か)け(け)。「欠」(他、か四)。「すくなくす。ふそくせさす。へ間をつひやす。」「眼を」。③勤務をおこたる。」「勤めなくなる。」「か(か)け(け)。「欠」(自、か下二)。「不足となる。すくなくなる。へる。」「損じこはる。」「ぬくもる。」「時問つひゆめ。」「おろそかになる。」「満月後月影漸次小さくなる。」「虧」。

かく(か)け(け)。「掛懸」(他、か下二)。「一端を物に附著して下(下)へさぐ。」「これとこれとにわたす。」「架」。③よせもたす。よせかく。④至らず。渡ららず。」「行末かけて。」「よそそきかく。ふりかく。はなつ。」「水を」。⑤火を」。⑥あぐ。かか。⑦額を」。⑧かけ事に用ふ。⑨「時間をかけて。」「祈願をしむ。」「情を」。⑩「お費やす。用ふ。」「時間をかけて。」「祈願をなす。」「敷を乗せ。かけ算をなす。」「仕向をなす。」「迫る。」「攻め」。⑪「試みる。」「試を」。⑫「問ひを」。⑬「始む。書き」。⑭「錠をおろす。」「船を泊む。」「船をかけて風を待つ」。⑮「案ず。思ふ。」「氣に」。⑯「煙」にて聲を試みる。⑰「見す。」「お目に」。⑱「かがる。着る。」「布圍を」。⑲「使用す。もちふ。」「電話を」。⑳「掛線を出す。」「敷く。」「だます」。

かく(か)「斯」(副)。「このほりに。かやうに。」「しつとつ。」「にもいながら(て)。」「如此」。

かく(か)「一」(隔)「接頭」。「去りしと。過去。」「年。」「月」。

かく(か)「家具」(名)。「家の道具。家什」。

かく(か)「下愚」(名)。「甚だおろかなると。最も才智にまきと。」「上かく(か)「かく」

習ととは後ならず。」「は爆發等に用ふる具。かく(か)「火具」(名)。「暗夜を照らし又は物を焼真し若しくか(か)け(け)。「嗅」(他、か四)。「物質が五断體となり、鼻粘頭の嗅神經を刺激して、一種の感覺を起す。」「にはひを聞く。」「にはひを分別す。」「物事をさぐり知る。」「様子」。②かく(か)「額」(名)。「ひたり。」「員數又は分數。たか。」「金」。③文字又は繪畫などを、門又はなげしなどにかかぐるもの。」「掛」。④「額」(名)。「額」がくさう。⑤「樂」(名)。「樂器により樂音を發して、人心をたのしむるもの。おんがく。」「龍樂に。」「舞樂に擬したる舞。」「演劇の陣子。」「大太鼓を用ふるもの」。

かく(か)「學」(名)。「教授をうくること。まなぶこと。がくもん。」「風に志す。」「科」。②「がくかう。」「大」。③「中」。④「がくま」。⑤「碩」。⑥「碩」。

がく(か)「頸膊」(名)。「動物の口器の一部局、即ち食餌を取り又は音聲を發するためのもの、人類のは上顎骨一對と下顎骨一枚とより成る。」「がく」(要)「名」。「植花の保護圈。」「開の一、花冠の外部にあり、通常綠色にして數輪輪生し、其一片を萼片と稱す、植物により其形狀殊々、或はこれを缺くもあり。はながさ。うてな。がく」(要)「臥具」(名)。「これらだけ。ねだうぐ」。

がく(か)「あざむ」(額紫陽花)「名」。「植虎耳草」科の落葉灌木、廣葉に凝縮せらる。莖は莖生して高さ五六尺、葉は對生し、橢圓形又は倒卵形にして平滑、縁邊に鋸齒を具す、七月頃梢上は大形の聚繖花序を生じ、花の中心は紫色にして、周圍は白色、がくさう。



【額紫陽花】

かく(か)「あみ」(角網)「名」。「棘、鮭等の漁獲に用ふる越網。」「かく(か)「あんどん」(角行燈)「名」。「方形なる行燈。」「かく(か)「あんどん」(額行燈)「名」。「店先などにかけおく横に長き行燈。」「かく(か)「い」(隔意)「名」。「こころおかれてうちとけぬと。へだて」。

かく(か)「かく」

かく(か)「い」(各)「位」(名)。「おのおのがた。みなさまがた。」「かく(か)「い」(學)「位」(名)。「文部大臣より學術に長じたる人に、特に授與する博士號。」「大學卒業者の學士號の俗稱。」「かく(か)「い」(額)「板」(名)。「がくめんの板。」「額」のこての飾り。」「かく(か)「い」(畫)「一」(名)。「ととのひてただしきと。又、あきらかにして曲りなきと」。

かく(か)「いん」(各)「員」(名)。「たれもかれも。いづれも。みなみかく(か)「いん」(客)「員」(名)。「お客あつたかひの會員。」「かく(か)「い」(架)「空」(名)。「空中にかけたかひの會員。」「(工)高き柱によりて支へられ、空中に浮ぶが如く見ゆる圓筒。」「根據なきと。」「の論」。

かく(か)「い」(架)「空」(名)。「空中にかけたかひの會員。」「(工)高き柱によりて支へられ、空中に浮ぶが如く見ゆる圓筒。」「根據なきと。」「の論」。

かく(か)「い」(架)「空」(名)。「空中にかけたかひの會員。」「(工)高き柱によりて支へられ、空中に浮ぶが如く見ゆる圓筒。」「根據なきと。」「の論」。

かく(か)「い」(架)「空」(名)。「空中にかけたかひの會員。」「(工)高き柱によりて支へられ、空中に浮ぶが如く見ゆる圓筒。」「根據なきと。」「の論」。

かく(か)「い」(架)「空」(名)。「空中にかけたかひの會員。」「(工)高き柱によりて支へられ、空中に浮ぶが如く見ゆる圓筒。」「根據なきと。」「の論」。

かく(か)「い」(架)「空」(名)。「空中にかけたかひの會員。」「(工)高き柱によりて支へられ、空中に浮ぶが如く見ゆる圓筒。」「根據なきと。」「の論」。



【架空線】

かくかーかくけ

の對象、即ち、客観的に見たる自己。「よろし」、「安し」。  
かくがいワグ[格外](名)副 普通にはづれたるさま。「  
かくがいワグ」郭外(名) くるわざと。  
かくかく[スズ]副 かやうかやう。まかまか。  
かくかく[誇語]名 副 率直にして、君主又は長上に對  
して直言するさま。「の臣」。

かくがた[角形]名 四角なる形。まかくがた。  
かくがん[擱岩]名 船舶が岩にのりかかると。  
かくき[開議]名 [法]内閣の會議即ち國務大臣の會議、  
我國の現制にては、會議の場所は一定せず、陛下の御前又は  
議會の一室若しくは總理大臣の官邸等に於てす、法律案豫  
算案決算案外國條約及重要な國際條件、官制又は法律規  
則の施行に關する勅令、各省間の主管權限の爭議、天皇より  
下付せられ又は帝國議會より送致したる調題豫算外の支出  
動任官及地方長官の任命及進退、其他各省主任の重大なる行  
政事務等は必ず開議を経べきものと定めらる、此會議は多数  
決にあらずして全會一致なるを要し、一人にても不同意者あ  
るときは、成立せざるものとす。

かくぎよ[鰐魚]名 [動]爬蟲類の兩棲動物、體は蜥蜴(カ)  
に似て遙かに長大、硬き甲殻を被る、尾  
は側扁にして水中進行の用をなす、鋭  
齒ありて頸骨に嵌入す、四肢は短けれ  
と趾間に蹼ありて游泳に適す、概ね熱  
帯地方の大河、沼澤に棲息し、長さ丈餘  
に達するものあり、性兇暴にして、往々  
人畜を襲ふ。わに。(野)



[よきが]

かくきよう[學業]名 學びのわざ。學問。  
かくきよ[角距離] Angular distance(名) [理]  
點兩者より二物體に至る二直線のなす角度。  
かくく(額銀)名 徳川時代の銀貨幣の一、形額面に似  
たればいふ。かかん。一銀。

かくけい[學藝]名 學問と技藝と。——かんワグ[學  
藝官]名 [法]科學博物館の職員、館長の命を受け、社會  
教育上必要な物品の蒐集陳列及其研究を掌るもの。

かくけーかくき

かくけき[隔隙]名 へだたり。あひだ。——はん[隔  
隙犯]名 [法]かんげきはん。  
かくげき[樂劇]名 オペラ。  
かくげつ[客月]名 あとげつ(去月)。  
かくげつ[隔月]名 ひとつきおき。  
かくげん[格言]名 格言となすべき詞。訓誡となすべき  
言。古人の「金言」。

かくご[客語]名 [論]判斷の敘述的部分を表はしたる  
語。例へば「雲は烏なり」といふ命題にて、烏は客語なるが如  
し。主語の對。  
かくご[覺悟]名 [道]道理をさとると。さとり。②決心す  
ると。あきらめ。③心に待ちまうと。こころがまへ。——  
の前(句) かねて覺悟してあると。

かくごん[恪勤]名 おこたらず勤むと。  
かくごん[擱坐]名 船舶の坐礁。  
かくさい[客歲]名 きねん。昨年。  
かくさい[隔歲]名 一年おき。間歲。  
かくさい[學才]名 斷面の短形をなす木材。  
かくさい[學材]名 學問の才能。——あり。  
かくさく[角櫛]名 角材を用いたる櫛。  
かくさく[客作]名 やはれて勞作すると。やはれ。  
かくさく[畫策]名 はかりごとを立つと。  
かくさく[角砂糖]名 立方形に固めたる白色塊  
の砂糖。——べしや。

かくさふ[様]名 [隱]他、は四「かくす」の延。雲の  
かくさま[斯様]副 かくの如きありさま。かやう。  
かくさん[擴散]名 ひろがりちると。Diffu-  
sion [理]一の被體に他の被體を注ぎ又は一の氣體に他の  
氣體を注ぐとき、其二つの被體又は氣體が、漸次相混する  
現象、例へば、水に「アルコール」を注ぐに、暫時にして均等に  
混和し、又、水蒸氣を充てる瓶口を倒し、酸蒸氣を充せ  
る瓶口を其下方に置くに、暫時にして上下二瓶の蒸氣は、均

等に混和するが如し。  
かくし[隠]名 かくす。①著物に縫ひつけたる袋、中  
に細かく持物などを入るもの。ポケット。衣籠。——  
えん[隠繪]名 繪畫の内に、更に他の繪畫を目立たせる  
やう描き込んだもの。——きまよう[隠起請]名 頭  
部に見えざるやうに打たる釘。——くひ[隠喰]名 頭  
部に隠して物をくらふと。②他に隠して情夫をもつと。  
——げい[隠藝]名 人に知らせず覺え得たる遊藝。  
——げん[隠子]名 世間に隠する私生兒。——ご[隠  
事]名 人に知らせずになすまわざ。——ご[隠語]  
名 人に知らせず、味方のものにのみ知らすための符號  
の言語(秘密語)。——あつけ[隠仕附]名 表面に目  
立たぬやうになす衣服などのまつけ。——せい[隠勢]  
名 ふせげ。ふくへい。——た[隠田]名 官府に隠  
して租税をぬけひそかに耕作せる田地。おん。ん。  
——だい[隠題]名 和歌の一體、題の名を歌の中に隠し  
てよみこめるもの。——だて[隠立]名 他人に對して、事  
を知らしめざるやうにつつまかくすと。つみかく。——  
づま[隠夫・密夫]名 ままをとこ。ま。ま。——づま  
妻・密妻]名 かかしめ。かこひもの。——どろ[隠  
所]名 かくす場所。——なき[隠泣]名 まのびな  
き。——はらう[隠杖]名 女房(名)かくしづま。  
——ぬく[隠抜]名 他、か巴。——こま[隠し]に知  
らせず。かくしとす。——ぬひ[隠縫]名 縫目の  
目立たぬやうにぬふと。——のみ[隠飲]名 人に隠し  
て飲むと。——はい[隠買]名 他人に隠して  
さむぐ女。こく。そうか。淫婦。——ふみ[隠敷]名  
表面にあらはれざるやうにつけたる「ボタン」。——まど  
[隠窓]名 外より見えぬやうにつくれる窓。——め[隠  
女]名 かくしづま(外妾)。——めつけ[隠目附]名

かくしーかくし



去のびて事情を探偵するもの。おんみつ。——もん「隠紋」(名) 衣服の裏に付けて表より見ゆるやうにしたる紋。——らつかん「隠落款」(名) 畫中に人に氣附かざるやう、筆者の名號を著せしもの。——をど「隠男」(名) まよ。(密考)。——をんな「隠女」(名) かくしめ。(密考)。

かく志「密思」(名) たむちのおもひ。  
かく志「客死」(名) たびさきにて死ぬること。  
かく志「各自」(名、代) おのおの。めいめい。

かく志「學士」(名) 學問に従事する人士。學問にて仕官せる人士。①がくちが。理「丁」。——いんじん「學士院」(名) 帝國學士院。②支那舊時、天子の文學の士を召出されて待詔せしめられし所。——ごうり「學士號」(名) 大學本科卒業者の稱號。

かく志「學資」(名) 學問の修業に要する費用。——きん「學資金」(名) 學資に要する金。——ほけん「學資保險」(名) 趣けうりくほけん。

かく志「樂師」(名) 音楽をつかさどる人。がくにん。  
かく志「學事」(名) 學問に関する事柄。  
かく志「格式」(名) 身分其他に關する所定の儀式。(制度)。格式と式と。きやくきやく三代。

かく志「學識」(名) 學問と智見と。學問上の識見又は學問上より得來する識見。  
かく志「角視差」(angular parallax) (名) 理物體の視ゆる方向と眞の方向とのなす角。

かく志「確執」(名) かくたく自説を主張して譲らざること。  
かく志「客室」(名) 客に接する部屋。きやくま。①汽船などにて、客の乘る部屋。

かく志「角質」(名) ケラチン。——かひめん「角質海綿」(名) 動物の角質纖維より成る海綿動物、沐浴用の海綿は、此種に屬す。——そう「角質層」(名) 生皮膚の最外層、細胞は扁平透明にて角質を帯び、層次剝離す。

かく志「隔日」(名) 一日づつへだつること。いちにちにおき。  
かく志「確實」(名) まちがひなきこと。才實のなきこと。危

かくし—かくし

險なきこと。たしかなきこと。  
かく志「客舎」(名) たびのやど。はたごや。  
かく志「客車」(名) 旅客運送用の列車。  
かく志「覺者」(名) 佛「佛」自覺、覺他、覺行圓滿の三徳を具する者。即ち佛陀。

かく志「學者」(名) 學事に通達せる人。學問に長じたるがくちや「學舍」(名) まなびどころ。がくかう。  
かく志「墨鏡」(名) (後漢書馬援傳に出づ) 年老いたれど、壯健にして元氣よきこと。したる老翁。

かく志「各種」(名、副) いろいろ。さまざま。  
かく志「格守」(名) つつしみてまらぶこと。  
かく志「鶴首」(名) 鶴の如く首をのぼす義、首をのぼし、て、物事の到来を待ちわぶること。

かく志「截首」(名) 首を取ること。首を切ること。①免職。解職。  
かく志「擴充」(名) おしひろめてみつるやうにながくちゆう「學修」(名) まなびをさむること。  
かく志「學習」(名) まなびならぶこと。——いん「學習院」(名) 明治天皇の聖旨に基き、華族の子女に華族的教育を施すことを目的として設立せられたる特殊の學校又、華族にあらざるものなりとも、都合によりては入學を許さる、宮内大臣の監督を受けて院長これを總理す。

かく志「學術」(名) 學問と藝術と。學問の應用。  
かく志「けんきゆうかいぎ」(名) 學問と藝術に關する研究の聯絡及統一を圖り、其研究を促進する合議機關。  
かく志「學術語」(名) 學問研究上特に使用する語。まよ

かく志「各處」(名) ここかこし。いたるところ。「つてで。かく志「樂所」(名) 古昔、大内裏にありて雅樂をつかさとりし所。①音樂を奏する所。「もつるのげごらも。かく志「鶴毳」(名) 鶴の羽毛にて作りたること。かく志「各省」(名) 各省大臣の監督の下に、其意思を承けて事務を行ひ、以て其職務を補助準備する體

かくし—かくし

開、各省大臣の分掌する政務の區別に應じて設置せらる。——たいせん「各省大臣」(名) (法) 内閣の次班にありて、行政事務の分配を擔任し其責任を負ふ閣員官、其擔任事務に就きて省令を發し、下級の官府に對して、訓令及監督の權を有す、次官以下の行政官更はすべて其補助なり。

かく志「確證」(名) たしかなる證據。  
かく志「客情」(名) 旅行中の感情。客心。  
かく志「各條」(名) それぞれの箇條。  
かく志「革職」(名) 免職。免官。

かく志「學識」(名) 學問の素養。  
かく志「閣臣」(名) 國務大臣。  
かく志「客心」(名) 旅行中の心情。(客情)。  
かく志「隔心」(名) うちとげずしてへだてのある心。ま

かく志「確信」(名) へだてごころ。かくい。  
かく志「革進」(名) 舊態をあらためて進歩すること。  
かく志「革新」(名) 組織をかへてあたらしくすること。又、狀態のかはりてあたらしくなること。——たんと「革新團」(名) 或革新を目的とする團體。

かく志「各人」(名) 各個の人。それぞれのおひと。  
かく志「樂人」(名) 音楽を奏する人。あそび者。  
かく志「各神同格教」(名) 諸神の位置平等にして、其間に上下貴賤の別なき宗教、例へば印度の吠陀(教)の如きもの。

かく志「隱」(他、さ四) 見えぬやうにす。知れぬやうにす。①まよまよをさむ。②隠(み)て、ひび。③理強す。はうむる。——より現はる(句) かくす物事は、却て外へれ易し。  
かく志「角」(他、さ變) くらぶ力。①さ。②さ。③さ。④さ。⑤さ。⑥さ。⑦さ。⑧さ。⑨さ。⑩さ。⑪さ。⑫さ。⑬さ。⑭さ。⑮さ。⑯さ。⑰さ。⑱さ。⑲さ。⑳さ。㉑さ。㉒さ。㉓さ。㉔さ。㉕さ。㉖さ。㉗さ。㉘さ。㉙さ。㉚さ。㉛さ。㉜さ。㉝さ。㉞さ。㉟さ。㊱さ。㊲さ。㊳さ。㊴さ。㊵さ。㊶さ。㊷さ。㊸さ。㊹さ。㊺さ。㊻さ。㊼さ。㊽さ。㊾さ。㊿さ。

かくし—かくす

かくすーかくせ

かくす(かくす)「畫割(他、さ學)」字を書く線を指す。①區分す。かぎる。②謀計を立て。はかる。かくす(かくす)「(計)計す」(敵)他、さ學くびきる。かくす(かくす)「角錐」Pyramidi(名)【數】一つの平面多角形と、其各邊を底邊と同じ一點を頂點とする三角形との界する多面體。



【錐角】

かくす(かくす)「へき」隔水壁(名)衝突生壁などの際の浸水を一部分に止め、船全體の沈没を防ぐ目的を以て設けられたる船内の隔壁。かくす(かくす)「角頭巾」(名)頭巾の一種。頭部及面部をかくす(かくす)「隔世」(名)世を異にする。①の感。②「かん」。「隔世遺傳」(名)【生】生物の球形質が、一代乃至數代を隔てて連傳する。

かくせ(かくせ)「覺醒」(名)めざむると。③まきと。かくせ(かくせ)「廓清」(名)宿弊をはらひのぞく。かくせ(かくせ)「學制」(名)「教」諸種の學校に於ける學問の制度又其順序・連絡等に關する規定。①の變更。かくせ(かくせ)「學政」(名)「教」教育行政。かくせ(かくせ)「學生」(名)「學」學問に従事する生徒の汎稱。本せ(書生)。②大學本科生徒の特稱。③「うんどう」學生運動(名)【社】學生が集合して行ふ社會運動。④「かん」(學生監)「名」學生の取締をなす官職。かくせ(かくせ)「擴聲器」(名)「談話又は號令などを、音聲を高くして遠く聞しむるため、口にあてて用ふる喇叭狀の器。⑤「ラウドスピーカー」。

かくせ(かくせ)「學籍」(名)「教」各學校にて、在學せる生徒の氏名生年月等を登録せるもの。①「は」學籍簿(名)「教」學校に備へ置きて、生徒の學籍を記入する帳簿。かくせ(かくせ)「確説」(名)たしかなる説。かくせ(かくせ)「隔絶」(名)へだたりである。かはなれたるかくせ(かくせ)「學說」(名)學問上の説。かくせ(かくせ)「客船」(名)「旅」旅客を乗するふね。②「旅路」にある

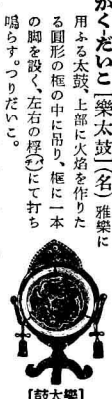
かくせ(かくせ)「かくた」ふね「夜半露聲到」①。かくせ(かくせ)「赫然」(名、副)「か」がやくさま。ひかるさま。あきらかなさま。②「熱氣の發するさま。あつきさま。③「かりを發するさま。④「ま。あきらかなさま。かくせ(かくせ)「愕然」(名、副)「おどろきたるさま。びくりしたるさま。①「答ふる所を知らず」。かくせ(かくせ)「あんさんがん」「角閃安山岩」Hornblende andesite(名)【鑛】安山岩の一種。斜長石と角閃石を主成分とし、外面粗粒、灰色又は黒色を帯び斑状を呈す。かくせ(かくせ)「角閃石」Hornblende(名)【鑛】我國の火山岩石中に廣く存在する鑛物、普通柱狀の結晶をなし、褐色又は綠色を帯ぶ。かくせ(かくせ)「へんまがん」角閃片麻岩Hornblende gneiss(名)【鑛】角閃石を主成分の一とせる片麻岩。かくせ(かくせ)「客僧」(名)「佛」旅行する僧侶。又寄寓せる僧侶。かくせ(かくせ)「學窓」(名)「學問を修業する室。まなびのまかくせ(かくせ)「額草」(名)【植】がくあさる。①「と。かくせ(かくせ)「學則」(名)「佛」學問に長じたる僧侶。かくせ(かくせ)「學則」(名)「教」學科等に關する學校の規則。かくせ(かくせ)「角速度」Angular velocity(名)【理】物體の回轉する割合、即ち、定點より物體に引ける線が單位時間に畫く角度。かくせ(かくせ)「角袖」(名)「角」角形の袖。②「日本在來の衣服。③「か」かきん。④「木ゆんさ」角袖巡査(名)「職務上便宜のため官服を著すに普通の和服を著たる巡査。かくせ(かくせ)「客體」(名)「哲」意思又は行爲を及ぼさるる物。かくせ(かくせ)「角臺」Frustum of a pyramid(名)【幾】角錐を底面に平行する平面にて切り去りて上部を除きたる立體。かくせ(かくせ)「廓大率」①「ひろくふと」ひろくふと。②「り」廓大率=Magnifying power(名)【理】「レンズ」其他光



【臺角】

かくせーかくた

かくた(かくた)「かくた」線の研究用器械の物體の見ゆる大きさを擴大する割合、即ち其器械に見ゆる直線と肉眼に見ゆる直線との比をいふ。かくた(かくた)「樂隊」(名)「音樂を奏する人の團體。かくた(かくた)「樂太鼓」(名)「雅樂に用ふる太鼓、上部に火焔を作りたる脚形の框の中に吊り、框に一本の脚を設く、左右の桴にて打ち鳴らす。つりだて。かくた(かくた)「ゆうふし」「角太夫節」(名)「京音瑠璃の一派、山本角太夫を祖とし、寫文項に起る。かくた(かくた)「格段」(名、副)「かくべつ。かくぐわい。とりわけ。②「格段敷」(名)【數】數字を以て表はされた數。一般數の對。



【鼓太樂】

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくた(かくた)「かくた」線の研究用器械の物體の見ゆる大きさを擴大する割合、即ち其器械に見ゆる直線と肉眼に見ゆる直線との比をいふ。かくた(かくた)「樂隊」(名)「音樂を奏する人の團體。かくた(かくた)「樂太鼓」(名)「雅樂に用ふる太鼓、上部に火焔を作りたる脚形の框の中に吊り、框に一本の脚を設く、左右の桴にて打ち鳴らす。つりだて。かくた(かくた)「ゆうふし」「角太夫節」(名)「京音瑠璃の一派、山本角太夫を祖とし、寫文項に起る。かくた(かくた)「格段」(名、副)「かくべつ。かくぐわい。とりわけ。②「格段敷」(名)【數】數字を以て表はされた數。一般數の對。

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくたーかくつ

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくた(かくた)「電知」(名)さとりとある。かくた(かくた)「各地」(名)ここかしこ。このと。かくた(かくた)「隔地」(名)へだたりたる土地。①「まや」隔地者(名)【法】當事者が相互に地を隔て、意思表示と其了知との間に時間的要する關係にある人。かくた(かくた)「角逐」(名)互に競争すること。おひかけあふと。かくた(かくた)「格調」(名)「詩歌の氣格と聲調と。かくた(かくた)「擴張」(名)「範圍又は勢力を張りて大ならしむること。おしひろむと。②「海軍」。③「事を統率するもの。かくた(かくた)「學長」(名)「教」分科大學又は單科大學の學がくちよう(名)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「樂調」(名)「音樂の調子。かくた(かくた)「角通」(名)「相撲の事項に精通したる人。かくた(かくた)「各通」(名)「おのの別に發送する書類。かくた(かくた)「額束」(名)「鳥居の鳥木と貫との間の中央にある束額を前に掛く。かくた(かくた)「格附」(名)「商」定期取引にて、賣買の目的たる一定の標準値と同一種類に屬する商品の品位の評定、即ち、代品を以て變換をなし得る範圍の評定。①「ひようかくた(かくた)「格附表」(名)「商」格附を示したる表。かくた(かくた)「週具土神」(名)「祀」火を掌る神。

かくつと「角鬚」(名) 徳川時代に、御殿女中などが髪の高

ぼを角(せ)にせしもの。まるづと」の對。

かくつば「角鐔」(名) 角形の鐔。

かくて「搔手」(名) 琴をひく手。ひくて。

かくて「斯」接副 斯くの如くありて。さて。

かくて「角瓶」(名) たしかに定まる。定まりて動かぬ

と。——きげん「確定期限」(名) 【法源】確定したる

期限。——けいし「確定經費」(名) 【法令】によりて

其支出及金額の確定せられたる國家の經費。——こうさ

「確定公債」(名) 【法】法律を以て發行額拂込順序支

拂期限償還方法等の定められたる公債、其支拂期限の有無

によりてこれを有期無期に分かつ。——さいむ「確定債

務」(名) 【法律】債權の目的たる給付の確定せる債務。——

はんけつ「確定判決」(名) 【法】確定の效力を有する判

決、即ち不服申立の期間を経過したる判決又は上告審の判

決。——ひびけ「確定日附」(名) 【法】第三者に對して、

法律上完全なる證據力を有する證書作成の日附。——まう

しこみ「確定申込」【Ere offer】(名) 【商】貨物

の賣人たらんとするものが、其代價及條件を定め、所定の期

間内に申込あれば、これが引受をなすべきことを約する買人の

申込、所定期間内は其申込を取消すを得ず。【書物。

かくてん「樂典」(名) 音樂上の規定、法則等を記載したる

がくてん「學田」(名) 學校に附屬し、其收穫を學校の維持

がくてん「樂殿」(名) かぐらだう。【費に充つる田。

かくと「穀斗」(名) 【種】蓮花の穂苞の成熟したる柄形又は穂

形をなすもの。中には粟の穂の如く、成熟したる粟集せるも

あり。——かむ「穀斗科」(名) 【種】顯花植物の一、香

木又は灌木、葉は有柄にして互生、單一にして鋸齒を有し、

又は羽状に分裂し、羽狀葉を具す、花は單性に於て雌雄同株、

新枝の葉腋に著生す。果實は堅果にして穀斗あり。かくと「角度」【Angle】(名) 【數】相會する二直線のなす

たるものを單位としてこれをはかる。【つち、あげつち。

かくと「客土」(名) 【たびち。他國。】に流渡す。【おき

かくと「赫怒」(名) はげしくいかる。おほいにいかる。

かくと「學徒」(名) 修學する書生、參學する徒弟。

かくと「角場」(名) 【數】一直

線に平行なる數箇の平面と、此直線に

會する二つの平行平面とにて界する

多面體。

かくと「角燈」(名) 【ガラス】を張りたる四角形の燈、さ

げ持つやうにつくりたるもの。

かくと「格闘」(名) くみうち。うちあひ。

かくと「學頭」(名) 【社會】の職名、天台宗比叡山・鶴岡八

幡宮等にあり。【勤學】の職名、別當の次に位す。【數】多々

の教師の上司を占むるもの。【かかげ屋】。

かくと「額堂」(名) 神社佛閣などにて、奉納の額を

かくと「學童」(名) 學問を教授する所がくかう。

かくと「額燈籠」(名) かくあんどん。

かくと「獲得」(名) 手にいれること。と。

かくと「郭内」(名) くるわうち。

かくと「結果」(名) 【か】のあわ。【か】のあわの

如く結ばれたるさまをいふ。【か】に、思ひみだれて。

かくと「江南」(名) 【字】の朝鮮音の訛【刀】の一。

かくと「隔日」(名) 一日おき。

かくと「確認」(名) まかともむと。たしかに是認す

る。——そよ「確認訴訟」(名) 【法】法律關係の

成立又は不成立を確定するための訴訟。【人】音樂師。

かくと「樂人」(名) 音樂を奏する人。雅樂を奏する人。俗

かくと「隔年」(名) 一年づつへだてたる。いちねんお

かくと「客年」(名) きねん。さくねん。【き】(間) ぬ

かくと「廓然」(名) ひろきさま。むなきさま。——

界は廓然として、聖凡の別なきと。

かくと「學年」(名) 【數】學校にて規定せる一年間の修業

期。又一年間の修業期によりて區別したる學級。

かくと「あわ」(結果) (名) 古代の菓子の名、湯揚にして形は

緒を結びたる如しといふ。かくなは。

かくと「格納庫」(名) 航空機をいれおため、特

殊の裝置を施したるバラック式倉庫。

かくと「如斯」(副) かくのごとく。

かくと「如斯」(副) かくのやうに。

かくと「香菓」(名) かくのみ。

かくと「額堂」(名) 古昔の戰陣にて、警戒のため

に設けし番兵の小屋。

かくと「額」(名) 紫宸殿・清涼殿などの南廂の中央の

間、上長押に額間の掛けられたるより。

かくと「香菓」(名) たたらばの實。

かくと「斯而已」(副) かくばかり。かほど。

かくと「四角」(名) 四角なる材木を水に浮かべ、其上に

て種々の輕わざをなす。

かくと「流派」(名) それぞれの流派又は黨派。

かくと「學派」(名) 學問の流派。陽明。

かくと「斯許」(副) かほど。これほど。

かくと「聲」(形) (二) 【香美し】の義。香

氣よし。かうはし。かんばし。——さ「聲」(名) かうはし

きよし。又かうはしき度名。

かくと「角柱」(名) 【種】竹の一名。【四角形】をな

かくと「額柱」(名) がくづか。

かくと「鶴髪」(名) 頭髪をすべて白きと。ちらがちらが

あたまた「鶴髪童顔」(名) 頭はちらがな

れど、顔のつやうやく年寄めかざると。

かくと「割伐」(名) 【社】森林に一定の區劃をさだめ

て、其區劃内の樹木を順次に採伐すること。

かくと「學問」(名) 或學校の出身者が、相諮詢せる朋黨。

かくと「角張」(自ら) かくたつ。【まかく

かくはる】各般(名) ちらもち。いろいろ。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

【ばる。

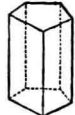
【ばる。

かくつーかくと

かくとーかくね

かくねーかくは

二六



【増角】

かくは—かくま

かくはん〔隔板〕(名) 航海中に於ける積荷の移動を防ぐため、船艙内に設ける仕切板。まきりた。〔かはりばん、

かくはん〔隔番〕(名) 一度置き又は一日置きに交代すること。かくひり〔蚊食〕(名) 蚊に刺されたあと。〔かくひどり、

かくだり〔蚊食鳥〕(名) 〔動〕かうもり。かくひき〔學費〕(名) 修學の費用。かくひきびり〔畫引〕(名) 畫の數によりて文字を検索するやうに編纂したる字書。〔やむると、晝夜—せず。]

かくひつ〔摺摺〕(名) 筆をさしおきて書きやむると。かきかくびよう〔脚病〕(名) かくけ〔脚氣〕。かくくびわ〔樂琵琶〕(名) 雅樂に用ふる琵琶。かくふぶ〔琴〕(名) 〔他〕は四。かこふ。

かくぶ〔客部〕(名) 〔文法〕文章上、主部に對して客となる部分、客語及修飾語より成る。〔敬したるもの。]

かくぶ〔樂譜〕(名) 歌曲及樂曲を、一定の記號を用ひて記かくぶ〔學風〕(名) 〔敬〕い學問の傾向(ま)學校の氣風。かくぶち〔額縁〕(名) 額の周圍に取附くる裝飾用の縁。〔窓〕出入口の周圍に取附くる化粧木。

かくぶつ〔格物〕(名) 〔大學に出づ〕朱子學にては、ものについて讀み、事物の道理をきめて極處に至ると解し、隨明學にては、ものをただすと讀み、意のある所即ちこれ物として心をただすと解す、普通には朱子學の説に従ひ、究理と同一の義に用ふ。

かくべ〔角兵衛〕(名) かくべま。——**茶太**〔角兵衛獅子〕(名) 名工角兵衛の製作せしまがしら。〔まちかくへい〕〔客兵〕(名) 他國より來れる援兵。〔まをま(二)〕

かくへき〔隔壁〕(名) へだてのかべ。〔まきり、かくべつ〔格別〕(名) 副) ともかくも、べつだん。かくほう〔格別〕(名) 副) ともかくも、べつだん。

かくほう〔角帽〕(名) 大学生のかぶる四角の帽子。轉かくま〔學機〕(名) 師の僕となりて、學問する人。かくま〔脇腹〕(名) 〔生〕脇腹と腹腔との中間にありて二腔を區別する液質の膜、平常は胸腔に向かひて隆起すれど、

かくま—かくめ

かくま〔角膜〕(名) 〔生〕眼球の外壁の前面にある膜、透明にして著しく隆起す。——**えい**〔角膜翳〕(名) 〔病〕角膜の濁濁する疾患、めぼし。——**えん**〔角膜炎〕(名) 〔病〕角膜の炎症、角膜の濁濁を特徴とす。——**かいよう**〔角膜炎〕(名) 〔病〕角膜に發生する潰瘍に上皮剝脱し、開元血す、下等社會及老人等に多し。かくま〔圓〕(名) かくま。〔圓〕(名) 〔他〕は四。ひそかに隠ししかくむ〔圓〕(名) かくむ。〔圓〕(名) かくむ。

かくむ〔學務〕(名) 教育上に關する事務。——**いん**〔學務委員〕(名) 府縣市町村又は町村學校組合が、小學校教育事務のために設置する委員。かくめい〔革命〕(名) 〔易經に湯武革命〕命順乎天、而應乎人。こあるに出づ。前の王朝覆り、新しい王朝の代りて統治者となること。〔陰陽家にて、辛酉の歲の稱、此歲には變革多しといへり。〕〔Revolution〕〔政〕目的が國家の基礎又は社會の組織に關し、行動が憲法の範圍を超え、且普通には暴亂を伴へる政治上又は社會上の變革。——**か**〔革命歌〕(名) 〔社〕勞動者又は主義者などが、搾取階級又は資本階級に反抗して唱ふる歌。——**ぐん**〔革命軍〕(名) 〔政〕革命のために編制せられたる軍隊。——**とうり**〔革命黨〕(名) 〔政〕革命を主義とする黨派。

かくめい〔學名〕(名) 學術上便利のため動植物に附したる世界共通の名稱、ラテン語にて記す。かくめん〔額面〕(名) かくめん。〔經〕(二) 證券面の金額。——**かか**〔額面價格〕(名) 〔經〕(二) 公債、株券等の額面とほりの價格、例へば、額面百圓なれば、其百圓の賣買價格の對(る)貨幣の面に表記せられたる價格、例へば二十圓金貨なれば、其表記の二十圓をいふ。表價。かくめんほうけい〔角面堡〕(名) 少數の邊より成る多角形の閉鎖堡、臨時築城又は半永久築城により重要地に設けらる、面の數及配置は、地形せられ方向によりて一定せず。

かくも—かくゆ

かくも〔角物〕(名) 横斷面の矩形又は方形をなす材木。かくもり〔角鋸〕(名) 〔漁〕捕鯨用の鋸の一種、穂先は角形をなし、尖りて鉤を具す、これに軟鐵の軸と長き柄とを取附く。〔りもくか〕

かくもん〔學問〕(名) 〔學藝を修むると、まなびならふと、修得せる學藝。——りよう〔學問料〕(名) 平安朝時代に、大學の學生に給與せし學費。

かくもん〔學問所〕(名) 學問するために設けられたる處、まなびとごころがくかう。——**ばん**〔學問所番〕(名) 鎌倉幕府の職名、將軍の詔問に應じて故實を談せしもの。——**ふきよう**〔學問所奉行〕(名) 徳川幕府の職名、寺社奉行の次席にて、昌平坂學問所の庶務を掌りしもの。かくや〔種々の漬物を細かくきざしたるもの。〕の。かくや〔隔夜〕(名) 一ばんおき。一よさおき。かくや〔樂屋〕(名) 樂を奏する所。〔能樂、演劇其他の興行物などの舞臺の背後に設け、役者の裝束をつけ化粧をなし又は休息する部屋。〕うちまく。ないま。——**い**〔樂屋銀杏〕(名) 婦人の髪結び方、優めて低く且約めて結ひたるいふがへし。——**いり**〔樂屋入〕(名) 役者の自宅より樂屋に行くこと。樂屋に入ると。——**おち**〔樂屋落〕(名) 劇場又は格闘などにて、樂屋の仲間のみを通じて、一般の人に了解せられる物事。——**すめ**〔樂屋雀〕(名) 樂屋にまはばはれ出して、劇場の事に通ずる人。——**ふきよう**〔樂屋奉行〕(名) 室町時代に、諸大名の邸に將軍の赴きとき、猿樂を催すに就き、樂屋其他の事を掌らしむるため、其邸にて命ぜりかけり。——**から**〔火ま噴す〕(名) 力を勞するに適當の場所に於てせず、何等の功を成さざるをいふ。かくやす〔格安〕(名) 品の割合に、價のやすきこと。かくやらい〔角矢來〕(名) 方形に竹を組みたる矢來。かくゆうい〔客遊〕(名) 他郷に旅行してあること。



かくゆう(一) [學友] (名) 同學の友。まなびのとも。  
かくよう(一) [各様] (名) それぞれのさま。  
いろいろ。さまざま。

かくよく [鶴翼] (名) ① つるのつばさ。  
② 古昔、左右翼を張りたる陣形。

かくら [神樂] (名) ① [神樂] (名) 今日に傳はれる古代の  
神樂、歌ありて舞あるもの、専ら神事に用ひらる。天照大神の  
天岩戸隠れたまひし際、八百萬の神々其前集、御心  
を慰めんとして歡樂を行ひしに源流すといふ、樂器は、古昔は  
和琴・笛・拍子の三つなりしが、後世に至りこれに篳篥もを  
加ふることなれり。かみあそび。② さとかがら。③ うた

[神樂歌] (名) 神樂に合せて謡ふ歌、其曲およそ三十  
七あり。④ さき [神樂笛] (名) [笛] (名) 百合の茎の  
草本、支那の原産、觀賞用として庭園に栽培せらる。莖は高さ  
二三尺、葉は披針形をなす、花莖は淡黄緑色にして紫色を帯  
び、稍鐘狀を呈し其片は鋭頭なり。(ろ) こまいさ

さき。⑤ さめ [神樂鉦] (名) [動] 鉦の一種、  
體長五六尺、口裂廣し、觸孔七箇ありて音詰一箇、  
太平洋方面にて多く演奏せらる。⑥ さん [神  
樂算] (名) ちち(車地)。⑦ 末 [神樂師]  
(名) 里神樂を舞ふことを業とする人。⑧ 末

[神樂獅子] (名) 神前にて奉納する獅子舞。  
⑨ すず [神樂鈴] (名) 鈴の一種、小さき鈴  
を十二箇綴りて柄をつけたもの、おもに神樂に用ふ。⑩  
だいち [神樂太鼓] (名) 里神樂の奏樂に用ふる太鼓。  
⑪ つき [神樂月] (名) 陰曆十一月の異稱。⑫ てん

[神樂土] (名) 神社の境内に設けて、神樂を奏する所。  
⑬ とうり [神樂堂] (名) かからで。⑭ ぶえ  
[神樂笛] (名) 横笛の一種、全長一尺五寸にして、歌口の  
外に六孔あり、神樂に用ふるもの。

かくら [鶴翼] (名) [植] 蘭の一種、琉球に産す、觀賞用と  
して庭園に栽培せらる。花は白色若しくは紫色にして、其形  
宛も鶴に似たる故に此名。

かくらん [霍亂] (名) [病] 霍乱、炎暑の候に於ける急  
病。

かくゆー [かくら]

かくら [かくら]

かくら [かくら]

かくら [かくら]

かくら [かくら]

かくら [かくら]

かくら [かくら]

かくら [かくら]

かくら [かくら]



【(二) 翼鶴】

劇なる吐瀉病、蓋し今日のいはゆる急性腸胃加寒兒、虎列刺、  
疫痢等を總稱せしものならんといふ。

かくり [隔離] (名) ① へだたると。又、へだつると。② 傳染  
病患者を遠ざけしむこと。③ 一 [隔離室] (名) [病] 隔  
離病舎(名) [病] 傳染病患者を一定の場所に隔離して治  
療を施し、其病勢の撲滅を圖るため設けられたる病舎。

かくり [學理] (名) 學問上の理論又は認識。④ てき [學  
理的] (名) 物事を論じ又は行ふに、學理を基とすること。  
⑤ かくりつ [格率] (名) ⑥ のり。さきく。⑦ [Margin] [倫  
理] 上行爲を規定する原理。

かくりつ [確立] (名) ちかちか立つと。立ちて動かさざると。  
かくりよう [一] [開僚] (名) 内閣に列する國務大臣。  
かくりよう [一] [學寮] (名) ① 學校にて生徒の寄宿する所。  
② 寺院にて徒弟の修業する所。

かくりよう [一] [學料] (名) かくもんれう。④ てん [學  
料田] (名) 王朝時代に、大學の優秀なる學生に學料を給與  
する費用に、其收得を充てし田地。

かくりよう [一] [角礎岩] (名) [地] かくれきがん。  
かくりよく [角力] (名) [力] 力をくらべあはすと。ちから  
くらべ。② さまう。さま。

かくり [一] [厚力] (名) まなび修めたる學問の力。  
かくりん [一] [獲麟] (名) 孔子が春秋を著し、西狩獲  
麟とある一章を其結末とせしに出づ、麟は麒麟、物事の終  
末。② 轉じて、終焉の際。いまはのきは。

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

⑥ かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくる [一] [隠] (自、ら下) ① 外部にあらはれず。外  
部より見えぬ。(隠) うすむ。かかむ。(道) ② のがる。に  
く。(匿) ③ 去る。うす。大道既に。④ 官に仕へずして野  
に處る。世を逃れて山などに住む。⑤ 高貴なる人死す。隠  
れたるより見ゆるはるは莫し(句) (中唐に出づ)

かくれーかけ

六歳の翌日より満十四歳までをいふ。――素どう(學齡) 兒童(一名)〔教〕年齢の學齡内なる兒童。――ぼ(學齡簿)(一名)〔教〕市町村長が、翌年就學すべき其管轄内の學齡兒童を調査して編製する帳簿。

かくれき(學歴)(一名)〔教〕修學の履歴。

かくれきがん(角礫岩)〔地〕外界の破壊作用により角礫を有する岩石の破片が、地上又は水中に堆積し、砂・粘土等の膠着物により、再び膠結して成りたる岩石。

かくれののみや(幽宮)(一名) 神靈をそこしへに留めたまふかくれん(隱)〔自〕かくるの詠。

かくれん(隱)〔自〕かくるの詠。

かくれんぞ(角連子)(一名) 横断面の菱形なる連子。

かくれんぼ(隠坊)(一名) 小兒の遊戯、數人のもの各自隨意に物かげに隠れたるを、鬼となりたる他の一人これをさがし出し、其さがし出されたる者代りて鬼となり、更に隠れたる他の者をさがし出す。

かくろ(ろ)〔開老〕(一名) 老中の異稱。

かくろ(ろ)〔客臘〕(一名) 昨年の末。

かくろ(ろ)〔黒〕(形、一) くらし。

かくろ(ろ)〔隠〕(自は四)「かくる」の延、一べきくまりなや。

かくろ(ろ)〔隠〕(自は下二) 前後に同じ。

かくろ(ろ)〔確論〕(一名) たしがなるきらん。

かくろ(ろ)〔各論〕(一名) 題目の各項に就きての議論。

かくろ(ろ)〔家訓〕(一名) わが父・嚴父。

かくろ(ろ)〔家訓〕(一名) 家庭のをしへ。父母のいましめ。

かくろ(ろ)〔家君〕(一名) 幕府の君の尊。諸侯の臣下が、他の諸侯に對して自己の主君の謙稱。

かけ(鶏)(一名) 動にはとり。

かけ(掛)(一名) うちかけ。①かけそば。②帯をぬめはじむ方の一端よりかゆるんでまらぬ。③金銭の授受を後日として、物品を賣買すること。④相撲にて、足で行ふ手の總稱。

かけ(賭)(一名) 勝負事に互に物を出しあひて、勝つたものこ

かけ(駆驅)(一名) 馬に騎りて、これを疾走せしむること。馬を

驅(る)こと。〔驅馬〕。

かけ(開)〔缺彪〕(一名) かくること。又、かけたる部分。

かけ(景)(一名) ひかり。あかり。日。月。

かけ(影)(一名) 理。光線が障礙によりて遮られたる部分。若し光線が一點より出づれば、影は全く暗けれど、若し或大さを有するときは、全く光線の達せざる部分と、幾分か光線の幾分か達する部分を半影とす。

かけ(面)〔面〕(一名) 光線の全く達せざる部分を本影といはるる暗體の形。障子にうつる人。②物の形状及彩色等の鏡面又は水面などにうつりて見ゆるもの。鳥の一水に落ちて、すがた。容姿。こと。かくす。③おもひかげ。面影。④うつつ。薄雲。⑤うつつ。薄し。⑥おもひかげ。身體おとろへ弱りて勢なし。⑦の形に従ふが如し。⑧つきまたがひて難れざるにいふ。⑨も形もなし。⑩あとかたを留めざるにいふ。⑪を摺(つ)つ。⑫(籠子に出づ)首をさぐりて、爲し得ざる物事に譬へいふ。⑬を畏れ速そむ。⑭(莊子に出づ)己の影の見ゆるを畏れ足あとの地に印するを惡む義、靜寂にして本眞を養ふことを知らず、いたづらに外物のために心をなやますをいふ。

かけ(陰)〔陰〕(一名) 光線のあたらぬ所。影となる所。家の一。山の一。②人目にふれざる所。おもてたたる所。③で笑ふ。④て絲を引く。⑤人形の絲をあやつりて所作をなせしむる如く、かげにありて人を操縦して或行動をなせしむるにいふ。⑥て舌を出す。⑦(句) かげにて靡りけなすにいふ。⑧に託して影を求む。⑨(句) かげに過はりおもてに立ち、さきざまに保護するにいふ。⑩に居て枝を折る。⑪を仇にてかへすにいふ。

かけ(麁)〔底〕(一名) 他よりの底面。かばひたて。ひきたて。どまりき。たすけ。おかけ。みんなのいで。

かけーかけ

かけ(鹿毛)(一名) 馬の毛色。まかの毛の如く茶色なるもの。

かけ(犀)〔犀〕(一名) 懸けたること。そばだちたる岸。きりきし。

かけーかけい

かけ(掛)〔接尾〕(一名) 或語に接して、其まなる意を表はす語。わらちで座敷へ上がる。②或語に接して、投げ出す意を表はす語。命。③或語に接して、ついで、役を表はす語。通り。④わりあり。ぶらひ。⑤倍數の意を表はす語。二つ。⑥「屋を經すに直接に登橋すること」

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけ(あがり)〔駈上〕(一名) かけあがると。②道程にて、揚

かけい(家系)一名 家の系統いへすぢ。  
かけい(河系)一名 〔地〕河川の大流支流の脈絡。  
かけい(佳景)一名 よきけよき。よきなめ。

かけい(家鶏)一名 家に飼ふにはと。一を斬んじて  
野鷲を愛す(句) 〔南史に出づ〕常にいとひて斬んじてのむ  
にいふ。轉じて妻をうとんじて妾又は娼婦などとうつつを

かけい(花兄)一名 〔植〕梅の雅稱。「ぬかすにいふ」  
かけい(火刑)一名 ひあがり刑。わづかのみ。

かけい(一雅兄)一名 男子を親しみ登びていふ稱。  
かけいた(掛板)一名 押入などの欄板。舊時の劇場に

かけい(つづ)一名 〔駢〕自、た下二はしり出づ。  
かけい(つづ)一名 一本の足を掛けて敵を投げ倒す。

かけいと(掛糸)一名 あせいと。あやいと。  
かけい(駢入)一名 かけこむ。新語。

かけい(駢入)一名 〔自、ら四〕疾くはせ入る。  
かけうた(掛歌)一名 先方へいひかけて贈りたる歌。

かけうた(掛寶)一名 品物のあたひを暫時買しおきて賣る  
と。かしうり。除寶。一ねだん(掛寶値段)一名 掛

賣する商品の値段。  
かけえ(掛繪)一名 繪畫の掛物。

かけえ(影畫)一名 人物・鳥獸其他  
の物の形を模し、これを燈火に照らし

て、其影を障子・壁又は垂下せる白布な  
どに映し出す遊戯。うつし。

かけえり(掛衿)一名 衣服の衿の上  
に更に衿をかけたもの。

かけえん(掛焔)一名 劇場にて、火の上に焔  
硝に極端を混じたるものをかけて發せしむる煙、妖怪などの

出で又は消ゆる場合)にも用ふ。  
かけおち(墜落)一名 他稱へ逃じるとにげうすと。ち

くてん。ちよつぽん。一もの(墜落者)一名 かけおち

したる人。おちうと。逃亡者。  
かけおび(掛帯)一名 古昔の婦人の服飾、裳きにつきたる

帯の如きもの、これを頸より胸にかけて結ぶ。舞。  
かけ(かうち)一名 掛麴(名) 清酒の麴、を造るに使用する

かけ(かけ)一名 かけかけしきさま。  
かけ(かけ)一名 形二こころに掛くる様子なり。ま

たはしがるさまなり。一げ(名) かけかけしきさま。  
一(名) かけかけし度合。  
かけ(かね)一名 かねがね。下頸骨と懸麴(と

のつがひ。一をはずす(句) あごをはずす。  
かけ(がね)一名 かねがね。唐草瓦。  
かけ(がひ)一名 掛瓦(名) 品物のあたひを暫時借りおきて

買ふか。かけて買ふ。  
かけ(かふ)一名 掛替(名) 掛替(他、は下二) 以前のもの

かけ(か)一名 掛替(名) かけかふと。  
かけ(か)一名 掛替(名) 用意に備へおく同種のもの。ひか

かけ(か)一名 懸紙(名) 書状などの上を包む紙。  
かけ(か)一名 懸紙(名) オペラ。

かけ(か)一名 過激(名) 常度をこして激烈なること。はげし  
きこと。一(名) 過激(名) 過激の傾向を帯ぶ

る事。又過激派の思想に傾くこと。一(名) 過激派(名) 過  
激なる手段に由りて、理想を實現せんとする黨派。ボ

ルシニアキ。  
かけ(きん)一名 掛金(名) 日掛月掛などに掛けてゆく錢。

かけ(く)一名 陰口(名) のかにけに生じたる草。  
かけ(く)一名 懸組(名) かけごと。

かけ(く)一名 懸組(名) かけくらべ。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 敵陣にかけ入りて組打

物事を比較す。くらべてらしあはす。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 懸組(自、は下二) 量目を比較す。

かけ(くら)一名 懸組(名) 懸組(自、は下二) はしりくらべ  
をなす。

かけ(くら)一名 懸組(名) 懸組(自、は下二) はしりくらべ  
をなす。

かけ(くら)一名 懸組(名) 懸組(自、は下二) はしりくらべ  
をなす。

かけ(くら)一名 懸組(名) 懸組(自、は下二) はしりくらべ  
をなす。

かけ(くら)一名 懸組(名) 懸組(自、は下二) はしりくらべ  
をなす。

かけ(くら)一名 懸組(名) 懸組(自、は下二) はしりくらべ  
をなす。

かけ(くら)一名 懸組(名) 懸組(自、は下二) はしりくらべ  
をなす。

かけ(くら)一名 懸組(名) 疾走して速退をあらそふこと。ま  
うそう。はしりくらべ。かけっこ。

かけ(くら)一名 懸組(自) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(他) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。

かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。  
かけ(くら)一名 懸組(名) 他(名) かけくらぶの詠。



【影畫】

かけいーかけお

かけおーかけく

かけくーかけこ

かけこーかけす

かけこゑ〔掛聲〕(名) 人をよびかくる聲。㊦拍子をととり或は氣勢をそよるために發する聲。㊧重荷を擧げ又は荷車を推すときなどに發する聲。
かけさかざる(掛離)自、ら四) かけはなる。へだた
かけさき(掛先)(名) 掛代金を受けたるべき先方。
かけさく(掛下)(他、か下二) 物にかけて吊し下ぐつる。

かけざくら〔影櫻〕(名) 紋所名、櫻花の裏をかたどりた
かけざた〔陰沙汰〕(名) ないまのさた。
かけざを(掛竿)(名) 手拭又は衣服などを掛けおくため横に吊したる竿。㊦輻物をかくるに用ふる竿。
かけざん(掛算)(名) 數二つの數の乘積を求むる算法。
かけざ(掛字)(名) 床間にかくる書幅。――かけ(掛字)
掛(名) 輻物を掛くるに用ふる竿。

かけま(掛軸)(名) 壁間にかくる書畫の幅。かけもの。
かけまはる〔陰芝居〕(名) 昔時、江戸隅田川筋に、納涼の多く出づる頃、厚形船に乗り鳴物入の聲色(音)を用ひて、納涼船の人たちに演劇の科白(き)を聞かせしもの。
かけまや(掛茶屋)(名) 路傍に設け、行人の休憩に供する腰かけ茶屋。こしかけや。

かけまようき(賭將基)(名) 賭事の將基。
かけまようき(掛障子)(名) 小窓などの壁に折釘を取附け、これに掛け吊るす障子。
かけまようゆ(掛醬油)(名) 料理物にかけて用ふる色の薄き醬油。㊦料理の名、鯛などの肉を、色の薄き醬油を用ひて蒸したるもの。

かけま(懸翼)(名) 〔動〕燕雀類の鳥、鳩より稍小形、背面は赤茶色、腹面は色淡し、頭は白くして黒き縦條あり、尾は黒し、嘴は大きく、其根茎に剛き羽毛ありて鼻孔を蔽ふ、秋の末、群飛す、他鳥の音聲を擬するに巧なるを以て、籠に入れて



【つけか】

かけすーかけつ

かけす(掛圖)(名) 壁間にかくるやう輻物にしたる圖。
かけす(副) 無造作に。わけもなく。
かけす(懸硯)(名) かけごのある硯箱。
かけせん(陰膳)(名) 旅に出でたる人の飢うるときなきを祈りて、其留守の處所に供ふる膳籠。
かけぞい(掛蕎麥)(名) 竹をかけたるそばきり。盛蕎麥の
かけぞい(掛代金)(名) 掛賣の品物の代金。
かけぞし(駈出)(名) かけいだす。㊦物事に初心なるを、――もの(駈出者)(名) 初心者。新参者。

かけぞし(掛出)(名) かけだしたる部分。
かけぞし(駈出者)(名) 初心者。新参者。
かけぞし(掛出)(名) かけだしたる部分。
かけぞし(駈出者)(名) 初心者。新参者。

かけぞし(掛出)(名) かけだしたる部分。
かけぞし(駈出者)(名) 初心者。新参者。

かけぞし(掛出)(名) かけだしたる部分。
かけぞし(駈出者)(名) 初心者。新参者。

かけぞし(掛出)(名) かけだしたる部分。
かけぞし(駈出者)(名) 初心者。新参者。

かけぞし(掛出)(名) かけだしたる部分。
かけぞし(駈出者)(名) 初心者。新参者。

かけぞし(掛出)(名) かけだしたる部分。
かけぞし(駈出者)(名) 初心者。新参者。

かけぞし(掛出)(名) かけだしたる部分。
かけぞし(駈出者)(名) 初心者。新参者。

かけぞし(掛出)(名) かけだしたる部分。
かけぞし(駈出者)(名) 初心者。新参者。

かけつーかけと

かけつ(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。
かけと(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。

かけと(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。

かけと(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。

かけと(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。

かけと(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。

かけと(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。

かけと(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。

かけと(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。

かけと(懸燈籠)(名) まはりどうろう。
かけと(掛戸)(名) 折釘などに掛けたる戸。



籤の當りを當りとして、資金乏しき人人が、相集まりて少額の賭事をなしもの。

かげとも 影面(一名) 常に日向かふ方。山(一名)の南方。

一のおほかど 影面大御門(一名) 大内裡の南門。一のみち 影面道(一名) 山陽道の古稱。

かけとり 掛取(一名) 掛代金を請求に来る人(債鬼)。

かけどり 翔鳥(一名) 空飛鳥。とどり。射て空飛鳥鳥を取る。

かけとりひき 掛取引(一名) 商商品の代價を後日交付する。

かけながし 掛流(一名) 一度用ひたるのみにて捨つる。

かげながら 乍陰(副) 人知れず。心のうちに。よそな。

かけなげ 掛投(一名) 相撲の手、己の足を敵の足に掛けて

かけなはり 掛繩(一名) おひなは。敵陣にかけ入り

かけなやます 駈惱(他、さ四) 敵陣にかけ入り

かけならぶ 駈並(他、さ四) 馬をならべて

かけならる 駈並(他、さ四) 馬をならべて

かげにんぎょう 影人形(一名) 光線的作用によりて、紙又は布などにつづり人形の影。かげ。

かけぬり 駈抜(一名) かけて他より先に出づると。

かけぬける 駈抜(一名) 自、か下(一) かけぬけをな

かけぬひ 陰縫(一名) 模様の輪郭のみを縫ひたる刺繍。

かけね 掛値(一名) 實際の價格より高くいひづる値段。

おほぎょう 仰山(一名) 山のかげにある野。

かげのまひ 陰舞(一名) 見る人のなき所に舞ふと。

おぼき 駈場(一名) 馬を驅る場所。はぎ合はすると。

かけはし 掛橋(一名) 布帛の掛所又は短き所に同一布帛を

かけはし 掛橋(一名) はして(梯)。山屋のけはし

處に板などを渡したる路(棧)。物と物とかけわたした

る往來の路。はしわた。とりもち。一の掛橋之

(枕) あやふしに冠する枕詞。

かけはした 駈走(自、ら四) はしりゆく。

かけはし 掛繩(一名) 物は掛け或は外すと。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけはなれる 掛離(自、ら下) 遠くたたる。

かけへだたる 懸隔(自、ら四) とほざかる。

かけへだつて 懸隔(自、た下) かけへだたる。

かけへだつて 懸隔(他、た下二) 中間に分けい

りて雙方へだてをなす。

かけへだてる 懸隔(他) かけへだつたの誑。

かけへり 掛減(一名) 秤にかけて、重量の減する。

かけべんぢり 陰辨慶(一名) かげにて強きまをなせど

表面に立ちては弱きと。

かけほうち 影法師(一名) かげにうつりたる人影

かけほし 陰干陰乾(一名) 日の光のささぬ處におきて

干しかわすと。一の銀杏。

かけほとけ 懸佛(一名) 拂平圓なる板に佛像を彫刻して

吊し懸るやうにしたるもの。

かげま 陰間(一名) 役者の抱へし美少年の未だ舞臺に出

でざるもの稱に出づ。昔時、男色を賣りし少年。かげまひ

(藝童、男娼)。一ちやや 陰間茶屋(一名) 陰間を抱へ

おきて客を呼ぶ茶(男色屋)。

かげま 影待(一名) 月の出づるを待つと。

かげまつり 影祭(一名) 曾我の狂言を演じりて行ふ樂

尾の祭事。一初年の儀式を省きて、質素にすむ神社の年祭。

かげまはる 賭(一名) 財物を賭けつるを射と。

かげまひ 陰舞(一名) 昔時、劇場附の役者が、客の座

敷にて舞ひし。又、其專業の役者。かげ。

かげまより 掛守(一名) 駒又は櫻に掛ぐる守殿。

かげみ 影身(一名) 影の身に添ふ如く離れざると。一に

添ふ(句) 常に其身邊を離れざるにいふ。

かけみち 懸路(一名) かけち。

かけみち 崖路(一名) かげの上に通じたる路。

かけみち 懸水(一名) 懸種に通ふ水。一清酒 懸油など

の醸造の際米・大豆に注ぎかゝる水。一懸種 懸油など



【んげか】

かけとー かけは

かけはー かけふ

かけへー かけむ



ment(名) 論或條件を假定したる判断。——めいだ

假言命題(Hypothetical proposition)(名)

論假言的判断をさし表はす命題。

かげん(禍源(名) わざはひの生ずるみなもと。

かげん(過言(名) いひあやまり。いひそこなひ。

かげん(寡言(名) 口かずのすくなきこと。

かげん(詭言(名) あやまれるとりざた。

かげん(我見(名) 佛此身は虚假なるに、妄に主宰を

立てて我となす。

かげん(雅言(名) びやびやかてに正しきことば。和歌な

どに用ふる中古のことば。

かげん(過現未(名) 過去と現在と未來と。

かこ(鹿子(名) 鹿の子のこ。

かこ(水夫(名) 船をあやかつりあつかふもの。ふなのり。せ

かこ(過去(名) 昔過ぎ去りたる時。現在の前。ひ

かし。「一を回起す」。

かこ(交法(名) 過去を去りし動作を表はす動詞及助動

詞の用法。

かこ(ちよう(過去根(名) 佛寺院に

て、檀家中の死者の法名。俗名及死亡年月などを記し置く帳

面。(葬儀鬼録)。

かこ(器具(名) 金属にて作り、帯革などをかけ止むる用

具。環中に前後に回転する刺金あり、この環を革の端に取附

け、一方の端をこれに貫き入れ、革の孔に刺金を差し込みて

止む。かこがてがびとよげね。

かこ(籠(名) 竹にて編みたる器物。(簍)。

かこ(籠(名) 竹にて編みたる器物。(簍)。

かこ(駕籠(名) 人をせて、前後よりかき行くのりもの。

かこ(駕籠(名) 人をせて、前後よりかき行くのりもの。

かけん(かこ

りたるものといふ。のりもの。鞍、鞋裏。  
——に乗る人擔ぐ人其又草鞋を  
作る人(句)世の中の人階級及職業  
の上下差別のさまざまなるにいひ、又、其  
さまざまの階級及職業の人々が、互にも  
つもられつ世の立ちゆくにいふ。

かこ(加護(名) 神佛などの力を援へて

まより給ふ。

かこ(雅語(名) かげん(詭言)。

かこ(露有(名) よきまかな。うまき料理。——あ

りとも食はずんば其旨を知らず(句) (禮記に

出づ)露有ありとも食ふにあらざれば其美味を知るに能はざ

る義、即ちよきま道ありとも、學ばざれば其理を知り得ざ

るに譬へらふ、稱して、よなき人物ありとも、用ひざれば其

器量を知り得ざるにもいふ。

かこ(下降(名) くだると。又、くだすと。

かこ(河口(名) 地河口より上流にある港。

かこ(河口(名) 地河口の湖又は海に注ぐ口。かはぐ

ち。——こころ(河口港(名) 地河口にあるみなと

かこ(加工(名) 人工を加ふこと。細工。

かこ(加工(名) 他人の所有物に工事を施すこと。——木(加工紙

(名) 加工したる紙。色紙。短冊等これに属す。——ひん

加工品(名) 自然物に人工を加へたる製作品。——切

加工(名) 加工輸入(名) 商加工して輸出する目的

にて、原料を輸入すること。

かこ(加功(名) 法犯罪の補助行爲。

かこ(架橋(名) 木片を結合して作りたる構造物。

かこ(花梗(名) 植花の著生する柄。枝に生ず。

かこ(花梗(名) 花のほひ。

かこ(華甲(名) 華の字を分ければ、六つの十一と

かこ(花候(名) 花のさく時候。はなとき。——曆

かこ(靴工(名) くつを作る職工。



【福籠】

かこ(火攻(名) 火を放ちて攻むると。ひくめ。

かこ(火口(名) 火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

かこ(火口(名) 火山の噴火口。

